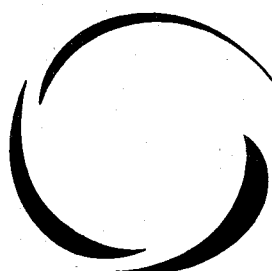


C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

夏日晴雄 オーラルヒストリー

元防衛事務次官



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

目次

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

夏目晴雄 オーラルヒストリー

夏目晴雄略歴……………6

第 1 回

生い立ち……………	10
政治との関係……………	11
小学校・中学校時代……………	13
高校時代……………	14
大学時代……………	17
就職……………	20
調達庁での仕事……………	22
調達庁へ……………	26
調達庁、防衛庁の外局に……………	28
教育課……………	30
オーラルヒストリーについて……………	32
久保卓也氏について……………	33
教育課のスタッフ制度……………	33
防衛局に……………	35

第 2 回

前回のインタビューについて……………	41
有吉久雄、井口孝文、今泉正隆の各氏について……………	41
海原学校……………	44
米国の原潜寄港問題と日米安保協議委員会……………	48
米国の対日軍事援助削減と日本の防衛力整備……………	51
国防族……………	56
国防会議議員懇談会……………	57
三次防の検討……………	60
福田、小泉、松野の各防衛庁長官……………	62
三矢研究……………	64
海原官房長、国防会議に転出……………	66

第 3 回

三次防大綱……………	73
三次防大綱の審議過程における久保参事官……………	77
三次防の情勢見通し……………	80

官邸との関係	82
メディアについて	84
坂田長官について	85
国防会議事務局参事官に	87
国防会議への海原氏の影響	89
国防会議での議論	90
自主防衛と国産化	92
沖縄返還、グアム・ドクトリン	93
四次防	97
第 4 回	
中曽根長官の印象	105
基地問題について	107
「国防の基本方針」改定	108
日米安保自動延長	112
中曽根・レアード会談	114
最初の「防衛白書」	114
四次防概要	116
中曽根長官と海原局長の対立	117
国防会議と防衛庁	119
ニクソン・シヨック	122
「大綱」決定	123

三島由紀夫の乱入事件	127
非核三原則	128
第 5 回	
防衛庁に戻って	135
教育課長の仕事	136
田中内閣	147
長沼裁判	148
防衛課長に就任	149
「平和時の防衛力」	152
山中長官	152
四次防修正以降	156
核積載艦寄港についてのラロック証言	159
第 6 回	
丸山防衛局長、田代次官	163
坂田長官	166
「防衛を考える会」	170
日米防衛協力の問題	176
「防衛を考える会」の提言	181
日米防衛協力	184
官房総務課長に就任	187

第 7 回

総務課長時代について	193
「防衛施設周辺生活環境整備法」	196
防衛委員会	197
ロッキード事件	205
久保卓也氏の問題発言について	207
「三木おろし」と日米防衛協力小委員会	211
防衛費の一パーセント枠問題	212
核不拡散条約を日本が批准	213
「防衛白書」を書く	215

第 8 回

ミグ25事件	227
防衛問題研究会	239
三原防衛庁長官	242
カーターの在韓米軍撤退政策への対応	244
在日米軍駐留費・分担金の一部負担	247
一九七七年の「防衛白書」	248
参事官に就任	251

第 9 回

有事法制問題	259
陸上自衛隊幕僚監部の機構改編	266
中央指揮システムの改革	271
人事教育局長に就任	273
宮永事件	275
ソ連軍のアフガニスタン侵攻	281

第 10 回

官房長の仕事	289
山崎拓政務次官	292
カーター政権の対日防衛力増強要求	294
外務省の安全保障政策についての報告書	296
総合安全保障	297
レーガン政権	301
竹田統幕議長の防衛費上限一パーセント批判	304
堀田ハガネの韓国向け武器輸出問題	306
ワインバーガー米國務長官の海上防衛力分担要求	307
鈴木首相が日米同盟の軍事的役割否定	308
ライシャワー元大使の核搭載艦寄港発言	311

第 11 回

官房長時代……………317

日米安保事務レベル協議……………318

「大綱見直し」意見書……………320

日本有事・極東有事……………322

武器輸出三原則……………325

伊藤防衛庁長官……………327

日米防衛首脳定期協議、フォークランド紛争……………330

防衛局長に就任……………332

吉野事務次官……………334

日米安保事務レベル協議に出席……………339

第 12 回

中曽根内閣誕生……………349

対米武器輸出供与・防衛力増強……………352

不沈空母・三海峡封鎖発言……………354

シーレーン防衛問題……………356

政治家という選択肢……………361

シーレーン防衛研究の基本的枠組みに合意……………362

レーガン大統領のSDI構想……………366

事務次官時代の長官、政務次官……………366

第 13 回

事務次官時代の官房長……………379

平和問題研究会……………381

大韓航空機撃墜事件……………383

情報管理の問題……………387

中国国防相と栗原長官の会談……………392

教育訓練局と人事局の設置……………397

日米防衛首脳定期協議……………398

SDI……………400

防衛費一%問題……………402

第 14 回

逗子市長選挙……………409

人民解放軍の百万人削減計画について……………411

八〇年代の国際関係認識……………414

防衛庁出身の経理局長……………415

事務次官後任の選定……………416

防衛庁顧問に就任……………418

防衛大学校長に就任……………420

次官退任後……………425

防衛大学校長時代……………429

あとがき……………434

夏目晴雄 略歴

1927年（昭和2年）

7月10日 長野県生まれ

1951年（昭和26年）

3月 東北大学法学部卒業

5月 特別調達庁入庁

1960年（昭和35年）

10月 防衛庁出向

1968年（昭和43年）

8月 国防会議事務局参事官

1972年（昭和47年）

6月 防衛庁人事教育局教育課長

1973年（昭和48年）

10月 防衛局防衛課長

1975年（昭和50年）

9月 長官官房総務課長

1976年（昭和51年）

7月 長官官房防衛審議官

1977年（昭和52年）

7月 防衛庁参事官

1978年（昭和53年）

11月 人事教育局長

1980年（昭和55年）

6月 長官官房長

1982年（昭和57年）

7月 防衛局長

1983年（昭和58年）

6月 防衛事務次官

1985年（昭和60年）

6月 退官

12月 防衛庁顧問

1987年（昭和62年）

3月 防衛大学校長

1993年（平成5年）

9月 退官

1995年（平成7年）

9月 財団法人防衛弘済会会長（現職）

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第1回

開催日：2002年9月20日（金）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時10分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：
有限会社ペンハウス 矢沢麻里

第1回インタビュー質問項目

2002年9月20日

今回は第1回ですので、先生の学生時代から防衛庁に入りになる時期についてお聞きしたいと考えております。以下の質問について、順不同でも、あるいは質問によつては省略していただいても結構です。お話しいただけますか。先生のお話に従って、適宜関連した質問もして行きたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

1 先生は昭和2年（1926年）7月、長野県のお生まれで、夏目漱石とは縁戚にあたりと伺っております。ご両親はじめ、ご家族のことなどからお聞かせいただけませんか。

2 先生が中学、高校へと進まれる時期は、日本が戦争へと向かう時代と重なっております。戦争の影響といったものはどのように感じになっていったのでしょうか。

3 上の質問とも関連いたしますが、中学・高校時代はどのような生活をされていたのでしょうか。特に高校時代、影響を受けた先生や親しくした先生・友人といった方にはどのような方がおられますか。

4 先生は、十代の後半が太平洋戦争の時期に当たっておられます。

戦争中はどのような生活だったのでしょうか。また、終戦の放送はどこでお聞きになり、どのようにお感じになったのでしょうか。

5 先生は東北大学に進学されます。敗戦後で何かと不自由な時代だったと思いますが、大学時代で特に影響を受けた、あるいは親しくされた先生などはおられますか。また、大学時代に特に興味を持っておられたことなどはございますか。

6 先生は大学卒業後、官界にお入りになるわけですが、官僚になろうと思われたのはどういった理由からだったのでしょうか。また、昭和26年5月に特別調達庁（官房調整課）に入られて、以後日本の防衛問題に深くかわかってこられるわけですが、調達庁に入られた経緯もあわせてお願いします。

7 先生がお入りになった頃の調達庁は、本庁定員581名、地方支分局約3600名で、本部3部17課、地方8調達局（63出張所）という配置でした（昭和27年時点）。先生は入庁されて（官房調整課）、始めはどのような仕事をされたのでしょうか。また、調達庁はどのような雰囲気の仕事だったのでしょうか。

8 調達庁は昭和33年8月に防衛庁の外局に統合されます。このことで何か先生のお仕事には影響はございましたか。また先生は35年（1960年）10月に防衛庁に移られます。この経緯についてお聞かせください。

■生い立ち

夏目 私が生まれた一九二七年というのは、芥川龍之介が死んで、地下鉄が東京に初めて引かれて。

伊藤 銀座線ですね。

夏目 はい。岩波文庫が創刊された由緒ある年なんです。

佐道 その年を間違えまして、すみません（笑）。

夏目 中国の人民解放軍の誕生する年です。

武田 由緒ある年ですね。

夏目 そういうばかなことをいっても仕方ないかな。

伊藤 長野県のお生まれというのは、長野のどこですか。

夏目 長野市です。私は長野市の善光寺のすぐそばです。うちは

代々伝わる商家です。

伊藤 何の商家ですか。

夏目 何でもやっています。例えば荒物雑貨、ビール、マッチ、

石鹸、着るものから履くものまで。

伊藤 スーパーじゃないですか。

夏目 いわゆる卸問屋です。だから自分のところでは売らないのです。小売商に卸す卸商というのでしょうか、問屋というのでしょうか。

伊藤 では、けっこう裕福なお宅ですよ。

夏目 当時はそういう意味では生活の心配はないけど、しかし、商家の生活というのはひどいですよ。主人たる親父さんとかは別の座敷で食事をします。これはまともな食事。僕らその他大勢は、家族といえども板の間で丁稚さんと一緒なんです。一汁一菜です。

伊藤 先生は長男ではないのですか。

夏目 私は四男です。

伊藤 長男は向こうですか。

夏目 長男は別格で、親父と一緒にちゃんと座敷で食事ができる。

女中がこうして。

佐道 そんなに厳然と分かれているのですか。

夏目 そう、次男以下はもうだめなんです。丁稚と一緒に。板の上に御座を敷いてね。さすがに、店員はみんな箱膳といって自分で箸から何から洗っていたけど、僕らは女中さんが洗ってくれました。しかし、おかずは一緒でした。

伊藤 箱膳ではないのですか。

夏目 箱膳ではなくて、箱膳の入ったお膳の上で食うだけで、箱膳は使わない。店員は使っています。箱膳が入るようになったでかいテーブルがあつて、二十人ぐらい座れるんです。悲惨でしたよ。たまごを食いたいだとかね。

佐道 長男のお兄さんはそういうのを食べていらつしやるわけですね。

夏目 それは好きなものを食べています。まあ、好きなものといつたって、せいぜいたまごとか魚が一切れつくとかその程度だったと思います。いずれにしても、冬なら暖房の効いた暖かい部屋でこたつへ入って食べられるし、こちらは風がスースー入るような台所で食うわけですから。

伊藤 一汁一菜の菜はだいたい何ですか。

夏目 朝は漬物くらいしかありませんでした。あとはときどき煮物がちよこつと付いたくらいです。夜は多少、動物たんぱくの塩鮭とか何かそういうものがついたけど、ほとんど一汁一菜です。だから粗食に慣れているので、いまだに病氣しません。

伊藤 いい体型じゃないですか。

夏目 太らないんですよ。栄養不足。

伊藤 そうというのが長生きするんですよ。

夏目 商売の家は朝早いですね。学校へ行くとき、朝飯を食べてから時間があるものだから友達のうちへ寄って学校へ行くのですけれども、サラリーマンのうちなんかに行くと、うちの親父や兄

貴と同じ状態で食事しているわけです。うらやましくてね。商人のせがれなんぞに生まれるもんじゃなかったと。私はそのころから士農工商というのは牢乎としてここ（胸）へ染み渡っています。だから士に対するあこがれというのは強い。長男は地方の商人だから商業学校しか出ていません。商人だから商売を継ぐというふうに決められています。僕らは何をしようと勝手にした。

伊藤 逆にいえば自由ですね。

夏目 自由は自由でした。

伊藤 夏目漱石と親戚になるのですか。

夏目 いや、私はそんなことをいったおぼえはないのですが、どこでそういうのが伝わったのかというと、荒正人という評論家がありますね。これが昔、どこか忘れましたが、もう何十年前に、夏目漱石全集を刊行する準備をしていると調べていると、あなたのうちと漱石とは家紋も同じだし、出身もどうも同じだし、何かつながりがあるのではないかという手紙が来たことがあるのです。こちらは、「覚えはないけど、多分それは五代くらいさかのほればだいたい親戚だろう」と。そういう程度であって、直接はありません。

佐道 そうですか、ある雑誌に。

夏目 それは冗談でしゃべっているのがどこかで一人歩きしているんだよ。めったにない苗字ですしね。

武田 家紋も一緒だというのは、やはりどこかで関係があるのですね。

夏目 それは多分、出は一緒なんだと思います。うちの先祖は、『太閤記』か何かに三河の夏目某という侍が出てくるでしょう。その一党が流れ流れて信州へ行つて、侍家業を見限つて商売を。うちの兄貴が商売をやってから十代目なんです。相当古いことは古いでしょうね。

伊藤 十代だと徳川時代中期ぐらいからですね。

夏目 だから多分その前に信州に来たのではないかと思えます。親戚というのはちよつといい過ぎですね。第一、あんな立派な文才はないです。

伊藤 善光寺の辺りには夏目という姓は多いのですか。

夏目 いや、長野でもあまりないです。いますけれども、それは私のおじとか、はっきりしています。

佐道 ご親戚のなかで長野市長をされたり。

夏目 あれはおじです。うちのおじいさんというのは子どもが三人いて、うちの母親が長女で、長男がその市長で、もう一人女がいました。ところが、その長男は若いものですから、うちのおおくろが婿を取つて商売を継いだのです。おじさんというのは長男だけれども外へ出てしまったわけです。これがまた相当いいかげんなワルですね。ワルという大変なだけでも、私より二十歳くらい上でしょうか。松本の高等学校の先輩で、朝日新聞に入つたのです。朝日新聞へ入つて数年で上司とけんかして、満州へ行つて満州の役人になった。満州の役人になって、兵隊でとられて、終戦で帰ってきて、それで親父の商売を手伝っているうちに市長になったり参議院議員になったりしたのです。本当はそちらが直系なのでしょう。

■政治との関係

伊藤 何かやはり政治的な。

夏目 いや、年齢が若くてとてもじいさんが生きているうちに、というのがあつたのだと思うのですけれども。

伊藤 一族でそういう政治にかかわるような方はほかにいらつしゃつたのですか。

夏目 いやあ、あんまり……。地方の政治家はいました。じいさんなんかも市会議長をやつたりしていましたから、そういう傾向はあつたのかもしれませんが。市長をやつた人の奥さんの親父さん

というのやはり国会議員をやったから。

伊藤 なんていう方ですか。

夏目 丸山といえます。とつくに辞めましたけれども。だから、多少そういうのもあったかもしれないですね。全然政治力のない政治家ですけれどもね。

伊藤 そんなことをいつてもいいのですか(笑)。

夏目 もう死んでいますから。夏目忠雄が引退したときに私も誘われたんです。

伊藤 市長ですか。

夏目 いや、参議院議員に。だけど、自分は身の程を知っていませんからね。白い手袋をしてこうやる(手を振る)のは。

伊藤 議員さんを裏からもごらんになったことでしょうか。

夏目 本当に裏から見ていると、あんなものはなるもんじゃありません。もつとも役人には二色あるんです。ああいう権力の座に近い人に対する役人としての切歯扼腕みたいな、自分たちの限界を感じて、「あいつらの立場ならできる」と思う人と、「ばかばかしくてあんなまねはできないな」と思う人がいます。

伊藤 それはかなり若いときにそういう感じになりますか。

夏目 若いときは政治家の裏なんかは見えませんが、局長くらいになると、「こいつらは頭悪いくせに威張るだけで、やることはえげつない」とか、そういうことも見えてくるものだから。

伊藤 だいたい局長くらいになって接点が出てくるのですか。

夏目 付き合いはそうです。

伊藤 課長クラスは。

夏目 (政治家との付き合いは)多少はありますけれども、課長だと向こうも、「課長が来た」なんていう顔をして機嫌が悪くなるくらいのもんです。

伊藤 そうですね。プライドがあるのですね。

夏目 だんだんそういう意味ではインフレになってきています。

昔は課長でも十分だったのですけれども、だんだん政高官低というか。そういう癖をつけたのはやはり役人なのでしょうけれども。「なぜ局長が来ないんだ」というような。

伊藤 だけど、物事はやはり課長あたりがいちばんよく知っているのでしょうか。

夏目 実際はそうですね。ただ、ほかの役所と違いました、防衛庁という役所は必ずしもそうではありません。というのは、海原さんもそう思ったと思うけど、防衛課長という仕事は防衛庁の全体のことが見えるのです。だけど、ほかの課長さんは自分の守備範囲しかわかりません。防衛局長になるともつとよく全体が見えるんです。大きい問題はほとんど自分の問題しかないので。だから、局長といえども、正直いうとほかの局長さんではわかりません。例えば人事局長なんていうのは、自衛官の人事はわかっても、防衛政策が今どう動いているかなんてノータッチです。形式的に参事官会議とか何かで知りうることはあるけれども、大事なことはそんなところでだれもいいませんからね。だから防衛庁というのは特殊な役所で、防衛課長、防衛局長というのは、その権限はないとしても基本的な事項についてはすべてタッチしていますから。

伊藤 しかし、多かれ少なかれこの官庁でもメインストリームの全体が見える場所というのがあるわけですね。

夏目 ただ、例えば運輸省、現在の国土交通省なんかへ行ったら、陸上交通をやる場所は海上保安庁のことはわからないし、気象庁のことも海上交通のこともわからないし。そういうふうにならなければなりません。防衛局というのは防衛庁の仕事は全部抱えている感じなのです。また防衛課長というのはそのまたほとんど大半を持っています。そういう意味では、大変は大変ですよ。一時は国会の全政府委員の答弁の七割くらいは一人でやらなければいけない。

伊藤 それは防衛課長としてですか。

夏目 いや、防衛局長としてです。課長は特別なとき、小さな委員会でないとは答えることはないです。政府委員ではなくて説明員ですから。

■小学校・中学校時代

伊藤 小学校、中学校は長野ですか。

夏目 長野です。平凡な軍国少年でした。

伊藤 昭和二年ということは僕の五歳上だから、ずっと旧制ですね。

夏目 小学校六年生か五年生のときに（紀元）二六〇〇年記念式典です。

伊藤 昭和十五年。

夏目 二十年の終戦の年に中学卒業です。

伊藤 僕は二十年の終戦のときに中学へ入りました。

夏目 そうですか。じゃあ、私のほうが年上なんです。多少でかい顔をしてしゃべれます。

伊藤 まあ、顔はあんまり大きくならないです（笑）。

夏目 そういえば伊藤先生は辛らつに、ときどき海原（治、元内閣国防会議事務局長）さんのことをからかったんじゃないですか。

佐道 よくお読みになっていますね（笑）。海原さんがキツとなつて。

夏目 そうでしょう、そう思います。よくあの人がにこにこして聞いていたなと思つてね。

佐道 海原さんは伊藤先生が突っ込むと大変慌てられるということはありません。

夏目 そういふのは字を見ていてもわかりますよ。

伊藤 あれは比較的忠実に再現しました。

夏目 相当皮肉ない方をされていたなど、何か所か見えました。

伊藤 それはまずいな（笑）。

夏目 きょうも先生が見えるというから、弱ったなあ。

佐道 始まる前から読まれてしまっていますね。

伊藤 いや、非常に穏やかな人間でございます。中学は軍国時代の真只中ですね。

夏目 私は教練と勤労働員の連続でした。いい思い出も何もありません。腹を空かせて、栄養不良になって。中学三年ぐらいのときから開墾作業として、戸隠へ行く途中に飯縄高原という高原があるのですが、そこへ行つて、木の根っこを取り除いて石ころをどかして、何か食べ物をつくらうというのです。

伊藤 何を植えましたか。

夏目 何を植えたか記憶にありませんね。

伊藤 僕は燕麦か何かを植えました。

夏目 それから万座温泉へ笹の実を取りに行きました。笹の実なんて、「食べるかよ」というようなものだけどもね。

伊藤 あれは食べられるみたいですね。

夏目 中学五年になってからは、名古屋の豊和工業という飛行機の部品をつくっていたところへ一年間。その他にも木曾の山の中へ行つて山林の伐採とかね。だから勉強なんかする暇はありませんでした。いま学力がどうのというけれども、あの当時の学生はもっと悪いんじゃないでしょうか。

伊藤 本当に勉強する暇があまりなかった。

夏目 ものを考える余裕もないし、腹を空かせて、ノミとかシラミとかそんなのに食われるし。

伊藤 そうですね。考えることといつたら、食べ物のこと。

夏目 そう。たまにうちからいり豆とかを送つてくると、それをみんなで分けて食べたりね。せいぜいそんなものです。私は、名古屋の勤労働員に行つているときに余りのひもじさから倉庫へ泥棒に入りました。食べ物がないので、数人で、暗がりの中を見たら

ピンがあつて、多分これは牛乳か何かじゃないかといつて飲んだら、出てきたらみんな真つ黒なんです。インクか何かを飲んでしまった。出てきてからゆつくり飲めばいいのに。

佐道 悪いことはできないものですね（笑）。

伊藤 僕は農村にいたものですから、干し柿なんかをよく泥棒しました。

夏目 ああ、だから農村へ行く勤労働員は楽しかったですね。稲刈りとかああいうの。

伊藤 そうするとおにぎりなんかを出してくれるものだから、うれしかったです。

夏目 そんなことの連続だから、本当に勉強というものはしていませんでした。

■ 高校時代

伊藤 先生は敗戦のときにはどちらですか。

夏目 敗戦のときは高等学校に入った年。

伊藤 入った年ですか。まだ旧制高校。

夏目 もちろん旧制高校ですよ。

伊藤 旧制高校だつて勤労働員でしょう。

夏目 行つても勤労働員です。行かなくてもずっと中学の動員が継続しているのです。どちらでも好きなほうへ行けるのです。

伊藤 そのとき、旧制高校の入学試験は大変だったのではないですか。

夏目 十人に一人ぐらいかな。十倍というのはかなり、難しいですよ。

伊藤 やはり中学での成績はかなりいいほうでしたか。

夏目 あのころはみんな勉強してないから、運のいいやつが入った。

伊藤（笑）、まあ、いろんな表現の仕方があると思うのですけ

れども。

夏目 勉強ができなかったのは自分で自覚症状があります。特に私は理数系がだめなのです。当時はまだ戦時中ですから、「科学する心」が大事だなんていわれてね。それと体力でしょう。両方だめなんです。私は虚弱児童で。本当に戦時中はいいい思い出もないし、ここ（質問事項）に書いてある、いい友達、いい先生とか、そんな余裕はなかったんだろうな。

伊藤 それは僕も身につまされてそういう感じはします。

夏目 本当にひどかったですよ。高等学校に入つて初めてアカデミックな雰囲気というのを感じました。自分が勉強する、しないは別として、雰囲気としてね。

伊藤 高校は。

夏目 松本高校。

伊藤 松高というのはいふん伝統のある旧制高校ですよ。

夏目 伝統というか、ちょっと田舎だから。高等学校というのは田舎がいいですね。多分そうだと思います。町の人が学生を大事にしてくれますし、特に旧制高校の生徒が少々悪いことをしても、みんな黙つて我慢してくれるという雰囲気がありましたから。

伊藤 やつぱり畜カラでしたか。

夏目 畜カラはあまりいませんでした。いたことはいたけど、たいたことはありません。ただ、東京から来ている人は山登りの好きな人が来ていました。私も、上高地のちよつと奥なのですけれども、アルプスの徳沢というところがありますが、そこでアルバイトをしました。薪を売つたり、キャンプする人にテントを。

武田 先生も山登りをされるのですか。

夏目 いや、一、二回登つたのですけれども。

伊藤 虚弱児童だから（笑）。

夏目 それはしんどいですよ。もちろん槍ヶ岳にも登つたんですよ、一応。

伊藤 戦争がおわったときは高等学校の一年生で。

夏目 復学して。

伊藤 復学とは。

夏目 一年……、そのときからはやらない気がするな。勤労動員の後か何かで。そうしたら今度は陸士海兵の人たちが戻ってきて、文科で一クラス、理科で二クラスくらいふえたのではないですか。それから、旅順とか京城とかあの辺の学校の人たちが帰ってきて、陸士や海軍の制服を着たまま教室へ来ているやつらがいました。どた靴を履いたりね。

伊藤 着るものがないからみんな軍服を着ていましたね。

夏目 そんなの平気でしたけど。ただ、彼らは勉強家でしたよ。まじめでした。高等学校にずっといるやつよりはよっぽど勉強家でした。だから大学へ入るときに大変だったんです。東大法学部が四倍でしたか。私は人を押しつけて入る実力はないから都落ちに限ると思えました。それは後の話ですけども。高等学校のときも勉強しませんでした。私は文学青年というのかな。

伊藤 やはりそっちのほうですか。じゃあ、伊藤圭一（元内閣国防会議事務局長）さんと仲がいいのでしょうか。

夏目 あの人もどっちかというところがありました。ただあの人のほうがずっと健康的です。やはり石坂洋次郎とかの青春ものでしたから。私は十九世紀の象徴派詩人だから非常に退廃的なんです（笑）。やはりフランス文学にあこがれました。特に詩人、ボードレーとか、ヴェルレーヌとか、ランボーとか、そういうのにやたら惹かれました。やはり戦争中の軍国主義の反動なんでしょうか。

伊藤 軍国少年ではあったのですか。

夏目 みんなそうでしょう。だから人並みの。特別図抜けて軍国少年というわけではないですけども、何ら批判精神もなく戦争に協力したのですから。

伊藤 それはあたりまえのことですから。

夏目 そういう秩序なり、思想なりそういうものが全部ひっくり返ったでしょう。やはりちよつとした虚脱感というか、「なんだ、これは」というのがあったのだと思います。だからそういうほうへ走って。私は高等学校のときに浅間温泉という温泉宿に下宿したのです。さつきいったように実家が商人でしたから金は困らないのです。みんな腹をすかせているのだけど、そのころは温泉に入って優雅に毎日酒を飲めるのですよ。なぜ飲めるのかというと、女中さんが宴会場へ運ぶ酒のうちの二割くらいを私の部屋へ置いていくのです。廊下を運んでいるついでに置いていってしまふ。

武田 それは特別待遇ですか。

夏目 特別待遇。下宿代は高かったですよ。普通の下宿の三倍くらいしました。

伊藤 そういっちはみんなお父さんが払ってくれるのですか。

夏目 そうでしょうね、そうだと思います。ただ、先生とか友達がやたら来るんです。「君の下宿はいいねえ」と、先生まで来たりして。

佐道 それでは先生の権威もないですね（笑）。

夏目 もっとも向こうも腹をすかせているから。寮なんかいったら、じゃがいもが飯の代りでしたし、そういう人たちから見ると、どんぶり一杯の白いご飯が食べられればね。

伊藤 それはうらやましいでしょうね。

夏目 当時は、下宿するのに金が幾らと米五升とか、そういう時代です。金だけでは下宿させてもらえないのです。戦後二、三年はそれだけ食糧事情がきつかったのですね。

伊藤 そうですね、二、三年がいちばんきつかったですね。それで、文科の。

夏目 甲です。あのころは、斉藤茂吉のせがれの北杜夫なんかもそうです。辻邦夫とか、優秀な人がいました。

武田 同級生ですか。

夏目 辻なんかは一期上だったんじゃないかな。斉藤宗吉は同期かもしれない。

佐道 北杜夫さんの本のなかに松本高校がよく出てきます。

夏目 出てくるでしょう、『どくとるマンボウ青春記』。彼もあんまり学校へ出ては……、山へ登っては蝶々を追いかけてばかりいたようです。あれは理系、ドイツ語ですから、あんまり付き合いはなかったのですけれども。

伊藤 高等学校のときにサークルなんかはどうですか。

夏目 サークルはほとんどありませんでした。体操の時間があるとサッカーをやっていた。記憶はそれだけです。文芸部なんてやっていたのもいました。

伊藤 そういうのに入らなかったのですか。

夏目 私小説みたいなばかりやっていますよ。永井荷風だ、へったくれだとか、あんなのはだめなんです。

佐道 終戦のラジオ放送というのがありますが、あれはどこかお聞きになりましたか。

夏目 自宅だと思います。

伊藤 八月だから、多分休み。

夏目 自宅で、自宅の縁側か廊下かで聞いたような記憶があります。一日二日前まで長野市は空襲があったのですよ。やはり何かこう、一瞬虚脱感というのか、そういう感じがしました。別に戦争に積極的にどうのこうのではないのだけど、負けたというのは自分のなかの常識が受け入れられないですね。だけど、電気は明るくつけていいし、そういう意味では夏空の青さがまぶしくのびのびとしたなという感じも記憶にあります。

伊藤 確かに複雑な感じですよ。

夏目 私は、もう半年ぐらいたれば徴兵検査だったのです。文科というのは延期がないですから。

伊藤 このときは短縮ですか。

夏目 いや、短縮じゃないですよ。三年間です。その上が短縮です。三、四年で新制に切り替わったのです。

伊藤 高等学校の時代の友達というのはその後もずっと付き合いがありますか。

夏目 ええ、今でも付き合い合っていますよ。つい最近もクラス会をやっています。だいたい松本高校というのは、信州そのものがそうなのですけれども、あんまり役人がいません。いないということはないのだけれども、数少ないです。高等学校のクラス会に出ると、銀行へ入ったやつ、証券会社、マスコミ。

伊藤 マスコミは多いでしょうね。

夏目 マスコミは、朝日新聞とか読売、NHK、五、六人いました。もちろんみんな今はもう辞めていますけれども。

伊藤 出版社なんかも多いのではないですか。

夏目 出版社もいました。私も実は出版社とかマスコミにできれば行きたいなという感じはあったのです。

伊藤 詩集でも出すつもりですか（笑）。

夏目 いやいや、要するにまともなサラリーマンはできそうもないなと。高等学校のときの自堕落な生活が身に染み付いていて（笑）。田舎の大学というのはほとんど就職の案内が来ないのです。情報がないんですね。もちろん学校へ年じゅう行ってれば多少はあったのですが、私はあんまり学校へ行かなかったものだから、あつという間にみんな締め切った後でした。

伊藤 それはどこのときの話ですか。

夏目 それは大学の就職のときの話です。大学を卒業して。そっちに行ったらまだ早いのかな。

伊藤 早いです。まだ高等学校をうろろしているところですか。

夏目 高等学校はうろろするだけです。酒を飲んでね。

伊藤 よく酒が飲めましたね。
夏目 だから今でも強いです。年のわりには。

■ 大学時代

伊藤 なんで東北大学なのですか。

夏目 試験が難しいからです。四人に一人ですよ。陸士海兵が帰ってきたから水ぶくれになっていくでしょう。昔は科さえ文句いわずに大学へほとんただで入れたのです。だけど、その年は違うんですね。私は人を押しつけて入る実力はないし、気力もないので、なるべく邪魔にならないようにと行って都落ちしたわけです。

伊藤 ここも競争はあったのですか。

夏目 行ったら二倍近くありました。「え、なんでこんなところが二倍もあるの?」と。

伊藤 この年はちよつとあれですね。

夏目 特別なんですよ。

伊藤 普通は高等学校を卒業すればどこかへ入れる。

夏目 そうなんです。その年だけだと思います。東北へ行ったら、東北大学の先生が面接で、「なんで松本からこんなところへ来るんだ」という。「いやあ、私は勉強していかないものだから、ここならなんとか入れると思っただけ、聞くと二倍あるというから、半分は落ちると聞いて私は自信をなくしている」といったら、「だいじょうぶだ」と。高等学校の卒業生優先みにして入れてくれたのですね。まともに競争をやったら専門学校の人になわなかつたのではないかと思うのです。だからあんまり試験をやったという記憶がないもの。

武田 面接ですか。

夏目 面接は記憶あります。だから面接で決まっちゃったのではないかなと思います。

伊藤 ほかにも帝大はいっぱいあるじゃないですか。

夏目 あるけど、北海道とかあんまり遠いところへ行くのは帰ってくるのに大変だし、あとは京都ですよ。

伊藤 京都、名古屋。

夏目 名古屋は理系しかなかった。

伊藤 そうですか、文系はなかったのですか。

夏目 名古屋、大阪、北海道もなかったかな。文科系の学部があるのは、東北と東京と京都と九州。

伊藤 そうすると選べる範囲というのは限られますね。

夏目 うちのおふくろはかねがね、「京都へは行くな。墮落するから」と(笑)。

佐道 東北へ行けば質実剛健(笑)。

夏目 本当は冗談で言ったのでしようけれども、東北のほうが無難だと思っただけでしょう。

伊藤 豈図らんや、ですか。

夏目 いや、東北はよかったですよ。のんびりしてかったりいよな町でしたけれどもね。ただ、何せ田舎ですから刺激がないです。今なら何でもあるけれども、当時は焼け野原でしょう。森の都なんていうけど。

伊藤 なくなっちゃっているんですよ。

夏目 全面的に焼け野原ですから、ひどかったです。

伊藤 しかし、東北大学は焼け残ったものではありませんか。

夏目 医学部は残っているけれども、法文系のほうはみんな焼けていました。一部残ったかもしれませんが、僕が通っていた教室はみんな戦後のバラックでした。

佐道 松本高校からは先生のほかに東北には。

夏目 二、三人いました。同じような腑抜けみたいなやつが。

佐道 腑抜けですか(笑)。

夏目 最初から競争を放棄したやつです。でも理系はいっぱい優

秀な人が来ていました。斉藤宗吉なんかも東北です。

伊藤 あそこは理系は有名ですからね。

夏目 法文系はやはりレベルが低かったかも知れません。当時は法学部とはいわない、法文学部です。それもまた私のひかれた理由の一つになったのです。法学より法文のほうがいくらか文の匂いがするからいいんじゃないかと思つたら、中は分かれていました(笑)。

伊藤 実際に完全に分かれているのですか。

夏目 中は、法科、経済科、文科と分かれているんです。

伊藤 そのどこかに入るのでですか。

夏目 そうです。それはしようがないと思つて法科にしたのですけれども、うちのおふくろは喜んでいましたよ。東北でも法科のほうが食えるだろう。文科なんかに行つたのでは飯が食えないんじゃないかと。そういう意味では、東大の文科へ行くよりは東北の法科へ行つたほうがおふくろはホツとしたのかもしれないね。しんどかつたですね。だから、学校へはあんまり出る気がありませんでした。私は法学部に珍しいといわれていたのですね。法と名のつくものは、憲法と、民法総則と、刑法と、そんなものじゃないかな。あとは外交政治史とか、あんまり法律とは関係ないようなものをぎりぎりいっぱいまで。

伊藤 でも必修。

夏目 必修のやむをえないのが五つかそこらあつたのですかね。

伊藤 そんなものですか。

夏目 やつとこ卒業できたんです。卒業と同時に六法全書をポーンと投げて、「こんなもの一生使わないぞ」と(笑)。あのとくにもっと勉強しておくというか、リーガルマインドぐらいは養つておけばよかつたかなあと思つたのですが、まさか役人になるとは思わないものですから。

佐道 憲法、法律でこれほど苦しむとは思わなかつた(笑)。

夏目 本当ですね。

佐道 ほかの役所以上ですから。

夏目 新聞学とか社会学原論とか、そんなものばかりいっぱいあって。

伊藤 印象的な先生は。

夏目 先生は一人だけいましたね。新明正道という先生。

伊藤 ああ、社会学。

夏目 この人の講義を聞いたときには、学問的な深さと、その人の温かさみたいなものを非常に感じた。それまでの中学、高校生のときにそういうを感じたことはなかつたのですけれども、そういうものを感じました。ただ、よく学生の仲間で先生のうちへ遊びに行くのですが、劣等生が行つたのではないんじゃないかなど気がとがめて、自宅へ何う勇氣はありませんでした。それから、弁舌さわやかな寄席芸人みたいな中川善之助という民法の先生がいました。口八丁手八丁みたいにペラペラとしゃべつて。だけど、あんまりついていくような雰囲気ではありませんでした。先生というのはそんなもの。法学部の先生だから。本当は桑原武夫とか阿部次郎とか、そんなのがいればもうちよつと違つたかもしれない。桑原武夫なんて京都へ逃げちやつた後ですからね。

伊藤 やはり下宿ですか。

夏目 下宿、それも旅館でした。仙台はご存じですか。

伊藤 ええ、大体わかります。

夏目 駅のそばにエックス橋というのがありました。線路をまたいであの橋のたもとに元寺小路というのがあります。駅から二、三分ですかね、旅館がありました。

伊藤 旅館ですか。

夏目 もちろん旅館といつても、戦後バラックで建てたような旅館なのですけれども、そこへ下宿していたのです。やはりこれも食事はいいです。旅館ですからね。

伊藤 やはり米を持っていくわけですか。

夏目 持っていけない。ただ金だけ出せばいいです。

伊藤 さすが東北ですね。

夏目 そういう意味では多少恵まれていたんです。ところがその旅館というのは、こんな話をしちやいかなかな、いわゆる当時流行っている……。

伊藤 連れ込みですか。

夏目 連れ込みなんだよ。こんなところとは予想もつかなかった。だから、進駐軍相手でときどき捕まるんですよ。トラックに乗せられてパーッとMP本部へ。それをもらい下げに行ったりね。一宿一飯の恩義があるから。同じ旅館にいましたから、なんとかもらい下げてくれというので。

武田 それはめつたにできない経験ですね。

佐道 その旅館は紹介か何かで入るのですか。

夏目 いやいや、勝手に。もっともその女性と旅館の常連のようでしたね。

佐道 いえ、先生がそういうところに下宿されたというのは。

夏目 私はだれかの紹介です。友達か何かの紹介です。

伊藤 でも、そういうところは知らなかった。

夏目 知らなかった。旅館だというから、見に行つたのですけれども、普通の旅館でなんてことないですからね。まあ、普通の泊り客もいるんですよ。商売で八戸から出てきたとかいうサラリーマンとか、そういう人も泊まっているのですけれども、所謂「夜の女」というのも何人かいました。そのうちの一人なんか、私のカメラか何かを持って逃げて、盛岡署へ捕まったんです。

伊藤 それは女の人ですか。

夏目 女。それで、おまえの名前が出てくるけど、身元保証ができるかと電話が来て、もらい下げに行つたときもある。

伊藤 盛岡までですか。

佐道 盗んだ相手。

夏目 そうしたら新聞に出て、田舎のおふくろが、「おまえ、何かまた変なことをしているんじゃないか」と。

伊藤 さつきからお話を伺っていると、お母さんはだいたい心配。

夏目 不肖の子でしたから。勉強は嫌いだし、悪さをするし。私はうちの物を売るのが商売なんですよ。もう時効ですけれども。掛け軸だろうと何だろうと、みんな売っちゃうのです。当事、和書というか和綴じの本がずらつと本棚に並んでいたのです。隅っこなんかはねずみの小便か何かでちよつと臭いようなもの、こんなものをうちのなかに置くのは嫌だからと思って、長野市に大きな古本屋がありましたから、買うかと思ったら、取りに来ると、ダットサンか何かで取りに来たのです。それ一杯持つて行つたら、金をガッポリもらえて、いい値で売れました。それをみんなうちのやつには黙っているのですから。いつの間になくなつちゃつて、後で気がついてね。そういうのが年じゅうでしたから、不良少年ですな。

伊藤 不良少年ですか。

夏目 みんな二十歳前後のころですよ。今はやっていないですよ（笑）。兄弟からは、あいつに預けておくと何でも売っちゃうと。

伊藤 兄弟のなかでも変わっているわけですね。

夏目 ちよつとね。末っ子でしたから。

伊藤 大学のときは法科へ行って、そこから先はどうしようとお考えだったのでですか。

夏目 あんまりサラリーマンになるという気は正直いつてないし、うかうかうつつをぬかして小説を読んだり、そんなことをやっているとうちにあつという間ですよ。卒業だけはしなければいかんと思って、付け焼刃で勉強して卒業はしたのです。

伊藤 卒業試験というのがあつてですか。

夏目 いや、単位さえとつておけばいいです。単位だけは、今い

ったように各種取り揃えて、きちんととっていましたが卒業はできたけど、卒業証書をくれないのです。

武田 それはなぜですか。

夏目 田舎へ帰ってしまったているからね。当時は卒業式なんかないのです。三百円か二百円か送料を出さないと卒業証書をくれない。たしかそうだった。

佐道 国立大学で。

夏目 国立大学。うちのおふくろがまた心配して、「おまえ本当に卒業したのかって……。」と。

武田 本当に卒業したのかと(笑)。

夏目 金を送ったら、筒に入れて送ってきました。だから筒代かもしれません。やっとこ安心したのだけど、そんなことだから就職のチャンスがないのです。

伊藤 それでどうしたのですか。

■就職

夏目 気がついたときにはまともな会社はみんな採用がおわってしまつて、どうしようかなと思つてしばらく田舎へ帰つてぶらぶらしていたのだけど、周囲から見ると目障りですからね。さっきの夏目忠雄というおじがもう引き揚げてきていましたから、彼は朝日新聞に入つて満州の役人をしていたわけですが、ちょうどその同期生の仲間がそれぞれ本省で局長なのです。「じゃあ、頼んでやる」といって、一緒に連れて歩かれて、何人かに会つて、「こいつを採ってくれ」と。

伊藤 東京へ来てですか。

夏目 東京へ来て。どこもなかなか、「いやあ、もう済んじゃつた」とか何とかと色よい返事がないのに、調達庁という役所でちようど採つてもいいかなということを知つてくれたので、「どこでもいいか」というから、「役人かよ」という気がしたのですが。

できれば文芸春秋とかせいぜいそのくらいで妥協したいなと思つたのに、全然だめなので、まあ、遊んでいるよりはいいのかなと思つて入りました。

伊藤 これは昔の文官試験ですか。

夏目 いや、試験は当時受けていないのです。

伊藤 法文学部にいる間に。

夏目 役人の試験なんかがあることを知らないもの。来てもいいよといわれて調べたら、どうも役人というのは公務員試験を通つていないと鼻くそみたいに扱われるぞというので、「じゃあいいよ、採つてくれるのははつきりしているのなら試験を受けるよ」というので受けた。そうしたら入つたのです。そうしたらあちこちから来ました。

伊藤 たいしたものですね。

夏目 だけど、「俺は約束だから調達庁へ行く」といった。

伊藤 特別調達庁というのは。

佐道 それがそのあと調達庁になるのですね。

夏目 入つたときには「特別」が入っていたのです。それがいつごろからなくなつたのですね。

伊藤 これはどこに属しているのですか。

夏目 総理府です。最初、入つたころの特別調達庁というときは総理府所管です。だから、私がもらつた名刺も総理府事務官です。

武田 総理府の事務官という形になるのですか。

伊藤 この経歴を見ますと、三月に卒業して、普通はだいたい四月に就職する。

夏目 普通はそうです。

伊藤 これは五月になっていますから。公務員試験に受かつたのは十一月ごろ。

夏目 夏から秋にかけてですね、たしか。

伊藤 十一月合格になっていますけれど。

夏目 多分その間はまともに勤めてないんです。アルバイトか何かで時々出て行つては小遣いをもたらった程度で、きちっと入ったのは翌年です。ちよつと見せてください。俺より詳しいんだな。

伊藤 でも、その前の十一月には札幌調達局不動産契約課と書かれていますよ。

夏目 札幌へ行ったのは試験の前にアルバイトで行つたのだから、これ(経歴)はきつと間違っているね。

伊藤 同じ十一月だから。

夏目 五二年というのは昭和二十七年ですよ。二十七年の五月ごろの採用だから、これは一年ずれているんじゃないのかな。

佐道 そうですか。

伊藤 そうしたら、大学卒業して一カ月間があいただけですよ。

夏目 卒業は二十六年だもの。

伊藤 二十六年卒業でしょう。

夏目 だから五二年の五月に初めて。

伊藤 じゃあ、一年くらいぶらぶらしていたということですか。

夏目 ぶらぶらしていたんですよ。採用が四月だから。

佐道 もう一回書類を点検してみます。

夏目 ここ(一九五二年十月)からは合っているんだな。

伊藤 五二年の十月ですか。

夏目 試験もだいたいこのころ(一九五二年十一月)だから合っていますね。

伊藤 試験の前後というのは、これはアルバイトですか。

夏目 そう。札幌へ行ったのは試験の前ですからね。調整課とか、みんなそうです。

伊藤 これもアルバイトですか。アルバイトというのは何をやるのですか。

夏目 書類の整理とか、コピーをとったり、複写、ガリ版を書いたり。

伊藤 雑用ということですか。

夏目 雑用です。

武田 毎日通われるわけではないのですか。

夏目 毎日ではありません。

伊藤 その当時、調達庁はどこにあったのですか。

夏目 最初のアルバイトのころは神田岩本町です。昭和通に面した三井ビルというのかな。

伊藤 あんなどころにあったのですか。

夏目 秋葉原からちよつと昭和通を南へ下った辺りですかね。

伊藤 そのときはまたどこか下宿ですか。

夏目 下宿した。阿佐ヶ谷に下宿したのですけれども、下宿代が当時二食で六千円くらいかな。正確な金額に覚えがないのだけど、

多分六千円くらい。二食で、狭い部屋でね。こっちでもらう給料

が六千円ぎりぎりか、それくらいなんです。ということはまず昼

飯代がないですね。交通費もない、たばこも吸えない、酒も飲め

ない。これはだめだと思って、こんなものでは一年間といえども俺

は東京で食っていけないなと思いました。そうしたら、札幌へ行

くかということです。札幌へ行つてくれれば、赴任旅費みたいなも

のが出るし、それで多少は稼げる。向こうへ行くと、石炭手当と

か寒冷地手当というのが当時はありましたから、四月か八月ごろ

にそれを現金でくれるのです。それは大きな魅力だなと、東京に

いてあの汚い下宿にいるより、行けば何とかなるんじゃないのか

なというので行きました。

伊藤 かなり長い期間ですか。

夏目 いや、七、八カ月行っていました。

伊藤 そんなに行っていたのですか。

夏目 現金をもらって、冬を越す前に金がなくなっちゃった(笑)。

佐道 札幌でお金がなくなったら、これはちよつと辛いですよね。

夏目 いや、一度にももらったたんまり入ったのは使っちゃったと

うだけの話で、給料はもらえます。

伊藤 しかし寒冷地手当がなかったら本当に困るでしょう。

夏目 それは大変でしたよ。

佐道 試験の前だということですけども、試験の勉強もされていたわけですよ。

夏目 全然しないですよ、そんなもの。あ、一冊、公務員試験何とかというのがあるじゃないですか。

伊藤 対策みたいなものですね。

夏目 対策みたいなもの。あれですもの、択一式というのか、問答が五つぐらいあって、そのなかで正しいやつにちよつとこうやる、あんなものばかりでもできますよ。あれで落ちるやつの気が知れないね。

佐道 上級職ですよ。

夏目 もちろん上級職です。

佐道 そんな簡単なものではないと思うのですが(笑)。

夏目 いま思えばそうですね、そのときは、「なんだ、こんなもので決まるのか」と思った。例えば、お茶を飲んで仕事をサボっているときに上司が入ってきたらあなたはどうするかというのです。慌てて課長にいいわけするとか、黙って知らんぷりするとか、答えに幾つかある。こんなことで……と。

佐道 そういう試験だったのですか。

夏目 そればかりではないけれども、そんなものもいっぱい入っているのだから、これで落ちるやつの気が知れない。運が悪いんだなあなんて思いました。

伊藤 国家公務員試験というのは順位がつくのですか。

夏目 つきます。つくけど本人には教えません。

伊藤 教えないのですか。そうすると、各役所が名簿を見て。

夏目 見て、あ、こいつ、こいつと。大蔵省なんかは、一番から十番ぐらいまでのやつにペッペッペツとつばをつけて、競合すれ

ば強い役所が採る。遠慮しているところは、その下のほうから採るとかね。

■調達庁での仕事

伊藤 でも、約束だからというので調達庁に入るわけですね。

夏目 そうです。だってまだ約束した人が現職でいますし、おじの頼りで行っているということもありますからね。だからその人は私の結婚式の媒酌人になっている。もちろん今は死にましたけれども。長野中学なんです。一高へ行つて、外交官になって、終戦で帰ってきて調達庁へ入った。まあ、多少やつぱり私も仁義は重んずるんですよ。悪いことはしてもね。

伊藤 それは逃げられないですね。

佐道 調達庁に入られたときは、調達庁というのはどんなことをしている役所だというのは。

夏目 全然知らないですね。札幌へ行つてびっくりしたのは、アメリカ軍の将校が役所にいるんです。監督官みたいに、少佐か中佐か、軍人がいるんですよ。局長や部長も遠慮していましたね。なんで監督官なんかがいたのか。まあ、まだ講和発行前の占領中ですからね。それで、五時十分か十五分くらい前になると、みんなばたばたと仕事をやめるのです。それで机の上をきれいにします。しまうものはしまつて、こうやつて(きちんと座つて)待っているんです。ブーツと鳴つたとたんみんなサーツと帰るんです。調達庁というのはそういう役所でした。少なくとも地方は。米軍の仕事をしているといえはそれまでだけれども、本当に占領中の役所を垣間見たという感じでした。それで初めて調達庁というのはどういう役所かわかりました。でも、帰ってきてからは、講和が発効して、そういうものは一切なくなつて日本の役所に戻っていました。

伊藤 昭和二十七年だからね。

武田 公務員試験は東京で受けられたのですか。

夏目 東京。いや、東京で一次を受けて、二次は札幌かな。

伊藤 そういうことができるのですか。

夏目 できます。多分そうだったと思います。一次は東京で受けたのは間違いないです。面接みたいなのだけは札幌かもしれせん。

伊藤 二次は面接になるのですね。

夏目 面接です。一次はペーパーテストです。

佐道 二次でどんなことを聞かれたか覚えていらっしやいますか。

夏目 全然覚えていない。

佐道 それほど印象に残っていないということですか。

夏目 残っていないですね。どうせあんな試験をやるどころだから残ったことないですよ。正直いうと、私は調達庁よりも労働省へ行きたかったのです。というのは、労働省というのは戦後の役所なのです。同じ役所でも、戦後の労働省だったら多少俺にもついていけるかもしれない、いわゆるほうひ法匪の横行する社会とは違うのではないかと漠然と思ったのです。まだ世の中を知らないですからね。

伊藤 向こうから声がかかったということですか。

夏目 たしかありました。

伊藤 しかし、労働省というのは内務省以来の。

夏目 そうそう、後で見ればね。でもやはり、当時は労働三法とか何とかがあって、新興官庁のいちばん時の流れに乗っているような雰囲気でしたでしょう。だから、そういうところならという感じがしたのです。

伊藤 いやあ、労働省ではなくてよかつたんじゃないですか。

佐道 やがて防衛二法ができて防衛庁ができるよ(笑)。

夏目 防衛庁へ移るとは思わないですね。当時まだどちらかといえば、社会党ほどではないけれども、社会党に近い気持ちがあ

かにありましたから。漠然と、再軍備なんかとんでもないと。もちろん知識があつていつていつていっているのではなくて、その前の戦争でこりこりしているのが残つてるときですから、そういう感じでしたでしょう。だから、まさか防衛庁になるとは正直いつて思いませんでした。

伊藤 調達庁ではいつたいどんな仕事なのですか。

夏目 まともな仕事をしてないですよ。札幌にいたときは、駐留軍がいつぱい土地を接収するじゃないですか。そのため土地の所有者と売買契約なり賃貸借契約を結ぶわけです。契約書に判を押してもらわないといけないでしょう。ところが、北海道の原野というのは地主がいるのかいないのかわかりません。不在地主みたいなばかりでしょう。どこにいるか探すのがまず大変だった。探して見つかったら、そいつに判をもらわなければいけない。三円か五円の賃貸料を払うために旅費をかけて判をもらいに行くのです。雪深い留萌とか増毛とか、こんなところ(腰)まで雪がくるところへもらいに行くのです。まあ、アルバイトだから嫌ともいえませんけれども。そういう労働です。労働というか、普通の人は嫌がりますね。

佐道 たしかに基地があるところですから人があんまりいないところなのでしょうけれども。

夏目 駅をおりてから二時間くらい人つ子一人会わないような僻地もあつて、冬なんか大変ですよ。

伊藤 そうですね、吹雪くから。

夏目 増毛、留萌、苫前とか、今でもその地名を覚えています。

伊藤 昭和二十七年の十月に調達庁の調査課というところに移られますね。これはちゃんと公務員として。

夏目 調査課は公務員の試験に受かってからです。

伊藤 公務員の試験に受かってちゃんとした役人になったというのは。

夏目 ちゃんとした総理事務官の名詞ももらって。

伊藤 それがこの調査課のときですか。

夏目 調査課のときだと思います。だから、調査課は十月ではないんじゃないかな。もつと早いのではないかと思えます。五月か六月、要するにそのころです。五二年の十月ということはないと思います。

伊藤 調査課は何を調査するのですか。

夏目 調査課というのは、ざっくりばらんにいうと新しくできた課です。占領軍がもういなくなつて、安保条約に基づく駐留軍になつた。それまでの占領軍のいたときの仕事というものを歴史として残す必要はあるじゃないか。占領軍調査史をまず作ろうというのが一つ。もう一つは、調達庁の仕事に対する調査研究として、調達庁というのはいろんな雑多な仕事をやっていますので、そういうことを多少アカデミックな面から勉強して、『調査月報』と称して毎月雑誌をつくつて、それを各役所とか図書館とかへ配る。その原稿を書いたり。多少はだから文化的な匂いがしたのです。なぜそんなところへ行つたかというのと、さつきいった北海道でも、金がなくなるから早く帰らないといけない。いろいろ運動してくれた人がいるのです。これがまた中国からの引揚者で、私が入るときに世話してくれた人と一高の同級生で、東京都庁か何かに行つて、支那へ行つて引き揚げてきた人です。その人が調査課長です。この人は仏文出身で役人的ではない。私よりもつと籬の抜けたような役人です（笑）。その人が引つ張つてくれました。その人もはずつとそれからもお付き合いしていただきました。その人ももう死んだのですけれども。彼は、仕事をしている合間にもフランス語でペラペラ独り言が出るんです。私もフランス文学にあれだから、そのころは『失われた時を求めて』なんていうのを一所懸命読んでいたのです。彼が下手なのか上手なのか私にはわからないフランス語で「*À la recherche du temps perdu*」とか何と

か、「おまえ、そんなものを読んで」といつてからかうわけです。多少、同じ役人にもこういうのがいるんだなという親近感がありました。だから、非常に調査課のときは楽しかったです。

伊藤 調達庁何年史とかいうのをつくつたのでしょうか。

夏目 つくりました。調査月報も、私がいるときでも数冊は出しました。もつと出したかな。毎月かな、出したんです。ま、せいぜい数十ページかそこらのものですけども。

佐道 調査課は何人くらいいらつしゃつたのですか。

夏目 十五、十六人ではないですか。あまり印象に残る人はいませんでした。役所というのは、新しい課ができると大体いい人というのはいらないのです。

伊藤 あちこちから押し出されたのが来るんでしょう。

夏目 概ねそうですね。いい人を寄こさないので、どうしてもそうなるんですね。

伊藤 しかし、どれくらい続いたのかな。結構長いこと。

夏目 長いこといたかな。

武田 これ（経歴）だと四年間です。

佐道 こちらが参照した資料にはこう書いてあつたので。

夏目 三、四年はいたでしょうね。それから管理課の係長になつたんです。

佐道 調達協力課というのは。

夏目 これはなんでいたのかな。協力課というところにいたような気はするけど、ほんのわずかだと思えます。調査課の仕事が一段落つて、協力課というところに。

伊藤 年史みたいなものをそのときにつくつてしまったのですか。

夏目 つくつたでしょうねきつと、いたんだから。私はいった記憶があります。でも、ここで何をしたかという仕事の記憶はないな。

伊藤 それは協力課の話ですか。

夏目 うん。

伊藤 では、不動産部管理課は。

夏目 不動産部の管理課というところに初めて係長になったときに。それまでは平事務官だよ。

伊藤 でも四年ぐらい。

夏目 調査課はいたかもしれませんね。何年いたかという記憶はないけれども。調達協力課というのも、いたというにはいたけれども、そこでどんな課長がいて何をしたかという。ほんのわずかしかないかったのではないのでしょうか。

伊藤 不動産部管理課というのは何なのですか。

夏目 これは施設の土地の買取とか賃貸借契約とか補償とか、そういうことをやっていました。要するに、駐留軍に提供するための土地の賃貸料を払ったり、契約をしたり、買取契約をして買取金額を払ったり、あるいは引越していかなければいかなところは補償金を払うとか、そういうことの算定とかね。

伊藤 今までの感じとはずいぶん違ったところになりましたね。

夏目 調達庁、施設庁のいちばんメインの仕事は施設しかなかったのです。ほかの仕事は全部米軍が直接やるようになりましたから、物資の納入とかそういうのは役所を経由しないでやるようになったから、土地建物の提供だけが、調達庁、施設庁の大きな仕事で残ったのです。

伊藤 役所としても縮小したのですか。

夏目 縮小ですよ。人もずいぶん減っているはずですよ。

伊藤 ほかに移っているのですか。

夏目 移った人もいるのかもしれないけれども、地方が多いですからね。私は本庁しかないから、地方がどういふふうに入をさばいたかというのにはよく知りませんが、とにかく定員はどんどん減っている。

伊藤 まあ、占領がおわたったのだからそうですね。

夏目 今は防衛施設庁という名前のとおり、当時不動産部といっ

ただのだけ、その後施設部と名前は変わったのですけれども、施設の仕事をメインで残ったのです。

佐道 たしかに占領はおわりましたけれども、米軍の基地自体は大半が残って。

夏目 残っています。だからそういった仕事だけが残ったのです。それまでは芸能人の提供からみんな特別調達庁がやったんですよ。私もそういう仕事をしました。芸能課というのがあって、ミュージシャンとかアーティストみたいなやつをみんなAクラス、Bクラスと格付けをして、進駐軍から呼ばれると、「Aクラスだからおまえの日当は幾らだ」といって、今のテレビの代わりに芸能人をみんな格付けしたんです。

佐道 その支払いも調達庁がやるわけですか。

夏目 私はあの仕事をしました（笑）。大きい顔をして、宴会なんていうとそういう芸能人を呼んでくるんです。不動産部では全然そういうのはない。だから、不動産部というところへ行つて初めて役所としては多少責任のあるような仕事をしたという感じがすかね。でも余り楽しい仕事ではありませんでした。だって、契約でしょう。これはとても俺が学生のときに考えていた仕事とは違うなど。

伊藤 管理しているのはだいたいいつも基地ですか。

夏目 もちろん米軍基地ですよ。

伊藤 東京のなかにもずいぶんあったでしょう。

夏目 全国ですよ。

伊藤 東京にもずいぶんあったでしょう。

夏目 うん、東京にもあった。個人住宅もあったしね。例えば第一生命のビル、ああいうのはみんなそうですから、ああいうのを管理して借料を払ったりしていたわけです。徐々に都市部は返したのですが。

佐道 一方で、この五十年代は内灘とか砂川とか米軍の基地問題

に対する運動が大変厳しくて、米軍も演習場の確保とかで土地を広げようということがあった時期です。このお仕事ですと、相当その問題に。

夏目 だからしんどかったです。東富士にしても何にしても、絶えず反対運動でしょう。返せとか補償金を上げるとか、あの人たちを相手に仕事をしていたら決して楽しくありませんよ。悪口雑言を投げられて、「米軍の手先だ」とかいわれてね。地道な役所でしょう。それから全然権限はないし、文句の持つて行き所がないです。今でも施設庁の人というのはご苦労だと思います。沖繩の問題にしてもね。あんまり人様に喜ばれないし。

伊藤 喜ばれるようなことはあまりないでしょうね。

夏目 ないですよ。やっぱり立场上米軍のいうことは聞いてやらなければいけません。国際条約上の義務ですから。それをストレートにやっつてはいかんから、やんわりと時間をかけるのです。そういう意味で、私は不動産部というところにおいてほとほと。そうしたら、その後しばらく飛んで企画課というところに行つたんです。書いてないか。人事係長ではないよ。不動産部の企画課。佐道 こちらが参照した資料にだいぶ混乱があるようです。

■ 防衛庁へ

夏目 人事課係長と書いてあるでしょう。この前に不動産部企画課係長というのがあります。これは予算と法規、不動産部の仕事の総合調整と企画みたいな不動産部のいちばん大事な仕事。そうなるべくと、なお嫌なんですね。これはたまにないというときに防衛庁へ行けという話がありました。多分、この人事係長というのは、防衛庁へ行くについて人事課の係長という名前にしたんだと思う。後でまたご説明しますけれども、防衛庁へ行くにあたって、出向ではないのです。

伊藤 本籍を移すということですか。

夏目 いや、籍は防衛調達庁に置いたまま、手弁当で防衛庁の仕事を手伝えと。

伊藤 向こうに定員がないから。

夏目 定員がないのか、給料を払うのが嫌なのか。私はべいべいだからいわれたとおり。要するに、毎月給料をもらいに帰ってこなければいけないんですよ。もらいにいくといつても、同じ敷地のなかにありますからなんていうことはないのだけど。身分は調達庁の人事課係長です。

佐道 仕事は防衛庁の部員ですか。そういうことはほかにあるのですか。

夏目 あまりないですよ。私は、「なめるな」といつて怒つたんです。防衛庁にも怒つたんです。「仕事は防衛庁の仕事で給料は調達庁の手弁当というのはおかしいんじゃないか」と。調達庁にも、「だいたいこんな人の出し方はないだろう」といつて散々文句をいつたら、数ヶ月で多分やめたと思います。

伊藤 身分を移したのですか。

夏目 移しました。だけど、こちらは不動産部の仕事から抜けられるということがあるものだから、とにかく行っちゃえと。多分、この人事係長というのは防衛庁へ行つているときの名前です。

佐道 では、実質的に人事課の仕事はまったく関係なしと。

夏目 ありません。人事課の仕事なんかしてないから、名前だけです。

伊藤 でも、人事課の何とか係というのはいったいどうですか。

夏目 あつたけど、そんな何とか係なんて名前はずかしくない。人事課の課付き係長みたいなものではないですか。

伊藤 「付き」というやつですね。

夏目 そうです。仕事はまったくしていません。

伊藤 その前の不動産部管理課係長というときは何係長なのですか。

夏目 契約。

伊藤 あんまり今までのお話とそぐわないですね。

夏目 それで、その後が不動産部企画課の企画法規係長です。

伊藤 最もさつきおっしゃった法匪に近いほうですね。

夏目 だんだんそれに。

佐道 捨てられた六法が必要になる。

夏目 聞きにくるんですよ、係長として答えないといけない。

全然わかんない(笑)。

武田 (笑)、そういうときはどうされるのですか。

夏目 部下がいますから。法学部にいた法匪の見本みたいなやつがいますから。みんな優秀でしたよ。東大、京大の法学部を出たのが、五、六人いましたからね。内心きつと係長をばかにしただろうけれども。

伊藤 でも、そういうときはやはり部下を大事にしないといかんですね。

夏目 でもね、みんなまともに年じゅう六法を出してこうやって(本を読むしぐさ)。こんなところで六法出して見ているなんて情けねえやつらだなと思って見ていましたけど、しかし助けられな。企画法規というのはそういう部署でした。採め事があつたり、ちよつと解釈が不明瞭なのはみんなそこへ行くのです。

佐道 土地の取得にかかわるようなことで現地に行かれることも。

夏目 企画課のときはほとんどありませんでした。管理課のときは実際に補償したりするから、行ってみないと検査院から怒られたりしますから、ちゃんと予定どおりの工事がおわっているかどうかとかそういうものをチェックしたりしましたけど、企画法規では出張はありませんでした。

佐道 管理課のときには、それこそ反対運動をしている人たちと現地です。

夏目 会うことはあります。

伊藤 施設庁そのものにも来るのでしょうか。

夏目 来ますよ。だけど、施設庁へ来るときにはだいたいもつと偉い人が会つたりするのでしょうけれども、地方へ行くと現場で会いますからね。

伊藤 そうするとアメリカ軍の手先になってしまうから。

佐道 特に印象に残っておられるところはありますか。

夏目 ないですね。岩国というところに行つて、五橋という酒はうまいとかね、そんなのしかない。あんまり楽しくなかったですね。

伊藤 防衛庁からお呼びがかかるというのはどういう経緯なのでしょうか。

夏目 まあ、お呼びをかけた経緯は私はよくわかりませんが、防衛庁もどんどん大きくなっている時期でした。各省から人が来ていたけど、それだけでは足りなかつたのでしょうね。それで施設庁から何人が採るといふ話があつても、私がいるときでも三、四人はいたんじゃないのかな。だけど、私みたいに身分をこちらにおいたままというのは私以外はいなかつた。出向でみんな行きましたから。

伊藤 でも、夏目さんをといて引つ張つたのですか。

夏目 いや、そんなことはないですよ。それは調達庁がこいつと引つて決めて、向こうへ出して、向こうも、じゃあ、いいだろうということだつたと思います。防衛庁は私のことは知らないと思えます。

佐道 それまではほとんど交流みたいなものはないのですか。

夏目 ほとんどないです。人事も別ですし、予算も別ですし、もちろん個人的に知っている人は別ですが。

伊藤 さつき場所が同じだといいましたけれども、どこですか。

夏目 六本木の。

伊藤 もうそこにあつたのですか。

夏目 建物はもちろん別でしたけれども、同じ敷地のなかにはいました。

■調達庁、防衛庁の外局に

佐道 制度的にいいますと、昭和三十三年、五十八年に総理府から調達庁は防衛庁の外局になる。

夏目 何年でしたか。

佐道 一九五八年、昭和三十三年。

夏目 そのときは私は防衛庁ではなくて調達庁にいました。

佐道 調達庁にいらつしやつたわけですよ。調達庁にとつても、なかにいらつしやつて何か変化はありましたか。

夏目 ありましたよ。なんで防衛庁なんだろうという。やはり調達庁は誇り高き土民軍の集団ですから。土民軍といつたらわからないけれども、調達庁というのは先程いつたようにいろんな人の集まりです。外務省から来た人、外地の役所から来た人と。母体は終戦連絡事務局じゃないでしょうか。

伊藤 そういう母体ですか。

夏目 だから、外務省系の人は何人かいた。引き揚げの官僚もいます。もちろん各省から来ているのがある。そういう人の寄せ集まりです。しかも、あんまり毛色のはっきりした人ではなくて、みんな何かいわくつきみたいな人が多いのです。そのかわりにおそらくしろい人たちが多かったのですけれども、役人としてはちょっと変わっているようなのが集まったのです。そういう人たちですから、防衛庁なんかの風下におかれるのは潔しとしないという雰囲気は相当強くて、ずいぶん反対したのではないかな。だけどやはり、時の流れに押されたのでしょうけれども。防衛庁に組み込まれ、やはり防衛庁が高級幹部の人事については口出ししてきますから。もちろんわれわれのところはあまりないにしても、そういう意味ではみんな喜んでいなかったと思います。今までの総理

府なんていうのは関係ないから。名前は総理府とあるだけで、総理府の人は調達庁の実態を知らないし。今度、防衛庁にいくと隣にいますし、いやだったでしょうね。「俺たちは米軍の仕事をしているのであって、自衛隊の仕事なんかする気はないよ」という気持ちが多量ありましたね。それからしばらくそのへんのぎくしゃくしたのはありました。米軍の基地と自衛隊の基地と平仄を合わせていく。

伊藤 同じところに隣接してあったり、共同で使っていたり。

夏目 あります。防衛庁の外局になることについては当時の幹部の人たちはあまりいい顔をしていなかったと思います。少なくとも調達庁の人たちは。

伊藤 防衛庁の側がどう思ったかはわかりませんが。

夏目 防衛庁だつて、正直いってあんまり引き受けたくないという気持ちはあったと思います。全駐労なんていう労働組合の相当強力なやつがあるでしょう。防衛庁は特別公務員で、組合もないですから、労組対策もいらないし、基地関係者が赤い旗を立てて陳情に来ることはないのだけれども、調達庁はそんなのはざらです。

伊藤 全駐労の交渉相手は調達庁ですか。

夏目 調達庁。さっきいいたけれど、不動産部の他に労務部は残っているから、これは調達庁でやっていたのです。駐留軍労務者というか、基地で働く人たちの契約主は調達庁です。

伊藤 先生はそういう部面には。

夏目 全然行ったことがありません。あんまり労務の仕事というのは知りません。

伊藤 全駐労は一時は大変な数だったわけですね。

夏目 石橋政嗣代議士なんて全駐労のボスでした。

伊藤 調達庁に押しかけてくる。

夏目 そういういやな仕事ですから、防衛庁も喜んでる手を挙

げて受け入れるという雰囲気ではなかったのかもしれませんが。
 伊藤 そうでしょうね。第一、自衛隊の仕事をしているわけではないし。

夏目 そうそう。防衛庁へ入ってからだんだん自衛隊の施設の関係の仕事もするようになったのですけれども。

佐道 五八年に防衛庁の外局になって、先生は一九六〇年に防衛庁に移られるわけですけれども、その二年ぐらいの間で、防衛庁の外局になったことで雰囲気が変わったということはありませんか。

夏目 雰囲気が変わったということはないけど、例えば基地問題をやるにしても、防衛庁に施設課というのがありますが。この課は本来自衛隊の施設をやっていたのだけれども、やはり基地業務というのは調達だけでは処理できない問題もありまして。やはり大臣にあげていかなければならない問題というのは出てきます。そうすると内局を通さないといけない。その内局を通すのはどこかというところ、その施設課長のところですね。また一つ決済処理がふえてうつつという。あんまり役に立たなくても、年じゅう相談はしていかないとけない。非常にやっかいといえはやっかいでした。

伊藤 外局になると、人事は。

夏目 人事は別で、調達庁は調達庁でやったのです。ただし、それは長官ができるのだけれども、防衛庁と相談していいと思います。今度はいくつかのふうにしたい。そう積極的な口出しはしないにしても、多分そういうことは話し合っていたと思います。やはり上下の関係が出てきてしまうのですね。

伊藤 やはり先生みたいなキャリアの人事というのも多少は相談したのでしょうか。

夏目 いや、われわれレベルのやつはみんな調達庁でできました。ただし、出たり引っ込んだり、防衛庁へ来いとか何とかというの

は向こうがいわないとだめです。行っても、こいつはだめだと思
 うと返すのです。何人も返されました。

伊藤 それは出向でしょう。

夏目 出向だけど、対等な関係の出向ではありませんから。いわゆる外局と本省の関係ですから、どうしても上下関係みたいなものが出ます。

伊藤 先生の場合は、防衛庁そのものに籍がやがて移るわけですね。

夏目 移ったんです。数ヶ月後に。

伊藤 調達庁は全然関係ないと。

夏目 ない。移ってしまえばね。

伊藤 戻されるといふのは、それは出向で行っているから戻されるわけですか。

夏目 いやいや、同じですよ。同じように出向です。

伊藤 最後は出向ではないでしょう。

夏目 最後は出向のままそこに居ついたというだけです。手続きはかわりないですもの。

伊藤 そのときには人事はだれがやるのですか。

夏目 出向？

伊藤 出向しているでしょう。

夏目 出向したら防衛庁の人事です。出向といたって、帰ってくることを予期した出向ではなくて、要するに嫁にやっただけのものですね。やったら、「後は焼いて食おうと煮て食おうとそちらの勝手にしてくれていいよ」というような感じですね。ただし、気に入らないと、「おまえ帰れ」というので実家へ。

伊藤 でも、席を移したら実家はなくなるんじゃないですか。

夏目 調達庁、施設庁があるじゃないですか。

伊藤 もう施設庁から防衛庁に完全に移籍しちゃったなら。

夏目 移籍したって、書類と一緒に帰せばいいんだから、そんなのは何ていうことないです。大蔵省へ行けというのと同じです。

また、「おまえ施設庁へ行け」という。「帰れ」という言い方をするからいけないですね、「施設庁へ行け」というんです。「出向せよ」でもいいし。

伊藤 いちばん前の段階は出向というものではないのですね。身分はこちらにあるまま向こうで仕事をしろと。

夏目 そう、手弁当。

■教育課

伊藤 そうですか。いちばん最初に行ったのが教育課ですか。教育課というのは何のなかにあるのですか。

夏目 教育課というのは自衛隊の隊員の学校教育。

伊藤 そうでしょうか、内局でしょうか。

夏目 もちろん内局ですよ。当時は教育局といました。人事局と教育局というのは、そのときによって年じゅう一緒になったり離れたり。私が行ったところは教育局教育課でした。

伊藤 教育局はどのくらいのところまで面倒を見るわけですか。

夏目 正直いうと、教育課というところに行ったら、課員とか部員が十数人かな。これはほとんど各省からの出向です。警察庁、自治省、文部省。それぞれだいたい二年位いて帰るのです。

佐道 二年で帰る約束で来るのですか。

夏目 だいたいそうなんです。ですからまともな仕事なんか出来ません。ひどいやつは昼休みになると株屋へ電話をして、「売った、買った」とやっているし、どこかへ消えてなくなったきり帰ってこないで、朝と昼前後と夕方だけいるとか、程度の悪いのがいましたね。もともと防衛庁の仕事を一所懸命やろうという意欲がないのです。とにかく無難におわって帰ればいいやと。それで仕事ですむのかというと、実態的な仕事は幕僚幹部がやるわけです。彼らは自分たちの教育だから一所懸命、よかれと思っていちばんいいものを計画してくると、そんなものを批判するような見

識を養っているやつがいれば、それはそれで議論できるのだけど、その気がなければ、「いいよ」といつていれればいいんです。仕事は整理と進むのですよ。むしろ……。

伊藤 邪魔しないほうがいい(笑)。

夏目 ちよつとオーバーだけれども、そんな雰囲気でした。私はそんなことはない。二年で帰るといふ保証もないのです。帰れといえれば帰らなければいかんけれども、快く引き取ってくれる保証もない。だから、ちよつとはまともに仕事をする事になります。そうすると目立つのですね。例えば制服の人たちがこういうものをやるといふと、「これはおかしいじゃないか。こういうことだろう」とちよつと議論をすると、仲間から「そんなのは無駄だ。何でそういうややこしいことをするのか」という顔をされる始末です。こちらは自分の一生の仕事にするという気持ちもありますから。

伊藤 もうそのときにはそういう気持ちになっているわけですか。

夏目 まあ、追い追ひ話しますが、そういう気持ちでした。防衛庁に行つたときには、今の施設庁の仕事から抜けたということ、しかし、いつまでもこんな気持ちでいたらいかんという気持ちもあつた。それと、やはり多少人の縁というのが出てくるのです。尊敬する上司というか、そういう人ができてくるのです。当時の教育課長というのは久保卓也という人でした。この人は頭の切れる人でした。もちろんこの人も警察の人でしたけれども、とにかく防衛問題が好きで、熱心で、片手間にやる仕事ではないという信念の人ですから、教育課長といえども厳しいのです。そういう人から見ると、みんながやらないから、私がちよつとやると目立つのです。久保さんが防衛課長になるときに私を防衛課に引つ張るのです。それで海原さんのところに。運命です。

佐道 久保さんに引つ張られたのですか。

夏目 そう、教育課から防衛課に行つたときはね。別に私が仕事

ができるという意味ではないんです。当時の雰囲気があったから、当り前のことをやるだけでも目立ってしまうのです。別に私はジェスチャーをしようと思っただんじやないですよ。一所懸命やろうと思っただけでも、要するにほかの人はあんまりやる気がなかった。

伊藤 とにかく無難に二年過ごそうということですか。

夏目 そう、当時の教育課というのはそんな雰囲気でした。

伊藤 この教育課の対象になる教育は。

夏目 陸海空全部です。陸の担当とか海の担当とか大方決まっていたんですが。

伊藤 先生は何でしたか。

夏目 私は多分航空自衛隊の担当だったと思います。

伊藤 航空自衛隊の学校というところ。

夏目 第一術科学校から術科学校が五つぐらいまであるでしょう。外に幹部学校、幹部候補生学校とか、そういうもの全部です。これはまた後ほど出てくると思いますけれども、当時、F104 ロッキードという戦闘機を導入して、そのパイロットを養成しなければいけません。だからアメリカへやって。そういうもののスケジュールをつくったり、そういうことをする。

伊藤 それは幕僚幹部のほうがかなり。

夏目 もちろん原案みたいなものは彼らがつくるのですけれども、しかし、どんな問題でもそうなのですけれども、やはり彼らは制服の立場から純粹軍事的にこれがベストだと思っっているものを持つてくるのです。やはり現実的ではないのがあるのです。予算その他の制約もあるし、日米関係の状態から見て、そんなことをいっても無理だということもあるし、国民感情から見て無理だとか、そういういろいろな要素があるので、そういうことはやはりどこか別の目で見ないといけない。私は、専門的なことは彼らのほうがよく知っているのだから任せる。しかし、ちょっと偉そう

に言えば、一般の国民、普通の人から見ると納得できないのは制服の論理だけでは通らんよという目で仕事をするしか意味がないと思っただけです。だから議論はします。

伊藤 幕僚幹部の人たちはどういう反応でしたか。

夏目 それは事柄によりけりです。一所懸命反論してくるのとか、いわれればもつともだということもあるし。なんとかうまく収まるものです。それは人間関係で、変に威張るとかではないし、向こうも卑下するわけではない。お互いに自分の立場で堂々と意見をいい合えばいい。そういう雰囲気であれば仕事はうまくいくと思います。今でもそういう人たちの中にはこの弘済会の理事になって来ている人がいますけれども、その節はお世話になりました。別にうらみも何も無いし、非常に仲よくやっています。仕事というのは、誠意を持って信頼感の上に立つてやれば、どんなに立場が違ってもうまくいくと思います。私はそういうふうな思っています。

伊藤 そうだと思います。そうでない場合がしばしばありますけれども。

夏目 最近、多すぎるんだよね。責任逃れとかそういうのがいっぱいいけないです。決めたことは、例えば大蔵省に説明が必要となれば、「おまえたちのことだからおまえたちがやれ。俺は知らんよ」という姿勢ではなくて、自分が行って説明をして納得を取り付けてくれるぐらいのことをしないとイケません。「あれはけちばかりつけてちつとも役に立たない」ということになるといけないし、批判精神だけではだめなんです。けちをつけるのは楽ですよ。それをどうやって納得させ、議論をまとめていくか。海原さんの悪いところはそこです。高邁なる批判家でおわってしまっているからいけないのです。いつていることは概ね正しいのですけれども。

伊藤 (笑)。

夏目 全部とはいわないけれども、八割、九割は正しい。

伊藤 確かに高邁だと思います。

夏目 ただ、あの人はいいっぱなしでしょう。

伊藤 だから、ときどき質問して、「では、どうすれば」と。

佐道 「みんな壊したのですね」と。

夏目 壊したの。デストロイヤーといていた。そのかわり、破壊力は計り知れないものがある。ああいうのが必要なこともあるのですね。あのくらいでない相手を引き下がらないときもあるでしょうけれども、土台無理な話も多かった。自衛隊なんて、できてからまだ何年でしょう。まだ成長期ですから、どこかひずみがある。それをどこから整備していくかという優先順位の問題を議論している時に、あの人は満点のやつをつくらないと、「いま攻めてきたら役に立たない。機関銃は五分間で弾が切れる」と。どこの国の軍隊だつてそんなですよ。だけどもあ、それは後で。

佐道 それは後でまたゆっくりと。

■オーラルヒストリーコンラド

夏目 私はオーラル・ヒストリーというのは二度目なんです。一部お渡ししておこうかな。

武田 これ(『THE U.S. - JAPAN PROGRAM ORAL HISTORY SERIES』)は、菊地清明さんに対して田中さん達がやったやつですね。

夏目 それはある時期の日米関係がどうだったかということだけに絞ったテーマですが。英語で書かれるから弱いのです。

武田 これは、場所はアメリカでやられたのですか。

夏目 いや、私の事務所だと思います。ここへ来られるのが大変だったら私が行ってもいいですよ。海原さんはおたくのほうへ行っていたようですね。

佐道 虎ノ門に事務所があつて。

夏目 虎ノ門が事務所ですか。学校ではないのですか。

佐道 学校はまたちよつと面倒なので。

夏目 いや、おたくのほうが大変でなければいいのですけれども。

伊藤 べつに構わないです。

佐道 これをお借りしてもよろしいですか。

夏目 何部かもらつていたので差し上げます。役に立たないかもしれないけれども、雑談でオーラル・ヒストリーというから、これもオーラル・ヒストリーと書いてあつたので。

佐道 これは田中明彦氏とか村田晃嗣氏が聞いているやつで、ごく一部分だけ。

伊藤 なんで英語なのかな。

佐道 これは向こうのナショナル・アーカイブで。

夏目 向こうの公文書館の資料にするとか、そんなことを聞いたような気がします。

伊藤 そうですか。ナショナル・セキュリティ・アーカイブ。

佐道 日本語で聞いて、英語に訳すという作業。

伊藤 それをまた日本語に戻したら全然違つていたりするんですよ(笑)。ここはおもしろいですね。このトイレというのはなかなかユーモアがあつて、標語がはつてあつたりする。

夏目 あの標語も、間違つていたりして直させたのです。最初は、「急げども」と書いてあつた。「急げども心静かに手を添えて、外に漏らすな何とかの露」と。「急げども」と書いてあつたので、「これは文法的におかしいじゃないか。『急げども』というのは、急いでも急いでも間に合わなくなつたときに使うので、こういうときは、例え急いでいるときでも心を落ち着けてという意味だから『急ぐとも』だ」といったら、「はあ」というような顔をしていました。日本語教育までするんですよ。

武田 それは文学の知識がないと(笑)。

佐道 それはやはり教育課で。

伊藤 普通、「一歩前進」と書いてあるんだけど、「三歩前進」と。

夏目　きれいな字を書くなと思っていたら違いました。パソコンの字なんですね。

■久保卓也氏について

佐道　そうですね、今はもう、毛筆体とかいろんな書体がありますから。久保さんとは教育課に移られて初めてお会いになったのですか。

夏目　そうです。

佐道　久保さんもお酒が大変好きだったそうですね、よくいらつしやいましたか。

夏目　ご馳走になりました。あの人は酒を飲むと長いというか、めろめろになるのです。市ヶ谷のフジテレビのすぐそばに私の官舎があつて、そこから六本木まで通うのです。途中信濃町の駅のところ、茶道会館というのがありますね。一度、私が車で通つたら、電柱にこうやつてつかまつている人がいます。ひよつと見たら久保さんなんです。

武田　それは教育課の時代ですね。

夏目　いや、それはもつと後です。防衛課長のときなんか、呼ばれて行くと、このくらい（一メートルくらい）離れているのだけれども、酒の匂いがプンプンする。要するに夕べの酒ではないのです。朝まで飲んでいた酒なんですね。すごいなと思いました。

佐道　だいたいお飲みに行かれると深酒をするタイプですか。

夏目　正直いうと知らないのですけれども。一緒に飲むと、必ず最後はどこかへ消えてしまうのです。どこか怪しいところに消えてしまう。絶対に最後まで付き合いません。だれかい人でもいたんじゃないかな（笑）。

伊藤（笑）、ご自身はそういうことはなかったのですか。

夏目　だから、あの人は酒には理解がありました。私も昼休みにときどき当時のトリスウイスキーを弁当を食べながら飲んでいた

のですけれども、ときどき部屋から出てくるのです。パツとこうやる（手でコップにふたをする）のだけれども、間に合わない。

武田　匂いもするのではないですか。

夏目　「手を離せ。匂っているからわかる」というんです。

伊藤　教育課のときは係長ではないのですか。

夏目　部員です。

伊藤　やはり教育課のなかにいろいろ係があるのですか。

■教育課のスタッフ制度

夏目　防衛庁の内局というのは、もう海原さんとか伊藤さんとかでご存じだと思うのですけれども、もともとスタッフ制度というので発足しているものですから、内局というのは係とかそういうものがないのです。みんなスタッフという。昔はファイブハンドレッドスタッフといったかな。要するに五百人のスタッフというのがそもそも発端で、それが部員という名前になっています。実際の仕事は、部員というのは一人ひとりが自分の持分を決めた仕事をやっているのですけれども、日本の役所の仕事というのはそれが無理なのです。やはり係制度があつて、補助的な仕事をやったり、書類を整理したり、そういうのがないとなかなかだめなので、各課に庶務係と称する係はできたのです。事務官がいて。それは実際の実務にはかわらないのです。それから、会計課みたいなところはそんなわけにはいけません。予算一係とか二係とか、そういうのができてだんだん係制度が広がってしまつたけれども、もともとは部員が自分で仕事をして、課長に責任をもつて仕事をすると、しくみでした。正直いうと、コピーをとるのから何からみんな自分でやらないといけません。自分で判断し自分で決めないと、隣に聞かれないといけません。相談相手は上司しかいないのです。おもしろいといつたらおもしろいのですけれども。伊藤　部員の会議というのはあんまりないわけですか。

夏目 教育課の会議みたいなものですか。ときどき課長がみんなを集めてやりますけれども、みんな仕事が違うでしょう。陸と海と違うとか。だから、あつても共通項がないのです。課長がいて、その下に総括部員というか先任部員という部員の親分みたいな人がいて、その人と担当の部員がやるのは年じゅうやっていっているのだけれども、みんなを集めてやってもあんまり意味がなかったのでしょうか。

佐道 では、課長にどういふ人が来るかです。いふぶん変わりますね。

夏目 全然違います。課長もだいたい出向の課長が多かったです。二年で帰れるような。そんな人はもととやる気がないから、そんなのとやる気のない部員が一緒になったら、それはまともな仕事なんかできません。

伊藤 先任部員が大事になりますね。

夏目 先任部員が大事なのですが、先任部員だつて出向の人もいたり、ノンキャリアの人なんか古いからというだけでいたわけです。そういうのはどうしているかというと、庶務の係長の仕事もやるから、旅費の計算とか人事記録の保管とか、そんな雑用が多いので、実際の仕事は担当部員がやる。多少課によってシステムが違うかもしれないけれども、まあ、大体そんな感じですよ。これではいかんというので、やはり防衛庁の人を自分から採用するようにしたし、各省から来る人も二年で帰るといふようなことではなくて、ずっといるような人をとったりするようになったのです。だけど、最初はいないから。伊藤さんなんかも人事院でしょう。人事院グループというのは五、六人来ていました。だから当時は寄せ集めでした。

佐道 この時期ですと、警察関係がいちばん勢力が大きいのですか。

夏目 数が多かったのはやはり警察かもしれないですね。通産、警察。

伊藤 通産も多いのですか。

夏目 通産もいました。人数は警察かもしれませんが。あとは予算のほうに大蔵省から。あとは自治省、外務省。

伊藤 本場に混成ですね。やはりそれは指定席があるわけですか。

夏目 必ずしも決まっていなくても、概ね前の人が来た同じところに来る人が多かったんです。別に決まっていたわけではありません。特別のポストは、外務省の人がつくポストというのは渉外の仕事をするところ、大蔵省は予算関係の仕事というのがだいたいあったけれども、それ以外は決まっていたわけではありません。

伊藤 そういふのは出向で事なかれ主義かもしれませんけれども、ずいぶんいろんな各省庁の人と知り合うチャンスにはなつたわけですね。

夏目 そういう意味ではね。

伊藤 これは後で役に立ちましたか。

夏目 役に立つようないい人はあまり多くはありませんでしたが、まあ、総じて出来がいいというか、これはやはりちよつと違うなど私が思ったのは大蔵省の人です。

伊藤 出来がいいと。

夏目 優秀です。

伊藤 人間性はどうですか。

夏目 そこまではわからない。でも、人間性、人柄は別としてとにかく能吏です。その役所の考え方、思想があつて、いいやつを出そうという役所と、うちでは仕事がないからあいつを出しておけという役所とあるのですね。これは歴然と、仕事をしているとすぐわかります。

伊藤 一所懸命やったのはどこでしたか。

夏目 いい人をよこしたのは、時期によつても違いますけれども、やはり大蔵省です。一人ひとりがいいし、帰った後ものびているからね。あとはどこかへ消えてしまったようなのがいっぱいいる。警察なんかでも。

武田 なんで大蔵がそうなのでしょね。

夏目 僕が大蔵省は立派だと思っるのは、「やはり防衛の仕事というのは大事だ。予算の仕事は変なやつに任せられない」という気持ちがあったのではないですか。彼らは国家意識が非常に強いですから。そういう意味では優秀な人を。今でもそうですよ。局長なんかでよこすのも、大蔵省に戻っても局長にはもちろんなつて、へたすれば次官にもなつたかもしれないという人をよこしました。伊藤 そういう人のなかには、ずっと防衛庁に残っている人もいます。

夏目 何人かは残りますけれども、あのころはほとんど帰りませんでした。そのうちにだんだん防衛庁で採用している人が成長してきたものだから、そういう人がだんだん少なくなりました。例えば衛生の関係の仕事は厚生省から来るとか、調査課の仕事だと警察とか、募集だと自治省、防衛産業の関係の仕事で飛行機とか何かをやるときは通産省と、だいたい来るところが決まっていますけれども、教育なんていうのはあんまりないじゃないですか。

伊藤 文部省からじゃないですか。

夏目 みんないろいろなところから。だから多分、教育課にはあんまりいい人が来ていなかった。そんなことをいうと、当時の教育課の名簿を調べられたりするかな。

佐道 文部省とはあまりセッションがなかったのですか。

夏目 来ていましたけど、自衛隊の教育なんていうのはほとんど文部省とは関係ないですからね。パイロットや整備員の教育とか、スキルレベルのどうかとかどうかで、実際の仕事はこういう人がどのくらい必要かなんてことは、文部省が来てはわかりません。伊藤 それはそうでしょうね。でも、文部省はやはり一応ポストをとっておきたいでしょう。

夏目 そういう気持ちがあったのでしょね。だから減らすときはなかなか大変でした。もうおたくは要りませんという話はなか

なか時間がかかるのですね。

伊藤 向こうも一応人事の動きのなかに入れていますからね。

夏目 ローテーションがあるから。

■ 防衛局に

伊藤 ちょっと防衛局に引つ張られるところを。

夏目 防衛局に引つ張られるのは、久保さんという人が教育課長から防衛課長になってしばらくしてからだと思います。さつきいったように、教育課のなかでちょっとでもやる気があると思われたのか、あいつがいいやといって引つ張ってくれたのが防衛課なのです。

伊藤 そのときに久保さんはほかにも連れていったのですか。

夏目 いや、一人だけです。久保さんは警察から来られて教育課をやったのが初めてですから、あんまり人脈がないですから。あるいはもともとずっと若いときにいたかもしれません。防衛課というのはなかなかしたたかな侍がそろっているんです。防衛庁のなかでも、各省から来ている者でも一筋縄ではいかない。一匹狼みたいなけんかが強くて、なかなか腕力がある。だから暴力一課なんていわれたんです。

伊藤 ここところが防衛庁のなかで中心でしょう。

夏目 中心といえば中心です。親分が親分ですから。海原という局長が隠然としていたわけでしょう。その下の部下も、「俺たちは」と思っているのだからね。正直いうと、当時の同じ仲間の部員連中でも、ほかの課から防衛課の部屋に入るときは、深呼吸して本当に緊張して入ってきたらしいです。何をいわれるかわからないから。

伊藤 それは海原さんですか。

夏目 いやいや、部員もそうなんです。僕らがいるときにはだいぶよくなったのですが、昔、海堀洋平とか海原さんの子分みたい

なものが、相手の胸倉をつかんでけんかをするという。もちろんけんかといっても議論ですよ。そういう課だから、私も、「これはえらい課へ行くな」という気持ちでした。

伊藤 でも、もうそのときには防衛庁でしつかりやろうという気になっていたときでしょう。

夏目 半分はいいチャンスだなど思いました。だけど、上にいる人は大変な人でした。怖くてね。

伊藤 みんな怖いというのですね。

夏目 死んだやつがいるんですよ。

佐道 本当ですか(笑)。

夏目 火事を出したやつもいるしね。夜中にうなされて、ストロボか何かを蹴飛ばして。それはうわさだから知らないけれども、そのくらいのうわさの人なんです。あの人が海外出張なんていっ

て何日もいなくなると、本当にのびのびして、この辺(胸)がスーッとするのは。私はそれから国防会議でまた付き合うでしょう。胃潰瘍で胃を切りましたよ。見舞いに来た国防会議の女子職員に、「俺は何で切ったか知っているか」「お酒の飲みすぎでしょう」「違う。これはストレスだ。あの人がいるから俺は毎日毎日胃がきりきり痛んでなっただ」と冗談でいったら、帰って海原さんに報告した。そうしたらすすつ飛んできて、「俺がおまえの胃を切った元凶だそうだな」と(笑)。

武田 (笑)、そのときは破門にはならなかったのですか。

夏目 半分当たっているのだけどね。いや、うれしそうな顔をしていましたよ。

伊藤 俺の威力もこれだけあるんだと思って(笑)。では、次回を楽しみにしています。(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第2回

開催日：2002年10月25日（金）

開催時刻：15時00分

終了時刻：17時00分

開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

記録者：

有限会社ベンハウス 矢沢麻里

第2回インタビュー質問項目

2002年10月25日

今回は、主に防衛局時代のお話をうかがいたいと思います。先生のお話にしたがって、適宜関連した質問もしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

1

先生は1963年4月、防衛局防衛一課に勤務されます。当初は久保卓也課長でしたが、その後、有吉久雄氏、井口孝文氏、今泉正隆氏へと代わっていきます。それらの方々についてのご印象などお聞かせください。また、有吉氏は、いわゆる「海原学校」ということが話題になるとき名前が上がる方ですが、どういった方だったのでしょうか。それぞれの防衛問題への考え方もあわせてお聞かせください。

2

海原氏の官房長就任に当たり、防衛局長は島田豊氏（65年6月）、宍戸基男氏（67年7月）へと代わっていきます。それぞれの局長について、どのような方々であったのかお願います。

3

先生が防衛局に移られた63年は、米国の原子力潜水艦の寄港問題で国内は紛糾していました。この問題について特に記憶のことはございますか。

4

63年10月、福田篤泰防衛庁長官、大平外務大臣が出席して日米安

保協議委員会が開催されました。この会議の準備等について先生はご記憶のことはございますか。また、このときの会議で日米間の対中国認識の違いが取り上げられていますが、当時防衛庁では中国の脅威、とくに中国の核についてはどのような認識だったのでしょうか。

5

前記の会議で、日本側は米国の対日軍事援助削減が日本の防衛力整備、特に二次防にあたる影響について説明し、援助の継続を要請しています。米国の援助削減問題は防衛庁内でのように受け止められていたのでしょうか。特に60年11月のアイゼンハワーによる「ドル防衛」の指令が出され、63年4月にはチャーチ上院議員が上院で対日援助を批判する演説を行って多くの賛同を得ています。これで米国の援助にあまり頼れないという事態になっていくわけですが、当時の防衛庁内での議論はどのようなものであったのか、お聞かせください。

6

61年7月に二次防が決定されたあと、自民党の国防部会などでは批判がたかまり、やがて船田中、保科善四郎といった人を中心に「安全吉保障調査会」が62年3月党内に設置されます。このころから自主防衛論も再び盛んになってきますが、こういった自民党内の動き、特に保科、船田といった政治家について先生は何かご印象に残ることはございますか。

7

前の質問とも関連しますが、自主防衛論の高揚を背景に、池田内閣の防衛力整備に対する消極的姿勢を修正すべく、63年12月、国防会議議員懇談会は、国防会議幹事会を中心に日本の国防のあり方を検討し始めることになりました。約半年に及ぶ検討の結果、64年7月、さらに広汎に基本問題を今後検討していくことを定めた「国

防会議基本計画本文」をまとめることになったわけですが、この点についてご記憶のことはございますか。

8

先生を防衛局に引つ張った久保卓也氏は、64年4月に福島県警本部長に異動されますが、久保氏は一課長時代に、経済力を向上させて間接侵略を誘わないということに主眼を置く方針から、米国の防衛力増強要請にどう応えるか議論すべき時期であるといったことを述べています。こういった防衛政策の問題について、先生は当時久保氏と議論されたことなどありましたか。

9

64年半ばから各幕僚監部で三次防の検討がはじまり、65年には作業が本格化していきます。防衛一課におられて先生は三次防策定ではどのようなお仕事をされたのでしょうか。また、三次防については、二次防の延長とするか、長期的視野にたつて防衛力整備計画を検討しなおすか議論があったということが伝えられていますが、この点はいかがでしょうか。

10

前記の質問とも関係しますが、三次防は当初、二次防の延長として策定されていきますが、その途中から二次防になかった海上防衛力整備や装備国産化といった事項が強調されていったようです。それは、65年に海原局長が官房長に異動したこと、松野頼三氏が防衛庁長官に就任したことなど、なにか関係があるのでしょうか。また、先生が防衛局に移ってから、福田、小泉純也、松野と長官が代わりますが、これら長官についてはどういったご印象でしょうか。

11

65年には大きな問題として、「三矢研究」事件がありました。こ

れで国会は大変紛糾しますが、先生は当時この問題をどのようにご覧になっておられましたか。またこの問題は、日本の防衛政策についてどのような影響を及ぼしたとお考えでしょうか。

12

67年7月に海原官房長は国防会議に転出します。この人事については、グラマンとロッキードの商戦が背景にあるとか、「海原天皇」の追い落としなど、さまざまなかことが言われており、新聞でも大きく取り上げたものでした。この人事について当時防衛庁内での反響はいかがでしたか。また、海原氏の防衛庁内での影響力について先生はどうお考えか、「海原学校」と呼ばれるものがあったかどうかということも含めてお願いします。

13

68年8月、先生は久保氏のあとの国防会議参事官に異動されます。この経緯についてお願いします。

※今回は以上の点についてお願いします。

■前回のインタビューリターン

夏目 つい何日か前に防衛庁で昔一緒に仕事した人と会ったんです。今こういうことをやっていて、教育課の悪口をしゃべったんだといったら、怒っているんですよ。「教育課だって仕事をしたじゃないか」って。俺が、「何もしてない。株の練習ばかりしていた」といったら、「体育学校をつくったじゃないか」とか、「防衛医科大学をつくったじゃないか」とか。

伊藤 防衛医大はそのときですか。

夏目 まあ、つくったのは多少ずれているけれども、そのときに検討は始めました。それから、オリンピックの支援もやったじゃないかと、自衛官の心構えという、昔でいえば軍人勅諭、そういうものもつくったじゃないかといわれまして、しかられちゃったんですよ。そういわれればそうだなあと。

伊藤 今のはちゃんと記録に入りますから（笑）、それらの人々に対する言い訳にはなりません。

夏目 札幌オリンピックがあつて、初めて自衛隊がオリンピックを支援するというのがそのときだったんですね。それから、自衛官の心構えなんでもをつくるなんていうのは、私は、こんなものをつくったつてだれも読むやつもないし、まして共鳴する人はいないだろうと思っただけで、やはり当時の雰囲気としてはそういうものをつくりたいというので、あちこちの大学の先生とかそういう人たちの意見を聞きながらまとめたのです。今読んでもいいことを書いてあるんですよ。いいことを書いたのだけれども、今そんなものがあるの知らない自衛官が多いんじゃないですかね。

武田（中島氏に向かつて）どうですか、知らないでしょう。自衛官の心構えというのがあるの。

佐道 直接筆を取られたのはどなたでしょうか。

夏目 筆を取ったのは、いろんな段階で取っているのですけれども、最終的には当時の教育局長の小幡さんという運輸省から来られた方です。この方は非常に人格者で、そういうことに熱心な方です。

伊藤 文才もあられたのですか。

夏目 うん、ありましたね。競馬の方の博才もあつたけど（笑）。土曜日になるとドライバーに、「新橋の場外馬券へ行つて、何番と何番を買つて来い」と。局長が局長ですからね、部下が株屋だの……。

■有吉久雄、井口孝文、今泉正隆の各氏について

伊藤 この前久保さんの話を伺いました。また人物月旦みたいな形になるかもしれませんが、口滑らかなところで、その後の課長さんたち、有吉（久雄）さん、井口（孝文）さん、今泉（正隆）さんはどんな方々でしたか。

夏目 久保さんというのは皆さんご存じのとおり、非常に理性の勝った、理論だけで進めるといふ理詰めの方で、私は今まで何人か頭のいい人と付き合つて、大概私よりは頭がいいのだけれども、話をしている頭のいいということでなんとなく圧倒される感じのする人というのが時々いますでしょう。そういう数少ない人が久保さんだったと思います。

伊藤 海原さんはそうではないのですか。

夏目 そういう感じは受けませんでしたね。少なくとも頭がいいとか、理知的とか、理性できちんと理詰めにものをやるといふ印象ではありませんでした。多分に感情の起伏が激しい上に、偏見もあつたし（笑）。もちろん優秀ですよ。今いった言い方をすれば、久保さんのような人とはちよつと。

伊藤 タイプが違うのですか。

夏目 同じような印象を持ったのは宮沢喜一という人です。あの

人の前に行くよ、私も怖気がするのですよ。本当に頭がよくて、人の発言の裏まで読む人と話していると、油断もすきもないというのでくたびれるのですね。そういう人が宮沢喜一であり、久保卓也なんです。そういう感じがした一人でした。もちろん、それ以外の人はばかだという意味ではなくて、みんな私よりはずっと優秀な人だけど、そういう感じを受けた。

佐道 宮沢さんと久保さんはかなり性格は違いますね。

夏目 違うけれども、頭がいいという。

伊藤 それを自負していますか。

夏目 自負しているかもしれませんがね。

伊藤 久保さんが課長でおられる間は結構長かったですよ。

夏目 教育課長でおられて、防衛課長でまた。久保さんはいつ出られたかな。

佐道 六四年です。

伊藤 じゃあ、一年くらい。

夏目 その前に教育課で一緒でしたからね。その後また、久保防衛局長、私は防衛課長で一緒しています。要するに、そういうことで非常に頭のいい方だった。

私は久保さんと有吉さんと海原さんのことについて新聞に書いたことがあるんです。「若き日の私」という。まあ、細かいことは別と、海原さんからは知情意の「意(志)」を教わった。久保さんからは「知(性)」を習った。有吉からは「(感)情」について教えていただいた。知情意をそれぞれの先生に教えてもらったということを書いたんです。それぞれ皆さんによるこぼれたんですよ。ほめたからね。お世辞もあつたけど(笑)。ところが海原さんは、「俺のは他の人より二行くらい少ない」といって怒った(笑)。

佐道 いつも怒っていますね(笑)。

夏目 一所懸命ほめたんですけどね。有吉さんというのは非常に

人の気持ちをよくわかる人で、理屈ではなくて、一緒にのみに行くとか、そういう形で部下を掌握するようなタイプの人でした。非常に大事にしてもらったけれども、人柄がよくて、なかなか慕われた人でした。

伊藤 どこのご出身ですか。

夏目 佐賀かな。

伊藤 いや、そうじゃなくて。

夏目 東京大学で、警察です。有吉さんというのは海原さんのところの子分ですよ。愛弟子です。

伊藤 海原学校の。

夏目 いちばんの弟子ですかね。

伊藤 有吉さんがですか。

夏目 うん。警察へ入ってすぐのころは海原さんのうちへ下宿していたんじゃないかな。

伊藤 よく住めたなあ(笑)。

夏目 警察でも非常にかわいがってもらって、多分、防衛庁へも海原さんが警察から引き抜いてきた格好だと思えます。

伊藤 あとで警察へ戻られるのですか。

夏目 また戻って、例のよど号事件のときには福岡の県警本部長が飛び立つ、あのころの指揮官です。いや、のんべえでね、芸者遊びはするし、豪放磊落で気宇壮大な人でした。

伊藤 そうか、情というのはそういう意味か(笑)。

夏目 まあね、仕事はもう、「おまえに任せるよ」という感じですが、でも、ツボだけはちゃんと見ておられました。海原さんみたいに、微に入り細に入ってはいいませんでした。

伊藤 これはずっとみんな警察ですか。

夏目 みんな警察です。

伊藤 警察の人というのはある種のタイプがありますか。

夏目 いや、みんな違いますよ。井口さんという人は、あまり物もよくしゃべらないし、防衛庁へ来たのは間違いない顔をしないで、あんまり仕事も、熱心に勉強するというほうでもなかったですね。仕事の面でのそういう記憶はありません。今泉さんはわりとやる気があって、一所懸命勉強する人でしたよ。まじめでね。最後に警視總監か何かになった。

伊藤 ああ、あの今泉さんか。

夏目 ただ、この方たちはみんな、有吉さんはそうでもないのですが、井口さん、今泉さんなんていうのはよそから来て急に防衛課長になったでしょう。だから正直いってわからない事が多かったでしょうね。そういうハンディもあったと思いますけれども、非常に遠慮されて、仕事なんかでもあんまりとやかくいわれないで、われわれに任せるようなタイプでした。

伊藤 でも、一応、新しい課長が来ればブリーフィングをやるわけでしょう。

夏目 そうです。やっても、防衛課長のブリーフィングというのは、一日や二日やっつてすぐにわかったというものでもないでしょう。万一新しい問題が起きたときにどう対処したらいいのかという事はなかなかわかりませんしね。だから、そういう意味では非常にしんどかったのではないかなという感じはいたします。

佐道 当事の名簿を見ますと、今泉課長のときには先生が次席です。

夏目 まあ、そうですね。

佐道 今泉さんはあまり細かいことをご存じないわけですから、実質的には先生のところでいろんなことは処理してきたと。

夏目 まあ、そうですね。前任部員というのがいて、それです。それがだいたい課内の意見をまとめて、幕僚幹部の要求なんかもみんなまとめて、庁議や参事官会議で説明もやっていました。資料つくりからみんなやっつたのです。

佐道 課長さんが変わると、課の雰囲気というのはかなり変わりますか。

夏目 いや、あまりそういう印象はないですね。「ああ、また変わったか」という程度で。というのは、課長の存在感というのはそんなに濃くないです。全く新しい人でしたから。前からずっといる人が来れば別ですけどもね。だから、久保さんとかそういう人がいれば多少違ったかもしれないけれども、そうでない方だとホッとしていた。ただし、この時期はずっとこの一つ上に海原さんという人がいましたから、そういう意味ではあんまりのんびりしていませんけれどもね。この人たち（課長たち）もピリピリしていたんですよ。有吉さんはちょっと別ですけどもね。

伊藤 有吉さんですか、海原学校の。

夏目 有吉さんと伊藤圭一さんですよ。

伊藤 ああ、やはり伊藤圭一さんはそうなんだな。

夏目 有吉さんは死んじやっつたんですけど。要するに、最後まで海原さんが心を許し、俺の子分だと思っただけの二人でした。私は途中で破門だから。

伊藤 でも、最初は一応名を連ねていたわけですから（笑）。

佐道 海原—久保関係はこのときはどうだったのですか。

夏目 最初はよかったですけれども、やはり久保さんというのは独特の物の考え方と理論を持っていきますので、海原さんとは合わないんですよ。海原さんというのは専ら批判する人です。久保さんのほうはどちらかというと、いい悪いは別として、こういうふうにもつていこうという方向性を持って何か一つの仕事を進められる方でした。しかし、そのもつていき方が、海原さんの好みに合わないんですね。海原さんというのは、今の自衛隊はだめだということから出発しています。久保さんというのは、だめでもとにかく今あるものを方向づけしていかなければいかんという考えの人ですから、所詮合わないのです。だから、途中で

らやはりちよつと距離をおくようになりまし。ただ、両方とも優秀な人ですから、お互いに腹の中では尊敬はしていたかもしれませんけれども、気分的には合わないという感じでした。

伊藤 前に、施設庁のところですか、まだ自分は社会党みたいな気分でしたという言い方をされましたけれども、それがそうでなくて、防衛問題というのは本格的にやらなければいけないなど思い始めたのは。

夏目 それは、今いった海原、久保、有吉という人たちに仕えて、しかも、周囲を見たときにやっぱりまだまだ防衛についての批判的な考えの人が多い。ましてや一般社会、マスコミを通じて冷たい雰囲気ですよ。そういうときにこの人たちは本当に情熱を傾けて防衛問題、安全保障の問題に取り組んでいた。日本の将来はこうあるべきだということを、自分の考えがいい悪いは別として、少なくともそれぞれがそういう気持ちで仕事に取り組んでいた。それが非常に新鮮だし、私はある種感動したのです。こんな人たちがいるのなら、俺も後をついていこうかなという気になった。さつきの三人に教わったということを書いた時に、私が防衛に足を踏み込んだ一つのきっかけはこの三人でしたということも書いたのです。そういうことでは非常に皆さんの影響は大きかったなと思います。

伊藤 何に書いたのですか。

夏目 『毎日新聞』ですよ。こういう囲みで、あるじゃないですか。それに書いたのです。

伊藤 署名入りですか。

夏目 もちろん署名入りです。

伊藤 検索してみよう。

夏目 評判よかったですよ。書いてある中身は別として、文章がうまいといつて。

武田 文学青年ですから(笑)。

夏目 書いてある中身の人がどうかは別としてね。

伊藤 人か(笑)。

夏目 それはまあ、冗談ですけど。海原さんというのは非常に、能力でまず人を判断するのと、好き嫌いで判断する、それがごっちゃになっていきますからね。嫌いでも能力のある人を引き立ててくれればいいのだけれども、嫌いだととにかくだめでしょう。好きで、かつ能力がなければだめなんだから、難しいですよ。

伊藤 それは難しいですね(笑)。自分より能力があったらやっぱりまずいでしょう。

夏目 いるなんて思っていないんじゃない？

伊藤 (笑)、そうか。

■海原学校

武田 当時から海原学校という言い方はあったのですか。

夏目 いや、ないです。それはしばらく後になってからです。ただ、海原学校とはいわないけれども、海原の子分だというふうに目されるということはありました。例えば、ここには出てこないけれども、丸山昂さんて方がいるでしょう。私の前の前の次官でやっぱり警察の方で、この方なんか海原さんが連れてきたのですけれども、やっぱり途中で離れていった。だけど、その方が防衛庁にいるとき、「おまえは海原一家のあれだから」といやみをいわれたりしたということを書きました。有吉さんなんかは、海原が失脚したために飛ばされたんだとはっきりいわれて。飛ばされたというと変ですけど、審議官から防衛研究所所長になったのです。防衛研究所所長は偉いですよ。三階級くらい特進なんだけれども、本人たちにすれば、内局の局長になろうというときに防衛政策と直接関係ないアカデミックな学校へ行つたようなものからからね。研究所の人には悪いけれども、本人はそう思つたのです。それで辞めたのですからね。海原さんが飛ばされて有吉さ

人も飛ばされたというのが当時のみんなの印象でした。

伊藤 (質問項目の)二番目のところですけれども、海原さんが官房長になって、防衛局長がかわりますね。そうすると、防衛局そのものに相変わらず海原さんの影響力はあるわけですか。

夏目 影響はありました。というのは、官房長になっても隠然たる影響力を持っていましたからね。庁議とか何かで官房長が防衛局の提案に対して必ずいちゃもんをつける。特に島田(豊)、宍戸(基男)というのは嫌いなタイプなんです。

佐道 それは大変ですね。

夏目 宍戸さんは防衛研修所長になったね。

中島 はい。

夏目 島田さんという方も人格者でまじめな勉強家なのだけれども、海原さんの後だからしんどいですね。海原さんが防衛局長のときには島田さんは教育局長になって来られたのです。当時私は防衛局に帰っていましたが、予算か何の仕事か忘れたけど、教育局の案について私が、この案はまったく荒唐無稽でもって現実味がないということをまとめて報告したんです。そうしたら海原さんが喜んで、それを参事官会議でぶっちゃった。島田さんにいわせると、元教育局の部長がね。と、私は恨まれました。国会答弁についていうと、海原さんは国会答弁を楽しんでいるんですよ。きょうは質問がないと、答弁のチャンスがなかったと多少機嫌を悪くして帰ってくるんです。ところが、この島田さん、宍戸さんというのは国会恐怖症みたいなどころがあります。帰ってくるともう、目の前でこうやって(手を振って)も目玉が動かない。いじめられて。

伊藤 海原さんは逆襲するのかな。

夏目 あの人は楽しんでいましたよ。もちろん事前に野党とまああやっているとところもあり、ちよつとフェアじゃないところもあるんです。でも、それも実力のうちですからね。

伊藤 自分でもいつていましたけれども。

夏目 いつていたでしょう。あの人は、与党よりも野党の先生に仲いい人がいっぱいいるんですよ。横路(節雄)とか石橋(正嗣)とか、ああいう人と非常に仲がいい。資料をちよつと見せてね、そのかわり質問は海原の喜ぶような質問をして。

伊藤 だけど、石橋さんとは防衛政策の考え方が全然違うのではないのでしょうか。

夏目 違いますけど、それは表面ではそうだけれども、本当に苦しい場面にはならないですね。相手も立て、こちらも言いたいことは言う。両方でもつてまんざらでもない形で収めちゃう。やはり人間というのはいじめめるタイプといじめられタイプというのがあるんですね。子どもにもあるように。

伊藤 うーん、まあ、わかりますよ。

夏目 島田さんとか宍戸さんという人はいじめられタイプなのでしょうね。

伊藤 それはかわいそうに(笑)。

夏目 確かにちよつとかわいそうでした。ま、海原さんの後だから余計いかなのでしょうけれども。

佐道 海原さんは部外とか政治家の方にも、あの人は野党と通じているみたいなのうわさはあったのですか。

夏目 ありましたよ。だから松野頼三長官なんか、「おまえは何だ」といわれたこともありました。

中島 岸信介さんとはあまり合わなかったというふうに海原さんが以前おっしゃっていたように思います。

夏目 あの人はみんな悪口を言うから、本当にどこまで親交があつていつているのかよくわかりませんが、そんなに合わないこともないと思います。第一、合う合わないというほど付き合いがあるわけじゃないんじゃないかね。

伊藤 位置が全然違うものね。

夏目 まだ岸さんのころはそんなに物をいえるような立場にいなかったんじゃないですか。

佐道 島田さんとか宍戸さんは本当にまじめな、正面からという感じで。

夏目 非常に勉強家だし、国会の前の日、質問があると遅くまで勉強されるタイプでした。

伊藤 そういのは答弁資料。

夏目 答弁資料をまずわれわれがつくるでしょう。私が局長のときは、「適当につくっておいてくれ」といつて帰っちゃうんですよ。夜遅くなりますから。だけど、この方々はまじめだから、自分が見るまで信用できないものでね。もつともこちらが信用されていないのかもしれない(笑)。ちゃんと残っていて、見て、勉強して、ここはどうかという関連質問をわれわれにして、それで納得して帰られたのです。勉強して国会に臨んでいた。だから答弁にはそつがないですよ。決められたことはきちつと言うし、政府の方針に沿わないことを口走るようなこともありませんね。

まあ、無難な答弁をされておられました。

伊藤 いわゆる官僚答弁というやつですね。

夏目 うん、ある意味ではそうですね。

佐道 海原さんは、「国防の基本方針」をお書きになったり、一次防、二次防を強引につくられたりして、おそらく「われこそ防衛政策」みたいに思っておられる方だと思うのですけれども、島田さんや宍戸さんは海原さんが敷いた路線に対抗して何かご自分でというところはおありだったのですか。

夏目 余裕がないですね。何か言うとおぶされちゃうから。事実そういうこともありましたけど、結局、海原さんがつぶしちゃうんです。それはもう、海原さんというのは破壊力は大了たものですよ。

伊藤 海原さんは社会党の代議士たちと付き合いがあったという

ことですけれども、自民党はどうですか。

夏目 自民党にもけっこう顔の利く人がいたのですけれども、ただ、自民党というのは派閥みたいなのがあったりして、違う先生と仲よくするとこっちの先生があんまり気に入らないというのがありますでしょう。だから、あんまり表立ってこの人と仲よくするということを言い出せないですよ。

伊藤 危ないんですね。

夏目 かえって足を引っ張られることになりますし。だから、結構それはあつたと思います。

伊藤 防衛局長だとしても政治家との付き合いが必要になつてくるということになりますね。

夏目 否でも応でもなりますね。特にだんだん政高官低というか、政治家のほうが元氣よくなりますと、あらかじめ自民党の要所要所には前もつて説明をして了解を得ておかないと後々うまくいかないことが多いものですからね。

伊藤 俺は聞いてないと言っ。

夏目 社会党やそういうものに対して過剰なサービスをするのもいけませんしね。ここまではいいますねとか、ここからはいわなとか、多少そのへんのこととは人柄によって違いますけれども、そういうことは了解をとる。そういう意味ではやっぱり自民党の先生とも仲よくしないと、なかなか。行って門前払いを食うようでは相談もできませんからね。

伊藤 一応、自民党の領袖たちにしたつて、防衛局長というのは大事だと。

夏目 大事だし、大臣はそう細かいことをいつでも知っているわけではない。だから防衛局長のところをしっかりと押さえておかないかんし、あいつらから相談を受ければ、まあ、俺が了承しているということでもいい顔もできたんじゃないですかね。アメリカもそうですつてね。特にだんだん日米関係がいろいろ……。この

当時はそんなことはなかったのですけれども、だんだん日米関係というのが難しくなると、やはりアメリカとの事前調整が必要ないことがふえてきますよね。そのときにはアメリカといつでもツーカーで仕事ができないと、電話一本で何だかんだいえるようになっていないと仕事がしにくいですね。別に彼らの言うことを聞くという意味ではなくて。

伊藤 先生は防衛一課勤務というのは結構長いのですか。

夏目 長いですよ。私は『こんな幹部は首にしる』という本をみんなに送り届けたくらいだから。

佐道 そんな本をお書きになったのですか。

夏目 いや、自分で書いたんじゃない。そういう本を売っていたので。そこには、「部下をあまり長く使うな」と書いてある。そこに付箋をつけて、見せてやった。

佐道 過激な部下ですね(笑)。

夏目 だってね、これを見たってそうでしょう。海原局長、島田局長、宍戸局長でしょう。課長にいたつても、久保、有吉、井口、今泉でしょう。もうくたびれますよ。

佐道 六八年八月に国防会議に行かれるわけですか。

夏目 だいたい二年くらいで変わるのが役人の常識じゃないですか。

佐道 五年以上いらつしゃいましたね。

伊藤 防衛局第一課というのは主務は何ですか。

夏目 時代によって多少違いますけれども、当時は防衛力整備が主とした仕事です。

伊藤 それを企画立案するということですか。

夏目 ええ、企画立案ですけれども、本当の原案は陸海空の幕僚監部で作るんです。防衛庁の計画制度というのは、各部隊から上がってきたものを幕僚監部で整理して、「今年はこれとこれ」というふうに整理するわけです。それを陸上自衛隊のやつは陸上幕

僚監部でまとめて防衛局へ、海は海、空は空、それぞれで持つてくる。技術系も持つてくる。そういうふうには各機関がまとめたものを防衛局へ持つてくる。それを防衛局で総括的に見て、そのときの一般情勢、財政事情、そんなことを考えながら、「これはやめておこう」とかいう判断をしていくわけです。それで防衛庁としての計画をつくりあげていく。

伊藤 それは、例えば法の整備が必要な場合は立法になるし。

夏目 もちろん法律改正が必要なら法案整備をするほうへ、これは法律整備が必要だよ、法改正が必要だよということをいつてやるわけです。中身はこうだよと。

伊藤 それから予算。

夏目 経理局には、これをやるためには幾らくらいの予算だということをしてやる。ただし、防衛局が人件費の計算から何からやったのでは大変なので、主要項目というか、新しく整備をする、船をつくる、飛行機をつくるという、そういう大物についてはやるけれども、毎年の人件費とか宿舎の整備に幾らかかるとか、そこまではやりません。いわゆる目玉みたいなところだけはチェックしている。あとはもう、毎年毎年そんなに変わらないですからね。人件費なんかは決まりきったものですし。そういうものは経理局がやる。そういうふうにしていました。

伊藤 そうすると、日常的には非常に多忙だと。

夏目 多忙です。年じゅうですからね。それは予算のときだけじゃないんですよ。そのほかに防衛計画というのがあります。防衛計画というのは何かというと、戦争のときにどうやって対応するか。それも当時は防衛局の一課です。いわゆるウォー・プランですね。片方は整備計画で、片方はウォー・プランです。まあ、戦争に現実性があるかないかは別として、少なくとも自衛隊である以上、そういうことがあったときに自衛隊はどのように対処していくか。米軍との関係はどうしていくかということ、一応、そ

れなりにその時代に応じてつくっていったわけです。

伊藤 それは文書になるわけですか。

夏目 文書になる。防衛庁でもっともグレードの高い秘密文書になる。

佐道 米軍トップなどとも日常的にかなり連絡をされておられたのですか。

夏目 それはまた後から出てきますが、問題が一つありますけれども、米軍ともちろん連絡していました。

伊藤 米軍と連絡するというのは防衛局一課なのですか。

夏目 防衛局もやるし、陸は向こうの陸軍ともやるし、海上自衛隊は海軍とやるし。

伊藤 いろんなレベルであるわけです。

夏目 パラレルにいろんなレベルであります。ただ、在日米軍司令部というのがあって、陸海空は在日米軍司令部を通すんです。これはかつたるいんですよ。現地部隊ですからね。日本でいえば、例えば悪いけど、九州の方面総監か何かとしゃべっているみたいなものだから、やはり中央の事情と政策がストリートにこないし、わからない。そうするとやはり防衛局でペンタゴンと直接話をしなきゃ困るような事柄も起きる。そういうことはあります。でもやっぱり、そういう段階をすつ飛ばすということはなかなか難しいですね。陸海空は在日米軍を飛ばしてペンタゴンと直接ということではできにくい雰囲気ですから。

伊藤 防衛庁としてはそれはできるわけでしょう。

夏目 だからそれは防衛局がやらなきゃいかん。

伊藤 定期的なルートというのはあったわけですか。

夏目 ありますよ。(質問項目の)四番あたりにそういうことが出てきますけれどもね。在日米軍というのは太平洋洋軍の指揮下でしょう。ハワイ。そこもまた通してかなければいけない。かったるいですね。政策マターみたいなのは彼らと話してもツーカー

とはいかない。基地問題みたいな直接日本にいる問題はいいのですけれどもね。

伊藤 国防政策なんかになったら部隊ではしようがないでしょう。夏目 そうですね。

■米国の原潜寄港問題と日米安保協議委員会

伊藤 (質問項目の)三番のことですけれども、原潜の寄港問題のご記憶はいかがですか。

夏目 原潜の寄港というのはもつと後じゃないかな。

伊藤 いや、何べんもあるのですけれども。

夏目 昭和四十年ごろだった気がするな。

佐道 このときにライシャワーが大平さんに寄港を許してほしいということでも申し入れをして、それでいろいろやり取りが始まったと思うのですけれども。

夏目 そうでしょう。実際に来たのは確か昭和四十年くらい。佐世保に来たんですよ、確か。だけど、私はそんなに記憶にないですね。世間では騒いだけど、防衛庁のなかでこれはどうのこうのというのは。当時、そういう問題は一切防衛庁は直接タッチしていないんですよ。外務省なんですね。だから、私が防衛庁にいて原潜問題で大騒ぎしたという記憶は一切ありません。

伊藤 日米安保にかかわる問題というのは外務省と。

夏目 当時はほとんど外務省なんです。私も文句をいいたいところもあったのですけれども、それは後で言うとして、日米関係で当時のいちばん大きな問題は、日本の自衛隊がどうこうという問題ではなくて、原潜の問題とか、基地問題とか、そういうものが主であって、それは主として外務省が対応する形になったものだから、防衛庁は直接それでどうのこうのと振りまわされるようなことは一切ありませんでした。

伊藤 いいか悪いかは別としてですね。

夏目 ええ、いいか悪いかは別。四番に出てきますけれども、当時、日米安保協議委員会というのが開催されて、この際に中国の脅威がどうのこうのとか書いてあるけれども、中国の脅威なんていうものは真剣な問題として取り上げたのではなかった。もともとこの安保協議委員会というのは、確か一九六〇年、昭和三十五年にできた。これは、今は違いますが、当時は外務大臣と防衛庁長官と、相手は大使と在日米軍司令官です。格が違う。だから、防衛問題がここで議論されたのはずっと後までないんです。主として基地問題。基地を返還するとか、あるいは原子力潜水艦が寄港するという、基地問題に関連していることが主として話し合われて、もちろんそれなりに中国の問題についても一般的な説明としてはあったかもしれないけれども、それについて突っ込んだ議論をしたなんていうことはありません。

中島 この時代のことでも若干関連するのですが、一九六三年の春ごろから、日本側とアメリカ側で防衛研究会という研究会が開かれています。デイフェンス・スタディ・グループとアメリカの文書では出てくるのですが、防衛庁では海原さんと、それから外務省と、それからアメリカのほうと。ここで、主にアメリカ側の兵器を買ってほしいという折衝がかなり行われた記録が残っています。

夏目 それはあるんですよ。だけど、表立った会議ではなくてね。中島 それは水面下で行なわれて。

夏目 水面下というか、海原さんがアメリカへ行ったりしたときにそういう話があるとか、向こうからだれかが来てそういう話をするとかということはあるんですよ。それはどうしてかということ、やはりアメリカもいろいろ苦しい面があったから。

中島 国際収支の問題ですね。

夏目 そして、日本は日本で国産化しようという意欲が非常に強くなってきたんです。例えば飛行機にしろ、ナイキとかホークとかいうミサイルがありますでしょう。あれも国産化しようとかし

ないとか、そういうことが国内で起こってきた。そういう時期だったと思います。それは多少あったかもしれませんが、それはそれだけの話でして、その後、三次防か何かでそういうものがだんだん表へ出てくるわけです。

伊藤 安保協議委員会なんていうものが行われるときには、準備ということですね。

夏目 外務省の仕事です。

伊藤 外務省ですか。

夏目 あとはこの下部組織みたいなものがあって、基地問題があるときは施設庁長官が多少タッチしたのだと思います。

伊藤 では、防衛一課としてはあまり。

夏目 私はこれに何か仕事をしたという記憶はまったくありません。

佐道 ここで何か議論をされたということが防衛局のなかで何か話題になることも。

夏目 ただ、外務省から会議の議事録みたいなものが来て、それを読むくらいです。それでとんでもないことを書いてあるわけではないし、きわめて常識的なことしか書いてないので、「ああ、こんなことかい」というようなものでね。

佐道 外務省、この場合は北米局だと思えますけれども、北米局との連絡というのは防衛庁サイドとしては防衛局がとるわけですか。

夏目 防衛局が主です。当時、国際参事官というのもいたのですけれども、今の国際参事官と違って、当時の国際参事官というのは儀典要員みたいな、まったく涉外。外国のお客さんが来たときに何だかんだとか、そんなことばかりやっていて、まったく実質的な仕事にタッチしないからね。その後、われわれが局長になったころは、国際参事官というのはやっぱり国際情勢について政府委員として国会でも答弁しなければいかなんということをやったけ

ど、当時は涉外、儀典要員みたいなものでした。だから防衛局でしたね。しかも、これも人によつてです。海原さんみたいに好きな人は年じゅう行ったり来たりしました。

伊藤 外務省とはよかつたのですか。

夏目 あの人はほかの役所とはいいいんですよ。大蔵省でも。悪いのは防衛庁の中だけです。

佐道 中と一部政治家ですね(笑)。

伊藤 松野さんか(笑)。

夏目 増田(甲子七)とかね。

伊藤 増田さんか。

夏目 大蔵省なんか、いちばん信頼をおいたのは海原さんですからね。それは無理もないんですよ。仕事の中身がわかっているから、自分で行つて説明するんです。大蔵省の部内の会議でも。ほかの局長さんはこんな芸当はできないですね。それを俺が説明してやるなんてね。海原さんというのはそういうところが立派だし、英語もできるから、外務省とアメリカの会議でも出て行つて英語でどんどんいえるでしょう。ほかの人はなかなかそうはいきませんでしたもののね。そういう意味では海原さんというのは異能の士であることは間違いない。

伊藤 安保問題でも外務省に指導権をとられているわけですから、これについては不満はあつたのですか。

夏目 正直いいますと、当時は不満なんかありません。安保問題というのはもともとない。まあ、「ない」という言い方はちよつと乱暴なのですけれども、アメリカととやかく言うような防衛問題というのはほとんどないんですよ。アメリカで一方的に援助してくれるのですから。一次防も二次防もみんなアメリカの援助で出来上がってきたわけです。三次防も結局は二次防の延長みたいな形になつたけれども、防衛庁としては、三次防なんだからそこそこ意味のあるものにしようということ、斬新なことも考えた

ことは考えたんです。しかし、海原さんは当時、「何をいつている。まだそんな段階ではない。まだまだあと五年や十年は今までどおり營々と部隊建設、基礎的なものを着実につくつていく。アメリカから教えてもらい、ようやく訓練できるようになつた。まだ戦える部隊を考えるなんて早い」という考えです。結局は三次防も二次防の延長みたいな形になつたのは海原さんの主張ですよ。事務的には、三次防というのはもうちよつと違ったものをつくらうと思つていたんです。まあ、国産化みたいなものが入つているのは、多少わずかに。それともう一つは、三次防で、一応、局地戦に有効に対応しようと、そういうものを初めて入れたんです。要するに戦える力を意識したものにしようという意欲が出てきたんです。海原さんはそこでは妥協したのでしようね。とてもそんなものできるはずがないじゃないかという気持ちがあつたのでしようが。まあ、実際問題そうでしたね。二次防なんて、例えば弾薬備蓄一カ月と書いてある。しかし、一カ月どころか三日もない。海原さんに言わせると五分もないと言つ(笑)。

伊藤 (笑)、これは何べんも聞かされましたね。

夏目 聞くでしよう? 五分というのは、日本中の機関銃が一斉に火を噴いたら五分でしようけれども、それは現実味としてはあの人の言うほうがおかしい。どこの国だつてそんなのだけれども、そういわれるとショックなものでね。いづれにしても、一カ月の備蓄というのはできません。弾薬の備蓄というのはそんなに簡単なものではないので、やはり設備から何から要るし、ましてや機雷や魚雷の備蓄というのは相当金がかかるのですね。すぐ使えるものではないので、調整できる前の段階にしておいて、当時は水蓄なんていつて水の中へつけておくような備蓄もありましたからね。だから、海原さんから、「戦える自衛隊ならそういうことをやつてあるのか」と聞かれると、「やつてありません」「それじゃあまだ早い」と、こういわれるのも無理もないのです。しかし、

一つの姿勢というか心構えとして、自衛隊で十年も十五年もかかってまだ何もないのであるからというので、そういう文句は書きたくないのですね。あの人はそういうことを嫌うんですよ。「鉛の兵隊をつくってどうなる」と言う。海原さんの言うとおり、三次防も結局は二次防の延長になっちゃったのです。

アメリカとの関係というのは、その後大臣同士、国防長官と国務長官が入るようになったのだけれども、最初はこんな状況ですから、基地問題だけが主とした議題です。ここからあと何年もずっと。実質的な仕事の防衛問題の話というのは、SSCという高級事務レベル協議。

佐道 それができるから。

夏目 それは（昭和）五十一年くらいでしょうかね。ようやく実質的な防衛問題についての直接的な話し合いができるようになってきたのはそのころからですよ。

佐道 防衛庁と外務省が定期的に協議するというようなことはこの当時はありません。

夏目 定期的にはありません。

佐道 それではやはり、何か問題があるときとか、人によると。

夏目 むしろ施設庁の基地問題なんかのほうが年じゅうそういう会合を持つ機会があります。縮小とか返還とか、そういうことが年じゅう行なわれましたから。事故があったりすれば、すぐそっこのほうで問題になるし。

伊藤 そうすると、アメリカにとって自衛隊というのは大した意味を持っていないという。

夏目 まあ、カネとモノを供与してやるよというだけのことです、それがだんだん向こうがきつくなってきた、日本で自前でやってくれないかという雰囲気になってきますよね。日本はこれを機にして自主防衛とか自前防衛とかということが声高にいわれるようになる。そういう程度の話で、そのころがそんな話を持ち上

がったりしていた時期だと思います。

■米国の対日軍事援助削減と日本の防衛力整備

佐道 まさに今のお話なのですけれども、質問の五番目になりますが、アメリカがドル防衛の折で日本にこれまでのような軍事援助を出さないという話になってきて、先生がさつきおっしゃったように、一次防も二次防も結局アメリカの援助にかなり頼って構成していたわけですから、あとで困るということになると思われるのですけれども、これは防衛庁の中ではどういうふうな。

夏目 アメリカからドル防衛の指令が出されて援助が急に減るとかということはなかったですよ。むしろ日本としては、今いったように、アメリカの古いものばかりもらっている時期ではなくて、これからはやはり自分のところをつくっていかないといかんという雰囲気がある強くて、それを渡りに船みたいに使ったので、アメリカの援助がなくなるとは大変だとは思っていませんでした。アメリカも必要なことはやってくれましたから。その後だって、例えばパイロット、航空自衛隊のF104にしてもミサイルにしても何にしても、供与するものは供与しているのですね。ただ、無償では供与しなくなりました。金だけとはなるようになりました。パイロットの養成や整備員の養成にしても、向こうの本国に何百人も連れて行って教育してくれるわけです。こちらの要求するものはみんなやってくれる。ただ金だけ出せばいい。ドル防衛というのは防衛力の中身ではなくて、多少日本も一人前になったのだから、後進国のアフリカや東南アジアのように何でもただだというわけにはいかないぞという意味でのドル防衛というのはあったと思います。それはそんなに防衛庁に対してインパクトがあった問題ではなくて、むしろそれがあたりまえだという雰囲気がありました。だから三次防の文書の中にも、多分、ミサイルやFXの国産というのは入っていたはずですよ。

佐道 そうですね。三次防の中に初めて国産をというのが書かれていますから。

夏目 実際、実質的な国産なんて、まだ言うべくして不可能な時代でしたけれどもね。

伊藤 海原さんは国産という問題について非常に批判的といえますか。

夏目 できないからなんですよ。

伊藤 できるわけがないと。「国産の定義をいえ」なんていつていましたよ。

佐道 「何割あれば国産なんだ」と。

夏目 何割というのでもいいかげんなのだけれども、とにかく六割あれば国産だとか何とかいうのだけれども、肝心なところができないのです。今だつてそうです。今というのは、私はもう辞めてから十何年たつけれども、戦車の大砲があるでしょう、74戦車。今の戦車の一つ前。その大砲ですら輸入なんです。たかが大砲ですよ。

伊藤 日本の技術ではだめなんですか。

夏目 だめなんです。L90という高射機関砲もスウェーデンか何かでしょう。

中島 そうだと思えます。

夏目 要するに、ミサイルや本当に精密なものができないというのならまだわからんでもないのだけれども、もつとも古典的な兵器である大砲すらまともなものでは日本ではできないのです。

伊藤 それは技術水準の問題ですか。

夏目 やっぱ日本の得意な分野とそうでない分野があるのでですね。だから、本当は持つてきてデッドコピーみたいにするまま分解してつくればいいのかもしれませんが、できませんしね。船だつて肝心なところはみんな向こうからでしょう。飛行機の値段が高くなるというのも、胴体ではなくて、積んでいる精密機械が高く

なる。管制装置とかそういうところはみんな輸入ですからね。飛行機は日本で作るかもしれないけれども、そういう意味で国産化なんておこがましいよと海原さんが言うのは正しいですよ。それから金がかかるんです。べらぼうに高いんです。それは武器輸出三原則が響いているんです。売り口が自衛隊しかないから。

伊藤 だから個数が少ないわけですね。

夏目 大量生産できないのですね。だから、どうしても高値になつてしまう。あれを東南アジアか何かに売つたらいいんですよ。そうしたら安くになります。それが軍国主義の何とかとはならないと思うのですけれどもね。むしろ、兵器を通して友好関係を樹立するというのが考え方を換えればいいんです。

話はちよつと変わりますけれども、私は防衛大学校へ行つて、シンガポールやタイから学生がいっぱい来るんですよ。喜んで帰ります。帰るとだめなんです。日本語を忘れてしまうのです。それはその国と日本の中で仕事のつながりがないんですね。アメリカやイギリスに行つた学生は年じゅう関係があるんですよ。武器をもらつたり買つたり、いろいろの交流関係があるから、やつぱり友好関係を持たざるをえない。ところが日本というのはそういう軍事関係では縁がない。だから、しばらくつと日本にいたことさえ忘れちゃう。無駄な投資になつてしまふんですね。何年間かいて喜んで帰るのだけど、じゃあ、それで非常に親日的になつたかという、日本に行つたためにアメリカに行つたやつよりも損をしたというような意識が先に立つちゃつてね。だから、武器なんていうのは売つて、むしろそういう国と仲よくして。どうせ日本がやらなければ北朝鮮やイラクがやるんだから(笑)。

佐道 現にそうなっていますからね(笑)。

夏目 日本がやつたほうがよかつたかもしれないですよ。

佐道 武器が行けば、それを使う訓練ということが出てきますしね。

夏目 そう、そういう意味でいわゆる友好関係ができるじゃない

ですか。ある意味で非常にアジアの安全保障につながるのではないかとさえ思うのですけれどもね。防衛産業界が、そう思うのも無理ないと思う。それができないから国産は非常に割りの合わない、高いものになる。できないものではないですからね。

伊藤 防衛産業の会社の団体ができますよね。こういうのは国産を盛んに言うわけですけれども。

夏目 言うでしょうね。金をとればいいんだから。高い金を出せばいいわけですからね。彼らは別に赤字になったり損をすることをやろうというのではなくて、少なくともいいんですよ、単価を高くすればいいんだから。ところが、一方に安くもいいものがあると、「うーん、国産か……」という気持ちになるのも無理ないですね。例えば私が防衛局の部員のときにロッキードF104という戦闘機を追加生産しようといったとき、アメリカはF102デルタダガーという戦闘機、ちよつと古いのですが、これをバーゲンでもって百機くらいべらぼうに安く持つていいよというのです。海原さんもそれにちよつと食いついたことがあります。結局、航空自衛隊はそんな中古品はいやだと言うので、断つて、高い104の追加生産に決めたのですけれども。それは自衛隊の要望だけではなくて、やはり国内の防衛産業の育成とかいろんな面からそういう判断になるので仕方がないのだけれども、金だけで見たら輸入のほうがよっぽどいいです。何をやるにしても、いいものが安く。今は整備にもそんなに問題はありませんし、ブラックボックスをボンと変えればなんぼでもいいですからね。だから、国産化というのはなかなか言うべくして不可能ですね。佐道 今もずいぶんその議論があつて、自衛隊が持っている装備と同じレベルの武器がこんなに安く買えるじゃないかという本が結構出たりしましたね。

夏目 出ますよ。アメリカはまた、向こうの防衛産業の育成のためには売りたいですよ。だから非常にややこしい交渉になります。

海原さんは、T38、F5というどちらかといえば軽い戦闘機が好きなんです。価格も安いんですよ。ちよつと程度は悪いんですけどもね。でも日本向きだということです。今から大学生みたいなものをやったつてだめだ。高校生とか中学生向きの戦闘機を使つたほうがいいよというので、彼はT38ばかりいうものだから、あれは伊藤忠かどこかが押していたので何だかんだいわれたですね。それが彼が飛ばされた理由の背景にあるんじゃないかな。

伊藤 松野さんがいったのはそれじゃないかな。

夏目 そうですよ。

伊藤 「手を組んでいるんだ」なんて。佐道 基本的に防衛力整備の問題も防衛一課のほうでやりなるときに、どんなものを入れていくかというのは装備局の問題がありますよね。そうすると通産省の関係とも絡んでくるわけですが、通産省の方との接触とかそういうことはありましたでしょうか。

夏目 ありましたけど、例えば何か一つの装備品が欲しいとなつたとしますね。輸入もある、国産もある、いろんなものが候補になるとなつたときには、日本の自衛隊としてどういうものがいちばん必要なのか、要求性能はどうあるべきなのかということをもまず考えるわけです。それは防衛局が考えます。同時に各幕の防衛部が考える。こういうものでないと。じゃあ、これに合うものはどれだ。例えばアメリカにはこういうものがありますよ、スウェーデンにはこういうものがある、イギリスにはこういうものがありますよ。ではどれがいいだろう。国産化したらどうだろう。その中でどれをとるのがいちばん日本にとって最適かという話になる。そういうことを議論する段階で、多少、通産省や防衛産業界あたりから、国産にしてくれとかいう話が上がってきたり、それはありますね。政治家も含めて。だけど、そういうことには防衛局は一切耳を貸さないというのが伝統的でした。だから、業者も防衛局

へは来ないですよ。私は七年もいたけれども、一度も業者と飲んだことがないもの。装備局へはいっぱい来たようだけど。装備局とか調達実施本部というところへは行く。防衛局へは一人も来ないですね。それはそういう伝統ができています。だから、海原さんだつて絶対にそれはもらつてないと思います。もらつたらあんなにおおっぱりに言うはずがないもの。あの人の性格としてそんなことができる人ではないけれども、あの人はいいと思つたらとことんいいと思うものだからそれを言うでしょう。それに反対するやつと賛同するやつと、足を引つ張つたり、持ち上げたり、そういうのがあの人のマイナス面だったのでしょうけれども、絶対にあの人は悪いことはしてないと思います。どこかどつてるんでいるなんていうのは言いがかりだつたのではと思います。

佐道 装備局というのは局長さんは基本的に通産からいらつしゃるわけですね。装備局の下の人たちは、これはもう全然関係ない。夏目 部下のほとんどの人は防衛庁の人ですね。ところどころに通産省から来た人はいますよ。でも、別にこれをどうしろこうしろと決定に影響を与えるようなことはない。装備局も決まろうしろということはいけません。やはり自衛隊の自主性、自衛隊が何が欲しいか、どういうものが欲しいかということを見ればできませんからね。

伊藤 機種選定の最終的なところはどこなのですか。

夏目 選定は防衛局です。もちろん意見は聞きますよ。だけど、最終決定は防衛局です。

伊藤 そうしたら防衛局に来そうなものですね。

夏目 まあ、だから勉強もしないといかんですね。例えば飛行機を何機つくりたいといつて、もちろんどういふ飛行機がいいかという勉強もさることながら、何機つくるかといつたつて、この飛行機を何年使う、耐用年数はどうだ、訓練で落ちるのはどうだ、そういうことまでみんな自分で勉強して計算しなきゃいかん。私

なんかはやらされていたので、今でもできますよ。減耗率がどうか。当時アメリカやドイツの104がやたら落ちたんですね。中島 そのようですね。

夏目 だから、あんまり甘く計算すると飛行機が足りなくなつちやつても困るのだけれども、しかしあんなに落ちたものでは日本だと国内政治問題になる。それでずつと圧縮したのだけれども、結果的には本当に日本の飛行機は落ちませんでしたね。そういう計算まで防衛局の部員はしなきゃいかん。そこまで要求されるので、「なんでこんなに要るんだ」というのに答えないといけないし、大蔵省へ行つても説明できないといけませんから。

伊藤 大蔵省にはだれが行くのですか。

夏目 陸海空の人も行けば、防衛局も行くし、そのときの問題によつて、必要な人が呼ばれば。

伊藤 局長が行くという。

夏目 局長は相手が主計局長とか主計局の次長が主な相手でした。主として実質的な審議をするのは主査、それから大事なところは主計官がやるくらいです。上はもうほとんど下から上がってきたのを丸のみですからね。結局は課長とかそのへんが中心になりますかね。制服でも、主計官のところに行くときはちよつと相手を立てて各幕の部長ぐらいが行くとかということはありませんけれども。

伊藤 夏目先生が次長くらいのときには大蔵との交渉をやられましたか。

夏目 課長のときも部員のときも行きましたよ。

伊藤 そうですか。大蔵のほうもかなり勉強しているのですか。

夏目 大蔵省は皆さん勉強しますよ。主査以下はこちら以上に勉強するくらいに勉強しています。これは本当に勉強しますね。偉いものですよ。だいたい大蔵省の主査なんていうのはノンキヤリの人が多いのですけれども、この人たちが勉強家です。係長とかね。

伊藤 防衛庁なら防衛庁にかかわっている人というのはやはり長

く。

夏目 長くいるのですよ。主計官から上はかわりますけれども。

伊藤 そうするとやはり蓄積されますね。

夏目 蓄積されるから、こちらが変わったりしたら向こうのほうがよく知っていることになります。「去年はこうだったでしょう」と、幾度もありますよ。おもしろいのは、104を追加生産するときに、これだけではどうしても必要なだと、104という飛行機がいかにいい飛行機であったかということも説明しに行く。ところが整備担当の人たちはこれだけ整備なり不具合の改善に金がかかるの説明にいくと、いかにだめかという飛行機の説明になっちゃうんです。ま、オーバーにいえばね。それぞれ正しいのだけれども、重点の置き方と声の大きさがそれぞれ違うから、両方も聞いていると、「なんじゃ、これは」ということになる。

伊藤 そうでしょうね、聞かされたほうはそういうことになりますね。

夏目 そういう矛盾をつかれますね。

佐道 一方で、先生は五年以上防衛局防衛一課にいらつしやつたわけですけども、この間に制服組との交流もかなり。

夏目 ありますね。もちろん担当部員はそれぞれ陸海空に分かれていますから、陸の部員は陸上自衛隊のことを一所懸命勉強しますし、陸と仲よくしていかない仕事もできませんからね。それぞれの部員は年じゅう行ったり来たり、朝から制服の人とはやっていますよ。

伊藤 先生は空だとおっしゃいましたね。

夏目 若いときはね。後半は総括部長というか。こうなるとみんな直接は相手にしてくれない。陸海空みんなだから、たまに酒を飲むときに敬意を表して呼んでくれるぐらい。

佐道 床の間に座れという。

夏目 そうそう。仕事はみんな担当部員のところに行きます。そ

のかわり、担当部員は総括部員と課長にはきちんと言明できないと、「ばかやろう」とか「ふしあな」とかといわれるんですよ。

伊藤 それはまた相当勉強して理論武装しないと大変ですね。

夏目 それはそうですね。彼らも制服の前であんまりみつともないことを言うとはかにされるから、一所懸命に勉強しますよ。

伊藤 しかし、制服に助けてもらわないと勉強もできないじゃないですか。

夏目 最初はできませんね。で、そういうことをきちんとする人は制服から尊敬されます。難しいことになると、「おまえ頼むよ」というのではだめです。大蔵省へ行ってもね。だから、やはり人間というのは勉強して何か自分の考えというものを持つていないと。

伊藤 ただ勉強しただけではしようがないですね。自分で意見を持つていなければ。

夏目 それはそうですね。ただ、制服はやはり軍事的ニーズからいいと思うものはいいし、悪いものはだめだし、こうありたいと思うものをもつてあたりまえなんです。それを無下に否定はできません。ただ、それをほかの面から見て、日本の政治情勢でそういうものはいかがかとか、財政事情から見てどうか、国民感情から見てどうか、いろんなことを考えなければいかん。要は優先位と選択の問題ですからね。

中島 各幕から来たリクエストの調整をされるのは、統幕ではなくて、やはり内局のほうでやられるわけですね。

夏目 統幕は全然やりません。今は知りませんよ。

中島 今も多分そうだと思います。結局それは、制服サイドでの調整がなかなか難しいということなのでしょう。

夏目 やりにくいんでしょうね。統幕といつても、みんなそれぞれ陸海空の洋服を着ていますからね。だから、統幕はみんな洋服を着替えればいんだよ。

中島 四つ目ですね。

伊藤 統幕の制服か(笑)。

夏目 アメリカへ行くとパープル族というのが有るんです。なぜパープルかといったら、陸海空は日本もアメリカも似たような色です。あの三つの制服の色をこうやってやる(ませる)とパープルになるんだって。

佐道 染料をませるとそうなるんですか(笑)。

■ 国防族

伊藤 ふーん。よく国防族ということを行います。

夏目 自民党の？

伊藤 ええ、これは意識なさいましたか。

夏目 ありますよ、それは。もつとずつと後ですけれどもね。このころはあんまり国防族なんていう意識は私はありませんでした。もつとずつと後、局長くらいになるとあります。

伊藤 そうですか。

夏目 それはなぜかと言うと、国防族とか何とかみんなそうなのですけども、あれは大蔵省が悪いんですよ。シーリングというのをつくつたでしょう。ゼロシーリング。予算を要求の段階からぎゅつと抑えようと。要求を抑えようとすると、各省がたまらないんですよ。大蔵省も、各省の突き上げが大きくてたまらないから自民党を利用するんです。自民党から抑えてもらう。こちらも自民党へ行つてなんとかこれを突破させよう。結局は、そうやって政治家をばびこらせたのは大蔵省。これは三段論法みたいなところはあつても、私は根本はそうだと思うのです。まず大蔵省が政治家に生きがいを与えるという方法をとつたのだと思います。それまでは大蔵省で一本でこうやつたんですよ。かつては自民党が大蔵省へ行つて陳情していたの。それを自民党の力を利用して各省を抑えようとしたところに大蔵省の誤算があつたわけですね。最初はうまくいったのだけど、だんだん鬼つ子みたいになつた(笑)。

それが要するに何とか族に成長しちゃつたんですね。

中島 先生のご記憶ですと、だいたいいつぐらいの時期からそういうふうに変つたのでしょうか。

夏目 あれは何年ですか。ゼロシーリングとかなんとかというのは昭和の五十年か。

武田 福田のときですよ。

夏目 ちよつと私には記憶がないのですけれども。

武田 七五、六、七年でしょうか。

伊藤 だいぶ今の時期よりも後の時期だよ。

夏目 財政が非常にきつくなつてきてそういうことを考えたのですね。

佐道 この六〇年代ですと、まだ国防族とほとんど意識しなかつたということですが、ただ自民党の中では保科(善四郎)さんと船田(中)さんとか、こちらへんは防衛産業をバックにして議会の中ではけつこう勇ましいことをおっしゃつておられましたが。

夏目 口ばかりだからね。これは旧軍思想の名残りというか、心情的なそして古典的な防衛族だと思ふんです。だから、そのころ僕らはこの人たちの存在というのを余り意識したことはないですね。多分、局長なんかでもそんなに厄介だとかいう気持ちはなかつたんじゃないですか。今の国防族に対するような神経の使い方というのはなかつたように思います。

伊藤 そうですか。なんか、保科さんとかね。

夏目 保科さんにしても船田さんにしても、最初から非常に古めかしいでしょう。

佐道 もうお年はお年ですけれども。

中島 どちらかというとき精神論的な。

夏目 そんなような人なんですよ。私は直接お付き合いしたことはないから知りませんが。

佐道 防衛庁としてやるとしたら、局長あたりがケアをするくらいですか。

夏目 そうでしょうね、多分そうだと思います。だけど、特殊な先生だからといってはいなかったとは思いますが。

伊藤 自民党の国防会に行つて説明したりなんかというのはやったんじゃないですか。

夏目 国防会なんか当時あつたんだらうか。

佐道 ありました。

夏目 あつた？ あんまり記憶はないな。じゃあ、海原さんが一人でやつていたんじゃないのかな。

中島 二次防のときは海原さんが行かれたと伺いました。

夏目 多分そうだと思いますよ。その程度だと思います。で、海原さんが一人でもつてまくしたてて、みんな黙つて聞いていたんだと思いますよ。

伊藤 (笑)、なんか想像できるような気はするけど。

中島 海原さんは、「彼らは勇気がないから、僕のいうことには何も異論はなかったよ」ということを以前いわれていたように思っています。

夏目 そうでしょう、多分それは本当だと思うわ。勇気があつたかないかは別として、黙つて聞いていたと思いますね。

伊藤 話を聞いてもよくわからなかったんじゃないの。

夏目 防衛庁は、何か面倒な問題がおきると、大臣が、「海原おまえやれ」ということが多かったですよ。

佐道 先生がまだ防衛局に行かれる前のことですが、赤城構想を海原さんがつぶされて、二次防が出来上がっていくときですけれども、自民党の国防会を中心に、池田内閣の予算の組み方、防衛費に関する予算の組み方について、かなり注文を出すというのが当時の新聞とかにも出ていました。

夏目 二次防をつくるとき？

佐道 はい、これではいかんのではないかというようなことを。例えば十三個師団改編の問題とか、海原さんが目の敵にしているヘリコプター空母の問題とか、あれも即時やれというような話で、かなりいろいろ当時。

夏目 むしろ勇ましい話でしょう。海原さんはそういうのをみんな、「とんでもない」といつてつぶして歩いたんだだけ。海原さんは、自衛隊はまだ当分教育訓練部隊だと。一步一歩アメリカからいるんことを教わりながら部隊を少しずつくり上げていくことが今の課題であつて、今から何とかヘリだとか、やれ空母だとか、そんなものは先の話で、潜水艦も訓練用のちっちゃな潜水艦でまずは慣れることだ。そういう発想の人ですから、気宇壮大な自民党の先生から見ると、「なんでこんなおもちやみたいなもの」という感じの議論はあつたと思います。だけど、省内では海原さんが言うんだれも批判する人はいないし、僕もその当時はそう思っていましたから、違う意見というのはあんまり記憶にないです。むしろそのころは海原さんの言うことはほとんどまっとうだと思っていました。

佐道 その当時は。

夏目 ええ。口ばかりででかいことをいつたつて、できやしないじゃないかというのが私の考えで。

■ 国防会議議員懇談会

佐道 国防会の人たちが、装備国産化とか国防生産のあれに関係しているものから、自主防衛とかいろいろなおことをおっしゃるのですけれども、先生がもう防衛局に移られた後ですけれども、六三年十二月ぐらいに国防会議の議員懇談会があつて、国防会議の幹事会を中心に国防のあり方を再検討しようというヒアリングとかもかなり行なわれているみたいです。こういうことについてはご記憶にございますか。

夏目 国防会議で？

佐道 はい、国防会議、幹事会を中心に。久保さんとも出られているのですけれども。

夏目 うーん、……何をやったんだらうな。

佐道 各国の防衛力のあり方からずつと。

夏目 きつと勉強会なんじゃないの。

佐道 基本的にそうみたいですが、それは防衛局にいらっしやうてあまりご記憶にないですか。

夏目 全然ありません。多分、勉強会というのは、各省の役人に對して、主として次官に對して、各国の防衛とかそういうことをレクチャーする場はあったかもしれませんが、日本の防衛力についてどうこうと影響を与えるような議論があったということとは一切聞いていません。

佐道 実はそのヒアリングの中で久保さんが、おそらく海原さんの流れだと思ふのですけれども、今までの防衛力整備というのは日本が間接侵略みたくにならないように日本が自力を蓄えるのが大事だったけれども、アメリカの要請もあるからもうちよつとこれからはいろいろ考えなければいけないというような議論をそのヒアリングの中でなさっているのです。その当時、こういうふうなことについて久保さんなんかと議論あるいは何か会話をされたご記憶はありますか。

夏目 いや、要するにね、警察予備隊ができて、それが保安隊になり、自衛隊になったのですけれども、最初はもともと敵が攻めてきたらということでは頭から考えていないんですよ。そういうところから出発したけれども、やつぱりアメリカの頭の中には軍隊というか直接侵略に對するとかいう考え方があった。日本はまだそこまで考え方が成長していない時期だから、しかもその上に、海原さんみたいに列島守備隊みたいなもので外へは絶対に行かなくて、国内で攻撃して来たやつを迎え撃っていればいいよという、

そういうなんか非常に治安維持的な小規模の限定された能力の自衛隊というものを考えていた。それではいざとなると直接侵略には対応できないですよ。そういうふうなことが徐々に目立っていったことは事実ですよ。久保さんがいわれたのは、そういう時期だったんじゃないでしょうか。三次防になってから侵略対処能力というのが頭を出してきたのだと思います。二次防まではそういうのはないんですよ。

伊藤 やはり間接侵略ですか。

夏目 骨幹的防衛力とか何かわけのわからないことをいって、間接侵略とは書いていないけれども、もともとそういうものだけを持つていけばいい、あとはアメリカがやってくれるという頭があったのです。というのは、もともと日本の政府の頭の中には、自衛隊というのは警察予備隊の延長と考えていた。

伊藤 基本的な性格として、警察だという考え方というのは、後藤田（正晴）さんなんて今でもそう思っているでしょう。

夏目 そういうこともあるでしょうね。そのことについてもいつか言いたいです。まだ時期が早いですからね。悪口じゃないですよ、事実はこうでしたという。

佐道 ぜひそれは。

伊藤 いや、インタビューをやっていてそれは痛感しました。

夏目 あの人は自衛隊が嫌いなんです。制服に對する不信感、防衛庁に對する不信感が牢乎としてあるんですよ。よつぽど陸軍のときに殴られたんじゃないかな。

佐道 警察予備隊ができたときにずいぶんかかわっておられたわりに、全然信用していないんですよ。

夏目 かかわっていたけど、そこから後は俺は知らんと言うね。けしからんという話ばかり出るんです。海原さんとは仲がいいんだけど、どういふのかわからない（笑）。本当にあの人は不信感を持つていました。例えば湾岸にしてもそうでした。最

後までそうです。

伊藤 徹底的に抵抗しましたからね。

佐道 そうですね。海原さん流の考え方というところで、海原さんが郷土防衛隊というのをたびたびおっしゃるのです。昭和三十年代の砂田（重政）防衛庁長官のときにも出てきて防衛庁の中でも検討したとか、それはずつと意識として残っていたという話をずつとされるのですけれども、先生が移られた当時、例えば郷土防衛隊の話というのは。

夏目 郷土防衛隊とはいわないけど、列島守備隊論という言葉はあった。

伊藤 そういふ言い方ですか。

夏目 その列島守備隊というのはどういうものかというのと、海空はどうでもいいよ、そんなものはあつたつて役に立たないんだと。極端にいえば、日本に今戦闘機の飛行場が幾つある。要するにシングルだ。ソ連にはシベリアからカムチャツカまでサハリンを含めてみんな入れると数十の飛行場がある。何千機も持っているやつが一度に来たら何ができるんだ。潜水艦が何十隻もウラジオストックにいるやつが出てきたら、日本の海軍は何ができるのか。そんなものを持つたつて意味がない。せめて上がってくるやつに對して手向かうぐらいのことが精一杯のことであり、多少の抑止にもなるというのが守備隊論で、郷土防衛隊の続きだと思ふのですけれどもね。

伊藤 その郷土防衛隊というのはつまり自衛隊のことをいっているのですか。

夏目 そうだと思ひますよ。私は郷土防衛隊は知らないけどね。

伊藤 お話を伺つていてもよくイメージが浮かんでこないのです。

夏目 列島守備隊というのはいつていました。

武田 それは海原さんがおっしゃつていたのですか。

夏目 そうです。要するに陸重視なんです。海空おさまらずとい

うやつですよ。

伊藤 それは「陸原」というやつだな。

夏目 要するに陸上自衛隊だけがしつかりしたものをつくればいいんだと。それ以上は、いざというときに役に立つわけじゃないから、適当におもちゃをあてがつて喜ばしておけばいいわというのがあの人の考え方ですね。

佐道 そういう海原さん流の考え方は、海原さんが局長のときはだいたひ下に浸透していきますか。

夏目 そうですよ。だから、海空幕僚長とか防衛部長は海原さんのことを全く理解しなかつた。

伊藤 「海原なのに陸原だ」といわれていましたからね。

武田 防衛庁の中にも外にも海原さんの知恵袋みたいな方はいらつしやらないわけですね。

伊藤 いや、自分が袋だらうからさ。

武田 自分になるんですね。

夏目 自分がよく知つてゐるから、知恵袋なんかあるはずがないと思つて（笑）。そのかわり勉強もされましたよ。アメリカの雑誌から何か常日頃調べてね。整理はいいし、何か質問すると関連のデータがパツと出てきます。しかも、英語が読めるからやたら向こうの雑誌を出すので、部下が変な質問をしようとする、即座に「よせ」とかといつて、なるべく質問をしないようにしていたんです。非常に勉強家でもあつた。だけど、陸上自衛隊重視の思想はどうとう最後まで変わりませんでした。だから、新しい新装備のミサイルとか高いものを買おうとすると、彼は烈火のごとくつぶしかかつた。特に海上自衛隊、航空自衛隊の増強は冷たくてね。だけど、あの時期はそれでよかつたのかもしれないけど、その後時代が変わつてくるのですね。日米関係とか、アメリカの日本に対する期待度というものがやはり動いてきます。そのときにはやはり、海原さんというのはいまも過去の人だという感

じはしました。

■三次防の検討

佐道 先ほども三次防の話にお触れになりましたけれども、その防衛セミナーをちよつと細かくお聞きしたいのですけれども。三次防自体は六四年の半ばくらいから各幕僚監部では始まっていると思うのですけれども。

夏目 六四年という昭和三十九年ですか、やっていましたよ。僕らもちよつとやった。

佐道 六五年からほとんど本格的になっていくと思うのですが。これは先生は中心になっておやりになったのですか。

夏目 いや、中心ではないです。防衛局の中に計画官室というのがありまして、長期計画をそこでやるようになっていっているんです。そこはずつと勉強していたんですね。ところが、最初、三次防で毛色の変ったものをつくらうと、若い人がいっぱいいるからやはり新規事項を打ち出したいわけですよ。いろんなことを検討しては局長のところで議論したりします。そのときは同じ局の防衛課の人間として僕らも立ち会うのです。一方、僕らは防衛課でもって二次防期間における毎年の年度計画を担当しているわけですよ。二次防でつくったもの自体が過大なんです。二次防で決められていたことも、年度の予算ではとてもできません。

伊藤 それは予算の問題ですか。

夏目 予算もあるし、もともと無理があるんです。二次防ですら背伸びした計画になっているんですよ。そういうことをわれわれは身をもつて知っているから、「これは単なる机の上の計画じゃないか」ということで中で議論するわけです。海原さんはそれを聞いていて、海原さんの性格として、高望みは嫌うほうなんです。現実的に低くやるほうが彼の好みだから、僕らの意見のほうに近くなる。三次防は結局のところは二次防の延長みたいな形になっ

ていつてしまうのです。

伊藤 二次防の積み残し。

夏目 ま、積み残しもやるし、それから二次防であったものももう捨てちゃったものもずいぶんあるんです。

伊藤 そうですか。

夏目 うん。例えば航空自衛隊のレーダーサイトなんていうのは、もうあと幾つかつくる予定だったものを、こんなものをどこにつくるのだといったら、山の中へつくと。今あったやつは米軍がつくって、米軍のやつを引き継いだからあるのであって、あんなものを新しくつくるといったってできやしないですね。まず用地がね。

伊藤 あれは相当広い面積が要るのですか。

夏目 山の下にまず基地があつて、そこから専用道路、要するに道のないところへトラックで行ける道をつくるのですからね。それで、山の上へまた、レーダーが三つ置けるような敷地と、コンクリートで地下にもぐったようなものをつくるのですから、相当広いものがないとできませんね。一度行つてごらんになるといいですよ。よくまあ、こんなものを二十何カ所もつくつたと思えますよ。島とか、岬の突端とか、山の上とかね。小さいところで二百人くらい、大きいところで四、五百人兵隊さんがいるわけですから。

伊藤 はりついているわけですか。

夏目 その司令なんというものは、三佐くらいの人だけど、村長さんより給料が高い。村の高額納税者なんです。田舎へ行くとなぜするに、そういうふうな二次防ですら積み残しというのがいっぱいあつて、もう二次防ではできないというのは三次防に引き継いだものがいっぱいありますからね。そういうことをやると、やはり海原さんのように二次防の延長で行かざるを得ないのかなという感じがしました。

佐道 その一方で、もうちよつと違う長期的なことで考えたいと思

っていた人たちのいちばんの関心はどういうことだったのですか。

夏目 防衛力の意義付けと国産の問題でしょうね。

佐道 国産の問題ですか。

夏目 だから、紙に書くのは書いた。だけど実際にそれを現実のものにするのはそれからあとの年度もって現実には決めていくわけですから。そっちがいちばん問題で、部隊がちよつと大きくなったり、ふえたり、そんなのはだいたいみんな関心ないんです。制服の人は関心あるし、防衛庁の中の人は非常に関心あるけど、外の人は、何をつくるのか、何を買ってくれるのかということに関心があるわけです。アメリカにしてみれば、これはうちのやつを買ってくれというのもあるでしょうしね。そこらへんが難しいですね。

伊藤 防衛計画といたって、航空なら航空で向こうとの付き合いで、「こういうの、いいじゃないの」と。

夏目 行ってきますよ。だから、やっぱり向こうから口説かれてしょうがないというのもありますよ。さっきのF102なんていうのは、だれかが向こうへ行つて口説かれてね。

伊藤 F102?

夏目 102という戦闘機があるんですよ。それを百機ぐらい大バーゲンで。兵器のバーゲンというのも変な話だけど、ほんと安いです。四十機の104を追加生産するよりはずっと安い。しかも性能については実証済みの戦闘機でしょう。

伊藤 安定性があるわけですね。

佐道 ただし型落ち。

夏目 だから難しいけどね。

佐道 先生はこの中では具体的にはいろんな案の調整とかそこらへんになるわけですか。

夏目 そうですね。調整というのは、要するに中期計画、三次防とか二次防というのは計画官室がつくるんです。計画官という課長ク

ラスの人が別にいるんです。防衛課長のほかに。この人たちは、なんとかまとめてね。それに総括的な文章を最初の頭に二ページか三ページの文書をつけるんだけど、国防会議で決めるのはその文書のところだけなんです。だから、中身は防衛庁が持っているだけで、二、三ページの日本語を書くために、「防衛ハンドブック平成四年度版」を開いて説明) 要するに三次防というのは、ここから始まって、ここでおしまいですからね。二ページか三ページ。これを国防会議で審議するというだけです。その中に「国産化」とか書いてあるから、それに基ついて国産化を年度で進めていくわけだけれども、書いてあるのはこれだけなんです。もちろんこれが全部ではなくて、この下に積み上げの書類があるのですけれども、そんなものは外に出ていないし。私がやる仕事は、そういうことかいいのかどうか、彼らが積み上げてきたものかいいのか、今国産化がいいのか悪いのか、三次防で新機軸を出すのがいいのか悪いのかというのを別の角度から議論するわけです。だから声のでかいやつは勝つわけですよ。だって客観的にどちらが正しいということはないのだから。そのときの主宰者として、局長がこうだといえ、もうそれで決まっちゃうからね。がっかりするやつとか、喜ぶやつとか、いっぱい出てくる。

中島 一次防は三年間、二次防は五年間というある一定の期間で区切ってやっていったわけですが、三次防を決めるときに、三年、三年で新しい方式で、三年たつてまた新しく。

夏目 ローリング方式ですね。

中島 ええ、そういう話があったと伺っているのですが、それが結局なくなりましたという経緯に関して何か。

夏目 それはありましたよ。アメリカは計画が五年間あって、一年たつと次の年に足していくんです。日本はそうじゃなくて、三年やったら次の三年。ところが、忙しくてだめだと。五年に一遍でも大仕事なのに、三年ごとにやっていたら大変なんですよ。

まずそれがだめだということ。それからまあ、みんな腹の中では、「年度計画をつくったつてこのとおりにいくもんじゃねえや」という、多少あきらめムードというのかな、それがあつたんですね。そんなことから日の目を見なかった。

伊藤 ただ年度計画がないと何も。

夏目 だから中期計画は必要です。それと、やはり中期計画というのも、あんまり長くても予測がつかないですね。国際情勢にしても、五年くらいだったら一応見通せる。予算の安定性もある程度保てる。船なんかの建造期間も五年間見ておけば何とか行くだろう。確か船は長いのは五年かかる。そうすると三年だとちよつとあれだから、やはり五年計画にしておいてやっついていかないと無理だろうということ。五年計画に落ち着いたのです。そのほかに十五年とか十年見据えた見積もりはつくっているんですよ。だけど、これは本当に具体性のあるものではなくて、軍事技術はどちらの方向に進むかなんていうのは当たるも八卦みたいな話が多いものですから。

伊藤 大蔵との関係というのは毎年ですか。

夏目 中期計画をつくる中期計画そのものも大蔵省に協議しないといけない。それから毎年の予算とか年度の計画の両方を。

伊藤 大蔵はやっぱ長期計画はあんまり好きじゃないわけでしょう。

夏目 好きじゃないというより、予算の先取りだからというので嫌がるのです。それと、どうしても先取りになると見積もりが高くなるんですね。物価の上昇というのはあのころは毎年ある。人件費も増大する。そうすると五年間見積もると相当高くなりますよ。そういうことも嫌がるのです。大蔵省は、なるべくそういうものを見せないで、年度でもってやりたいという。長期計画ではあんまり数字を挙げるのをいやがるんです。挙げてでも必ず留保条件をつけますよ。そのときそのときの経済財政事情によって再

検討することあるべしというのを必ずつけて、逃げ道をつくっておくのです。それはそうなんです。二次防の経費というのは一次防の倍なんです。三次防は二次防の倍かかっています。要するに、同じ五年間でも倍倍になっちゃうわけです。だから、そういうのは嫌がりますね。

■福田、小泉、松野の各防衛庁長官

佐道 六四年くらいから三次防が始まっていつて審議が始まっていくわけですけれども、最初のころは小泉純也さんが防衛庁長官で、それから松野さんとかわっていくわけですけれども。まあ、その前は福田（篤泰）さんでいらつしゃつて、福田、小泉、そして松野というふうになっていくわけですけれども、防衛庁長官の交代というのは何か全体の方針的に影響があるわけですか。

夏目 いや、個性の強い、ある意味ではあくの強い、うるさい人が来なければまったく影響ないですね。

伊藤 普通、防衛庁長官というのは儀典の要員みたいな感じになつてしまふわけですか。

夏目 正直いって、仕事の面ではあんまり大臣のこと考えたことはないですね。もちろん大事にはしますけど（笑）。

伊藤 大臣だからダイジ（笑）。

夏目 大事にはしますけれども、仕事でもって大臣の考えはどうだろうと、あんまりほかの役所のようなああいいうのはないですね。「どうせ、よきにはからえに決まっているわ」という気がどこかにあるんですね。

佐道 その点で言うと、よきにはからえにはしなかったと松野さんはおっしゃるのですけれども。

夏目 松野さん、増田さんなんですよ。

佐道 松野さんはやはりちよつと違っていましたか。

夏目 それも、「日本の防衛政策はかくあるべし」という意味で

とやかく言うわけではないですよ。多分に個人的なあれがあるものだから、海原がいつてきたのではノーという、そういう意味でのあれでね。だから、何ていうのでしょうかね。

伊藤 あれは何で反海原なんだろうな。

武田 何でなのでしょうかね。

夏目 多分、防衛産業とか商社会社とか、海原さんがあまりにもT38みたいなものを推すわけですよ。それから国産化反対とか何とかというわけですね。そうするとやっぱり、ある特定の業者は喜ぶかもしれないけれども、一方の業者は泣くというのがいっぱいあるんです。機種選定なんかもそうなんです。例えばバツジシステムというのはヒューズにするかリットンにするかということによって、日本の企業も三菱になったり東芝になったり、そういうふうにかわっちゃうのです。飛行機もそうなんです。輸入したって、こちらの飛行機を買えば伊藤忠は喜ぶ、こちらだったら丸紅、こちらだと三菱重工が喜ぶとか、そういういろいろな要素がいっぱいある。ところが海原さんというのはわりとはつきり言うでしょう。いったほうは喜ぶかもしれないけれども、いわれなかつた方の会社から見ると、「このやろう」と思うのでしょうか。そういう人と政治家というのは絶えず密接に関係があるのでしょね、きつと。だからやられたんじゃないでしょうか。海原さんの言うことが間違っているという意味ではないと思います。偏見を持つてやっているのは何かこっちの業者とつながりがあるのではないかと疑いをかけられたりしたこともあるんじゃないですかね。

伊藤 松野さんのほうが業者と関係あつたんだものね。

佐道 そうですよ。

武田 いえた義理ではないですよ(笑)。

夏目 だけど、自分がやっていけば人もやっていと思うんじゃないの？ 私は松野さんのことは知らないけれども、海原さんはそういうことはなかったと思います。それは、たまに一席どこ

かで飲んだことはあるかもしれないけれども、それ以上のことは、金をもらったりしているということはないと思います。

佐道 そうすると、中にいらつしやうって、松野さんのときには松野さんと官房長がぶつかつていっているなというのは。

夏目 会議ではぶつかつかりませんよ。会議では絶対にあつからないし、大臣もそんなことはわれわれに見せません。ただ、当時の次官とかそういう人には言っていたらしいです。当時の次官というのは三輪さんだつたと思うけれども、三輪さんはきつと間に入つて困つたんじゃないですか。また、あのころはいうことを聞かない局長さんばかりだつたの。経理局長は大村という大蔵省のね。最後は何で辞めたのかな。これまた海原さんに輪を掛けたように怒りつぽい人で、次官のいうことを聞かないんだよ。海原さんともあんまりよくはないんですよ。要するに、みんなそれぞれ一匹狼。装備局にはまた口うるさいのがいて、これがまた一言居士ですね。だから当時の次官は苦労したと思いますよ。

佐道 三輪さんは後で弁護士になりましたね。「円満な人柄で」とかよくいわれるのですけれども、そういう人でしたか。

夏目 それは三輪さんのほうが円満だけれども、時々いやいやな顔をしていたから、多分手を焼いていたのではないですかね。海原さんというのはあんまりはつきり物を言うから、多分色目で見られたのだと思います。

佐道 松野さんなんかに関してはとりたてて防衛政策でという印象はないわけですか。

夏目 むしろ、海原さんとの確執みたいなものが随所に感じられるというようなこと。

佐道 それは目の前では見なくても伝わってくる。

夏目 海原さんがしゃべるしね。

武田 どんなふうなのでしょう。

夏目 いや、いろいろ言いましたよ。「俺はT38で回し者だと思

われている」とか何だとかと言いましたよ。だけど、あれくらいに開けつびろげにやつて金をもらつたら相当なワルだけどね、それはないと思う。そのあと増田甲子七という人が来ましたが、これが松野さんの言いなりということもないけれども、松野さんの意を体して動くものだから海原さんとはだめなんです。

佐道 しかし、増田さんといえは長老という形ですけども。

夏目 その後長老になつたけどね。そのころでもいい年でしたけれども、わりと頑固な一筋縄ではいかないじいさんではありましたが。私は長野県でよく知っているんだけどね。

伊藤 そうか、長野だ。

佐道 増田さんも反海原と固まっているわけですか。

夏目 そうでした。結局、飛ばされたのは増田さんのときです。

伊藤 あれは引き継いだ。

夏目 引き継いだのだと思います。

伊藤 これを首にしると。

佐道 松野さんは自分のときには首にはしていないという。

武田 小泉さんと松野さんの間でちよつと違いがあるのですか。

夏目 小泉さんというのは温厚な大臣で、さつきちよつと失礼な言い方をしたけれども、大臣がどうのこうのしたという記憶はまったくありません。息子のほうがよっぽどうるさいようです。いい大臣でしたよ、本当に温厚な人でした。

■三矢研究

佐道 六五年になりますと、三次防の問題もそうなのですけれども、早くから三矢研究の問題がかなり大きくなってきて、海原さんが官房長として国会でもいろいろ答弁をされて、本来は防衛局長がお話しになるのを海原さんが引き取って話したとご自身もおっしゃっておられましたけれども。

夏目 まあ、そうなんでしょうね。本来は防衛局で答えるべきこ

とであるのでしようね。中身は防衛局長当時の話だし、当時の部下の久保防衛課長が参画している話だし。それに、さつきいったように、島田さんでしたかな、多分とてもまだそんなところは手に負えない。中身がまだわからないしね。だから結局、海原さんは自分がいたときの話だということもあって買って出たのだと思います。あの人は、自ら買って出て火中の栗を拾つたみたいな顔をされるけど、内心は喜んでいるところがあつたんだよ。また言いたいことを言えるぞつて。上林山（栄吉）長官がお国入りした時も、一人で国会でしゃべりまくつて。それで今になってとんでもない大臣だと言うけど、本来官房長がそういうのをチェックする人なんです。

伊藤 それは自分でもいつていなかったか（笑）。

夏目 本当にあの人は、闘争意欲というのかな。

伊藤 そういふ場面が好きなんですかね。

夏目 好きなんです。あんまり平和で安穩だとあの人はさびついちやうんだね。

武田 三矢研究も自分で火をつけたんじゃないですか（笑）。

夏目 それはあるかも知れない。正直言つて。あんなもの、中身は大したことないですよ。ないのだけれども、要するに内緒でやっていたといつて、最初の答弁が、けしからんことだといつてな答弁をしちゃつた。今度のリスト問題と同じですよ。最初の判断が悪かつた。「勉強するのは何が悪い」と、開きなおればすんだだけ。まあ、ちよつと不穏当なところもあつたけど、部内研究としてやっているのだからどうつてことないのです。どこから出たかわからないけど。あの人は秘密文書をいっぱい持っているんだから。今でも持っているんだもの。

伊藤 持っているらしいのですけれども。

夏目 死んだらどうするかと思つてね。

伊藤 もらうんですよ。

夏目 もう約束できていますか。

伊藤 奥さんと(笑)。

夏目 いや、本当にね、コピーがみんなうちにあるんだね。

伊藤 何もないといっていましたけれども。

佐道 ある部分はけっこう堂場(肇)さんのところに行っているのではないかと思うのですけれども。

夏目 堂場さんのところへも行っているし、堂場さんのところからも来ている。堂場さんが新聞記者としてあちこちで集めたやつがある。そういう記者が何人かいるんですよ。朝日にもいてね。

武田 篠原(宏)さんですか。

夏目 あのころはルーズな者がいてね、自分の担当ではない資料だとちよろちよろつと渡したりするやつがいたんですよ。まあ、それは国家がひっくり返るようなものはやらないけれども、ちよつと新聞記者を喜ばせるような。また、海原さんもそういうものを、大したことはないけれども、まあ、秘扱いになっているやつを社会党の議員にチラチラと見せて、「いいですよ」なんてやっている。だから、横路さんという議員が死んだときに防衛庁の秘密書類が山ほど出てきたというじゃないですか。

武田 それはどうしたんでしょうね。

伊藤 それを追いかけよう(笑)。

武田 息子の代まで(笑)。

夏目 ないんじゃないかな。息子さんはそういうのにあんまり興味ないようだからね。

佐道 三矢に返るのですけれども、三矢事件は結構国会で紛糾したりして、海原さんがどれほど楽しんだかというのは別として、ただ防衛庁の中であいうことについて研究するとか、ちよつとああいう話に触れたらすぐマスコミ、ジャーナリズムが騒ぐということがあつたと思えますけれども、三矢研究の影響ということについてはどういふふうに思っておられましたか。

夏目 やはり相当ありましたよ。あの種のことには手をつけないというか、触らないという、そういうものはあつた。ただし、長続きはしませんね。というのは、絶対にそれは不可能なんです。軍人にいざというときのことを勉強するなといったら、これは不作為犯じゃないけれども、怠慢になるので、ただそのやり方さえ気をつけてやればいいし。正直言うと、それから後、私が課長になつてからはそういうものをもつと組織的にやりました。アメリカを巻き込んで。それはあたりまえなんです。日米共同で戦うのは建前なんだから、そういうすり合わせをやるのはあたりまえなんです。政治コントロールの利かない内部的な勉強会としてやるわけですけれども、政治的な判断の分野まで入り込んで研究せざるを得ない。それがないと成り立たないから。しかし、そういうものが外に出ると問題になっちゃうんです。その後のやつは出なかつたですけれどもね。だけど、やるなというのは無理です。確かにやり方は拙劣だったけど、これは計画じゃないんですよ。三矢計画ではなくて、三矢研究です。しかも、全員が参画しているのではなくて、本当に一部の幕僚が集まつてやっていた研究会みたいなものでして、そんなに目くじらを立てて怒るようなものではないと思うのですよ。ただ、それからそういうことに対してはとにかく貝のごとくなるような時期というのは確かにありました。だから、制服からは不満がいっぱいあつたと思います。そういう問題が出るたびに、やつぱり制服からは内局に対する批判というか不信のようなものは出ますよ。「あいつらがしつかりしていないからこういうことになっちゃう」みたいなね。だけど、三矢研究の中を見たでしょう。大したことないですよ。あれはただ、久保さんが入つたことと、海原さんが、俺がやらないとだめだろうなと思つたのでしょね。でも、海原さんだからあれですんだので、もっと悪ければ、「そういうことは一切今後ともしません」みたいな話に発展しかねないことだつたと思えますよ。普

通の答弁だったらそうなっていく。

佐道 ああいうことが国会で議論されているとき、防衛局というのはいわば当事者ですよ。それはどういうふうにしておられたのですか。

夏目 どういうふうにつて？

佐道 例えば海原さんの答弁についてサポートするとか。

夏目 サポートはみんなでするんですよ。だけど、サポートして、やっぱり国会というところは、多少反省している体裁をとらないといけませんからね。そういう少しの反省の余地があると、なんで突っぱねないんだという批判はありますね。特に制服からあります。それは栗栖発言にしても、今度のリスト問題にしても、常にそういうのはあるんです。だけど、それは立場が違えば仕方ないですね。

伊藤 海原さんも答弁を通じて部隊のほうから批判はあったわけですか。

夏目 多少あったでしょうけれども、そう大きな声ではなかったです。それとやっぱり、海原さんというのは国会では絶大な信用があったんです。個々に嫌いな先生はいたかもしれないけれども、防衛庁で海原の言うことは間違いないと。あいつはとにかくいちはんよく知っているし、常に正論を吐いている男だというのが国会じゅうに知れ渡っていました。だから、海原がいったとなったらみんな黙って、そういう雰囲気でした。

伊藤 大したものだな。

夏目 それは大したものですよ。その後もあんな人はいません。

■海原官房長、国会議に転出

佐道 そうすると、六七年に海原さんは増田さんのときに国防会議にいきなり行けという話になるわけですが、これは防衛庁内的には。

夏目 非常にショックでした。海原さんという人は当然次官になる人で、ほかにいないと思っっているから。衆目もそう思ったし、本人がまず何よりもそう思っっていたでしょう。

佐道 そうでしようね、あれだけ本人もお書きになっているわけですから。

夏目 それでああいうことになってしまったでしょう。しかも、それも烏鬼忽忽の間に有無もいわずみないところがあって、向こうの人の辞める口までも無理矢理あけさせて辞めさせたという感じでしたからね。正直いいますと、当時の国防会議なんていうのは屁みたいなところだね。ま、屁みたいなところというのは、海原さんが屁みたいに思っっていたからわれわれもそう思っってしまったのだけれども、そんなところへ行かされることになったあの人の気持ちは相当なショックだったと思いますよ。しかも、「じゃあ、俺よりふさわしい次官候補はいるか」と思っっているから、それはちよつとがっくりしちゃう。それで、海原さんの後はだれになったんだっけ。

佐道 次官は本当はかわるはずだったのが留任して。

夏目 ああ、そうか、ずつといたわけだ。

佐道 そして内海(倫)さんになったのですね。

夏目 一晚飲みましたよ、自棄酒を。

佐道 あ、ご一緒に？

夏目 そう。

佐道 海原さんのご本に書かれていることですが、お電話をされた方が二人いらつしゃって、奥さんと西村さん。

夏目 元大臣ね。

佐道 はい。西村さんとかかなり親しい関係にあったという。

夏目 あったのかもしれないね。私、西村大臣というのは海原さんとどうい関係だったのか知りませんが、本人がそういつているのだから間違いないでしょうね。ほかの大臣はみんな、

防衛庁へ来て海原の言うことを聞いていけば間違いないという意識がありましたからね。国会全体がそうであると同時に、防衛庁長官になった人もそう思っていましたからね。だから、彼はそういうことに慣れきっているところもあつたんですね。俺の言うことは大臣はみんな聞いてくれるなというのはあつたかもしれません。ただその松野、増田がちょっと狂っちゃたんだよね。悪い時期に悪い人が二代来ちゃつたのはあの人のツキのないところだつたんだろうな。考えてみるとかわいそうだね。

伊藤 あのとときには後藤田さんとも相談しているんじゃないの。
夏目 あんまり親身になつて相談……。もっとも後藤田さんはまだ力がないからね。後藤田さんはその後官房副長官か何かになつ

たのかな。そのころからめきめきと実力を発揮してきた。久保さんが首になつたのは後藤田さんのときだからね。首になつたというと変だけど、まあ、首になつたんだよね。

伊藤 どうしますか、ちょっと切れ目をつくりましょう。

佐道 また六七年のこのあたりから。

夏目 いいですよ、ダブつてもいいなら。

佐道 また重なる質問もあるかもしれないけれども。海原さんが国防会議に転出される翌年に先生は国防会議のほうに今度は逆にまた行かれるわけですけれども、この間で、あと三次防の確認でお伺いしたいこともいろいろございますので、それも含めて次回ということで。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第3回

開催日：2002年12月6日（金）
開催時刻：15時00分
終了時刻：17時00分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

記録者：
有限会社ベンハウス 矢沢麻里

第3回インタビュー質問項目

2002年12月6日

1

三次防について、基本的な考え方は二次防を踏襲し、それに国産化の推進等を加えたというお話でした。補足質問ですが、三次防大綱の計画方針の中で、一般方針の「イ」として、「防衛力の向上は、特に周辺海域防衛能力および重要地域防空能力の強化ならびに各種の機動力の増強を重視する」とあります。すると、海原氏が主導した陸中心主義から海空重点に比重が移ったように読めるのですがいかがでしょうか。

2

三次防の審議過程で、国防会議幹事会で久保参事官が「周辺諸国の戦争がわが国に波及するという説明がない。そのような認識はないのか」あるいは「台湾、朝鮮をとり上げる必要がある。これらを情勢の見通しに入れるべきである」と述べたり、外務省から来ている浅尾参事官が「情勢の見通しに、中ソ対立を入れるべきである。米ソ対立のみでは直截にすぎる」と主張しています。三次防の情勢見通しについてはかなりの議論があったのでしょうか。

3

三次防の審議過程で、愛知官房長官が三輪次官に、「総理も時々役所でなく宅でも静養先でもあなたの方の話をきくチャンスを作る」といい、そう努力して見ようと述べたということですが、するとそれまでは官邸サイドとの意思疎通が十分でなかったようにも聞こえます。この点について何かご記憶のことはございますか。

4

68年8月、先生は久保氏のあとの国防会議事務局参事官に異動されます。この経緯についてお願いします。

5

先生が移られた当時の国防会議ですが、事務局長海原氏以下、どのような構成だったのでしょうか。また、国防会議の機能不十分が指摘されて久しかつたわけですが、海原氏が局長になられて変化していたのでしょうか。防衛庁との情報交換などはどういった状況だったのでしょうか。移られた当時の国防会議の雰囲気等についてお願いします。

6

68年11月、航空自衛隊FXとしてF4Eファントムの採用が決定され、さらに翌1月、104機の国産が決定されます（ただし国産化率は約5%）。F4Eファントムの採用や国産化に対しては、海原氏は批判的だったと思いますが、この点について国防会議での議論はどのようなものだったのでしょうか。

7

F4Eファントムの国産化は三次防の方針に則ったものだと思われませんが、三次防審議過程で、久保参事官が「自主防衛の意味は、装備の国産化のみではなく、わが国でやるべきことはわが国でやるということである」といったことを述べています。自主防衛＝国産化というのが当時の議論でしたが、これでは自主防衛の意味として狭すぎるといった議論が起こっていたということでしょうか。

8

上の質問とも関連しますが、沖縄返還問題とも関連して、60年代末から再び自主防衛論が高揚します。有田喜一防衛庁長官がさか

んに自主防衛を主張しますし、特に69年7月のニクソンのグアム・ドクトリン以降、日本国内での自主防衛論議が高まっています。海原局長はそんなことはできないという主張だと思えますが、国防会議では当時この問題については議論されていたのでしょうか。

9

ベトナム戦争の激化に伴い、再び在日米軍基地の問題がクローズアップされてきます。日米安保協議会でも在日米軍基地縮小のための議論が重ねられますが、かつて施設庁で基地問題にご苦労された先生は、当時の基地問題についてはどのように見ておられたのでしょうか。

10

ベトナム戦争が泥沼化する中でニクソン政権が誕生し、日本に対するアジア諸国への経済援助を中心とした役割負担問題が台頭します。一方で中ソ対立が激化するわけですが、当時国防会議および施設庁では国際情勢に関する認識はどのようなものだったのでしょうか。

11

有田長官の下で、四次防の作成が開始されます。国防会議には、こういった作業の開始段階から種々の情報が入ってくるのでしょうか。先生ご自身は有田長官時代の四次防審議についてはどのように見ておられましたか。

※次回は中曽根防衛庁長官時代のお話を中心にうかがいたいと思います。

■三次防大綱

伊藤 きょうは、この質問項目を見ますと、かなりやっかいなことがたくさんございますが。

夏目 やっかいといいますが、正直いいますと、私が見て、なるほどと思ったのだけど、案外知らないこともあるかもしれませんね。というのは、やっばりまだこの時分は部員でしょう。だから、本来の意味で枢機に参画していませんものね。事務作業はやるけれども、本当に外とのやり取りとか、官邸がどうかというところの動きについては又聞きみたいなものでして、自分が直接肌身で感じたことでも聞いたことでもないし、そういう意味では知らないこともあるかもしれません。ただ、そのころからいろいろしゃべっている人がいて、そういうのを間接的に聞いていることも多少ありますけれども。だから、はたしてご質問に答えることができるかどうか。

佐道 この時代にはきちんと証言がほとんどないのです。

夏目 そうですかね。

佐道 ええ。その点でも、周辺情報でも大変貴重な情報になると思います。

伊藤 一番目の（質問）、これは三次防のときの話ですね。

佐道 ええ、この前の引き続き。

伊藤 「周辺の海域防衛能力および重要地域防空能力の強化ならびに各種の機動力の増強を重視する」というふうにある。この前の話の二次防の延長で云々という話と、ちよつと違う面も出てきていると。

夏目 正直にいいますと、このころ私の記憶にあるのは、三次防の原案というのがほぼ出来上がって、あと数日か一週間かそのくらいで国防会議あるいは閣議にかかるというときに、全文が新聞ですつば抜かれたんですよ。何新聞かはちよつと忘れちゃったけれど

どもね。それで、慌てふためいたんです。要するに、そのままというわけにはいかないよと。やっばりどこかを替えないと、新聞がそのとおりだということになると、だれが出したなんていうことになりましてね。あれはどこかのがせネタだろうということにしちゃおうということで、急遽、二、三日徹夜みたいな作業で書きかえたんです。

伊藤 だれかもその話をされていましたね。海原さんと伊藤さんもかな。

佐道 ええ。

夏目 そうでしょう？

伊藤 なんか章立てをかえたり。

夏目 章立てというか、文章の組み立て。中身はそんなにかえないのだけれども、見てくれをかえたんです。それを機能別か何かの表現にしたのが、多分、この周辺海域とか防空能力とか。それまでは、「陸上自衛隊にあっては」とか、「海上自衛隊においては」という書き方だった。ちよつとその中身がいま記憶にない。防衛庁にそんな中身はないからね。新聞記事を見ると思い出すかもしれません。

佐道 確かに二次防のときには陸上自衛隊とかと分けてあったんですね。それが三次防になりますと、「陸上防衛力は」とか、「海上防衛力は」と。

夏目 そうそう、そういう言い方は多分苦肉の策だと思うんです。コロツと三次防で哲学を変えたとか、そういうたいそうな物ではなくて、慌てふためいた。それで、それが結果的には評判よかつたという面もあつたんです。要するに、古典的な陸上自衛隊、海上自衛隊という分け方ではなくて、機能別に記述したということは大いに進歩だとあらぬところからほめられたりすることもあつて、ちよつとくすぐつたような感じなんです。そんなことを狙ったんじゃないんですけどね。

中島 それはどういうところから評価があつたのでしようか。

夏目 どこでしたかね。マスコミか、あるいは国会議員とかそんなところではないでしょうか。なんかそんなのがありました。

伊藤 どうしてすっぱ抜かれたりするのですか。

夏目 うーん、やつぱり油断と、だれかやつぱり出した者が。

伊藤 リークしたんでしょうね。

夏目 リークする者がいるんですよ。ほとんど全文が抜けていましたからね。

伊藤 そうするとやはり、そういうときはどこから抜けたんだという詮索はするのですか。

夏目 しましたけれども、わからないですね。十何人も二十人も関係者がいますでしょう。防衛局だけで相当数になるし、陸海空の自衛隊の関係の防衛部とかいうのを合わせると、相当多くなっちゃう。それは、本当にその仕事に直接タッチしている人はそんなことはしないんですよ。やつぱり相当距離のあるところの周辺から出るのですね。概ね秘密ってそんなものです。すぐ疑られるようなやつはやらないですよ(笑)。

佐道 発表の直前ぐらいになると、その文章を知っている人というのはいかほどの人数になつてくるわけですか。

夏目 コピーをとるし、会議で検討しますでしょう。だから相当広範囲に知れ渡りますよね。また、例えば各幕の部長が会議で出てきたというと、部長は幕僚長にも報告しなきゃいかん、部下にも見せないかんということで、コピーをとるじゃないですか。だから相当広がりますよね。

佐道 すっぱ抜いた新聞の側に対する対応はどうなるのですか。

夏目 「けしからんじゃねえか」といってね、ただそれだけの話ですよ。

武田 確かにどうしようもないですね。

夏目 何新聞かはちょっと私も忘れませんでしたけれども、朝日かなあ。

とにかくそういうことで、当時の三輪(良雄)次官は烈火のごとく怒つたのは事実です。ちよつと余裕があるときなら対応もそんなに厳しくないのですけれども、もう、明日あさつてか、四、五日というときだから、どうしようかという。それが多分、こういう海空重視と思われるような感じになつたのだらうと思われるけれども、それほど意識的に海空重視なんていうことはないのです。このころ現に海原さんは官房長か何かでいたわけですから。多分、局長ではなかつたと思うのですけれども。

中島 二次防のときに海上自衛隊が対潜ヘリ空母の導入を非常に強く推して、結果的にそれがだめになつてしまつたわけですから。

夏目 まあ、全体の趨勢としてはそれもあつたかもしれませぬよ。海空重視というわけではないけれども、要するに防空能力とか。いちばん自衛隊で難しいのは、陸海空の防衛力整備を進めるうえで、陸上自衛隊というのは人間の数なんですね。十八万にするというのが最大の悲願だつた。そのためには戦車何両、火炮何門をつくるわけだけれども、それはわりと細かい話になります。毎年なんぼつくればよいという。ところが船とか飛行機というのは、特に航空自衛隊の飛行機というのはどういう戦闘機を何機つくるかというのを中長期のプロジェクトとして何年か前に決めるわけです。

中島 時間がかかりますから。

夏目 例えば104を百何十機つくる、ファントムを百四機つくるというのは、それは年度予算に先立つて決まっちゃうでしょう。航空自衛隊と海上自衛隊というのは装備の先取りができるんです。陸上自衛隊は毎年の予算で勝負していかなければならぬ。そういう意味では非常に陸上自衛隊はひがんでいた。同時に、海上・航空の防空力というのはそういうものだから、またそういうものを表立ってやらないと大きなプロジェクトとして認められないのですね。国防会議にもかけなきゃいかんし。

伊藤 しかし、海空は陸に比べてお金がかかる。

夏目 まとまった装備に金がかかります。陸上自衛隊は主として人件費ですからね。

中島 三次防のときまでは、海上自衛隊のほうからは、「対潜へり空母をもう一度」という声はなかったわけですか。

伊藤 あったと思いますけれども、三次防にはもう対潜……。そういうのはなかったのでしょうか。

佐道 このときにいわゆるDDHができる。

夏目 ああ、ヘリコプター搭載。

中島 護衛艦ですね。

佐道 それで、あとDDGと組み合わせるとというのが三次防から始まるものですか。

夏目 そうですね。当時もあったと思いますけれども、八八艦隊という名前がよくいわれていたのですけれども、DDGとDDHを一隻ずつ入れた八隻で護衛隊チームみたいなものをつくる。そういうのを四つくりたいというあれなんです。そのうちのいちばん中心になる船としてDDGとかDDHを海上自衛隊は考えた。

佐道 それがこの三次防からは一応認められていて、それでこの文章が入っていたものですから、一応、じゃあ、そういうことも配慮し始めたのかなと。

夏目 結果的にはそういうことはいえるかもしれませんがけれども、そんなに海空重視で陸のあれはということではないんです。

陸がやっぱり、このときでもまだ七千五百か八千人ぐらい、十八万に届いてないんですよ。

伊藤 定員の問題ですね。

夏目 定員の問題で。これが陸上自衛隊の悲願なんです。池田・ロバートソンのときから十八万といっていたわけですから

ね。そういう意味ではあんまり新味がないから多分こういいう言い方をしたのであって、はつきり海空重視で陸は脇においておくと

いう意識があったわけではないです。

佐道 内局の方もやっぱり十八万という意識はずっとあったので

夏目 あった。これはなんとかしたい。しかし、なかなかこれを認めてもらえないですね。毎年毎年、今年は五百とか、千人とか。

結局は、だいたいおそくなつて十八万人達成して。

伊藤 でも、十八万全員充足はできなかったでしょう。

夏目 実員はもちろん不十分なものでしたけれども、定員はとにかく十八万になった。しかし、その後数年たつたら、人間はそんなにいらなとか、防衛力の縮小とかといつて、むしろ十八万の体制は数年しか持たなかったのでは。

中島 このころはまだ募集難ということがありましたか。

夏目 ありました。それが大蔵省の認めない主な言い分ですね。

中島 人が集まらないじゃないかということですか。

夏目 もう一つは、たとえ一兵たりともふやすのは法律改正が必要なんです。船、飛行機はなんぼやつたつて法律は関係ないんで

すよ。ところが、人間は一人でもふやすなら法律改正しなきゃならん。あのころ、法律改正なんていうのは簡単に通るわけがない

んですすよ。社会党が野党第一党として君臨している時代ですからね。そういう意味では陸上自衛隊の人たちは多少ひがんでい

る向きがありましたね。おれたちの昔からの計画がなかなか達成できないで、後から来た航空自衛隊はポンポン予算がついて大型プロジェクトが実施されるという意味でのひがみはあった。じゃあ、

みんなが海空重視かという、そういうことではないと思います。私はそんな意識で仕事した記憶がないから。このころは、ですよ。

その後、またしばらくたってからはありますけれどもね。

伊藤 社会党と親しい海原さんでもだめなんですかね。

夏目 いやあ、それはねえ、社会党は本質的に自衛隊は違憲ですから、表立っては反対しますよ。ただ、個々の質問とかそういう

ことでの取引といったら変だけれども、話し合いはしますし、友情もあるでしょうけれども。じゃあ、社会党が党の方針をひっきりかえしてというのは、そこまではとてもいきません。

伊藤 ではやはり、社会党なきことになってすっきり変わるまではずっとそういう状況ですか。

夏目 むしろこのとき海原さんがいちばん問題にしたのは、二次防までは、「局地戦以下の侵略に有効に対処するものをとにかく目標として、順次骨幹的なものを……」と、こういうことを書いてある。三次防になったら、それがもう三次防の終了時点できあがるかのごとく表現がかわったんです。例えば、「局地戦以下の侵略に対しても有効に対処し得る防衛体制を……」と、たしかそんなような。海原さんとしてはそのほうが、「まだ時期が早いんじゃないか。そんなことを今からいえるか」と問題にしたのはあります。

中島 海原さんは「もつとも」という言葉を入れることに反対されて。

夏目 「もつとも」という言葉にひっかかったんでしょね。「もつとも」なんて入ると、その言葉に一つひとつ意味がありますからね。そんなことできるかい、という。継戦能力とか、即応能力とか書いてありますでしょう。それこそ、このあいだの話じゃないけど、弾もないじゃない、人もいないじゃないかと、そういう話にかえってきて、三次防でできるのか、できやしないじゃないかということ、多分に批評家的な立場で三次防を冷ややかに見た。

佐道 今まさに先生もおっしゃった、継戦能力とか、弾がないとか、それから海上自衛隊で船をつくっても修理能力が足りないとか、そういう後方の関係の問題がずいぶん積み残しのままいろいろ出てきていると思うのですけれども。

夏目 だから、海原さんは二次防と同じでいいじゃないかという発想ですね。特段変わることはないじゃないか。今までと同じ努

力を営々としてやっていけばいい。それを四次防のときもいっているんですよ。また事実、防衛力整備の進捗から見ると、あまりかわりないんですね。海原さんのいうのもわかるんです。

佐道 やっぱり各幕の要望を聞いていると、どうしても正面装備が、ということになるわけですか。

夏目 何か新しい装備とかがないとね。十年一日同じことでは彼らの欲求不満も出てきます。そういう意味では、海原さんは海空重視になったことに対するじゃなくて、むしろ継戦能力とか即応性とか、そういうことが三次防で麗々しく謳っているにもかかわらず、そういうことができる計画になっていないじゃないか。また、できっこないじゃないかという論旨でした。だから、比重が移ったといえれば移ったのでしょけれども、ぼくらはそんな意識はあまりなかった。

佐道 まだこの当時は、自民党の国防部会といっても、そう大して意識されなかったというのはこの前のお話の中にもあったのですけれども、自民党の先生方という人たちが、海空とか、こういうことをいつておられるというのは聞こえて。

夏目 さつき申しあげたように私はまだ下っ端の部員ですから、自民党の先生が個々にどういうことをいわれたかというのをつぶさに承知しているわけではないけれども、少なくともそういう話を聞いたことはないですね。陸海空のどちらを重視すべきだとか、すべきでないとかいう話が自民党辺りから来たという話は聞いていない。海原さんはたしかこのころ官房長ではないですかね。

佐道 そうですね。六七年十月かなんか国防会議に移られますので、ちょうどその前後。

夏目 最初のころはいたでしょう。

佐道 三次防の最初はいらつしやいました。

夏目 六七年というのと、四十二年。じゃあ、三次防ができたときにはまだ防衛庁にはおられた。

佐道 そうですね。

夏目 むしろ久保さんが向こう側にいたんだ。

佐道 そうです。久保さんが国防会議。官房長は主務担当者ではないわけですよ。

夏目 ない。

佐道 でも、やっぱり海原さんという存在は意識するわけですか。

夏目 海原さんというのはやはり、知識、経験ともに防衛庁の局長さんのなかでいちばんですからね。三輪次官といえども、防衛庁の仕事の中身については海原さんにはちよつと遠慮するところがありましたから。だから、会議で海原さんがいえば、ほかの人がそれを押しつけてというふうにはなかなかなかったですね。多少は三輪さんが、「海原は海原、とにかく事務的な案は案で」という雰囲気はあったけれども。海原さんも、最後は半分あきらめたというところではないですかね。

佐道 ご自身は、これは防衛局長が担当で、自分は官房長で担当ではないから黙っていたみたいなおことをおっしゃっていたのですけれども。

夏目 うそだよ、黙っているはずがないでしょう。

佐道 そう思います。

夏目 まあ、防衛局長のときと比べれば、それは黙ったかもしれない(笑)。

佐道 (笑)、比較の問題ですか。

■三次防大綱の審議過程における久保参事官

夏目 しかも、大綱とこれは半年ぐらいうれずれがあるのかな。四次防はもつとずれがあるんですけどもね。(質問の)二番目にある久保参事官がどうのこうのというのは、正直いいますと、ここに書いてあることを久保さんがどういったかということを実は知りませんけれども、いわれてもなるほどなと思うのは、三次防を

お読みになったらわかるとおり、三次防に情勢判断というのはないんです。とにかく国際平和を希求し国連との強調のもとに何とかかんとかで、しかし、いったん侵略があれば云々と書いて、そこらへんのところが全部省略されているんですね。海原さんという方はとにかくそういうことと関係なく、防衛庁、自衛隊が、列島守備隊論的なものとして最小限のものをきちんと整備していくという考え方だったので、それはそれで一つの考え方だと思えますけれども、久保さんという方は、一つの哲学みたいなものを持っていて、現在の世界情勢はどうなっているか。そのなかで日本の防衛を考えたときに日本の自衛力というのはどうあるべきかということを決えず考える人です。だから、そういう情勢判断のない防衛力をわけなくつくるということに対して批判的な、アンチ海原じゃないけれども、久保さんは海原さんの部下で防衛課長の時代に既に海原さんとちよつと違った立場でものを見ていたのです。そういう不満みたいなものがあつたと思います。「おまえ、学者みたいなことをいつていても、防衛力というのが決まっちゃっていかないといいんだ」という海原さんと、「それはおかしいじゃないか」という久保さん。それが立場がかわって国防会議へ行つたものだから、ある意味では久保さんは水を得た魚のごとく自分の持論をどんどんいうようになった。下にいるときはいえなかつたと思います。

中島 後に基盤的防衛力構想につながっていく久保さんの「KB個人論文」というかなり知られた論文があります。先日久保さんの追悼集を読ませていただいておまして、先生も書かれていらつしやいますけれども、座談会で玉木靖司さんが、ああいう久保さんの考え方というのはかなり早い段階から……。

夏目 あつたんですよ。僕がよく聞いたのは、久保さんは、自衛隊の存在というのは、防衛力としての意義付けをもちろん否定しているわけではないのだけれども、独立国家としての象徴として

何らかの軍隊が必要じゃないかと。それから、シビック・アクシヨンという言葉を使っていたと思いますけれども、やっぱり軍隊はただ闘うためじゃなくて、要するに平和時においてもいろんなことにも有効に使えるのだし、そういう意味で防衛力というものを考えたらいい。今でいえば災害派遣とかPKOみたいなああいうことが頭にあつたのかもしれないね。それともう一つは、アメリカとの関係とか国際情勢のなかで日本の防衛力がどうなきやいけないかということを考える人でした。それがだんだん熟成されて基盤的防衛力というものになって、KB論文というやつになるのですけれどもね。だから、制服がずっと牢固として持っていた脅威対処論とはまったく相容れない。

武田 久保さんみたいな発想はむしろ特殊な発想ですか。

夏目 特殊ですけれども、われわれのなかには同感する向きも相当あつたんです。

佐道 三次防の過程で久保さんが情勢判断の問題をこうやっていつておられるわけですけれども、久保さんが国防会議で発言しておられることというのは内局のほうに聞こえてきたりするものですか。

夏目 聞こえていると思いますよ。だから久保さんに手を焼いている向きもあつたんです。今まではこちらにいて一所懸命やっていた人が、いつの間にか敵に回って相手の実情を知って攻撃してくるわけだから、やりにくいですね。しかも、名だたる理論家ですし。久保さんのいったことで私が今でも思い出すのは、アメリカという国はプロパビリティで議論する。日本はポシビリティでしか議論しない。局地戦以下の侵略と云つたって、そんなものポシビリティとしてはあるかもしれないけれども、蓋然性はないんだと。アメリカだつてそうだ。アメリカはそういうことで起こりうることを予測しているいろいろ研究するのであって、日本は空理空論じゃないかと。そういうあれがあつたから、国際

情勢とか、象徴とか、そういうところで自衛隊の生きる道というものを考えられたのではないかと思います。

中島 先生はその久保さんのお言葉をいつぐらいにお聞きになられたのですか。

夏目 多分、ぼくは部員のころに聞いたと思う。あの方は、公式のときにはあんまり出さないけれども、お酒を飲んだり、それから部下とこういうところ（部屋）で話しているときに持論をざっくばらんにいわれることが多かつたですよ。

佐道 国防会議ということは、普段いらしている場所は違うと思いますが、防衛庁のかつて一緒におられた例えば先生とか、よくお会いになつたりされていたのですか。

夏目 いや、国防会議に行つてからは正直いつて私はあんまり会つていません。仕事のときの連絡以外で、個人的には。国防会議というのは外務省とか、大蔵省とか、そういうところの参事官が来ていますでしょう。国防会議に行かれてからは、久保さんはむしろそういう人たちと胸襟を開いている向きがありましたね。だからやはり、こういうことをいいたいのもわかるんですよ。

伊藤 海原さんは日本の軍事情勢とかそういうことはあんまり念頭がない？

夏目 海原さんは世界情勢とかそんなのはあんまり関心なかつたんじゃないですか。

武田 そうですか。

夏目 そういうものに対する反発じゃないけれども、ちょっと物足りなさみたいなものを久保さんは防衛庁にいるときも絶えず抱えておつたと思います。だけれども、直属上司であんまり反対もできない立場だったが、国防会議に行つたら、今度は防衛庁の案を審議する最先任の参事官ですから、これはやっぱり元気が出た。伊藤 ちよつと突然変な話を伺いますが、この当時だつて日本の自衛隊というのは軍隊だというふうには認められているわ

けでしょう。国内的には、これは軍隊ではないと言い張っている。

夏目 国内的にもみんな軍隊だと思っているけれども、国会で聞かれて軍隊かといえば、そうじゃないというね。一般の世界でいう軍隊とは違うと。交戦権がないとかいつてごまかしたけれども、軍隊ではなくて警察だとか何とか思っている人はだれもいません。れっきとした軍隊だという意識はある。ただ、国会では口が裂けてもいつちやいかん。同じだとはいわない。要するに、建前と本音の話なんです。それが日本をいちばんだめにしている原因だと思います。防衛論議で建前と本音があまりにも乖離している。それを埋めようという努力をだれもしない。それはやっぱり、社会党とかそういうものが強くて、いったら内閣がつぶれるとか、そういうことになると思うからいえないかった。だから、今は天国みたいなものですよ。

伊藤 それでも、国防省にもならないし。

夏目 だけど、言いたいことは堂々といえるじゃないですか。

伊藤 まあ、いえるようになりましただけども、実現はどうなのだろう。

佐道 なかなかいかないですよ。

夏目 遅いですね。明治開国以来、二十七年で日清戦争をやった明治時代と比べたら、本当に遅々として。

中島 佐藤内閣のときに省への昇格という話が。

夏目 あったんです。法案も出たんです。出ただけで、やはり、みんなの合意を得るような土壌がまだなかったのじゃないか。中道 中で働いていらっしやる方は、省になるのだという意識でいらっしやるのですか。

夏目 いや、そんなに簡単になるもんかと。あのときの法律というのは、正直いって、事務的にどうしても省でなければいかなと、いうことで下から上げたのではなくて、むしろ、これは省にすべきじゃないか、ひとつ考えろというので急遽つくった法案ですか。

らね。そんな簡単にいくかよというふうな。

中島 その指示はどこから来たのでしょうか。

夏目 どこから来たのでしょうか。どうせ大臣とか、国防会議みたいところでそういう意見が出たんじゃないでしょうか。ちょっと私も記憶はありません。あれは有田（喜一）さんのときかな。あ、違うな、藤枝（泉介）さんかな。

佐道 法案が出たのは池田内閣ですね。六三年。

夏目 藤枝さんぐらいかな。

佐道 久保さんが国防会議で情勢判断がないとかおっしゃって議論がされているわけですけども、結局、三次防というのはいままでできるわけですね。やはりこの三次防の段階は国防会議でこういう議論をしてもほとんど反映しないということなのですか。

夏目 これは国防会議の参事官会議ですよ。幹事会じゃないと思います。

佐道 あ、そうですね。

夏目 参事官会議というのは課長レベルの会議なんです。僕らは出ないから知りませんが、参事官がこうやって発言しているというのは、多分、幹事会ではないと思います。国防会議の参事官会議が実質中心になって事務的な仕事をしていますからね。幹事会というのは次官なんです。だから多分、こういうときは声の大きい人がね。外務省とか久保さんとかがパッパッパマクしたたら、防衛庁の……当時はだれだったのかな、玉木さんかな、あるいは今泉（正隆）さんかな。国防会議の参事官は今泉さんですから、けんかにならないですね。だけど、実害はないからいわれつばなしで、帰ってきて報告しても、「そんなの放っておけ」というようなことではないかな。

佐道 やっぱ国防会議はそういう存在だったのですか。

夏目 自衛隊が国際情勢のなかでどうだというふうな議論は、久保さんが腹の中でいろいろ思ったようだけれども、それ以外の人

はあまり熱心でなかったですね。独立国として、とにかく自衛隊はつくるのだ、とにかく急いでつくるというのが一次防以来の認識ですから、まだ国際情勢との関連において真剣に議論するようなどころまで成長していないという認識です。

伊藤 このときはまだアタッシェや何かを出していないのですか。

夏目 いや、あちこちに出してはいるでしょう。まだほんの十カ国ぐらい、アメリカ、ロシア、イギリス以外に数カ国、せいぜいそんなものだと思います。アメリカもまだ自衛隊というものをそんなに意識していない。とにかく昔は装備品から何かからだだで、「あれやるよ。持っていけよ」と援助していた。それがだんだんアメリカも、金も苦しくなるわ、ベトナム戦争が始まるわ、日本も金持ちになつていくわということで、東南アジアやアフリカと一緒に日本にただでやるわけにはいかないじゃないかということでは援助に切り替えた。だけれども、援助は援助としてアメリカからどんどん入ってきますからね。技術的なものとか。金だけは取りますけれども。だから、まだ日本はイコールパートナーとしての軍隊として認めるようなものではなかった。

伊藤 イコールパートナーでなくても、何らかの役割を期待しているということはないのですか。

夏目 いやあ、それはいいですね。あのころは日本の防衛力なんというものは、ただ日本で何かあったときに米軍基地さえきちつと守ってくれさえすればいいぐらいの気持ちだと思っんですよ。

伊藤 警察とあんまり変わらん感じですか。

夏目 まあ、そうですね。立派な軍隊に育てようという気持ちはあったけれども、まともに対等にどうのこうのというところまで行くにはまだ何年かかかる。昭和五十年代ぐらいに入らないと、そういうあれにならないですね。

武田 そのアタッシェの方が例えば国際情勢を判断するとか、情報を持つてくるとか、そういうことを。

夏目 それはあつたと思いますよ。

武田 防衛庁でも基本的に情勢判断みたいなことはやっていたのですか。

夏目 やつてはいたと思います。ただ、どこでもそうでしょうけれども、情勢判断をやっている情報屋というのがいて、自分たちが一所懸命仕事をしているけれども、実際に防衛力整備をやったりする人たちはそういう人たちの意見とほとんど無関係に計画をつくりますからね。どんな世界でもそうなんだけれども。そうしたことが、情報屋がふてくされたところへ走るひとつの原因にもなるのでしょね。本当にそういうものは有効に使おうという日本人というのは特にヘタですね。情報をうまく利用していくというね。

伊藤 だから今でもそうじゃないですか。

夏目 まあ、そういうところはありますね。

伊藤 だいたい情報機関がほとんどないのですから。

■三次防の情勢見通し

中島 三次防が決まるころは既に中ソ対立がだんだん明らかになつてきた時期ですけれども、そういったことは防衛庁の内部ではどのように捉えられていたのでしょうか。

夏目 中ソ対立があつたから、じゃあ、自衛隊はどうすべきかという議論まではなかなかいっていません。情報として、アメリカとソ連が今こういう関係にある。あるいは、中国で核実験をやつたとか、これは日本の防衛にとって脅威になるかならないかという議論はしたけれども、「なる」といったところで、じゃあ、どうしよう。まだとてもこんなところ（低い位置を手で示す）にいる自衛隊ですからね。それでもつてすぐ、自衛隊をどうする、こうする、という議論にならないのですよ。そこはアメリカと違うところで、アメリカは何かあればすぐそれに反応して、それに対

応するものをやらないと、また、やるだけの能力もあるし実体もあるのだけれども、日本はまだ、海原さんにいわせれば、「まだ訓練部隊だ」というのだから。現にその当時持っていた潜水艦なんていうのは訓練用の潜水艦が主体でしょう。たしか千トン足らずか、千トンやつとこぐらいのね。今でこそまともな潜水艦を持っているけれども、最初の十年くらいは、たしか八百トンくらいから出発して、千トンぐらいの潜水艦。これはあくまでも訓練用の潜水艦なんですね。だから、そういうものだという意識が海原さんもあるんです。アメリカにもあった。だけど、自衛隊の制服の人たちはそういうことを認めるのは面白くないでしょうね。

佐道 制服はそうでしょうね。逆に、海原さんは六〇年代の見方のままずっと来られているような感じもしますが。

夏目 そうですね。ちよつとクラシックで、変わらないんですよ。また、自衛隊も変わらないところもあるんです。その後、世の中がガラッと変わってくると、海原さんのようなことをいっていらなくなる時期が来るのですけれどもね。まあ、幸せなことに、海原さんが現役でいるあいだは海原さんのいうことがまっとうに通った時代でした。

中島 この時代のこと、先ほどアメリカのことが出ましたので一つお伺いしたいのですけれども。六六年ごろですが、かなりアメリカのほうで自衛隊のPKOへの参加ということを真剣に検討しておりまして、外務省に要求があったり、あるいは、防衛庁の幹部の方々と話し合いをしたり、防衛庁のほうからは積極的な回答を。アメリカの文書を見るかぎりですけれども、そういうことが六六年の初頭に。

夏目 六六年というと？

中島 四十一年の初頭、二月です。その後にもこうした議論があったようです。第三次中東戦争、これが六七年の七月ですから、四十二年ですか。この時、自衛官が個人として外務省に出向してPKO

Oに参加するという形を外務省は検討していたようなのですけれども、結局、六七年のおわりにはその話はベトナム戦争などの絡みで立ち消えになっていくのですが。何かそういったお話は。

夏目 聞いたことはないですね。

中島 そうですか。

夏目 PKOという言葉ではなくて何かほかにあったかもしれないけれども、少なくともそういう話の中で大いに議論したことはない。ただ、中東戦争でも何でもそうなのだけど、観戦武官みたいなものを派遣できないかという希望はずいぶんありましたね。昔、日露戦争で各国から来ていましたでしょう。ああいうことで、やっぱり最新の戦争を知ることがいちばん自衛隊にとつてプラスになるのではないか。そういうチャンスというのはできないのかと。だけど、まともな議論としてはやっぱり表に出ませんでした。

伊藤 そのこと自体がですか。

夏目 というのは、実際、不可能ですからね。アメリカがうんといわなければだめだしね。そのまま行っても、秘密のところへ連れて行くわけにはいきませんし、お客さんでこられても邪魔くさいだけでしょうからね。まして、PKOなんていう言葉は当時はなかったからね。ほかの言葉を使ったのかもしれない。それがそういうことかどうか知りませんが、あんまりそういうことをいってはいないね。アメリカのどこにそんなのがあるのですか。

中島 アメリカ側とすれば、できれば日本に域外で活動してほしいと。ただ、それは憲法上問題があるし、日本国内にもアレルギーが強いと。であるならば、PKOという形で慣らし運転のような形でいけないうことがアメリカの本音であったと。

夏目 経済援助をやってくれというふうな話は当時からありましたけれどもね。

中島 それに加えてという形で、向こうの国務長官も国防長官もそういう方向で支持をしておりましたので。

武田 それは国務省の文書ですか。
中島 ええ。

夏目 外務省へでも来ていたのかな。外務省で握りつぶしたか、防衛庁へ持ってきて、やっぱりだめだという話でそのままになっているのか、そこは知りませんけれどもね。四十七年でしょうか？

中島 六七年ですね。
佐道 四十二年です。

武田 そういうアメリカの意向はやはり、外務省にまず来て、それから防衛庁なのですかね。

中島 防衛庁とも直接話してはいるみたいですね。

武田 ああ、そうですね。

夏目 だれが話したの？ 四十二年といたら、やっぱり海原さんとかそういうのだね。

佐道 そうでしょうね。

夏目 あるいは、外務大臣から大臣のところへ来ているのかもしれないけれどもね。

武田 増田（甲子七）さんのときですね。

中島 アメリカ側の感触と……。

夏目 だけどねえ、アメリカという国は本当にいろんなことをいつてくるからね。本気のもの、本気でないもの、ヘタな鉄砲も数撃ちや当たるみたいに、とにかくやたら注文とか希望をいつてきます。だけど、それをいちいち取り上げてまともに防衛庁で検討したという事は私は知りません。

佐道 もしこういう問題を検討するとしたら、やはり防衛局ですか。

夏目 そうだと思います。

佐道 外務省との窓口ということでは、国際担当の参事官と。

夏目 まだそのころは防衛局だと思いますよ。国際担当参事官とというのは、この前も申しあげたように、実際の実務に入っていないから。お客さんが来たときのアテント、大臣が行くときの

通訳要員ではないけれども、調整して日程をつくったり。そんなようなことはやっているけれども、いわゆる情報もやっていないし、対米の具体的な中身の折衝はやっていません。

佐道 すると防衛局ですよ。

中島 当時、アメリカ側からのリクエストとしては、例えば基地問題ですとか、原潜の寄港問題とか、そういったことが多かったのですか。

夏目 それは大いに来ていました。だけど、それもまずいちばん最初は外務省ですよ。日米合同委員会の代表が外務省の北米局長ですからね。この前もちょっと申しあげた、日米安保協議委員会というのがある、2プラス2で、今は大臣同士、國務長官と国防長官、こちらは外務大臣と防衛庁長官になっているけれども、当時は、こちらは大臣だけでも、向こうは在日米軍司令官と大使ですからね。そんな防衛の中身の政策マターみたいな話はないから、結局は基地問題だとか、アメリカの原潜が寄るぞというような情報をくれるとか、そんな話ですよ。アメリカとの関係では、防衛の中身についてというのはそのころはほとんどなかったです。

佐道 基本的に先生のご印象としては七〇年代の後半からということになるわけですか。ガイドラインとか一連の問題になっていく。

夏目 そうですね。昭和五十年代に入ってからですね。

■官邸との関係

佐道 きょう最初に官邸との話なんていうのはあんまりとおっしゃっていたのですけれども、ちょうど三輪次官と愛知（揆一）官房長官が話していることのために、質問の三つ目で取り上げたようなこと（質問項目に、愛知官房長官が三輪次官に「総理も時々役所でなく宅でも静養先でもあなたの方の話を聞くチャンスを作る」といい、そう努力して見よう」と述べた、とある）をやっている

のですけれども。

夏目 おもしろい話だけれども、それは初めて聞く。自宅でも静養先でもあなたの話を聞くチャンスをつくる……、愛知さんというのもリップサービスがいい人ですね（笑）。こういうことをどこでいったのか知りませんが、たしかにこういうことはいえると思う。時代がちよっとずれるかもしれないけれども、かつて池田総理の時代というのは防衛についてはほとんど関心ないんです。経済成長というか、所得倍増というか。あの人が唯一防衛に関連したというのは、池田・ロバートソンの会談があつて、宮沢（喜一）さんが特使で行つて。しかも特使で行つたときも防衛庁に相談がないのですね。たしか村上孝太郎主計局長が何かを帯同しているんですよ。要するに、防衛問題というのは財政問題とリンクしたものとしか認識がない。だから、本当に日本の防衛はどうあるべきかなんていうことについての認識は池田内閣時代にはなかったと思います。それが佐藤さんになると、佐藤さんはやっぱり、これまた人間の性として池田と違うことをやりたいと思うのですよね。そういうのがあつて、沖繩に首を突っ込んだり、核抜きだとか、そういうことに非常に関心を持ってきた。そういう時代の変わり目で、防衛問題も総理はもうちよつとやっつかないかなければいかんというのは、池田内閣時代と比較して。愛知さんがいわれたことは、あるいは立ち話か何かでいったかもしれませんね。だけど、そんなものどこでいったのか、こんなおもしろいことをいつているのかと思つた。よくお調べになつたなど、むしろ感心しているんです。

佐道 これは、三輪さんが三次防の審議の過程で愛知さんのところに報告に行つて、先生がさつきおっしゃつた、国防会議も久保さんが行つてうまくいくと思つたら、ずいぶん違うことを言い出したので困つていう話とか。

夏目 そうなんです。手を焼いたんです。

佐道 それと一緒にこの話も出てきています。これが記録に。

中島 出典は何ですか。

佐道 これは堂場（肇）さんの文章のなかに入っています。

夏目 ああ、堂場さんか。

佐道 はい、堂場文書のなかに、三輪次官と愛知官房長官の会見要領という形で入っています。

武田 お二人で会見しているのですね。

佐道 会見している。

伊藤 官房長官と次官とのブリーフィングは。

夏目 それはなと思うんだよね。多分、国防会議との間がなかなか話が進まなかつたんだと思うんですよ。今いった原則論みたいなことで久保一流の論理を展開されると歯が立たないから、仕事が進まない。そういうことが背景にあつたんじゃないかと思う。あの野郎、わかつていると思つたら、向こうへ行つたら全然わかつてくれない。

伊藤 官邸との関係は定期的なものではなかったのですか。

夏目 定期的にはないですよ。国防会議もないですよ。

武田 国防会議と防衛庁？

夏目 あと官邸もない。

佐道 例えば防衛次官が総理にブリーフィングするということは。

夏目 アポをとって行くことは、やろうと思えばできたと思えます。しかし、やっぱりエチケットとして、実力者の官房長官がいれば官房長官にまずいことになるのでは。

佐道 定期ブリーフィングということをやっているわけではない。

夏目 やつていません。

伊藤 しかし、国の根幹にかかわるような安全保障問題についてブリーフィングがないというのもちよつと……。

夏目 それは国防会議が本来やることなんです。やるようになっていて、また事実、海原さんの前の北村（隆）さんは年じゅう官

邸に行っているんですよ。しかし、この方は年寄りで、ただ行っているだけで何を話しているのかよくわからないのですけれどもね。だけど実態は、いま先生がいったように、官邸は防衛問題に関してはニルアドミラリーですよ。あんまりややこしいことさえ起こしてくれないといいやと、あんまり関心ないですね。

中島 そういった姿勢は佐藤時代になってもあまり変わらなかつたと。

夏目 本質的には変わっていないですね。

伊藤 しかし、佐藤さんは総理になる前は防衛問題を一所懸命されるようなことをいっていたんじゃないですか。

夏目 みんないうんですよ、そんなものは。

武田 憲法を変えるとか。

夏目 口を開けば、「国防は国家の基本的な……」というけれども、一つとして具体的にやったかというのと、一人もいないじゃないですか。

佐道 佐藤さんにかわって、やはり期待はされましたか。

夏目 私はそんな記憶ないですね。まあ、幹部でもなかったし、正直いいまして今の話も直接響く話ではないですからね。ただ、佐藤さんのほうが池田さんよりは多少いろんな問題で、すぐあと沖繩の問題なんかが出てくるけれども、いやでも心でも関係が出てきますからね。それは人柄かもしれないけれども、時代もそういうふうに変わってきているということもあるのでしょうか。

伊藤 国防省への昇格もないしね。

佐道 いろいろ最初に総理になられるときにおっしゃっていたわりには、防衛費の大幅増額というわけでもないです。

夏目 ないです、ないです、絶対ないです。だから政治家なんて信用してない。

中島 おそらく防衛庁のほうにはこういう話は伝わっていないと思いますが、佐藤さんが総理になってまもなくライシャワーさん

と会談しまして、その次の年にジョンソンとの首脳会談が予定されていたのですけれども、日本は将来的に核武装をする必要があるというようなことをライシャワーに伝えてワシントンは大騒ぎになるのですけれども。そういったことは防衛庁のほうには。

夏目 知らないですよ。少なくとも事前に相談とか、そういうことはない。政治家としての発言なんですよ。総理になつたらなつたでやはり、周辺にいろんな知的なブレイクができるでしょう。そういう人たちの意見を聞いて、これはいけると思えばしゃべるしね。必ずしも役所からの進言とか、役所と相談してということではないと思います。また、そういうことをいう海千山千の評論家とか学者がいっぱいいるんだな。

伊藤 そういう人たちは防衛庁にも出入りしているのですか。

夏目 していますけれども、やはりアンチ防衛庁みたいな人がそちらのほうに行くのでしょうか、多分ね。

伊藤 今の防衛庁は何をやっているかと。

夏目 ちつともわかってないとか、聞いてくれないとか、あいつらは全然そういうことを勉強しようとも思っていないとかいう。今の、三輪さんが、「久保くんはいうことを聞いてくれない」といつていいに来るような(笑)。

■メディアエクスプレス

佐道 この当時のジャーナリズムからすると、一般的傾向としては、どちらかというとアンチ自衛隊の風潮がまだまだ強い時期だと思ふのですけれども、比較的公正に防衛問題を捉えているなどというような方で、ご記憶にあるような評論家とかそういう方は当時いらつしやいましたか。

夏目 多少いましたよ。どの時代か忘れたけど、一人変な例を挙げると、細川(護熙)総理大臣。

佐道 はい、朝日の防衛担当の記者。

夏目 あの方は防衛をやっていたんです。あの人は本を書いているんですよ。それはやっぱり防衛の重要性をいったんです。総理のときは全然だめです。

一同 ハハハハハハ(笑)。

伊藤 書いたことも忘れてる(笑)。

夏目 僕はよく行ったことがある、レクチャーというかね。なんて高貴なやんごとない顔をしている人かなと思つた(笑)。

佐道 印象に残られたのですか。

夏目 やっぱりね、ああいうノーブルな人というのは付き合つたことがないから。そのときはもう国会議員になつたんですけれども。

伊藤 フフフフツツ。

夏目 それから、堂場さんなんかは理解があつた。理解があつたけれども、やっぱり新聞社という立場がありますから、もろ手を挙げてというわけにはいかない。ときには辛口のこと書きますけれども、根っこではやはり同情して。それは特に海原さんとの友情関係もあるのかもしれないね。

伊藤 海原さんですか。

夏目 うん。

伊藤 篠原(宏)さんなんかもそうですか。

夏目 だと思いますが、彼のほうが堂場さんよりもうちよつとぶれが大きいですけどもね。悪いことも書くけれども、協力するときはしてくれました。だけど、朝日という社の看板を背負つてしまうとそれはできません。社内でつぶされちゃうからね。当時、産経の牛場(昭彦)さんなんかはまだいなかつたかな。産経新聞に牛場という記者がいるんですよ。アメリカへ行った牛場大使の息子さんでね。しかし、この人もちよつと偏つていた……。まあ、産経新聞ですからあれだけけれども。あるいはちよつと時代が下がつているかもしれないけれども。多少はいるんですよ。だけど、個々の新聞記者がそうであっても、社としてはそういうもの

のがなかなか表面に出てきませんね。

伊藤 防衛庁を応援するような評論家はどうですか。

夏目 当時、評論家、学者の類ではまともな人はまだいませんでした。もうちよつと後になって出るのですけれども、私が審議官になってぐらいかな。前に文部大臣をやつた坂田(道太)という人が防衛長官になられ、これからはやはり防衛庁だけでいい顔をしたつてだめだというので、学者とか評論家とか作家とかそういうのを集めて「防衛を考える会」というのをつくつて、朝日の荒垣(秀雄)とか、角田房子とか、何人かそういう人を集めて、「防衛を考える会」を作り防衛庁に対して親しんでもらつて理解してもらおうというのが一つ。もう一つそれとは別に、高坂正堯とか、公文俊平とか、佐藤誠三郎とか、渡辺昭夫とか、こういう人たちを集めて勉強会をやるんですよ。若手の学者。この人たちがそのあと活躍するんですね。だけど、当時はまだそこまで行つていなくて、密かにホテルで会つてお互いに勉強会をやつたりして。私はそのまともをやりましたから、よく知っています。

伊藤 その発想はだれなんですか。

■坂田長官のNSN

夏目 それは坂田さんです。坂田さんというのはちよつと役人の考え付かないことを考えるユニークな大臣でした。いい悪いは別として。

伊藤 あの人はハト派なんじゃなかつた?

佐道 ハト派といわれています。文教ですからね。

夏目 ハト派です。三木さんか何かに心服していたしね。だけど、ハト派の人のほうが悪いことをするのにいいんですよ。悪いことをするつて、言い方が悪いけど(笑)。

武田(笑)、なんとなくわかります。

夏目 何か一つのことに変化をもたらそうとするときには、あんな

まり右よりの人間がやっても通らないんです。

中島 ガイドラインも坂田さんのときですからね。

夏目 やっぱりね、坂田さんがやるならそう無茶なことはしないだろうという、そこはかとなく信頼感がある。

伊藤 それはおもしろいですね。

夏目 総理だってそうですよ。三木さんだってもっともあれでしょう。三木・フォード会談か何かでガイドラインの道筋をつけたのが三木さん。

中島 そうですね。

夏目 やはりそういうところがあるんですね。あれ、中曽根さんなんかをやったら絶対にだめ。

佐道 そうでしょうね。

武田 きつとデモが起きますね（笑）。

夏目 本当にそうなんです。

佐道 中曽根さんはハト派的なことをいっても信じられない。批判されたりして（笑）。

夏目 坂田さんみたいに丸いめがねでこうやって（背を丸めて）いうと、この人がいるのだから悪いことをしないでろうという、なんとなく安心感があるんですね。それでスルツとやるんですね。日米防衛協力だって、坂田さんがね。これはちよつと後になるけれども、日米の間に海域分担の密約があると。そのときに、「そんなものはない」といって。事実はないんですよ。だけど、これをないといっておしまいにしてはもったいない。ひとつ一歩前へ出ようじゃないかといつて、「ないけど、日米で作戦的なり合わせをするのは絶対に必要だ」といった。国会はワーツとなつたんだけれども、そのままそつちへ走っていくのですよね。それがガイドラインへつながっていくんです。それで、三木・フォード会談にもつながっていくのです。

伊藤 そういうのはお膳立てする人がいるのではないですか。

夏目 それがね。もちろんお膳立てはするのだけれども、やはりその人の人柄で、お膳立てしても乗ってこない人はいっぱいですからね。坂田さんはそのところは本当に芯が強い方でした。僕は当時防衛課長ですからよく知っていますけれども、防衛課長と、丸山（昂）という防衛局長と、坂田さんと三人で、やろうといつて決めたんです。それはまた、久保さんは反対なんですね。

佐道 そうですよ。

夏目 敵か味方かわからない。

伊藤 フッフッフッフッフ。

佐道 いや、七〇年代は面白いんですよ。だから、それはまた後からじっくり、たくさん聞くことにして。

夏目 久保さんが常にいつていたのは、アメリカ人はプロバビリティーで考えるけれども、日本人はポシビリティーでしかものを考えていないことです。それと、日本には防衛政策がないといつていました。それはなぜかといつたら、今いつたような、あるべき姿を追及したのではないから。そういうふうな不満とか、鬱積したものを防衛庁にいるときからお持ちになつていて、それが結局、国防会議へ行つていいチャンスが来たというので持論を。こつちは全然変わっていないから、「なんだよ。きのうまでこつちについて一緒に仕事していたのに、違うことをいうじゃないか」みたいなあれがあつたのです。

佐道 久保さんが防衛局長になつたときには、今度は国防会議から大変な目にあうことになるのですよね。

夏目 それは海原さんのとき（笑）。因果はめぐるといふけど、だからおもしろい。

武田 わざとやっているんじゃないですよ。

夏目 あつちへ行つたり、こつちへ行つたり、どちらかにいるんですよ。

佐道 そのとき先生は国防会議にいらつしやつたんですね。国防

会議から見ておられた。

夏目 で、久保さんが防衛局長になったときに、またこちらへ来たんですよ。

佐道 そこも非常におもしろいので、それだけでも何回も聞く価値があるので、ちよつとそれはおいといて。

武田 エンドレスですね。

■ 国防会議事務局参事官に

佐道 先生が国防会議に移られることのほうをそろそろ。

夏目 六八年というのはいつですか。

佐道 (昭和) 四十三年ですね。

夏目 たしか久保さんが警察から帰って、国防会議の主席というか、防衛庁から行く参事官は筆頭参事官というのです。あと外務省とか、通産省、大蔵省、何人かいるんです。その人たちのいちばんトップ、事務局長の次に偉いんですね。偉いというか先任で、まあ、防衛の仕事が主ですからそうなっているのですけれども。あの人が何かの都合で、こういう前のようないきさつがあつたからかわつたとは思えないけれども、時期が来てまた警察へ戻って、交通局長か何かになったのです。ところが、このときは既に局長は海原さんなんです。海原さんは久保さんが出てホツとしたんですね。今度こそ俺の意のままに動くやつと。それで、あれこれ選んで。

佐道 それが……。

夏目 いや、違ふんです。私なんかまだ部員ですからね。課長になる時期にはちよつと早いですよ。しかも筆頭参事官。だから、そんな話は人ごとだと思つて高みの見物だったんです。最初は、丸山さんって私の何代か前の次官に白羽の矢が立つたんです。この人は何をやってきたかな、総務課長か。

佐道 総務課長に來られたわけですね。

夏目 審議官か何かをやっていて、どうかと言われて、「ご勘弁

を」と。絶対にいやだというわけですよ。

佐道 丸山さんがですか。

伊藤 それは海原さんに対して。

夏目 身がもたねえって(笑)。その次に伊藤圭一に白羽の矢が当たつて、彼も逃げたんです。

伊藤 あれ? そんな話したかなあ(笑)。

佐道 なんかも適任のような気もしますけれども(笑)。

夏目 そう、いちばん適任。でも、やっぱり彼もまた一緒にやつたら身がもたないと思つたのでしようね。

佐道 やっぱり、ちよつと休養する時間が欲しかった(笑)。

夏目 たしかそうですね。丸山さんと伊藤さんが、第一、第二の候補だった。みんな断つた。防衛庁も、「それはそうだろう」といつて同情して、行かないですんだ。それで、しばらく空いていたんじゃないですかね。そのうちに私に声がかつたんです。きつと、どうでもいいやと思つたんじゃない? それで行つたんだけど、年次的に私がいちばん若造なんですよね。久保さんと私は十年ぐらい差があるんです。外務省にいる人も久保さんより数年あとの人だから、みんな偉いんですよ。だから、「若いやつが来た」なんていつて、みんな私のことをなめてかかつているし、最初は本当に居心地悪かったです。でも、海原さんという人はそこは考えてくれて、ほかをわりと早く次の参事官にかえてくれたんです。みんなだいたい同じ年次の人が来てくれたものだから、それで多少はこちらも身のすくむような立場ではなくなりました。そのころまではまだ私は海原さんの信任が多少あつたんですよ。まだしばらく続くんです。

伊藤 他省庁でもやはり、それだけ年次が違つとずいぶん違つたんですか。

夏目 役人というのは年次は大きいですからね。

伊藤 省庁にかかわりなしに。

夏目 いくら役所が違つても。外務省なんかはすぐかえて、あとはよこさなかつたですものね。

伊藤 でも、外務省がよこさないと困るのではないですか。

夏目 それで通産省から来ました。それも海原さんなんです。外務省は要らんといつて。そういうところにも、情勢とかそういうものに対する無関心さというか、興味のなさというものがあらわれていると思うのですね。べつに通産省が来たから装備の国産がどうというわけではないけれども、通産省のほうがより必要じゃないかという判断で、国防会議は私と大蔵省と通産省になった。

伊藤 一國自衛隊主義で。

夏目 国際情勢というそういうの、ご自分は好きなのですけれども、外務省がとやかくいうようなものではないという意識がどこかにあつたんじゃないですか。

佐道 装備のことを考えて通産と、あと予算のことで大蔵というのは、なんか海原さんらしいです。

夏目 らしいでしょう？

武田 事務局長はそれだけ力が強いのですね。

夏目 強いですよ。だってあれは総理直結なんですから。官房長官は上司ではないんです。総理大臣の部下。

中島 あとの話ですけれども、中曽根さんが海原さんを批判して、「国防会議の事務局長というのは茶坊主だ」といわれたことが。

夏目 ある。

中島 それは必ずしも事実ではないですか。

夏目 いや、事実です。事実つてどういう意味かわからんけれども、北村さんという方は、相当ルートルの方で仕事を一所懸命するというタイプではないのだけれども、とにかく官邸にお茶を飲みに行くんですよ。海原さんは一度も行かないんだもの。

伊藤 行かないのですか。

夏目 呼ばれなきゃ行かないという。だけど、官邸が防衛問題で

呼ぶことはないんですよ。長期計画みたいなものをつくるときはやむをえず呼ぶかもしれないけれども、普段、呼ぶなんていうことはないです。防衛庁の次官や何かは呼ぶことはあつても、海原さんを呼ぶことはありません。まして、中曽根さんとは合わない。警察の先輩後輩で、海原さんのほうが先輩ですからね。

佐道 普段、事務局長は何をしておられるのですか。

夏目 講演会ですよ。

伊藤 え？ どこで。

夏目 全国をまたに回つていた。

伊藤 そうですか、啓蒙活動があるんだ。

夏目 防衛基盤の育成に寄与したのですね。

伊藤 そういえば、このあいだ海原さんのお宅へ行つていろいろ持つてきたけれども、各地での講演の記録というのはありましたね。

夏目 あるでしょう？ まあ、話す中身は別として、とにかく回数が多いですよ。何十回ではきかないくらいでした。毎週行つて

いた。だから、このあと四次防の策定作業になつて国防会議と防衛庁との勉強が始まるわけですが、みんな私に任せきりですよ。佐道 そうですか。

夏目 ときどき指示は来ますけれどもね。それで、過酷な指示が来るから、私もそれを拳拳服膺してやると、防衛庁がまた泣くのですよ。そんなことをいまさらいわれたつて、できやしないと。だいぶ恨まれました。

伊藤 では、海原さんの忠実なる部下。

夏目 上手にやっていますましたけれどもね(笑)。そのままやっていただけではなくて、「海原さんはこういつているよ。だけど、それは無理だろう」と、それは上手にはやります。こちら(海原氏)にはいわないでね。そうじゃないと、おれも元々防衛庁の人間だものね(笑)。

佐道 戻るところが(笑)。

夏目 親元というかねえ。一生国防会議に在るわけにはいかないから。

■国防会議への海原氏の影響

佐道 海原さんはもう国防会議でおわりでしょうけれども(笑)。

やはり海原さんが事務局長として行かれてからは、国防会議自体の雰囲気もかなり変わったと感じますか。

夏目 変わったでしょうね。全然変わったと思います。

伊藤 全然ですか。

夏目 少なくとも防衛庁とは頻繁に、会議、会議の連続でした。制服の人たちを含めて。

伊藤 その前はどうかだったのですか。

夏目 ほとんど……。とにかく私が防衛局において国防会議に行つたなんてことはないもの。

伊藤 あつてなきがごとき存在ということですか。

夏目 まあ、そうですね。長期計画をするときは多少、参事官会議とか幹事会とか段階がありますからやりますけれども、それは何年に一遍でしょう。だからほとんど普段はないです。海原さんは根は勉強家だから、防衛庁の自衛隊の実態について調べろといつて宿題が出ます。いかげんなことを持つていくとこてんばんにやられるから、多少こちらでも自衛本能を働かせてやりますけれどもね(笑)。

武田 自衛本能(笑)。

夏目 だから、勉強する機会はありません。

佐道 それで防衛庁とも頻繁にやりとりをするようになるということですか。

夏目 それでよかったかどうかかわからないけれども、とにかくそういう場は持っていました。

伊藤 それは海原さんの力ということですか。

夏目 それもあるでしょうね。やはりどこか隠然としてそういうものがあつたから、国防会議というとみんな、防衛庁はつべこべいわないで、チャートというか、大きな壁かけやスライド等を持って説明に来ました。

伊藤 海原さんが事務局長をやめたら元に戻るのですか。

夏目 うーん、私は海原さんの事務局長しか知らないからね。海原さんのあとは、たしか内海(倫)さんという方がやつた。この人は海原さんとはしつくりいく間ではなかつた人ですが。まあ、防衛庁としては、そう怖がりたり、なんとかあの人の意に沿うようにと気を使うような相手ではなかつた。

佐道 内海さんはどちらかという交通警察の専門ですね。

夏目 交通ですね。久保さんもそうです。スクランブル交差点なんかをつつたのはたしか久保さんですよ。久保さんという人はなかなか発想力のある方でした。ただ、内海さんというのは非常に顔の広い人で、防衛だけではなくて、民間の人であれ何であれ、いろんなところに顔が利く人ですから、大物であることは間違いない。それと、中曽根さんと同期でしょう？

佐道 国防会議では、この問題について説明が聞きたいから来てくれということ、来てもらつてやるわけですか。

夏目 そうですね。

伊藤 それは国防会議の権能としてあるわけですか。

夏目 あるじゃない？ 調整権みたいなものがあるからね。防衛庁が持っている計画というのは国防会議を通さないと政府決定にならない。やさしければ無視しても通っちゃうんだけど、あの人がいたらだめですからね。現にあの人は中曽根大臣が言い出した国防の何とか原則もつぶしたしね。そういうことを平気でやる人ですから、とても無視してなんかできません。だから、中曽根さんからは恨まれた。その後、「俺が防衛庁長官のときには君は

どこにいたかね」というから、「国防会議にいました」といったら、いやーな顔をしていた(笑)。

佐道 そんなこと、いいにくいですよね(笑)。国防会議に海原さんが来たから全体の人数がふえたとか、そういうことはありませんか。

夏目 それはありません。人数はふえませんが、予算もそう大幅にふえたわけでもないしね。

伊藤 人は少しい人をとったのでしょね。

夏目 しかし、防衛庁から行っているのは二、三人ですからね。

伊藤 そうじゃなくて、よそから集めるのに。

夏目 いい人……かもしれないね。海原さんというのはどいつが来るかというのをチェックしますからね。

佐道 先生の中には、大蔵からはどういふ。

夏目 廣江という人が最初で、それから松本さん。廣江さんというのは、その後経企庁か何かの、次官待遇の何かがあるじゃないですか。確かそれになられた

佐道 はい。

夏目 あと、通産省はだれだったかな。

伊藤 そうですか。国防会議の参事官のなかだけの会議もあるのでしょうか。

夏目 ありますよ。参事官だけじゃなくて参次官補というのがありまして、その人たちを集めてね。防衛庁から聞いた話をまたなかで咀嚼しなければなりませんから、それはやっていました。

佐道 先生の下に来られた防衛庁からの人というのはどういふ方ですか。

夏目 これは何人かかわりました。山崎君とか、児玉君というそのあと施設庁長官になったりした人とか、それからだれがいたかな。とにかく私は長いから、四、五人いましたよ。ほかの省の人がみんなかわっても。だいたいどこへ行っても長いんですよ、私。

武田 どうして?

夏目 尻が重いんですよ。

一同 ハッハッハッ(笑)。

武田 会議は本当にひんぱんに開かれる。

夏目 当時はわりと開きました。ちょうど時期が、最初は七〇年安保があつて、自衛隊の治安出動があるかないか議論された頃です。富士の演習場で自衛隊が市街地訓練みたいなものをやったりね。まあ、結局は機動隊の力がうんと強くなったから自衛隊は出なくてすんだのですけれども、そういう問題があつたこと。それから、今の四次防の走りみたいなものが出てきましたから。

佐道 事務局長がいらつしやる会議というのも定期的に。

夏目 幹事会は普段はないんですよ。その前もそうだと思いますけれども、幹事会以上は、四次防とか三次防が組上に上がってきて初めて幹事会が開かれる。それまでは全部、仕切ったり、中身のチェックなんかは参事官会議でやっていました。幹事会に上げるときにはもう、異議ございませんという式のものが出て上がっているのです。まあ、一、二回は形式的に「国際情勢を聞く会」とかいうことをやるけれども、一方的にただ聞いているだけです。

伊藤 この前リストを見たら、ずいぶん頻繁に開いていなかったかな。

■国防会議での議論

佐道 装備品ですよ。次の質問のファントムとか、こういうものを導入とかというのは国防会議。

夏目 何か特別もめればあるのでしょね。だけど、ファントムのようにそんなにやったかな。むしろP3Cを国産化するか輸入するかというのが大議論になって、それは頻繁に会議をやっていました。

伊藤 それは幹事会ですか。

夏目 幹事会はそんなにない。幹事会もやりましたけれども、参事官会議は年じゅうやっていました。

武田 それは議事録みたいなものはとるのですか。

夏目 とりますよ。とるけど、ないことになっているのかな。あるはずですよ。

武田 それはどうするのでしょうか。議事録はどこかに上げるのですか。

夏目 いや、国防会議は国防会議で持っているし、防衛庁は防衛庁で持っています。要するに、幹事会というのは次官会議と同じだから、今の次官会議と同じでシャンシャンと、事前調整のおわったものが出てくるのですよね。

伊藤 議論ということはないのですか。

夏目 そうい議論があるんですよ。議論があるというのは、「国防会議」というのは何だ。シャンシャンとやるだけじゃないか。中身を審議してないんじゃないか」という批判があるので、お茶を濁すために「国際情勢を聞く会」とか何とかいって、二、三回はそういう会議をやりませう。それから、議員懇談会と称して、正規の会議ではないことをやるのですけれども、それはカムフラージュみたいな面も多分にありませうね。普段はそういう幹事会とかどうのこうのというのはほとんどないです。

伊藤 幹事会の段階ではもう調整済みなのですか。

夏目 だいたいそうです。少なくとも、そこで議論するということはほとんどありませんでした。

伊藤 参事官会議でいろいろ議論はするわけですか。

夏目 ただ、その参事官会議のなかに海原さんの意向はずいぶん入りますよね。向こうだって局長や何かと相談して来ていますから、別に課長レベルで物事を決めていくわけではないけれども、会議としては参事官会議で中身が詰められちゃう。

佐道 そうすると、その前は防衛庁で基本的に決めたことを国防会議のほうで蒸し返すということとはほとんどなかったと思うのですが、海原さんになってから、「それはどうか」と押し返したりということが行われるようになったということですか。まあ、象徴的なものは四次防となると思うのですけれども、それ以外の問題でも。

夏目 例えば四次防のときもそうなのですけれども、四次防でたしか、大綱が決まって、主要項目が決まらない時期があった。その間に予算要求が入るんです。国防会議の審議事項として、主要装備品とかそういうものを新しく、例えば戦闘機とか、新しいミサイルとか、そういうものを決めるときは国防会議にかけることになっているのですね。主要項目が決まらないまま予算要求しちゃうわけです。ちよつとそこは調べないとわからないけれども、予算要求をしたことで大蔵省から査定が出ちゃう。そうすると、これは事前に国防会議に諮ってないではないか。ということでは国会が大もめになったんです。「これはこういう申し合わせと反するじゃないか、やり直し」というので、多分、そういうことで四次防の決定が遅れたり、修正をさせられるのですよ。そういうことは、海原さんは得意なんです。

伊藤 海原さんはそれをいったわけですね。

夏目 まあ、こちら、「こういう問題があるんじゃないですか」とはいいですけども、別に事を荒立てようという気はないんです。海原さんはそういうところは厳しいですからね。防衛庁が困るなんていえば、なおさら喜んでやる（笑）。

佐道 そうすると、これも六番で挙げたのですけれども、FXでファントムが採用されると。それでも五四%程度の国産化率なのですけれども。海原さんはそもそもファントムではなくて別の機種だったり、国産をするということ自体にはあまり賛成ではないという立場だったと思うのですけれども、こういうのが決められ

るときに国防会議として何かクレームをつけるとか、何か意見をいうとか、そういうことはなかったのですか。

夏目 正直いいますと、海原さんほもとともファントムがすきではないのは事実なんです。T38、F5、ノースロップの飛行機。これが海原さんがずつといちばん推薦した飛行機なのですけれども、現実を使う自衛隊がそれではいやだというのですね。「それではわれわれの求めている要求性能に達しない。だから、それは困る」ということで反対をしていた。そのあいだに海原さんは国防会議に飛ばされたという言い方は適当ではないけれども、いろいろ業者との何とかを誤解されて、そんなことはないはずだけれども、まあ、出ちゃった。ファントムのときはそういう背景もあったし、もう一つは、このとき唯一実績があつて、使える飛行機で、だれしもが間違いなくこの飛行機以外にないと思つていのがファントムですからね。だから、別にここでもめなかつた。佐道 そうですか。

夏目 腹の中は別ですよ。ファントムを決めるときは、ロッキード104を決めたときと違って、まったく問題なかつたですね。

伊藤 海原さんも一応納得。

夏目 納得、だつてほかにないですからね。またそこでT38だのノースロップなんていったら、「まだやつていのかよ」ということになるから、あきらめたのでしようね。

佐道 クレームのつけようがなかつた。

夏目 (手を上下に大きく広げて) こんなに飛行機の質が違うのだもの。今になるとまたノースロップの改善型のいい飛行機ができていますのですけれども、当時はね。安全性から見ても、操縦性能から見ても、戦闘能力、あらゆる面から見てもファントムが圧倒的だったんですよ。ファントムはベトナムで実戦の実績がありましたしね。

■ 自主防衛と国産化

佐道 今度は国産化の問題ですけれども、三次防を審議される過程自体がそうだったのですけれども、だいたい自主防衛というのは、イコール装備の国産化という話ですつと六〇年代の中盤は進んでいたのですが、これまた久保さんが自主防衛の意味はもうちよつと広い意味できちんと考えなければいけないのだということを出しておられたりするのですけれども。七〇年代の初頭ぐらいから、その次(の質問)にもありますけれども、自主防衛という議論がまた盛んになっていくのですが。この時点、三次防がかわつた六〇年代の後半ぐらいから自主防衛とか国産化の問題ということについては考え直そうという議論がされてきつあつたのでしょうか。

夏目 国産化そのものを見直そうとかではなくて、久保さんはさつきの話と同じなんです。久保さんという人は、何をやるにも……。久保さんが「自主防衛」という言葉を使った記憶は私はまつたくなのですが、もしあつたとすれば、防衛力というのは単にモノをつくれればいいというものではないだろう。何か哲学なり、戦略構想なりがあつて、日本のおかれた立場としてこういう防衛力が必要なんだという議論がまず先になければおかしいじゃないか。日本として何が必要かということをもつとまともに議論すべきじゃないかということとは年じゅういつていることなんです。それが自主防衛であるかもしれないし、基盤防衛力であるかもしれないし、平和時の防衛力とでも何とでもいえるのですけれども、日本としてのあるべき防衛の姿というものを追及したものが無いのがいかにもおかしいと。船を何隻つくるとか、飛行機を何機つくるというのは問題じゃないんじゃないかというのが久保さんの考え方です。これはこれでもつともなんです。だけど、そんなことをやっても、その国際情勢とどうやつて直結させるかというの

がないんですよ。だから、そういうものはさておいて最小限度のものをつくっていかうというのが防衛庁の大勢でした。久保さんになると、そこがちょっと不満だったと思います。だからKB論文なんかに出てくると、もうそういう方向へ行っちゃうのですね。

久保さんの主張というのは、平時の防衛力というのはどう活用できるかというのを考えるのですね。そういうことまで自分で言い出し始めた。ところが、言い出し始めたら制服から総すかんでしよう。やっぱり軍隊というのは、敵があつて、こちらがあるんだという古典的な考え方があるから、久保さんみたいな意見は本当に通りませんでした。坂田さんは、久保さんが次官になっていたけれども、久保さんの意見を買っていたんです。それで、基盤的防衛力というのにそれを吸収したのですね。最小限、平和であるうが、戦争であろうが、とにかくこれだけのものは独立国として持っているなければいかんという防衛力というものをまずつくると言い出して、それが基盤的防衛力。だから、脅威対処論ではない防衛力というのですかね。それは、財政とか、経済とか、そういうものをみんな勘案して考えるということなのですけれども。

■ 沖縄返還、グアム・ドクトリン

佐道 ちように広い意味で国産化というところの関係なのですけれども、まさに沖縄返還の問題が六〇年代後半から起きてまいりますね。それから、六九年に有田防衛庁長官が盛んに自主防衛とかいろいろ言い出します。それと、六九年七月にニクソンがグアム・ドクトリンというのを言い出して、日本も役割を担いなさいということを書いて、それで佐藤さんが自らの国を自分で守る気概みたいなことを言い出して、自主防衛ということを盛んに言い出したりします。例えば自主防衛なんていうのは、海原さんなんかはそんなことはできっこないみたいなことをおっしゃると思いますが。こういう六〇年代後半から七〇年代初頭に盛んになって

くるいわゆる自主防衛論みたいなことが、ではどうすればいいんだという話で当時はどの程度議論になっていたのか、なっていないのか。あるいは国防会議ではどうだったかというのはどうですか。

夏目 少なくとも国防会議とかそういうところで議論したことはないですね。防衛庁のなかではありますよ。背景があるのだけれども、沖縄の返還で、沖縄の防衛も日本に任せる。それから、アメリカの経済的な問題で経済援助みたいなことを東南アジアにやってくれということを出してきたり。それから、中国の核実験はもつと前かな。

中島 六四年ですね。

夏目 米国では、ベトナムの反戦デモみたいなことがそのころ頻繁に起きるのでですね。そんなこんなでアメリカもほとほと手を焼いて、「もうおまえのところも少しは自分でやってくれよ」という雰囲気はあつたと思います。あつたからといって、じゃあ、日本はそれに乗れるかというと、そんな雰囲気はまったくありませんね。財政的にも、能力的にもない。だけれども、それは自主でないよりは自主がいいし、自前でないよりは自前がいいという。きわめて耳障りのいい言葉なものだから、政治家なんかすぐ食いついて「自主防衛」とか「自前防衛」といったけれども、現実はそのんがことができるかとともに思っている人は防衛庁にはいなかった。しかし、防衛庁の中で秘密には勉強していたんです。自主防衛、自前防衛、あるいは所要防衛力を端的にいろんな要素をはずして考えたらどうという防衛力が必要かと所要防衛力議論みたいなもの、いろんな勉強をしました。だけど、それは部内の勉強だけで、とても外で議論するようなどころまではいきませんでした。政治家のスローガンに合ったというだけで、実質的にそれでもって左右されたりすることはあまりなかった。

中島 その所要防衛力を部内で検討されたときに、核武装という

ような発想は。

夏目 ありました。それは「核武装しろ」とはつきりは書いていないけれども、考える必要があるということはたしかあったと思います。

中島 六七年から六九年ですから昭和四十二年から四十四年にかけてなのですが、内閣情報室が民主主義研究会に委託する形で、研究者を招いて日本の核武装問題を討議させて報告書を出させています。そこには防衛庁からも夏村繁雄さんが参加されています。これは数年前にたしか朝日新聞がすっぱ抜いた記事だったと思うのですけれども。当時、それに関して何かご記憶はありますか。

夏目 ないけれどもね。そんなものは俺は知らない。民主何とかも知らないし。ただ、夏村さんという方はたしか技術参事官ですよ。

中島 ええ、そうです。

夏目 だから、ある意味で防衛庁の政策……。まあ、久保さんにいわせれば防衛政策はないというけれども、政策があるとすれば、そういうものにタッチするような、あるいはそれに対してなんだかんだいえる立場の人ではありませんでした。

中島 技術畑で。

夏目 きつとその程度の接し方だったのではないですか。われわれとしてはまったく知らないし、夏村さんがそんな会議に出ているなんてことは聞いたこともない。

中島 そうですか。海幕のほうに。

夏目 背景はあったと思いますよ。やっぱり沖縄は核抜きで返還、本土並みとか、そういうことをいつているから、いつたいそれで日本は安泰でいられるのか、アメリカの傘というものはどこまで信用できるかみたいなことは議論したけれども、「じゃあ、日本が核武装しよう」なんていうことをまともに考えたことはまったくないんじゃないですか。

中島 その報告でも、いろいろな理由をもって、日本は核武装す

べきではないという結論になってはいるのですけれども。

伊藤 いろんな条件をはずして必要な防衛力ということを考えてら、予算を考えたらとてもだめでしよう。

夏目 だめです。だから、部内作業の、「ああ、こんなもんかい」というので、それはお蔵入りです。

佐道 政治家のスローガンということはもちろん間違いないと思うのですけれども、例えば国会の場とかで野党から、「自主というけれども、いつたいどうするんだ」と突っ込まれた場合には、防衛庁なりが出て何らかの説明をしなければいけない形になるでしょうけれども。

夏目 それはなるでしょうね。だから、日本の防衛としてこれは必要だとか、国産化をして日本のいざというときのために技術力を温存する必要があるとか、そういうことが自主防衛につながる道だという議論は年じゅうしていたと思います。問題を矮小化するとか、自主防衛と幅広くいうのを国産化か何かでもって逃げたというのでしょうか。本来、自主防衛というのは国産化だけではないはずですよ。

佐道 説明可能なものに還元して。

夏目 アメリカからもらってお仕着せでやっているのは自主といえるか。そうじゃないから自分でやりたい。そのほうが通りがいいですから、それはいいですね。しかし、じゃあ、国産化するかといったら、できないんですよ。ただ多少国産比率を上げる程度で、本当の国産ではないので。

佐道 この六九年ぐらいからいわれている、自主防衛、自主防衛という話は、国防会議なんかでは、「ああ、いつているな」と聞いているという感じですか。

夏目 うん、まあ、「またお題目みたいにいっているな」という印象です。さつきもいつたけど、誰かが、「自主でないより自主がいいに決まっているじゃないか」といって、「じゃあ、何が自

「主だ」といったら、中身はないですよ。できることの中身が。

佐道 アメリカの沖縄返還が、例えばグアム・ドクトリンなんかのアメリカ側の議論を見ると、本土防衛に関しては日本で大部分だじょうぶなんだという議論があるのですけれども、これは防衛庁なんかではそういう意識だったのでしょうか。

夏目 だじょうぶだということは、私はあまり意識したことがないなあ。だって現に、自衛隊は戦える体制にはまだ不十分だし、装備にしても例えばミサイルにしても何しても、まだどんどんアメリカから依存している最中でしょう。だから、とてもそんなことができるような状態ではないと思います。アメリカのいうこともわからないですよ。まともについているかどうかもわからない。国内向け、あるいは向こうの防衛産業向けについていることもあるし、本気でいっているのかどうかよくわからないです。私は何年かやっていて、アメリカのいうことは信用できない。年じゅう、言い方を変えるけれども、いつでも日本に対してあはしてほしい、こうしてほしいという注文ばかりです。手を変え品を変えているけれども、いつていることは、あれもやってくれ、これもやってくれというだけで。今だってそうでしょう。イージス艦を派遣してくれ、何をやってくれと。同じですね。そのときそのときによってちょっと言い方を変えるだけで。

佐道 イージス艦を買ったのは先生が次官のころじゃないですか。

夏目 イージス艦はそう。

佐道 八五年ぐらいですから、そうですね。

夏目 あれもうちよつとで目の目を見なかつたんだけれどもね。

佐道 へえ、それは次官のときの楽しみに。

伊藤 そのイージス艦がよいよ出動ですね。

夏目 あこの辺は、米軍基地縮小はやっていました。関東計画とか何かいろいろあって、ニクソン会談で基地を縮小するなんていうことが決まったし、その後も今いったことが現実の問題になって

きたしね。やっぱりこのところは基地縮小というのが天の声みたいにあつたんですね。原潜が入ってくるわ、ファントムが九州？

佐道 九州大学です。

伊藤 落つこちたやつでしょう。

夏目 あんなことがすぐ基地問題というのにはねかえるのですね。今でも沖縄の問題がそうだけれども、ああいうふうには、で、原潜がやたら入ってくるようになったしね。だから、基地問題というのはそのころから急速に縮小の動きが出てきます。

伊藤 要するに、あれはアメリカの戦略の変化もあるわけでしょう。

夏目 もちろんあると思いますよ。それがいちばんだと思います。

伊藤 こちらのあれではないと思いますけれども。

夏目 だけど、やはりある程度日本側がそういうことを強くいつたからこそ、そういう方向へ動いていることも事実だね。だからアメリカも考えるんですよ。個々の基地の重要性もさることながら、やはり日本国民の気持ちと逆なでするようなことをするのは得策ではないという彼ら自身の打算もあると思います。そういうふうなことがたまたまこのころあつたのでしょう。あるいは、そういうことも自主防衛につながる一つかもしれないですね。基地をどんどん返していなくなる。あとはおまえたちでやるんだよという。

伊藤 内地の基地はだいぶ減つたんですね。

夏目 関東計画というのはまさに東京周辺のやつを減らして。で、沖縄が返ってきたときには、沖縄のやつはそっくり残っちゃった。だから、沖縄と関東地区の基地と取り替えたようなことになつたやつだね。

佐道 そうですね。国防会議として、アメリカの軍とか出先とかと交渉したり、いろいろ情報交換をしたりということはあつたのでしょうか。

夏目 国防会議ではありませんでした。防衛庁はやつたと思えますけれども、でも、まだこのころやつたのは主として施設庁の関

係の基地問題と、あとは制服レベルが在日米軍と基地に関連して
いろんな調整をしたということはあるでしょうけれども、防衛庁
全体としてアメリカと防衛政策のあり方について突っ込んだ議論
をするような時期にまだ来ていないですね。

佐道 実際に日米間で基地の縮小、返還について議論されて、ど
こをとか、どのくらい返すとかという話になっていくわけですが
れども、それは国防会議に情報として入ってくるのですか。

夏目 情報として来るかもしれません。だけど、正直いって、あ
んまり基地問題って関心がなかったですね。やはり外務省と施設
庁の問題だという認識がありましたから。

佐道 管轄が違うという。

武田 沖縄返還なんかも外務省の問題だという感じですか。

夏目 沖縄返還は、あれは四十七年？

佐道 そうですね、四十七年五月です。

夏目 四十七年は私は国防会議にはいないんだよ。だから、どう
だったのかな。

佐道 六十九年の十一月には返るということが決まるわけですか
ら。

夏目 多分、国防会議で沖縄返還についての議論というのはなか
ったと思います。唯一あつたのは、防衛庁には鍋釜輸送事件とい
うのがあってね。ご存じない？ 沖縄の返還が決まって、自衛隊
に沖縄の防衛はまかせるといことが決まったのですね。二つ
あるのですが、一つは久保・カーチス協定で、沖縄の防衛は日本
が引き受ける。これは純粋に技術的な空域を広げるとかいう話で
大したことはないのですが、要は、今度は部隊を沖縄へ持つてい
くわけです。そのときに、閣議決定する前に兵站輸送を。

佐道 ああ、ありましたね。

夏目 まあ、つまらないことですけど、それを送ったわけ
です。そうしたら、閣議決定前にそういうことを先行するのは軍事

の独断と何とかだと。

佐道 シベリアン・コントロール違反だという。

夏目 そんなようなことをいわれて国防会議もちょっと嘖んだこ
とはあります。それは内海さんがちょっとチョンボしたような話
で、まあ、笑い話ですんだのですけれども。しかし、当時は内海
さんの進退伺いのような問題だったからね。

佐道 そうですね、国会がとまったりか。

夏目 大もめにもめたのですけれども、そのときにちょっと情報
としてどうだこうだという話をしたくらいしか記憶にありません。

佐道 沖縄が返ってくると、沖縄の防衛を当然自衛隊がやるとい
うことになって、沖縄の戦略的位置づけとかいろんな問題が出てく
ると思うのですけれども、それはあまり議論しなかったのですか。

夏目 議論してない。少なくとも私がいるときにはしてないです。

佐道 それが議論として取り上げようということにならなかった
ということですか。

夏目 そうだと思えますね。というのは、もうちょっと極端にい
えば、当時の国防会議と防衛庁も多少そういうところがあると思
うのですが、本来国防会議で議論すべきことについては関心がな
いんですよ。もっぱらモノをつくったりする防衛力整備に関心を
示すだけで、防衛構想とかそういうものに対しての関心がな
い。政府全体にそういうところがあるのですね。要するに、防衛
ってそんなものなんですって時代だったのでしょうか。金のかかる
ことはいろいろ検討しなければいかんけれども、それ以外は、ま
あ、適当にとりあえず気が持ちがあつたのでしようかね。防衛庁に任せ
るといふか。

佐道 これは、大蔵、通産がいて、そういうことには関心がある
けれども。

夏目 だから、いま考えるとちょっといびつなんです。当時から
そういう議論はあつたんですよ。国防会議って、そんなことばか

りやっているのが能じゃないじゃないかと。本来、いちばん前に防衛計画の大綱と書いてあるのは、これこそまさに日本の戦略構想みたいなことを議論すべきことであって、防衛力整備なんていうものは、金目の話は二次的、三次的な問題じゃないかということとはあったけど、なかなかそれはいうだけで実際の議論にはならなかったですね。

■ 四次防

佐道 そうしますと、有田さんのところでまさに四次防が始まるわけですが、これは大変重要な問題になってくると思うのですが、最初のころはどういうことになったのですか。

夏目 勉強会はずっとしていたんです。

佐道 防衛庁と。

夏目 そう。結局、四次防も最後は三次防の続きとまったく文章まで同じような。それは防衛庁もだいたい抵抗がありました。だけど、海原さんの一喝のもとにそうなっちゃった。たしか三次防と四次防は、二、三の言葉が変わっているくらいじゃないですか。

佐道 本当にそうですね。

夏目 中身の数字はちよつと違うけれども、文章の表現は同じだと思います。

佐道 有田さんのあと七〇年に中曽根さんになって、中曽根構想とかいろいろ出て、それですつたもんだの拳句、結局、三次防とほとんど同じような内容のものに四次防は決まるわけですからね。この四次防の最初の段階では、先ほど勉強会とおっしゃいましたけれども。

夏目 それはむしろ、四次防をつくるにあたっての三次防の反省とか、今までの防衛力の問題点とか、欠陥とか、現実にある防衛力で何がいちばん問題なのか、これからどちらの方向へ向かっていくかということを経験するにはまず己を知らないといかんとい

うところから出発していますから、この有田さんのころはまだ方向づけるところまではいっていないのです。私がいたころは。伊藤 結局、つまるどころ装備の問題ということになっちゃうわけですか。

夏目 ほとんどなっちゃってました。というのは、まず海原さんがそれ以外にあんまり関心ないんですね。同じでいいじゃないかというところ、それが通っちゃった。どこが変わったんだという。

佐道 ある程度、防衛庁との共通理解みたいなものをつくっていくわけですか。

夏目 もちろんそうですね、本来は。防衛庁も最初もつと独自なものをいろいろ考えていたかもしれません。

佐道 これはやはり防衛局の方々ですね。

夏目 中曽根さんみたいな人がパンと打ち上げて、それをつぶされちゃうと防衛庁のほうも萎縮しちゃって、結局つまらないものになってしまったのですね。だから、私は海原さんというのには立派な人だと思わなくても、そういう意味で防衛論議を不毛にした原因を作った一人だと思わ。まあ、それは言葉は悪いけれども。新しい発想というものを摘んじゃうのですね。確かに難しい問題ではあると思いますけれども。

伊藤 「それは所詮無理だ」と、こういうことですか。

夏目 そういのが先にあるのでしょね。旧態依然で、今の自衛隊の実態は十年前とどこが違うんだ。弾を一カ月つて、十年前からいつているじゃないかと。そういわれればそのとおりなのでね。自衛隊の人から見たら、こんなつまらんことはないのですね。夢がないですから。

伊藤 十年一日のごとく。

武田 やる気がおきないですね。

伊藤 軍事情報の収集とか、情報面はどうなのですか。

夏目 どの？

伊藤 日本のです。

夏目 それも国防会議というのはあんまり関心ないんですよ。

伊藤 やはり防衛力の整備のなかの一つだと思えますが。

夏目 情報なんていうの、三次防もないでしょう？ 四次防もない。まあ、四次防で多少、付属文書みたいなところで情勢判断みたいなものが数行入るのかな。その程度ですよ。それも別に目新しいものでも何でもない、ありきたりの。ここ（『防衛ハンドブック 平成十四年度』）にあるのだけれども、そんなことしか書いてないですよ。

佐道 情勢判断は防衛大綱で初めてつくという感じですね。

夏目 そう、四次防のときも情勢なんてないですよ。四次防をつくってからちよつとたつてから、「情勢判断および防衛の構想」という文章を別に閣議決定したんです。だけど、中を見ると何も書いていない。

佐道 だいたい基本的なところは、きょうは。

夏目 足りないところは後で。海原さんみたいに資料はないし、記憶力もないからね。

佐道 いえいえ、ずいぶんはつきりといろいろと。

武田 いろんなことがわかりました。

伊藤 あと、ついでに伺っておくようなことはありませんか。これは先任参事官ですか。

夏目 そう。

伊藤 年数を経ていけば、ほかから来ている参事官はだんだん若くなってきますよね。

夏目 みんなかわるからね。やっぱり人事というのはそういうのを加味しながらやりますでしょう。各省から何年がきているから、今度はこちらから何年を出そうという話になるし、防衛庁の仕事が中心ですから、なるべく防衛庁からいちばん年次の古い者を送り込むという慣例にはなりません。

伊藤 ということは、先生みたいに若い人が来たら、向こうも若くするということですね。

夏目 そうなります。

佐道 ある段階から先生は国防会議の中では次席になられたわけですよ。

夏目 そうです。多少、ほかの人よりは防衛庁のことを知っているし、海原さんもそのころは便利に使ったのでしようね。

伊藤 防衛庁にはしょっちゅうおいでになって、いろいろやっていたわけですね。

夏目 来ていましたよ。やっぱりこちらも親元ですからね。

佐道 親元は意識しないと。

夏目 とときどきけんかの真似事はするけれども、海原さんみたいに本気でけんかするわけにはいかないですからね。

伊藤 海原さんは本気ですか。

夏目 本気ですよ。もめてね、大蔵省の主計局長と、海原さんと、防衛庁と、夜の夜中に何回やったかわからないです。しかし、みんな海原さんに遠慮しているから、海原さんの意見が通っちゃうんだね。

伊藤（笑）。

佐道 それはすごいですよね。

夏目 すごいですよ。

伊藤 どうしてそういう事態が起こるのかよくわからないな。

夏目 本当にね、あれはやっぱり異能の士ですね。自慢話じゃないんだけど、これ（コピー）はこの前にいった……。

伊藤 知情意の話ですか。

夏目 そうそうそう。これはだれかが雑誌に書いたからチェックした。このカギ括弧で囲っている中がそうです。

伊藤 これは夏目さんが書かれたのですか。

夏目 いやいや、だれかが私のことを書いたところにその新聞記

事を載せているから、読みやすいだろうと思つて持つてきたんです。

武田 知情意の話で、「このように若い部員の夏目さんはお三方から人生の貴重な処世訓を得ておられた」と書いてありますね（笑）。

夏目 それはあんまり当てにならないけど。

佐道 でも、タイプは違うけれども強烈な個性の海原さんに久保さんと身近に接するというのは、これは強烈な経験ですね。

夏目 幸せでしたね。私は防衛施設庁から来ましたでしょう。本当に役人の仕事というのはこういうふうにするものかと、うろこが落ちるような気持ちでした。あのときにああいう人がいなかったら、多分私も防衛庁にはいられない。どこかに行っちゃったかもしれないですね。

伊藤 まあ、施設庁にいらつしゃったところは、まさか防衛庁で昇進してこれられるとは露ぞ思わなかつたでしょうから。

夏目 やつぱり相当強烈なインパクトがありましたから、こういう人たちの勉強したあとをついていこうという気にもなつたんですね。われながら単純ですな（笑）。

佐道 いやいや、役人になるはずがないところから（笑）。

夏目 人間つてそういうものですね。

伊藤 いろいろな方の話を伺っていると、やつぱりそういうことが多いですよ。

佐道 そうですね。

伊藤 若いころからずっとこうなろうと思つていて、こうなつたという人はあまりいない。

夏目 防大の学生なんかでもそうですよ。よくいわれたんです。「だいたい、確固たる国防の意欲に燃えて来ているやつがないじゃねえか」と非難されることがあったんですが、「あたりまえだ。この時世に、政治がこんな混乱した世の中に、まともに俺が国を守る礎になるうなんて思うやつはいないだろう。何人かはいられるかもしれないけれども、それはごく少数であつて、後は防大へ来てからここで教育を受けて防衛の道を歩こうというふうになつたら、それが教育の成果というものじゃないか。政治や社会が悪くて、来た学生の素質なり気概をとにかくいうのは間違つている」といったの。（笑）。

伊藤 まったく（笑）。では、どうもありがとうございました。

（終了）

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第4回

開催日：2003年1月14日（火）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時00分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

石田京吾（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：
有限会社ベンハウス 矢沢麻里

第4回インタビュー質問項目

2003年1月14日

1

1970年1月、有田長官に代わって中曽根康弘氏が防衛庁長官に就任します。中曽根氏はそれまでも防衛問題では積極的に発言をし、防衛庁長官のポストも望んで就任したといわれています。具体的な政策については別にお聞きしますが、中曽根氏についてはどんな印象を持っておられましたか。また、海原氏は中曽根長官就任については何か言っておられましたか。

2

中曽根長官は、①憲法を遵守し国土防衛に徹する②外交と一体③文民統制を全うする④非核三原則の維持⑤日米安保で補完する、という自主防衛五原則を発表するとともに長期の防衛構想を国会などで明らかにしていきます。こういった中曽根氏の考え方については当時どのように思っておられましたか。

3

中曽根長官が述べた新しい防衛政策のうち基地問題について、在日米軍基地をほとんど返還させ、自衛隊がそれに取って代わるというものがあります。これをさらに進めると有事駐留論につながる意見ですが、こういった考え方については先生はどのようにお考えでしたか。また、在日米軍との間では基地の縮小・返還をめぐる交渉が進められていたわけですが、中曽根氏が主張するような大幅返還の可能性については当事りどのようにお考えでしたか。

4

中曽根長官が進めようとした重要な政策の一つに、「国防の基本方針」の改定があります。日米安保中心主義を唱える同方針を、自主防衛を規定するものに変更しようというものです。これについては当事りどのように見ておられましたか。また、「国防の基本方針」は海原氏が作ったものですが、海原氏は中曽根氏の「国防の基本方針」改正論に対してどのように言っておられましたか。

5

6月、日米安保条約は10年間の固定延長期間が切れ、自動延長に入ります。日米安保条約をめぐっては、安保廃棄を唱える野党は別にしても、自民党内にも固定延長論と自動延長論が分かれていました。これについて先生はどのようにお考えでしたか。

6

中曽根長官は9月に訪米してリード国防長官と会談します。そこで日米防衛首脳による定期協議などを提案されるわけですが、このときの中曽根訪米についてとくにご印象に残っていることはございますか。

7

10月、日本で最初の『防衛白書』が刊行されます。この最初の白書をご覧になった印象はいかがでしたか。

8

10月21日、中曽根長官は自民党の国防部会および安全保障調査会の合同部会に出席し、四次防の概要を説明しました。総経費5兆2千億円で三次防(2兆2400億)の約2.2倍、ベースアップも含めた経費は5兆8千億でGNPの約1%となるわけですが、この概要を土台に翌年4月の四次防原案が作成されていきます。この最初の

「四次防概要」については、先生はどのように見ておられたのでしょうか。また、翌年4月の原案についてはいかがですか。

9 四次防の策定にあたり、防衛力整備の考え方について中曽根長官を海原氏が批判し、中曽根氏も海原氏を「国防会議事務局長はお茶くみの存在」などと批判します。国防会議の中におられて、長官と局長の対立をどのように見ておられましたか。

10 11月25日、三島由紀夫らが陸上自衛隊東部方面総監部に乱入し、自殺するという事件が起こります。内外に大きな衝撃を与えた事件でしたが、この事件について先生はどのような印象でしょうか。

11 四次防原案発表後、大蔵省は巨額の経費を批判し、国防会議では細かな事項に及んで検討作業に入っています。国防会議における四次防原案の検討状況についてお聞かせください。

12 71年7月および8月、二度にわたるニクソンショックがあります。とくに8月のドル防衛策は、日本の経済にも大きな影響を及ぼすものと考えられ、10月、西村防衛庁長官は四次防原案の再検討に入るよう指示したと新聞は伝えています。ニクソンショックが四次防審議に与えた影響についてお願いします。

13 11月、衆議院本会議で非核三原則が可決されました。以後、同原則は日本の重要な方針になっていきますが、国会での議決等について当時どのような印象でしたか。

14 72年2月、政府は四次防の年度内策定を断念し、とりあえず「大綱」を先に決定することとします。結局、三次防とほとんど同じ内容の大綱が策定されるわけですが、この一連の経緯についてお願いします。

15 同じ時期、四次防予算の先取り問題をめぐって、野党からシビリアン・コントロール違反という批判が出されます。この問題についてはどのように見ておられたのでしょうか。

※今回は以上の点についてお願いします。次回は、先生が防衛庁にもどられたところのお話からうかがいたいと思います。

■ 中曽根長官の印象

伊藤 この前は国防会議事務局の時代のお話でしたけれども、きょうもその時代のお話を伺いたいと思います。きょうは、一九七〇年一月に中曽根（康弘）さんが防衛庁長官になったというところから話が始まります。中曽根さんというのは積極的な人で、防衛問題についてはそれまでもいろいろ発言しているし、ご自分で希望してなったというところもあるのかもしれませんが、中曽根さんの就任というのは、先生ご自身、あるいはその周辺でどういふふうを受け止められていたのでしょうか。

夏目 私自身は国防会議ですから、直接の部下というか防衛庁の人間ではないので多少間接的になります。でもやはり、当時、中曽根長官というのは非常に論旨明快というか、とにかく語尾ははつきりしているし、いうことはハキハキしていますし、青年将校みたいに颯爽として見てくれもなかなか格好いいですし、そういうことがあったのが一つ。もう一つは、まだ当時は、松野（頼三）、増田（甲子七）という何となく地味な、派手さというものがなく、人事面でのいろんなことがあった後でもあり、まだ何となく落ちつかないものが払拭しきれないような時期に颯爽とあらわれたという印象がありました。もう一つは、自ら望んで来たんだというのには事実らしい。本人からその後何回も聞きました。私は、それは非常に貴重なことと思えました。国防とか安全保障というのは国の施策のなかでいちばん大事な分野を占めるものだという認識をわれわれは持っていました。世間的には何となく日陰者的なものを背負っていたわけですから、そういうときに、「俺は望んでなかったんだ」と。しかも、「将来の総理たるものは防衛庁の長官をやらんでなるべきではない」みたいなことをたしか当時いわれたと思うのです。そういうことに対して非常にうれいというか、中曽根さんというのは期待できるのかなという感じは持って

いました。

伊藤 やはり周辺もそうですか。

夏目 多少あったと思います。それで中曽根さんは、着任早々に第一線へ行つては煎餅をかじりながら車座になって一般隊員と懇談したり、そういうことに非常に意を尽くした初めての人ではないですか。そういう意味では隊員からも当初は非常に期待され、よかったですと思います。

伊藤 海原さんなんかはどうでしたか。

夏目 海原さんだつて、最初はそんなに悪い印象は持っていなかったと思います。だんだん付き合っているとやはり、ハリネズミが、仲がいいけれども、あんまり寄り添うとお互いに傷つけあう。離れると寒い。そこで適当な距離でもって安定を保ったという寓話があるけれども、両方ともなかなか論客ですからだんだん合わなくなってきた。あるいは、警察のときに何かあったか。そこまでは私は知りませんけれども。

伊藤 やはり先輩・後輩という問題でしょう。

夏目 海原さんのほうが先輩ですから。それで、警察の官僚としては海原さんのほうがずっと周囲の期待が大きかったのでしょう。中曽根さんというのは、警察にいたとはいえ、半年かそこらですぐ予備学生か何かで行っちゃって、ほとんど内務官僚としての実績はないわけですから。そういう意味で、多少、海原さんのほうが自信というか、うぬぼれというか、俺のほうが……という気持ちはあるいはあったかもしれませぬ。それがその後出てくるんです。

佐道 当初から批判的ということはない。

夏目 そんなことは記憶にないです。だけど、中曽根さんというのはすぐ最初からいろいろとぶち上げたでしょう。だからそんなに長くもちませんでした。

伊藤 ぶち上げたのに対して、「そんなのはできるわけがないだ

ろう」という。

夏目 それはありました。ぶち上げてからはもうだめです。まず「自主防衛五原則」、そんなことをいい始めたときからもうだめでした。何が自主防衛だと。日米安保は従だとか、いろいろありましたが。その一つひとつが海原さんにとってはとんでもない話だという感じでした。

伊藤 この五原則というのはあたりまえのことをいっているような。

佐道 五原則自体は確かに。

夏目 五原則そのものはそんなに目新しいことはないようだけれども、自主防衛が主で、日米安保は従だというのは違うんですよ。

伊藤 日米安保で補完するという。

夏目 要するに安保補完論なんですね。自衛隊が主であって、安保が従だという考え方が基本ですよ。やはり人間というのは自主といわれると何となく耳障りがいいものですから、当時は猫も杓子も自主防衛といていた。しかし、自主防衛は何だということになると、あまり中身はありません。それが一つと、中曽根さんはその発言の前後に、自衛隊の本当の任務は間接侵略対処だということのようなことをいっただけです。同時に、日米安保は固定延長、十年ぐらい固定することが望ましいみたいなこともいっておられるのです。矛盾というほどではないのだけれども、日米安保が従だというわりには、固定で十年でもってなきゃいかんというのもちょっとね。あの人はわりと論理的でないですからね。中曽根さんというのは、耳障りのいい、大向うに受けそうな言葉をポーンという人です。海原さんはそういうのをいちばん嫌う人だった。だから、そういうことをいってからはもう全然相容れない、水と油の立場でした。

伊藤 五原則については先生ご自身もそんな感じで受け取られたわけですか。

夏目 私も、自主防衛なんて、何が自主防衛なのかわからなかったですね。みんな口を開けば自主防衛と。装備の国産も自主防衛だとか、自衛隊が主で、日米安保が従だとか、一つひとつ検証すると、そんなことできるはずがないのです。それからもう一つ、今のとセットなのだけれども、間接侵略対処だというのも、当時は安保条約が十年間でそろそろ切れるという時期が来て、自衛隊の治安出動を盛んに勉強した時期があるのです。陸上自衛隊では富士学校に市街地の模型をつくったりしてそういうことをやって、十年前の安保騒動を二度と起こしてはならないという反省みたいなものがあつたから自衛隊もその点非常に熱心に勉強したのです。しかし実際にだんだん近づいてくると、警察の機動隊はその十年間で極端に強くなって、各所に機動隊というものができて、とても自衛隊なんか出る幕ではなくなっちゃった。その辺の時代感覚というか、中曽根さんのいつていることはいいのだけれども、なんとなく現実と少し離れているな、ピントがずれてきているなという印象を持ったのは事実です。

佐道 国防会議の事務局長というのは総理の直属でいらつしやるわけですけども、防衛庁長官がかわられたときに、顔合わせとかそういうセレモニー的なことはやるのですか。

夏目 海原さんが防衛庁長官のところへあいさつに行っているかもしれないけれども、セレモニーみたいなものとしてはなかったと思います。大臣は大臣でもって、総理とか官房長官のところに行かれます。この前いったように、海原さんは総理官邸に行かないのです。呼ばれなければ行かないし、向こうも呼ばないから、結局だんだん疎遠になっていくわけですね。国防会議としては非常に何か孤立した状況のなかにいたことは事実です。ほかの大臣ならいいのだけれども、中曽根さんというのは、ボンボン打ち上げて官邸と年じゅうコンタクトしているから余計おもしろくないという気分もあつたかもしれませんね。

佐道 マスコミは中曽根さんにかなり注目して発言もとらえていましたから。

夏目 いうことがハキハキしているからわかりやすいじゃないですか。口ごもった言い方をしないで、政治家としては非常に物事をはっきり。内容の良い悪いは別としてね。中曽根さんがいったのは、安保の延長というのを見通しながら五原則というのをしゃべられたと思うんです。

佐道 先生は個人的に中曽根さんと接触できたのは。

夏目 このころですか。

佐道 ええ。

夏目 このころは全然ないですね。ほとんどないです。

佐道 では、もつとあとの後年。

夏目 ええ、中曽根さんが総理になってからです。

伊藤 もともともないですか。

夏目 ないですね。防衛庁長官のときは私は国防会議ですから、直接大臣室へ出かけることもないし。

■基地問題について

伊藤 中曽根さんのいったなかで、自衛隊が主で、安保が従だということと関連あるのでしょうか、基地問題ですね。

夏目 基地問題というのは、中曽根さんは全部返還するみたいなことをいつていたと思うんです。それは従だから。有事駐留につながって……、まあ、有事駐留とちよつと違うのですけれども、自衛隊が全部やるからアメリカは引つ込んでいくと。だからそんなにいっぱい要らないよ、帰ってくれということはいわれたのは事実です。だけど、それは彼が本当にオリジナルにそう思ったかどうかというの疑問なので、やはり当時の趨勢というものをある程度先を読む能力がある人にはあったと思います。先見性というか。ベトナムはそろそろ終局だ。中国も国連に入る。国連で認められるような、

多分その時期ですよ。米軍自身も在日米軍の削減というようなことをいろんな人がいろんなところでいつていたと思うのです。そういうものを先取りして、彼は基地大幅削減というようにことをいつたのだらうと思います。そういう意味では、あの人は非常に先を見る目というか、政治家としては必要なんでしょうけれども、そういう先見性というのかな、パツと先取りすることは上手。要領がいいといえれば要領がいいかもしれない。

佐道 やはり先生などからごらんになると、ぶち上げているなどという感じですか。

夏目 当時は、正直いうと、ぶち上げているというよりは、そういうことをはつきりいう大臣がいるということに対して非常に新味を感じました。それまではそんなことをいう人はいなかったから。政策マターみたいなことを大臣といえどもはつきりいう人というのは、松野さんにしても増田さんにしてもいなかったですね。内向きなことはやっていたけれども、外へ向かつて発信できるような発言というのは中曽根さんが初めてではないでしょうか。私はそう思います。マスコミもあの人だから取り上げたのかもしれないけれども。

伊藤 防衛庁のなかにブレーンをつくったのですか。

夏目 防衛庁のなかというより、学者が好きでしたから、防衛研究所に若泉敬とか。

中島 ああ、京都産業大学の。

夏目 中曽根密使としてその後アメリカに行ったり、ああいう人たちね。それから桃井真、あのへんが多分ブレーンだったんじゃないですか。

佐道 その当時。

夏目 よく知りませんが、そういう人の意見は聞いたかもしれません。

佐道 防衛庁側から、例えばかつて先生の同僚とか部下であった

方からは中曾根さんについてのいろんな話は聞こえてきましたか。

夏目 中曾根さんの秘書をやった人を私はよく知っています。もう死にしましたが、池田久克というのがいて、これはなかなか能力もあり勇ましい男です。三十二年採用かな。これが中曾根さんの秘書官をやって、その後もずっと非常に親しくしていたと思います。彼の話なんかはべた褒めでした。

中島 小説になっていますね。

夏目 小説というか、手記か何か本を書いていますね。『長官空をいく』とか何とか。

伊藤 ではまあ、防衛庁のなかでも非常に評判がよかったですね。

夏目 よかったと思う。しかし、そのずっと後あるところで山中貞則さんと中曾根さんが話したことがあるんです。そのときに山中さんが、「おい中曾根、おまえは防衛庁長官のなかでいちばん評判が悪かったぞ。俺が二番目らしいけど」といったんです。

伊藤 それはだいたいぶあとの話ですか。

夏目 それはずっとあとの話。でもまあ、当時どちらかといえばよかつたんじゃないですか。海原さんにはあまりよくなかつたけれどね。

伊藤 まあ、毀誉褒貶といえますから、誉める人あれば、けなす人もあるということでしょう。

夏目 それはそうでしょうね。ただまあ、今までにない新鮮味のある人だという受けとめ方が多かつたと思いますよ。

伊藤 確かに基地の問題は、縮小して、そのあとを自衛隊が埋めていきますよ。

夏目 これも、沖縄返還とか、ベトナムとか、SALTみたいな協定もできて、だんだん世の中は何となく極端な対立ではない時期に一時行った時期があるんですよ。そういう時期だったからそういうものを確実に読み取ったのでしょう。アメリカの国防省の人間も何人かそんなことをいつている人がいましたよ。

伊藤 国防会議としては何も関与するところではない。

夏目 ないですね。それはただの不正規発言ですから。

伊藤 いやいや、基地の返還とかそういう問題は。

夏目 それは具体的になつてくれればあれですけども、そのころはまだそんな話はないですから。だけど、二、三年かけて結果的には中曾根さんのいうとおりになつてくるんですよ。ニクソン共同声明で沖縄返還から基地の縮小とか、関東計画というのですか、要するに関東地方にある米軍基地を全部返還してどこかへ持っていくとか、そういう話に具体化されていくわけですから、そういう意味では当たつていたといえれば当たつていたのですよ。だけど、多少、みんながそつちの方向へ行くぞということを感じてはいたので、彼だけが考えていたわけではないんです。ああいう立場を利用して派手にぶち上げるというのは確かに芸といえれば芸なのでしょうね。

伊藤 事柄を多少推進はしたのでしょうけれども、具体的に彼が何かやつたかという点、そういうわけでもないのでしょうか。

夏目 そういうわけでもないと思います。

■「国防の基本方針」改定

佐道 それまでは防衛庁長官になられても防衛問題の「ぼ」の字もわからないような方々がずいぶんいらつしやつたと思うのですけれども、それに比べれば中曾根さんは。

夏目 非常に熱心だし、勉強家でしたし、あらゆる意味で貪欲でした。とにかくこういうことをぶち上げるだけでも、そういうことを考えるだけでも私はある意味で政治家の素質だと思う。そのあとまたすぐ、今度は国防の基本方針を改正するなんて言い出すのですから。そんなことを今までの人は考えたこともない。その後、また何十年もだれも考えないんです。戦後、自衛隊の五十年近くある歴史のなかで国防の基本方針を変えようといったのは唯

一中曾根さんだけですわね。

伊藤 この「変えよう」というのが大問題になったわけですね。

夏目 なりました。

伊藤 これは、先生ご自身はどういうふうにごらんになっていましたか。

夏目 それは不可能だと思った。

佐道 不可能ですか。

夏目 中曾根さんの考えていることは私は間違っているとは思わないし、書いてあることもおかしいとは思わないけれども、当時の政治情勢から見て、なぜ平地に波乱を巻き起こしてまでそんなことを日本政府ができるかと考えたときに、それはなかなか至難の業だと思ったのです。そうしたら案の定、海原さんが反対しましたね。海原さんが、「とんでもない。今こんなことをやるべきではない」ということで佐藤総理にたきつけたのです。佐藤さんも、「やらんですむのならやらんほうがいいや」というので没になっちゃった。

伊藤 海原さんのいろいろつぶした戦果の一つですわね。

夏目 そのころは彼と彼はもう、お茶くみどころではない、非常に悪いですね。

中島 国防の基本方針の改定というのは、草案ができたとか、討議を行なったとか、その段階まではいたらないところで。

夏目 正式な討議までいたりませんでした。中曾根長官がそういうものをぶち上げた段階で海原さんはすぐリアクションしてきますから。

伊藤 もうその段階でおわりですか。

夏目 おわりです。総理が一言で、「やめよう」ということをたしかいわれたのだと思います。そういう意味では、僕は海原さんもやる時はやるんだと思って感心した。つぶすことについては依然として、破壊のエネルギーは(笑)。

佐道 国防の基本方針改定と中曾根さんが言い出して、言い出したことで同調しようとした人というのは。

夏目 いたと思いますよ。だけど、中曾根さんに欠けているところは根回しみたいなことは一切しないでポーンとぶち上げることです。日本の社会では、ねたみ、嫉み、いろんなものがあって、そういうことに対してはなかなか素直にみんながうんといわないですね。防衛庁のなかにはあつたかもしれないけど、政治とか国会とか全体を見たときにやはり、「とんでもないことを言い出すじゃないか」、「跳ね上がっているんじゃないか」みたいな見方をする人もけっこういたんだと思います。だから海原さんの言いが通つたんだと私は思います。だから、中身が良い悪いじゃないんですよ。

伊藤 「俺は聞いてない」という。

夏目 そう、それに近いような話ですわね。「ちゃんと根回しもしないで何だ」と。このあとの四次防もまた、それもその問題で(笑)。

佐道 これは海原さんが佐藤総理にいろいろいってつぶしたということですけれども。

夏目 そうだと私は記憶しています。

佐道 海原さんと佐藤さんの仲というのも、そうあんまり……。

夏目 よくはないと思います。政治家として、こんなややこしいことを今やって世間を騒がすよりは、そういう意見があるのならやめておこうかという、事なかれ主義みたいなものが総理の頭の中をよぎったのではないのでしょうか。わかりませんけれども。

武田 中曾根さんと佐藤総理は仲がよかったですか。

夏目 知りませんね。

伊藤 じゃあ、中曾根さんは佐藤総理を説得してからぶち上げればよかったのに。

佐道 こういう問題があつて、「よし、つぶさなきゃいかん」と

いうようなことで活動し始められたときの海原さんというのは、
雰囲気がかわったのですか。

夏目 意気揚々としていましたよ。アクションをとったときは知
りませんけれども、うまくいったときは。

佐道 例えばこういうことを国防会議のなかで議論するというよ
うなことはあるのですか。

夏目 全然ありませんでした。国防の基本方針について国防会議で
議論するとか、そういうことはなかった。そこまでいかなかった。

伊藤 これは海原さんの個人プレーですか。

夏目 ほとんど個人プレーでした。それは、中曽根さんがぶつち
やったから、新聞なんかに出たからつぶしたのでしょね。考え
て見ると日本の官僚というのはそういう意味では姑息なんです
よ。いつも「聞いてない」という話なんです。まあ、いわれて
みれば確かに、当時の社会党が力を持っていた政治情勢のなかで
国防の基本方針を必然性もなくガラッと変えるというのはなかな
か難しい話であることは間違いないですね。自分の政治力を過信
したのかもしれないし、あるいは、そんなものできなくてもと
にかく自分の存在感をアピールしようとしたのかもしれない
ね。あの人はパフォーマンスが好きですから。そこところはわ
かりません。

佐道 国防の基本方針をかえて自主防衛を明確にするということ
を打ち出したときの防衛庁のなかの反応というのは。

夏目 防衛庁はそんなに、当時の陣営を見ると、中曽根総理に楯
突いたり、文句をいったりするような雰囲気はなかったと私は想
像します。そういった学者とか何とかの意見を聞いているとい
うことに対して内心どう思ったかということとは別として、正面き
つて、「それは今やったら大変だ」とかいうことをいった形跡は感
じたことはありません。

佐道 今の学者ということかというと、中曽根さんのときに、あと

でまたいろいろ名前をかえてできるのですけれども、「防衛を考
える会」というのができて。

夏目 それはまた別の大田だけだね。

佐道 中曽根さんのときにもそういう会をつくっておられますよ
ね。

夏目 中曽根さんのときにそんな会があつたかな。どういう人？

佐道 これは、ソニーの盛田（昭夫）さんとか、もうそのときか
ら猪木（正道）さんとかも入っていて、一応提言みたいなことも
出しているのですけれども。坂田（道太）さんのときの前に。

夏目 私はそれは知りませんね。何だろう、中曽根さん個人のあ
れなのだろうか。それとも役所としてそういうものを。

佐道 役所として、広報課が一応窓口となつていろいろやってい
たみたいですが、それは全然ご記憶にない。

夏目 それは私の記憶のなかにないですね。

伊藤 自主防衛論というのは、やはり社会党はためなのですか。

夏目 自主防衛論がだめというより、それ以前の問題ですね。社
会党は自主防衛がいいとか悪いといっているのではないので、も
ともと自衛隊というのは違憲だという立場ですから、どんな名前
であれ、自主ならいいやというわけではない。自主防衛とか何と
かというのは、防衛力を増強しようとする人達のほか、学者の一
部とか、自民党のなかとか、そういう連中が主としていつていた
ことであつて、野党がいつていたのではないと思います。民社党
の一部がいつていたかもしれませんが。

伊藤 そうすると安保重視になりますけれども、安保にそもそも
反対しているわけですから。

夏目 そんなことを社会党がいつていた記憶はないですね。社会党が
自主防衛をどうのこうのといつていた記憶はないです。

佐道 自主防衛ということ自体は、中曽根さんの前の有田（喜一）
さんのときから安保補完論みたいな形で国会でもいろいろ出てき

ていたわけですよ。その当時から、それはできもしないことというものは。

夏目 自主防衛は相当長いあいだいわれていましたね。それこそ三次防のときの装備の国産化ということをしたときから自主防衛というのは国産化と同義語くらいに使われた言葉ですから。それは、対米従属防衛よりは自主防衛という方が聞こえがいいから、だれも自主防衛に反対するやつはいないです。自主防衛の自身が何かというと、一人ひとりということがはつきりしません。だけれども、自前で何でもできるとはだれしも思っていないわけですから、従だ、主だといったって、あんまり意味のない議論だったような気がします。

佐道 安保補完という議論ですけれども、これもよくわからない。**夏目** よくわからないと同時に、むしろ安保補完論とか自主防衛というのの背景は、今いったように国内では意味ない議論なのだけれども、時期的に何時かということにはつきりしませんけれども、アメリカがそもそも、そのころにベトナムもあつて相当経済的に困ってきている。世界の警察官たる立場を放棄せざるを得ないような時期になつてくる。中国は認めなきゃいかん。そういうことになつてくると、「日米安保というのは絶対必要なのか。われわれの血でもって日本を守らなきゃいかんのか」と、アメリカの国内でそういう議論が出てきたのもこの時期だと思うのです。だから、沖縄は皆返還する。もう日本が自分でやつたらいいじゃないかと。ドル防衛もみんなそういうところへ入ってくるのでしようけれども。だから、むしろそういう意見があることに便乗していたかもしれません。だけど、それは日本の国の進み方として決まっていた方向ではなかったんだけど、そこに気づいたかどうかは別として、そういうものが合体して自主防衛論になつていったかもしれません。私は自主防衛なんて無理だと、今アメリカを逃すべきではないという気持ちのほうが強かったから。

伊藤 しつかりと安保で捕まえておいたほうがいいということですね。

中島 中曽根さんが首相になられてから、例えば不沈空母発言ですとか、よくロン・ヤス関係ということをしていわれて、どちらかというとアメリカと積極的に協力しているという姿勢が印象に残っているわけなのですけれども。それと、中曽根さんが長官であられた時代にいわれていることと若干ずれがあるのかなという印象を受けるのですが。

夏目 若干じゃない、中曽根さんはいつも大きくずれますよ。

中島 やはり、ぶれたということに。

夏目 ぶれたというか、世の中が変わつたのでしょね。そう思いますよ。中曽根さんという人は今でもそうじゃないですか、いふことが変わるじゃないですか。小泉総理に対する見方とか、ああいうものにしてもかわる。あの人は風見鶏といわれたくらいで、そのときの世論とかマスコミとかそういう向きを敏感にキャッチする能力に長けているのですね。

佐道 中曽根さんが大きくぶれたというより、流れにうまく乗つたという。

夏目 そうかもしれない。そういう意味では非常に見事というか、うまい人ですよ。乗り切れない、感じない鈍いのが多いから(笑)。

佐道 中小派閥から総理にまでなつたのですから。

夏目 それはそうですよ、多分そうだと思うんです。だから、決して佐藤総理と馬が合ったわけではなくて、佐藤総理より俺のほうがよく知っているという意識があつて、そういうものをぶち上げた。さっきの話の続きだけど、佐藤総理もちょっと、「このやろう、あんまり調子に乗っていると何を言ひ出すかわからない」というので、お灸を据えたいという気持ちの結果として海原と結んだ。そういうのがあるかもしれないですね。政治家の心情はわか

らないですからね。

佐道 ちょっと大まかな質問になりますけれども、中曾根さんを登用したのは佐藤さんなわけですからけれども、佐藤総理大臣ご自身は防衛の問題についてどうであったというふうに今思っておりますか。

夏目 沖繩の問題にしても何にしても、そういうものにぶつからざるをえなかった。否でも応でも防衛問題に目を向けなければいけなかったという意味では池田(隼人)さんと違うところだと思っただけけれども、私は佐藤総理というのは本質的に防衛問題について見識のある人とは必ずしも思わないです。

伊藤 やはり内向きの政治家。

夏目 そうだと思えます。内向きでない総理というのはあまりいいないけど。外への発言を重視したのは中曾根さんをもって嚆矢とするんでしょうね。

■日米安保自動延長

伊藤 日米安保がちょうど十年の固定期間をおえて自動延長ということになります。この機会に何かやるうという意見もあったのでしょうか。ただ単に自動延長ということではなくて、何か交渉するとか。

夏目 いや、日本にあったのは固定延長と自動延長しかないんですよ。安保をやめようなんていう意見はごくわずかな声であって、全体の声としてはなかったと思う。むしろアメリカに多少それに近い声がある。アメリカもやめようとはいわないけれども、固定延長なんかやめて、自動継続、一年契約で切つていこうというくらい気持ちがあった。そういうものの読みみたいなもので、「今アメリカがそういつているのなら物怪の幸いだから切れようや。自動延長でいこうや」という人と、「そうさせない。固定延長にしおこうや」という人と、いろいろいたと思うのです。だけどや

はり、アメリカの国内がそもそも固定延長という声が非常に小さくなってきたから自動延長になったのだと思います。それとまあ、固定延長よりは自動延長のほうが国内の治まりも、多少の抵抗も少なくてすむということもあつたのでしよう。ただ、それも国会で議論しているだけであつて、その話はそれほどわれわれの仕事に響くようなものではないですからね。

伊藤 いずれにしても、安保がなくなるということを前提に考えているわけではないでしょう。

夏目 アメリカは相前から自動延長みたいなことをいつていましたからね。

伊藤 この七〇年のときは、六〇年安保の先入観があつて七〇年は大いに盛り上がるのかと思つたら、六九年でポシャツてしまいましたね。

夏目 全然盛り上がらない。僕らが国防会議にいても、二年ぐらいの間は治安出動の勉強をずいぶんしましたよ。自衛隊が何をすべきか、何ができるかということ。やはり個人的に警察官の職務権限を持つていけるわけではないので、自衛隊が出る以上、部隊として、軍隊としての能力が発揮できるような形でなければ自衛隊が出て意味がないとかね。自衛隊が出動する以上、軍隊としての能力を発揮できるものでなければならぬ。警察官のお手伝いみたいなことはできないよ。あくまでも実力を持った部隊として行動できることに自衛隊の出る意味があるんだ。それ以外は出るべきではないとか、いろんな議論をしていまして、陸上自衛隊もあのころは相当熱心に勉強していました。それがあつてなくおわつちやつたものだからね。

伊藤 七〇年になる前に暴発しているいろいろやつちやつて、七〇年は非常に静かに。

夏目 静かだったんですよ。

佐道 治安問題の研究ですけれども、それは国防会議として正式

にそういうことを。

夏目 いや、会議ではなくて勉強会です。将来そういうことになったら、どうせ国防会議で正規に議論しなきゃいかんだろう。そのためには今から勉強しておこうということで。われわれもあんまり治安出動とか治安行動についての勉強を普段していませんからね。自衛隊も初めてのことでですから、なかなか難しい問題があったので勉強していただきました。

佐道 陸上自衛隊の方とか、警察の方とかをお呼びになって、研究会とか勉強会をおやりになったということですね。

伊藤 警察と自衛隊は全然違うのでしょうか。

夏目 違いますね。

伊藤 政策もね。実際に治安出動といったら、本当に戦争になっちゃうじゃない。

夏目 戦争になるといふか、相当やはり……。一人ひとり説得するわけじゃないしね。

佐道 六〇年安保がおわたったときに、当時陸幕長だった杉田（一次）さんなんか、これからは間接侵略対処が陸上自衛隊では大事だからということ、治安行動の参考とか、警察との協定とか、防衛庁も含めていろいろなおやりになったりしていますけれども、それから以降、陸上自衛隊と警察とのお互いの協力のあり方とか、そういうのはあんまり進んでいなかったのですか。

夏目 一応、支援協定とかそういうものはできていますけれども、しかし七〇年安保が無事におわってからはあまり進んでいないのですか。最近のテロとか何とかはまた別にしましてね。それはどうしてかという、自衛隊の心底には、俺たちは直接侵略に対処するのが本来の仕事だという意識がやはりあるのですよね。日本人相手に出て行くというのは何となくおぞましい感じを持っていますから、どうしてもそういうものはおろそかになる。それと、もう四十年過ぎてからは機動隊が町にあふれてい

たじゃないですか。国賓が来るといったって、町じゅう機動隊だらけでしょう。ああなると、とても自衛隊なんか出る幕ではない。

伊藤 自衛隊が出る必要がなくて結構だ。

夏目 結構だった。だけど、六〇年安保のときは、出るか出ないか、ぎりぎりまでいったようですよ。すけれどもね。

伊藤 あのとときは警察力が弱かったですからね。

夏目 そう、それで急遽機動隊をそれぞれつくったのですよね。

佐道 治安の勉強とか研究会をされるときには、陸上自衛隊に、警察に、あとは法律関係のところとか。

夏目 そうですね。

佐道 公安調査庁とかそういうところも。

夏目 あるいはそういう話も聞いたかもしれませんが。いろんな人の話を聞いていたと思います。

伊藤 六〇年安保のときに、旧左翼が主で、新左翼はたいした武装をしていない。七〇年安保に近づいたがって、浅間山荘みたいにああいう銃撃戦みたいな。

夏目 もう、装甲車や戦車を使って道をふさぐとか、そういうことも考えました。

伊藤 三菱重工の爆破事件とか、ああいうのを見てみると、やはり市街戦になるじゃないかという想定はありえたのではないですか。

夏目 まあ、市街戦というほどではないにしても、多少。さっきも申しあげたように富士の、今でもどこかハワイか何かで市街戦のテロの勉強をしているけれども、あれに類したような模型をつくったりして陸上自衛隊は相当訓練していたはずですよ。なるべく演習場の奥の目立たないところで（笑）。

伊藤 まったく当てが外れたという。

夏目 まあ、当てが外れてがっかりというのはないけれども、よかったですね。あそこでそんなものもあつて自衛隊が出たら、また国民と自衛隊の間は距離がでさっちゃうしね。

■中曽根・レアード会談

伊藤 中曽根長官の訪米、向こうのレアード国防長官との会談というようなことは記憶にございますか。

夏目 中曽根長官が訪米してレアードと、というのは私は記憶にないのだけれども、むしろレアードと会ったのは、二代くらいあとの増原(恵吉)さんとレアードが会っているのですよ。

佐道 レアードさんがその翌年に来られて、中曽根さんと増原さんが交代する時期だったので増原さんと会われたと思うのですけれども。

夏目 むしろそちらのほうが当時の印象にちよつとあります。

伊藤 これは定期協議になったのですか。

佐道 まだなっていない。

夏目 なっていないんですよ。多分、中曽根さんが訪米してこんなことを提案したかどうか、まあ、個人的に話したかもしれないけれども、そのあとずっとまだ当分定期協議にならないはずですからね。多分、これもまたどこかで一発ぶち上げたのでしょう。

伊藤 定期協議にしようよということでしたのでしょ。

夏目 翌年は確かに増原さんとレアードで日本の装備の改善要求みたいなことを向こうからいわれているのです。日本の装備品は古くてあんまり役に立たない。防衛産業も育成しないといかんじやないかみたいなことも。それはむしろ中曽根さんではなくて増原さんだという記憶があるけど。それは調べていただければわかります。中曽根さんの訪米というのはあまり記憶にないです。

佐道 このときに海外で記者会見をされて、四次防は中曽根構想ということややるんだということを結構おっしゃって話題になっているのですけれども。そのときにたしかへり空母の話も出たり。

夏目 またへり空母が出ている？

佐道 ええ、まあ、それはまた後の話。

伊藤 まあ、中曽根さんはいろんなところでいろんな話をしていくからね。

佐道 そうなんですよね。このときだけではないですから。

夏目 中曽根さんとはとにかく臨機応変、いつも派手にぶち上げることはなかなかのものでしたね。そういう実行を伴わないで派手に打ち上げることに對してもっともいやがるのは海原タイプなんです。

伊藤 海原さんは何もぶち上げないのですか。

夏目 ぶち上げないです。絶対にぶち上げない。

佐道 壊すのに忙しいので、なかなか。

■最初の『防衛白書』

夏目 『防衛白書』というのも記憶にないんです。

佐道 え、ないんですか。

夏目 つくったのは知っていますよ。

佐道 中身自体が印象に残っていないということですか。

伊藤 初めてこれが出たなという。

夏目 うん、「何だ、こりゃあ」と思った。

佐道 何だ、こりゃあ(笑)。確かに薄いものですし。

夏目 薄いんです。で、今いったようなことを書いてあるだけでしょ。べつに具体的な中身があるわけでもないし。これは閣議決定か何かしているのかな。

伊藤 白書だから閣議決定でしょう。

夏目 あまり問題にならなかつたね。最初の白書だというだけの話題性だね。

伊藤 じゃあ、あまりちゃんと読まれなかつたのかなあ。

夏目 読まれなかつたのではないかな。

佐道 周りの方もやはり同じような感じですか。

夏目 白書の話なんかした記憶ないもの。今でもそうなんですよ。

佐道 あ、そうですか。

夏目 今でもそうなんているとしかられちゃうから、黙っていて(笑)。

伊藤 (笑)、そうですか。

佐道 それこそ海原さんは、毎回白書が出るたびに、うそが書いてあると書いて批判をして。

夏目 うそが書いてあるということはないけれども。まあ要するに、海原さんにいわせれば計画がみんなうそだからね。それほどではないけれども、あれを毎年書くのはしんどいですね。かわり映えしないから。それを、衣装だけをかえて変わったような格好にしないと意味ないし。

中島 やはり国民と防衛庁、自衛隊の距離を縮めようというお気持ちが一番最初にあったということでしょうか。

夏目 それはあるでしょうね。だけど、正直いうと、白書なんて今でも大多数の国民は読まないし私は断言できる。

武田 まあ、読まないでしょうね。

夏目 せいぜい新聞に出たときの見出しを読むくらいで、あとはごく一部の研究者とか、そういう関係者は読むかもしれない。しかし、その人だって全部読んでいるとはとても思えない。私が読まないもの。

一同 ハッハッハッハッハッ(笑)。

伊藤 ただ、前年度と何が違ったのかと新聞記者は片言隻句つかまえてくるでしょう。

夏目 新聞記者の関心はそこなんです。だけど、毎年毎年中身を変えらるというほど変わるべき中身がないんですよ。それを変えたように読ませるといふのは非常に苦しい話です。だからおもしろくないんですよ。アメリカみたいにコロッと、二か二分の一戦略が二か二分の一戦略に変わるとか、びつくりするような中身があればみんないやでも読みます。だけど、日本の場合は十年一日のごとく、

多分今年はやつにはティモールへ行つたとか、新しいことといえはその程度です。あとは変わりばえがない。厚くなるしね。

佐道 今はCD-ROMもついて、だいぶ便利になりましたけれども。

夏目 あんなおもちゃみたいなもの。

佐道 おもちゃですか(笑)。

夏目 私が書いたのは三回目か四回目の『防衛白書』。

伊藤 防衛庁に戻ってから。

佐道 じゃあ、坂田さんのとき。

夏目 いや、それは私の前の人で、それが二回目、私が三回目だと思ふ。

伊藤 自分で書くときはどんな感じですか。

夏目 だから、それを何とか読ませようと。国際情勢だの、国防の基本方針から、三次防の中身とかを書いたってだれも読まないだろう。読むに耐えるものを書くといふって書いたのだけれども、いろいろな段階でのチェックでズタズタにされるんですよ。ちょっと余談だけど、私がつくったときは「防衛計画の大綱」というのができた。大綱というのは初めてできたのだから、これは柱にせざるをえない。それから、ミグ25というのが日本へ飛んできて亡命した。それから、航空自衛隊ではF-Xの機種選定がちょうどたけなわだったんですね。F15がいいか、F14がいいか、それからF16というか例の海原さんの好きなT38の後継機種がいいかいろいろと議論しているときに、その三つだけに絞って書いた。そうしたら、次の年から見事に元へ戻って、総論、各論。でも、そのときに一つだけ私が新しいことをしたのは、それまで国際情勢というのはあつたけれども、国際軍事情勢というのはなかったんです。私は、それはだめだと。世界の情勢がどうのこうのではありません。実際に軍事力がどういふふう世界では張り巡らされているのか。そこを説かないと防衛白書にならないのではな

いかということだね。マスコミで軍事バカとかいわれましたよ。そういう自負心はあるけれども、読まれたかかどうかわからない。伊藤 では、その回だけちよつと様子が違うわけですね。

夏目 そのときだけ違うんです。編立ても違うしね。それから、挿絵を入れたんです。その絵描きがへたでねえ(笑)。へたといつてはいけないんだけど、私の趣味に合わない絵描きでして、ちよつとくどくてね。昔の山本有三がつくった小国民世界文学全集の挿絵じゃないが趣味のよくないペン画で、あんまり出来はよくなかったですね。でも、そういう新機軸を出したつもりなんです。伊藤 それからあととはまた元へ戻って、ずつと今日まで。

夏目 元へ戻って同じ編立てです。「国民と自衛隊」とかね。でも、その防衛計画の大綱というのは波紋を生じたんですよ。初めて久保さんの発想に近い大綱ができた。それをつぶさに解説したもののだから、いまだに制服自衛官から、「大綱は仕方がなかったとしても、防衛白書でことさら追認することはないだろう」と。だいぶぼやかしたんですけれども、それでもやっぱり。私が悪いのではなくて、大綱がそういうものですから解説する以上そうならざるをえないのだけれども、わざわざ白書にして配ることもないだろうといわれました。それが四十七年か八年か。もつとあとかな、五十年ぐらいか。

伊藤 またそのときに伺います。
佐道 そうですね。

■四次防概要

伊藤 四次防のほうに。

佐道 ちよつとこの白書が出た直後ですけども、概要というのがまず十月に出されて、それを少しも揉んで翌年の四月に原案ができるわけです。この概要の段階でもちろん新聞とかにも出ていますし、総経費五兆二千億ということになっていくのですけれど

ども。これは結局、そのあと国防会議でもいろいろ議論。

夏目 概要というのは新聞で知りました。これは防衛庁独自の案として、国会かどこかで説明して、それが新聞に大きく出たのですね。その前に断片的に中曽根さんはあちこちでしゃべってはいるのでですけども。

佐道 まずごらんになって第一印象はいかがでしたか。

夏目 不可能だと思った。そんな膨大な金を四次防で使うというのは現実的ではないし、実際的ではないなと思いました。ここにも二・二倍と書いてある。ベースアップを入れると五兆八千億とべらぼうな額ですよ。このなかにいっぱい大物が入ったんじゃないかな。船にしても何にしても。海原さんはすぐこれを見て、「とんでもない。こんなもの防衛庁限りのものだ」ということで猛反対しました。私もこれは無理だと思った。それと同時に、それよりもつと、なぜ防衛庁は自分たちの案だけで、ほかの各省との調整もしないで。国防会議はまあいいとして、大蔵省ともつと綿密な調整をすべきですよ。そうじゃないと案として現実のものにならないということ。これは役人なら百も承知はずなのにこういう上げ方をするのは、それは中曽根さんも好きだろうけれども、周辺にいた人が何の注意もしなかったのかなと、当時は海原さんとそういう話をしたことがあります。

伊藤 これが四次防原案になるまでに相当圧縮されていくわけですか。

夏目 ずつと圧縮されてきますよね。もう、原案のときにはだいぶ減っていくんじゃないかな。多分、最終案では四兆数千億ぐらいになっていきますね。一兆円近く減るのですよね。

伊藤 でも二倍近い。

夏目 うん、二倍にはなるのですけれども。だけど、その後またさらに、四次防はそれすら大幅にできなくて削減しているのですね。

伊藤 できないというのは、作業が。

夏目 いや、このあとオイルショックだとか何とか、日本の財政事情が悪くなったり。

伊藤 節約ですか。

夏目 あれは何だろうな。オイルショックというのはもつとあとかな。

佐道 七三年です。四次防が一応できて、そのあと結局積み残しがいふん出てしまうことになるわけですね。

伊藤 現実の予算がつかなかったり。

夏目 積み残しがあるんですよ。

佐道 概要を説明して、そのあと国防会議のほうに防衛庁からも正式に説明がくるわけですね。

夏目 来ます。それは概要ではなくて、概要は来なかったです。

佐道 概要のときには来ないのですか。

夏目 うん。

佐道 四月の原案になってから。

夏目 多分、原案になってからです。

■ 中曽根長官と海原局長の対立

伊藤 原案の段階で海原さんが批判を徹底的にやるわけですか。

夏目 いや、この概要のときも。

伊藤 概要のときから。

夏目 多分、概要のときにいちばん激しく反対したんじゃないですか。それで、よく詰めるということになったはずですよ。大蔵省にも官邸から指示がいたりしてね。

佐道 概要と原案では本文の文章もだいぶ変わったりしていますし。

夏目 しているでしょう。四次防の原案になるとおもしろくない文章になっているでしょう。

佐道 かなり従来に近い。

夏目 三次防と近いようなものに。

佐道 はい、もうその段階で。四次防の概要のときには、例えば「日米安保」という言葉が一回ぐらいしか出てこないのですけれども、原案になるとたくさん出てきたりとか、いろいろ。

夏目 多分そうだと思います。

伊藤 海原さんが批判するときには、どういう場で、どういうふうにするのですか。

夏目 多分、官邸へ行っているでしょうね。それと、このときには海原さんよりもむしろ各省の反対が多かったと思います。大蔵省とか。

伊藤 要するに、これは予算的に現実的ではないということですか。

夏目 そういうことだと思います。しかも相談がないから。

伊藤 しかし、全然相談なしにやったのですか。

夏目 だって、中曽根さんというのそういう方でしょう。政治家としての見識でもっていつちやっているのですよ。海原さんは口を開くごとにそのことをいってました。防衛庁だけでできるはずがないじゃないかということも再三いってました。

佐道 概要が出て、海原さんが批判を強くなるわけですね。そうすると、長官ご自身はぶつかりあっていますから別としても、防衛庁のほうから海原さんのところに説得に来たり、なだめに来たり、そういうことはあまりないのですか。

夏目 そのとき防衛庁はだれかな。

佐道 内海さんが次官です。防衛局長は十一月から久保さんがなられます。

夏目 概要のあとでしょう。

佐道 概要のできたあとです。

夏目 内海さんという人は、海原さんにいわれたら、「そうかな」

というだけです。あんまり反対しない。久保さんになってから、これは現実的ではないと思って直したんじゃないですかね。防衛庁のなかで。たしかこのときの防衛局長は島田（豊）さん？

佐道 防衛局長は……。

伊藤 久保さんの前？

夏目 久保さんの前だと、宍戸（基男）さんとか、島田さんとか、そのへんだよな。とても海原さんとけんかできるような人達ではなかったですね。このころは海原さんの独壇場ですよ。われわれに相談するなんてものじゃなくて、一人でモグラ叩きみたいにつぶして歩いた。

伊藤 公に外に向かつてもいったのですか。

夏目 っています。

伊藤 中曽根長官と国防会議事務局長は……。

夏目 そうなるとやはり、どちらがいい悪いではないんですね。「海原の野郎、けしからん」と思っても、総理なり官房長官はどうするかといったら、「よく政府部内で検討して、すり合わせをして出せよ」と、こういうのが関の山です。そうなれば防衛庁もそうせざるをえないから、また下から上げて、事務的に国防会議に説明に来るしかないです。「おまえが悪い」とか、「おまえが間違い」とかいわないから。それは海原さんの作戦勝ちなのでしょうね。

佐道 現実に防衛庁長官と海原さんが正面からぶつかっているわけですよ。防衛庁長官が海原さんのことをお茶くみといったり。夏目 決して面と向かつてぶつかっていないからね。いつも第三者を通すとかそういうことであって、事務が停滞するだけの話です。

佐道 やはり事務は停滞するわけですか。

夏目 防衛庁がそれをやろうとすることも受け付けるところがないのだもの。

佐道 国防会議の立場といいますか、例えば先生ご自身はこのときは次席で海原さんのすぐ下にいらっしやって、海原さんは一人でいろいろおやりになっているかもしれないですね。そうしたら、中は先生がおとりまとめになるわけですね。仕事もやりにくい。

夏目 それはたしかにやりにくいですよ。やはり防衛庁としては内心おもしろくないと思っっていますからね。けれども、しようがないからきちんと最初から説明に来ないといかんでしよう。こちらもそれはわかっているから、「結構ですな」とはいえないから、厳しい見方をせざるをえませんよね。このころは、私もだいたいぶるさいことをいって嫌われたと思いますよ。

伊藤 お茶くみの存在というのはどういう意味なのですか。

夏目 要するに、権限はないんだと。俺が決めたものをそのまま国防会議とか閣議にはかればいいんだ。おまえのところでは中身をどうのこうのいえる立場ではないだろう。事務局というのはお茶くみだ。決めるのは国防会議の議員たる大臣諸侯なのだ。そこへ早く上げろというのにはお茶くみとしては越権行為だという気持ちです。だけど、日本の役所というのはそういうことにはありえないのね。やはり事務的に通らないと、防衛庁がはかるのではなくて、国防会議事務局がお膳立てをして国防会議にはかるわけだから、われわれが動かなければ国防会議は開けないです。だから、海原さんがノーといったら国防会議まで話がいきません。幹事会にすら話がいきません。参事官会議で実質的な議論をああだこうだとやるのは、それはできますけれども。なぜできるかというの、大蔵省の主計官とか外務省の北米課長が外務省の兼任参事官だから半分海原さんの部下なわけですよ。しかしそこでまとまらないと幹事会にのぼらないでしょう。幹事会というのは次官レベルですけれども。だいたい次官会議というのはいつもそうだけれども、次官会議のときには議論が変に交錯しないで、すんなり決まって上へ上げる。こういうのが日本の閣議、次官会議の

慣例ですから、上げようがないです。防衛庁でいくら切歯扼腕してもどうしようもない。制度としてその方がいいか悪いかは別として、少なくともそういうことですから、防衛庁としてはがんみたいに思ったのでしようね。久保さんのときに三輪さんが官邸へ行って、「やりにくくてしようがない」といったことと同じようなことが、この時はもっと強力な形であったわけですよ。

■ 国防会議と防衛庁

佐道 もう国防会議はなくなっていましたでしたが、いまだかつてこれほど国防会議と防衛庁がぶつかったのはこのときだけですよね。

夏目 その後はあんまり知らんけど、ぶつかったという話はしないしね。多少はあるんじゃないですか。湾岸戦争のときにしても何にしてもあると思いますよ。ただそれは、海原さんのときの、ああいうだけが見てもわかるような形でやらないだけで、もっと上品に紳士的にやっているからね。

佐道 紳士的(笑)。

伊藤 紳士的の反対は何だろう(笑)。

夏目 それはいいはずがないですよ。というのは、防衛庁の言い分をいちいち聞いていたら官邸はもたないですからね。官邸は自分でいわないでそちらにいわせることは幾らでもありますから。お互いを利用してるところがあるしね。

伊藤 防衛庁の中はトップダウンではいけないのですね。

夏目 防衛庁の中はいきます。

伊藤 国防会議だからか。

夏目 国防会議というのは独立官庁なんです。総理大臣直轄だから、防衛庁長官の指揮監督は全然受けないから。

伊藤 防衛庁にしてみれば、ずいぶん厄介な組織を持ったものですね。

夏目 厄介だった。だから、あそこへ変な人を持っていったら

た厄介だぞ、というのがずっとありましたよ。

佐道 海原さんのあととはなるべく温厚な方をということになる。

夏目 ところが、行くと結構いうんですよ。内海さんも結構うるさかったですよ。

佐道 ああ、そうですね。

夏目 行ってからは。

佐道 自分が苦労したから(笑)。

伊藤 嫁が姑になったんだ(笑)。

夏目 多少、そういうのもあるかもしれないね。いずれにしても、海原さんみたいなことはありませんけれどもね。というのは、ほかの省庁からの意見が来るから。国防会議にいるのは防衛庁だけではないから、大蔵省の人とか外務省の人とかいろんな人がいるから、その人たちの意見を聞きながらやると、どうしてもどこかずれができます。そういうことも代弁しなきゃいかんから、そう何もかも防衛庁の言いなりにはなれないです。

佐道 さきほどからの、ほかのところにも相談をあまりせずにつくったということを見ると、海原さんがいろいろ反対されているのもやむをえないなと感じていらつしやったのですか。

夏目 まあ、そう思いました。それと、多少こちらも気持ちいいですからね。

佐道 国防会議の存在感が。

夏目 そう、やはりいる以上ね。

伊藤 あんまりやりすぎると、今度は戻れない(笑)。

夏目 それはまあ、そんな海原さんみたいに背水の陣というわけにはいかないね。

中島 この紛糾があつてから、中曽根長官なり防衛庁のほうからは、「国防会議の事務局の権限をもうちよつと見直したほうがいんじゃないか」という声はありましたか。

夏目 いや、ないですよ。四次防のあとに文民統制のあり方とい

うので国防会議の中身をいじくるといのはあったけれども、それとは話はまた別で、むしろ国防会議を強化しようという話ですからね。

伊藤 防衛庁が国防会議を云々できるわけがないでしょう。

夏目 ない。人事権もないし、何もありませんからね。それと、官邸も正直いうと海原さんをうまく使ったところがあると思いますよ。やはり当時の政治情勢から見て、あまり過激な変化というのとは望まないというのがどこかにあるから、「海原が反対しているのなら物怪の幸い、あいつにやらせておけ」と、そんな極端ではないにしても、そういう気持ちがあったかもしれない。中曾根さんにちよつと手を焼いているというのと両方あって。

佐道 防衛庁から国防会議に転出されたとはいえ、防衛問題での海原さんの権威というのは相当なものだったと。

夏目 それはやはりね。というのは、久保さんという人がいたけれども、久保さんまではほとんど海原さんに敵う人はいなかったしね。久保さんは海原さんに対して多少遠慮みたいなものがありますからね。海原さんと久保さんが私の目の前で議論したのは見たことがないもの。両方ともしないものね。どちらが避けているのかわかりませんけれども。

佐道 二人で、対談で本をおつくりになっていますよね。

夏目 そんなのがある？

佐道 ええ、対談で『現実の防衛論議』という本をつくっているのがあるのですけれども。

夏目 知らないな。

佐道 そうですか。いや、それはもちろん久保さんのほうが遠慮されて。

夏目 いるでしょう。それは、何回も上司になっている人と。ただ、海原さんが出てから久保さんは元気よくなるけどね。だけど、やはり遠慮があったと思います。だから、国防会議に説明に来る

のも、久保さんはめったに来なかつたです。もちろん制服の方はいっばい来ましたし、課長とか審議官とかは年じゅう来ていましたけれども、局長はあまりお見えになりませんでした。

伊藤 そんなところで正面衝突になったら収拾がやっかないことになりませんか。

夏目 そうですね。

佐道 四次防の原案で国防会議に上げられるときに、添え書きで、長官が非常に熱心に行っているの、なるべくこの原案を尊重してご討議いただきたいと防衛庁側からの文章が入っているのですけれども、ご記憶ありますか。

夏目 ないな。そんな文章がついているの？ 正式な文書に？

佐道 正式といえますか、これは海原さんが持つておられた文書のなかにあつたのですけれども。

夏目 それはだれかが手紙を書いたんだな、内海さんか何かが。

佐道 手紙とは違って、原案にちゃんとくつついていてのですけれども。

夏目 記憶がないな。

武田 海原さんがとちやつたんじゃないですか。

中島 国防会議へ説明に防衛庁サイドが来るときに、ユニフォームの側はどのレベルの方が説明に来られるのですか。

夏目 それはその話の流れにおいて、幕僚長はお見えにならないけれども、各幕の防衛部長さんとか、課長、班長。

伊藤 それは個々の問題について。

夏目 もちろんそうです。陸上自衛隊の編成事項なら編成事項について。あるいは、海上自衛隊のミサイル護衛艦ならミサイル護衛艦についてとか、DDHについてとか、話によつていちばん向き向きの人を連れて。一回来るときには、五、六人は最小限来ていました。大変ですよ。ご苦労さんに何回も、毎日毎日ですからね。

伊藤 それは海原さんが対応されるのですか。

夏目 海原さんはほとんど出ません。私どもの説明を聞くだけです。それで、いいとか悪いとかいうだけです。いい加減な説明をすればこちらまで怒鳴られる。

佐道 四次防の原案が出たあとの国防会議での議論の記録のなか
に、例えば限定された小規模な局地戦に対処するとか、予備自衛
官の問題をどうするかとか、すごく細かなことについて海原さん
が防衛庁側にいろいろ突っ込まれて、ここはきちんと詰めてない
じゃないかとか、できることを書いてあるだけでこんなのは作文
だとかといって追求している記録があるので、それとはど
ういう場面で出てこられるのですか。

夏目 それは多分たまに出る国防会議の勉強会でしょうね。「き
ょうは俺も聞くぞ」というときが何回かありましたから。普段は
出ませんけれども。

伊藤 それは問題によつてですか。

夏目 問題によつてでしょうね。自分が関心を持ったり、自分の
予定がなければ出たのかもしれないけれども、五回に一遍くら
いは出ていたかもしれません。

佐道 かなり細かい文言までいろいろ議論する。

夏目 海原さんはそういう人です。一言隻句といえどもおろそか
にしないで。飾り文句とかそういうのは嫌いますから。

伊藤 飾り文句なんかは取れということですか。

夏目 そう。

中島 四次防の場合は、とにかく粹全体が大きいという批判を受
けたということなのですが、そのなかでもとりわけこの項目はま
ずいのではないかと、特に批判の的になった項目はご記憶あり
ますでしょうか。

夏目 そんなのはあまりないと思います。

中島 というよりも、粹全体の。

夏目 粹全体とか、それを実際にするためにどういう措置がとら

れているのかという裏づけは求めますけれども、「これはやめろ」
とか、そういうことはいわれたいです。海上交通の保護なら、
「海上交通の保護と書いてあるけれども何をやる気だ。どこまで
やる気だ。どこまで守る気だ。どうやって守るんだ」と、そうい
うことは微に入り細に入っていますよ。

中島 当時、海上自衛隊から説明にいられていたのは中村梯次さ
んですか。

夏目 中村梯次さんはあんまり見えませんよ。幕僚長は直接は見
えないです。部長は、そのあとはだれだろう。忘れちゃったなあ。
陸幕は鈴木敏通さんとかね。

夏目 当時の名簿を見ればだれが来たかわかるんですけど。

伊藤 そういふのは夏目さんが対応するのですか。

夏目 そうですね。会議のときは、海原さんがいなければ私が主
催者みたいにならざるをえないです。

佐道 審議が始まったから、ほぼ連日ですか。

夏目 連日やっていた記憶があります。毎日毎日、午後一時くら
いからずっとやった記憶があります。

佐道 それは海原さんに限らず、先生のところでも、文言のあり
方から始まって、算定の仕方とかそういうことまで全部やるわけ
ですか。

夏目 どこまでどういう議論をしたか具体的に覚えはないけれど
も、相当細かな議論をし、質問状も出し、こんな厚い（高さ五セ
ンチくらい）質問状を出したこともありませうから。そうする
と、今度はそれに対する答えを持つてくるわけです。

伊藤 もっと分厚いやつですか（笑）。

夏目 なりますなあ。

佐道 それをまた読むだけでも大変ですね。

夏目 そのころは大変でした。ただし、それよりも私が四次防で
いちばん記憶にあるのは、まあ、四次防以前の問題でしょうが、

年度予算の中味がいわゆる先取りで問題になるんですよ。海原さんに、「これは危ないですよ。国防会議の諮問を経ないでやったら必ずつかまりますよ」といったら、案の定捕まったんですよ。多分あのときに捕まったのは、FST2か何か、二つくらいあったと思うのですが、それが予算に入っちゃって、国防会議の議を経ずに予算要求しちゃった。大もめにもめて、結局は四次防も大きくずれ込んで、結局大綱だけ先に決めて、主要項目はまたそれから半年くらいずれ込んだ原因になるのです。そのとき海原さんは、正直いうと、そんなものは大したことないだろうと甘く見ていた。

伊藤 海原さんともあろう人が（笑）。

夏目 それは結果的に、私が、「これはだめですよ」といったら、案の定捕まったのですよね。べつに国防会議でそれを捕まえたんじゃないですよ。海原さんがだいたいようぶだというからそのまま通したら、国会で捕まったので。

佐道 海原さんとしては、中曽根構想をつぶして大きく書きかえたのですから、勝利をされたのですね。

夏目 非常に気分がよかったですね。

佐道 かなり時間がかかっておきているというのが当時の新聞にも出ていますけれども、やはりもつとおくれるなという。

夏目 おくれるというか、本当はもつと早くできるんですよ。それをボンボン打ち上げちゃうから、いったんぶち上げたら、防衛庁だって大臣の立場でそんなにすぐ引つめられないでしょう。いろんないきさつを経て違った計画にしていけないと、大臣の立場もありますよね。ずいぶん無駄な時間を過ごしていたと思います。やり方がいいかによってはおもつと早くできたと思うのです。そこが、なぜ防衛庁の局長とか次官とかがきちんといわなかったのかなというのが不思議です。

伊藤 大臣に対してですか。

夏目 あるいは、大蔵省にはここはこうだということをきちっといっておくべきだと思うのです。当然なんですけれどもね。国防会議は無視しても、少なくとも大蔵省と官邸の官房長官とかそういうところはこうこうだということをいっておかないと、とても通らないですね。

佐道 途中で久保さんが防衛局長で戻ってこられているわけですが、けれども、かなり審議でじつくりやっている状況ですけれども、例えば久保さんと先生が連絡をとられたということはなかったのですか。久保さんのほうから、防衛庁は中も今だいぶ困っているとか、そういう。

夏目 それはいいですね。ほかの人からは苦渋のほどを山ほど聞いていましたけれども、久保さんがこぼしたのは直接聞いたことがないです。局長としては、あんまりそんなことをいうのは沽券にかかわると思ったのではないですか。それよりちよつと上手に。海原さんと二人並べれば、久保さんのほうが妥協する人ですからね。久保さんは下を叱咤激励して手直しをするように指示していたんだと思います。ま、苦勞はされたと思います。海原さんは絶対に妥協しませんからね。当時は、主計局長を交えて年じゅう国会で集まって鳩首協議をしていましたよ。多分、当時の主計局長が鳩山（威一郎）さんで、というのは今の鳩山さんの親父さんですね。相沢（英之）主計局次長で、田代という防衛庁の経理局長がいて、久保さんが防衛局長だと思うのですけれども、多少、トーンダウンしたものにしていこうというすり合わせはある程度したのではないのでしょうか。

■ニクソン・ショック

佐道 ちょうどこの審議がされているさなかに、七一年の七月、八月にニクソン・ショックがあつて、七月は中国問題ですけれども、八月はドル防衛策ということで、これは日本の経済、財政に

も大きな影響を与えるという議論が出て、十月には西村（直己）長官が原案の再検討に入ったほうがいいと言いつ出したということになるのですけれども。国防会議で審議をされていても、これはニクソン・シヨックが影響するなあという。

夏目 それはありました。多分これは西村長官でしょう。西村長官というのは海原さんとわりと意思疎通のできる方だから、そこらへんはざつくばらんに相談していたと思います。

佐道 やはりこういう方が来られると雰囲気が変わるのですか。

夏目 変わります。それでもなおかつ先取りになるのですけれどもね。

佐道 西村さんについてはどういふふうの評価しておられますか。

夏目 非常に温厚な方だという印象です。この方が多分、国連は田舎の信用組合と。

佐道 そうです。海原さんの回想録によると、おやめになるときに相談したのが奥様と西村長官だったと。

夏目 西村さんも内務官僚でしょう。非常に温厚な人でしたよね。

伊藤 もともと海原さんと関係がある。

夏目 あると思います。

佐道 警察の時代に。

夏目 多分そうだと思います。だから、中曽根さんのときは違って非常にいい雰囲気であったと思います。だから、このあとバタバタと決まっちゃうんです。

■「大綱」決定

佐道 翌年の二月には、年度内には四次防を全体ですることは無理で、大綱を先に決めてということに閣議で決まっていますけれども、その前の段階から、これは年度内に全部決めてしまうのは無理だという。

夏目 だって、西村さんが変えようといったときはもう予算要求

したあとですからね。間に合わないことは火を見るよりも明らかなのでね。十月からだっただら絶対間に合わないものね。

佐道 そうですよ。問題は、四次防の大綱の中身がとにかく大幅に変わって。

夏目 大綱の中身？

佐道 四次防の大綱ですね。最初に中曽根さんがいったような自主防衛云々というのはほとんど何もなくて。

夏目 三次防の継続みたくはならずです。

佐道 国防の基本方針を中心に、みたいな感じの。

夏目 全然進歩のない四次防になっているでしょう。それは海原さんがそうしちゃったんです。三次防のときと同じですよ。

伊藤 考え方も同じなですね。

夏目 海原さんは新しいものに積極的にチャレンジするというのはあまりお得意ではないですね。お得意ではないというか、好きではない。そういう性格もあるのかもしれないけれども、それをそうとはいえないので、自衛隊の実態、今までの進捗度合いから見て、現実にはこの程度だろうという理屈をつけたのだろうと思うのです。私が思うに、海原さんは新規なもの、新しいものに挑戦するという意欲は余りなさそうな方ではあります。そういうのがこういうことへ影響しているのだと思います。

伊藤 海原さんは自分で積極的な提案をなさるといふことはあまりないわけですね。

夏目 できたものを、三次防と同じだということだけを話で。

伊藤 唯一、郷土防衛隊ですか。僕はあれはちょっと異様なこと思っています。

夏目 自衛隊というのはそもそも陸上自衛隊的な発想から生まれました。警察予備隊が保安隊なり陸上自衛隊になったわけですからね。だから、それはもともとそういうものでよろしいのだと思っっているのです。実際はアメリカがやるんだ。日本は日本の国内だけ

ちゃんと守っていればいいよと。

伊藤 郷土を防衛する。

夏目 だけど、世の中がそう簡単にはいなくなってきました。当時はそんな議論も成り立ったのです。それは海原さんが防衛局長の初めくらいまではいいけれども、国防会議事務局長になつてからはそんなことをいっていられる世の中ではなくなつたのですね。

佐道 一般世間では、それこそ国防会議の事務局長になられてから海原さんはたくさん本をお出しになりますね。それこそ『日本列島守備隊論』とかいうので今の郷土防衛隊みたいなものをどんだん公にされていくわけですから、実態は、いま先生がおっしゃつたように、それはちよつともう。

夏目 昔の話なんです。昔考えていたことを本にされているだけです。あの人はやはり、防衛局長のときにはそんなものを本にする勇気がなかった。勇気がないというか、穏やかではないと思われたのでしようね。現実に実務を担当する責任者ですから。そんなことをいっても、自衛隊の動きというのはそうではない方向へ行きつつあるのに強固にそういう自説を主張したつて通らないし、現役の役人がそういう本を書くのは穏やかな話ではないです。から遠慮したのだと思います。だけど、国防会議のときにはもう破れかぶれなんです。もうあとはないぞ。クビになつたらなつたでいいや」くらいに思っているから。

伊藤 郷土防衛隊というのは具体的な像が浮かばない。

夏目 もともとないんです。要するに、海上自衛隊のヘリ空母だとか、DDHだとか、ミサイルだとか、航空自衛隊が世界で一流の戦闘機を持つなんていうのはおこがましいよというだけの話なのです。イメージといったつて、だから警察の機動隊だと思えばいいんです。

中島 スイスの民間防衛にだいぶ影響を受けられたということ

いわれていたような気がしますが。

伊藤 ただ、日本人のなかに防衛意識がほとんどないものだから。

夏目 まあね、何に影響を受けたかわからないけれどもね。まあ、それは彼の得意な話なんです。スイスは二十四時間で何十万の兵力が召集できるとか、そういう話をしたけれども、どこまでそれに本気でめりこんでいたかというのとはわかんない。とにかく無駄な金を使つてやることはない。子どもにおもちゃをやるようなもので、やればやるほど新しいものを欲しがらん。そうではなくて、日本の国をきちんと守る。そのためには、地雷だとか持久能力とか、そういうものをきちんと持つていけばいいのであつて、外へ出て行つて勝手にやるようなものは要らないよ。あとはアメリカにやつてもらふんだというつもりでした。

佐道 議論としてはよくわかるのです。きちんと補給のあれをして、弾がすぐになくなるようなことではいかんと。身の丈に合つたようなことをやれという議論は議論としてよくわかるのですが。一方で、「現実には、現実には」とおっしゃるわりには、郷土防衛隊というのは非常に非現実的な話ではないかと思つてしまふのですけれども。

夏目 だから、だれもうんといわないので。

伊藤 弾が一分間で何発でどうのこうのつて、じゃあ、そういう後方のことをちゃんとやれといつてやらせたのかどうか。そんな感じでもないでしょう。

夏目 できないんです。二次防の目標は一ヵ月か。一ヵ月の弾を備蓄するというのは相当なものですね。日本じゅうを弾薬庫にしなければならぬ。

一同 (笑)。

夏目 いや、本当に。弾というのは飛んでいけばいいというものではない。すぐ使えるためには人家を離れた山の中に地下を含め広大な弾薬庫を掘らなければいかん。地雷は水蓄するとか、調整

の機能を別に持たなければいかんとなると、膨大な金と手間がいるのですね。だから、海原さんがいうことをやるといったら、自衛隊はほかのことを全部やめてやらなければいかん。そうしたら、自衛隊は何のためにあるのかというと、弾だけのために（笑）。それに、弾というのは何だかんだいうけれどもやはり耐用年数とかがあるのですね。特に新規のミサイルとかそうなるか保管の方法も難しいのです。摂氏何度で保管するとなると、どこでも山積みには置けないというものではない。そうすると、海原さんのいうとおりになんかやったら、日本じゅう弾薬の備蓄だけで金をくつつちゃって。

佐道 自衛隊は弾薬の備蓄と保管要員ですか（笑）。

夏目 それはちよつと現実的ではないのですけれども。まあ、あの人は非常に象徴的にいわれているのだと思います。正面装備にばかり目をやるな。後方とか、ロジスティックとか、そういうことが大事なんだよ。そういうことをやらないで派手なことばかりやりたがるのはけしからんと教訓的におっしゃっているのだと思えばよくわかるのですけれども、どうもそう素直にうけとめられないものだから。

佐道 結論的には中曽根構想というのはつぶされたわけですね。ほとんど三次防の延長上で四次防という形になったということですが。そうすると、中曽根さんがいろいろぶち上げたときに、制服の方とかは何か新しいことが始まるかもしれない期待をした人も多いのではないかと思うのですけれども。それこそ、新しくまたヘリ空母ということがいわれてみたり、装備でも新しいものがあるという出たり。そうすると、相当制服の方のなかでは失望されたというか、がっかりされた方が。

夏目 欲求不満みたいなものが残りますね。だから圧縮された四次防についてはせめてこの位は何とか達成しようという期待は強かった。しかもそれにもかかわらず四次防ではできなかったもの

が大きかったですからね。そういうことが重なって、制服には大きな欲求不満があったことが一つ。世の中が非常に景気がよくなって隊員の募集が困難になってきたということもあつた。経済もついていけない。基地問題というのがあつて、簡単に基地を取得するわけにはいかない。そうになると、今までのような、一次防、三次防、四次防とだんだん大きくなるような防衛力整備というのは不可能だろう。そうすれば、やはりどこかで枠をはめないといかん。

一方、制服から見ると、二次防、三次防、四次防と、五年、十年、十五年とやっても自分たちの望みどおりのものは達成できないという飢餓感というか欲求不満みたいなものがあつて、そういうものが一緒になって防衛計画の大綱という新しい発想にかわっていくわけです。四次防のときに今おっしゃったような欲求不満みたいなものがたまりかけてきたということは事実です。だから、四次防というのは本当に新味のない計画だったと思いますよ。あのときに新しいものというのは、三次防と同じベースで調達とか、そんなことが書いてあるだけでしよう。

佐道 そうですね。

伊藤 だけど、それで金額だけ大きくなるというのは。

夏目 なるんですよ。人件費がどんどん高くなるし、物価も上がるし。

伊藤 実質購買力はそんなに上がっていないということですか。

夏目 倍倍ゲームといって、大まかにいうと、一次防の倍が二次防、二次防の倍が三次防となっています。その次の防衛整備計画をつくつても、その倍。いちばんわかりやすい例でいえば、F86 Fをつくつたときには何千万の単位だった。それが航空自衛隊のF104をつくつたときに一億円です。それがファントムFのときは四億かな。数字がちよつと違うかもしれないけれども。アメリカでさえ、戦車というのは十萬ドル戦車といつて、ばか高いと

いわれていたんです。今、91戦車は幾らか知っていますか。すごい金なんです。戦車なんて鉄の塊だと思っっているけれども、そうではないんです。装備はハイテク化し異常に高くなる。しかも大量生産しないから余計コストがかかり、どうしても防衛費というのは高くなるんです。

伊藤 だんだんハイテクの塊になってくる。

夏目 ハイテクの塊になると、少数生産で会社は合わない。そういうことと物価の値上がりと合わせていくと、金は倍つぎ込んでも中身はたいしたものではないということになってくる。そういうことから、もう青天井の防衛力整備計画はやめようじゃないかというのは制服の側にも多少あった。そういうことが大綱につながってくる一つのきっかけにもなっているのです。ミサイルなんて、あの古いサイドワインダーで何千万するんですよ。

佐道 一発撃つだけで大変ですよ。

夏目 だから十分な訓練ができない。訓練するには何発も撃たなきゃいかん。ところが、何発も撃つ金がない。それどころか訓練空域も十分でない。ないない尽くしなんです。

伊藤 しかし、よくそんなお金がかかるやつを北朝鮮なんかがミサイルをたくさん持っているな。

夏目 それは、一億人がみんな米の飯を食わないで麦飯一合かなんかでガツガツすればできますけど、みんな、うなぎを食ったり、天井を食ったりね(笑)。

武田 それはうなぎのほうがいいですね(笑)。

伊藤 やっぱ北朝鮮はそれでみんな飢えて死ぬのかな。

夏目 まあ、欲求不満は四次防のときもありました。

佐道 それで、四次防の先取り問題が結局あとでまた出てくるという事です。

伊藤 先取り問題というのは具体的にどういうことですか。四次防が決定されていないのに予算要求すると。だけど、予算要求と

防衛計画は直結しているのですか。

夏目 予算要求をして政府案を決定するでしょう。そうすると国防会議の審議を経ないということでは先取りになっちゃうんです。要するに、長期計画でオーソライズされていないものが予算で認められちゃうということでは、国防会議無視、シビリアン・コントロール無視という非難になってきます。防衛庁は、それはないと思っただけですよ。というのは国防会議に諮るべき主要装備ではないからということ。私もちょっと記憶がないんだが、資料を見ればわかるのだけれども、練習機か何かともう一つ、二つくらいあったと思いますが、それが入っていたのです。それがいかんということなんです。

伊藤 それは主要防備だということですか。

夏目 まあ、そういうこと。新規装備。まあ、今考えたらちもなといえられないのだけれども、社会党にはいい口実を与えちゃったのです。だから、社会党も細かく見ている人がいるんだなと思っただけは感心したところがありますよ。私でさえ心配したんだから、社会党が見たらすぐいうだろうと思っただけ、案の定。それで審議はストップしちゃうんです。それで慌てて四次防をつくるんですよ。間に合わせて、同時に、文民統制強化のための何とかというのを一緒に決めたのだと思います。

伊藤 大綱と主要装備とを切り離していたわけでしょう。

夏目 大綱はお題目しか書いていないから、これはいいんです。考え方みたいなものだから先取りにならないんです。主要項目というのは、整備されるべき装備品の固有名詞が出てくるのです。〇〇を何機とか。だから、そっちのほうだけストップしちゃうわけです。それで大綱が先に行っちゃって、主要装備のほうはおくれて行くわけです。

伊藤 その年の予算請求はどういうことになりますか。

夏目 予算請求が、多分、国会が審議ストップで、数ヶ月ストッ

プしたんじゃないかな。そういう記憶がありますね。それで急遽、主要装備を決めたのはいつでしたっけ。

武田 四次防の主要項目ですか。七二年十月です。

夏目 七二年でしょう。翌年になっちゃうんだな。

佐道 四次防の大綱が二月で、十月が主要項目です。

夏目 予算から削除されているはずですよ。

伊藤 新規のやつですね。

佐道 文民統制で問題になったというやつ。

夏目 削除じゃなくて凍結かな。凍結……、なんかそういう記憶があるな。凍結というのはわけがわからないもので、それは書いてはあるけれども使えない。議長が何かの採決で、凍結解除というのがあるところなんです。主要項目が決まってるから。もしあれなら、それはこの次までに調べておきます。

佐道 このゴタゴタがあつて、そのあとに先生は防衛庁に戻られるわけですね。だから戻られる前の。

夏目 戻る前です。

伊藤 そういうゴタゴタの問題は、国防会議は直接かわつていない。

夏目 いや、国防会議にかかるけれども、主として矢面に立たされるのは防衛庁です。

伊藤 国会ではですね。

夏目 「けしからん」といわれるのね。国防会議は、「われわれは聞いていませんでした」といえるから（笑）。

佐道 四次防の審議でいろいろと防衛庁に強烈にあたって、こういう事件があつて、そして戻られると、なかなか防衛庁内は厳しく（笑）。

夏目 あつたと思いますよ。しかも、上に久保さんでしょう。ああ、そのときはまだか。防衛庁へ戻ったときは教育課長で、上司は、四次防の説明に来て苦労された審議官が私の上司だった。

伊藤 どんな感じですか。

夏目 まじめな人で、最後は防衛研修所の所長でやめた大西という人。まじめな聖人君子みたいな方で、誠心誠意、仕事にまじめで、海原さんに怒鳴られると失語症みたいになっちゃうのね。ちゃらんと受け流せばいいんだけど、グサツと受けとめる人だから。だから、正直いったら確かに居心地はあんまりよくなかったですよ。「こいつ、海原の回し者が来た」と、思ったかも知れません。

佐道 回し者といわれても、仕事だったのだからしょうがないですよ。

伊藤 夏目先生はやはり、来たやつはスツと。

夏目 まあ、私はきつと要領がいいほうでしょうね。あんまり仕事でストレスになったり、ノイローゼになったりすることは無い。無責任野郎という。

伊藤 確かにストレスがたまつたからといって、べつに物事がよくなるわけはありませんからね。

夏目 そうです、そうです。

■三島由紀夫の乱入事件

佐道 ちょっと後先になるのですが、四次防をひとまとまりで伺おうと思つていたものだから抜かしてしまつたのですが、七〇年十一月に三島由紀夫の乱入事件というのがあります。これはご記憶だと思つてはすけれども、どういう印象でいらつしやいますか。聞いたときに、まずどういうことを思われましたか。

夏目 三島由紀夫……。

伊藤 国防会議の事務局はどこにあるのですか。

夏目 総理府。

伊藤 総理府にあるのですか。場所は？

夏目 官邸の隣の建物です。三島由紀夫事件のときには、私は赤

坂溜池の天ぷら屋で天井を食べていたんです(笑)。天井を食べてテレビを見ていたら、「エッ」と思いました。しかも自衛隊の駐屯地の中でしょう。びっくりしてね。私は若いころは三島由紀夫の作品はきらいではなかったのですけれども、このころの三島由紀夫というのは、クーデターをそそのかしたり、変に右翼に肩入れしたり、なんかちよっとおかしな人だなあ、病的だなあと思っていたんですよ。楯の会なんかをつくって変な服装をしたり。ついでいけないという印象で、なんでこんな人がこんな変な運動をやるのだろうと思っていたんです。それが自決したと、しかも駐屯地の中でしょう。私は、「迷惑なことをしてくれな」というのが最初の印象でした。というのは、このころは三島由紀夫に対する何となく同調し得ない感じを持っていたから。何をやらかしたんだ。しかも、そのころテレビやマスコミは、「自衛官がそれに同調しなかったというのは情けない」みたいに書いているマスコミもありましたね。とんでもないと思った。僕は、あのとき自衛官がよく冷静に対処したと思って、むしろ立派だと思っただけですよ。あんなのに乗せられて死ぬなんて騒ぐやつは一人もいなかったということね。一部、自衛隊のなかにもファンはいるんですよ。でも、あそこにはいなかったんだ。僕はやはり、三島由紀夫というのは過激なナショナリストで、こういう人と自衛隊がかかわりを持つてはいけないなという気持ちがあったから、自衛隊がそれに巻き込まれないですんで、もちろん東部方面総監は切られちゃったけど。

伊藤 三島由紀夫と面識はありましたか。

夏目 ないです。弟さんは知っていたけど。外務省に。

伊藤 平岡(千之)。

夏目 弟さんのほうはまともだったような気がするね。

佐道 自衛隊を支持する当時としてはそう多くはない有名な人ということ、防衛庁としてはけっこう。

夏目 だから、一途に三島ファンみたいな、彼と結託したりするような人もいたらいいですね。だけど、一般論として、とんでもないことをしてくれたなという自衛隊の健全な常識を私は評価したいくらいの気持ちでした。

伊藤 あれはいつたい何であったのかというのがよくわからないですね。

夏目 クーデターをそそのかしたけれども、あそこにはいた人はだれも動かなかったのでしょうか。しかも、せせら笑っているような隊員がいっぱいいたので失望したというのだけど、まあ、それが普通だと思うよ。まさか本気で、「よし、俺もやる」なんていつたら、そのほうが……。

佐道 それはそうですね。

夏目 ねえ。

伊藤 まあ、あの人自身が現実離れした。

夏目 なんか病的ですよ。まあ、書いてあることも少しマニアックではあるけれども、まともな人ではないなあ。

伊藤 文学者というのはまともであつてもしょうがないのでしょうけれども。

■非核三原則

佐道 そうですね。三島とは別に、七一年ですけれども、いまだにいろいろ議論はされますが、非核三原則というのは衆議院の本会議で出るので。これは衆議院の本会議で可決されたのですけれども、これがずっといろいろ日本の核政策の縛りにもなっているわけですが。沖縄返還の交渉の過程で佐藤さんがいろいろいっていたのがこうやって決議という形になっていくのですけれども、核政策に対する問題とか、こういうのはどういふふうにお考えになっておられましたか。

夏目 非核三原則というのはこのときに初めてではなくて。

佐道 ええ、もちろんその前から。

夏目 ずいぶん前からいわれているんですね。このころなぜかというのと、やはりアメリカの原子力潜水艦のエンタープライズが日本にやって来たり、ああいうのが入ってくるようになって原子力アレルギーみたいなものが国内を刺激していたことは事実です。だけど、非核三原則というのはその時初めてというわけではなくて、前からずっといわれていたことでしょう。私自身の印象として、非核三原則はそれとおりだと理解していましたが。一つだけ、「持ち込ませず」というのは核配備をいつているので一時的に持ち込むのは含まないと解すべきでしょう。いい悪いではなくて、できつこないじゃないか。それはなぜかというのと、アメリカが持つてくるものをいちいちチェックできるわけもなくて、外務省みために、「信頼して、ないことを信じている」と、これはちよつとおかしい。持ち込ませるのは自由にしなきゃいけないんじゃないか。だから、あそこは少しまやかしちゃいけないか。どうしてあんなったのかはわからないですが。当時はそれでよかつたんだと思うんです。沖繩が返るときには核なしにしようとか、もう一切核はごめんだと。しかし、アメリカはその後、原潜なり原子力空母が入ってくるようになると、そういう議論がいかにインチキであるかというのがだれにも見えてくるのですね。でも頑固に否定している。私は、「核持ち込ませず」というのは一種のフィクショナルだと思っている。当時からそう思っていました。われわれが酒を飲み料理屋へ行って、酒を持って行って、そいつを飲まないで料理屋の酒を飲んで、それをまた鞆の中へ入れたまま持つて帰るわけでしょう。だれかにももらった酒かもしれない。それと、核持ち込みはいけないというのと同じだ。そこで飲んだらいかんけど、鞆の中に入っていて、それを飲み屋へ持つてきたらけしからんとするのは、それはいえない。あんまり卑俗すぎるかな(笑)。

佐道 いえいえ、大変わかりやすい(笑)。

夏目 でも、当時からそういつていたんです。核持ち込ませずの解釈はちよつといただけんと思う。これはいつの日か早くはつきりさせたほうがいい。アメリカもちよるちよるそういうことをいうのですね。大使だとか。あれは本音だと思ふんです。日本が頑として一度いつたのは引つ込めないのですね。どんどうその上塗りて、いまやがんじがらめになっているけれども、もうどこかでいつたほうがいいと思う。

中島 やはり外務省が認めないということなのでしょうか。それとも政治家サイドのほうが。

夏目 外務省でしようね。政治家は、外務省がいうのならそれはいいと。だけど、知っているのは外務省でしようからね。外務省は自分でいつたことをくつがえすのは大変だから。しかし、何代か前の人間を悪者にすればいいんですよ。死んだやつを二、三人生け贄にして(笑)。

佐道 (笑)、防衛庁だつたらできますか。過去の答弁は間違つた、取り消しだ。

夏目 やりますよ、それは。だつて、もう今は内閣がひつくり返るなんていうことはないでしよう。

伊藤 まあ、そうですね。

夏目 あのころは内閣がひつくり返るかどうかということだからあんなにびびつたのでしようけれども、正直いつたら、こんなに安つぽくかわる内閣なら、一つくらいつぶれたつて同じじゃないかと。

佐道 確かに、それはそうですね。

夏目 だけれども、今となつては無理ですね。どこかで大きく事情がかわらないと。

伊藤 知らん顔をして忘れるとか(笑)。

夏目 グラム島でおろしてきて、また行くときにはどこかで積んでいくとか、よくいうと思つてね。

佐道 よくああいう言い訳が考えられると思いますね。

夏目 でも、私なんかその後、米軍との共同防衛のときに米艦護衛をするかしないかというのがあって、そんなのあたりまえじゃないかと。共同対処で戦っていて、同盟国の軍艦がやられて、それを助けられないなんていうことはありえますかと、それをいうのが大変なんです。だけど、常識的にあたりまえのことがいえぬというのとはどこかいびつなんです。早く防衛問題も常識的に、建前と本音の乖離がないものにしていくのがいちばん大事だと思います。

伊藤 憲法の問題から始まっていますから。

夏目 そう、まずそこからね。

伊藤 さて、そろそろ時間ですね。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第5回

開催日：2003年2月18日（火）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時00分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

石田京吾（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：
有限会社ペンハウス 矢沢麻里

第5回インタビュー質問項目

2003年2月18日

- 1 1972年6月、防衛庁人事教育局教育課長として防衛庁にもどられます。ほぼ四年ぶりに戻られたわけですが、国会議に行かれる前と戻られてからで、防衛庁内の雰囲気等何か違いなどありましたか。
- 2 人事教育局教育課長は自衛隊の教育訓練全般を扱うものと思いますが、仕事の内容などお聞かせください。
- 3 人事教育局教育課長として先生が特に重視した問題などはありますか。あるいは、当時教育訓練問題で特に問題になっていたことなどはあったのでしょうか。74年4月に防衛医科大学校が開校しています。この準備などにあたられたのでしょうか。
- 4 72年7月田中内閣が成立します。田中氏と海原氏の関係については以前お話されていましたが、先生ご自身は田中内閣の発足についてどのような印象でしたか。また、9月には日中国交正常化となります。71年7月のニクソン・シヨック以来国際関係が大きく変わってきたわけですが、中国との関係は日米安保体制に大きな影響があります。日中国交正常化について先生はどう見ておられましたか。
- 5 73年9月、長沼裁判で自衛隊「違憲判決」が出ます。直接の主管ではありませんが、この判決にはどのように思われましたか。「違憲判決」が何か自衛隊に影響したことはありませんか。
- 6 73年10月防衛課長に就任されます。防衛政策・行政の要となるポストです。課長就任にあたって、とくに重視されていた問題・事項などはありましたか。また、局長は久保卓也氏ですが、重点政策など、課長になられて久保局長と打ち合わせをされたのでしょうか。
- 7 10月、米空母ミッドウエーが横須賀に入港し、同港を母港とします。ミッドウエーの横須賀母港化についての米軍の考え方などは事前にお聞きになっていましたか。
- 8 11月、中東戦争を契機に石油危機がきます。日本経済にとって大変大きな影響をもたらすわけですが、同時に財政を圧迫して防衛予算にも大きく関係します。実際、四次防49年度以降の計画について縮小・修正の方向で防衛庁が検討を始めたこと報道されています(11月20日、日経)。石油シヨック勃発について、防衛庁として緊急に対応策などを検討されたのでしょうか。また、12月にはヘリコプター搭載護衛艦、FST2改支援戦闘機などの目玉装備購入の繰り延べや自衛隊員増員断念などが決まっています。これらの決定の中心に先生はおられたと思いますが、一連の決定の経緯などお願います。
- 9 74年5月、山中防衛庁長官は衆議院内閣委員会で、四次防の完全

達成を事実上断念せざるを得ないことを公式に明らかにしました。石油ショック以来、この点は検討されてきたものと思いますが、公式表明にいたる経緯などお聞かせください。

10

同じく5月、田中首相は衆議院内閣委員会で、四次防後は長期計画方式をとらず単年度予算を基本としたいと発言します。長期計画が単年度主義かは以前から議論されてきたことでもあり、ローリング方式なども検討されていたわけですが、実際四次防以降は、長期計画方式はとられないことになっていきます。この点についても先生は中心におられたと思いますがいかがでしょうか。

11

74年10月、核積載艦が核を撤去して日本に寄港することはありえないというラロック米退役海軍少将の証言があり日本で大きな反響をよびました。国会等でも外務省が主としてこれに対処していたわけですが、防衛庁としてこの問題についてとくに関与されたことはございますか。

12

同年12月、三木内閣が誕生し、坂田道太氏が防衛庁長官に就任しました。坂田氏は文教族で防衛問題とは関係のない方でしたが、坂田長官就任について、また坂田氏についてはどのようなご印象でしたか。

13

74年6月、それまで三年半にわたって防衛局長をしていた久保卓也氏が施設庁長官になり、防衛局長には官房長であった丸山昂氏が就任します。丸山氏はかつて防衛庁総務課長の経験があります。がほとんど警察で過ごしてきた方であり、次官も、防衛局長の経験がない（経理局長・官房長）大蔵省出身の田代一正氏が就任し

ています。防衛問題の専門家が中枢に座っていないかわけです。からそれだけ課長である先生の役割が重要になると思えます。いかがでしたか。

14

74年3月、坂田長官は新防衛力整備計画の基本構想検討のため、私的諮問機関「防衛を考える会」を発足させます。同会の発足、メンバー、検討内容などについて先生はどのように関与されたのでしょうか。また、この会での検討結果を土台に「平和時の防衛力の限界」を上限とする防衛力整備計画、防衛計画の大綱が成立していくわけですが、これについて当時どのようにお考えでしたか。

15

5月、坂田長官は社会党の上田哲氏の質問に答えるかたちで、日本周辺海域での日米共同防衛計画の必要性に言及し、のちに三木首相もそれを了承することで日米防衛協力の問題に発展してきます。防衛庁内には、その必要性について必ずしも意見が一致していたわけではないようですが、先生ご自身はこれについてどのようなお立場だったのでしょうか。

※今回は以上の点についてお願いします。

■防衛庁に戻って

伊藤 この前は、国防会議から防衛庁教育課の教育課長に戻られるというところまで来たわけですけども。これは四年間でしたか。

夏目 四年ぐらいです。

伊藤 そうですね。四年間という、やはりだいぶ模様がかわってましたか。

夏目 まず四年間もいたというのがそもそも役人の世界では：。普通は二年ぐらいで変わるんですよ。引き取り手がなかったんでしょ、きつと。

伊藤 引き取り手がない人が、あとで上にまで行きますか(笑)。

夏目 いや、ほんとに。例によって海原さんの部下で相当やはり自分では気を使ったつもりだけれども、防衛庁から見た場合には走狗の一員ですからね。

伊藤 走狗か(笑)。

夏目 そういう意味ではなかなか返しにくかったこともあると思うんですよ。というのは、たしか島田さんが当時の次官かな。久保さんが防衛局長、いじめられた人がみんなそういうところになりますしね。私は帰るときに、「四年もたったので、そろそろ返さないか。どこがいいか」ということを海原さんにいわれて、防衛庁から来ているのは、運用課長と教育課長とどちらかということを考えているらしいという話だったんです。運用課長というのは、当時まだ出来たばかりのころだと思えます。

伊藤 何をやる場所ですか。

夏目 部隊運用とか、訓練とか。要するに、昔は教育課が持っていたのですけれども、それに災害派遣とかいろいろ部隊の行動に関すること等。

伊藤 業務がふえた。

夏目 ふえたこともふえたのでしょね。それとやはり、だんだん教育の自身が、学校教育から部隊訓練というか、そういうほうへ比重が移ってききましたから、そんなこともあって多分つくったんだと思います。で、どちらがいいかと考えたんですよ。運用課というのは防衛局です。教育課というのは人事教育局です。防衛局に行つて、また久保さんの下じゃあねえ(笑)、しんどいなあという気持ちが正直いつてあつたんです。そのころの人事教育局長というのは高瀬(忠雄)さんというやはり警察から来た方だけど、これは温厚というか、まあ、人畜無害というか、目立ったことのないおとなしい人ですからね。おとなしいとつたって個人的にはいろいろうるさいことがあるけど、ま、仕事の面ではないものだから、多分、そっちへ行つたほうが楽できるかなという打算も働きましたね。

伊藤 それはやはり人事だから打算しますよね、当然。

夏目 どっちがいいか、久保さんの下で苦労させられたらたまらないなど。海原さんでもう十分だという気持ちで、それで教育課長になつたんです。そうしたらねえ、これ、運が悪いんですねえ。その高瀬さんという人が同じ異動で変わっちゃつたんですよ。新しく上司に来た人が、大西さんという審議官から昇格して来た人です。この人が、当時防衛局の審議官で国防会議へ来て説明する主役だったんですよ。久保さんがめつたにお見えにならないので、審議官、課長が来たんです。そのトップとして来たのが、この大西という審議官なんです。この人がまた海原さんとは肌が合わないんですね。ちようど、伊藤圭一という人をご存じだと思えますが、彼の仲間で人事院から来た人です。年はちよつとつているんですけど。非常に勉強家でまじめな聖人君子みたいな方なのですが、その人を海原さんがこてんぱんにやるから、本当に情けないような顔をしてね。その人が同日付けで上司になつた。だつたら早く教えてくれというんだよね(笑)。だから、防衛庁に来た

ときにはあんまり居心地がいいという感じはしなかった。というのは、全部、次官からみんなそうなんですから。「とんでもないやつが舞い込んできたぞ」というようなことで、あんまり胸襟を開くという雰囲気はなかったですね(笑)。

伊藤 海原のスパイだと(笑)。

夏目 現にそういうことをいつている人もいましたからね。海原の子分だとかスパイだとかというのは、丸山(昂)さんという何代か前の次官もいわれたんですよ。そういう目で見られていたことは事実でしょうね。

伊藤 そういうのを解消するにはかなり時間がかかったわけですか。

夏目 いやまあ、それは仕事の面ではそんな気配は出ませんよ。だけど、人間というのはそんなにコロコロと変わるものではないし、内心そういうものがあると、お互いになんともわかりませんよ。別に干されたという気持ちはないけれども、なんかツーカーという感じがしないで、向こうも遠慮して、こっちも何か用事がなければなるべく側へ行かないようにしているとか、そんなことはありました。

佐道 難しいですね。海原さんご自身も、このすぐあと事務局長をおやめになりますね。

夏目 やめるんですけどね。

佐道 そうするとやはり、影響力といえますか。

夏目 それはなくなりますが。

伊藤 まったくなくなるのですか。

夏目 なくなるというか、もう現役を退いたら役人はだめです。死に体みたいなので、だれも怖がらない。国防会議の事務局長といううつつとらしいポストにいるからしょうがないということがあっても、いなくなっちゃえばどうってことない。いくらわめいたって痛くも痒くもないわけですから。ある意味では、後ろ

盾はなくなつた、一人で敵地へ放り込まれた、そういう感じですね。ま、そんなことを考えたことはないですけど、そういう雰囲気があつたと思いますよ。

伊藤 きつとそういうふうに見ていた人もいたのでしょうか。

夏目 いたと思います。

佐道 落下傘か何かで降下してきたという。

夏目 そうそう、だからあんまりいい気持ちではなかったです。

■教育課長の仕事

伊藤 教育課長というのは何をやる仕事なのですか。

夏目 これは要するに自衛隊の教育。いま運用課ができたという話をしましたけれども、自衛隊の教育全般を掌る。自衛隊というのは全体が一種の教育機関ですからね。新隊員で入ってからいろんな課程を経て上へ行くわけです。そのあいだに技術教育や、幹部候補生の教育やら、いっぱいいろいろありますね。学校の数も二十、三十ある。そういうところの教育の総合調整というのでしょうか、陸海空のバランスを見たり、新しく課程をつくるというときにはそういうものの審査をしたり、そういうことをやるのが一つ。それから、防衛大学校とか防衛研究所というのがあつたんです。これは付属機関みたいな形であつたのですけれども、この教育も教育課が管理しているのです。

伊藤 そうですか。じゃあ、防衛研修所は。

夏目 いまは研究所になつてはいるのですが、当時はまだ防衛研究所といったので、ここには、二つ任務があるんです。もちろん研究もしていたのですが、主たる中身は、陸海空自衛隊の高級幹部、二佐くらいかな、一佐かな、集めて一年くらい教育するんです。それは、自衛隊としては幹部学校の上位にあたる教育機関です。まあ、一種の教育機関ですから、それも当然教育課が。

伊藤 防衛研修所自体をというより、そこでの教育を。

夏目 教育課のなかに、「防衛研修所に関すること」というのがちゃんと法律だか政令だかで明記されているんです。その中のいろんな細々したことまで全部教育課が面倒をみるという建前になっている。防衛大学校もそう。陸海空はもちろん幕僚監部が全体の面倒をみるけれども、それもまた、いわゆる内局という立場でバランスをとる等チェックする。

伊藤 あそこに戦史部があったでしょう。

夏目 うん、ありました。

伊藤 あれも。

夏目 だから結局、防衛研修に関することは戦史に関することも教育課、国会で質問があるとわれわれが出て行かなければいけない。

伊藤 ああ、そうなんですか。

夏目 だから教育だけじゃなくて、防衛研修所の研究部門や戦史部門等ちよつと異質なものも抱えていました。いまはむしろ研修所というよりも、研究に比重が大きくなりましたからね。

伊藤 学校というのはいぶんとたくさんあるんでしょう。

夏目 ありますよ。陸上自衛隊だけで二十くらいあるんじゃないかな。

伊藤 これは各レベルがあるわけでしょう。

夏目 幹部学校、幹部候補生学校、昔の歩兵学校、騎兵学校というふうには。

伊藤 はい、術科の。

夏目 それをみんな陸海空それぞれ持っていますからね。そのほかに統合幕僚学校というのがあって、それも見ているわけです。

伊藤 これは陸海空合わせてのやつですか。

夏目 合わせて。陸海空から学生を集めて統合教育みたいなものしているわけね。統合部隊の運営はいかにあるべきかということも教えているわけです。だからまあ、自衛隊の教育全般です。そのほかに、海上自衛隊の遠洋航海というのがある。

伊藤 それは教育なんですか。

夏目 教育です。遠洋航海といえども、あれは教育なんです。幹部候補生学校をおわって新しく少尉に任官すると、遠洋航海で行くわけです。それは、コースとしてはいわゆる必須の課程なんですな。そういうことがあったし、南極観測なんていうのも。

伊藤 南極観測もそうですか。

佐道 自衛隊の仕事ですけれど。

伊藤 いや、そうだけど。

夏目 要するに、その他もろもろ。こんなの教育と関係ないけどね。

伊藤 いや、あれは教育じゃないでしょうね。

夏目 ないけど、そういうものが入っていたんです。航空事故とかね。

伊藤 なぜ事故も教育に入るのですか。

夏目 訓練の合間に起こる。

伊藤 ハッハッハッ(笑)。

佐道 それは事故調査ということですか。

夏目 事故が起きると、実際の事故調査は専門家が集まってやるのだけれども、それを国会で報告したりいろいろな付随的な事務がありますから。第一報もうちへ来るしね。だから、教育周辺の種々雑多なことを。

伊藤 かなり幅広いですね。主なことが列挙されて。

夏目 南極観測とか何とかというのほもととあったわけじゃないくて、あとから自衛隊の任務に追加されたんです。そういうものはだれもやる者がいないから、いちばん暇そうな教育課にやらせようじゃないかと決まったのだらうと思うのですけれども。

伊藤 暇なんですか。

夏目 まあ、ほかの課に比べて多少暇ですね。

伊藤 そうですか(笑)。

夏目 まあ、教育全般をみるというと格好いいけれども、陸海空の自衛隊の教育というのは、課程から、コースのあり方から、幕僚監部できちんとみんな勉強されてできていますから、いままさら素人が口出しするような分野というのはそんなにないですね。よっぽど目に余ったり変なことをしない限りは、「おつしやるとおりでやりましょう」ということになるものですから、そういう意味では仕事に忙殺されるなんていうことはないです。

伊藤 大きな変改を加えようなんていうことはあまりないのですか。

夏目 ありますけど、それも口出しできませんよ。だって、自衛隊が、「こういうことで新しい装備を持ってきて、こういう教育が必要だ」といって、「それは要らない」とかね。まあ、そういう人もいますよ。何でもかんでもケチつけるやつ。だけどやはり、内局のあるべき姿として、私はそういう細々したところに口を出す必要もないし、また、素人が玄人に口を出すようなことは、政治的に問題がありそうだとかというのはいわなければいけませんけれども、もっぱら技術的な問題については、内局というか、そういうところで口を出すべきでないんじゃないかというのが私の考え方です。

伊藤 課長さんは別に国会での答弁にはかかわらないわけですか。

夏目 直接はないけど、でも出ましたよ。

伊藤 出るのですか。

夏目 説明員として。

伊藤 主には局長が答えるわけですね。説明委員というのはどういう場合に出るのですか。

夏目 さわめて事務的な事実関係、数字にまたがるような、局長もちよつと頭へ入らないという。だから、政策マターみたいなものは課長がやることはあまりないですね。

伊藤 そういう場合はだいたい予測つきますから、国会へ行って

いて。そうすると、だれが指名するわけですか。

夏目 いや、それは相手はみんな大臣に聞きたいし、大臣がどうしてもといたら局長に聞きたいし、あんまり課長なんかは質問したくないですよ。できるだけ偉い人に答えてもらいたいという気持ちがあるけれども、委員会というのはダブったり、質問者によつては共産党……。変な話だけど、当時はやはり共産党という、「おまえ行ってやつてこい」という。政権与党が質問するとか、社会党のうるさがただとちよつと気をつけないといかんけど、共産党は所詮水と油で突っぱねてこいというふうなもので、そういうことはままありましたよ。

佐道 例えば陸海空の全体の教育関係の予算の配分とか。

夏目 教育関係の予算はどれ位必要かというのはあがつてきます。しかし、予算自体になると、経理局もまたあつて、別の立場から、前年度の教育関係予算がこうで、今年はこの新しい新規事業があつて、これは教育課が必要だといっているからそれを盛り込もうかと枠でもつてこうやる二重チェックですから、教育課はあんまり数字はチェックしないです。このことは趣旨として妥当かどうか、推進すべきかどうかということをいうくらいのことです。

佐道 さっきの陸海空の各幕僚にも教育があつて、このほか技術的なことはそこでということでしょうか。例えばさっきの研修所とか。

夏目 それは直接やるんです。だけど、その中だって、総務課もあれば、会計課もあれば、それぞれいろんな人がいて一所懸命やっているわけですから、そういう意味では部外者なわけです。だけど、幕僚監部に対するよりはそういう付属機関に対するほうが密度が濃い接触がありました。防大、研修所は。

佐道 人事なんかはどうなのでしょう。

夏目 人事は、相談はありますけれども実際にはほかでやりまから、課長なんかはあんまり人事は。

伊藤 これ、人事教育局の中に人事課もあるわけですか。

夏目 人事課もあるんです。

伊藤 教育関係の教官とか、そういう人事も人事課がやるわけですか。

夏目 そう、人事課がやるわけです。だから、教育課は教育の自身の話しかしません。人事は直接はやりません。ただ、防衛研修所とか防大とかの人事については、こういうふうにしたいと思うということとはあらかじめ相談には来ます。「よかろう」ということになると、あとはそっちのほうで手続きをするということになるわけです。

伊藤 各陸海空のそれと、防大、防大は別ですよ。幹部学校は別か。

夏目 幹部学校というのは陸海空。

伊藤 さつきおっしゃった統幕学校、これは直接ですよ。

夏目 統幕も統幕事務局というのがあってやっていますからね。

伊藤 いや僕は、自衛隊もそうですけれども、戦前から陸海空の教育体系というのはなかなかうまくできているという話です。現場と教育、現場と教育という、ああいう形になったでしょう。

夏目 『防衛ハンドブック』を開いて、教育って、こんな形でこんななにいっぱいあるんですよ。まあ、字が小さくて読みにくいけど。

伊藤 これはとても見えないですね(笑)。これはすごい数だな。課長について、覚えるだけでも大変。

佐道 課長に就任されたら、やはり主要なところは見に行くということがあるわけですか。

夏目 多少はありますね。ただ私は無精でねえ、教育課長時代だけではなくて、とうとうやめるまでそうなんですけど、あんまり現地の部隊に行くチャンスというのはいまありません。無精というのもあるのだけれども、防衛庁というのは各省からいっぱい人が来るんですよ。課長にしても、部長にしても、局長にして

もね。その人たちは、来るとすぐ部隊へ行って見たがるんですよ。次から次へとかわっていくから、俺が出る暇がない(笑)。そういうところはありました。だから、わりと長くいたわりには、あまり見ていない。もちろん肝心なところは行っていきますけど、全部なんかとても見きれたものではないですね。

伊藤 防衛医大は？

夏目 防衛医大はまだそのとき出来ていないから。

伊藤 まだつくるといふ計画も。

夏目 いや、計画はありましたよ。たしかあれは私が教育課長をやめてからできたんじゃないかな。

佐道 防衛課長になられてからです。七四年です。

伊藤 ああ、そうか。

夏目 準備はしていた。

伊藤 そういうのもやはり教育課長としてかかわっているわけですか。

夏目 防衛医大というのは、ほかに衛生局長というのがいまして、これは医者のお話なのだから、医者の話として衛生局長が防衛医大を管轄しているんです。ただ、もちろんつくる前はいろいろ教育のシラバスがどうかこうとかいう話で関与はしますが、主たる主管は衛生局。

伊藤 ああ、そうですか。シラバスなんて、読んだってわかんないですよ(笑)。

夏目 医者の話で記憶があるのは、途中でやめる者の償還金をどうするかというのがあります。というのは、防衛大学はもちろん授業料はただです。卒業して任官しなくても、金を返す必要がないんです。防衛医大もそれと一緒にいいかという議論があった。というのは、医者の金というのは金のかかり方が桁が違うんですね。期限も長いし。それとやはり、当時は学士号もないですから、防大を出ても何の資格もないけれども、防衛医大というのは出る

と医者 の 国家試験があつて 医者になれるわけですから、それをま
ったくただというのはどうかという議論がありましたけれども、
結局は、何年間か勤めれば返さなくてもいいというふうになつた
と思います。そんな議論をしましたかね。その程度しか防衛医大
についてはあまりタツチしなかつたです。

佐道 先生は、施設庁から防衛庁に移つてこられたときに教育に
いらつしやつたわけですよ。

夏目 そうです。まあ、それもあつて、ここだったら片手間で
きるかと思つて。

佐道 昔とつたあれで。

夏目 昔と同じ、適当にやっていたらまあいいやという感じがあ
りましたからね。人間関係は別として。

佐道 約十年ちよつとして来られて、実際はいかがでしたか。か
なり変わっていましたか。

夏目 変わったというか、まあ、変わっていましたね。私が課長
になつたところは、かつて部員として施設庁から行つたときみたい
にいい加減なやつはいなくなつちやつた(笑)。正直いつて、非
常にまじめにみんなそれぞれ仕事をしているようなふりをしてい
ましたね。

佐道 教育課自体は、先生は課長でいらつしやつたわけですが
ども、部員はやはり文部省とかそこらへんからも。

夏目 文部省からも来ていました。文部省とか警察、何人かいた
と思います。どこどこがいたのかはいまちよつと記憶がないけ
れども、文部省はいましたよ。

伊藤 部員ですか。

夏目 うん。あんまり関係ないですけどもね。

伊藤 教育訓練というところを見ていたら、いろんなスポーツの
大会や何かのことを。これは関係あるのですか。

夏目 関係あります。だけれども、そんなものは好きにやつてく

ればいい、べつにとやかくいうことではない。ラグビー大会と
か、何とか大会とかつてやっていますよ。まあ、半分公務だけ
れども、半分はクラブ活動みたいなものですからね。教育課とい
うのは、私はさつき遠航のこともいったし、南極観測もいったけ
れども、南極観測なんて教育とはまったく関係ないですね。

佐道 自衛隊のなかでスポーツ的にやるクラブもそうでしょうけ
れども、対外的にかかわりあいがあるのがありますよ。例えば
演奏会とか、そういうつた関係もやはり。

夏目 それは教育課がやりました。だけど、やつたからといって
別に。例えばラグビー大会なんていうものをやると、ラグビー協
会から審判を頼まないかんかとかいうような話があります。会場
を確保して、秩父宮競技場を使うとか、そういうことはあるけど、
正直いうとそんなものはやりたがつている者がいて一所懸命やつ
てみんなセットします。あとは頭を下げて行けばいいという感じ
ですから、そんなにもめたことはない。一回もめたというのは、
ラグビーで習志野が何かの選手がレフェリーを殴つちやつた。

伊藤 ハハハハハ(笑)。

夏目 ラグビーの世界で審判を殴るなんていうのは前代未聞のこ
とだという。これをまたラグビー協会が大問題にしようよ。「自
衛隊はラグビーを何と心得るかッ」とあつたけど、私もめくら蛇
に怖じずで、「内内のことじゃないか。自衛隊のなかの大会で起
きたことだから、まあ、丸く治めて」というつもりでいたら、だ
めなんです。だから私はスポーツというのはあれからちよつと
鬼門ですね。

伊藤 結局、謝つたわけですか。

夏目 もちろん謝ることは謝つたのですけれども、あんまり大げ
さにしないでくれと。それは外との一般のあれというより自衛隊
の中の試合ですからね。たまたま謝金を払ってレフェリーに来て
もらつたというのはあつたけど。その人を殴つたのは、それはも

う言語道断なのですけれども。結局は穩便にすんだのですけれども、なかなか。

伊藤 いろいろそういう面倒くさい問題もあるということですね。

夏目 面倒くさいし、試合の最後の日とか初めの日とかに行かないといかんのですよ。だいたいラグビーなんて天気の良い温かい日にやらないでしょう。嫌ですね。

伊藤 ハハハハハッ(笑)。これを見ますと、国民体育大会の協力とか支援とか、そういうことも書いてありますね。

夏目 オリンピックからそういうことをやるようになったのも教育課です。まず札幌オリンピックで自衛隊が支援することになって、それも教育課でやったんです。札幌オリンピックはまだ私が部員のときでしたけれどもね。そういうことをやっていたということを経験の部員時代の話でしなかったのは申し訳ない。怒られたことの一つです(笑)。

伊藤 結構人員も出しているし、車両も出しているし。

夏目 大変なんです。だけど、それは実際には陸上自衛隊がみんな。例えば北海道でやるのだったら、北海道の方面総監が地元の体育協会とかそういうところと現実的に話をしますから、「よかろう」といえばすむことですから。

伊藤 だいたい計画書が上がってくるということですか。

夏目 ええ。

伊藤 さて、その課長に戻られた次の月ですか、田中内閣ができますよね。

夏目 もう一つ教育課で、あなた方は知らないかな、防衛学会とというのがあつね。

伊藤 ああ、防衛学会ね。

中島 今は国際安全保障学会です。

夏目 国際安全保障学会、今は社団法人になっている。あれをつくるという話は教育課のときに起きたんです。それはどうして起

きたかというところ、大西さんという今の教育参事官という方と、防衛研究所の所長をやっている宍戸(基男)という人がいたのですが、この人は防衛局長をやったりしたあと防衛研究所長になって出られた。本当に仕事の好きな方なものですから、防衛研究所へ行って、じつとしていれればいいのに仕事をしたがるんです。何かやろうというので、防衛学会をつくらうということを出して、たしか私はこのころから手を染め出したんです。出来たのはもうちよつとあとだと思のですが、総務課長くらいのとときに防衛庁としての庁議で決めたのだと記憶していますけれども。

佐道 庁議で決めたのですか。

夏目 庁議というか、参事官会議というかね。いろいろ意見はありましたよ。「防衛学なんて学問として認知されているのか」というから、「まあ、茶道学会というのがあるのだから、防衛学会があつてもおかしくないだろう」と(笑)。

伊藤 ハッハッハッ、比較するものが(笑)。

夏目 何でそんなものを比較するかというと、いつかもいったように、久保(卓也)さんという方がお酒を飲んで電柱にぶら下がっていたという話をしたでしょう。それが茶道学会の前なんです。信濃町にあるのですけれども、立派な和風の建物で、そこに「茶道学会事務所」と看板が出ていて、何をやるんだらうなどと。その電柱にぶら下がっていたから、そのときに「茶道」と出たんですけれど、まあ、満場失笑でした(笑)。

伊藤 僕は防衛学会というのがどういう学会だかよくわからないけれども、かなりたくさんの方が入っている学会ですか。

夏目 もう、今は大勢。

中島 大きくなりましたね。

夏目 ちよつと見本だけ。ご存じないですか。

伊藤 僕自身は直接は知らないな。

中島 二年くらい前に名前を国際安全保障学会と変えまして、だ

いぶアカデミックな議論をしております。

伊藤 そうですか。

夏目 (学会誌を手にして) 最近はこれかな。もうこれ(『新防衛論集』)は古くなっていると思うのですけれどもね。というのは、私も会員をやめたから。

中島 会員をやめられたのですか(笑)。

夏目 勉強もしないのに、こんな難しい本を送られてくると、うちの根太が痛むだけだというの。

中島 (笑)、今はもう雑誌の名前も変わりました。

伊藤 神谷(不二)さんがあれだ。

夏目 代々かわっているんな人がなっているのですけれども、立派な会になっているんですよ。

伊藤 佐瀬さんとか、渡辺昭夫さんとかが理事だ。

中島 今は『国際安全保障』という名前に雑誌がかわりまして。

夏目 そう、最初は任意団体で、たしか防衛研修所長が理事長か会長になってしばらく運用されていたのが、あるときから法人にしよう。寄付なんかを集めるときもどうも具合悪いじゃないかというのでこういう形になった。

伊藤 社団ですか。

夏目 多分、社団で、会員。金がないですから社団だと思おう。会費で。

中島 学会の大会には、年次大会も防衛研究所で開かれることが多かったです。

夏目 やっているでしょう。いま事務局はうちにあるんですよ。

そのいちばん後ろを見て。

伊藤 そうですか、ああ、本当だ。

夏目 防衛学会を作るときにいろいろ苦勞し、今また防衛研究所も始末に困って防衛弘済会に事務を頼んできているんですよ。やっぱりどこかでお墓の心配も(笑)。

伊藤 でも、これはお墓になるわけじゃないじゃない(笑)。これから大いに防衛を論じなければならぬというときに。

夏目 ただ、だんだんやはりもう少しどこか考えないと、難しいですね。一部の学者とかそういう人たちが楽しんでいて、こんなものが配られても私は読めないですもの。

伊藤 これを見ると、あまり現実的な問題には触れないでやっているという感じですね。

中島 まあ、学会誌という色ですね。では、軍事史学のほうはあまり。

夏目 軍事史学もあるんです。防衛大学校に、それもまた防衛学会という名前で、やたらそういうのがつくるのがすきで、こういう本をつくっちゃうんですよ。いや本当、笑話ではなくて、こんなのが一年たつとズシツと重くなるんですよ。

伊藤 そうですね。

夏目 見たくもない本が本棚にあると、腹が立ってきてね。クズ屋へ出すわけにもいかないしね。

伊藤 古本屋に出せば、流通するからいいじゃないですか(笑)。では、田中内閣のところへ行きますよ。いいですか。

夏目 田中内閣の前にもっと大事な話、いいですか。ここに防衛医大のことを書いてあるけれども、防衛医大の問題よりもちばん私が教育課長時代に苦勞したということでもないのだけれども、幾つか新しいことをやりました。何かといったら、防大の人社系を設置したんです。防衛大学校というのは理工系のみの実質工科大学みたいなものでした。当時、猪木(正道)さんという方が学長をやっておられて、あの方は国際政治なものだから、やはり人社系をつくらないとこれからの幹部としてかたわじやないか。そういうコースもつくりたいということ、話が上がつてきたんです。それは私が教育課長になる前からずっと議論されていたんです。私になったのはたしか七月か八月か、夏なんですよ。

でも、今やらないと、また来年の予算に間に合わない。要求が八月です。今までは本当に小田原評定を繰り返していたんです。これも私は中身をろくに見ないんですよ。猪木先生がおっしゃるんだったら間違いはないだろうと行って、そのままポンと上へ上げたんです。そうしたら通ったんですよ。次の年から予算が認められて人社系が発足するようになった。それは猪木先生も非常に多としたんです。何か月かかっても進まなかったのが、一週間くらいでパタパタと。それは、まじめにやれば、私の机にこんな（高さ五十センチくらい）書類がありましたから。とても見る気がしないでしょう。要するに信頼感です。学長の猪木先生がおっしゃっていることだ、信頼しようということ。聞いてみたら、国際関係論というコースと、管理学をつくと。「管理学は何をやるのですか」といったら、「行政管理」だと。これはちょっとだけないなと思っただけです。私は役人で人事院の研修なんかへ行くときに、いつも行政管理をやらされていたんです。いかに中身の学問か……って、この中でだれかいる？

一同 ハハハハハ（笑）。

夏目 蛭山なんとかという。

伊藤 蛭山政道さん？

夏目 うん。いちばん現実と離れた議論でしょう。「先生、これはただだけじゃないじゃないか」といったら、「いや、管理学というのはこれからの組織を管理していく上でぜひ必要なんだ」というので、そこはちょっと議論したことがあるけれども、「まあ、猪木先生がおっしゃるのなら」とそのままのんだ。今はやはり私のいったとおりで、今でも評判悪いですよ。国際関係論は学生の希望者が殺到するのだけれども、管理学にまわされた者はがっかりしていましたから。

伊藤 それはまわされるのですか。

夏目 いやならやめればいいのですから、強制ではない。ただ、

こつちなら行けるよというので。

佐道 今は、管理学科は公共政策学科に名前が変わりました。

夏目 あれは名前を変えたんだね。

佐道 でも、先生方はみんな経営学の先生。

夏目 簿記とかね。「そんなことをやるんですか」といったら、まあ、簿記はやらなくても、経営学とか、工業経営とか。あんまりパツとしないなと思っただけだけれども、今でもパツとしないんじゃないですか。私がいる間は先生方も元気がなかったですよ。

中島 昔、保安大学校を吉田首相と榎（智雄）さんがつくる時に、カリキュラムの話になって、戦前は軍人が政治に介入しすぎたのだから、そういった社会科学系のを講義内容から外したというのを伺ったことがあるのですが、先生が国際関係論というものを復活させていくときに、庁内で議論はあったのでしょうか。

夏目 ない。

中島 それはない、そうですね。

夏目 そんなに大げさな議論はなかったですね。

伊藤 そういう議論は、もうだいぶ時間がたつから、かなり風化したんじゃないのかな。

中島 もう二十年くらいたつてということですか。

夏目 国際政治とか国際関係論とかいうのは一種の常識というか基礎的なもので、そういうものは持つていないといかないのですよ。ただ、猪木先生が心配されていたのは、最近の学生というのはそういうことを勉強した下地のある人がいない。昔はみんなそれを高等学校で多少勉強したりしていたんですよ。大学でも、専攻が違って本も読むし。今の人というのはそういうことのチャンスがないと読まないでしょう。まして理工系の人には忙しいからそちらのほうへ余力を裂く暇がない。そういうことを猪木さんは心配されたでしょうね。

伊藤 一般教養的なものはもう学ぶところがないですからね。受

受験競争ですつと。

夏目 ないです。受験勉強だけでやってきちゃっているでしょう。

伊藤 受験勉強で選ばなかったものはないんですね。

夏目 変な話ですけども、私があるところ少しは勉強したのは、欧米の国はどうなっているかと。欧米では、士官特に高級幹部はほとんどが修士ですよ。もちろん自衛隊にもいますけれども。気の利いたのは博士号を持っていて、それも全然仕事と関係ない修士号を持っています。歴史だとか何だとか。それはやっぱり、士官たるものの素養として、ファンダメンタルなものとしてそういうものを持ってなきゃいけないというのはいまや世界の常識なのです。日本にはない。そういうものがちよつと欠けていた。

伊藤 だけど、これからますます欠けるような風潮ですよ。

夏目 だから、そういう人たちをどこどこに混ぜないと、養成していかないといけないのではないかとということで、定員はふやしたわけではなくて、全体のやつを減らして枠をそちらへ譲っただけだったと思うのですけれども。

伊藤 そうすると、予算的にはそれほど。

夏目 まあ、予算としてははいたしたことないですね。ただ、学科をつくるとか、先生を呼んでくるとか、多少のことはありますけれども。

佐道 今のところですけども、文部省の大学ですと、カリキュラムの構想等を決めて、人もはり付けて、そして大学設置委員会というのを出してオーケーをもらうということになるのですけれども、防衛大学校ですからそれとは違いますよ。

夏目 準じたものはやらないといけないけど、それは防衛庁でできますからね。

伊藤 庁内で決めていいのですね。

夏目 いいんです。ただし、あんまりべらぼうなことはしません。やはり文部省の基準はどうなっているかということをチェックし

ながら、それに遜色のないものにする。多分、つくったときに猪木先生は先生を集めるのに苦労されたのではないかなという気はします。

伊藤 だいたい反自衛隊の雰囲気があったから、自衛隊の先生になるというのは大変な決心が要ったわけだから。

夏目 しかし、猪木先生のような方がおられたから先生も集めることができたのだと思います。今をおいてつくるチャンスはないなどという感じがしましたから。

中島 今は安全保障研究科という大学院がございますけれども、当時はそういった声というのはありませんでしたか。

夏目 大学院？ まだ大学院どころじゃなくて、学部をつくるのが。

中島 まだその段階で。

夏目 その段階だからね。

伊藤 やっぱりまだ七〇年代の初めですからね。考えてみれば三十年前ですから。

佐道 社会党はまだ元気ですしね。

夏目 そういう意味では猪木さんに非常に喜ばれた。自慢話だけど、そういうのがありました。それから、あとは田中内閣とダブってくるのですけれども、田中総理になられてから教育課の仕事としていちばん熱心に進められたことは二つあるですよ。海外留学生をふやせというのが一つ。

伊藤 それは内閣の交代と関係あるのですか。

夏目 いま私がいつているのは、田中総理が自分の信念としてそういうことを思っていたということ、内閣は関係ない、防衛庁のことなんです。しかし、現実には田中内閣のときに文部省のいろんな分野の留学も大幅にふやせと盛んにいつた時期だったと思います。その一環として、自衛隊も海外留学をふやせということを非常に強くいわれたのですね。

伊藤 これまでもやっていたわけですね。

夏目 多少はやっていたのですが、最初に自衛隊をつくったときには、米軍が生みの親であり、育ての親でもあったから、非常に大勢のいろんな分野の人が留学したんですよ。

伊藤 アメリカに。

夏目 アメリカに。しかし、ある程度の体裁を整えてくると、必要な者が行くけれども。例えば、新しい装備品が入ってくる、新しい戦闘機が入ってくる、そのための要員というか、パイロットとか整備員の基本の人員はアメリカへ行くけれども、一般にアメリカのどこそこの……。

伊藤 例えば海軍大学校とか。

夏目 そう、そういうところへ行つて一般的にまじつて勉強しろなんていう余裕はあまりなかった。そのころはね。昔はあったんです、自衛隊の創設期には。それがだんだん減ってきて、必要なくなしか行かなくなってきたというところで、私が田中さんは非常に勤がいいと思つたのは、当時はアメリカからもそういう声があったんですね。例えばブレジンスキーなんて、ひ弱な何とか（「ひ弱な花、日本」と書いた人もいます）でしょう。あの人も今はつきりいつているんです。昔は自衛隊からいっぱい来た。日米間が非常に緊密に、個人的にも組織としても有効に機能したけれども、だんだんそれが減ってきた。非常に由々しいことだというようなことをどこかに書いています。そういうものと田中さんの意向がちやうどぶつかったものだから、「こりや、いけるぞ」というので、大幅にふやしたんですよ。たしか倍ではきかないんじゃないかな。またそれから尻すばみになってきちゃうけど、一時的にはそうです。

伊藤 だいたいどこに派遣するわけですか。

夏目 アメリカですよ、ほとんど。

佐道 希望者ということになるわけですか。

夏目 希望者というよりも、自衛隊がこの人間をアメリカで勉強

させたいと。もちろん行きたいといつたらだれでも行けるわけではなくて、それぞれの組織が「これ」と思つて選ぶのです。

伊藤 階級は。

夏目 階級はいろんな階級がありました。

佐道 多様なところへ行かれるわけですか。

夏目 いろんなところに行つたと思いますよ。

伊藤 それはやはり予算の問題。

夏目 予算と絡む。海外留学ですから、外国旅費が必要になります。滞在費も必要になるから、金は必要だと思ひます。だけど、総理の一声ですからね。当時はそういうのを利用すると、大蔵省もあまりうるさいことをいわない（笑）。

伊藤 もう一つは何ですか。

夏目 もう一つは公資格付与。公資格というのは、公の資格というか、国家資格というか。自衛隊でいろんなことをやっていますね。いちばんわかりやすい例でいえば車の運転。車の運転は公の資格をもらえるのだけれども、その他、小型船舶の何だとか、火気取り扱いだとか、爆発物何とかとか、電気何とか工事とか、そういう専門家がいっぱいいるわけです。自衛隊というのは一種の技術屋集団ですからね。この人は自衛隊の中でそういう教育を受けて非常に有能なのだけれども、町へ出るとそれが役に立たないのです。

伊藤 資格として。

夏目 ないから。それはおかしいじゃないか。自衛隊の受けた教育が社会でも通用するようなシステムにすべきじゃないか。この二つを田中総理が口を酸くして。多分、直接電話が来たことがあると思うんですよ。総理か、だれか代理を通してかちよつといま覚えがないんだけど、普通、官邸から課長なんかにか電話が来ないですけれども、「早くあれを何とかしろ」と、非常にご熱心なあれで。海原さんの（オーラル・ヒストリー）を読んでいたら、海

原さんのところに出てくるでしょう。

伊藤 出てきましたね。

夏目 あれは事実誤認なんです。あれは私の前任者がやったと書いてあるのですけれども、前任者のときはまだ田中総理はいないはず。それは私になつてからそういう指示が来たんです。

佐道 考え方としては前からあつたのですか。

夏目 多少、組織的にそういうことをやるうということはないけれども、この資格はせっかくだから何とかしたいというのは断片的には出てきました。

伊藤 実際にはどういうふうな仕掛けでやるわけですか。

夏目 これはみんなそれぞれ各省が権限を持っているんですよ。

伊藤 資格のあれをね。

夏目 大変なんですよ。通産省が持っているもの、厚生省が持っているもの、運輸省が持っているもの。小型船舶だといったら運輸省へ行かないといけないし。

伊藤 爆発物処理とかね。

夏目 自治省へ行って消防の何とかとか、パイロットは運輸省とか、まあ、本當にうつつとうしいんですね。彼らがまた頑迷固陋でして、素直にうんといつてくれない。

佐道 それまでですと、例えば航空自衛隊で輸送機の操縦をしていた人が民間航空会社でできなかった。

夏目 できなかったわけです。民間へ行ってまた研修みたいなのをやつてから。

佐道 それから取る。

夏目 取つたんですよ。実力は持っています。だけど、資格としては……。多分、一種のいちばん初歩のところはもらっているんだな。あの小さな小型自家用機というのかな、そういうのはもらっているけれども、そこからがもらえないんです。だから、それをもらうのが大変でした。一つひとつはたいしたことがないの

だけれども、役所に日参するのがね。

伊藤 それをおやりになつたわけですか。

夏目 まあ、最初はやつて頭を下げて、あとは部下に行かせるけれども、時間がかかりました。

伊藤 夏目先生は、自分は怠け者で動くのが嫌だとおっしゃつていたのに（笑）。

夏目 だけど、最初はやはり。

佐道 道をつけないと。

夏目 何しに来たといわれるから、総理の非常にご執心な（笑）。

伊藤 そうだ、お墨付きがあるんだ（笑）。

夏目 そういうことをいつてもなかなかもらえませんでした。時間がかかりました。

佐道 特にかたいところというのはございましたか。

夏目 いやあ、やわらかいところなんかなかったよ。

佐道 みんな（笑）。

夏目 本當に大変でした。

伊藤 認定は自衛隊の中でやるのですか。

夏目 自衛隊の教育がおわつたら資格をやる。その資格は一般のものと同じだというふうにするのですが、今度は、「しようがないからこういう条件で、あれをしろ、これをやれ、こういう設備を設けろ」と、自分たちでもやつていないような、過大な注文をするんですね。役人というのは度し難いと思うんですね。

佐道 ご自身もその一員でいらつしやるんですけど（笑）。

夏目 本當にねえ、今でもそう思うけれども、あのころから本當に役人というのは信用できないと。

佐道 役所のトップまでおやりになられた方が（笑）。

夏目 本當ですよ。

佐道 隊員からはすごく喜ばれたのではないですか。

夏目 喜ばれた。喜ばれたと同時に、非常にこれは効果があつた

んですね。

石田 これは魅力化対策という一面もあるのですか。

夏目 魅力化対策はそのあとぐらいに何かで出てきたね。だけど、一種の魅力化対策であったかもしれないね。

佐道 それは人員募集に跳ね返ることになるのですか。

夏目 公の資格が取れるということは、多少は跳ね返るでしょうね。だけど、それですぐよくなったかどうかというのはちよつと私にもわかにはあれですけども。しかし、教えられるほうの学生から見ればありがたいことですよ。要するに、一生自衛隊にいる任期制ではない定年制の隊員はそんなのあまりないのだけれども、六ヶ月で交代する——まあ建前は六ヶ月だけど、二年いても三年いてもいいのだけれども——いわゆる一般隊員は、外へ出て何かをやるうといったときにそういう資格があると非常に便利ですね。

伊藤 そうですね。退職自衛官の就職には。

■ 田中内閣

夏目 「自衛隊というのは大きくいえば国民の技術教育集団であるべきだ」というのが、どうも田中総理の頭にはあったようです。戦える自衛隊であると同時に、平時においては一般国民の教育機関を兼ねるような形であるのが望ましいのではないかと。だれがこんな知恵をつけたのかわからないけれども、とにかく勘がいい人でした。

佐道 そういう発想をした方というのはこれまでご記憶にないですか。

夏目 あんまりいなかったですよ。

伊藤 だれかが知恵をつけたんだなあ。

夏目 田中総理というのは独特の着想と行動力を持っていた。四次防のあとだって、本当に思いがけないことを言い出すからね。

そういう意味では、田中総理というのは、まあ、最後はあまりよくなかったけど、自衛隊の立場で見た田中総理という人は立派な人だったなあ。人間というのは、でかいことをいうのはだれでもできるのだけれども、自分が任期中に現実的にできることが何かをつかまえて、それをきちつと本物にしていくという勘所というの、ちよつとこれはあれだけど、中曽根防衛庁長官と違うかも知れない。

佐道 このときは、防衛庁長官は山中貞則さんとかですね。

夏目 田中総理になつてからは山中貞則さんですね。増原（恵吉）さんが先かなあ、どちらが先かな。田中さんがなつたころは、多分増原さんが先で、それから山中さんになつた。

伊藤 増原さんが先だな。増原さん、山中さん、宇野（宗佑）さん。

夏目 増原さんの次が山中さんになるね、違う？

伊藤 そうです。しかしまあ、いずれにしてもこれはみんな短いな。

夏目 短い、短い。宇野さんなんかは一月もないんじゃないかな。

伊藤 そうですよ。一月に足りていませんね。そうだ、これは田中内閣の最後の改造のときに入つて、あつという間におわる。

佐道 宇野さんですか。

伊藤 宇野さん。一ヶ月にちよつと欠けますよ。

佐道 そうですね。

伊藤 それで、三木内閣になつて坂田（道太）さんになる。田中さんはそういう印象なのでしようけれども、田中内閣が成立したときにどんなご印象でしたか。別に特に。

夏目 なつたときには、ただ、あのころは世の中がみんな、「田中内閣というのは今太閤豊臣秀吉……」と騒がれましたから。

伊藤 ものすごい人気でした。

夏目 人気は知っていましたけれども、防衛庁としてどうというのはなかつたと思います。

伊藤 だけど、田中内閣がすぐ日中国交正常化をやって、日中関係がそうなって、安保との関係もありますから国際情勢も非常に大きく変わったということがいえるのだと思いますが。

夏目 たしかに変わったことですね。それは、田中内閣というよりも、ニクソンショック以来の米中関係の接近というか。それから、中国がそのあと安保容認したんですね。そんなことがあってガラガラツと変わってくるわけです。そういう時期だったものだから、四次防というのは、つくる前もそうだし、出来た直後も非常に評判悪いです。ま、時代錯誤というのか、過大すぎるのではないかという。

伊藤 過大ですか。

夏目 過大。要するに、緊張緩和というのはこのころから出たのですね。中国が国連に入る、台湾は追放される、一連の動きが全部そういう方向に流れてくるわけです。だから、そういうことを前提にしていなかったような四次防というのはいかにも過大だと。出来たあとも、やっぱりあれはちょっとでかすぎるんじゃないか、できっこないよというような。オイルショックなんかこの時期にあったんじゃないかな。

佐道 七三年です。

夏目 それやこれやで、四次防というのは生まれたときから、あるいは生まれてからも受難の生涯でした。

伊藤 緊張緩和といっても、しかし米ソ対立は相変わらず続いているわけ。

夏目 もちろんあったのですけれども、やっぱり雰囲気としては全然違ってしまいました。アメリカと中国が手を握ってしまったというのはいけません。当時われわれがいちばん気にしていたのは、ソ連の脅威というのはいちばん大きいもので、これはアメリカ以外にはとても手が付かない。しかし、中国が核実験をし、ミサイルを持って、海軍はオーシャン・ネイビーにだんだん様変

わりしてくるという時期になってくると、やはり中国の脅威というのはいちばん自衛隊から見ると非常に神経に障るものがあった。そういう意味では日本をめぐる情勢としては大きく変わったということはいえるのではないかと思うのです。だから、田中総理になってからめまぐるしく。田中総理というのは本当は防衛問題に熱心なのかどうか知りませんが、佐藤総理が沖繩で非常に振り回されたことと同じように、田中総理もそういうことに振り回された。だから、たしかこのあとすぐ四次防も批判するんですよ。あとで出てくるかな、平和時の防衛力。

佐道 はい。

■長沼裁判

伊藤 その次の年の長沼裁判のことはいかがですか。

夏目 これは、正直いいますと、国会では年じゅういわれていたことです。ただ、司法当局で違憲だと切りつけられたのはとにかく初めてですから、それはそれなりのショックがありました。しかし、ショックがあったというのは否定できないけれども、それで防衛庁のなか、あるいは自衛隊の仕事が大きく変わるとか、それは一切なかった。まあ、ローカルな裁判所の判決でありましたし。ただ、いちばん心配だったのはやはり一般の隊員に対する影響、士気に対する影響みたいなものは大きいだろうなということとありました。

伊藤 事実、どうだったのですか。

夏目 そのころは多分、大臣なんかは気にされていたのではないでしょう。こういうことに惑わされずに任務に邁進せよみたいなことを折りに触れていっておられたと思います。そんなこともチラッと記憶があるけれども、べつにそれで仕事が変わったということはないし。「じゃあ、やめた」といって自衛隊をどんでんやめたということも。

伊藤 それはそうですね、そういう話はないと思うのですけれども。佐道 組織的、系統的に、その影響があったとしても最小限にするように何か手を打とうとか。

夏目 それは背景としてあったかもしれないですね。だけど、長沼裁判でそうだったとはだれも思っていないし、私もそういう認識はありません。むしろ国際情勢だとか、日本の財政の力だとか、アメリカの日本からいわれる中国も脅威でなくなりました、そういうことが大きい影響でした。そういうことで、一時は無視された久保さんの論文なんかがちよつと息を吹き返すのです。いわゆるKB論文というやつがね。

中島 ちょうどこのころですか。

夏目 いや、最初に書いたのはこれより前なんですけど、それはだれもノー・サンキューで相手にしないというか、むしろ触らないというか、あつてもだれも話題にもしたくないという雰囲気なんです。だけれども、こういうことがあつて、さつきも話しかけた田中総理が平和時の防衛力というのを、四次防ができたときに増原さんにたしか注文するのです。

中島 ええ、七二年か七三年。

夏目 注文というか、それはべつに具体的な中身があるわけではないのだけれども、多少、久保さんの考えに近いようなニュアンスのものが出てくるのです。

■防衛課長に就任

伊藤 その直後に防衛課長に就任されますが、これ、防衛課長というのは防衛庁の中心的な課長だと思いますが、どういう人事ですかね。今までの先生のお話を伺っていますと、なんか突然のような。晴天の霹靂というようなものなのですか。そうではないでしょう、やつぱり。

夏目 青天の霹靂というか、まあ、人がいなかったのでしょうなあ。

佐道 内示とかはいつぐらいにあるものなのですか。

夏目 普通の場合は一週間とか十日とか、早くても半月くらいです。

佐道 このときはいかがだったのですか。

夏目 覚えてないな。内示なんて、一週間か十日くらいじゃないでしょうかね。

佐道 次は防衛課長だとお聞きになったときのご印象は。

夏目 いやな予感がしましたね。

伊藤 いやな予感ですか(笑)。

夏目 いやな感じでしたね。「また久保さんのところだ。逃げられない」という(笑)。

伊藤 だけど、異物が入ってきたような感じで受けとめられた人が、何年かたつたら中枢のところに行く。これはどういうふう

に説明なさいますか。

夏目 人がいなかったんでしょう。人がいなかったというのは、課長さんの……。そんなことをいうとまたちよつとあれだけ(笑)、当時はまだ課長さんというのはほとんど防衛庁の子飼いではないんです。外から来ている。若手の課長さんは防衛庁育ちの人間もいたのですけれども、まだそれは私より四、五年年次の下の者です。それまではみんな、自治省とか、警察庁とか、大蔵省とかというところから来ている人が。なかにはもう帰らないでいた人もいましたが、大体二年か三年いて帰ってしまう人が多かったようです。だいたい帰らないというのは、本人の意向もありません。ところが、本当に大事なやつは出向元が帰れといえます。

伊藤 ああ、向こうがですね(笑)。

夏目 まあ、ざつくばらんにいえば。

伊藤 先生は、「返せ」というところがないですからね(笑)。

夏目 だからというわけではないけれども、そういう意味ではちよつど。

佐道 四次防の見直しの問題が始まって、局長が久保さんでいら

つしゃるので、先生は、「また久保さん」でしたけれども、久保さんのほうから、「もうそろそろ来いよ」ということじゃないかと。

夏目 まあ、それは久保さんが引つ張ったのでしようね。

伊藤 そうでしょうね。

夏目 だから、久保さんが思っているほどこちらは……、久保さんという人はとても付き合えないなど。私は頭のいい人が嫌いなんです。

一同 ハッハッハッ(笑)。

佐道 でも、防衛庁に移られて最初に先生を引いたのは久保さんだったわけですよ。海原さんで苦勞されましたけれども、海原さんと久保さんとはまた全然タイプが違ったと思うのですけれども。

夏目 いや、久保さんという人は本当に何を考えているのかわからないですよ。それで、行ってからだって格別に親密ではないんですよ。いつも距離をおいているんです。距離をおいているというのは、感情的に距離をおいているという意味すなわち好きとかさらいとかではないんです。要するに、私が行ったときの久保局長というのは、「実務は適当にやってくれよ。俺は将来の防衛構想を考えるから」と、非常にアカデミックなところへ逃げ込もうとしている傾向なんです。だから、やたら対談をやつたり、そういうタレント方面の仕事に熱心になつてやつていた。

伊藤 ご本人が。

夏目 うん。論文を書いたりとかね。「日常の雑事は適宜任せたまよ」という顔をしてね。

伊藤 それだけ信頼されていたということじゃないですか。

夏目 信頼じゃないんですよ、あれは。自分がやりたくないだけ。

伊藤 ハハハハハ(笑)。

佐道 任せられる人だと思われたのでしようし。

夏目 この仕事は任せておいてもだいじょうぶだと。

佐道 そんなことないですよ(笑)、防衛課長ですからねえ。

夏目 そうだと思う。

伊藤 まあ、夏目先生の表現の仕方はしようがないですね(笑)。

佐道 なられたときには久保さんという肝心なことはお話しされたでしょうし。

夏目 もちろんしましたよ。だから、久保さんにご高説は拝聴するチャンスが多かったです。

伊藤 それはある程度納得された。

夏目 私は、正直いますと七分くらいは久保さんに意見に賛成でした。理論としてはね。ただ、じゃあ、久保さんの論法で防衛力を整備するかとなると、そう簡単にいかないということもわかりますよね。久保さんの物の考え方というのはよく聞かされました。

中島 当時、やはり久保さんは以前と変わらず、基盤的防衛力構想と申しますか、その延長線上にまだ考えが。

夏目 基盤的防衛力というか、久保さんは多分、常備兵力とのかな、常備防衛力だか常備兵力という言葉を使つて。それは、普段はこれくらい持つていけば、独立国として必要最小限のものを持つていけばいい。あとは、いざとなつたら大きくするための下地だけ残しておこうと。今そんなに大きなものを持つても、財政的にも無理だし、国際情勢も脅威がだんだんなくなつてきているのだから、緊張緩和みたいな方向へ進みつつあるのに、そんな大きなものは要らないんじゃないか。制服の人たちは脅威をみんなポシブルな問題として議論するけれども、問題はプロパビリティーの問題で、蓋然性から見たらそんなことはありえないじゃないかというのが久保さんの考え方ですよ。また例えば、自衛隊が最小限の持つた力を、シビックアクションという言葉を使ったけれども、災害派遣とかそういうものに使えようなものにしておくことが大事なのではないだろうかということをよくいってお

られました。だけど、それを毎年予算やら業務計画でもってそれを現実化するとすると、これまた袋叩きになるような難問題だからね。

中島 その久保さんの構想にとりまして、この米中接近なり、あるいは日中国交正常化というのは大きな追い風になったということですね。

夏目 大きい、大きい。

伊藤 海原さんとどういうふう違いますか。

夏目 海原さんはそういう考えはないんですよ。久保さんというのは、国際情勢から入り、日本の防衛構想はいかにあるべきかという、そういう三段論法みたいな。海原さんはその前段がないんです。

伊藤 この最後のところはあるわけですね。

夏目 あんまりビジョンとかそういうのはないんです。現実にある自衛隊をどうすべきかということについては非常に卓抜な意見をお持ちだけれども、そもそも防衛力はどうかあるべきかというところからの議論は海原さんはあまりしない。つくるものの形をもし黙って見ていたら、同じようなものに収斂していったかもしれないですね。だから、あんまり二人は議論もしないし、けんかもしないで。ま、陰ではいろいろいうけれども、二人のなかでは非常に目立った議論はないんですよ。お互いに相手のことを知っているから、その議論をしないのですね。

伊藤 まあ、すれ違っているといえはそうなのでしようけれどもね。

佐道 「これをやるとなったら袋叩きだ」とおっしゃいましたけれども、その袋叩きにするのは制服の方とか。

夏目 制服もそうでしょうね。防衛庁の文官の中だつてそうですよ。

伊藤 そうですか。

夏目 だって、「今の四次防でさえもっと小さくしていんだ。

あんなのはむだだったんだ」というところから出発しないとだめなのですからね。あれが過大だという議論が基にないといけないわけだから、それはとても通る話ではないですわな。

佐道 七分くらいは賛成だったということですね。

夏目 七分というか、理屈としては、私は非常に尊敬して立派だと思えます。ただそれは、学者・評論家としていうにはいいけれども、実際に防衛庁のなかにおいて政策に具現していくにはちょっと無理じゃないですかという意味で七分といったのです。理論としては、「なるほどな」と思いました。

伊藤 要するに、各自衛隊から出てくる要求を少し抑えなければならぬということになるわけですか。

夏目 抑えなきゃならないですね。現実の防衛力を抑えるということだけならまだ多少議論できたかもしれない。そうではなくて、そもそも軍事力とは、防衛力とはどういうものなんだという哲学というのかな、それがもう基本的に違うんです。制服の人たちは防衛力というのは脅威対処です。脅威に対抗すべきものが防衛力のあるべき姿なんだというのがまずあるわけです。それを否定してかかるような議論というのはとても……。ちよつと縮めるとかというのとは違うのですね。それと、最初からいわゆる直接侵略対処以外の事態に対してこういうものを持つべきというのは、制服から見れば、持っているものをたまたまそういうものに使うのはいいけれども、最初からそういうものをあてにしたものとしてつくるというのは邪道だ、くらいに思っている人が多かったのではないのでしょうか。古典的なそういう考えというのわかるんですよ。何十年もそういうことで旧軍以来やってきたわけだから。久保さんというのは、評論家や学者としては一流だったかもしれないけれどもね。だからあの人の政策は結局目の目を見ないのですよね。もう少したつて坂田さんがそれに似たようなことを考えるのですけれども、結局、換骨奪胎しちゃっているのです。

■「平和時の防衛力」

伊藤 やはりオイルショックで財政が圧迫されているわけですね。防衛予算は、先ほどお話しにありました四次防も、縮小とか修正とかそういう事態になってくるわけですから。これは、オイルショックが起こって、防衛庁としてはどう対処するかというのをまず検討されなければならぬわけですね。

夏目 それが、多少時期が外れるけれども、昭和四十七年十月に四次防ができたあと、多分、私の記憶ではそのあとそんなに時間がかからないときに、増原さんに対して田中総理が、「平和時の防衛力というものを検討すべきではないか」と、平和時の防衛力というのはどういうものかといったら、際限もなく膨らむようなものではなくて、日本の防衛力として平時にこれだけは持つていなければいけないという最小限度のものをひとつ考えてくれという話があった。それは、言い方は違うけれども、久保さんの発想と結果的に非常に近いものだったんです。ある意味では久保理論が復活したという側面もあるんです。それから一年ぐらいかけて防衛庁はこれを勉強したのではないですか。勉強して、結局あれは、国会かどこかで説明して、袋叩きにあつて、撤回して、なかったことにします。こういう話でおわつちやうんですよ。それは制服からも評判が悪かった。

佐道 そういう議論をされていたことというのは、それはもちろん防衛課が中心にいろいろ議論されると思うのですけれども、どいう議論があったのかとか、どういうことで来ているかというのは、当然、先生は引き継がれるわけですね。

夏目 もちろんそうです。ちよつと時期的な記憶がないけれど、増原さんがなったのは十月……。まだ私が教育課長のころかな。

佐道 それは教育課長のころです。

夏目 そのときに作業は始まって、実際にできたのはもつとずつと

あとだったと思うのです。平和時の防衛力を国会で説明したのは。中島 増原さんが田中さんに報告したのは一九七三年二月ということになっております。

夏目 四十八年の二月か。じゃあ、半年ぐらいたつていんだな。このときにはもう、増原さんがやめる直前かな。増原さんはこれをやつてすぐやめるんですよ。結局は、報告して、国会でゴタゴタして撤回しちゃつたと思うんです。

伊藤 どういうゴタゴタだったのですか。

夏目 あれはどういうことだったのかなあ。

中島 何でも、社会党が当初は、「出しなさい、出しなさい」といつていたのが、平和時の防衛力でも認めてしまうことになる、自衛隊を認めることになってしまふから、やはり出さなさいでくれということ撤回したと伺つていますけれども。

夏目 そうだったかなあ、ちよつといま記憶ないな。あとで調べておきます。そういうこともありうる。面子が立たなくなつてしまふからやめてくれという(笑)。

伊藤 非常に奇妙な議論ですね。

夏目 自分で要求していて、具合が悪くなつてしまふとやめるといふのはよくある話だったけれども、本当にそんな話はひよつとしたらあつたかもしれませんね。

伊藤 そのときは先生はまだ防衛課長になつていないのか。

佐道 平和時の防衛力が出たときは教育課長。

伊藤 七三年十月からだからね。そうすると、七三年の十月といふことは、防衛庁長官が山中さんになつてからですね。

■山中長官

夏目 そうですね。私の防衛課長時代の印象は山中貞則さんですよ。

伊藤 課長と大臣というのはどんな関係ですか。

夏目 これまた不思議な話で、山中貞則という人は、ご存じでし

ようけれども、うるさい人でしたね。元気はいいし、威張るしね。威張るといってはいかんけれども、とにかく怖い人でしたよ。それで、久保だとか何だとか、統幕議長でもみんな呼び捨てですよ。「○○、おまえ」とかいつて、衆人環視のなかでこてんぱんにやっつけるわけです。そういう意味では、まあ、うるさい人が来たなという感じでした。たまたま当時の会計課長と私はあんまり怒られないんですよ。

伊藤 へえ、何か理由があったのですか。

夏目 ないですね。要領がよかった(笑)。

一同 アハハハハ(笑)。

夏目 それは冗談だけど、やはり好き嫌いがあったのでしょうか。島田さんも久保さんもみんな呼び捨てにされて、こてんぱんにやられていましたよ。いちばんうるさい大臣で、役所だから、供覧とか報告とかいうのが、日々の局長報告とかいっぱいあるんですね。それは事柄の軽重によつて、局長止まりのものもあるし、次官止まりのものもあるし、大臣まで持つて行くものもあります。ある北海道の隊員が酔っ払って付近の住民を殴っちゃったとか、自動車事故を起こしたとかとあるでしょう。そんなやつまでみんな上げろというわけです。そんなやつを上げると、毎日何十通も来るんです。それをよこせというわけだから、とにかく非常に細かなところまで目配りする人で。役人になめられてはいけないというのか、細かくチェックしたんですね。だから予算の説明とか、毎年の業務計画の説明なんか、私なんかが定員の増員要求の説明をすると、「○○何十人、○○四十何人、その他七人」と、「その他」って必ず出るよね。「その他」って、その他の中味は何だ」という(笑)。何百人も何千人も要求しているなかで、七人やそこからどうでもいいじゃないかと。最初からそれで、それからもう、これはこういう人なんだなど、ちゃんと敵の突っついてきそうなところがわかるけどね(笑)。そういう人でした。

佐道 最後までそんな感じですか。

伊藤 課長が呼ばれるということはあるのですか。

夏目 ありますよ。年じゅう呼ばれていました。山中大臣が新宿の病院に何かの病気で一月か二月か入院されていたんです。その間ほとんど毎週行つては説明していたのですから。病床でこうやって(腕組みをして)、ベッドの上で胡坐をかきながら聞いていたんですよ。そこへ何人も説明員がいるんですよ。仕事は非常に熱心でした。怖いけれども、ちょっとみんなびびっていましたね。

伊藤 でも、決済はしてくれるわけですね。

夏目 しないでですよ、普通は。島田(豊)次官かな、外国へ行くなんていうと、「何しに行くんだ」なんていつて、絶対に判を押さないんですよ。

佐道 じゃあ、いろんなものがとまるじゃないですか。

夏目 とまりますよ。そういうときにこつちが行くんですよ。「こうですよ」といつと、「うん? しょうがねえな」といつてサインしてくれる。そういうのはあるんです。

伊藤 (笑)、ほお、そうですか。

夏目 もう一つ山中大臣で印象にあるのは、沖縄については非常に思い入れが強いというか、沖縄の不利になるようなことは絶対に許さなかつたですね。あのくらい熱心に沖縄のことを考えた人はいないんじゃないかな。

中島 具体的に何か思い出に残っていることはございますか。

夏目 具体的にないけど、何でもそうですよ。沖縄で演習をやるといつたら、演習をやめるとかね。沖縄では鉄砲も撃てなくなつたんですよ、一時。鹿児島に来て鉄砲を撃つたんです。鉄砲なんというの基礎訓練でしょう。大口径の大砲だったらよそで撃てというのはわかるけど、小銃訓練もできないんです。そういう辛いところはありました。自衛隊も、沖縄でもつてちよつとでもかい顔をしようとするとか、沖縄の県民の利害に何か影響がある

ようなことは、「ダメ」と。

佐道 山中さんは沖繩に思い入れが深いというのは確かにいわれますよね。

夏目 前に沖繩開発庁の長官をやっているでしょう。

佐道 初代。鹿児島も山中さんの地盤ですよ。

夏目 あの人はまじめにそう思ったんじゃないですか。いま俺が沖繩のことを一所懸命やらないと、だれがやってくれるかという気持ちがあったのだと思います。だから、自衛隊にすれば、沖繩というのはアメリカから返ってきた直後ですから、何やかんや新しいことが起きますよね。隊舎を建てたり、基地をつくったりするにしても何にしてもね。

伊藤 いろいろ問題がありましたからね。

夏目 そういう意味では山中さんという人は非常に沖繩のことに神経質な大臣だなという印象があります。

伊藤 では、夏目先生は山中さんには比較的よかったですね。

夏目 正直いますと、私は怒られたことがあります。一度もありませんよ。バカ呼ばわりされたこともないしね。私は別に悪印象はないんです。ただ、悪印象を持っている人がいっぱいいた。

伊藤 ということは、悪印象を持たれて、怒鳴られたり何かされた人から見たら、夏目さんはどう見えていたのですかね。

夏目 要領がいいと思っただんじゃないの。

一同 ハハハハハッ(笑)。

夏目 それしかないでしょう。

佐道 怖い人と仲がいい(笑)。

夏目 そうなの。あの人がだつてそうですよ。ちよつと余談になつちゃうけど、このあとの坂田道太という人、これがまたうるさいんですよ。あんなやさしい顔をして。これがもう、何かあれば私のことを呼ぶんですよ。宿舍へ呼んで話をするし、一杯のみにには連れて行くしね。それで、こううるさいんですよ。だから、ああい

うるさい人とはたまたまうるさいくんですな。

伊藤 うまく付き合う方法を教えてもらいたい(笑)。

夏目 最近だめになつてきた(笑)。

伊藤 不思議だなあ。

夏目 別にご機嫌をとりに行くわけでも何もないんですけれども、たまたま叱られたりしたことはないですね。坂田さんなんかは何かやる度に私を読んで、原稿を書けとか、あれをやれとか。人がつくつた防衛白書を見直せとかね。上司がつくつて防衛白書を見られるか、というねえ。

伊藤 (笑)、そうですか、大臣というのは結構無理難題をいうんだな。

夏目 大臣というのはオールマイティーですからね。

佐道 しかし、山中さんはそういうことをやっているといろんなことをとめちゃうんですね。山中さんご自身が、こういう防衛政策をやりたいとか、そういうことについて考えることは。

夏目 私はそういうことを聞いたことがあります。あの人は、持つて行つた話をとにかく。ちよつと海原さんに似てますね。

伊藤 でも、完全にぶつ壊しちゃうわけじゃないでしょう。

夏目 完全にぶつ壊すわけではないけれども、本当に肝心なところを切っちゃうとかね。あとで四次防の修正なんて、それは自衛隊から見れば首を切られたようなものですよ。でも、それでずんじやうのだからね。相当大胆不敵なやり方をします。それも、「これとこれはやめろ」とは決していわないです。最初は小出しに痛くない指をちよつとつめて持つて行つたりするんですよ。何とかこれでうんといつてくれるとありがたいなと思うと、絶対にうんといわない。だめなんです。それで、いよいよ心臓を摘出したようなものを持つていくと、「うん」と。だから最初から狙っているんですね。ただ、いわないんです。

佐道 そういう意味では、何がポイントかとか、何が重要かとか。

夏目 それは心得ているのでしようね、きつと。

伊藤 でも、それを外側からこういうふうな考えているらしいなというのはいかがでないのですか。

夏目 わからないですね。ただ、何かしろというのとはわかりますよ。もつと圧縮したものをもつてこいとか。だけど、たいがいそういうときはもつと縮めてくれば、やり方は事務方に任せるのが普通なんです。これとこれを切れというのはいわないですよ。それがいちばん、例えばあとで出てくるヘリコプター搭載艦であったり、航空自衛隊の主力戦闘機であったりするので。それをやめというのですから。

伊藤 それは、事柄がわかっているってわけていますか。

夏目 そこがわからないんだね。

伊藤 ホッホッホッ(笑)。

佐道 知恵をつけているという人がいるという感じですか、それとも。

夏目 それはあんまり感じませんでした。

中島 まったくもつて政治的な見地から。

夏目 そうだと思えます。

伊藤 山中さんに聞いてみたいな。

中島 そうですね。

夏目 山中大臣で、何の国防会議かな、四次防の修正かな、大鉦を振った予算かな。とにかく四次防を事実上修正せざるをえなくなつた発端の国防会議で、というのは防衛予算は閣議の前に国防会議にかけるんですが、そのときに田中総理が山中大臣に対して、「本当に山中君はよくやってくれた。ここまで決心してやってくれたのは本当にありがたい」といって、手を握って握手するんです。そうすると、山中大臣は直立不動の姿勢みたいになって握手してね。「あ、この人もまた上がいて、怖い人がいるんだな」と。

一同 ハッハッハッハッハッ(笑)。

夏目 本当にそうでした。だから、そのことに関しては田中総理から非常に評価が高かつたんです。ただ、自衛隊は泣きにならないんですよ。それはその後、四次防の実質修正ということで正式に国防会議にかけるんですよ、たしか。何と何は取りやめたと、そういうところへ発展してしまうのですけれどもね。まあ、それはオイルショックだとか何だとかということが背景にあつたことは事実なので、相当やはり財政的にもきつかつたということはあると思います。もう一つ、そう、思い出したのは、山中大臣というのは大蔵省とツーカーなんですよ。

伊藤 そうだ、税のあれだ。

夏目 だから、それは多少あつたかもしれないですね。それは、根拠はないですよ。非常に大蔵省には顔の効く大臣であつたことは事実です。

伊藤 税調のあれだものな。

夏目 党税調の会長をやつた位だしね。

佐道 四次防の縮小修正という問題で、ヘリコプター搭載護衛艦とか、支援戦闘機のFSとか、人員の削減とか、増員断念とか、そういう基本方針は内局のほうで立てるといふことになるわけですか。

夏目 それは幕僚監部と議論した上で、こうしようやという話をするわけです。ところが、山中大臣のときは事務方で話がついてことも全然お聞き入れいただかなかつた。そのときの防衛課長ですから、しんどかつたですよ。

伊藤 そういうときは局長ではなくて課長ですか。

夏目 いや、それはねえ、あらゆる会議の説明役というのは大体課長なんです。局長なんて聞いているだけで、たまには後ろから鉄砲を撃つ人がいるからね。

伊藤 ハハハハハッ(笑)、それは怖いなあ。

夏目 要するに、一緒になつてね。主管局長だから本当は説明：。海原さんなんかは年じゅうそうでしたよ。みんなそれを知っているから、部下も海原さんにいわれたからつてびつくりはしないですよ。「また始まった。かなわんな」というあれだったけど。

佐道 海原さんのときは、ご自身の周りはみんな血だらけ（笑）。

伊藤 先生の時代までは、どこの官庁も、文部省なんかもそうですけれども、旧内務省系の人が出て、ほかから来た人がいてというので、人事があとのように固定していかないわけですね。そのかわりにユニークな人がたくさん（笑）。

夏目 ユニーク……（笑）。

伊藤 そういふ方のお話を伺っているときは非常におもしろいと。

夏目 多分、私は物の考え方が役人ではなくて政治家に近いのかもしれない。アバウトなんです。難しいのはだめ、生理的に拒否反応を示すんですよ。だから、俺にわかることで仕事をしよう。

伊藤 しかし、山中さんみたいな人が政治家なのかもしれないですね。

夏目 まあ、きょうはこんなところかな。

■四次防修正以降

伊藤 いや、田中内閣のところ、結局四次防が修正されて、かつ、その四次防後はどうなるかというところまでお話しただけだと思いますが。

夏目 四次防というのは、生まれた前から問題を抱えて、出来てからも今いったようにいろいろ問題を抱えていたのです。それは、ニクソンショックがあるわ、それからアメリカが第二次ニクソンショックとかいうのがあったね。

佐道 はい、一月後、ドル防衛。

夏目 ドルと金の。それからもう一つ考えられるのは、全日空機が岩手県の雫石というところで航空自衛隊の戦闘機とぶつかった

んです。何百人か死んじゃったのですけれども、ああいうことがあって、自衛隊に対する嫌悪感とはいわないけれども、ちよつと自衛隊を冷たい目で見るとなような雰囲気があったんです。そういうふうなもろもろの理由が結果的に四次防というものを非常に痛めつけたと思います。それやこれやがあつて、四次防というのは修正せざるを得ないのですが、いちばんの理由はオイルショックです。そのときの国防会議も、最後、これは四次防のあとですが、実際に四次防が思い通りにいかない。結局最後まで取り残しがうんとふえちゃうわけです。それではあまりに国防会議の権威がないじゃないかと。一旦決めながら、毎年の予算でこんなにズタズタにされて。それで国防会議でわざわざ決めたんです。これはやらないといつて。

佐道 やらないことを決めたわけですか。

夏目 それはさっき言った、目玉がこのDDGであり、FSなんです。要するに、正面のいちばん肝心な、自衛隊の目玉ともいうべきところがみんなズタズタにされた。それは山中大臣がどういう感じでやったのか、あるいは田中総理と口裏を合わせてやったのか、そこは私どもにはわからないけれども、とにかくそういう。まあ、そんなことをしなくても、当時の情勢がそうだったということは私も容易に想像つきます。とてもあんなものができるはずがないと。それで、これで懲りて、「もう四次防のあととは五カ年計画とかそういうのはやめようや。毎年毎年の予算でやろうや」という意見が出てくるんです。

伊藤 それは防衛庁のなかにもですか。

夏目 中に。

伊藤 内局で。

夏目 制服組も内局も。しかし、さりとて防衛力というのは単年度の予算だけでやるわけにはいかない。やはり長期的な視野に立つて、例えば艦船の建造なんていうのは五カ年かけてつくりましますから

そうはいかない。三年くらいでローリングしてくるのがいいのかなとか、いろんな意見が出てきた。要するに、もう四次防で懲りたというのが、私なんかも含めて、当時の防衛庁の印象です。ああいう長期計画はやめようと。苦労ばかりするだけで、ちっとも中身はないじゃないか。みんなこぼれて行っちゃうじゃないかと。

伊藤 それは、その前の何次防でもみんな同じですね。

夏目 だけど、こんなに不憫なものはないですよ。

伊藤 こういうときの防衛課長というのは大変辛いものですね。

夏目 辛いですね。だから、一方に久保さんみたいな人がいて、もともと小さくていいと、あるいは平和時の防衛力なんていう発想が出てきて、小さくてもいいやという考え方の人もいるわけですから、そういうなかで苦勞するのはばかばかしいなという気がした。それでも、四次防のあとはどうするかというの、私が行ってからすぐ、多分あれは一年もたたないうちに、四次防のあとをどういうふうにするべきかということの検討に入ったんです。

伊藤 そのときにはもう五次防という考え方は。

夏目 私はまったくなかった。正直いうと、私が言い出した言葉としては、常備すべき防衛力という、やはり小さなものを考えた。それを考えて勉強したんですね。多分、久保さんの考えていた平和時の防衛力に近い発想。ただし、哲学として、脅威対象でないとはいわなかった。

伊藤 制服のほうはそういう考え方に対しては。

夏目 制服の議論というのは、まだそこまで行っていませんからあんまり大っぱな議論ではなくて、まずわれわれの身内で議論している段階でした。制服を含めて議論するようになって、やはりもめました。もめたけれども、いちばんもめたのは規模じゃないんです。やはり考え方は。脅威対抗というあれは残さないといけないというのが彼らの強い考え方でした。

伊藤 脅威をどう測定するかという。

夏目 それは別としてね。だから、それを捨象して基盤的防衛力という構想だけで行くのは絶対に受け入れがたい。だから、そこは妥協の産物で、脅威は受け入れると。しかし、近代戦というのはある日突然起こるのではなくて、ある程度前もって予測できるだろう。奇襲で来る兵力というのはこの程度だろうというところから防衛力を圧縮することはできるのです。だけど、それはやはり脅威対象なんですよ。その哲学は変えない。そうしないとかなかなか納得できないというのが実情でした。そして始めるのですけれども、それが結局、坂田長官になってから、それは一応わかったということ、たしか参事官会議でも了承されたのです。しかし坂田さんは、「これはこれでいい。いいけれども、防衛力でいちばん必要なのは、防衛庁のなかだけで勉強したのではなくて、一般の国民から見えてどう納得したものになるかというプロセスが大事。したがって、何かそういう機関を設けようじゃないか」というので、「防衛を考える会」というのをつくって議論しました。しかし、議論をしても結局同じところへ行くのですけれども、そういう過程を経ることが大事だというのが坂田さんの考えだった。

伊藤 結局、ローリング方式とか。

夏目 ローリング方式にしただけではなくて、国防会議決定そのものをやめようということになった。それがいわゆる五三中業です。伊藤 中期業務見直し。

夏目 四次防がおわってから出来たのは、単年度か何かで一年くらいやったかもしれないけれども、あとは中期業務見直しというところで防衛庁限りの計画にして、それは三年固定、三年ローリングで、三年たったら見直しという形なのです。六年計画のね。しかし、それは国防会議には諮らないで防衛庁限りとしたんです。

伊藤 でも、防衛庁限りといつても、一応は大蔵と。

夏目 もちろん事務的には大蔵省と。だけど、文書も国防会議で決めるのではない、閣議で決めるのではないという、多少はい

い加減になりますね。いざとなったら毎年の予算で勝負すればいいやというのがあるから、多少甘くなるんです。

佐道 庁内限りの計画ということですか。

夏目 そういうことですね。

伊藤 そうすると国防会議はどういうことになっちゃうのですか。

夏目 だから、それはかけないですよ。要らないんです。

伊藤 国防会議自体が。

夏目 国防会議がうるさいからそうしたということですよ。要するに、それが一種の文民統制強化の措置とかいうものを決めたのですけれども、そういうことはやめたいというのが防衛庁の腹なんです。だから、海原さんのときの病気がずっと尾を引いているんですよ。

佐道 海原さんがいなくなつたあとにそういうことに(笑)。

夏目 多少手遅れの感がありますけど(笑)。だけど結局は、五三中業はそうやつたけれども、やっぱりだめなんです。そのあとの五六中業はまた国防会議にかけることになるんですけれども、まあ、そのときにはやつぱり、いろんなうつつとういひのは勘弁してくれよとか、いやだなとか、そういうのがあつたと思うんです。伊藤 でも、何か長期計画がないと大蔵だつて困るわけでしょう。

夏目 そう、だめなんですな。

佐道 長期計画がないというのは、装備局のほうとか、例えば防衛生産の側からすると、安定的にきちんとしてほしいという理由があると思うのですけれども。

夏目 だけど、あつてすらこれだと。国防会議で決め、閣議で決めて、だれも文句ないはずなのに、これをやられるのだったら同じじゃないかという気持ちもあるんですね。しかしまあ、そうはいつでも防衛庁限りの計画では外へ出てけんかもできないしというので、また元へ戻るのですけれども。

伊藤 じゃあ、戻るのは半分なのですか。

夏目 いや、半分というか、五六中業というので、形は五三中業と同じだけれども、今度は国防会議にかける。

佐道 約十年後です。だけど、一次防はあれとしても、二次防、三次防、四次防と、そういう年次防方式ですつとやつてきて、それを大幅に変えようということになると、相当ぎくしゃく。

夏目 ぎくしゃくはあまりないですよ。

伊藤 四次防がそういう事態になつたらどうなるか。

夏目 なぜかというのと、もう「四次防」という言葉がいやだつたんです。中国の何とか計画じゃないけど、第十何次とかつて……。毎年それは概成することになつていて、二次防でも三次防でも。それと同じことがそのまま四次防になつて、だれかの言葉じゃないけれども、私の顔も三度じゃないか、要するに同じ名称で四回もやるのはばかばかしいと。だから多分、中曾根さんは四次防のときに既に。

佐道 そうですね、新防衛計画。

夏目 四次防のときから、もうそういうのはいやだという気持ちがあつたんです。だからあんまり問題はない。坂田さんになつて大綱が決まつて、もう何次防はなくなつたんです。そこは全然抵抗がなかつたですね。

伊藤 じゃあ、制服のほうにもですか。

夏目 もちろんないです。制服は、欲しいものが頂けるのなら文句はいわないんです。あとは最小限の哲学さえ守つてくれれば。

伊藤 それをまったく否定されたのでは困ると。

夏目 だから、大綱も逃げているんですよ。どちらにも取れるように。でも、あれはある意味では妥協の産物なんです。

佐道 では、今の中期防衛力整備見積もりというのも、そのままでもあるのですけれども、あんまりよくわからなかつたから(笑)。

■核積載艦寄港についてのロック証言

伊藤 では、そのへんの詳しいことはまた坂田さんのところで伺いすることにして。それで、核の問題だけちょっと。

夏目 核？

伊藤 ええ、ラロックというアメリカの退役海軍少将が核を撤去して日本に寄港するということはありえないと。

夏目 あたりまえの話ですね。

伊藤 そうですね。でも、あからさまにいったものですから、やはりちょっと大変だったのではないかなと思うのですけれども。

夏目 外務省が大変だったんだね。

伊藤 外務省ですか。

夏目 防衛庁はどうっていいことないですよ。外務省がいちばん大変だったと思う。だけど、外務省は頑として今までの旧態依然とした妙な答弁でごまかしちゃうんですね。

伊藤 「ない」と信じております」ですか(笑)。

夏目 「向こうから事前通告がないから、ないんです」と。

伊藤 それはするわけがない(笑)。

夏目 だけど、持ち込みというのはもともとフィクションなのですからね。寄港までは持ち込みではないからね。

伊藤 持込というのは、中に上陸させて。

夏目 そう、降ろして日本の中へ設置したら持込だけど、船に弾を持っていてまたどこかへ行くなんていうのは持ち込みじゃない。私はもう当時からいってました。そんなのはあたりまえだろうと。いつまでこんな議論が通るんだと。だけど、あのころそういうことをいっただら内閣の一つくらいつぶれたかもしれないですね。

伊藤 そうですか。

佐道 核の問題ですけれども、日米安保の関係でいうと、質問に

は入れ損ねたのですけれども、七三年に日米安保運用協議会というのが大平(正芳)さんとインガソル大使の間でできて、これには防衛局長と防衛施設庁長官と、それから統幕議長も入ってやるということになりましたね。防衛施設庁長官が入りますから基本的には基地問題が中心になると思いますが、防衛局長がお入りになるということで、こういう準備とかいろんなことは防衛課のほうに降ってくるのではないかと思うのですが、それはいいですか。

夏目 あつたとすれば施設庁。

伊藤 やはりそちらがメインなんですね。

夏目 実質的な防衛の話についてカウンターパートナーとしての議論をするというのはまだそのころはないですから。坂田さんになってから初めてですからね。

伊藤 これは画期的なことなわけです。坂田さんのときは。

佐道 日米運用協議会で統幕議長が入られるということになっていますけれども、これについては何か防衛庁は。

夏目 全然記憶がないね。もともと防衛局長というのは合同委員会のメンバーです。合同委員会のいちばん親玉の委員会のメンバーは防衛局長。それで、分科会の庶務が施設庁ですね。統幕議長なんかが入っていないのだけれども、多分、だれかから制服も入れるやという意見があつたんだと思います。国防会議だつてそうですよ。最初はいなかつたのだけれども、途中から統幕議長も入るようになって。それはなぜかという、当時、白川という統幕議長がいてね。

中島 元春さんですか。

夏目 旧軍の白川陸軍大使の孫か子どもか何かですけれども、なかなか優秀な人ではあつただけけれども、統幕議長なんて代表権のない取締役みたいなものだとはやくんですよ。事実そうなんです。そんなこともあつて、何かやはり彼らを満足させるものと、歴代大臣みんな気を使つたんじゃないですかね。

伊藤 そういうこともあるのかな。

佐道 本当にあの統幕議長というのは、制服組のトップであるとか書いてあるのですけれども、本当に代表権のない会長みたいなものですね。

夏目 だって合議体の長でしょう。陸海空の幕僚長が「うん」といわなければ何も決められないだろうし、そういう意味では当然の間はお飾りみたいでしたね。部下がいないでしょう。部下はみんな陸海空から来ているから、この人たちは本当に統幕のために統幕の仕事をしようというのではなくて、やはり差し出し元の顔色を伺いながら仕事をしているから、ちょっとでも権限が侵されるようなことは絶対にうんといわないです。だから、統合の幕僚

監部というのをつくって自分でできるようにしたいという気持ちも本当にわかるんです。

伊藤 しかし、どこの国でもそれは非常に難しいことのようなうすね。

夏目 そうです、どこにでもあるんです。

伊藤 さあ、だいたい田中内閣の時代がおわりましたので、もしきょうのことでありましたら。次回は三木内閣の坂田さんの時代について伺いたいと思いますが、また何か思い出したことがありますら、次回の頭でちょっと付け加えてください。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第6回

開催日：2003年4月4日（金）

開催時刻：14時05分

終了時刻：16時10分

開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

石田京吾（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：

有限会社ペンハウス 矢沢麻里

■丸山防衛局長、田代次官

伊藤 きょうで第六回目になります。前回、田中内閣の時代の話がだいたいおわって、きょうは三木内閣の時代ということなのですが、この前のことで何か付け加えるようなことはございますか。

夏目 四次防の手直しみたいな、削減みたいな話はある程度しましたね。まあ、後遺症はまだずっと続けけれども、一応、いいんじゃないですかね。

伊藤 そうですか。またその時期に。

夏目 このへんでお気づきの点があればおっしゃっていただければ。私は過ぎたことをすぐ忘れちゃうんです。

伊藤 僕なんかもそうです。今朝、読み直して（笑）。

中島 一点だけ教えていただきたいことがあります。久保さんがおっしゃっていただいた「基盤的防衛力」とは別に、夏目先生ご自身が「常備すべき防衛力」という概念を考えられたということですが、この点、お話しただけですでしょうか。

夏目 それはきょうこれからの話になるのですけれども。たまたま久保（卓也）さんの発想と似たような名前だけど、私は「常備すべき防衛力」ということで参事官会議にかけたといういきさつはあるのですけれども、それは坂田（道太）さんになつてからの話だから。

伊藤 三木内閣になって、（質問事項の）第一項に書きましたように、いろいろ人事異動がございました。丸山（昂）さんが防衛局長になられますね。

夏目 そうです。

伊藤 丸山さんは防衛庁の総務課長の経験がありますけれども、ほとんど警察の方です。次官も防衛局長の経験のない大蔵省の田代（一正）さん。どうも防衛問題の専門家が中枢に座っていない。そうすると、逆な意味でいうと、夏目先生の役割がかなり大きく

なってくるのではないのかなという感じがしたのですけれども。

夏目 そうでもないけれども、いずれにしてもお二方ともそんなに防衛問題について造詣が深いというか、詳しく認識しているという方では必ずしもなかったですね。特に田代次官は久保さんと同期なんですよ。大蔵省と内務省の差ではあるのですけれども。どちらが次官になるかっていうことを当時もいわれていました。結果的には田代さんを次官にして。そのかわり、多分、短い期間で久保さんにパトントラッチするだろうということは当時からいわれていたことなんですね。だからまあ、バランスをとって、ちょっと次官にしたということではないのでしょうか。

伊藤 そういう上司の下でやるといえるのはどういう感じでしょうか。

夏目 田代さんにしても、丸山さんにしても、非常に人柄の温厚な方でして、紳士的な方ですから、私たちのいうことをよく聞いてくださる上司でした。

伊藤 聞くというのは、理解してという意味ですね。

夏目 もちろん理解しないとはいいませんけれども（笑）。とにかく、お任せいただくところはして、人の話をよく聞いて、そのとおりやっていたかどうかという方で、あまりやかましいことをいわれるタイプの人ではなかったんです。そういう意味では非常に仕事はやりやすい方でした。ただし、その後は別ですよ。そのあと勉強されますからね。丸山さんなんかは特に。田代さんはあまり長期におられなかったし、局長が間に入っていますから、私も直接年じゅうお付き合いするのではないからよくわかりませんが、丸山さんはその後非常に勉強されて、防衛局長としても非常に実績を上げられた方だと思います。

伊藤 それは、かなり勉強されたということですか。

夏目 勉強家です。まあ、両方とも一高―東大だから、もともと頭がいいでしょう。飲み込みは早いですよ、役人のああい人は。

佐道 「役人のああいう人は」って、先生も役人でいらつしやるのですけれども（笑）。

伊藤 先生もそれなりにいいじゃないですか。

夏目 僕らは土民軍だからね。

伊藤 え？ それはしないでしよう（笑）。

夏目 イラクの民兵ですよ（笑）。

佐道 いえいえ（笑）。

伊藤 先生のお話を伺っていると、「そうかなあ」なんて思うんですけど、よく見ると東北大学法学部卒業ですからね（笑）。

夏目 だって、いま歴代次官会議というのを毎月やるんですが、私より上は全員東大です。そのうちの半数はナンバースクールです。それで、ときどき三高時代の話とか、一高のときのポート部でどうのこうのと、「また始まったな」なんて（笑）。そういう世界ですよ。オーバーにいえば、役人というのは防衛庁ですらそうなんです。だからほかの、昔の旧内務省とか、大蔵省とか、そういうところへ行ったらもつとひどいんじゃないですかね。そうでない人間なんていうのは半分見下しているようなところがあつたと思いますよ。

伊藤 松高はだめですか。

夏目 だめといつても半分くらいは仲間ですからね。でも、少なくとも東大ではないなんていうのはいかなかったですね。どこもいなかったでしょう、多分。だからいいとはいいませんよ。東大出でもろくでもないのがいっぱいいますからね。東大出身者を偏重して採用したことが、今日日本の官僚がだめになった一つの原因でしょうね、きつと。

伊藤 うん、多分ね。

夏目 勉強はできるんですよ。飲み込みも早いです。

伊藤 雑草ではないと。必要なのはやはりそういう。

夏目 打たれ強いとか、タフなんていうのとはちよつとちがう：

。。。そんなことをいってもしようがないけどね。田代さんは一年しかやらなかったんじゃないかと思えます。

佐道 田代さんは久保さんとのバランスをとつてということだったのですけれども、従来、これまでの防衛庁の次官の方というのは旧内務省出身の方がほとんどで、大蔵の方で、経理局長、官房長を経て、次官になられるというのは田代さんが初めてですね。

夏目 そういわれれば、そうかもしれないね。

佐道 ええ。このあと、例えば丸山さんのあとに三代続いて大蔵になるのですね。ですから、大蔵が防衛庁の次官のポストを得るという先鞭をおつけになったのですけれども、その点についてはどうですか。ずっと内務省系で来たのが、大蔵系が来たということについては何か。

夏目 あると思いますよ。それはたまたま警察予備隊というのはもともと内務省系の人たちが中心になってつくつてきて、予算とか経理の関係については大蔵省からエキスパートを連れてきて経理局長とか会計課長という仕事をしていただいたという経緯があります。しかし、だんだん防衛庁も育つてきますと、だんだん各省から来る人たちが少なくなつてきてはいたんです。主として、旧内務省系の警察庁と、大蔵省は依然として大きな供給元であつたわけですね。ざつとばらんにいえば、内務省のほうは昔と比べるとだんだんいい人が来なくなつたんです。いい人というのは何かわからないけど、俗にいう優秀な人ではなくて、二流ちよいくらしいの人が来たということはあると思います。ただし、大蔵省は一流の人を依然として送り込んでいます。もともと大蔵省の人はレベルが高いですからね。頭脳明晰ですから、議論しているも、「こいつは頭がいいな」と思うやつはいっぱいいますよ。そういう大蔵省のなかでも、だめなやつをよこすのではなくて、大蔵省に残つても相当なところまで行くような人たちをよこした。それだけ大蔵省というのは国の防衛とか安全保障についての

重要性の認識をしっかりと持っていったという証左だろうと思うのです。警察庁はそれだけ人が足りなくなっていたのでしょうかね。

伊藤 警察のほうですね。

夏目 というのは、昔の内務省ではなくて、警察だけに絞られてきますからね。

伊藤 自治省なんていうのは全然関係ないのですか。

夏目 来てはいましたけれども、ほんの一握り、人事の募集とかそんなところへ来ていた程度で、とりわけ優秀な人がいつでも来ていたわけではないです。

佐道 丸山さんが警察から官房長でまずお入りになるのですけれども、これはやはり、周りからも将来の次官候補だということで見られていたのですか。

夏目 丸山さんは官房長で来ただけではなくて、その前に審議官もやっていたし、総務課長もやっています。防衛庁におけるキャリアもそれなりに積んで、急にボンとなったわけではないんです。今いったように、久保さんのあとがちよつといなかったすからね。

伊藤 それは年次とかの問題ですか。

夏目 それは年次の問題もありませんね。

伊藤 おもしろいですね、大蔵省がずっと続いて。もちろん大蔵省だって防衛庁の予算の審査をやったりしていますから、それは専門家でしょうから。

夏目 非常に勉強家だし、極端なことをいって、いわゆる出稼ぎ的な気持ちではなくて、本当に防衛庁の仕事に情熱を持ってあたっている人が多かったんです。自分たちの問題として。じゃあ、大蔵省へ行って予算折衝なんかをするのはなああじゃないのかという見方をする人もいたけれども、絶対にそういうことはない。主計局次長と、口角沫を飛ばし、相手の胸倉をつかむような喧嘩をしてやっていますよ。そういうのを見てみると、「あ、違うな。

親元のことを考えて仕事をしているんじゃない」というのがわかるんですね。そういう優秀な人が多かったんです。

伊藤 そういう人たちのなかで、また大蔵に戻る人もいますか。

夏目 いますけれども、人をよこすというときには、「こういう人が欲しい」「こういう人をよこすぞ」というこちらと向こうとの話し合いですからね。こちらが将来のことも考えて、「将来、こちらで骨を埋めて、のびていく人をよこしてくれ」という話もしますし、「一時的に課長のポストがちよつと足りないから、二年間だけ貸してくれよ」という話ではないですから。だから心構えも違うのでしょうけれども、もちろん帰る人もいますよ。概して残った人は立派な人が多かったですね。今でもそうだと思います。

伊藤 国家予算のなかで防衛費の占めるウェイトは高いわけですから。

夏目 宮沢（喜一）さんが池田（勇人）さんの特使で池田—ロバートソン会談が何かでワシントンへ行行って、警察予備隊か自衛隊を十八万の十三個師団にするという話の際についていたのは村上孝太郎という主計局長ですからね。防衛庁からはだれもついていかないわけだから。それほど当時の政府も、防衛庁、自衛隊の仕事に関する予算の比重というのは非常に大きいんだという認識があったのではないのでしょうか。そういうことの影響がずっとあつたと思います。

佐道 この田代さんの人事は、今の蔵から初めての次官であるということと、もう一つ、防衛局長を経験していない次官なんですよね。

夏目 ただし、施設庁長官をやっているんですよね。

佐道 ああ。

夏目 そのずっと前は外局みたいだったけれども、だんだん施設庁の仕事というのは大きくなってきていますよね。米軍のいろん

な基地の返還・統合とか、あるいは労務問題にしても何にしても。そういう意味で、防衛施設庁の長官には防衛庁の人が行くようになつたんです。その頃からはやはり、防衛庁の次官になる人は防衛局長か施設庁長官をやった人が望ましいという。それは単なる望ましいというだけでもつて、べつにルールがあるわけでもないのですが。

伊藤 でも、一応、不文律みたいに。

夏目 そんなことでずっと来ていました。その後、一、二、例外はありますけれども。

佐道 ただやはり、防衛局長をおやりになつていないというのは、当時、周りから見ると。

夏目 田代さん自身も気持ちのなかでは、「俺は防衛問題についての知識はあまりないぞ」という気持ちがあつたと思うのです。だから、なるべく局長や課長をたてるような、さつき申しあげたように、決して、「俺が、俺が」という人ではないから、素直にそういう雰囲気の仕事をしたのだと思います。やはり内心コンプレックスのようなものもあつたでしょうね。久保さんなんかはそんなの全然ないですからね(笑)。

佐道 (笑)。七四年の中盤ですから、前年のオイルショックの影響で、それこそ四次防の見直しの問題を含めて、防衛問題の長期計画をどうするかという大変な時期になるわけですね。次官に就任された田代さんは、次官として何かこういう方針でとか、そういうことはお示しになりましたか。

夏目 あんまりはつきりした記憶はないですね。何かあつたかも知れませんが。田代さんが来たのは四十九年の六月ですよね。その前から、山中長官のときから防衛庁でいちばん大きな問題というのは、四次防の修正というのかな。オイルショックやら、中東戦争やら、ドル防衛やら、いろんなことが重なつて圧縮せざるをえなくなつてきたという、防衛庁にとっては受難の時期にな

るんですね。非常に苛酷な、防衛庁にとつてみればそういう苦しい時代だつたと思うのですよ。そういうなかで、これからの防衛力整備はどうあるべきかという勉強は始めたけれども、勉強を始めていたといつてもほんの構想程度であつて、やはり四次防の始末をどうするかということが最初の一年ぐらいいちばん大きな課題だつたんじゃないでしょうか。山中長官のときの負の遺産が残っていましたから。三次防も二次防も多少の積み残しはあつたんですよ。あつたけれども、あれくらいダイナミックに、いちばん目玉商品みたいなものをバサバサと、しかも大臣の指示で、防衛庁自らの手で切つたというのはなかつたことですから。そういう意味でのいろんな制服の人たちへのショックというのは大きかつたと思いますし、新しい防衛力整備計画に対する無力感というのかな、そういう退廃的なムードが若干ありました。それが最初に私が行つたときにはいちばんしんどい仕事でした。山中大臣のときには予算でそういうことをさせられたわけでしょう。この前の話でいつたように、結局それは、最後の予算で田中総理に大いにほめられて山中長官はいい格好したんだけど、下のほうは万卒枯るといったような気持ちでしたから、非常に意気が揚がらない時代でした。

■坂田長官

伊藤 長官がかわつたときはどうだったのですか。

夏目 長官がかわつたときは、多少、ホツとした気持ちがあつたかと思えます。

伊藤 坂田さんになつて。

夏目 ただ、長官がかわつただけではなくて、総理もかわつたでしょう。

伊藤 この三木内閣に対してはどうですか。

夏目 三木(武夫)さんというのはどういう考え方の人かという

のはそのころからある程度わかっていたが、これからの防衛力は大変だなという感じが一つありました。坂田さん自身も、来たときはまだよくわかりませんから、あまりそれまで防衛問題について関与した方でもない。いわゆる文教族の方だし、顔を見ただけでも、丸いめがねをかけた本当に学者タイプなものですから。もともとあの方はドイツ文学かな。だから、ちょっと役人とも肌合いの違う、政治家としても一種独特の雰囲気のある長官でしたからね。

伊藤 一般的にいうハト派の。

夏目 ハト派の代表みたいな三木さんが総理に座り、同じくハト派と思われる坂田さんが防衛庁長官に座ったわけです。まあ、そういう意味では、これから防衛庁というのはどういふふうに行くのかなという気持ちはありました。ただ、そのあとを見ると、三木さんはそのままでしたけれども、坂田さんは予想外でした。ガラリと変わっちゃうって、べつにタカ派になるわけではないのですけれども、防衛問題とか安全保障の問題について一所懸命勉強して、理解を示した。だいたい政治家というのは、防衛庁へ来ると自衛隊にぞっこん入れ込むんですよ。実際防衛庁、自衛隊の人達と付き合っていると、「こういう人たちがいたのか。まじめに一所懸命国の防衛を考える人たちがいるんだ」ということがわかるんですね。彼らはみんな地道で、謙虚で、そう偏った人はいないんですよ。案外ニュートラルなんです。私を見てもわかるように、こんなのがよく自衛隊にいたと。

伊藤 (笑)、自分でいう。

夏目 制服の人たちだって、防衛力整備については、基盤防衛力に対しては反発するということはあっても、それは彼らの軍事的合理性から見てこうしたものでないと困るということだけをいうだけで、だからといって年じゅう不平不満を連発していたわけではなくて、決められたことについては一応素直に、それはいま日本の

おかれた立場としてはやむをえないなとわかっていた、そういう時期ですから。そういう人たちと付き合っているうち、坂田さんもだんだん、防衛問題というのは大事な問題であるにもかかわらず、防衛庁の人達はこれだけいろいろ苦労して、耐えるところは耐えているんだというのがわかったのではないのでしょうか。そういう感じがします。

伊藤 しかし、坂田さんという人は今までの防衛庁とは違った道を開いてくれたという意味では非常に画期的な人ではないかという気もするのですけれども。

夏目 それは出てくるのでしようけれども、さっきいったように、当時の防衛庁というのはちょっと積極的な防衛論議が下火になった時期にあつたんですね。四次防の修正だとか何とかということ、何となくもう無力感というのか、「もうやつてられない」という気持ちがあつたんですね。そこへ坂田さんが来て。坂田さんは最初の一年は何をやったかというところ……。坂田さんが来たのはいつだったかな。

佐道 四十九年十二月ですね。

武田 十二月九日です。

夏目 そうですよ。このころはまだ、四次防以降について、勉強会はしていたけれども、あんまり実績は上がらなかった。あれこれ議論をしていた時期です。一方には、依然として、所要防衛力派があり、久保論文の影響を受けた議論がありということで揺れている最中です。同時に、四次防の下方修正もやらなければいけません。そういう時期でしたから、何となく議論に熱が入らなかつた時期だと思えます。そのときに坂田さんが来られて真つ先をやつたのは、「防衛を考える会」というのをつくつたんです。あの人の考え方というのは、「これからの防衛力がいちばん大事なものは国民のコンセンサスを得ることなんだ。国民の支持や理解がなかつたら、いくら防衛力を持ったところで役に立たないんじゃない

ないか」というのがあの人の考え方でして、すぐ「考える会」というものを来て数ヶ月で発足させたのではないのでしょうか。これがまた大変なんですね。

伊藤 大変ですか。

夏目 そのあいだはストップなんです。防衛庁のなかの防衛力整備の話は、一時的に小休止ということになります。

中島 考える会の答申のあとで庁内で考えようということですか。

夏目 とりあえず答申の結果を待とうと。

佐道 明示的な指示があったわけですか。

夏目 やめろとはいわなかったけれども、あの議論を踏まえてということだから、議論できませんわな。あれはどのくらい続いたのですかね。

伊藤 あれは、事務局はだれがやったのですか。

夏目 事務局というのはないのですけれども、伊藤圭一さんが面倒をみていました。

伊藤 伊藤さんの話にはたくさん出てきましたけれども。

夏目 伊藤さんが当時審議官か何かをやって、多少、時間的余裕があったのかな。

伊藤 方向付けはやはり多少、みんなの議論といっても自然に出てくるわけでは必ずしもないでしょう。

夏目 材料は提供するんです。今までの四次防までの経緯だとか、久保さんの発想はこうだという話は、ある程度材料は提供して議論してもらった。それが一つですよね。二番目に坂田さんが考えたのは、これも国民のコンセンサスにというのに多少関係あるけれども、『防衛白書』をつくって国民に防衛力の実態とあるべき姿というものを知らせようじゃないか。これは毎年つくるべきだということ、熱心に推進されたのです。それで、しばらく途切れていた『防衛白書』ができるんです。そして、もう一つは、それまで防衛問題というのは、防衛庁の法律にしても、防衛問題

一般にしても、内閣委員会が主委員会でした。内閣委員会というのは、防衛庁だけではなくて、その他もろもろの役所の問題も含んでいるから、なかなか防衛問題だけを取り上げて機動的にできないのですね。一方、外務委員会なんかにもときどき引張り出されて質問を受ける。しかし、防衛問題というこれだけ大事な問題が専門の常任委員会がないのはおかしいじゃないかというのが坂田さんの持論でした。この三つが坂田さんが来てぶち上げた構想です。

伊藤 いちばん最後のそれはどうなったのですか。

夏目 衆議院に安全保障特別委員会というのが出来た。

伊藤 特別委員会が。

夏目 常任ではないけれども特別委員会というのが出来て、その時坂田さんも委員長をやったはずですよ。長官をやめてからね。

佐道 その委員会が出来たのは坂田さんが在任中ではなかったですよ。

夏目 出来たのはおわってからかもしれない。ちよつとそこは記憶がないです。調べていただければわかるのだけれども、在任中にできたかもしれないし、あるいはおわってから。じゃあ、最初に委員長かな。そういう委員会が出来たら、やたら委員会が開催されるんだよね。

佐道 八〇年代に委員長をやっておられますよね。

夏目 やっているの？ じゃあ、だいぶあとだな。とにかく出来たんですよ。いずれにしても時間をおいてから。

伊藤 特別委員会が出来ると、やはり仕事はふえますね。

夏目 委員会を毎週一回とか二回とか開くと、今までなかった委員会ですからね。だいたい委員会というのは開催日が決まっているでしょう。外務委員会は何曜日とかつて。そのなかで防衛力問題に及ぶ日があれば、及ばない日もあるからあれだけど、安全保障委員会というのはとにかく絶対のうちが主役ですから行かない

わけにはいかない。この三つが坂田さんがやられたことなんです。これもあとで出てくるのだけれども、どうも見ていると、何かことをなすには、防衛問題としての課題を成就させるには右よりの人ではだめだね。三木・坂田なんていうコンビがいちばんいいんです。あれはだれも用心しないからなんだろうね（笑）。あの人のいうことならそんなに危ないことはないだろうというそこはかとな信用感があるんじゃないですかね。だから、「あれ？」と思うようなことが通っちゃうんです。

佐道 同じことを中曽根（康弘）さんがいったらだめだったでしょう。

夏目 そうだと思いません。三木さんだって、フオードと会談に担がれていっちゃったんだよね。要するに、もうちよつと安全保障の協議を頻繁に、日米協議を緊密にやろうじゃないかと。最初はだいぶ駄々こねていたらしいけれども、今までと同じだといって騙されて発言し、それがその後の日米防衛協力の一つのきっかけになっちゃうわけですよ。そういう意味では、やはり政治でも何でも時期的にどういいう人がいるかというのは大事ですね。織田信長の次に秀吉が出て、家康が来るように、やはりいい時期にいい人がいるということだと思っんです。

伊藤 まあ、それをうまく運用されたのが夏目先生だったのでしようけれども。

夏目 それはないけれども、坂田さんとは私は気が合ったんですよ。何かあると坂田さんは私を呼ぶんです。どうしてだかわからないんですけどもね。私は政治家はだいたい嫌いなんですけども、変わった政治家とはときどき仲がよくなります。

伊藤 このあいだは山中さんのことをおっしゃっていたじゃないですか。

夏目 山中さんはべつに仲がいいということではない、怒られなかったというだけ。

佐道 それは大事なことですよ（笑）、みんなが怒られているなかで。

夏目 坂田さんには本当に何かといつて呼ばれたんですよ。議員会館にも呼ばれて、一杯飲まされながら、ほかの人の悪口を聞き。坂田さんは大蔵省が嫌いなんですよ。来たときは、防衛庁を牛耳っているのは大蔵省だという意識があった。これを打破しなきゃいかんということだね。

伊藤 それはまずいんじゃないですか（笑）。

夏目 だから大蔵省から来た人は苦勞してましたよ。

佐道 じゃあ、次官は苦勞されて（笑）。

夏目 ただ、次官はすぐにかわつちやつたでしょう。

佐道 そうですね、本当に一年でおかわりになりました。

夏目 田代さんは一年だからまだいいけど、そのあとに来た巨理（彰）さんとか、そういう人が苦勞しました。

佐道 経理局長ですね。

夏目 何かあると、九段の議員宿舎へ呼ばれるんですよ。そのときに必ず私は入っているんです。さんざん説教をくらつてね。酒を飲みながらではあるんだけど。帰りにブランドイーか何かをもらつて帰つてきて、コロッとごまかされてね。

佐道 坂田さんはけつこうお飲みになる人ですか。

夏目 飲みます。一人でしゃべっていますよ。あぐらをかいて、ナイトガウンか何かを着て。あの人は案外おしゃれなんですよね。

伊藤 何の話をするんですか。

夏目 防衛問題。こうあるべきだとか何だとか。極端なことをいうと、上司のつくつた防衛白書を読み直して、書き直せというんですよ。「それはちよつと無理です」といつて断つたんですけどもね。幾ら何でもそんな失礼なことではできませんから。

伊藤 気に入らなかったわけですか。

夏目 気に入らない。いえないものだから、私に書き直せと（笑）。

伊藤 ハハハハッ(笑)、結果はどうなったのですか。

夏目 結局、だれかほかの上司が読んで直したんじゃないですか。私もそこはちよつと。多分、前に話に出てきた、防衛課長をやった大西という審議官がいましたでしょう。その方が読んで、手直しされたと思います。

佐道 原案が気に入らなかったということですか。

夏目 そうそう。

佐道 どういうところが気に入らないという話でしたか。

夏目 どういうこととおっしゃらなかったけれども、とにかく全部。文章がヘタだとか。

武田 大蔵省から来た人が書いたんじゃないですか(笑)。

夏目 書いた人は大蔵省から来た人ではないですよ。当時審議官をやっている人で、人事院から来た人で、防衛庁のなかではわりとアカデミックな人です。きつと難しかったんじゃないですか。大学の学位論文みたいなのを書いたんじゃないですか(笑)。

中島 坂田さんは突然ボンと防衛庁の長官になられて、防衛とは縁がなかったところを歩まれてこられたのに、ご自分の防衛に対する熱い思いを語られるというのは、これまたどうしてだったのでしょうか。

夏目 政治家の方というのは皆さん非常に勘がいいですよ。ここで俺が今何をしたらいいか、しなきゃいけないのかと直面目に考える人もいます。それからやはり、「どうせ一年か二年しかないのだから、ここで一発、俺がやったというものをつくりたい」という名誉欲みたいなものもあるでしょう。まあ、政治家の心境というのは私にはわかりませんが、総じて政治家の皆さんにいえることは、頭のいい悪いは別として、動物的嗅覚というか、直感というか、そういうのはすごいですね。何をやったら格好いいか、何をやったら皆から注目されるか、そういうところをバツバツとつかむのはうまいですよ。とてもわれわれ

のついていけないようなことがボンボン出てきます。

伊藤 でも、今おっしゃった坂田さんがやった三つのことというのは、それほど世の中の注目をひいてというものでもないでしょう。

夏目 そうかもしれないけれども、それまではできなかったことなんです。例えば『防衛白書』というのはその前に中曽根さんが一回つくったんですよ。しかし、あんまり評判もよくないし、だれも注目もしなかった。それを坂田さんが、やはりこういうものをつくって、しかも国民にわかりやすいものでなければいけません。国民が読むに耐えるものをつくりたいという。そのへんが多分、文章を直すというところへつながったのだと思いますけれども。

佐道 防衛庁のなかの方にとつての意識としてはどうなのでしょう。『防衛白書』というのは、中曽根さんのときよりも坂田さんのときにできたのが最初というような意識。

夏目 いや、最初とはいわない。やはり二回目ということですけども。しかし、坂田さんが非常に強力だったから、よりまっとうな白書にはなつたと思います。そしてその年の白書は別としても、それから毎年とにかくつくついているのですからね。私が三回目か四回目につくっているのかな。

佐道 中曽根さんのときには一回でおわり。

夏目 そのあと何年かあいています。しかも、薄っぺらなものでしたでしょう。

佐道 そうですね。

■「防衛を考える会」

伊藤 私的諮問機関としての「防衛を考える会」は、人選なんかはだれがやったのですか。

夏目 これは多分、坂田さん御自身が。坂田さんという方は文教

族とか何とかといわれるから、学者とかそういう人たちに非常に顔が広いんです。もう一つは、坂田さんの秘書をやっていた人に渡瀬（憲明）という人がいて、その後国会議員になって病気で死んじゃうのですけれども、これがまた坂田さんに輪をかけてくらしい行動力があるというのか、坂田さんの気持ちに付度してパッとやるのがうまいんですね。顔も広いし。そういう人たちのつてを使ったのだと思うのですけれども。役人からああいう人選が素直に出てきたとは思いません。私は人選はノータッチです。

伊藤 そういう懇談会というのはコアになる人を。

夏目 それは荒垣秀雄さんだったと思うんです。名簿は知っているんでしょう？

伊藤 はい、わかります。やはりそういうときには、だれかに狙いをつけて、この人を中心にといい。

夏目 多分、だれか一人二人頼んで、この人が引き受けてくれたというので、だんだんまた輪を広げていくのだと思います。諮問機関のような考える会とは別に、また坂田さんは大学の先生を集めて勉強会をやるんですよ。そのあとですけれども。それはどういう人かという、それはあんまり表面に出ていませんが、高坂正堯、それに今平和・安全保障研究所の理事長をやっている渡辺昭夫、公文俊平、それからあとはだれがいたかな。

佐道 佐藤誠三郎。

夏目 佐藤誠三郎、このくらいかな。この人たちと定期的に勉強会を開いて、これは私がお手伝いをした。

伊藤 それに参加もしておられた。

夏目 参加もしていました。

伊藤 どういう議論をしていたのですか。

夏目 それは大綱と同じような議論でした。もう一つは、日米関係の持つていき方とか、そういうこと。主として吸収するよりも、そういう人たちに防衛力が今こうこうだと。それまでは、防衛に

関する先生というのは国際政治にしても何にしても非常に左寄りの先生が多かった。それではだめだと。やはりもっと中立的で本気になって日本の防衛を考えるような学者を育てたいというのが坂田さんの気持ちで、だから若手の先生が多かったのでしょうか。高坂さんなんかはそうでもないけれども。そういう人たちを集めて啓蒙した。効果はあったと思いますよ。渡辺さんなんかはそれからべつたりでしょう。

伊藤 そうですね。

佐道 防衛庁側は先生のほかには。

夏目 決められた人はいません。ときどき制服の人を呼んだりしたけれども。制服の、防大の一期生、二期生みたいな若手を何人か呼んでいました。

伊藤 それは定期的にはですか。

夏目 定期的というか、月に一遍か、二月に一遍くらいやったでしょう。

伊藤 いろんな防衛庁のなかの人を呼んでヒアリングをやったりなんかもしたわけですか。

夏目 していました。

佐道 場所はどこらへんで。

夏目 ホテルを使ったり、防衛庁の会議室を使ったり、そのときによってでした。

佐道 原則、長官と先生とで。

夏目 あとはそのときに呼ばれた制服の人達、今までだれを呼んだかという、多分、陸は志方（俊之）とか。海はだれがいたのかな、覚えがないな。四、五人いますよ、陸海空それぞれ二、三人ずつ。一期、二期、三期ぐらいの人が、当時は二佐か三佐くらいだったと思います。責任ある幕僚長とか部長とかではなくて若手の人。

佐道 一応、将来を期待されているような。

夏目 そういう人たちを呼んでやっていました。

伊藤 そういのは防衛庁のお金でやるのですか。

夏目 金は防衛庁ですな、もちろん。大臣の会議費か何かでやったのだと思いますよ。僕も金のことまで覚えがないけれども。お茶を飲むくらいですから、たいした金ではないですよ。たまに、一年に一遍くらいは食事をしたりしたかもしれないかもしれませんけれどもね。

伊藤 そういのは記録を残すのですか。

夏目 それは記録を残してないね(笑)。

武田 けっこうな頻度でやったのですか。

夏目 月に一遍ときめられてはいいませんが、二ヶ月に一遍かはやっていました。

佐道 ノートテイカーもいなかったわけですか。

夏目 いなかったですね。

伊藤 「防衛を考える会」のほうはどうですか。

夏目 それはきちつと書記役もいて、結果報告もパンフレットになつてできているはずですよ。あるでしょう？

佐道 あります。

夏目 もちろんそれは要旨だけだけどね。皆さんの意見を集約し、まとめて圧縮したものですけれども。

武田 「防衛を考える会」と、今の勉強会は全然違うものなのですね。

夏目 全然違いますね。

伊藤 メンバーも。

夏目 メンバーも違います。ダブっている人は一人もいない。

佐道 高坂さんがダブっています。

夏目 高坂さんはダブっている？

伊藤 こちら(防衛を考える会)に入っていました。

夏目 ああ、そうか。じゃあ、ダブっていたな。あの方はそういう関係の学者のなかではボスだったからね。

伊藤 坂田さんは高坂さんとは親しかつたのでしょうか。

夏目 でしょうね、きつと。坂田さんは大学の先生に顔見知りが多いから。文部大臣をやったときに東大の安田講堂の事件があったじゃないですか。あの子の学長なんかとも成城時代の朋友だからね。

佐道 加藤(一郎)さんですか。

夏目 坂田さんは学者には顔が広いんですよ。

佐道 「防衛を考える会」には先生は顔を出したりとか。

夏目 出してはいました。だつて会議には陪席者がいっぱいいるから。制服の人もいましたしね。

伊藤 ああ、そうですか。だいたいどんなことを議論しているかというのとはわかつてはいるわけですね。

夏目 だいたいわかつていました。

伊藤 だいたいこういう答申になると。

夏目 私はあんまり記憶にないけれども、あつたのは、その会では非常に久保発想に近い議論がなされ。それが皆さんの納得するような話になつていったと思います。

中島 それは偶然久保構想と会議の議論の内容が似ていたということでしょうか。それとも、そういうふうにつ導するようにされたのでしょうか。

夏目 誘導したつもりはないのですけれどもね。それは、資料としては久保さんみたいな発想の人もいますよということを紹介はしているのだけれども、べつに誘導はしてないんです。ただ、さつきも申しあげたように四次防の破綻ということがあつて、これからの防衛力をもしやるにしても、そんなに大きなものも考えなくてもできないんじゃないかという諦め感みたいなものがあるから、そういうものがなるとなして先生方に伝わったということはあると思うんです。久保さんの論文というのは、防衛庁のなかでは冷たくあしらわれたけれども、世の中一般の人にはわりと通る

議論でしたからね。

佐道 そうですね。特に研究者とかには非常に。

夏目 学者なんかにはドンピシャみたいな議論ではあったんです。

佐道 高坂さんご自身が非常に似た議論をされて。

夏目 近いんですよ。どちらがまねしたかよくわからないのですけれども、拒否能力とか、ナイアルパワーとかいうのは同じようなものなんですね。

佐道 ほとんど同じというか。この会は、実際、研究会の進め方はどういうふうに関与されていたのですか。例えば、どなたかが報告をされるとか。

夏目 私が記憶にあるのは、例えば、「きょうは、陸上自衛隊が現在どういう規模で、どういう能力を持って、弱点は何なのか、そういうことを聞かせてくれ」というような話があつて、そういう話をする。それから、もちろん最初からやらないといけないんですよ。「防空とはどういうことなんだ」といったら、「防空というのは、戦闘機がいて、ミサイルがいて、どうのこうの」という話から最初はしていくわけです。

伊藤 それは意味があることですね。いちばん基本的な問題ですからね。

夏目 要するに坂田さんは、とにかくそうやって議論していただいて、皆さんがこうだと思つたものを表に出して、そいつを装甲車に見立てて、その後から鉄砲を持つてあとをついていけばいいやと(笑)。

佐道 それはやり方としてはうまいですよ(笑)。被害は確かに少なくてすむ。

武田 非常にわかりやすい(笑)。

佐道 これは三月に始まつて九月に答申が出るのですけれども。

夏目 あ、そうですね。

佐道 はい。施設庁長官時代の久保さんがときどき顔を出してい

たということは何つたのですけれども、ご記憶にございますか。

夏目 出ておられたかもしれない。あるいは、久保さんの議論を聞きたいということがあつたかもしれないですね。後半は久保さんが次官になって戻ってきたのですね。だから、そういうこともあつて顔を出したかもしれません。あるいは、坂田さんが久保さんを紹介しているのかもしれないですね。坂田さんというのとはもとは久保さんの発想に非常に近い方でしたから。この「考える会」を始める前も、さつきいったように、だれもがそういう感じを多少持つた時期でもあつたから、久保さんの考え方を買つてはおられた。

伊藤 個人的にも関係があつたのですか。

夏目 いや、それはないと思います。

佐道 防衛庁側のメンバーとしては、常時どういう方が出ておられたのですか。

夏目 常時出ていたのは伊藤さんくらいじゃないのかな。あとは、広報課長とか、私が防衛課長とかでわりとだいたい出ていたのではないかと思います。各幕の防衛部長とか、そういう人も何人かいました。とにかく十数人はいつも陪席というか、話を聞いていたと思ひました。

伊藤 陪席というのは話を聞いているだけですか。

夏目 質問があればだけでも、聞いているだけです。説明者は別ですよ。そのときのテーマとしてしゃべるといふ人は別だけど、われわれその他大勢は聞いている。

伊藤 特に何かいわれたら。

夏目 そういふときはあつたかもしれませんが。

佐道 局長クラスではあんまりいらつしやらなかったのですか。

夏目 局長クラスはあんまりいなかったように思います。

佐道 例えば丸山さんとかは。

夏目 丸山さんが年じゅうその話に出ていたという記憶はない

れどもね。伊藤さんに聞けばわかると思います。伊藤さんが仕切っていたからね。

佐道 「防衛を考える会」のメンバーで、先ほど中心に荒垣さんが考えられていたという話でしたけれども、実際にこの研究会が始まって議論をリードされていくような方というのは印象にありませんか。

夏目 一人、やたらしゃべる人がいたな。名簿を見ないとわからないな。

武田 持ってくればよかったですね。

夏目 いや、名簿はあるんです。どこかに出ていたな。この本『安全保障』田中明彦著もいい加減なんだよね。

一同 アハハハハハッ(笑)。

夏目 この本で見たんじゃないかなあ。最近、だんだん活字を見るのが億劫になってきて(笑)。坂田さんが出てきたこのへんですよね。わりと、「おや?」と思う人がよくしゃべっていましたよ。

武田 ここにありました。

夏目 よくしゃべったのは議長の荒垣さんは別として佐伯喜一。これは半分防衛庁の人間ですからね。それから、村野賢哉というケン・リサーチ社長、知らないけれども、こんな方がよくしゃべっていました。多少は防衛問題についてのある程度予備知識のある人がどうしても声が大きくなりますよね。

伊藤 佐伯さんは半分防衛庁だといわれたのですけれども、

夏目 いや、昔防衛研究所の所長をやったからね。防衛庁の参事官もやったんじゃないですか。

佐道 防衛問題に関していっぱい書いておられますよね。

伊藤 あの人は経企庁ではなくて……。

武田 佐伯さんは安本(経済安定本部)です。

夏目 昔、防衛庁へ来る前はね。

伊藤 安本で、たしか国力総合……何かをやっていたらろう。佐道 東大の経済か何かを出て、ずっと計画経済か何かの計算をやっておられたのですよね。

伊藤 そうそう、だから、いざという場合に日本の国力あるかという、そういうのをやっていたみたい。それで、安本のなかでちょっと特別なことをやっていたと。

夏目 安本というのは特別というか、ちょっと話はかわつちゃうけれども、私が国防会議にいたときに安本から、「陸自関係の資料が倉庫にいっぱいあるから引き取ってくれ」と言われましたね。自衛隊創設時の資料が山ほど出てくるんですよ。

一同 ヘエーッ。

夏目 経企庁です、当時。

伊藤 それはどうなりましたか。

夏目 多分、国防会議でみんな引き取って、国防会議の倉庫に入れたはずですよ。その後は知らない。

中島 国防会議に倉庫があるのですか。

夏目 倉庫ってないから、どこか物置みたいな部屋をとって。

佐道 国防会議が安全保障会議になって。

夏目 その後、今あるかどうか知りませんよ。

伊藤 いやいや、追いかけてみましょうよ(笑)。

武田 安本に自衛隊の資料があったのですか。

夏目 自衛隊って、初期の草創期の書類ですけれども。

伊藤 ずっと佐伯さんあたりがそれをやっていたのでしょうかね。

夏目 そうかもしれません。ちょっと奇異な感じがしましたけれども。

佐道 長期戦略を立てるときの国力の計算とか、そういうのをずっとやっていた関係はあるでしょうね。

伊藤 宮崎勇さんのオーラルのときに、しつこく、しつこく宮崎さんに聞いて、「なんで佐伯さんは」といったら、「いやあ、ちょ

つと別室みたいで、私は立ち入れない」といつていました。

夏目 そうかもしれませんね。

佐道 国防会議になっても、二次防とか三次防、特に二次防でも迫水（久常）さんなんていう経企庁長官とかはけっこう防衛問題で発言されていて。経済計画が長期計画にいろいろ影響を与えますので。年次防のつくり方について。

夏目 多分、それが見本みたいになったのでしょね。

武田 なるほど、つながるか。

夏目 まあ、それが今あるかどうか、今の連中が知っているかどうかは知りません。国防会議でも二十年も昔の……、もつとか。

伊藤 もつですよ。

武田 倉庫つてどこにあるのでしょね。

夏目 総理府の建物のなか。地下が一階か、どこかの部屋に。

伊藤 どこかにうずもれて。

夏目 だから、移ったときとか部屋を空けたときに処分しているかもしれないんだけどね。

伊藤 でも、追いかけてみる価値があるね。

佐道 そうですね。

夏目 まあ、聞いてみたらいい。俺に聞いたなんていわないでね（笑）。

伊藤 しかるべきところから（笑）、いろいろわさがありますといつて行きます。

佐道 いいことを聞きました。

夏目 佐伯さんは防衛庁も長いし、当時から理論家として通つていた方ですよ。

佐道 野村総研に移られるわけですね。

夏目 移つてからも非常に熱心ですからね。

佐道 防衛庁自体ともけっこう関係を深くしておられたわけですか。

夏目 野村総研に行つてからも僕らはときどきお世話になつた記憶があります。

伊藤 牛場（信彦）さんなんかも発言なさいましたか。

夏目 したと思うけれども、あんまり記憶にないですね。

武田 もう一つの勉強会のほうは何か名前みたいなのがあったのですか。

夏目 べつにないですね。あれは坂田さんの学者好みが出て。

伊藤 それはあとにうんと影響しますね。

夏目 あれは今、いろんな学者を輩出していますよ。高坂さんの仲間や弟子みたいなのがいっぱいあちこちの大学でおつて、国際関係法とか何とかの権威者になっていますよ。僕は神戸まで講演に行つたんだもの。今のだれだつけ。

中島 五百旗頭（真）先生ですか。

夏目 五百旗頭さんなんかがいるとき。あれも高坂さんの仲間か弟子でしょう。年次的にね。あの辺の関西周辺の大学の先生を集めて三時間くらい講義したことがある。

武田 先生がですか。

夏目 うん。講義というのはおこがましいけど。

伊藤 それはいつごろのことですか。

夏目 私が防大へ行つてからです。要するに昔のことで、現役時代の日米関係で。そのときはずいぶん出ているでしょう。そのときにしゃべつたことと同じようなことがいっぱい書いてあるんですよ。

佐道 三木さんのブレインだった平沢和重さんもメンバーに入つていますね。

夏目 平沢さんがしゃべつたというのはあまり記憶にないですね。しゃべつたんでしょ、きつと。NHKでしゃべるのが商

売だからね。

伊藤 そうです、そうです。

佐田 元外務省で外交官だったのですけれども。

夏目 外務省なんですか。

伊藤 松岡派（松岡洋右寄り）の外交官ですよ。

■日米防衛協力の問題

夏目 ああ、そうですね。あんまり知らないけど、荒垣さんとか、佐伯さんとか、よくしゃべってました。佐伯さんは声がでかいからね。坂田さんという方はそういう人で、最初はそういうこと、すなわち防衛力整備については国民の声というか国民の理解が必要だということいろいろなことをやっていたのが一つ。後半は、むしろ日米防衛協力が頭が行っちゃうんです。それは期せずして行っちゃうんですけどね。べつに自分で意図的にこつちをやるというのではなくて、突発的な事故でそうなっちゃうんです。事故という大変だけど、上田哲議員ですよ。

中島 それは本当に上田さんの質問がきっかけだったのですか？

夏目 それまではなかったんです。

中島 例えば、丸山防衛局長あたりはどのように思っているんじゃないでしょうか。

夏目 そのことについて？ 事の起こりからいいますと、……まだそっちへ行つては早いのか。まあ、また戻ってくればいいんだね。「坂田長官が着手した二つ目の問題」と書いてあるけれども、「着手した」という言い方が（笑）。着手には違いないんだけど。日米防衛協力の問題で、ここ（質問事項）に、「社会党の上田哲議員の質問に答える形で、日米防衛協力を具体的に検討する必要性に言及し、その方向に持っていくわけですが、これは丸山防衛局長が熱心であったといわれています」と書いてある。そのとおりです。五十年のある日、上田哲議員の質問は二月か三月の予算委員会だからね、とにかくそのころだな。

伊藤 質問は事前通告がありますよね。

夏目 あったかなあ、よく覚えがない。密約があるかないかという話が事前にあったかもしれない。日本と、フィリピンのスービックベイと、グアムの三角地帯を日本の防衛海域とするという海域分担の密約があるというわけです。それを知っているかという。そんなものはないですよ。そう、予告があったかもしれない。予告があつて、そんなものないんですよ。それで答えるのは簡単なんです。事実ないのだけれども、そのときに丸山さんと坂田さんと私もいたのですけれども相談して。その前にこういう背景があるんです。私は防衛課長として、防衛力整備だけではなくて、各自衛隊の防衛計画というものを所掌しているんです。防衛計画というと、防衛力整備ではなくていわゆるウォー・プラン。いざことがあつた場合にどう自衛隊が動くかといことを決めた防衛計画を毎年つくっていくわけです。

伊藤 昔の年度作戦計画というやつですね。

夏目 そういうものをつくっている。それは、正直いつてあんまり現実的なものではないんですね。だって、弾がないって（笑）。海原さんの話じゃないけど、それが三ヶ月も戦争を続けるなんていつて。まあ、そういうような矛盾はいっぱいあるけれども、とにかくそういうものをやっている。そのときに見ていると、「ここからあと米軍の支援を待つ」というところで切れちゃうんです。支援を待つといったって、支援が来るのかわからない（笑）。具体的なものがあるかないかという、そういうところというのは、もちろんまったくないのではないですよ。政府間で公式にきめたきちつとしたものはないということです。いわゆる現地軍同士、在日米軍と陸上自衛隊なり海上自衛隊でいろいろ話し合っている。それは、スタディーはある。だけれども、計画としてきちんとオーソライズされたものとしてはなかったわけです。そこで坂田さんといったのは、「そういうものが本来必要じゃないか。この際、ひとつぶち上げようじゃないか」ということにな

ったわけですよ。

武田 事故ではないですよね(笑)。

夏目 だけど、そんな質問がそのときに来るとは予想していませんから、日米防衛協力を早急にやらなければという具体的な動きがあったわけではありませんから。それで、坂田さんが滔滔とぶち上げたんですよ。「現在そういうものはない。ないけれども、ないのがおかしいので、本来はそういうものを持たなければいけない。早急にひとつ日米間で協力してそういうものをつくるように努力します」と。

伊藤 (笑)、じゃあ、上田さんも。

夏目 上田さんも、「えらいことを聞いてちゃった」と(笑)。社会党にはあるんですよ。質問の仕方を間違えると、防衛庁、自衛隊を一步前進させるから、質問の仕方というのは神経を使ってやらないとだめだというのが彼らは暗黙にあるのですけれども、まさにその見本になった。それで当時は大問題になったんですよ。しかし、それがもともとなって、さっきの三木―フォードの会談のときに、効果的な日米安保条約の運用というものを緊密に協議する必要がありますがあるじゃないかという話になり。

伊藤 その「なり」というのはどういうことですか。

夏目 そういうことを答えたということをおまえて、その後三木さんがフォードと会うことになったときに、その一文を入れちゃうんです。最初の文章にはそんなものはなかったんです。

伊藤 それはだれが入れるわけですか。

夏目 それは防衛庁が入れました。坂田さんが。

伊藤 そうですか。

夏目 三木さんは躊躇したんですよ。「俺がおまえの先棒を担いで勇ましいことをいうのかい」「いや、そうじゃない。それは従来の日米安保条約の継続線上の問題だから、たいして新しいことをするわけじゃないんだよ」と(笑)。三木さんはそれを共同声

明か何かでしゃべったのかな。

伊藤 うまいですね(笑)。

夏目 そのあとすぐ、坂田―シュレジンジャーで、具体的なそういう場をつくるうじゃないかということでもトントンと話が。

伊藤 これは坂田さんが向こうへ行つたわけですね。

夏目 いや、シュレジンジャーが来たんですよ。

伊藤 あとから今度は自分のほうが行くわけですね。

夏目 それで、そういう話になって、日米防衛協力の話が進んで、防衛協力小委員会というのができるわけです。それは一年くらいたつてからできるのだけれども、それはそのときに芽が出たわけです。それは坂田さんの功績なんです。

伊藤 外務省はどうなのですか。

夏目 外務省は、当初は正直いって非常に心配していました。嫌がっていたかも知れません。ということは、どうしてもそういうことになるかと防衛庁が正面に出ますでしょう。外務省がちょっと脇役に寄らないとならないといったような話になることが一つあるんですね。外務省というのはそういうところですから。

伊藤 まあ、わかりますけれども。

夏目 だけど、これも人の名前は忘れたのですけれども、そのころは東郷(文彦)さんというアメリカ大使がまだ次官でいたのかな。

武田 このころは次官ですね。

夏目 東郷さんが次官になって話がコロッと変わるんです。東郷さんは非常に理解があった。この話は絶対に推進すべきで、防衛庁を絶対ディスカレッズさせるようなことがあつてはならないということをお部下に厳命するんです。外務省も、それはしようがないということ、やろうということに。だから、東郷さんの前のときはあまりいい返事ではなかった。協力的ではなかったですね。伊藤 今度は在日米軍との関係ということではなくて、政府と政

府の関係ということになるわけですね。

夏目 もとは、政府としてオーソライズした上で現地軍が話しをするのはいい。だけど、その根拠をつくらうじゃないか。それまでは、日米安保協議委員会とかあっても、施設経費の何だとかいうレベルの、外務大臣や防衛庁長官が集まってもそんなことをやっていたんですよ。それではないんだ、本当の防衛の中身をしゃべることが大事じゃないかということ。今の話に発展していくわけです。しかし外務省だけが反対していただけないんです。防衛庁のなかにも異論があつたんです。

伊藤 何で？

夏目 理由はわかるんですよ。まだ日本はアメリカとそんなまともなウォー・プランみたいなものを相談するようなところまで成長していないじゃないか。将来いたずらに大きな負担を背負うだけになるんじゃないかと。それから、日本の集団自衛権とか専守防衛とかいった原則からはみ出すことにならないかとか、そんないろんな反論がありました。だれがいちばん反対したと思いますか。

佐道 久保さん。

夏目 久保さんなんです。

伊藤 エーッ。

中島 不思議ですね。

夏目 久保さんに叱られたんです。「おまえがついていて何をいっているんだよ」といつて。当時は施設庁長官だったかな。

中島 久保さんが反対された理由は、いま先生がおっしゃった点ですか。

夏目 今いったようなことだと思えます。施設庁長官としてだから、施設庁長官の部屋へ行ったような記憶があるから、久保さんは反対です。

中島 日米防衛協力を緊密化することそのものに対して久保さんは消極的でいらつしやつたのですか。

夏目 丸山さんにいわせるともつと端的なんです。私はそんなことをいえる立場じゃないからね。丸山さんにいわせると、「ジエラシーだ」という（笑）。

伊藤 ハッハッハッハッハッ（笑）。

夏目 「あれはジエラシーだ」という。まあ、それはちよつとオーバーだけど。しかし、久保さんも根は反対じゃないんですよ。立场上、あの人は本来そういうことが大事だと思つているんだけど、軽率にアメリカとそんな話をしたことに對する危惧、懸念を持たれたのでしょね。それはまあ、先輩として、ある程度様子を聞いていないで突然そういうのを知るから、あたりまえといえはあたりまえかもしれないし、前もつて十分相談をすべきだったのかもしれないですね。

伊藤 俺に相談がなかつたと（笑）。

夏目 だけど、次官ならともかく、施設庁長官ですからね。

伊藤 施設庁長官は今まではかなり主役だったわけでしょう。

夏目 だけど、人間というのは、かわつちやうとそういうもんです。

佐道 久保さんの場合には、施設庁長官でありますけれども、ほぼ間違いなく戻ってくるだろうとご本人も。

夏目 それはあつたと思います。だから、丸山さんもいい度胸しているんだよね。もちろん私は説明に行つていますよ。行つて、叱られたような記憶があるから。あ、事後だったかな、前かな。あるいは国会答弁の後かもしれないですね。

佐道 夏目先生ご自身はどういうふうに思つていたのですか。

夏目 私は、「やれ、やれ」といつた。ちよつどいいチャンスだというのは、私もそう思つていました。

佐道 防衛庁内の世代的な考えの違いというのはございましたか。審議官とか局長とか、そこらへん。

夏目 正直いうと、当時、久保さんだけではないですよ。久保さ

んはもちろん反対だったけど、官房なんかも反対でした。当時の官房長以下。

中島 国内政情を恐れていることですか。

夏目 それもあるのでしょうか。それやこれやあったのでしょうか。けれども、「防衛庁防衛局が独走しているんじゃないか。だいたいようぶかい」というのがあったかもしれないですね。

伊藤 これもジェラシーかもしれない(笑)。

武田 そうですね。

佐道 先生は防衛課長として外務省とも直接折衝されたのですか。

夏目 あります。

伊藤 結局、それをやることになるかと防衛課長が中心になるでしょう。

夏目 いや、当分はもうそれで話はおわりです。あとは地道な話です。現地軍との間にどういう委員会をつくるのか、どういうことを勉強していくかというのをまた二、三年かけて勉強していくわけですから、それですぐにどうこうというわけではないです。ただ、そういう道を開いたというのは坂田さんの時代だったという事です。

中島 日米防衛協力の道を開くことについて、各幕の方との調整はどのようにされていたのでしょうか。

夏目 各幕の賛成はもちろん、あたりまえだと思っているから。「今まで何をしていたんですか」という態度ですからね。自分たちは自分たちでやっているわけですから。

伊藤 現実にはやっているでしょう。

夏目 そういうもののお墨付きがもらえるというのは文句のいいようがないから。

佐道 各幕間の温度差というのはいかがですか。

夏目 温度差というのは多少あったかもしれませんが。だけど、基本的に反対はないです。ただやはり、いちばん賛同の意を表し

たのは海上自衛隊。

伊藤 それはそうだな。まあ、空だつてそうだと思いますよ。

夏目 日米間の軍のつながりというのは海軍がいちばん密接ですから、どうしてもそうなりますよね。

武田 でも、うまくことが運んでどういうご印象ですか。やはり、「やったー」という感じですか。

夏目 それほどでもないけど(笑)。

武田 (笑)、そうですか。

伊藤 夏目先生は、そうはおっしゃらない(笑)。

夏目 とにかく、それも坂田さんだからできたと思うんです。あれが、中曽根根官みたいな勇ましい人だったら、国会で総スカンを食ったと思います。

佐道 ご印象として、国会も思ったほど紛糾しなかったというか。夏目 思ったほどね。やはり、それは坂田さんの人徳なんでしょうね。

伊藤 その答弁に対してですか。

夏目 答弁に対してはもちろんウワーツとなりましたけれども、それでもどうのこうのというのはないですからね。

武田 先生はそのときに後ろにいたのですか。

夏目 もちろん。

伊藤 社会党もえらいことをやっちゃったなあ。

武田 そうですね、やっちゃいましたよね。

夏目 ちよつと答弁をチョンボして、坂田さんが間違えて答弁してね。原稿を二回、三回書き直したのを、最初のやつを読んじやったかなんかして、あとでそつと事務局へ行ってすり替えたりして(笑)。

佐道 では、いま残っている議事録になつていいるものは間違えてないやつですか。

夏目 (うなづく)

佐道 じゃあ、当時のフィルムを見ないと(笑)。

武田 何が間違つたのでしょうか。

夏目 覚ええないね。たいしたことないけど、海域の分担が必要だとかそんなことをいったのかな。

佐道 ちょっと先に行き過ぎちゃつたのですか。

伊藤 あれは本当、いろいろ聞いてみると、議事録を入れ替えるというのがあるみたいですね。

夏目 あれもやったら大変ですよ。怒られてねえ。私は二回ぐらいやつているけど(笑)。うるさいから、なかなか素直にに応じてくれませんしね。

伊藤 それは、素直に応じたら大変ですよ(笑)。

佐道 そうですよ(笑)、書き換えばかりになつちやつたら、資料的な意味がなくなつてしまいます。坂田さんは省内的にもきちんと掌握しておられたというか。

夏目 そういふ方で、もちろん非常にハト派的な印象ではあつたけれども、あれが多分、普通のときに来て坂田さんみたいなこと、久保さんみたいなことをいわれたらあれだけど、何となくみんな四次防で自信喪失しているときだから、「ある程度仕方がないか」みたいな空気があつて、坂田さんに対する大きな反発はなかつたです。むしろ、日米防衛協力なんかの実績を上げているほうが大きいですから。

佐道 坂田長官が日米防衛協力に進もうといふことで、丸山局長が熱心にするといふことで、いろいろ考えは違つたりするけれども、「まあ、やむをえんか」といふ。

夏目 防衛庁のなかには、大臣がそうだから、陰でコソコソいって表面に出るようなことはなかつたです。

伊藤 まあ、心配といふことでしょから、反対といふことをいふわけではないのだから。

夏目 反対しているわけではない。ただ、「この時期にやつてだ

いじょうぶか。将来を考えて自信があるのか。アメリカから何をいわれるか、負担ばかり背負うんじゃないか」と。まさにそういうことは私が、局長、次官になつてから、これが代償なのかなという感じがしたけど。

伊藤 防衛分担の問題ですか。

夏目 防衛分担の問題にしてもそうだし、防衛力の増強にしても、彼らは勝手な注文をいつてきますよ。

佐道 八〇年代になつて厳しくなつて。

夏目 カーターやレーガンあたりになつてからだけだね。

伊藤 まあ、いいたいことをいわれても、こちらだつていいたいことをいえばいいわけでしょう。

夏目 そうそう。

伊藤 先ほど、「防衛を考える会の結論が出るまで」という話でしたけれども、しかし、新しい防衛力整備計画は準備はしていたのでしよう。

夏目 勉強はある程度していたんです。細々と議論はしてました。久保さんの議論はただだけないけれども、ある種の部分はやはり久保さんのいうとおりだなと。とにかく、今まで制服やわれわれが考えていたような防衛力整備というのは、望むべくして不可能なのだ。それは、人間的にも、経費的にも、政治情勢から見ても、何から見ても不可能であるといふことは、あと十年かかつたからといつてわれわれの所望する防衛力はできそうもない。青天井みたいにとどこまで行つてもきりが無い。またいつまでたつても達成できないという飢餓感みたいなものもどこかにあるわけだし。片方から見れば、どこまで膨れ上がるんだ。経費はほとんどふえていくといふふうな批判もあるし。そういうことを考えたときに、やはりああいう計画はもう無理だな。何とか現実的な枠の中で、制服の理論を納得させるようなことつてできないものかといふことは議論していました。

■「防衛を考える会」の提言

伊藤 だいたい「考える会」と平行して。

夏目 平行してはやっていただけでも、あんまりおおっぴらにできませんから、結論を待つてということでありましたから。

伊藤 でも、だいたい向こうの様子がわかっているわけですから。

夏目 それはわかっていますね。そういう事務的な議論はしていませんよ。たしか、五十年の夏ごろには、「防衛を考える会」の結論が出なかったところかな、一応、参事官会議か何かにかけてますね。これからの防衛力ということはだいたいこんな方向でまとめていっていいのだろうかという叩き台みたいなものをね。そのときには、「常備すべき防衛力」として、今の「基盤的防衛力」に近い発想なのですけれども。ただし、脅威対象というものを生かしていました。「防衛を考える会」の前かな、そういう妥協の産物みたいなものをやっていたら、それを防衛を考える会の結論が出るまで待とうやというのが田代次官の決定でした。

伊藤 でも、だいたい固まっていた。

夏目 まあ、だいたいこんなところでいいんじゃないかということとで大方の了承を得たのですけれども、だけどこれはあちらがやっているから、あちらの結論が出たところで一緒にやるということとで、そのころには私には私には関係ない。

伊藤 そうですか。

佐道 異動されたということですか。

夏目 そうです。

佐道 同じ九月に総務課長に。

伊藤 あ、そうだ。九月か。

佐道 しかし、「考える会」の提言はもちろんお読みになった。

夏目 もちろん。

佐道 やはりご想像のとおりだったという。

夏目 そうですね。予想どおり、ほとんど久保さんの発想に近いものですね。ただ、やはり非常にうまいことをいうのは、拒否能力だとか、いざというときに増強し得る下地を持てとかそういうことについては、久保さんもちよつとそういうことをいつていたけれども、だいたい久保さんの発想に近いものですから、規模的にも納得のいくような方向だし、まあ、こんなところかなという感じはしていました。ただ、最後のところは最後までめめましたよ。脅威対象ではなくて基盤的防衛力というのは。一度は基盤的防衛力が消えたんだけど、また回答で基盤的防衛力が生きちゃうんですね。あそこがわからないんだな。もつとも、大綱をつくったときには久保さんはもういないのかな。

佐道 決まったときには次官をやめていたのですね。だから、まとめるにあたっては。

夏目 いたのでしょうかね、きつと。それで生き返ったのかもしれないですね。

佐道 そのあとの防衛力整備については、この「防衛を考える会」の提言が出て、坂田長官がそれをもつてということをおっしゃっていたということでしたら、久保さんの方針で行くことになるのだからうなづかぬ。

夏目 そういうことですね。ただし、今いった脅威対処でないということについては妥協しているはずですよ。大綱でも、「限定的、小規模の侵略については何とか」というふうには、脅威対処の表現は生かしたまま、規模を圧縮しているという感じだね。あと、政治的なリスクだとか何だとかは、エキスバンド能力だとか何とかごまかしているんだね。あれもインチキだけだね。そんな簡単にエキスバンドできるものではない(笑)。

佐道 そうですね。

伊藤 アメリカみたいに予備役召集するみたいなことはできない

でしょう(笑)。

中島 そのエキスパンション論に関しまして、久保さんがどのように認識されていたのかということ、序内での議論についてお聞かせいただけますでしょうか。

夏目 制服は、「そんなものではできやしない」といったよ。けどまあ、持てないことがわかってるから、制服の人から見たら、それはリスクだと。リスクとして、政治家なり国民に納得してもらおうじゃないかと。あるべき姿はもつと上にあるんだとすると、今われわれが整備しようというのはこれ(低い位置)なんだ。この間というのはリスクですよ。エキスパンドだってそんな簡単にはできないので、それにはどのくらいの金と期間がかかるんだということをはっきり明示しろというのが制服の意見でした。大綱はそこを省略されて決まっちゃっているから、そのところは制服からすると、「ちよつと話が違っちゃないか」みたいな。中島 この穴を埋めるリスクの部分の見積もりみたいなものはされたのですか。

夏目 したんだよ。

伊藤 じゃあ、そういう資料はあるんだな。

夏目 ありましたよ。グラフまで書いて、継戦能力についてはこのへんまでか、ある程度つくったんですよ。

中島 それは陸海空それぞれつくられたのですか。

夏目 もちろん。彼らにしてみればそこが大事なので、そこがない元だけだったら意味がない。

中島 そこを公にされなかったのはどのような理由からですか。

夏目 そこを公にしても同じになっちゃうからね。そこはまあ、いざという有事には即応できるような力に高めるのだという基盤を残しておこうという。それはだれも反対しない。じゃあ、それは具体策がないじゃないかという。

伊藤 久保さんは何か具体策を考えていたのですか。

夏目 ないと思います。久保さんは、そのエキスパンドというのは立てたけれどもすぐに引つ込めちゃうんですよ。これはだめだよ。

伊藤 あれは理論的な要請なんですね。現実というよりは。

夏目 だけど、当時の議論というのは、私も記憶があるのだけれども、そういう防衛力整備のあり方としての哲学・理念は確かに合わないけれども、しかし、今の世の中の政治情勢のなかでわれわれがなしうるものはこれしかないんじゃないかと。それが一つ。それから、この程度のものならば国民の理解と納得が得られるだろうと、一種の妥協の産物といえますか、政治的なニーズと軍事的な要請との妥協したものが大綱だと思うんです。「こんなことしかできないじゃないか」「こんなことで防衛力に対する国民の理解が得られるのなら、防衛庁として、自衛隊として一歩前進じゃないか」ということで制服を無理やり納得させていたんです。

伊藤 「国民の」という場合は、「議会の」という意味とは。

夏目 もちろん議会も含めてでしょうけれども。それを契機にして、それともう一つあったのは、1%を超えない……超えないとはつきりいつたわけじゃないけど、どういいう方だったか。

伊藤 1%程度でしょう。

夏目 超えないこと、程度、なんかそんな曖昧な言葉になっていった。そんなことで、やたらにやみくもに膨らむものではないよということでも納得してもらおうと。これなら……ということでも、社会党も大綱までは仕方がないかという雰囲気があった。事実その後はそういういった防衛力の限界議論というのは消えちゃうんですよ。そういう意味では成功なんです。ある意味では成功だけど、制服における不満は依然として残っているんですよ。

中島 そのあと国際情勢が緊迫していくと、「あの綱方式はどうなんだ」という話が出てきましたか。

夏目 それは後の話ね。当時はむしろ緊張緩和の時代ですから、

そういうこともなかったです。

佐道 制服の方々の不満は具体的にはどういうふうにしていくわけですか。例えば、それぞれ個別に説得にあたりたりとか。

夏目 説得ですよ。会議で大臣が、「私はこう思う。それは理屈もあるだろうけれども、今後……」ということで、脅威対処論も消してはいないんですからね。一度消えているのだけれども、消えた形になっていないんです。だから制服も、それでは書類上は我慢しましょうということになっているのだけれども、そのあとの解説がみんな「基盤的防衛力」になっちゃっている。

佐道 そうですよ。

夏目 だから制服はむしろ、大綱自身よりも大綱のあとの防衛庁の解説の仕方に対する反発が非常に強いですね。後追いつることはないじゃないか。あれは早く忘れてくれよと、そういう感じでした。

伊藤 国際情勢云々というお話が出てまいりましたけれども、ちょうどベトナム戦争が終結する。これはどちらに受け取られるのですか。

夏目 これはやはりデタントという。

伊藤 そのままですか。

夏目 当時はね。

伊藤 だけど、これは中国の……。

夏目 中国もアメリカと手を結んだ。

伊藤 結んでいますけれども、一種のエキスパンドでしょう。

夏目 エキスパンドというのはべつに国際情勢とそう密接に関係していないのね。変わるかもしれない、そのときにはこうしようということであって、そのときにそういうことが変わりうる予見があったわけではないんです。むしろ、緊張は緩和しているんだ。戦争は起こりにくくなっている。国際監視が厳しいなかでは軍事力の行使が容易にできないだろうというのが当時の一般的な考え

方でした。

伊藤 ベトナム戦争も終結したことだし、という形ですか。

夏目 そうだと思います。

佐道 今の国際情勢とエキスパンドの問題なのですけれども、先ほど、グラフとかもおつくりになって、かなり陸海空それぞれ詳細に検討されたということなのですけれども。例えば、それこそ今の有事法制の議論でもいろいろあるのですけれども、どういふふうになったら警戒に入るのかとか。

夏目 具体的なものはいいですよ。当時あった議論というのはこういうことです。継戦能力は重視しようという書いてあるんですよ。じゃあ、継戦能力というのはどのくらいの継戦能力があればいいのか。それには弾薬の備蓄とかそういうことをどう考えなきゃいかんのかというと、弾薬の備蓄はいつも出るようにこんなところ（非常に低いところ）にしかない。これをどうするんだよ、という話なので。これは、何ヶ月というのはあるけれども、それは何も、国際情勢がこうだから何ヶ月というのはないのです。常備軍として常識的に持つ弾薬の備蓄というのは、一ヶ月とか二ヶ月とか持っているのが各国軍隊の常識じゃないか。それをうちは四日じゃないかとか、三日じゃないかとか、こういう議論ですから、どういふ国際情勢になったらこれをこうするというのではない。

もう一つは、例えば偵察能力というものが大事だと。やはり、危機なり侵攻を予見するにはいろんな偵察能力、情報収集能力が大事ですよ。では情報収集能力に何があるかという、何も無いじゃないか。そういうものをつくっていいじゃないか。それは、そういうものはアメリカに期待するとかというものはあるけれども、どうなったらどういふ機能をどれだけ必要だとか、そういうことではないんですよ。

石田 デタントで脅威が下がってきて、そのあとは教育とかそち

らのほうにウェイトがおかれたなんていうことはないのですか。やはり正面装備が大事とお考えですか。

夏目 正面と同時に後方みたいところ、教育とか研究開発とかそういうところへ力を入れていこうという。

石田 そういう考えはありましたか。

夏目 理論としてはあったかもしれないけれども、それがどこか大綱に出てくるかといったら何もありませんよ。いつも決まり文句で、新技術の何とか、趨勢に追いついていくとか、要員確保に努めるとかというのはあるけれども、では、そのために今までと違った何かがあるかという、それはあるわけではない。

■日米防衛協力

中島 きょうのお話のなかで、一つが大綱、基盤的防衛力の話と、もう一つが日米防衛協力の話と、二つ同時並行的に進んでいったようなのですが。片方は偶発的な事故によって促進されたということだと思ふのですけれども(笑)。

夏目 確かにいわれると、「事故」という言い方は適切ではないですな(笑)。

武田 かもしれません(笑)。そういっておいたほうがいいのかもしれないですね。

佐道 まあ、事故後の処置がよかつたんですね。

中島 大綱の場合ですと、決まるのはあとですけれども、量的に天井を設けているということだと思いますが、脱脅威論的な考え方が基本になる。片や、日米防衛協力を促進していくと、アメリカ側から日本に対して、「あれをやってください、これをやってください」という話が当然出てくるのが予想されると思います。実際にそのあとそうなってくると思うのですが、この当時、この段階ではどのようにお考えになつていらつしたのでしょうか。

夏目 今の最後の話。

伊藤 いえ、相互の関係です。

中島 二つの関係です。日米防衛協力と大綱あるいは基盤的防衛力的な考え方は。

夏目 それはまったく悩んでなかった。というのは。防衛協力の話というのは、私がいったのは、「確かにアメリカは大綱に批判的だったし注文はいろいろ出てくるだろう。しかし、そんなものはアメリカの立場からいいことをいっているの、日本は日本の自主性を持つて防衛力整備をし、日本の財政の力とか国内事情とかそういうことを考えてきちんと説明すればわかってくれるはずだ」ということが一つあったから、だからあんまり心配しませんでした。ただ、彼らとうまくやるには、「ノー」ということのないほうがいいことはいいんだけどね。

中島 そういうことよりも、まずは防衛協力の枠組みをつくることが大事だと。

夏目 そのほうがずっと大事だと。というのは、もつとざっくりばらんにいうと、放つておけばもつと危険な状態だったんですよ。

中島 と申しますと。

夏目 作戦計画の話というのは。危険な状態というのはいいにくいんだけど、やはり制服同士が話しているなかには、このまま放つておくと、また制服の独走だとか、三矢研究みたいな話になりかねない。そういうあれを持っていたから、早くこれを日の目を見せて毒消ししようという気持ちがあったのね。さつきスタデイーとかいろいろなものがあったといったけど、やはり、どうしてもそれは外部に出てきますからね。

佐道 制服組の方々が独自にやつておられるような日米の相互の打ち合わせの内容というのは防衛課長の耳には入ってきているのですか。

夏目 それは、正直いうと、それまでの防衛課長はノートタッチでした。自衛隊の防衛計画は見ていますよ。日米関係のやつについ

てはノータッチというより知らなかった。

伊藤 海のほうでそういうことをやっているというのは歴然としていたわけでしょう。

夏目 何かやっているのはわかるんですよ。私は課長になってまず、それを全部説明しろといった。統幕の会議室へ何日も入り込んでね。しかし、私以外は入れないんだよ。それほど深刻な話が……。中身はたいしたことないんですよ。ただ、私が心配だというの、手続き面でそういうことがつつかれるとまた問題だなというのがあったから、早くこれは正規の手順に乗せちゃおうと。坂田さんも、「それはそうだ」といつていた。

佐道 そのことは坂田さんにも報告をされているのですか。

夏目 もちろんしていますよ。

伊藤 だから、騒がれ方によっては第二の三矢事件みたいになるということでしょう。

夏目 そうそう、そうそう。

佐道 すぐシビリアン・コントロールの問題になってきますね。

夏目 で、あらぬエネルギーをまた使うのもばかばかしいし、それから、もともと必要なことだからというのと両方ですね。

中島 庁内でのそういう問題意識は、先生が課長になられてから出てきたのでしょうか。

夏目 どうしてそうなったのかわからない。それまではあまり……。まあ、日米関係なんてまともじゃないから。国技館のプロの相撲取りと中学生の力士がタッグを組んでいるようなものだから、あんまりそんなことをまともに議論する時代ではなかった。だけれども、やはりそうはいつでも制服は制服で自分の矜持もあるし。佐道 それはそうでしょうね。

伊藤 矜持だけではないでしょう。「ここから先は米軍の支援を待つ」というあれだから。

夏目 だから、そういう勉強をしていなければまたおかしいんで

す。そういう隠微なところでやるというのはいちばんよくないと。研究の中身はいいけれども、手順はきちんとある程度まではオーソライズされて、その指揮の下でやっているということではないと本当の意味での文民統制にもならないしね。そういう二つがありました。

伊藤 非常によくわかりました。

佐道 今の関連ですけれども、それで防衛協力の問題を進めようということにされて、先ほど防衛課長として外務省とも折衝にあたられたということですから、そういうことは、それまでは防衛課長はあんまり外務省との接触というのはしていなかったということになるわけですか。

夏目 直接ないですね。ただ何点か、日米の事務レベル協議とかそういうのがあつて行くときには多少の打ち合わせはしますけれども、まともな自衛隊と米軍との機微にわたる話というのはあまりそれまでではないですから、まあ、陪席みたいな感じでした。

佐道 そうしますと、ちょうど八月にシユレジンジャー国防長官が来日して坂田―シユレジンジャー会談が行なわれるわけですから、これはかなり歴史的にも重要な会談になるわけですから、準備とか、防衛課長としてこれにたいぶ先生も関与されたと。

夏目 それは今いったような、最初からそういうことが必要だといっているのだから、そういう方向へもって行くような話をしていくわけです。だから、日米協議の場をつくらうということになったわけですよ。それを議題にして、両方で確認してもらった。多分、そうだと思うのです。

伊藤 シユレジンジャーが来日したというのはそもそもどうということなのでしょう。

夏目 これは多分、韓国の増強か何かの話で来たんじゃないかと思えます。だから韓国へ寄っているんじゃないかな。ちょっと記憶がないですけども、多分このころシユレジンジャーは韓国の

ことをやたらにしゃべっているんですよ。韓国防衛の重要性とか何とかかんとかおね。だから多分、そういう話の一環で来ているのだと思います。

伊藤 そこでこちらから問題を提起したということですか。

夏目 そうです。

佐道 あと日米の……。

夏目 緊密な協議というか、両国がとるべき措置について安保委の枠内で協議しようということをもって、そして協議の場をつくったんですよ。新しい協議機関。

伊藤 安保委のなかですか。

夏目 枠内。三木さんはそれで納得したわけだから。

伊藤 そのなかの特別委員会みたいなものですか。

夏目 まあ、そういうことですね。下部組織として。

佐道 日米防衛首脳の定期協議ということも。

夏目 それが安保協議委員会なんです。日米両首脳というのは、国務長官と国防長官と、こちらは外務大臣と防衛庁長官。昔は在日米軍司令官だったけど、両方の大臣が、要するにビッグフォーが集まってやるのが日米安保協議委員会。それはずっと前から形はかえていたわけです。これは安保条約をつくったときから決められていたことで、その外につくるとまた大変なので、その枠の中ということにしてつくったんです。本当は外へつくりたかったんですよ。外務省を外したかった(笑)。

一同 アハハハハ(笑)。

佐道 (笑)、外務省を外したかったというのはだれのご意見ですか。

夏目 いや、それは私がそう思っただけ(笑)。彼らがいると、うるさくて。で、我々もアメリカも本音でしゃべらないんですよ。向こうも国務省がいるとしゃべらないとか、どうしてもオブラートに包んじゃうのですね。

中島 先ほどのガイドラインの話で、外務省を説得するのが大変だったという話があったのですけれども、やはり外務省の協力抜きではガイドラインを策定するのは難しかったです。

夏目 ガイドラインをつくるときにまただいたいぶもめましたね。本当はガイドラインをつくったときには、それはもつとあとになるのだけれども、あそこでわれわれが外務省に言いたかったのは、日本有事の際の日米防衛協力なんていうのはどちらかというと二の次だったんです。当時、もしあるとすれば、日本の周辺において、例えば朝鮮半島においてとか、そういうことがいちばん日本にとつてラジカルな問題として、あるいは現実的な問題として考えられることだったから、安保条約第六条をはっきりさせたいというのがあったんです。

佐道 防衛庁側はですか。

夏目 五条は俺のところで作るから。

一同 アハハハハ(笑)。

夏目 そっちをきちんと進めてくれることが大事だし、アメリカも、日本にだれかが攻めてくるなんてあんまり思っていないんですよ。アメリカが思っているのはやはり、極東で何かがあったときに日本の基地が有効に使えるか、自衛隊の支援を得られるか、そういうことが大事だった。その大事なところをたつた一行か何かでガイドラインではやって、あと、起こりにくい日本有事がずっと表面に出てきちゃったんですね。それがちよつと計算外。

佐道 つまり、外務省側が通りやすくするためにそこに議論を押し込めたという。

夏目 そういうこともあったかも。それと、日本有事のやつを脇へ置いておいてこちらだけを議論するわけにはいかなから、これはこれで残さざるをえないのだけど、もうちよつとこつちを真剣に考えてくれというのが当時の腹でした。なかなかね……。だから、その後全然動かなかったでしょう。最近になつてようやく

出てきた。

佐道 二十年かかりました。

夏目 だから、自衛隊のほうはすぐ進行するんですよ。制服同士の話というのは早いですから。だけど、どうしても国務省と外務省が話しに入るとややこしくなってくるんです。

佐道 防衛庁サイドでは、「できれば外務省を外して」というのはだいたい共通の意識というか意見になっていっているのですか。

夏目 いや、それは知らない……、そんなことはいえないけどね（笑）。

佐道 まだちょっと用心して（笑）。

伊藤 いや、当ても発言を注意したけど、本日も（笑）。いやもう、そうおっしゃるのはわかります。

夏目 向こうだってそうなんだから。

伊藤 アメリカ側ですか。

夏目 正直いうと、向こうにすればわれわれも邪魔なんですよ。

武田 ああ、内局も。

夏目 軍同士の話というのはそのくらいのものなんです。けど、それを外すと話が進まないからしぶしぶ認めただけで、内心は、「いないといいな」と思ったと思いますよ。

伊藤 でもオーソライズされたわけですから。

夏目 だから、オーソライズされちゃったら、あとは要らないんですよ（笑）。それが本音ですよ。

佐道 あとは、具体的などころは自分たちでやるからと。

伊藤 現実的にはそうならざるをえないでしょう。

夏目 なくてもやろうとしたのだから（笑）。しかし、それはどこの世界でもあることです。文句をいってもしようがないですね。同じ色の制服同士というのは近親よりも近いんですよ。ネイビー・トゥ・ネイビーというかね。陸上自衛隊なんかは当時ひがんでいってましたよ。アメリカの陸軍は韓国には非常に関心が

あるんです。それは三十八度線を挟んで対峙しているから、実際に。だけど、「日本の自衛隊なんか適当にやってくれよ。俺が心配なのは海上自衛隊と、次に航空自衛隊なんだ。だから陸はいい」と、陸はいつも上を素通りして韓国とアメリカが行ったり来たりしているのをこうやって（上を向いて）見ているしかないというひがんでいたんです。

伊藤 そういう感じですかね。

夏目 しかし、それは実際そうだったと思いますよ。

伊藤 今度は韓国から兵を引き揚げるとかといっているから。

佐道 また沖繩にふえるだけです（笑）。

■ 官房総務課長に就任

伊藤 あれも脅しかもしれませんがね。もうあまり時間がないのですが、七五年九月に官房総務課長に任せられると。これはよくあるコースですか。

夏目 よくあるか、ないかなあ、だれかいたかなあ。……あんまりいいない。

伊藤 そうですか。この総務課長というお仕事はどういう内容なのですか。具体的にはこの次に伺いますが。

夏目 雑事全般。防衛課長をクビになつたんじゃないかな。

伊藤 エーッ、そうですか？

佐道 いちばん重要なのはやはり国会の問題になるわけですか。

夏目 国会は大事ですね。

伊藤 だって、総務課長は筆頭課長でしょう。

夏目 なんとも申しあげようがない。総務課長は、私は一年くらいしかやっていないでしょう。あ、一年もやっていないかな。役人というのはだいたい二年というのが常識なのに。

伊藤 一年やっていないんだ。

夏目 しかも、私の一年の総務課長というのは何も無い年ですね。

それはちょっとオーバーだけど、いわゆるセレモニーのない年なんです。朝霞の自衛隊観閲式なんていうのは総務課長がまとめるのですが、あれがない年。それから、自衛隊の高級幹部会同なんかもやるのですけれども、それもなかった。要するに私は何もないう年にぶつかっているのですね。

伊藤 ラッキーでしたね。

夏目 多分、あいつにやらせるとだめだからと。

伊藤 いえいえ、先生の話はすぐそうなっちゃうからなア(笑)。

夏目 いや本当、文句いわれているの。あれもなかった、これもなかったという総務課長はいないってね。

伊藤 やはり国会対策がいちばん大事ですか。

夏目 国会ですね。それと、総務課長になってからけっこうあったのが、久保さんの辞任の問題なんですよ。

佐道 それは次回にお聞きして。久保発言の問題というのはちょっと……。

夏目 もう一つはロッキード事件のとはつちりが来たんですね。

佐道 何もないというのは違いますね。

夏目 本来あるものがなかった。

佐道 ねえ、やはり重要な配置になっているわけですよ。

夏目 事故だから。

武田 また、いろんな事故(笑)。

佐道 七五年後半の国会というのは政争もありますし。

伊藤 そうだな。

佐道 三木おろしの問題が大変な時期で。

夏目 海原さんの存在意義を発揮するときでもあるしね。

佐道 そこにおける総務課長ですから、これはなかなか。

伊藤 ものすごく大事なところだな。そのへんを勘案して質問事項を。

佐道 じっくりとつくりまします。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第7回

開催日：2003年5月9日（金）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時00分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

記録者：
有限会社ベンハウス 矢沢麻里

第7回インタビュー質問項目

2003年5月9日

1

今回は官房総務課長時代のお話からお願いします。総務課長には75年9月に就任されていました。70年代に入ると、かつての海原官房長時代の「大官房長」ではなく防衛局長と関係が逆転していました。防衛庁内局における官房の位置づけについてお願いします。また、直屬上司たる官房長は人事院出身の玉木清司氏ですが、どのような方であったのかもあわせてお願いします。

2

75年10月、坂田長官は「防衛施設周辺生活環境整備法」について、周辺住民を納得させるのに不十分であるとして運用強化を図る考えであることを明らかにします。何か「防衛施設周辺生活環境整備法」について問題になることが当時あったのでしょうか。

3

76年1月になりますと、坂田長官は「文民統制を洗いなおす」ためとして、国防会議の機能強化と国会に防衛委員会を設置すること（これは前回のお話にありました）に取り組みたい意向を示しました。これは国会の問題であり、総務課長が関係する部分が多いと思われませんがいかがでしたか。

4

2月にはいると米国でロッキード事件が発覚し、日本の国会でも野党の追及が始まります。防衛庁でもPXLに関係しており、事

件に巻き込まれたわけですが、事件発覚当時どのようにお考えになりました。またどのように対応しようと思われましたか。

5

2月9日久保次官が国会で、72年10月のPXL国産化白紙還元は、当時の田中首相、後藤田官房副長官、相沢主計局長の決定だと発言し、大きな問題になりました。久保発言は後藤田氏らの反発をうけ、久保氏も発言の誤りを認めるという経過になります。そのことが、やがて久保氏を次官退任（7月退官。在任約一年）に追い込んだと言われていますが、久保氏の退官問題の真相も含めて、当時の経緯についてお願いします。

6

ロッキード事件や久保次官の問題はありますが、7月8日には日米安保協議委員会での日米防衛協力小委員会の設置が決まるなど、日米防衛協力に向けての動きは進んでいきます。ロッキード事件などの防衛庁への影響はどの程度あったのでしょうか。また、5月以降はいわゆる「三木おろし」が始まり、三木内閣の基盤自体が揺れていきます。こうした政治状況の影響についてはいかがでしょうか。

7

防衛費の上限問題について、11月5日には「GNPの1%以内」ということが政府決定されますが、6月ころからは防衛庁側から「1%程度」という言い方に軌道修正が行われていました。「1%程度」か「1%以内」かをめぐる防衛庁と大蔵省の対立があったといわれていますが、この点についてはいかがでしょうか。

8

76年7月、官房防衛審議官に就任されます。防衛庁組織令によれば「長官官房に、審議官5人を置く。審議官は、命を受けて、

防衛庁の所掌事務に関する重要事項についての企画および立案に参画し、関係事務を総括整理する」となっています。つまり、官房内の事項に限らず、広く防衛庁全体の問題を扱う職だと思いますが、先生の担当されたのはどのような事項でしょうか。

9

7月27日の朝日新聞記事で、自衛隊の制服組と若手研究者による「防衛問題研究会」の発足が伝えられています。これについて何かご記憶のことはございますか。

10

10月29日、国防会議と閣議で「防衛計画の大綱」が決定されます。これを熱心に推進した久保次官は丸山次官と交代したわけですが、防衛庁としては、大綱の決定自体は既定路線ということで進めたとのことでしょうか。これに関連して、先生が防衛審議官になられた7月には、次官が久保氏から丸山昂氏へ、防衛局長が丸山氏から伊藤圭一氏へ、官房長が玉木氏から巨理彰氏へとかなり大幅な異動がありました。こういった人事の変化は、何か防衛庁内の雰囲気や政策の重点の置き方などに影響を及ぼしたのでしょうか。

11

76年12月、三木内閣が倒れて福田内閣が成立、防衛庁長官も三原朝雄氏が就任しました。内閣や長官の交代は、当時の防衛庁にどのような影響がありましたか。また、三原氏は、以前に防衛政務次官も務めており、防衛問題に関心の深い政治家と言われています。三原長官についてのご印象等もお願いします。

12

76年11月、米大統領選挙で民主党のカーター氏が当選します。カーター氏は在韓米軍の撤退を主張するわけですが、それは東アジアの戦略関係に大きな変化をもたらすもので、防衛庁としても在

韓米軍撤退が行われた場合への対応策が検討されたのではと思いますが、いかがでしょうか。

13

77年になると、在日米軍駐留経費を日本が一部分担する問題について両国政府間で交渉が進められていることが報道されます。この問題の経緯等お願いします。

14

77年7月、参事官に就任されます。就任の経緯や、どのような事項を担当されたのかなどお願いします。

※今回は以上の点についてお願いします。

■ 総務課長時代にうつって

伊藤 前回の速記録なんかを読んでみると、ときどき笑っちゃいます。

武田 本当におかしいですねえ。

夏目 真面目な話をしなくて申し訳ないです。だいたい人間が……。私は昔から、「威張らない、がんばらない、でしゃばらない」この三つを心に刻んで生きていますから。

武田 いい言葉ですね。

伊藤 いいですねえ。僕もそれ、同じようなことを考えています(笑)。

夏目 「がんばらない」というところがミソで。

伊藤 うん、そうだな。ちょっとがんばっているかな(笑)。しかし、がんばるといえるのは、他人に向かつてではなくて、自分で。

夏目 それは仕事でもそうなんです。やたら全力を込めてやるような仕事なんて、人生そうないですよ。やはり、少しはゆとりを残しながらやっているからいい仕事もできるので、あれ、精一杯だったらだめだと思う。そんなやつがいますよね。一所懸命いい仕事をするけれども、それだけで精一杯で、おわったらボタンキユーというの。ああいうのはだめなんだ。

伊藤 夏目先生のお話を伺ったあと、僕はボタンですよ。

夏目 飛行機だってそうですよ。飛行機だって余剰推力を残しているから安定して飛べるので、最大推力で飛んだら五分くらいで落ちる。ま、そんな話はどうでもいい(笑)。

伊藤 きょうは、質問項目にもありますように、総務課長時代のお話を伺おうと思います。防衛課長と総務課長は並びなのでしょう。

夏目 うーん、ま、並びといえは並びですね。

伊藤 でも、どちらかというと、課長としては総務課長のほうが筆頭だと。

夏目 建制上はね。だけど、仕事の中身からいったら、防衛課長のほうがある意味で大事な仕事をしています。総務課長というのはその他雑用で、それこそ他の課の所掌に属せざる事項。佐道 何でもやるという。

伊藤 それはいろいろやることのいちばん最後に書いてあることじゃないですか。

夏目 そうそう。だから、文書だとか人事だとかそういうのはありますけれどもね。多少、人事があるからかな。それと国会との連絡とかね。

伊藤 やはり国会というのは大変なのでしょうね。

夏目 だけれども、実際は雑用ですね。秘書官みたいなものです。

伊藤 大臣のですか。

夏目 大臣、次官、その他の万人の秘書官。

伊藤 そうですか。官房長が上司になるわけですか。

夏目 官房長が上司ですよ。

伊藤 次官、官房長、課長と。

夏目 そうです。

伊藤 官房長は玉木(清司)さんという方ですが、この方は。

夏目 玉木さんという方は人事院出身ですが、当時警察予備隊が出来たときに各省から人を集めたわけですね。そのときにもちろん警察庁とか大蔵省とかいろんな省庁から来ましたけれども、人事院というのは戦後出来た官庁で急速造成したこともあって、落ち着いた時期になると人が多少余ったのでしょうね。まあ、そこはよく知りませんが。それで、人事院から相当大勢の人たちがシビリアンとして防衛庁へ来ていました。伊藤圭一さんなんかもその仲間なんです。だいたい採用年次的にいうと、昭和二十三年から二十五、六年の人たちが多いです。

伊藤 この玉木さんというのは人事院から来て、ずっと防衛庁という方ですか。

夏目 人事院から来られた人たちというのは、みんなもう帰るところがなくて、防衛庁へ骨を埋めていった人です。

伊藤 親元がないわけですね。

夏目 主な人としては、ときどき話に出た大西（誠一郎）という、審議官をやったり、国防会議で海原さんにいじめられたり、私の教育課長のときの上司の参事官だったりする方です。その人と、玉木さんと、防大の先生になって行ったような人たちと、三、四人いましたかね。そのうちの一人なんです。二十四年が、伊藤圭一とか、その後防衛研究所の所長をやった水間（明）とか、何人かいました。そのなかでも玉木さんというのはいちばん防衛に熱心な、造詣も深い人でした。

伊藤 勉強されていたわけですか。

夏目 勉強されて、特に性格も真面目なんです。べつに人間的に生真面目という意味ではなくて、防衛問題についての取り組み方が真面目という意味で、それは伊藤さんなんかよりずっと真面目に（笑）、一所懸命勉強された方です。防衛課の先任部員も、私の二代くらい前、伊藤さんの前の先任部員。海原さんのとき或いは、その前からね。

伊藤 海原さんとの関係はどうなのですか。

夏目 あまりよくなかったですね。どうしてかわかりませんが。それから、海原さんのときには計画官をやっていて、長期計画をつくっていました。私が防衛課の先任をやっているときも計画官という仕事をやっておられて。

伊藤 計画官というのはどういうのですか。

夏目 長期計画をつくる。

伊藤 部署はどこですか。

夏目 計画官というのは課と同じなんです。計画課長みたいなものだけでも、計画官といって、部下が何人かいる。

伊藤 その上は。

夏目 防衛局長。

伊藤 ああ、そうですね。

夏目 だから、防衛庁のいわゆる年度計画、長期計画を含めて、当時としてはいちばん長くたずさわっていた方です。

伊藤 じゃあ、ベテランなわけですね。

夏目 ベテランといえばベテランです。

中島 久保さんの追悼録のなかで久保さんをしのぶ座談会に出ておられるのですけれども、久保さんとは親しかったのですか。

夏目 長い付き合いですからね。仕事の関係も、久保さんも防衛局畑が長いし、玉木さんも防衛局が長いし、そういう意味では仕事の関係も深いんです。僕なんかはワンランク間においてのお付き合いだけども、玉木さんなんかはいわば同僚でしたでしょうし。伊藤 ああ、そうですね。官房長といっても、海原さんが官房長の時代というのは……。

夏目 あの方は防衛局長から官房長になっていった。

伊藤 官房長が中心に物事が回っていた。

夏目 回っていないんですよ。

伊藤 回っていないのですか。

夏目 みんなストップしちゃうんです。

一同 アハハハハハッ（笑）。

佐道 俗人的な問題で（笑）。

夏目 海原さんは確かに、ここ（質問項目）にも書いてあるようにまさに「大官房長」なんです。実力からみても、それから経歴から見ても、防衛局長をおわって官房長をやっていますからね。ただし、当時の次官とか防衛局長と全然合いませんからね。それで、例の三矢研究なんかも自分が出てやったり、いろんなことをされたし、当時の三輪（良雄）次官は、「俺のいうことをちっとも聞かん」といってばやいておられたくらいですからね。それは確かに大官房長。だからといって仕事が円滑にいくかというと、

そういう人がいるから書類なんかみんなストップしちゃうんです。私は防衛課の先任部員のときに数ヶ月官房勤務を命ぜられたことがあるんです。辞令もなしで、「しばらく手伝え」といつて机だけもらって、それで官房総務課へ行行って、針のむしろみたいなものですよ。人からは、「あいつ、何しに来たんだ」といわれるでしょう。辞令もなしに仕事するわけですからね。それは何のためかといったら、海原さんを懐柔するために（笑）。

武田 それは大役ですよ（笑）。

佐道 でも、それは辞令に書けないですね（笑）。

夏目 それは海原さんが呼んだんですよ。「ほかのやつはだめだから、おまえ来い」といつて。

伊藤 ハハハ、それは座り心地が悪かろうと思いますよ。

夏目 当時の総務課長なんていうのは本当に嫌な目で見ていましたよ。

伊藤 まあ、そうですね（笑）。

夏目 当時はそんなことができたんですね。

佐道 海原官房長時代ということですね。

夏目 そうです。

伊藤 官房長のあり方として、やはり海原さんの場合は異例なですかね。

夏目 しかし、歴代大物といえ、防衛局長をおわって官房長になるのは通例のコースだったんですよ。だから海原さんに限らないので、加藤陽三という人もそうだし、島田（豊）さんだったしか防衛局長から官房長になったんです。

佐道 七〇年代くらいから、それが入れ替わるのですね。

夏目 入れ替わってきますね。もう玉木さんのときに入れ替わっちゃっていますね。

佐道 これは何か職制の切り替え。

夏目 いや、そんなものは決められたものがあるわけではないの

で、べつにひっくり返ったからってどうってことないんです。適任者が行けばいいわけですから、それは問題ないけど、なんとなくそういうわかれていたことは事実です。防衛局長がだんだん国会あたりで答弁する比重が大きくなると、やはり適任者でない、ただ官房長をやったからというわけにはいかない時代が来ましたからね。

佐道 いつの間にか自然にそうなったという感じですか。

夏目 なったんですね。玉木さんという方はそういう意味で非常に優秀な方だったのだけれども、ざっくりばらんにいうと、周囲と上手にやるといいう人ではなかったのでしょうか。あんまりうまくいつていなかったですね。大蔵省から来た人なんかともあんまりそりが合わなかったし。だから、官房長をやって、すぐ調本か何かに。

佐道 そうですね、調達庁。

夏目 本当は防衛局長になつてもいいような経歴、識見のあった人だと思えます。むしろ、玉木さんが官房長のときに、丸山さんのあとに伊藤さんが防衛局長になるのですよね。あれなんかは、僕らが見たら玉木さんのほうが防衛局長としては能力的に適任ではないかなと思っただけ、やはり人柄とか、周囲との関係、あるいは上司との関係とか、そういうものがあつたのでしょうか。まあ、よくわかりません。

伊藤 まあ、そういう人事というのはどういのかよくわからないですけれども。

夏目 それは、何ていつたって好き嫌いもあるし、わかりませんよね。それこそ外野にいて好きなことをしゃべっているけれども、下にいたのでは本当のことはわからないです。

佐道 官房長なんかの人事ということになりますと、これは次官の意向がいちばんですか。

夏目 それは次官です。次官が大臣に申しあげるけれども、大臣

もそう知っているわけではないから、次官の意向がほとんど一〇〇%通っちゃう。

伊藤 お役人の世界では、次官のいったことに大臣が反対したら、やはり紛糾するでしょう。

夏目 次官のほうがよく人を知っていますからね。

中島 玉木さんは、いまはどうされていますか。

夏目 いまは何もしていないのでしよう。俳句をひねっているかな。

佐道 俳句がご趣味なのですか。

夏目 そのころは俳句なんかやっていなかったのですが、いまはやっているようですよ。

伊藤 ああ、縁側で日向ぼっこして(笑)。

夏目 土佐、高知の人なんですよ。一時、高知から国会議員に出るなんていう話もあったのですが、結局は立てなくて、同じ高知県ですけれども、中谷元ついでです。あの人の応援なんかをしていました。

■「防衛施設周辺生活環境整備法」

伊藤 では、玉木さんについてはそれくらいにして、二番目の、昭和五十年十月に坂田(道太)さんが「防衛施設周辺生活環境整備法」というやたら長い法律について運用強化を図る云々なんていうことを発言されておりますけれども。

夏目 これは、私はちよつとよくわからないのですけれども、こういう法律があつて、その後これは改正されるけれども。

伊藤 だいぶあとになつてからですよ。

夏目 あとになつてからでしょう。だから、坂田さんのときのそういう動きがあつたということはちよつと私の記憶にはないんです。ただ、これを読んでつらつら当時の背景というものを考えると、わからんではないというところはあるんです。それはどうい

うことかというのと、まず一つは、ベトナム戦争がおわつた時期だと思ふんです。それで、米國が疲弊したというか、厭世気分がちよつと出てきて、あちこちから手を引くような雰囲気があつたんです。それぞれの國に任せて、米國はもうそんなところまで手が回らないよと、そういうことがあつた。それから、沖繩が返還されたあと内地の基地を統合・再編成するわけですね。そういうものについて、なくなるものはいけれども、強化される場所というのがあるところですね。米軍にしても、自衛隊にしても。そういうところは多少施設なんかも整備していかんやいかん。それから、当時たしか円高ドル安みたいなものがあつて、米軍の負担が非常にきつくなつた。防衛分担金というのがきつくなつてきた。アメリカの財政がなかなかたなくなつてきた。そういう背景があるから、日本で何とかしてやらんといかんじゃないかという雰囲気がこのころからあつたのかもしれない。あつても不思議ではない時期なんです。それが金丸さんのころになつて思いやり予算とかそういうのに実を結んでいくわけですから、多分そういうことはあつたかもしれん。だから、そういうことを何かで坂田さんがおつしやつているのかもしれないけれども、法律整備をどうのこうのといふことで具体的な記憶というのは、私はないですね。これは何か根拠があるのですか。

伊藤 これは当時の新聞記事でしょう。

佐道 はい、そうです。

夏目 ちよつと記者会見か何かで雑談的にしゃべつた程度じゃないですか。

伊藤 そうだと思ふのですけれども、きつとどこかで何かあつたのでしようね。

夏目 何かがあれば、そういうことをいつたかも知れません。

伊藤 この防衛施設というのは米軍の施設も入つていふのですよね。

夏目 むしろ自衛隊ではなくて、問題は主として米軍施設だと思
います。

伊藤 だから、多分これは施設庁の問題なんでしょう。

夏目 まあ、その背景には、施設庁もここで新しく仕事を考えな
いと、というのもあったかもしれないね。坂田さんというのは
わりと、こういう自衛隊や米軍の動きで住民に何か起きると神経
質になる人なんです。坂田さん自身よりも、渡瀬という秘書官
がこういうことにうるさいんです。だから、案外そういうこと
もあったのかもしれない。しかし、具体的な記憶はないですな。

佐道 具体的な懸案があつて云々ということではない。

夏目 ないと思うんですよ。事実、調べたけど、こんな法律、こ
こからあとまた七、八年たたなきや改正にならないでしょう。

伊藤 そうです、そうです。

夏目 多分そうだと思います。

伊藤 そうなんです。僕も、これを読んだけど……。

夏目 大臣が記者会見でしゃべることを、ときどき新聞は日曜版
なんかでこちらがびつくりするようなことを。日曜原稿か何かで
出たんじゃないかな。

佐道 逆に、こちらからしますと、新聞がけつこう重要な情報源
になつていくものですか。

夏目 それはわかります。僕らもそうなんです。「こんなこと？」
というのが。だから、月曜日は心臓がドキドキするんですよ。連
休なんか特にね。新聞記者は書きだめておいて、急がないやつ
は連休にチヨイチヨイと流すんです。そういう記事が多いから、
これもそのクチじゃないのかな。

伊藤 そうですか、そういうものですか。これは面白いですね。
今度から新聞の記事を見るときに気をつけよう。

夏目 日曜記事というのはそういうのが多いんですよ。記事がな
いでしょ。特に政治面は。そうすると、「今度の日曜日に空い

たら入れてくれよ」といつて、予定原稿で書いておくのがあるん
ですよ。

武田 間違つているときはクレームをつけたりするのですか。

夏目 間違つたような記事があればもちろんつくけれども、どうで
もいろいろな記事が多いですよ。見出しがすごいだけです。

佐道 読んでみると、たいしたことない(笑)。

伊藤 「……ともいわれている」というような話。

夏目 新聞記事もそうやって見ると、僕らもびつくりするし、おた
くもびつくりされた。総理だつて、官邸もびつくりするんですよ。

伊藤 「何やってるんだ」ということになるのですか。

夏目 すぐ電話をかけてくるんです。特に鈴木善幸総理なんかは、
ほかの新聞に出てもあまり文句をいわないけれども、「朝日新聞」
に出るとびびつて、すぐ電話ですよ。

伊藤 やつぱり「朝日」というのはそういう強さがあるんだな。

夏目 あるんですね。□では、「嫌いだ」とか何かいうけど、「朝
日」に書かれるといちばん神経にさわる(笑)。当時はですよ。

佐道 意識しているんですね。鈴木さんのときは確かに防衛問題
で……。

武田 神経質にならないといけないようなことが(笑)。

佐道 いろいろありましたから。たくさん記事もありますので、そ
れはまたあとで鈴木さんのところで聞きたいと思つていますが。

■ 防衛委員会

伊藤 その次の国会に防衛委員会をつくるというのは、これはこ
の前お話がございましたけれども、国防会議の機能強化というよ
うな話も。これも新聞で出ているのかな。

佐道 そうですね、これもご発言になつています。

夏目 これは、その後、具体的な話になつていくのですよ。坂
田さんの頭のなかでは、文民統制というのはいよいよ政治による

コントロールである。国会でもって防衛問題を真面目に審議する機関がないのはおかしいじゃないかという、この前申しあげたようなことで、安全保障委員会というものがその後出ていくわけです。そのことが一つ。それから、国防会議というのがあって、機能強化というのだけど、国防会議というのは、法律の中身をご存じだとあれだけど、最初に国防の基本方針というのがあって、その他防衛計画の大綱とか産業調整計画とかというのがあるんです。ところが、昭和三十三年の国防の基本方針以外は何もしていないのですね。してないというのは、議論されていないんです。それはおかしいじゃないか。それで、やっていることは二次防とか三次防とかそんなものばかり。安保騒動があっても、中国で核実験をやっても、べつに国防会議が召集されることもない。それはちょっとおかしいんじゃないか。あれは形骸化している。まさに中曽根さんがいうところのお茶くみみたいなものじゃないかということが坂田さんの持論ではありました。

伊藤 でも、これを強化するということは、国防会議の事務局を強化するということではないのですか。

夏目 ないんですよ。結果的には、その後メンバーが強化される。大臣がふやされるんです。

伊藤 たいして意味がないような気がしますけれどもね。

夏目 意味はないんです。それと、その後出来た四次防のあとが、いわゆる防衛計画の大綱という名になるんです。ここで国防会議の最初の審議事項の一つがクリアされるんですね。

伊藤 はあ、そういうことですか。

夏目 同じことなんだけども。もちろん、それだけで数字が消えたわけじゃないんですよ。ないけれども、ま、それが一つの象徴になるんですね。

佐道 しかし、実際にどこの機能を強化しようとか、そういうことにはあんまりならなかった。

夏目 ならない。もちろん議論はしましたよ。こういうところを議論しようとか、治安出動だとか、大規模騒乱、デモがあったときとか、そういうことはやったけれども、結局、決められたのはいまいったようなことじゃなかったかと思えます。

中島 機能強化の一環として、例えばもう少し頻繁に国防会議を開いていこうとか、そういったことはありましたか。

夏目 議論されたかもしれませんが。だけれども、結局はそれはできないです。国防会議をやつて、じゃあ、閣議がなくてすむかというところ、閣議は閣議で同じことをやるんです。ということは、結局、小人数でやつても意味ないんだね。またその上で全体会議にかけるわけだから。だから、結局そういういいながら、国防会議というのは頻繁に開かれたことはないです。何かがあるときは開かれるけれども。

伊藤 国防会議から閣議へというルートはどういうことになるのですか。

夏目 こういう防衛計画の大綱とか長期計画というものは国防会議に諮らなければならぬと書いてあるから、国防会議にかけるんです。その後、予算なんか、新規事業、新しい装備品なんかは国防会議にかけるということになるけれども、そんなものもなければ、そういうものを含めたものを閣議でもって決めるわけでしょう。だから二度手間なんです。

伊藤 その閣議にかけるのは内閣。

夏目 内閣。

伊藤 防衛庁は内閣だから。

夏目 防衛庁は内閣総理大臣に閣議要請をして出すわけですよ。だから、いまいったように国防会議にかけるようなことは必ず閣議にかけるから、国防会議というのは実質的に意味ないのですね。

伊藤 そうでしょうね。同じことを二回やるわけですからね。

夏目 じゃあ、それだけ専門的な議論をするかというところ、それで

もないしね。確かに閣議というのは形式的ではあるのですけれども、国防会議だって同じです。実質は幹事会とか参事官会議で議論をして、国防会議は形式的になっちゃいますからね。

伊藤 うん、そうなんだよな。

夏目 だから、口では機能強化とかいっても、実質、その後もあまり機能強化されていませんね。

佐道 防衛庁としてはどうなのでしょう。例えば、それこそ四次防のときに海原国防会議事務局長のもと、四次防決定までは大変難しい状況にあったわけですね。国防会議がなくても閣議で決定されれば同じことだということであれば、逆に国防会議はもう面倒くさい。なんとかあれをスキップできるような方向でいくほうが防衛庁としてはありがたいのかなど。

夏目 ま、それほど積極的ではないけれども、はっきり国防会議で審議すべき事項と書いてないものについては、国防会議という意識がなくなっちゃうのですね。はっきり書いてあるものは、スキップしたい、かけたくない……とかくやらなきゃいけないからやるんです。確かにそれは、国防会議はうるさくないけれども、事務局が難関だというのが海原時代はあったから、面倒くさいし、スキップしたいという気持ちはあったかもしれないけれども、その後はそんな気持ちはないと思うんです。だけど、かけないといかんものはかけるのですが、さつきいったように、予算のなかにもぐりこんでわかりにくいもの。例えば、ファントムを改造して爆撃装置を外したとか、新しいP3Cだか練習機だか輸送機だか何かあったでしょう。それが社会党から突付かれて、「四次防、国防会議軽視の何とかな」とやられて、またやり直した。半年か一年おくれた。そういうことはありますよね。無視しようということではなく、つい無意識でかけないでいっちゃったというのはね。それからそういうことをかけるように書いたのが、機能強化といえれば機能強化かもしれない。だけど、そんなもの機能強化といえ

るかどうかわかりませんが。

伊藤 防衛庁と大蔵省の間で話がついていることを議論するのでしよう。

夏目 もちろん、皆ついている話ですからね。だから本当に形式的なんですよ。

伊藤 どういう意味があるのかよくわからない。

佐道 坂田さんが国防会議を強化したいということをおっしゃって、それを議論されるといった場合に、どういふところでそれが議論されるわけですか。

夏目 坂田さんがいったけれども、じゃあ、それを国防会議で議論したかというところ、ないですよ。いっばなしです。大臣の見識として、防衛庁長官の見識として発言されたのだというだけで、それでもって実益や実害はないんです。

佐道 例えば、国防会議の設置に関する法律を少し書き換えるとか。そうしたらすごい問題になってくると思うのですけれども。

夏目 なかなかそこまではいかないですね。

佐道 法律問題になると国会が相手なので、先生も走り回ったりしなければいけなくなるのかなと思うのですけれども。

夏目 当時はそんな話にはならなかったです。むしろそのあとの四次防の修正とか、その前に既にT2か何かあったでしょう。あいう問題を国防会議にかけないで概算要求に盛り込んでしまつて大蔵省へ行っちゃったということに対してやられて、その修正措置はとられたけれども、坂田さんの発言に基づいて国防会議強化のための措置というのは具体的な動きはなかったです。

伊藤 非常に一般的な話なんですね。

夏目 そうだと思います。

佐道 でも、坂田さんは一応そういう意識はあった。

夏目 あったのでしよう。

伊藤 なんかわよく意味がわからないんだよな、これ。

夏目 要するに、国会と国防会議と。

伊藤 国会のほうはわかるのですけどね。

夏目 それから学者とか、防衛を考える会とか、そういうのが大事だと思つたのでしようね。政治家の発言なんていうのは、坂田さんの場合はそうでもないけれども、そういう大向うに受けるようなことをボンボンいいますよ。それにいちいち振り回されていたら、役人も大変です。

佐道 そうか、先生のいちばん最初の発言はそこにつながつてくるわけですね。防衛委員会をつくる、つくらないというのは、これは国会が相手になる。

夏目 国会が相手ですから時間はかかりましたけれども、出来たのですね。これはやはり坂田さんのお声がかかりがあつたから出来たのだと。

伊藤 こういうのをつくるということは、どこが発意して、どういうふうにつくるのですか。

夏目 それは、防衛庁なり坂田さんがあらゆる面でいろんなどころへ申し入れるわけです。そうすると、国会が判断するわけです。与野党が協議して決めなきゃいけないことですしね。

伊藤 そういうときに総務課長は何か役割がある。

夏目 いやあ、私は頼みに行つたことは何回かあるけれどもね。そういうものが必要ですと。定例日が決まつている内閣委員会だけではおかしんじゃないか。しかも、内閣委員会というのは、防衛庁以外のその他の役所の設置法など全部入るのですからね。それで一週間に二回の審議ですから、防衛問題をやるのは非常に密度が薄くなるのですね。

伊藤 人事院なんかもそうですし。

夏目 そう、人事院もそうだし、賞勲局、総理府、警察庁とか常任委員会のない役所はみんなそうなんですよ。

伊藤 宮内庁もそうですし。

夏目 それから、各省の設置法はみんな内閣委員会に来るんです。

伊藤 定員をふやすとか減らすとかいう話でしょう。

夏目 それこそ大蔵省の組織でなんとか局をつぶすとか。だから、内閣委員会というのは内閣だけの仕事だけではなくて、各省の法律改正、組織改正も内閣委員会の所掌なんです。だから、防衛庁のことなんかほんのこれくらい（少し）しかやれないんですね。

伊藤 内閣委員会にかかると、物事は非常に面倒だということをおつしやつていきましたけれども。「あそこにかけるということだ」ということを、どなたかがおつしやつていきましたけれども。

夏目 まあ、時間がかかりますからね。だけど、政治家からみればそれはとても耐えられないことだけど、われわれから見ると非常にラッキーなんです。呼ばれないから。

伊藤 ハッハッハッハッ（笑）。

武田 がんばらなくてもすむという（笑）。

夏目 国会ぐらい鬱陶しいのはないですからね。

伊藤 鬱陶しいですか。

夏目 精神衛生に悪いですからね。専守防衛でしょう。喧嘩はできないし、受身オンリーですから。

伊藤 専守防衛ですよ、本当にそうです。しかし、この前のお話では、いい質問があつたらこちらから打つて出るという。

夏目 それはありますけどね。だけど、本質的にやはり、大臣は自分の見識でいいことがいえますよ。だめならやめればいいんです。こちらがいったら大変ですからね。枠を縛られて、首が飛ぶようなことだつてありえますから。飛ばなくても、その後の見通しがなくなつちゃう。

伊藤 ハッハッハッハッ。

佐道 そうですよ。もし自分の発言で国会がとまるなんていうことになつたら、それはだいたい響く。

夏目 響きますよ。僕は何回もとめましたけど。

佐道 でも次官になれる(笑)。

夏目 事実、新聞にも書かれましたよ。「夏目次官の芽つぶれる」とか、「なし」とかと書かれましたよ。

伊藤 それは前科があるからということですか。

夏目 いや、内閣の方針に反して、少し逸脱した発言をしちゃうわけですね。悪いことをいったわけでも、嘘をいったわけでもないのだけれども、がっちり固めた法制局の守備範囲からちよつと飛び出して。飛び出すといったって、何十歩も飛び出すのではなくて、半歩か一歩ですよ。それで法制局長官からお叱りを受けて、とか何とかと書かれるんです。お叱りなんか受けたことないけどね(笑)。

佐道 受けたことにおくわけですか(笑)。

夏目 新聞が勝手に書くのですね。

佐道 ないことまで書かれるわけですか。

夏目 書きますよ。私の将来までつぶすんです。

武田 やはり新聞は間違っていることもありますね。

伊藤 いや、あれは間違っていることが多いですよ。

夏目 いろいろありますよ。むしろ新聞というのは間違っているやつのほうが多いと思わなさいかん。だけど、日本人は活字に弱いし、新聞には特に弱いでしょう。新聞に書いてあったら、みんな本当だと思う。

伊藤 僕らだって、取材を受けてしゃべっても、あとで自分の談話を見たら、「これは俺がしゃべったことかな」という感じだもの。

夏目 何か取材に来るときには、だいたい彼らは先入観を持って来ていますから、それと合うものは採用だけど、違うものはみんなこうやって(払い落とし)ますからね。だから、徒疎かに会えないですね。

伊藤 新聞記者は気をつけないと本当に危ないですね。

佐道 そうですね。

伊藤 さて、ロッキード事件でございしますが、これは防衛庁としても。

夏目 その前に、総務課長というのは国会というけど、本当に国会って大変なのは、個々の問題を頼みに行くのではなくて、役所と議員の間のパイプを、とにかく上手につなげて、詰まらせないようにしておかないといかん。例えば法案の審議をするにしても、正攻法で、かかったからいずれやつてくれるだろうというので待っていたってやつてくれない。それはやはり、役所の努力がないとその気になってくれないんですよ。彼らは国政にとって何が重要かなんて考えないから……(笑)。

伊藤 いやいやいや(笑)。

夏目 そうじゃなくて、頭を下げて来たか来ないかなんですよ。

伊藤 それはわかりますよ。多分そうだろうと思うんです、本当に。夏目 だから年じゅう行っていないといかん。総務課長は大変だといふけど、要するに暇なら自分の部屋にいるなというわけ。絶えず与野党の先生をまわって、「ご機嫌いかがですか」とやっていないといけない。「ついては、法律もそろそろ何とか考えて日程にあげてくれないと……」とかいってやっていないと、問題は進まないんですよ。

伊藤 やっぱ、「ああ、このあいだ夏目からいわれたな」と、こういうの。

夏目 嫌ですよ。やたら頭を下げて。

佐道 日ごろの付き合いが大事だということになるわけですね。

夏目 そういうことですよ、本当に。

佐道 ほとんど営業活動ですね。

夏目 営業です。それで先生が……、あ、こんなことを言っちゃいかな。ま、いいや。海外に行くなんていうと、多少はやつぱり持つていかにゃいかなしね。そんな金はないし、苦労しますよ。佐道 与野党ともに丹念に。

夏目 そうですよ。そんなことを全然考えない立派な先生ももちろんいますよ。いますけれども、そういう人もいる。

伊藤 おそらく大勢はそうでしょう。

佐道 例えば、与党でも国防族だけをまわればいいというものでもないわけですか。

夏目 だいたい国防というか、その関係の委員会の先生と、あと予算委員会、あるいは国対というのがあるね。全体の流れを決める、今度はこれを優先的にやろうなんて決めるのは国対委員長レベルですね。その人たちも。これがまたうるさいんだ。

佐道 ああ、国対関係というのはうるさいさうですよ。

夏目 こんなことをいうと俺はクビになっちゃう。

伊藤 もうクビになつてゐるんですから(笑)。

夏目 本当に殺されちゃう(笑)。いや、本当にそういう不愉快なことが多いですよ。

伊藤 いや、国対をやった先生たちのお話も伺っておりますので(笑)。

夏目 本当に腹が立つし、情けなくなりますね。なんで俺はこんなことを毎日やらにやいかんのかと。

中島 差し支えない範囲で結構なものですけれども、当時接触された政治家の先生のなかで、この方は立派だなど思われた方々この人は困ったなあという方についてお話いただけますか。

伊藤 いやいや、そこでやめておこう(笑)。ハハハッ、後者はいいですから、前者でいつてください。

夏目 少ないけどな(笑)。

武田 ハハハハハッ、じゃあ、後者のほうをぜひ(笑)。

伊藤 いや、前者だけでいいです。

夏目 例えば、栗原(祐幸)なんて、あとで防衛庁長官になった人が予算委員長。この人なんかは本当に国のことを考えて、重要性というものを認識して、それはだれが何といつてもやらにや

かんといい考え方で問題を処理し、野党にも折衝していただきました。だから、そういう人もいますよ。

伊藤 そういう方もいらつしやるわけですね。

夏目 あとは、「おまえのところは一週間に一遍ぐらいしか来ない。あつちの省庁は毎日来る」とかね(笑)。

佐道 本当に御用聞きじゃないんですからね。

夏目 そういうことを抜け抜けというんですよ。

佐道 防衛庁長官経験者というのはどうなのですか。やはり、一度そういうのを経験していると真剣に考えてくださるといふ傾向があるのですか。

夏目 だれがいた? あんまりいいですね。あんまりそういう意味で非常に便利したという大臣は、大臣で頼りになる人なんていうのは……。

伊藤 その少し前だと、中曽根(康弘)さんとか、増原(恵吉)さんとか、山中(貞則)さんとか。

夏目 江崎真澄さんなんていうのは何だかんだでいうことを聞いてくれましたね。

伊藤 これは「お世話になりました」というほうですか。

夏目 お世話になりましたね。まあ、時点が少し前後するけど、中曽根さんなんかも頼りになりますね。

伊藤 頼りになる?

夏目 うん、うるさいけどね。この人は、「俺のほうが利口だ」といふ顔をするからちよつと。

伊藤 まあ、そうですね。

夏目 あと、坂田道太、三原朝雄、金丸信、こういう人たちには非常にお世話になりました。

伊藤 やはり政務次官の経験者というのもいいわけですか。

夏目 いいんです。いいけれども、そんなに……。

伊藤 まだ力がない。

夏目 うん、まだね。

伊藤 まあ、最初になる政務次官かもしれないから。

夏目 このころまでに政務次官をやった人といったら、昭和四十、五十年までくらいだったら、あまりいないんじゃないですかね。ああ、箕輪（登）さんなんてよくいうことを聞いてくれました。土屋（義彦）という埼玉県知事。この人なんかわりとよくわれわれの悩みを聞いてくれました。

伊藤 何で最近テレビで土屋さんの顔を見たんだ？ 何かあったよな。

夏目 そんなところですね。

佐道 次官をおやりになった加藤陽三さんが政務次官をやられたりしているのですけれども。

夏目 あれはいつごろやったのかな。

佐道 七五年です。

夏目 たしかあれは総務課長のときですね。

伊藤 そうですよ。

夏目 あんまりこの方は、真面目でねえ。それに短いでしよう。

伊藤 いま、「真面目で」というのはどういうふうにつながるのかなと思っただすけれども（笑）。

夏目 聖人君子みたいな方ですからね。

伊藤 聖人君子はだめですか。

夏目 ろくでもないことは頼みに行けないしね。こういう人は院内活動も、そう野党に顔が利いたり、与党内で丁々発止といったことをどんどんしゃべって主張したりする人ではないでしょう。口八丁手八丁みたいな浜田幸一さんとかがその後なるけど、こういう人だと、いいたいことをいってくれるじゃないですか。

伊藤 そうですか、僕はあとで浜幸の話を知ろうと思ったのですけれども（笑）。

夏目 まだこのごろは出ていない。このあと出てくるのですよね。

僕が審議官のときかな。

佐道 そうですよ。

夏目 箕輪さんなんていうのも気軽によくやってくれたけれども、力があるかないかというのはまた別問題ですね。

伊藤 そうですね。確かに一所懸命やってくれるかどうかということと別ですね。

佐道 政治家のなかで、防衛関係ではずいぶん前に政務次官をなさっているのですが、そのあと科学技術庁長官とかをなさって、よく資料に名前が出てくるのですけれども、前田正男さんという方がいらつしやるのですけれども。

夏目 前田正男？

佐道 ご記憶にないですか。

夏目 いつごろ政務次官をやったの？

佐道 政務次官は昭和二十八年ですから、ずいぶん前なんです。ただ、昭和三十年代とかの資料で。

夏目 ああ、前田正男ってあるわ。全然知らない。

佐道 そうですか。ときどき資料が出てくるのですけれども。

夏目 このころは私もまだ、（小さい声で）学校は出ていたんだけど、覚えがない。

伊藤 古い時代だったら、例えば小泉の親父さんとか。

夏目 私は、小泉さんは記憶ありますよ。

伊藤 純也さんですか。

夏目 うん。

伊藤 松野頼三なんかはどうですか。

夏目 よく知っていますよ。知っていますって、いまでもときどき会うことがあります。

伊藤 そうですか。あの人なんかはいろいろいうことを聞いてくれた人ですか。

夏目 いや、松野さんは、僕が総務課長のころはもう隠居みたい

な、あんまり正面に出ない方でしたね。

佐道 昔の内務省の系統で、西村直己さん。

夏目 ああ、この方か。死んじゃったけど。この方なんかが生きていればあれだったかもしれませんがね。海原さんが尊敬していた。

伊藤 そうですか。

夏目 尊敬していたというか、最後にやめるときに奥さんとこの方に相談したというのでしょうか。

伊藤 うん、うん。

夏目 江崎真澄さんなんかは同じ時期だけど、この方なんかは非常に面倒見がよかったですね。いうことを聞いてくれました。力があるとか何とかに関係なく、真面目によく話を聞いてくれました。

伊藤 やはりそうですか。総務課長というのは御用聞きで国会のなかを飛び回ってないといかんものなのですか。

夏目 そうですね、とにかく年じゅう。防衛庁は毎年法案を出していますからね。それから、いつでも何か問題を抱えていますから。しょう。問題を抑えてもらったり、そういうことが多いですから。だから、私一人じゃなくて、官房長もそうだし、みんなそうです。官房長だつてそういうことが多かったんじゃないですか。手分けして行ったり、ダブつてもとにかくグルグルまわつて。

伊藤 どこをまわるのですか。

夏目 議員会館。あるいは、国対の先生だつたら国対の委員室。

佐道 野党ですと、やはり社会党。

夏目 正直いって、行かないのは共産党ぐらいです。

伊藤 共産党は、行つても、初めからだめでしょう。

夏目 公明党、民社党、社会党。社会党なんかはよくいうことを聞いてくれる先生がいましたよ。

伊藤 これは海原さんもいつていたな。

夏目 民社党も。

伊藤 民社党はいいのでしょうか。

夏目 民社党、公明党なんていうのは、夜もよく飲んだんですよ。

佐道 公明もそうなんですか。

夏目 公明も飲みました。竹入（義勝）さんとか、矢野（絢也）さん、市川（雄一郎）さんとか。

佐道 へえ。

伊藤 だけど、あの人たちは自分で物事を決められるのですか。

夏目 いや、それはまた別で、要するに自衛隊の幹部と懇親をするというだけのことですけどね。ただ、飲めばこちらでもいいということになります。アルコールが入ると、多少元気がよくなる。

伊藤 少し言い過ぎても、「いや、酒の上の話だ」ということになりませんか。

夏目 「そうだ、そうだ！」なんて。まあ、そういうときは自民党の悪口をいってればいい。

伊藤 ハッハッハッハッ（笑）。社会党ではだれですか。

夏目 社会党では、いい悪いは別として、大出俊なんか。それから何人かいますよ。やはり夜も飲んだ人もいますしね。

中島 大出さんといえば、安保三人男でしたっけ。

夏目 そうそう。面白いですよ。夜になると調子いいけど、昼間になるとまたガンガンやって（笑）。それはそれでしようがないですね。だけど、どこかでやめますよ。

伊藤 やはりそれは、全然夜も昼もなければ、いざというときに困りますよ。

夏目 「これだけは俺はやめるわけにはいかないよ」とかいつて、やりませうけど。だけど、そういうときに情報が入つてくれば、こちらも準備ができますから。

伊藤 やはり人脈というか、顔をつないでおかないと、いざというときに困りますね。

夏目 法案のときなんか、急に行つても相手にしてくれませんか

らね。しかし、それは不愉快なものですよ。

伊藤 まあ、そうでしょうね。

夏目 僕が3Kといったのは、国会と、記者クラブと、官邸だった。

伊藤 そうですか、官邸もだめなのか。

夏目 いや、うるさいんだ。時期によってね。特に鈴木善幸のころはうるさかったです。いちばんうるさかった。

佐道 だれが中にいるかによって違うわけですね。

■ ロッキード事件

伊藤 そろそろロッキードへ行きましょう。ロッキードの問題があつて、国会でガヤガヤとやり始めたときに、これは防衛庁のPXの問題もあるから、多少いろんな形で巻き込まれたのだと思います。

夏目 やはり何だかんだで巻き込まれて、取り調べを受けたりしている海上自衛隊の何人かいました。私は、防衛庁の人間がこれでもって現金をとつたとか、悪いことをした者は多分いないと思います。いないと思うけれども、そういうのにまさに巻き込まれたのです。検察庁の取り調べを受けた人も何人かいます。私も、調べられたというのも変なのだけれども。

伊藤 事情聴取ですか。

夏目 事情聴取というか、総務課長というのは、そのときに検察庁と話をして、てんでバラバラにやられては困る。本当に容疑者ならしようがないけれども、そうでないのなら、官庁間の便宜供与という形でできるだけの協力をするからということで、私が窓口になったのです。向こうの特捜検事の一人と。それで、どういうものを知りたいとか、どういう資料が欲しいとかいうときには、私を通して出すことにした。

伊藤 それは、相方はだれなのですか。

夏目 検事ですよ。名前はまだ……。

伊藤 地検？

佐道 東京地検特捜部。

夏目 東京地検の特捜部ですね。若い検事でしたよ。まあ、そういうことで決めたものだから、やたら来るんですよ。つまらないのは、防衛庁の法令集から装備年鑑まで、通達とか何とかいっぱい要求される。しようがない、支障のない範囲で貸し出しますね。そうすると気に入らないのは、借りるでしょう、メモを書くんですよ。借用書ですな。「押収目録」というの。

一同 ハハハハハッ。

佐道 うーん、押収ですか。

夏目 それに普通に判を押すのは借りる方じゃないですよ。ところが貸すこちらが押すんです。

武田 へーえ。

夏目 まさに、借りるとはいうけれども、向こうの意識は押収なんです。「これはひどいじゃないか。人に物を借りて、押収とは何ごとだ。普通は、物を借りたら、借りたやつが判を押すんだ。貸したやつが判を押すというのはおかしいじゃないか」と散散いっただけ、「うちの書式はこれしかありませんから」と、言葉は丁寧なだけで、頑として形式は変えないね。俺も、こういう連中を相手にしてはたまらないと思った。

伊藤 日本の役所ってそうですよ。寄付するといったら、「寄付願いを出せ」とかいうからね。

夏目 あんなのはまともな人間じゃない、捕まったら大変だと思つたね。

一同 ハハハハハ(笑)。

夏目 それで、そういうことをやっていたら新聞に出たんですよ。「防衛庁で取り調べを受けているのは総務課長と誰某」と。そうしたら田舎のお袋がびっくりしちゃって、「いまに何かやるんだらうと思つていたら、案の定やったか」と、すぐ電話が来ましたよ。

一同 アッハッハッハッハッ (笑)。

佐道 新聞にそういう書き方で出たら、やはり思いますよ。

夏目 いや、そうなの。

伊藤 よく考えてみれば、うちのあの本を持ち出して売った (笑)。

佐道 前科がある (笑)。

武田 昔からだって (笑)。

夏目 やっぱり、という。

中島 この捜査協力はどれくらいの期間続いていたのですか。

夏目 ずいぶん続きましたよ。

伊藤 では、その検事さんもずいぶん勉強したわけですね。

夏目 だけど、あそこから勉強するのでは、これは最後の結論まで行くのに何年かかると思った。本当に、こんなことから始めるんでは大変だと思いました。

佐道 では、一日の業務のかかなりのポリュームをそれに割くということになるわけですか。

夏目 呼ばれた時はね。調べるのも、取調室なんですよ。どういう部屋か、行ったことないでしょう？

武田 ないです、ないです (笑)。

伊藤 東京地検の部屋ですか。

夏目 そう。この部屋 (防衛弘済会の会長室) の半分くらいかな。机があつて、窓際に検事が座つて、明るい窓をむいてこちらが座る。その隅っこのほうに書記がいるんです。

伊藤 じゃあ、警察の取り調べと同じだ。

夏目 それで、電気スタンドでパーンと顔を照らすんですよ。

佐道 それって本当にやるんですか？

武田 テレビドラマじゃないですか (笑)。

伊藤 じゃあ、向こうもやっぱり「被疑者」とか書いているかも (笑)。

夏目 気分悪いなと思つてね。だけど、向こうはそんな気がある

のかないのか知らんけど、とにかく、「申し訳ない。お忙しいところすみません」とかいふことは丁重だけど、やっていることは同じですね。多分同じだと思ふんです。私は本当の取り調べを受けてないですけどね。だからあんなの、頑強に否認しても最後には吐きたくなる (笑)。

佐道 そのときにはいったいどういうことを聞かれたのですか。

夏目 要するに、防衛庁のことをほとんど知らないわけです。組織から、装備品のPXLなんていったつてわからないし、対潜哨戒機つて何だ、防衛庁は何をして、どういう装備を持つて、それはどういう会社でつくつていいるか。国産化はどういうものがあるのかとか、そういうことから聞くわけですから本当に大変なんです。

伊藤 そうか、ここでオーラルをやつていいるよりも、そのときに記録をとつたほうが早いという (笑)。

佐道 基礎的なことを。

伊藤 そのほうが僕らもわかる (笑)。

夏目 そうかもしれない。だから、資料をいっぱい持つて行ったんです。

伊藤 返してきましたか。

夏目 返しましたね。

佐道 何回くらい行きましたか。

夏目 そうです。何回行つたのですかね。そう何十回も行っていいんですけどね。回数にしたら、十回も行つていいかな。

伊藤 でも、要するに何を聞きたいのですか。

夏目 私には容疑に関連したことは一切聞きません。あれがどうしたとか、そういうことは一切聞かないで、防衛庁の仕事は、どういふふうな仕組みで、何をやっていいるのかという、まさに新入社員ガイダンスみたいなことを私に聞いただけです。

伊藤 じゃあ、大臣に対するブリーフをやつていいるみたいなのです。

夏目 じゃあ、大臣に対するブリーフをやつていいるみたいなの

です。

夏目 じゃあ、大臣に対するブリーフをやつていいるみたいなの

です。

夏目 じゃあ、大臣に対するブリーフをやつていいるみたいなの

です。

夏目 じゃあ、大臣に対するブリーフをやつていいるみたいなの

です。

夏目 じゃあ、大臣に対するブリーフをやつていいるみたいなの

です。

夏目 まあ、そんなものです。

伊藤 そうか。これはいい資料なのだろうけど、きっとプライバシーとかいって絶対に出してくれないな。

夏目 僕はたいしたことはしゃべっていませんよ。こつちも面倒くさいしね。

伊藤 面倒くさいですか。

夏目 「こんなことまで、いまさら何だ」と思うからね。

伊藤 でも、やはり他省庁というのはわからないんじゃないですか。

夏目 まあ、それはそうでしょうけどね。

佐道 担当された検事は、先生がお会いになったのは一人ですか。

夏目 一人です。

伊藤 ああいうのはだいたい一人が担当するんだよな。

佐道 一つの問題について。

夏目 若い人でしたよ。紳士的なんだけどね。言葉も丁寧だし、あれなのですけれどもね。

伊藤 まあ、慇懃無礼ということがありますからね。

夏目 まあ、そういうことかもしれないね。あくまでも容疑者ではないという建前だから、向こうは丁寧ではあるのですけれども。だから、これはあんまり楽しくないですね。(中島氏に向かつて)おたくは二人とも海上でしたね。

中島 いえ、きょうは海上の者は来ていないんです。

夏目 いないのか。

伊藤 彼(中島氏)は海上も何もありませんから。

佐道 海上自衛隊は確かに、問題がPXLですから。

■久保卓也氏の問題発言について

伊藤 この二月九日の久保発言をちょっと砕いて話してくださいませんか。

夏目 これは、ちょっとうる覚えだけど、国防会議でPXLの国

産化の問題を議論したのですね。結局はこれ、たしか輸入になったんですよ。

佐道 はい、そうです。

夏目 輸入になったのですが、久保さんが、国防会議の席上か何かで後藤田さんと中曽根さんと主計局長が衝立の陰でこんな話をしたということをしちゃったんです。

伊藤 国防会議で。

夏目 国防会議の席上ではなくて、始まる前か後かに密談していたのですね。それを久保さんが聞いてちゃったのですね。それをしやべったんです。

伊藤 どこですか。

夏目 これは新聞記者か何かにしやべったんじゃないかな。

中島 ということは、久保さんの発言は、内容は正しかったわけですか。本当のことをしやべってしまった。

夏目 いや、正しいかどうかというのはそこから問題になる(笑)。

中島 ええ(笑)。

夏目 まさかであらめはいわないと思うけど。でも、事前に三人の、しかもPXLの機数を決めるような枢機に参画している三人がしやべったということになると疑惑が出るじゃないですか。だから、久保の発言は聞き違いだとか、間違いだとか、嘘をいっているということにされちゃったんだね。久保さんも最初は慥然としていたのだけれども、このときは久保さんが次官だから、大臣のところへクレームが来たのかな。とんでもないということ、謝りに行ったんですよ。自分の発言は間違っていたということにするんです。

中島 これは後藤田さんが選挙に出る直前で、だいぶクレームが来たわけですか。

夏目 怒ったんですよ。カンカンになって怒った。そうだ、海原さんか何かを通してもいつてきたんだな。

伊藤 そうですか。

夏目 「久保のやつはけしからん」といって。これ、久保さんが何をしゃべったか、何かもつと具体的な題材がおたくにあるのでしよう。

伊藤 これは国会で発言したということですから、国会の議事録があるわけですよ。

佐道 そうですね。

夏目 国会だった？

佐道 いや、参照したのは記事だったのですけれども、それは「国会」というふうになっていたのですが。

夏目 ああ、だからそれは、最初はどこかで新聞か何かにしゃべったのが国会で取り上げられたんだね、多分。

伊藤 多分そういうことですよ。

夏目 だと思えますよ。

伊藤 いまのお話では中曽根さんといいましたけど、田中さんと、後藤田さんと、相沢さんですか。

夏目 ああ、そうそう。中曽根さんじゃない、田中さんだね。もう総理になって。

佐道 田中総理の時代ですね。で、後藤田官房副長官と。

夏目 官房副長官だったんだ。コレちよつと、中身は俺も……。事実、いったかどうかというのは久保さんしか知らないからね。多分、久保さんだつて耳が悪いわけじゃないから、聞こえないものを聞こえたというはずがないんだけどね。ただ、都合の悪い発言だったので無理やり取り消されたのでしよう。それがやはり久保さんの寿命を縮めちゃったね。久保さんは、やめてから民間企業にも行きにくくなっちゃって、再就職というか、そういうのはしなかったでしょう。久保さんがやめるので、当時、僕らは何とか考えにやいかんなどというので、平和安全保障研究所というものを、久保さんみたいな人はそういうところへ行くのがいちばんい

いんじゃないかということをつくった記憶がありますよ。

中島 そうだったんですか。

夏目 やめるのもちよつと、一年ぐらい。

佐道 おやりになったのは一年間ですね。

夏目 田代さんが一年やっているから、そんなに極端に短いというわけではないけど、もう一年くらいやつてもよかったのかもありませんね。

中島 この七月に退官というのは、やはりこの発言が尾を引いていたのでしょうか。

夏目 まあ、尾を引いていたか引いていないかは、いまいったように一年間やっているからね。というのは、通常二年でしょう。それで、同期の田代さんが一年やっているから、あとの半分は久保さんということ、穏当といえば穏当なのでしょうけれども。しかし、一年以上やっちゃってかまわないですよ。そこらになると、僕らにはよくわかりませんね。

伊藤 やはり一般的にはそういうふうと考えられていたわけですよ。

夏目 そういわれたことは事実です。

佐道 防衛庁内ではどう受けとめていましたか。

夏目 勝手な噂としてそういうことをいっている人はいたけど、人事は真相というのはわからないですから。

佐道 久保さんの発言の一連の問題は、久保次官と、長官と、例えば官房長、そこらへんで処理されるというか、そういう形になっているのですか。

夏目 まあ、そうですね。そうだと思います。結局、大臣も謝つたはずですよ。

中島 そうですね、坂田長官は謝りに行かれていますはずですよ。

夏目 たしか、それで坂田さんにも謝らせちゃったと、久保さんも慙愧の思いをいわれたような記憶があるからね。

中島 坂田さんの回想録にもこの事件のことが出てきていました。

夏目 何か書いてあった？

中島 自分は久保君を呼んでだいたい叱ったというようなことが書かれていました。

伊藤 まあ、ちよつと考えてみれば、いわなくてもいいことではあるのですね。

夏目 そうなんです。非常に軽率といえは軽率だったんですよ。久保さんという人はそういう人なんです。世俗に超越しているところがありませんからね。やつぱり、ああいう学者だから(笑)。

佐道 政治家との付き合いとか、そういうのはあまりなかった人なのですか。

夏目 あんまりないですね。久保さんはあんまりなかったな。海原さんと逆ですね。ただし、政治家の一部は久保さんを尊敬していましたけどね。だけど、久保さんのほうからどうのこうのという話はなかったです。あんまり国会へ根回しに行つたなんていう話も聞かないからね。まあ、久保さんにはそういうことをさせまいという周囲のあれもありましたしね。

伊藤 これは、怒つたのは後藤田さんあたり。

夏目 怒つたのは後藤田さんですよ。

伊藤 後藤田さんは怒ると怖いな。

佐道 選挙が絡んでいますからね。

夏目 選挙の前だったのか。

中島 ええ、前だったみたいです。

夏目 この人は選挙弱かつたようです。久保さんと後藤田さんは先輩後輩だから、知らない仲でもないしね。それで、運の悪いことに、海原と後藤田というのは朋友でしょう。

佐道 ええ、同期。

夏目 海原と久保というのはどうもあんまり合わなくなつてきているでしょう。だから、海原さんもあんまり中へ入つてどうのこ

うのなんてしなかつたんだろうね。

佐道 ロッキード事件自体で取り調べとかがあったりというなかでこの久保さんの問題というと、防衛庁全体としてもなかなか気が上がらないというか。

夏目 なんかないに不愉快な話なんです。防衛庁は非常にフェアに仕事をしているのに、防衛庁も悪事に加担しているのではないかみたいな目で見られることに対して、当時非常に不愉快だった記憶があります。

伊藤 やはりそういう記事も出たのでしょうか。

夏目 出ました。

伊藤 防衛庁は怪しいという。

夏目 だけど、べつに私が調べたわけではないけれども、本当に正正と、フェアな、オープンな形で議論していましたから、私はそれはないと思いますけれども。事実、防衛庁はその後何もなくつたですからね。

伊藤 そうですね。防衛庁ルートというのはなかったんですよ。

佐道 そうですね。

夏目 少しでももらつていけば、だれか捕まっちゃいますよ。とかくああいう事件は、あとでもつてつじつまが合うように、役所が絡んだようになつちゃうというのが不思議ですね。本当に公務員というのは因果な仕事だと思ふ。堂々と決めても、金をもらつているやつがいると、堂々とやったことがそれで左右されたようになつちゃうからね。まあ、あんまりこのへんは正直いってわからないですね。藪の中だ。

伊藤 しかし、そんなときに総務課長をやつて、これは楽ではないですね。

夏目 たしか私は久保さんの送別会なんかもやつたんじゃないかな。

佐道 七月ですから、まだ総務課長でした。結局、七六年になつてからはロッキード問題でかなりの時間とエネルギーをとられる

という状況でしたか。

夏目 いや、そんなことはないですよ。エネルギーをとられるとかそんなたいしたことはなかったです。非常に時期的に限られた時期でしたから、年じゅうこれに振り回されていたような意識はまったくありません。むしろ坂田さんに振り回されたのが私にとってはきつかった。

伊藤 この前のお話では、坂田さんは何でも、夏目さん、夏目さんと呼ぶのだというお話でしたから。

夏目 それで、一つ失敗したのは、坂田さんの何かの演説原稿に私がフイヒテの言葉をちよつと引用したんです。それがはまっちゃったんですな。やっぱりドイツ文学とかに弱いんだね。「これはどこに書いてある」という。私も孫引きだったので、さあ、それから、『ドイツ国民に告ぐ』をはじめ、厚い本を何冊か読んだのだけど、出てこないんです(笑)。往生したことがある。

佐道 防衛課長の時代からですよ。総務課長のほうがやはり身近にいる時間が長いわけですか。

夏目 半分秘書官だから長いんですよ。

佐道 坂田さんもやはり身近に置きたかったという。

夏目 それで白書の書き直しとか。もつとも私は演説原稿では前科がありまして、施設庁のときに何か書かされたときにマルクスの言葉を引用したんです。役所でマルクスの言葉はちよつとタブーですよ。だからと思つてごまかして、「ドイチェ・イデオロギーの著者がいうように」とごまかしたわけです。わかるかなと思つたら、わからないで、そのまま印刷されちゃった。あとでもって、「これはなんだ。マルクス・エンゲルスじゃないか」というわけです(笑)。ちよつとまずかつたかな、後の祭りだったかなと思つてね。二度失敗するとは思わなかつたですよ。

伊藤 やはり、そういう草稿書きというのがあるのですね。

夏目 べつにロッキードでそんなに振り回されたというのとはな

つたですが、海上自衛隊が大変だったかもしれませんが。現に調べを受けた人はいましたから。

伊藤 それは本当の取り調べですか。

夏目 いや、聞いてないからそれはわかりません。だけど、呼ばれた人は何人かいたようです。

佐道 海上自衛隊が取り調べを受けているとか、そういう報告は上がってくるのですか。

夏目 きょう何時から行きますというの私のところへみんな来るんです。だから対応はできるのですけれども、だけども、差し迫って捕まるとかそういう話ではないものですから、それですんだのですけれども。

佐道 マスコミ対応も総務課長ですか。

夏目 うん、だからマスコミが訊わからんで、私が呼ばれて話をしたというと、取り調べを受けたということになっちゃった。よく説明しているんだけどね。彼らも面白がつて書くから。

伊藤 いやいや、罪なことだなあ(笑)。やはり、検察庁へ呼ばれたら取り調べにしますよ。事情聴取だなんて書かない。

夏目 検察庁へ行くと、クラブの人間もいるんだよな。

佐道 だれか来るんじゃないかと思つて。

伊藤 いや、どうしても見つかるでしょう。

夏目 見つかるんですよ。

伊藤 どこかよそのところでやってくれば別だけど。

夏目 向こうもそんな気はさらさらないですから、本当の調べじゃないから堂々と役所へ呼ぶんですね。こつちも官用車で行きま

すから、わかっちゃうんですね(笑)。しかし、「押収目録」には俺もちよつとびつくりしましたね。

伊藤 いや、防衛庁だって人から借りるときに何かやっているかもしれないですよ(笑)。

夏目 まあ、そんなところですよ。

■「三木おろし」と日米防衛協力小委員会

中島 このロッキード事件に触発される形で、国内政治のほうで三木おろしが始まって。

夏目 ああ、それはそのあとで出てくるね。

中島 ええ、そのあとで出てきますが。三木おろしという国内政治のお話と、防衛庁が進めている諸事業、大綱であるとか、その他諸々のことが何か影響を受けたということはございますか。

夏目 三木おろしというのはそんなに影響を受けませんけれども、ここで印象にあるのは、三木おろしがあったときに坂田さんは毅然としていました。あの方は無党派なだけけど、物の考え方は非常に三木さんに近い人なんです。たしかあのころ、全閣僚のほとんどがみんな三木おろしに賛同したんです。坂田さん一人だけかな、そこはちょっと忘れちゃったけど、坂田さんとは全く積極的に反対していた。三木おろしに反旗を翻していたのですね。そのときの話を私にされたのが記憶にあるのですけれども、「私も三木おろしそのものに反対するわけではないのだ。しかし、少なくとも総理というのは自衛隊の最高指揮官だ。俺はその統括責任者なんだ。その俺が最高指揮官をクビにするのに賛成とはいえないだろう。だから私は、この是非、善悪を問わずに反対だ」ということで賛同しなかったのです。その当時、ああ、なるほどなと思っただけの記憶があります。だけど、その程度のこと、三木おろしが、防衛庁、自衛隊に何かさざ波を起したとか、風波を巻き起したとか、そんなことはまったくありませんでした。ただ、坂田さんの頭の中はいろいろ悩んだことがあると思いますよ。大臣個人としてはね。だけど、そんなものはわれわれに響かないから。むしろ、ここにも書いてあるように、正正と安保協議委員会とかが決められていく方向がわれわれの一大関心事であつたしね。

伊藤 この日米防衛協力小委員会の設置というのはこの前お話を

伺いましたけれども、これはどこが決めるのですか。

夏目 これは、事務所でいくと、この前もちょっとお話ししたように、上田哲の質問があつて、そういう協議の場が必要であるというのをいいましたよね。それに基づいてわれわれはいろいろ準備をした。ちょうどそのころに、三木さんがアメリカへ行つてフォード大統領と会談するので、そのときに、そういうものが必要だということを謳ってくる。というのを、アメリカは問題ないですからね。むしろ三木さんがうんとかどうか。三木さんはだいたいぶぐずったんです。だけど、それは、いままである安保協議委員会の枠内という枠をはめることによって、三木さんもだいたいぶかということ、おぼろげ、結構ということ、しやべった。それが「安保条約の効果的運用のため日米両国が協力してとるべき措置について相談する」ということが共同宣言のなかに入った。それから一月足らずか何かで、坂田さんとシュレジンジャーの会談があつて、それをさらに敷衍するのです。日米が有事の際整合のとれた作戦行動をとれるよう協議する場を設けるべきだということに決まるのです。だから、そのへんの滑りが非常に順調に行くんです。

伊藤 小委員会をつくるということは、安保協議委員会が親委員会になつていきますから、そこで決めればいいわけですか。

夏目 うん、決めればいいんです。もちろん実質的にはした打ち合わせというのは必要ですけどもね。だけど、枠内というのは、そこが決めるという意味ではなくて、いま日米間の安保条約のなかのいちばん大きなトップクラスが入っているのは安保協議委員会なんです。そこを別のものをつくることになると世間が騒がしいので、その安保委員会のなかには日米合同委員会だとかいろいろのが入っているから、その一つとして防衛協力小委員会をつくるうということにすれば、べつにいままでの枠を踏み外すわけでもないし。あたりまえのことじゃないかと。しかも、協議すること

は必要だと国会で縷々言明しているとおりだからということ、大方の了解が得られた。

伊藤 まあ、安保条約というのは必ずしも直接的な防衛問題だけではありませんからね。だから、それはいろいろある。そのなかの一つとして格好をつけたわけですね。

夏目 本来欠けている部分だった。いままでは施設だとかそんなことばかり一所懸命やって、大きな目的の一つである日米防衛協力についての議論の場がなかったわけですから、そういうものをつくるのはあたりまえだということになったわけです。

伊藤 まあ、なんとなく考えて見ますと、それが日米条約のいちばんの基本ですから。

夏目 建前としては、それがまずあって、それから基地問題とかが従属的なものとして議論されるのが普通なのですから。まあ、平素の必要性があるからということと逆になったのでしようね。

伊藤 親委員会と子委員会の関係が逆みたいな感じがしますけどね。

夏目 安保協議委員会というのは何も基地問題に限らず何をやってもいいのですから。ですから、そこでもって議論したっていいのだけれども、偉い人が四人集まったところで実質的な議論もできないし。それから、この前もお話したように、防衛協力の意味はやはり作戦計画ですよ。作戦計画みたいな純粋に軍事的なものについては、アメリカにも国務省をあまり入れたくないという気持ちはあるし、こっちは外務省を入れたくない(笑)。だから、具体的に話がつまるまでは時間がかかりましたが、結果的に国務相、外務省も構成員になった訳です。

伊藤 だけど、顔ぶれではここがいちばん偉い人が集まったのではないですか。

夏目 いや、たいしたことないですよ。これはたしか防衛局長や北米局長でしょう。

佐道 防衛局長です。この上にS. S. Cという次官レベルの事務レベル委員会というのがあつて、次官レベルは実質的な議論をしていたんですよ。だけど、それはこういう会を置くという根拠がないんです。事実的な会議があるというだけで。いわゆるハワイ協議といわれていたのがそれなのですけれども、毎年やっている。ここでは相突つ込んだ議論をしたんです。だけど、それは実質的に会議をやっているだけで、何とか委員会という名前もなければ、こういう根拠法規もなかったんですね。

■防衛費の「パーセント」枠問題

伊藤 まあ、そうやってどんどん進んでいくわけですが、一方で、例の防衛費の1%枠問題というのが出てくるわけですね。

夏目 次のやつですね。十一月というのは、いつの十一月？

佐道 七六年です。十月に大綱が決まって、その一週間ぐらいあつた十一月五日に。

夏目 五十一年？

佐道 昭和五十一年です。ただ、決まったときは1%以内ということと決まるのですが、その前に防衛庁のほうは、記者への説明とかでは「1%程度」という言葉遣いをしていました。

夏目 防衛庁は1%程度ということを主張していました。防衛を考える会もそういう議論をして。まあ、1%は根拠がないのですけれども。軍事的な合理性というのはないのだけれども、まあ、この程度なら国民の納得は得られるだろう。いままでがそれに近いところでやっていたから、そんなにむちゃくちゃな数字ではないだろう。ずっと以前にさかのほれば、1%よりずっと上の時期がいっぱいあつたのですからね。もう一つは、大綱という一応目標みたいなことが決められたけれども、その目標みたいなものは、当時の物価の上昇とかそういうことをいろいろ考えて推定すると、まあ、七、八年か十年くらいたてば大綱水準には達しようだ

ろう。いまのまままでこうやって上がって、そのくらいの期間で達成できるのではないかという、いろんな要素から1%ということを出したのです。それは何も1%以内ではなくて、1%を多少出ても、それはもともと合理性があるものではないからかまわないじゃないかというのはいわゆる意見だったのですけれども、大蔵省が「以内だ」と主張をして譲らないのです。それで最後は、これも坂田さんが自ら折衝されたような記憶があります。だれと折衝したのかな、総理かな。

佐道 大平（正芳）さんと。坂田、大平で、総理が。

夏目 それで、結局は、坂田さん流にいうなれば、「俺は1%程度ということにしたかったけれどもできなかった。しかし、当面1%を超えないことを目処とする」と。変な文章ですよねえ。そんなような表現なんです。要するに、うちは1%程度。向こうは以内だ。それを妥協するとかういう形になっちゃう（笑）。

伊藤 どちらにも読めるわけですね。

夏目 多分、「当面超えないことを目処とする」かな、そんなことで決まったんです。

伊藤 まだ七六年というと、この時期は予算規模がのびているでしょう。

夏目 相当大きな金額になることをわれわれも考えているから、まあいいやと。それと、国民からはあんまり反感を受けないんじゃないかという、いろんな打算もあった。

伊藤 これは閣議決定でしょう。

夏目 国防会議を経て閣議決定。

伊藤 だけど、閣議決定というのは必ずしも次の内閣まで有効であるわけではないでしょう。

夏目 いや、有効ですよ。

伊藤 有効ですか。

夏目 一旦閣議決定したら、ずっと有効なんです。有効って、ま

あ、法律みたいなものではないけれども。

伊藤 でも、例えば次の内閣が、「これは違うぞ」と。

夏目 それは、いさばいいのだけれども、なかなかできませんね。

中島 大綱の決定でしょうか、それとも長官の談話のほうですか。

夏目 いや、これは国防会議決定だよ。当面の防衛何とかについてというのを別個国防会議で決めているんですよ。一、二、三行。

佐道 そうですね。

夏目 大綱のすぐあと。

中島 決定と、大綱と、その次に談話要旨になっているのですけれども、こっちなあ。すみません、僕もその文章はどこかで見ることがあるのですが。ありました。「防衛力整備の実施にあたっては、当面各年度の防衛関係費の総額が当該年度の国民総生産の百分の一に相当する額を超えないことを目処としてこれを行なうものとする」ということなんです。

夏目 「百分の一」と書いてあるんだ。

中島 はい、百分の一に相当する額云々と。

夏目 「1%」というのは俗な言い方なんだね。

伊藤 そうですね。知らなかった。

佐道 やはり、国防会議、閣議決定ともなると、「1%」なんていわない（笑）。

伊藤 じゃあまあ、この問題はそういうことで、あなたが聞いたといっていた。

■核不拡散条約を日本が批准

中島 おそらくこれは外務省マターなかもしれませんが、この年の六月に核不拡散条約に日本は批准しております、署名はもと前の一九七〇年（昭和四十五年二月）ですね。これは何かご記憶がございますか。

夏目 まったくないね。

伊藤 やはり外務省マターですかね。

夏目 ずっとあたりまえのことだと思ってるからね。

伊藤 まあ、日本に直接影響が及ぶわけではない。

夏目 むしろ、そんなことよりも、たしかシユレジンジャーか何かが韓国に核があつたのを確認したりして、そちらほうがヘエーッとびつくりしたという記憶はあるけど、不拡散条約なんてあんまり興味なかったね。

伊藤 韓国に核を持つてると明言したわけですね。

夏目 たしか同じころじゃないですか。

伊藤 だけど、日本にだつて持つていっているということは、実際にそう思つていたでしょう。

夏目 いや、持つてないですよ。

伊藤 持つてない？

夏目 日本にはないですよ。

伊藤 そうですか。

夏目 ときどき持つてくるけれども、据え付けてはいない。だから、韓国にあるというのは、どこかへ配備しているという戦術核でしょうけれどもね。そういうことのほうが、「エッ」という。まあ、それだけ北に対する脅威というものを現実的なものとしてとらえているのですね。

伊藤 いまのほうもつと現実的じゃないですか。

夏目 だから、トルーマンが朝鮮戦争のときに核爆弾を使うといつて。

伊藤 ああ、使わせてない。

夏目 やはりあそこではアメリカはいつも核のことを意識するのだなという。今度だつてそういうことが出てこないとも限らないんじゃないかなんてね。

中島 やはり真剣に、日本の場合ですと将来的なオプションとしても核武装云々ということは少なくとも実務レベルでは討議され

ては。

夏目 うん、考えてはいませんが、本当の机上の勉強として考えたことはあるでしょうけど、それはやはり日本の国策として得策ではないし、また、いろんな意味からやるべきでないということ。経済的にも、技術的にも、政治的にもね。やはりアメリカの核の傘におんぶすることがいちばん賢明だということにしたと思

います。

中島 面白いことに、戦後の日本の論壇を見ていると、核問題に関しては幾つかうねりがありまして、ある特定の時期になると、「日本も核武装したほうがいいんじゃないか」という声が高くなって、また低くなって、今またそういった声もちらほら聞こえてくるのですけれども。

伊藤 それはアメリカがいつているんですよ、いま。

中島 ええ、アメリカもいつていますし。

夏目 非常にうねりがあるというのは本当なのかもしれないけれども、そういうことをいう人がときどきいることは事実です。財界なんかにはそんなことをいう人がいたかも知れないけど、だれど、官僚はいないと思う。政治家の一部と財界人が訳のわからないことをいう。そういう勇ましいことをいう財界人がいましたけどね。でも、そんなものは全然、そういうことに対して鈍感だったのか、歯牙にもかけないといふべきなのかわかりませんけどね。

中島 まあ、現実問題としては。

伊藤 アメリカなんかは、いますぐにでも日本が核武装できるといふふうな言い方をしていますけれども、本当に核武装しようと思つたらできるのですか。

夏目 できるでしょうね。やろうと思えばね。

伊藤 そうですか。

夏目 北朝鮮でさえできるのですから。

伊藤 だけど、われわれは飢えて死なないとだめでしょう(笑)。

夏目 核を持つことはそんなに大変なことじゃないと思うんです。ただ、その運搬手段を含めて有効なものをつくらねとすると、それは一朝一夕にできるといふことにはなりません。だけど、ランチヤーとミサイルをどこからもちよってきて、そこへ核弾頭を積み重ねていくわけですから。もつと極端なことをいえば、十年前前にナイキというミサイルを自衛隊が導入しました。あのナイキ、最初に持ってきたのはエージャックスといういちばん初期型だった。その次に持ってきたのはハーキュリーズという改良型のナイキですが、このナイキハーキュリーズは対空ミサイルだけど核弾頭も積めるんですよ。それを日本へ持ってきたときにどうしたかというところ、核を積む隙間があるわけですね。そこへコンクリートを詰めたんです。のみならず、接続のいろいろ配線みたいなものがあるでしょう。私はそういうのに弱いけど（笑）。それをみんな切つて、つながらないようにした。そこまで野党は問い詰めたんです。

伊藤 じゃあ、その部分を取り替えればいいわけですか。

夏目 取り替えただけでは、その今のところを切つちやつたから。私は、「コンクリートを入れて、すぐ取り替えられるようにしておけばいいじゃないか」と冗談をいってましたが、そんな生易しい議論では、当時の国会は通らなかつた。

中島 たしかボマークですか、一時期日本に導入しようとして。ところが、これは核も搭載可能だということ取りやめたと聞いていますけれども。ナイキもやろうと思えば可能だったわけですね。

夏目 元はね。向こうから持ってきた物は可能だったんです。いまはハーキュリーズ自体が古くなって使っていないけど、元々そうだったんですよ。コンクリートを入れて、バランスをとらないといけないものだからね。配線を切つたり、場所をつぶしたりしたんです。

佐道 しかし、手間のかかることですね。

夏目 金をかけてね。

伊藤 金をかけて性能を悪くした（笑）。

武田 本当にそうですよ。

夏目 爆撃装置もそうなんです。わざわざ金をかけて取つ払っているんです。

伊藤 つければいいんじゃないですか。

夏目 そのままつけられれば……フリをしてね。技術的な知識がないから何ともいえる。

伊藤 軍事機密です（笑）。

夏目 いや、そういうことじゃなくて、私は知らないけれども、多分。

伊藤 いや、知らせていないんですよ（笑）。

夏目 そのころは知恵がついていたら、やっていたかもしれない。

■『防衛白書』を書く

伊藤 七月に審議官になられます。審議官というのは、これはどういうあれですか。

夏目 要するに中二階みたいなものですよ。

伊藤 まあ、中二階みたいなものでしょうけれども。

夏目 五人もいない。当時は三人じゃなかつたかな。

佐道 あ、そうですね。これはいまのあれを引いてきたので五人になっていきますけれども。

夏目 いまは五人だけでも、当時は審議官が三人いたと思います。

伊藤 この審議官は、長官に直属して。

夏目 長官ではなくて、官房長です。建前は官房長なのですけれども、いまはどういうふうになっているか知りませんが、いまでもそんなに本質的にはかわりないのですが、一人は防衛局の仕事。局次長じゃないけれども、防衛局長を補佐するような仕事をやる審議官が一人。それから、それ以外の官房だとか何とかを

やる、その他諸々のことをやる審議官が一人。

伊藤 それは官房次長みたいなものですね。

夏目 まあ、官房だけではないですからね。いろんな問題をやっています。それから、一人は白書を担当する。私はその白書担当の審議官になった。

伊藤 白書の実務はどこがやるのですか。

夏目 白書室というのがあるんです。

伊藤 それはどこにくっ付いているのですか。

夏目 官房に付いているんです。陸海空と、審議官と、五、六人。

夏目 当時は五、六人。いまは何人いるか知りませんが。

伊藤 シビリアンだけではなくて。

夏目 制服の三佐か二佐くらいの人。

伊藤 それは優秀な人を選んでくるのですか。

夏目 それは当時の審議官の考え方です。

伊藤 自分で選ぶわけではないでしょう。

夏目 自分ではしないけれども、優秀なやつじゃないとだめだとかど文句をいって。

伊藤 優秀な人が来てくれないと、ちよつと大変じゃないですか。

夏目 それは大変ですよ。で、ばらつきがあると、「このところをおまえが書け」とかといって分担するでしょう。一応最初の原案はある。それが全然違つちゃうのですね。最初は分担みたいなものを決めてやるのですけれども、結局はだれか一人が最後にリライトしないと、文体もみんな違いますからね。

伊藤 ま、文体の問題には夏目先生はうるさいから、最後は自分でやられたのではないですか。

夏目 多少はやらないといかんけど。だけど、私の文章がいちばん直されました。外務省で。

伊藤 外務省で？　なんでこれが外務省なのですか。

夏目 『防衛白書』って閣議にかけられるんですよ。閣議にかけるとい

うのは、何の案件でもそうだけど、各省から根回ししておかないと、閣議でクレームがついたら恥じなんですよ。反対なんかされると。

伊藤 だけど、閣議へかける前には一応次官会議に入れるのでしよう。

夏目 だから、次官会議にかけるときには文句をいわれないようにしておかないといけない。実質的な根回しは大変ですよ。いちばんうるさいのは外務省。例の外務省ですよ。

伊藤 ええ、わかりますよ、それはいうでしょう（笑）。重箱の隅を突付くような話でしょう、多分。

夏目 うん。

佐道 字句にこだわったのですか。

夏目 字句にこだわるし、何にこだわるし、本当にうるさい。だれがつけるのかって聞いたかった。

佐道 日米防衛協力の進展の問題とか、そういうことは。

夏目 ああいうのになると特にうるさいですね。国のなかのことだけだとあんまりいわないけれども、日米関係とかそういう分野になるともう。白書なんて、どうしても国際情勢とか書かないといけないじゃないですか。やっぱり外務省が口を出す分野が大きくなるんですよ。

武田 それは、外務省が口を出す権限もあるのですか。

夏目 権限じゃないけれども、官庁間の協力というか。調整というか。

伊藤 次官会議を通すためにですね。

夏目 閣議なり、次官会議にかけて反対だとすると、政府が不統一ということになるでしょう。そういうことがないように事前に了解をとって、会議はシャンシャンと。

伊藤 そうですか。それは外務省の窓口はどこなのですか。

夏目 それは書いてある中身によつてですが。主として当時の安

保課です。だけど、書いてある中身が、例えば中近東に関することとで問題があれば、中近東の地域課が文句をいうでしょうしね。

伊藤 でも、それぞれに文句をいうわけではないでしょう。一応、外務省として窓口があつて。

夏目 いや、そうなのだけれども、最初はやっぱり担当者がいて、担当者がこっちの担当者呼んで、「こうだ、ああだ」とやるじゃないですか。

伊藤 そうなんですか、やはりそういうことなんですか。

夏目 うん、そういうところが手間隙かかるんですね。全部まとめて、「外務省としてはこうですよ」といつてくれないから。

伊藤 そういうものなのですか。

佐道 国際情勢認識そのものについてクレームがつくとか、そういうこともあるのですか。

夏目 ありますよ。

中島 あるんですか。

夏目 特に私の中には、白書はそれまでは国際情勢で、アメリカの国防政策はどうとか、冷戦構造がどうかという一般的な話だったのだけれども、それは外務省で出すのと同じじゃないかと。防衛庁が出す以上は、やはり軍事的な色彩を濃くしてこそ初めてレーゾンデートルが出てくるので、同じ情勢でも軍事情勢にもうちよつと焦点を当てた書き方をすべきじゃないかということで、極東ソ連軍の実態はこうだとかいう式のことを書いたわけ。そう書くと、どうしても扇動的になるのですよ。

武田 うん、なるほど。

夏目 ね。

佐道 まあ、煽るといふか。

夏目 結果的にそういうふうに読めるんです。そうするとやはり嫌がられるんです。それはあくまで事実なのだけれども、そう書くのと、こっちも何か手を打たなきゃいかんみたいな、やたらに緊

張を刺激するような書き方になっちゃう。それから、私のときの場合には、私はその前の年の坂田さんが文句をいわれた『防衛白書』で懲りているから、ああいう総論的なものはだれも読まないだろう。私でさえ読まなかったのだから、多分、国民はだれも読まないに決まっている。だから、読むに耐えるものにしよというのがいちばんの狙いだったんです。それで、『防衛白書』はあんまり総論的なものは書くのをやめようと。書くのは、大綱が出た直後だから、大綱は解説せざるをえないなど。これがまたあとで問題を起すのですが。それから、軍事情勢に焦点を当てよう。もう一つは、ミグ25というのが前の年に来て、函館に着陸しているんです。それから、FX論争というのがあつて、F15か、F16か、F14かという、機種選定が当時防衛庁の仕事の航空自衛隊で特に焦点だった。これだけに絞ろうと、まったく私の恣意専断で決めちゃったんです。そういう中身の『防衛白書』だったんだよね。だから、外務省が文句をいったのは、主としていまの情勢とミグの問題。もう一つは、わかりやすくするために挿絵を入れようと思つて、写真なり絵をいっぱい入れてということで、絵入りの白書にしたんです。

伊藤 それが気に入らない。

夏目 いや、それは外務省は文句をいわない。ただ、確かに絵が気に入らなかつたね。

伊藤 それはご自分がですか。

夏目 私が(笑)。頼んだ絵描きが悪かつた。

佐道 イラストみたいに入っているやつですか。

夏目 そうそう、白黒のペン画みたいなもの。

佐道 はい、ありました。

夏目 この絵がなんかスマートではなくて嫌でしたけど。

佐道 五十一年に坂田さんが出されましたね。『防衛白書』としては二号目になつて。先生が担当されたのは三号目ということ

すね。

夏目 三号目になるのですね。

佐道 確かに、二号目と三号目ではかなりづくり方が変わっているなと思ったのですけれども。

夏目 自分では悦に入っていたんですよ。そうしたら、次の年からまた見事に元に返っちゃった。

佐道 また戻ったな、これはいったいどうしたんだろうなと思っ
ていたんです。

夏目 それは私の独断だから。私が会議にかけたときには、みんな、「結構だ」といっていただけでも、やはり翌年になって、「あんまりにもあれはちよつと極端で、白書の体をなしていない」と、きつと批判を呼んだのだろうと思いますね。

伊藤 でも、ちゃんと閣議決定になったわけでしょう。

夏目 なりました。でも、そのときに入れた絵が初めてで、あとはそういう写真だとか絵入りがふえたのは事実です。それまでは活字の羅列でしたから。

伊藤 たしかに昭和の初めごろ、極東ソ連軍の五カ年計画の結果として極東ソ連軍が増強されたということで国防充実を日本の陸軍が非常に宣伝したんですよ。そのことに対して外務省はかなり文句をいったのだけど、このときは陸軍のほうが強かった(笑)。

夏目 ああ、そういうことがあるのですか。だから、いつの世も同じなんですよ。

伊藤 多分、それが頭にあるんじゃないですか。

夏目 それで、マスコミからは軍事バカの白書だといわれて、まあ、散散でした。

佐道 軍事色が濃いという。

伊藤 でも、話題になってよかったじゃないですか。

夏目 よかったのですけれどもね。それからあと、『防衛白書』の国際情勢は非常に軍事面を重視した書き方になったんですよ。

多分、坂田さんもそういう式のものを要求されたのではないかなということを私自身が感じたから。ほかのところは別としても、情勢に関してはそういうことじゃなかったのかなと思いやつたものだから、そういうふうにしたのですけれども。外務省で書いたのと同じようなものを縮めて書いたって意味ないですね。

武田 逆に、『外交青書』に防衛庁の側から要望を出すなんていうことはできるのですか。

夏目 できるはずですけど、しているのか、していないのかねえ。

武田 また力関係が。

夏目 力関係があるんですよね。

伊藤 やつたら、何倍か戻ってくる(笑)。

夏目 大蔵省なんかからも財政面についてクレームがきますけれども、そんな細かいところまではやらないですよ。このところを踏み外しちゃ困るよということはいいますけどね。外務省は本当に言葉の端々まで。

佐道 言葉の使い方に厳しいところですね。

夏目 だから私はいまでも外務省を信用していませんけれども、あんなことをやったのではだめだ。翻訳は嘘だらけだし。

佐道 これは、下書きは分担して白書室の方がお書きになるということですか。

夏目 そうです、最初はね。

佐道 それは、例えば幕僚監部とか。

夏目 もちろん、そういうものを多少集合して、文章の平仄を合わせないといけませんから、私が書いたり、あるいはだれかに手伝ってもらったりしてやる。そのためには一週間くらい缶詰をやってたんです。箱根の旅館へ行って。旅館って、どこかの会社の寮か何かですけれども、朝からずっとそれをやって。四、五日だと思えますけれども。それで、最後の文章まできちんとして。

伊藤 そこから先はどうなるのですか。

夏目 もちろんその段階でも、いろんな段階で調整はしますけれども、最終的には制服を含めた参事官会議とかそういうところで諮って、そして国防会議に持ち込むのです。

伊藤 外務省や何かとのあれは、その前にもうやっているわけですか。

夏目 もうやっておくわけです。外務省で直されて、こっちでもって会議をやると、「それはおかしい、突き返せ」とかいうやつもいるし、大変ですよ。それで、とにかくF-X問題は別としてミグ25のあたりは私が書いたんです。

伊藤 ご自身でも分担されたわけですね。

夏目 それは私がいちばんよく知っているから。

中島 七六年九月にミグ25号が飛来して、ミグを一度解体して、元に戻して、ソ連側への送還を先生が担当されたのですよね。

夏目 その前、まだそこへ行く前にいまの白書の続きをやっちゃうけど、ミグ25のときのことを書くにあたって、ミグ25の書き方だつて。面白くなく書けばきりがありませんよ。

伊藤 ハッハッハッハッハッ (笑)。

夏目 役所的な文章でね。だけど、それでは面白くないから、私が昔学生の時分に読んだ、きだみのるという作家がいて、岩波新書で『気違い部落周游记』。あの文章が好きでしてね。

武田 あの文章で白書を書く (笑)。

夏目 それで、非常に文学的に書いたんです。

武田 そうでしょうねえ (笑)。

夏目 一言でいえば、自分ではそういつている。そうしたら外務省が、「これは白書の体をなしたらん！」と、悪評噴々でした。

伊藤 それは、「直せ」といわれるのですか。

夏目 もちろん。めちゃくちゃ直されたんですよ、私の分担したところが。

中島 ぜひ原文を (笑)。

夏目 「タイゴノス号は薄い煙を吐きながら日立港を出て行った」なんて。

一同 アッハッハッハッ (笑)。

夏目 だめだつていうの。

武田 でも、読んでみたいですねえ。

佐道 それでも白書はだめかもしれないなあ (笑)。

夏目 全然だめでしたね。「こんなの見たことない」と笑われて、けちよんけちよんにやられてね。

伊藤 やっぱり役所的な文章になったのですか。

夏目 ほとんどそうだったけれども、まあ、多少形骸は残していますね。

伊藤 そうですか。やっぱり、いくら直しても直して切れないんですね (笑)。

夏目 ただ、文章は本当に直っちゃいました。

伊藤 だけど、あれはいろんなところに見せないといかんでしょう。関連したところは。

夏目 白書？

伊藤 運輸省とか。ミグの話です。

夏目 運輸省に関係したことは運輸省に持っていくます。だけど、そんなのごくわずかですから、そんなに時間はかからない。要するに外務省、次が大蔵省ですね。

伊藤 大蔵は何で関係あるのですか。

夏目 大綱の書き方の問題。

伊藤 いえいえ、ミグの話では。

夏目 ああ、ミグは外務省ですよ。あとは運輸省がちよつと。

佐道 大綱の書き方での大蔵省というのは、予算の関係という。

夏目 予算の関係とか、考え方があんまり逸脱すると、大蔵省もあとでまたツケが回ってくると用心するんです。大蔵省というのは非常にガードが固いですからね。

伊藤 予算がつかなきやならないのは。

夏目 あとあと変なものでよりどころにされたらたまらないというのがピピッと響くのですね。

伊藤 これは閣議決定だから。

佐道 そうですね。ここで何か変な言葉を潜り込ませて、それがあとで使われたら大変だ。

夏目 そういうのは奇妙によく発見します。感動ですよ。

伊藤 ハハハハハッ(笑)、これはもう、まいったなあ。

佐道 でも、発見するということは、そういうことがあったということですね(笑)。

夏目 それは、こつちも多少はありますよ。

武田 文学的表現は目くらましで(笑)。

夏目 それは多少あるけど、それは本当に見事ですな。

武田 どっちが化かすか、化かされるか。

夏目 もっとも、それで化かしたからって大蔵省が認めるわけじゃないですよ。

伊藤 だけどもあ、一応、閣議決定だから。

夏目 今度は、閣議の前に官房長官と総理に事前に説明に行くんです。

伊藤 でも、これはそんなに厄介なことではないでしょう。

夏目 私はだれに行つたのかな。私のときはだれとだれに行つたか……。

伊藤 官房長官と総理ですか。

夏目 福田(越夫)さんと。

伊藤 福田さんになつてからだよな。

佐道 福田さんですね。

伊藤 うん、そうだ。

夏目 たしか、そんなに文句をいわれた記憶はないですね。もちろん、「各省調整は済んでいる」というから、安心して、「ああ、

そうかい。ご苦労さん」と。あれ、金をもらえるんですよ。これも内緒かな。

佐道 報奨金ということですか。

夏目 報奨金じゃないのでしょうか。あれは白書の原稿料なのでしようね。あれは大蔵省ですからね。印刷局ですから。

武田 なるほど、なるほど。

夏目 あれはれっきとした金だと思えますよ。もらったこちらはれっきとした使い方をしないけど(笑)。当時の白書室の人間が全部で七、八人いましたかね。「よし！ これできようはひとつ

派手に飲もうぜ」なんていって。

伊藤 はあ(笑)。それはただ領収書を書けばいいわけですか。

夏目 多分そうだと思います。役所を通して来ないからね。私に

来るのだから。たしかそうだと思います。源泉徴収したかどうかはわからない(笑)。

佐道 ちょっと時間なので、ここで切らせていただいて。

夏目 まだ時間はあるから、そうしましょう。

佐道 白書のこと、まだちょっとお聞きしたいことがあるので、今度また白書自体も持ってきます。

夏目 ミグ25とね。

佐道 それを時間をとって少し聞きたいと思えます。

伊藤 審議官って何をやるのがわからなかったから。

夏目 三賢人といわれたんですよ。審議官って暇でしょう。だから、あちこちの課へ行つて口ばっかり出すでしょう。邪魔がらるんですよ。

伊藤 それで、三……何ですか。

夏目 賢人なんですよ。

伊藤 「賢」ですか。

夏目 あるいは三悪人とかね。

佐道 三人の審議官が。

夏目 三悪人とか、三賢人とか、いいたいことをいわれました。

伊藤 賢人だったらいいいじゃないですか。

夏目 賢人はいいけど、三悪人は。

伊藤 僕は「閑人」かと思っただんです（笑）。だけど、白書を書くのはけっこう時間がかかるじゃないですか。

夏目 半年くらいかけて。

伊藤 そういう意味では、これは季節労働なのかな。

夏目 最初にメンバーを集めてから、閣議決定まで。

伊藤 それを書く人たちは専任ではない。

夏目 専任ですよ。もうその間は幕僚監部から派遣されたのが一部屋に。

伊藤 じゃあ、まあ、出向みたいなものですね。

夏目 出向ですね。

伊藤 ずっといるわけではないでしょう。

夏目 だから半年、出来上がれば帰っちゃって。

伊藤 その前はいない。

夏目 前はいない。部屋が出来るんですよ。白書の審議官が命ぜられて、「白書をやれ」といわれて、メンバーを集めたときから出来るわけです。

伊藤 そうですか。ちょうどそういう時期に任命されるわけですか。

夏目 まあ、そうですね。だいたい何をやるかはわかっているのだけれども、一人ではできませんからね。一人で構想は練っていますよ。今度の白書はどうするかとか。だけど、スタッフが集まって初めて作業が始まるわけですから。そのスタッフは、幕僚監部をまわって、何月ごろにそろそろということになりますから。

伊藤 あれは、いつごろ始めて、いつごろ出すのですか。

夏目 多分、年の初め、二、三月かに始まって、七月か八月に出来上がって、というのだと思います。

伊藤 では、先生は七月から審議官になつていますから。

夏目 最初の半年はなかった。ミグだと思えますよ。

伊藤 あ、ミグですか。ああ、そうか。

夏目 それはいまいったように暇だから、「おまえ手伝え」といわれてミグを手伝ったんです。

佐道 そういふ友軍的な対応も。

夏目 多少そういうところがあるんですね。本当は防衛局長がやるべきなのだけれども、防衛局長はそこまで手がまわらないから、おまえがやれと坂田さんにいわれて。

伊藤 そうですか、ははあ。

佐道 ミグについても、最近また本が出たり、いろんな意見が出たりしていますので、その点もまた。

伊藤 ミグの問題はお聞きしていなかったんじゃないかな。

佐道 だから次回です。

夏目 ちよつと後先になつていってますね。

佐道 白書が出るのは七七年なんですけれども、先生は七六年の七月に。

夏目 ミグ25を白書に書いてあるのだから、ミグのほうが先なんだよね。

伊藤 そうだな。

佐道 白書のなかのミグの記述を読みながら、改めてまた。

伊藤 では、ありがとうございます。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第8回

開催日：2003年6月13日（金）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時00分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

岡田志津枝（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：
有限会社ペンハウス 矢沢麻里

第8回インタビュー質問項目

2003年6月13日

1

今回は官房防衛審議官時代の続きからお願いします。先生が防衛審議官になられた7月には、次官が久保氏から丸山昂氏へ、防衛局長が丸山氏から伊藤圭一氏へ、官房長が玉木氏から巨理彰氏へとかなり大幅な異動がありました。こういった人事の変化は、何か防衛庁内の雰囲気や政策の重点の置き方などに影響を及ぼしたのでしょうか。

2

「ミグ25事件」について以下のような質問についてお願いします。
①事件は9月6日午後、突然起きました。この事件について最初にお聞きになったときの状況や感想をお願いします。また、5時過ぎから丸山次官以下内局幹部、制服組の合同会議が開催されたとのことですが、参加されたのでしょうか。
②ミグ25の機体に関して、防衛庁としては調査方針、米軍との関係といった問題について、当初どのような方針で臨まれたのでしょうか。

③ミグ25事件については、いくつかの重要な問題が指摘されています。その一つが、こういった危機が起きたときの各官庁間の役割分担の問題で、防衛庁がこの問題の中心になったのは事件から5日ほどたってベレンコ中尉が米国に亡命してからだといわれています。この間の防衛庁、外務省、警察、法務省、運輸省等の考え方、また官邸の状況（三木首相、井出官房長官、海部官房副長官、梅本官房副長官）についてお願いします。

④このとき、ミグ25の機体をソ連が奪回しにくるという情報もあり、現地で警備に当たる部隊はかなりの緊張状態にあったようです。そこで防衛出動命令をめぐって、陸幕と内局に意見の違いが生まれたという指摘もありますが、現地警備をめぐる問題についてご記憶の点をお願いします。

⑤先生は、日立港でのミグの機体引渡しにあたって、船でのソ連側検査に立ち会われたとのことですが、そのときのソ連側の様子や印象に残っておられることなどお願いします。

⑥ミグ25の飛来・着陸は、日本の防空体制の不備を明らかにしました。（1）低空侵入機にどう対処するかという問題、（2）領空侵犯機にどのように対応するかという問題、（3）事件後の連絡体制等ですが、これらへの対応は防衛庁としてどのように進められることになったのでしょうか。

3

7月27日の朝日新聞記事で、自衛隊の制服組と若手研究者による「防衛問題研究会」の発足が伝えられています。これについて何かご記憶のことはございますか。

4

10月29日、国防会議と閣議で「防衛計画の大綱」が決定されます。これを熱心に推進した久保次官は丸山次官と交代したわけですが、防衛庁としては、大綱の決定自体は既定路線ということで進めたということでしょうか。

5

76年12月、三木内閣が倒れて福田内閣が成立、防衛庁長官も三原朝雄氏が就任しました。内閣や長官の交代は、当時の防衛庁にどのような影響がありましたか。また、三原氏は、以前に防衛政務次官も務めており、防衛問題に関心の深い政治家と言われています。三原長官についてのご印象等もお願いします。

6

76年11月、米大統領選挙で民主党のカーター氏が当選します。カーター氏は在韓米軍の撤退を主張するわけですが、それは東アジアの戦略関係に大きな変化をもたらすもので、防衛庁としても在韓米軍撤退が行われた場合への対応策が検討されたのではないと思いますが、いかがでしょうか。

7

77年になると、在日米軍駐留経費を日本が一部分担する問題について両国政府間で交渉が進められていることが報道されます。この問題の経緯等お願いします。

8

77年7月、先生が担当された『日本の防衛』（防衛白書）ができません。これに関して次のような質問についてお願いします。

①先生が前回に言われたように、昭和52年の白書は他の白書とかなり構成が違ってきます。「総論をやめる」という方針で前年にあつて削った問題などもかなりあるわけですが、こうした構成の変更にあたってはどういう点を重視されたのでしょうか。

②白書の第2章に、前年決まった「防衛計画の大綱」についての詳細な説明があります。それはとくに「基盤的防衛力構想」についての説明にもなるわけですが、これについての反響等はいかがでしたか。

③ミグ25事件についても、防衛体制の不備の点にまで言及されるなど、かなり詳しい説明があります。従来ですと、問題になるような箇所はいまいにしたり触れなかったりすることも多いと思いますが、この点について、とくにミグ事件の記述などの反響はどうだったのでしょうか。

9

77年7月、参事官（教育担当？）に就任されます。就任の経緯や、どのような事項を担当されたのかなどお願いします。

※今回は以上の点についてお願いします。

■ミグ25事件

佐道 きょうは、先生がお書きになった『防衛白書 昭和五十二年版』を。

夏目 そんなもの、よくありましたねえ。うち探したけど、もうない。どこか古本屋へやっちゃった。

伊藤 懐かしいですか。

佐道 あとの質問に出てきますけれども。これは翌年の五十三年版なのですけれども、比べるとやはり、構成が全然。

武田 あ、同じものですか。

夏目 これが正統派なんですよ、多分。いまと同じスタイル。

武田 これはなんで違うんだろう。

夏目 市販のやつと、これは部内で閣議決定か何かしたときに。

伊藤 白表紙ですか。この前のお話しのやつはこういう絵だよ。気に入らないとかいうお話しだった。

夏目 次の年から、絵も入っているけれども、だんだんスマートにはなってきた。

伊藤 こういう絵でしょう、先生が気に入らないといった。

夏目 きらいなんだよね。ちよつと品がないでしょう、絵が。

伊藤 品がない(笑)、もうちよつと文学的な絵がいいですか。

夏目 きつと安いやつを頼んだのでしょうか。

武田 ちよつと漫画っぽいですね。

伊藤 そうかなあ。

武田 これなんかどうですか。

伊藤 さて、それでは始めさせていただきますか。防衛審議官の時代を前回お話ししていただいたのですけれども、続きです。防衛審議官になられたときに、この前もちよつと触れましたけれども、久保さんから丸山さんへ、丸山さんから伊藤圭一さんへという変化がありました。これはどうでしょう。

夏目 久保さんがやめたのはちよつと早かったような気がします。

伊藤 久保さんですね。一年です。

夏目 やめたのは、例の発言なんかが多分絡んだからだと思うのですが。丸山さんが防衛局長から次官になったのは順当な人事でべつに何とも思わなかった。次に防衛局長ですが、普通だったら、この前もちよつと話に出たけど、玉木さんという非常に防衛に詳しい人がいたのだけれども、伊藤さんのほうが防衛局長になったんですよ。伊藤さんという人は非常に如才のない人で、融通無碍の人だから、丸山さんなんか非常に使いやすいということがあったのだと思うのですけれども。まあしかし、それは人事のことだから、われわれ下種の勤ぐりで、実際はわかりません。

伊藤 まあ、こういう人事があれば、部内ではひそひそとうわさとか解釈とかは出ますよね。

夏目 ある意味では、うるさい人がみんななくなったという感じですね。久保さんにしても、玉木さんにしてもね。あと、丸山、伊藤なんて、みんな人格円満な方々だから。

佐道 丸山さんも人格円満ですか。

夏目 絶対、人に反対しない方ですからね。黙って、「そうか、そうか」といつて聞いてくれる人で、あまり異を唱えない人です。上にも下にもあまり異を唱えない。

伊藤 では、通過点みたいな話ですか。

夏目 非常に人間ができています。

伊藤 夏目先生はどうなんですか。

夏目 私はだめでしたけどね。

伊藤 それは地位に伴う部分じゃないですか(笑)。

佐道 丸山さんはそのあとのガイドライン……、その前から日米防衛協力で。

夏目 そういう意味では継続性のある人事ではありますよね。それに、当時、丸山さん以外にいなかったですからね。年次的に見

ても。それはそれで、当然衆目の見るところ、妥当なものとして見ていたのでしょう、次官は。あとはわかりませんけれどもね。

伊藤 まあ、べつにこういう人事の異動があつたからといって。

夏目 こんな年のじゅうあることですからね。こんなものをいちいち気にしたり、仕事の動きが変わるなんていうことはまったくありません。ただ、しやすい雰囲気が出るとか、そういうのはありますけれども。

伊藤 非常に強烈な個性の人がなつたりすれば、それはそれで影響があるでしょうけれども。

夏目 そういう意味では、制服から見ても非常にいいカウンターパートになつたという印象ではないでしょうか。

伊藤 付き合ひやすいという。

夏目 そう思います。

伊藤 わかりました。これはまあ、たいした問題ではないです。いちばん大きな問題は、きょうの主題であります、ミグのお話であります。

夏目 もうみんな書いてあるじゃないですか。

伊藤 書いてあるのですけれども、とにかく、ご自分がこの事件についてどうやってお聞きになつたわけですか。

夏目 正直いうと、私は埒外にいたんですよ。

伊藤 埒外ですか。

夏目 審議官ですからね。これはもつぱら防衛局の仕事として取り組んだと思うのです。丸山さん、伊藤圭一、それから防衛局担当の審議官というのがいたと思うんです。たしか渡辺伊助という人だと思つたのですが。そういう人たちが主として最初取り組んだんです。しかし、取り組んだけれども、初めてのことでですからね。とにかくすごいんだ。各省、みんな寄つてたかつていろいろなことというんですよ。外国為替管理令違反だとか、出入国管理法違反とか、武器等不法所持……、まあ、それは既存の法律に照らせば

そうなんだけど、そんなことで収拾できるようなものではないんですけれども。やはり役人というのは既存の法律で物を考えようとするから、埒が明かないんです。それで、各省ともみんなそれぞれ勝手なことをやってどうにもならなかつたのですが、防衛庁は、とにかくなんでもいいから、早くさわつてみたい。せつかくの宝の山が来たのだから。

伊藤 やはり初めからそういう感じですか。

夏目 私なんかはそうでした。ただ、当時の三木さんは、国際関係を損ねてはいけなから、できるだけ早く返そうという姿勢でした。防衛庁だけじゃないですか。こんなものをそのまま返すなんていつたら、世界の物笑いになるということで反対したのは。まあ、私はその場はまだ直接は関係していませんでしたけど。

伊藤 防衛審議官である先生にはどうやって伝わつてくるわけですか。

夏目 それは、ときどき会議に出たりするけれども、人様のやつている仕事ですから、ちよつかいは出さないでいたんです。

伊藤 通報は。

夏目 もちろん、だいたいどんなことになつていくかということは何聞いていました。

伊藤 第一報はどうなのですか。

夏目 一報はどうだったかね。とにかく、そういうことがあつたということはずぐ来たと思ひます。ただ、大臣に上げるのがちよつと。出張中か何かで大臣がいなかつたのかな。それで、あとで大臣が怒つた経緯があるように記憶があります。たとえ旅行先であるうとも、まず第一報を入れるとか。なんか、半日くらいおくれたんじゃないかな。べつに入れたからどうつてことはないのだけれども、そんなことは年じゅうですからね。いまだにあるでしょう。

伊藤 まあ、そうですね。しょつちゅう問題になつていきますね。報告した、しない、おくれたと。

夏目 私は局外者みたいな顔をしていたのですが、トイレで丸山次官とばったり会ったんですよ。そうしたら、「そうだ、おい、いいところで会った」というわけだね(笑)。

佐道 (笑)、それはその日ですか。

夏目 いやいや、もう何日かたってから。四、五日か、二、三日か、ちょっと忘れたけど。

伊藤 その前はただ聞いているだけなのですか。

夏目 そうそうそう。

伊藤 でも、例えばその日にあった局内の会議とか、そういうのを脇で見ているくらい。

夏目 脇で見えていました。大変なことだと思つと同時に、防衛庁にも法匪がいっぱいいるなあと思つて。

伊藤 ハハハハハ、でも、その場にはいたわけでしょう。

夏目 いたときもあるし、いないときもあったかもしれませんが、ただ、全然口出しはしたことないし、私の仕事だと思つていなかったです。私の仕事だと直接いわれたのはいまの話で、函館にあるミグをソ連が取り返しに来るとか、攻撃してくるとか、そういう話が出てきて、あれを早くなんとかしなきゃいけないということになつてから。だから、各省のゴタゴタ、さつきいったようなわけのわからんことは一応けりがついたあとの話ですからね。防衛庁が責任をもつて仕事ができるような体勢になつてからだと思います。

伊藤 それで、丸山さんからいわれて。

夏目 防衛庁はお手上げの状態だったんですよ。てんやわんやで。だから、あまり暇そうな顔をしていたのがよくなかつた。

一同 アハハハハハ(笑)。

佐道 実際、そういうふうにして少し時間がある時期だったんですか。

夏目 そう。

伊藤 白書の……。

佐道 白書は、まだあとですよ。

夏目 白書はあとですよ。

伊藤 だから、ちょっと手ぶらじゃないですか。

夏目 まあ、白書もそろそろ……というところだったかもしれないですね。丸山さんはそういうのがよくあるんですよ。その後もあるんですよ。いまはやりの有政法制のときも、「あ、あれが暇そうだ」というので、教育参事官のときもやらされるんです。

佐道 じゃあ、これで次回の質問がふえた(笑)。

伊藤 いやあ、よっぽど暇そうに見えたんだなあ(笑)。

夏目 じゃばらないがモットーですから。

伊藤 モットーだけど、しょつちゅう目立っているじゃないですか(笑)。それで、何を手伝えということになつたわけですか。

夏目 ミグを函館に置くというのは非常に危険だと。そういう風評だけではなくて、アメリカ側からも情報が入ってきたんですよ。ソ連が爆破しに来るとか、不穏分子を使つてどうするかという話がありましてね。まあ、私はそんなことをするとは思えなかつたのですけれども、しかし、アメリカからの情報もあつたので、一応警戒態勢を厳重にするようにということ、たしか千歳か何かの地对空ミサイルを函館へ移動したり、艦艇を大湊に増派したり、航空機の哨戒飛行を密にしたりという、警戒態勢をとつた記憶があります。ただ、そうはいっても函館というのは民間空港でして、ミグをとめてあつたのはフェンスから二、三十メートルかぐらいの所で、外部からみてもそこに見えるんですよ。石を投げても届くようなところにとめてあつたんです。滑走路の近くだと邪魔だからというので。

伊藤 飛行場の中ではあるのですね。

夏目 飛行場のフェンスの中ではあるけれども、ちょっと普通の運行上邪魔にならんような隅っこへ置いたんです。だから、当時は見物人がいっぱい来ていたんです。双眼鏡を持って。双眼鏡な

んかなくても見える数十メートル先にあるのですけれどもね。鉄条網というか、金網の。

伊藤 カバーしていないんですね。

夏目 これはちよつとね。一発ぶち込まれたらポーンですから、なんとか早くしなければいかんということで、そこから私の仕事が始まるんです。

伊藤 動かすということですか。

夏目 うん。警戒態勢をとったことと同時に、問題は動かすことなんです。機体を調査するためにはあそこでは不向きである。民間空港だし、要員もいないし、やはりどこか航空自衛隊のしかるべき基地へ運ぶのがいちばんいいだろう。どこへ運ぼうか。千歳、三沢、百里と。そのほかにもあったかもしれませんが、とにかくその幾つかの飛行場のなかでどこがいちばんいいだろうということとで、さんざん考えたんです。やっぱり、ひとつはなるべくソ連から遠くて攻撃しにくいところ。それから、町の中から比較的離れている警戒のしやすい基地がいいだろう。そういうことを考えると、千歳も民間航空との共用でしょう。三沢は米軍もいますからね。百里だと内陸部でソ連から遠いし、航空自衛隊の専用の基地ですし、東京からも近いし、いろいろ調査したりする人が行ったり来たりするにも便利だということで、百里に決める。そういうことにしたのですね。

伊藤 でも、そういうことを決めても、先生に指揮権があるわけではないでしょう。

夏目 私は指揮官ではなくて、決めればいいんです。あと、今度はどうやって運ぶかというのがあつたんです。こんなものを運ぶ手段がないんです。ミグ25というのはでかいんですよ。

伊藤 まさか飛行機で飛ぶわけにはいかない(笑)。

夏目 ミグ自体が飛ぶわけにはいかない。また航空自衛隊にはそんなでかい輸送機はないんです。それで、アメリカと折衝して、C

5ギャラクシーというやつらでかい輸送機があるのですが、これを借りることにした。それでも入らないので、尻尾を切つて、主翼を切断して、分解して百里へ運んだんです。

伊藤 じゃあ、アメリカの輸送機はどこか国内にあつたのですか。

夏目 横田か何かに来ていないんですか。彼らの輸送用として、年じゅう行ったり来たりしていますから。アメリカもミグ25には非常に重大な関心を持っていましたから、異もなくオーケーということになって、それで百里へ運んだのです。

中島 アメリカからすると、それを運ぶだけではなくて、調査にわれわれも加わらせてほしいという。

夏目 その種の要求はすぐありましたね。百里へ持つていって、自衛隊がそれを調査しようということとで始めるわけですから、見ただけの飛行機ですから、どこから手をつけていいかわからなければいけません。そのうちに、この飛行機には自爆装置というのがついてるだろう。へたなところをいじると、ポーン。ポーンといったつて、飛行機全体が爆破するわけではないのだけど、関連機器がこわれてわからなくなってしまう。ブラックボックス周辺にはそういうのが数箇所あるんです。それはどこにあるのかかわからないんです。どこを触つたら出るのか。やはり米軍に依頼せざるをえなくなつて。米軍にはちゃんと「ミグチーム」というのがあつて、アメリカの基地へ行くと、ミグだろうと何だろうと、各種の実物が置いてあるわけですよ。

伊藤 だけど、ミグ25はないのでしょうか。

夏目 なかつたのだけれども、似たような飛行機はみんな持つていて、ヨーロッパで見たりしているから、多少ノウハウを持つていられるでしょうね。来て、パツパツと、瞬時のうちにどこにあるか。それはやはり、アメリカの調査能力は比べ物にならない感じがしました。この飛行機というのは、やたら図体がでかくて、日本のというのはアメリカの戦闘機なのですが、アメリカの戦闘

機を見慣れた人から見ると、まったく荒削りというか。日本の戦闘機なんてピカピカでしょう。あの連中の飛行機は鮫肌もいところ。荒けずりでさわると手を怪我するような。表面はそんな精密につくっていないんですね。あとで調べたら、ミグ25というのは万能のドッグファイトなんかをするような戦闘機ではなくて、「敵が来た」というと、ブオーンと飛んで行って、一発ぶちかましてからスッと下りてくる、それだけのための、ま、ロケット台みたいなもの。だから、それで十分に用は足りる。彼らはいろんな戦闘機を持っています。そのうちのひとつだと思えばそれで十分なのですけれども。日本の戦闘機みたいな繊細さがないんですよ。すごい飛行機で、上に乗ったら、潜水艦の甲板に乗ったようなものなんです。大きくてね。

伊藤 実際に乗ってみましたか。

夏目 乗りましたよ。やはり、戦闘機に対する哲学というか、思想みたいなのが違うんですね。日本はマルチパーパスの、貧乏だからどうしてもあつちもこつちも（笑）。

伊藤 そのかわり、不徹底になるでしょう。

夏目 だけど、だいたいアメリカもそうでしょう。だから、超一流じゃないと気がすまないのですけれども、ソ連なんて何種類も戦闘機を持っていますから、あれでよかったですよ。

佐道 米軍が自爆関係で調査に入ったのは百里からということですか。

夏目 百里です。もちろんその前に米軍も函館へは行きましたよ。だけど、本格的な調査は百里へ来てから。……と思つたなあ。

伊藤 ちょん切つたりなんかというのは、それはどこがやったのですか。

夏目 自衛隊がやったんです。あんなものはだれでもできますからね。

伊藤 だいじょうぶですか。

夏目 壊すんですから。飛んでいくわけではない。

伊藤 だって、復元しなきゃいけないわけでしょう。

夏目 そんなこと考えてないですよ。まあ、三木さんはそう思ったかもしれないけれども。飛んで帰るなんていうことは考えていない。

伊藤 だけど、「早く返せ」という圧力。

夏目 もちろんありました。圧力は相当強かった。で、三木さんがやいのやいのいつてきましたね。それを一寸のぼしに。坂田さんもああいうところは偉いと思うのは、ぐずぐずいつて、とにかく抵抗してましたからね。

伊藤 「ま、ちょっとお待ちください」というような。

夏目 でも、一週間かそこらで返したんじゃないですか。

伊藤 じゃあ、ずいぶん大慌ての仕事ですね。

佐道 十日と。

夏目 徹夜の騒ぎでした。

伊藤 しかしまあ、一週間あれば徹底的な調査ができるわけですか。

夏目 だいたいできました。そのかわり徹夜続きですよ。最後には試運転をして、エンジンを全開にふかしてテストまでしましたからね。

伊藤 実際に飛ばないでもね。

夏目 航空自衛隊の能力もまんざら捨てたものではないですよ。

佐道 早く返せといわれているところでは、分解して調査するなんていつたら、これは相当……。

夏目 それは予想外でしたでしょうね。

伊藤 それは、首相がノーといえなきゃいけないでしょう。

夏目 できないけれども、「ま、一週間ならいいや」といつて、一週間のあいだに返すという方針になりました。アメリカも、すぐ返す手はないと思つているから、そういうアメリカからの主張

もだいぶ影響したかもしれませんね。

伊藤 ああ、それはあるだろうな。

佐道 米軍が直接防衛庁に接触してきたわけですか。

伊藤 百里基地まで米軍チームは。

夏目 チームが来て、ずっとあそこに泊り込みでいたのでしょうか。

中島 三木さんからすると、日ソ関係を刺激するから、米軍が調査チームに加わるのは。

夏目 いちばんソ連がいやがったのは、米軍が調査に加わることです。日本の自衛隊はしようがない。日本へ行ったのだから調べるのは多少覚悟したけど、アメリカ側に調べられるのは理屈が合わないじゃないかと、だいぶ反対はあったようです。だけど、そんなことは全然問題にしませんでした。だれと一緒にやろうと、そんなことはかまわない。

佐道 国内でもそれを問題にする人はいるんじゃないですか。

夏目 いたかもしれませんけれども、そんな大きな声ではなかったし、われわれの仕事でもって、気がとがめるなんていうことはまったくなかったですね。航空自衛隊はもつとひどいですよ。私なんかはまだ、できるだけ穏便にやろうという気持ちが多かったです。航空自衛隊なんか、「この次に来るときはミグ31をもつてこい」とかいたずら書きを残すんですから。

一同 ハッハッハッハッハッ（笑）。

佐道 それは、返すときに機体に。

夏目 機体を書くんです。

武田 それはロシア語で書かないといけない（笑）。

夏目 日本語で書いていた。

佐道 それで来て、ミサイルを落とされたら（笑）。

夏目 本当ですよ。航空自衛隊なんて、普段は訓練とか決められた仕事しかない人たちが、いい仕事をもらったって、高いおもちゃを買ってもらったみたい嬉々としていた。

伊藤 ミグ25というのは、飛んでいる状態は見たことがあるわけでしょう。

夏目 航空自衛隊はカメラで撮影とかいうことはしたでしょうね。だけど、手に触ったり、コックピットの中に座って機器を動かしてみなんんていうことは夢にも思わないですからね。

佐道 函館にあるときに、先ほどのお話にも出ましたけれども、ミグをソ連が奪還しに来るといいう話が出て、それで警備体制をひくと。防衛出動命令を出す、出さないといいうことでいろいろゴタゴタしたという話があるのですけれども。

夏目 防衛出動なんていう話はまったくなかったと思うんです。一部にはあったかもしれませんが。だって、防衛出動というのは戦争ですからね。そんなことで防衛出動を発令するわけがない。ただ、一部制服の人たちのなかには発令すべきだなんていうことを考えた人たちがいたかどうか、それは知らんけど、真剣な議論にはなっていない。ただ、警戒態勢にしては少し大げさな動きをした。だけど、それは警備体制を嚴重にするという範疇で、飛行機が飛んだり、ミサイルを訓練という名目で函館にまで運んだりしたことはありますけれどもね。

伊藤 函館までというのは、函館のどこに設置したのですか。

夏目 どこに置いたのかなあ。

伊藤 だって、あそこに自衛隊の基地はないわけでしょう。

夏目 ないけど、函館のところにも海上自衛隊の基地もあるし、だから、あの辺の山の公園か飛行場のどこかへ持ってきたんじゃないですか。車載のミサイルですから、置こうと思えばどこでも置けますから。まして、飛行場の中だったら、滑走路の邪魔さえしなければ好きなところへ置けますよね。それから、護衛艦が津軽海峡を絶えず遊弋していたりね。

伊藤 これは向こうの潜水艦を警戒してですか。

夏目 そうですね。それから、最後は、大きい重いやつをギョラ

クシーで運ぶのですが、函館からスツと海の上へ出るんです。海の上は漁船からステインガーか何かの携帯ミサイルで撃つても、撃墜することはできるのですね。だから、函館からC5が飛び立ってある程度の高度を保つまでは、漁船といえども入れないような、そういうことはしたと思うんです。地元の小さな身許の知れた漁船はどうか知りませんが、わけのわからん船が入らないように。そういうことはあつたけど、防衛出動の議論があつたというのは聞いていません。あるいは、私の耳に入らないのかもしれないかもしれません。ただ、自衛隊は必要以上に興奮していたことは間違いないです。特に陸上自衛隊は。戦闘配置につくみたいな気持ちでいたことは間違いない。だけど、それはちよつとオーバーなのでね。

中島 陸上自衛隊とすると、ソ連が奪回しに来るんじゃないかと。夏目 と思った、多少それは……。だけど、奪還といつたって、部隊が来るなんていうことはわれわれは考えていないんですよ。密かに不穏分子が来てやるとか、飛行機が何か来て、バンバンと機銃掃射が何かをして壊せばいいのですから。調べられるのはいやなんです。下りちゃったものはしょうがない。大挙、大部隊がそれを取り返しに来るなんていうことは常識的に考えられないね。

伊藤 それでは陸上自衛隊の出番なんかないじゃないですか。

夏目 ない。だから、ミサイルだけです。

伊藤 ああ、そうか、ミサイル。

夏目 ホークミサイルを千歳から運んだ。

佐道 でもまあ、陸上の人はまた違う理屈を。

夏目 いうかもしれませんね。それはまあ、そのときの当事者の中にはあつたかもしれませんが。

伊藤 人によって、実はずいぶん危機的な状況にあつたんだという人がいますよ。

夏目 いる、いる、いまでもいますよ。だけど、結果的に当たってないですね。アメリカの情報がちよつと深刻なものもあつた。取り返しに来るなんてね。こつちがそう思うだけじゃなくて、アメリカがいうと、錦の御旗みたいに思うやつがいますからね。伊藤 まあ、アメリカの情報だって、いつも正確というわけではないですからね。

夏目 まったく当てにならない、当てにならないのが結構多いです。

伊藤 今度のイラクもそうかなあ(笑)。

夏目 当てにならないというのはでたらめという意味ではなくて、意図的なものもあるということです。彼らは何かの目的に合わせた情報をリークして、操作するからね。

伊藤 それをやつて、日本の自衛隊がどの程度動けるかとか見える。

夏目 今度のイラクだつてみんなそうじゃないですか。

伊藤 それで、最終的には日立港から返すわけですけども、返す、返さないなんていうのは外務省がやっているわけですね。

夏目 外務省と一緒にした。だけど、返すといつたつて、外務省は手続きすればいいのですから。実際に返すのだから、いまいつたように調べておわつて、もうこれでいつ返してもいいよとなると、今度それを日立という。百里というのは内陸部ですからね。

船で運ぶには港まで持つていかなければいかん。

伊藤 そうですね。どうやつて運んだのですか。

夏目 トラックで運んだんです。でかいトラックでねえ。

伊藤 道幅が。

夏目 その道を調べるのが一苦労でしたよ。曲がらないのなもの。

伊藤 ハッハッハッハッハッ。

佐道 日本の道だと(笑)。

夏目 高速道路でもあればね。

伊藤 まあ、あんなところではないですけども。

夏目 当時はなかったですからね。茨城県警に頼んで、そういう調査をずつとしてもらって、曲がり角はどうだとか、みんな綿密に調べて。時速何キロって、まあ、ゆっくりゆっくり運んだんです。一晩かけて日立まで持っていったかな。

伊藤 これはちゃんと調べちゃったから、途中でやられてもだいじょうぶ(笑)。

夏目 そのときはやられる心配ではなくて、むしろ、ぶついたりしないで無事にすむかどうかという。その間は、今度はソ連と、いつ返すか、どうやって返すのか、なんていうことですよ。彼らも別のチームが来て。

伊藤 それは日立までですか。

夏目 東京で。ホテルに泊り込んで、連日協議をしました。

伊藤 交渉ですか。

夏目 うん。

伊藤 何が問題になるのですか。

夏目 返す時期と、返し方ですね。

伊藤 返し方というの。

夏目 こちらは、遠くから持ってきてくれといわれても困るのだけれども。こちらはいちばん近い便利なところから返したいし、向こうはどこそこへ持ってきてくれとかいう話からありますしね。裸では困るとか、壊していかないとか、いろんなことをいつていました。夜になると一杯飲んでいたけどね。みんな、日本語ペラペラ。しかし、しゃべれるような顔はしないね。

伊藤 ほう。

夏目 ロシアの日本語能力というのはすごいですね。そいつらはみんな東京でやっていたのが、日立まで行って船で一緒に帰った者も何人かいましたよ。

中島 それはロシアの外務省関係なんでしょうか、軍関係ですか。

夏目 あれはどういう関係かねえ。軍もいたし、いつも後ろにい
わゆるKGB。

伊藤 日本語で話しをしたのですか。

夏目 しないですよ、絶対。

伊藤 飲んでも？

夏目 うん。ただ、やつぱり知っているから、何か変なことをいうと、こうやって聞き耳を立てる(笑)。わかるんじゃないか。最後になつたら、わかるといつていましたね。

伊藤 でも、一応交渉は通訳を入れてやるわけですね。

夏目 そう。

伊藤 それは記録のために必要だからかなあ。

佐道 先生も交渉に行かれていたのですか。

夏目 いつも行きました。外務省は、何か話があるとすぐ「本省お伺い」というのです。防衛庁というのはおおらかでして、坂田さんというのは、「もう、好きにやってこいよ」という(笑)。好きにやってこいよということもないけれども、要するに、任せ
るからというので。まあ、報告はしたけれども、「いいよ、いいよ。それでよし」とかいって、細かいことは一切なかったですね。こちらは気が楽で、毎日日立で酒を飲んでいました。外務省は、夜になると本省と連絡して、大変でしたね。

伊藤 やはりこういうのを返すという行為自体が外交問題としてはなかなかやつかいなのですかね。

夏目 そうでしょうね。返し方とかね。返すとなると今度は、あれはまた武器輸出。

佐道 そうなんですよ。

伊藤 輸出？ アハハハハハ(笑)。

佐道 輸出になるんです。

武田 えーッ、そうか。

夏目 ちゃんと税関が来てチェックするんですよ。もう、本当に

アホじゃないかと思う。

佐道 その記録を読んだときはぶっ飛んじゃって。突然入ってきて、それでも武器輸出（笑）。

夏目 それで、日立に持っていきますでしょう。日立に持っているけど、ソ連のタイゴノスという貨物船が来て待っているわけです。そこへ運び込んで、岸壁で一たんおろして。今度はソ連のクレールンで岸壁から自分の船へ上げるんです。自衛隊は、何百万という金をかけて、一つひとつ梱包をして。コックピットなんか、箱を開けるとちよつとコックピットがのぞけるように棺おけみたいにつくつて（笑）、立派な梱包をしたんです。彼らは上へ上げた途端に、まさかりでバンバン壊した。中をもう一度チェックしたんです。彼らがチェックするんです。日本に何をされたか、これはあるか、ないかと。これが時間がかかるんですよ。

中島 向こうの本物のミグチームが来るのですね。

夏目 また、模型のミグが何か積まれたのは……。

一同 アツハツハツハツハツハツ（笑）。

佐道 「残念でした」と（笑）。

夏目 すごいんですよ、時間をかけて。それで、その木材をみんな岸壁に投げるんです。こちらは何百万と……、私のうちを建てるより立派な箱だったけど。

佐道 アハハハハ、そんなことはないでしょうけど（笑）。

夏目 もつたいたいなあと思っただけで、考えたら、シベリアなんか、材木はいくらでもあるでしょうね。おもしろかったのは、そういうところへ蝶番なんかを使っているでしょう。そういう金属付属品みたいなものは、目を掠めては、作業員がポケットへ入れちゃうんです。それから、こういう工具がないから貸してくれというので、こちらからハンマーとかのこぎりみたいないろいろなものを持っていった。それがどこかへ消えちゃうんですよ。

佐道 持って帰っちゃうわけですか。

夏目 持って帰っちゃうんだね。まあ、たいした金ではないから、

そう追求はしなかったですけれども。要するに、ロシアでも、シベリアあたりではそういうものが不足しているのですかね。だから、そういう民度みたいなものがわかるような気もした。材木は山ほど捨てて、そういうものは大事なんですね。

武田 金槌をポケットへ入れているんですね（笑）。

佐道 それ、悲しい……（笑）。

武田 悲しいですね、本当に。

夏目 ベレンコだって、着ている物は雑巾みたいなものでしたよ。

伊藤 エツ、洋服ですか。

夏目 雑巾というか、まあ、本当に質の悪いものを着ていた。

中島 飛行服ですか。

夏目 うん。

中島 そうですか。

夏目 だから、やっぱり貧しいのでしょうね。

佐道 ベレンコにお会いになりましたか。

夏目 私は会いません。

伊藤 じゃあ、どうして衣服がわかるのですか。

夏目 だっけと見ていたもの。ただ、帰るときは、ちゃんと背広か何かを。それこそ安いスーパーカーか何かで買ったようなのを着ていたのではないですか。

中島 ソ連側の受け取りチームというのは、交渉してみてもどんな感じでしたか。

夏目 一人ひとり是非常に友好的ですよ。冗談もいうし、話は合うし、愉快だしね。いいのだけれども、国と国というか、組織となると固いですね。

伊藤 でも、返すわけですから、争点はあまりないのではないですか。

夏目 やはり、いうことはいってこないと、帰ってからいわれる

のではないですか。

伊藤 でも、何もいうことはないじゃないですか。返します、受け取ります。

夏目 まあ、こちらにすればそうですね。済んじゃったのだからね。何だかんだいったって、「いやなら返さなくてもいいんだよ」といえるから、気が楽でしたけれども。わざわざチームが来て、返す相談なんかするほどのことでもない。

伊藤 ないですよ。彼らは来たかつたんじゃないの、東京に(笑)。

夏目 それと、どこまで調べたかというのに興味があったのでしよう。それは微細にわたって調べましたよね。

伊藤 いわゆるブラックスポーツも全部見たわけでしょう。

夏目 うん、みんな。多分、その資料はみんな航空自衛隊にあるのだと思います。僕らは見てもわかりませんから。ただ、アメリカの飛行機を見慣れている人から見ると、たいしたものではないらしいです。

伊藤 でもまあ、単発の目的としてはいいでしょうね。

夏目 頑丈です。アメリカの飛行機なんて、あちこちにノンストップとか、ドント・ステップとかと書いてあるんですがね。足をかけるところが決まっているんです。あんなもの、どこへ乗っても平気なもの。

伊藤 ハハハハハッ(笑)。じゃあ、引渡しはとにかくあまりゴタゴタしないです。

夏目 防衛庁にとっては、まったくゴタゴタすることはなかったです。あとから報告しても別に叱られもしないし、だからからもクレームも来ませんし。

伊藤 ソ連側だって、引き取ってからは何もいってこないでしよう。

夏目 うん、何もいってこない。

伊藤 「あの部品が足りなかったよ」とはいわないでしょう。

夏目 全然いってこない。いつてきたかもしれないけれども、私は記憶がないから、いつてこないでしょうね。もう覚悟していたのではないですか。

佐道 外務省が毎晩本省にお伺いをたてて相談しなければならぬということというのは、いつたいどんなことがあったのでしょうか。

夏目 何をやったのかねえ。

伊藤 だから、武器輸出だって(笑)。

夏目 そういう法規的なことじゃないのかなあ。外務省といたって、あれは僕らが普段付き合っている安全保障課とかそういうところではないからね。

伊藤 経済局か何かかな。

佐道 欧亜局。

伊藤 ああ、そうか、ソ連か。

夏目 欧亜局のソ連課とかロシア課とか、そんなのじゃないのかな。

伊藤 そうか、そうか。

佐道 早く返して云々というのは、三木さんの意向として伝わってきたのですか。

夏目 そういう記憶があります。三木さんという方はああいう、ある意味ではリベラルというか。しかし、ここでもって調べないで返したら国辱だろうと。物笑いになるよということを再三いつていただいた記憶もあります。やっぱり、日ソ関係をあまりギクシヤクしたものにしたくないというお気持ちがあったのでしようね。

佐道 先生ご自身は、この問題に関与されるようになってから、官邸と接触するということはあったのですか。

夏目 私は直接ないですね、官邸とは。

伊藤 それはだれがやったのですか。

夏目 だれがやったのですかね。防衛局長の伊藤圭一さんか、大

臣かだと思うのですけれども。

佐道 こういうときには次官は。

夏目 次官もやったのかもしれませんが。だけど、もうそのころはそんなにないですよ。むしろ、来たときのほうが官邸中心にドタバタやっていました。

伊藤 結局、そのドタバタは防衛庁が中心になってやるということとで。

夏目 そうですね。だって、ほかにやるところがないじゃないですか。

伊藤 まあ、それはそうでしょうけれども。

夏目 手続きといたって、ねえ（笑）。ああいうのを見ていると本当に、有事法制がないと何もできないとわかるけどね。

伊藤 しかしまあ、ねえ。この事件というのはかなり大きな影響を与えたと思うのですけれども、ひとつは防空体制がこのままではだめだと。要するに、あれは低空を飛んできたのでしょうか。途中でキャッチしたのですか。

夏目 途中でキャッチしてはいたけど、見失っちゃったんですね。だって、本当に海面スレスレを飛んできているのです。海面スレスレに来たら見えませんね。地上レーダーでもだめだし、飛行機が飛んでいても、飛行機は下が見えませんか。だから、低空に飛んできたのに対しての防空の穴があるぞということは、まあ、昔から常識なのだけれども、むざむざと現実に見せつけられたということはありません。

中島 レーダーでキャッチできなかったのは、ヒューマンエラーではなくて、そもそもシステムの問題だったという。

夏目 システムというより、機械の性能がそうなんです。地球というのは丸いでしょう。だから、レーダーを飛ばしたら、必ず上を向かなきゃだめなんです。海面反射するだけだからね。やっぱ水面より上へ向けているから、どうしてもずーっと死角がで

る。そこを入ってきたときには、もう間に合わない。飛行機もレーダーを持ってきているけれども、ある程度下は見えないけれども、上とこつち（同じ高さ）は見えるのだけれども、下は見えないですね。自分と同じ高さに行けば、見えるかもしれない。戦闘機もね。そういう意味で、新しい下まで見える飛行機を買うことになったでしょう。

岡田 E2Cですね。

夏目 それが一とつのきっかけですよ。

伊藤 やはり、それはそういう対処をなさったわけですね。これは領空侵犯といいますが、実際にこれは亡命ですけれども、そういうのがまたこれからありうると。

夏目 幾つか問題があるのですが、まず低空飛行の問題があった。もうひとつは、彼らは日本の防空体制を知っているのみならず、日本は、いかにそういう不法行為をしても実力行使をしないだろうという安心感があつて来ているんだね。見つかる、途中から帰れとか、威嚇射撃とか、いろいろ国際法で認められた手続きはするので、なかなか入ってきにくいですけども、入っちゃったら、落とすとか、そういうことはしないということも百も承知なんです。

伊藤 しないのですか。

夏目 原則としてしない。日本の領空侵犯対処というのは実力行使してはいけませんよ。向こうから撃つてこなければだめなんです。

伊藤 ああ、そうか。

夏目 あるいは、日本のそばへ来て、東京の上空で弾倉を開いたとか、そういう話になって初めて、これは正当防衛ができてくるんですね。というのは、やはり法律論なんです。要するに、警察法から出発しているから、法律すべてが軍隊としての機能に着目していません。だからそういうことになるので、そういうことを彼らは知っているのです。ソ連ではどうかというと、彼ら

の憲法によれば、国境を侵すとなれば無条件で撃つていいんですよ。だから、そういう意味で日本の領空侵犯体制というのはこのままではよくないんじゃないかという反省がありました。だから、いうことを聞かないやつが警告射撃し、それでもだめなやつは撃つてもいいみたいな、たしかその後そんなような強化をされたのではないのでしょうか。実際に行使したことはないか、あるか、知りませんけれども。

伊藤 海ではこのあいだ北朝鮮のあれをやったじゃないですか。

佐道 ずいぶん時間がたっていますけれどもね。

夏目 だから、撃つほうも非常に重荷を感じて動かなければならない。日本のパイロットなり、一線にいる人たちの負担になっちゃいけないということなんですよね。

伊藤 でも、実際にもし攻撃だったら、撃たなかったらやられちゃうわけですからね。そうしたら、今度はやはり責任を追及されるでしょう。

夏目 海上保安庁だって、あれは撃ってきたからやっつたんですよ。ね。

伊藤 まあ、そうですね。だから、そういうことも反省点としてある。もうひとつは、国内の連絡体制ですよ。また同様のことがおきたときに、そういうものについてどう扱うかということ。各省が小田原評定をやったのはいかなんということ。

伊藤 これは何日もかかったのでしょうか、やっぱり。

夏目 何日かかかったんじゃないですか。毎日ばかばかしい議論を聞いていたから。

伊藤 それで、「じゃあ、今度こういうことがあった場合にはこうするぞ」というシステムづくりは出来たのですか。

夏目 出来たと思います。出来ても、それが役に立ったためじゃないですね。その後いろいろなことがあった時は、いつでももめるじゃないですか。

伊藤 まあ、そうですね。

夏目 そのあと大韓航空のときもそうだし、何かあっても、そのへんの各省の連絡体制というのはそのたびにいわれるのですけれどもね。官邸には早く上がるようになりました。とにかく総理には。しかし、各省との連絡体制というのは、縦割り行政であるあいだは絶対に改善されません。例えば自衛隊なら自衛隊、警察なら警察に、ソ連の国境警備隊のような機能と権限を付与すればともかく、そういうものを包括的に与えない限りはだめですよ。通産省、法務省、海上保安庁、とにかく六つか七つの役所がお互い、ヤイヤイ、ヤイヤイやりますね。

伊藤 結局、有事法制をもっと整備しないとだめということですね。実際の事態の想定よりも、いまの法制度をどうするかということのほうがいろいろ問題になってしまっているんですよ。いまの法とどう抵触するか。

夏目 このケースで。

伊藤 いやいや、一般的には。

夏目 一般的にね。だけど、いまの法律というのはすべてそうなんですけど、国内を戦場とするようなことを想定して法律ができていませんから、無理ですよ。

佐道 でも、専守防衛ですから、国内が戦場ということなのですからね。

夏目 要するに、戦争ということを前提にしていないのでしょね。

伊藤 こちらが戦わないといえ、戦争はないという想定ですからね。

佐道 そういった人がいましたし（笑）。これは結局、何も考えていなかった時期にこういう事件が起きると、法務省にしろ、運輸省にしろ、今ある現行の法律問題としてずっと議論していくわけですね。

夏目 そう。

佐道 そうすると、防衛庁としても、法律論で向こうが来たときには、法律論で対応しないといけない。

夏目 防衛庁にはそんな法律ないですからね。法律なんていわれたら、「そうかい。じゃあ、どうぞよく議論してください」というしかないですよ。だから最初は、防衛庁、自衛隊といえどもあの飛行機に近寄れなかったんです。現物の周りは、まず警察が警備しちゃった。

伊藤 警察自体もそれをいつたいどういうふうにしていいかわからないでしょう。

夏目 そこにあるわけだから警備はしているけれども、だけど、じゃあ、これをどうするかといったら、知恵があるわけではないんですね。そういうところへきて初めて、「防衛庁に」ということになった。

佐道 やり始めたけど、あとから困ることがわかって、防衛庁にという(笑)。

夏目 それは、出入国管理法違反もいかんけれども、入ってきたやつたものをいままさら帰れともいえないですしね。

伊藤 乗って帰れ、ですか(笑)。

夏目 ほんと、ばかげた議論をしていましたよ。

伊藤 まあ、先生のおっしゃる「法匪」ですな。では、ミグはもうやめて先へ進みましょうか。

■防衛問題研究会

佐道 若干その関連の質問が白書のところであるのですけれども。

伊藤 三番目に書いている、『朝日新聞』の「防衛問題研究会」というのは。

佐道 これは後追い記事が全然ないので。

夏目 これは、このあいだちょっとお話しした、例の学者のあれではないのかな。これは何年ですか。

佐道 七六年です。

夏目 坂田さんのときですか。

佐道 そうです。

夏目 坂田さんのいるときのあれならば、発足というほどのものではないんだな。例の高坂正堯とか、公文俊平とか、佐藤誠三郎とか、渡辺昭夫とか、そういう人たちと勉強会というか、研究会というか、そういうことをやったのは事実です。

佐道 それを新聞記事的に少し大きく取り上げたのかもしれないですね。

夏目 ね、うん。べつにそんなのは防衛庁の政策とかそういうものに直接影響を及ぼしたわけでもないの。むしろ、坂田さんの大きな狙いというのは、いままではどちらかといえば左よりの学者が、特に安全保障、防衛問題について論じていることが多かったけれども、まともな学者にも、自衛隊、防衛問題に対する理解を深めていく必要があるんじゃないかと。それは、結果的に成功しているんだと思うのですね。その後、そういう若手のいい学者がみんな安全保障の問題に関心をもち始めたから。坂田さんというのは、そういう意味では非常に僕らが考え及ばないことを考えられる人です。

伊藤 坂田さんについている知恵袋はいるのですか。

夏目 この前もちょっといったけど、彼は文教族ですから、学者とはいろんな人と付き合いがあったことがひとつと、秘書官が非常にこういうことの目端の利いた人だから。

伊藤 その秘書官は何という人でしたっけ。

夏目 渡瀬憲明とあって、その後衆議院議員になるのですが、病気で死んでしまうのです。坂田さんの意を付度してパツと行動に移る、秘書官としては非常に能力のある人でした。癖もあるけどね。

伊藤 それはご自分が連れてきた秘書官ですか。

夏目 そうです、そうです。ずっと秘蔵っ子みたいに若いときか

ら。地元の熊本から連れてきた人です。

伊藤 やつぱり、いくら知恵のある人でも、そういう手足になったり、頭になつたりしてくれる人がいないと。

夏目 多分、そういう人たちの紹介でいまの若手の人たちを連れてきたのではないかと思います。それと、学者の方々もそういうことを感じていたのでしょうかね。いろいろ勉強はされるけれども、生の情報というのに触る機会が学者の方は少ないですよね。そういう意味でやはり、役所とか何かとコネが出来れば、そういうストリートな情報が入るというメリットがあることもあったのかもかもしれません。

伊藤 それは大きいでしょうね。

夏目 だから、防衛研究所なんかの所員というのはあまり期待していなかったなあ。

中島 すみません……(笑)。

夏目 というのは、要するにそれだけPR能力がないと思つただね。中にいる人たちがやってもだめだと。外にいる人たちが発言したり、行動したりすることのほうが、波及効果というか影響があるという政治家独特の勘でしょうね。

伊藤 そうでしょうね。やはり、防衛研究所とか防衛大学校とかという……。

夏目 いくらいつても、身内が言つても効果はないんですよ。

伊藤 そういうところは自分たちで固まって、外に手を出していかないのですよね。

佐道 防大もそうですか。

夏目 防大というのはもともと理工系の大学ですから、そういうチャンスがまずない。文系の先生というのも多少いたんですよ。国際政治の先生も。だけど、なかなか外で物をいえる場面を与えられないでしょう。

伊藤 防衛大学校というだけでだめだよ(笑)。

夏目 最近多少よくなったけど以前は防大の先生というだけで、「あれはもう、いうことはわかっている」という。防衛研究所だつてそうですよね。

伊藤 だけど、防衛大学校の先生も最近はお番が多いですよ。

夏目 そういう時代になったのも、きつかけはこういうことだと思ふんです。大学へくる若い助手というのですか、そういう人たちも優秀な人が来るようになったからね。

伊藤 分け隔てがなくなつたことは確かですね。特別な人を除いては。

佐道 猪木正道さんがこのころはまだ防大の校長をしておられたと思うのですけれども、やつぱりそれでもまだ変化はそんなに大きくなくなつたですか。

夏目 猪木さんも非常に優秀な方なのだけれども、防大の校長になつたことで動きにくい面はあつたと思います。だから、猪木さんがおつしゃつても、防大の先生がいうのはあたりまえだなど思ふのでしょうかね。一般の大学に対して、なかなかこままでいかなかつた。ただ、高坂正堯という人は猪木さんの弟子ですからね。また、高坂正堯のつながりで、だんだん広がっていったということはあるかもしれませんね。

伊藤 さて、その次は、国防会議と閣議で「防衛計画の大綱」の決定ですけれども、この段階になりますと、これは日常業務ではないかなと思つたのですけれども、どうですか。

夏目 久保さんの論文が時を経て目の目を見たという言い方もできるのかもしれませんが。細かいことは別として、大筋で久保路線に近いものが出来たわけですから。久保さんはやめたけれども。それは久保さんがいったからとか何とかではなくて、防衛庁の多くの人達もそう思っていましたからね。あらゆる意味で、防衛力の増強というのはいくら願つてもできないのだと。だから、あるところで妥協して、中の質をよくすることしかないんじゃないか。

それは、政治的にも、予算的にも、人間の数から見ても、施設の数から見ても、どこから見ても大幅な増強なんていうことは不可能だ。だとすれば、そのなかで自衛隊のあるべき姿というか、いい方向を見つけていくしかないんじゃないか。質的には優秀なものにしよう。規模はある程度のところを押さえると、こういうことになったんです。だから、大綱というのは決して脱脅威ではないんです。

伊藤 一応、それは謳ってはいるんですね。

夏目 ま、妥協しているんですよ。久保さんの論文と、各制服の人たちの言い分とね。だけれども、結果的には脱脅威に近い。制服の人がそこで多少折れたのは、これ以上いっても、われわれの望むべくものはなかなか出来ないだろうということがひとつ。もうひとつは、エクスパンション条項というのですかね。要するに、いざとなったらこれを急速に膨らませる潜在能力を持たせようというところで妥協したんです。でなければ、なかなかうんと言わなかったと思うのです。

伊藤 まあ、潜在能力なんていうのは、やはり言葉ですよ。

夏目 まあ、結果的にはそうなんですけれども、そういうものを堂々と謳うことによつて彼らも……。彼らも実際はできると思っていないですよ。もつぱら哲学の話ですからね。理屈が合わないというだけで、そんな大きなものができるとは思っていないんです。船がこのくらい要るんだとか、要らないんだとかという議論ではないものだから、あんまり真剣みがない。彼らがいちばん大事なのは、本当にこういう防衛力の規模を減らされることなんです。しかし、それはあの時代からみて、政治的にも、経済的にも、とても望むべくもないんだということになれば、まあ、妥協すると。

中島 ちょっと時代がさかのぼってしまうのですが、先生が防衛課長を七五年までやっていらっしゃって、西廣（整輝）さんに引

き継がれるわけですよ。そのときの引継ぎ事項として。

夏目 西廣は私よりもっと大綱派だから。大綱派というか、久保理論に近い。私はまだ逃げ腰で、両方にいい顔をする（笑）。だけど、あの人はきちんと。

中島 先日、西廣さんの追悼集を読みまして、先生もお書きになっていらっしゃいましたけれども。そこで、当時、西廣さんの下で三井康有さんが長期的な観点から大綱の検討を進めていったと。ここで私がわからなかったのは、「検証論」という言葉が出てきました。これは聞かれたことがありますか。

夏目 何を検証するんだ？（コピーに目を通す）ああ、これはね、脱脅威で物を考えたのだけれども、脱脅威ではうんと言ってくれないから、じゃあ、それで何ができるかといったら、限定的小規模侵攻に対しては有効に対処しようという、前と同じようなことはいえるのではないか。だけど、大綱のときにはもう検証論ではないですよ。大綱の防衛力の目的は、そういうものに対応するんだというふうにはつきり謳っているのですね。だから、検証論なんていうのは、彼が自分で考えたか、その過程においてそういうこともあったかもしれないけれども、目の目を見ることはない。中島 先ほど、エクスパンション論というお話が出ましたね。エクスパンション論と検証論はもちろん違うと思うのですが、結局、大綱で採用されたのはエクスパンション論ということですね。

夏目 そちらはきちつと大綱に載っている。

中島 わかりました。ありがとうございます。

夏目 それがないと、制服はうんと言わなかった。三井君というのは非常に勉強家なんだよ。まあ、西廣のほうがちよつとアバウトなところがある。三井というのは細かなことまでやるものだから、そういう議論があっても不思議ではない。彼のいいようなことだね。だけど、検証論というのは大綱にはまったく出てこないでしょう。出てこないし、白書の解説にも出てこない。

中島 ええ、出てこないですね。

夏目 それは無理だよ。検証なんかをしたということになると、かえっておかしなことになる。制服を逆撫するような話なので。だからいいじゃないか、という話はしたかもしれないね。

中島 三井さんの書き方が、あたかもこれでユニフォームの方を説得したというような形になっているので。

夏目 そういう癖があるんです。そういうことですよ。俺より西廣のほうが大綱論者だといったけれども、彼はもつと大綱論者なんだ(笑)。もうちよつと厳しい大綱の久保的な発想を前面に押し出そうとする人でした。

中島 では、先生が課長のときにやってらつしやつたことより、さらに一歩進んでしまっているというか。

佐道 やはり、防衛庁内には久保派といいますが、大綱派というのは相当多かったということですか。

夏目 内局の人はほとんどそうじゃないですか、ごく一部を除いて。制服はほとんど反対。

伊藤 まあしかし、だからといって事態はどうにもなるわけではないから。

夏目 現実を考えたら、できるはずがないということはみんなわかっているんです。ただ、哲学というか理念の話ですから、そう目くじらを立てて議論したからって実益があるわけじゃないし、どこかで変わるわけじゃないんです。だから、どこか妥協したのでしょうかね。それとやはり、当時の坂田さんがそういう論者でしたからね。「小さくても何とか」と標語をいつたくらいの大臣ですから、まあ、それはしようがなかったですよ。

■三原防衛庁長官

伊藤 この年の十二月に三木内閣が倒れて、福田内閣ができて、三原(朝雄)さんが防衛庁長官になります。三原さんはどうでしたか。

夏目 三原さんという方は、満州浪人なんですね。

伊藤 ああ、もともとがですか。

夏目 大学はどこを出たのか知りませんが、とにかく大学を出て満州へ渡って、満州には大同学院というのがあったでしょう。満州の役人の研修所みたいなもの。そこへは入って、満州国の役人になったのですね。だから、一種の大陸浪人みたいなもので、風貌とか物の考え方もちよつとそういうところがあつてね。壮士風だしね。素朴な方だけれども、人格の優れた立派な人でしたよ。これがまた、変な話だけれども、私の叔父の夏目忠雄と満州浪人時代の仲間なんです。いちばんの親友なんです。だから、「やあ、やあ」というようなもので(笑)、非常にかわいがつてもらいました。その後も、やめてからもそうでした。

武田 前々からご存じですか。

夏目 大臣になる前から知っています。政務次官もやりましたね。

伊藤 でも、夏目先生はそうやってかわいがられる人が多いですね。

夏目 かわいがられたというか、私は非常にボキャ貧だから同じ言葉でいうけど、そうではなくて、非常に親近感を覚えたというか。向こうも気安く、「おい、夏目君、夏目君」といつてくれたということはありません。

伊藤 でも、いままでのお話でもずいぶん、「夏目君、夏目君」で呼ばれていることがたくさんありますよ。

夏目 政治家にゴマをするのがうまかった(笑)。

伊藤 ハハハハハ(笑)。三原さんになって、少し変わったことがありますか。

夏目 坂田さんという人は非常に自分の個性を出したことをやられる方でしたから、一部の人からは喝采を浴びて、特にマスコミは、外から見ると非常に格好いいんです。だけど、中の制服から見ると、やつぱり大綱をつくった人ですから、あまりおもしろくはないです。そこへいくと、三原さんというのは一種の愛国主義

者ですからね。国土だし、非常に自衛隊に向いた人ではあったでしょうね。

伊藤 ほう、おもしろい(笑)。

夏目 瑣事かまうべからずで、あんまり細かいことはいわないし、非常におおまかな大臣でしたからね。いつもニコニコしているし、大きな声は出さないし、いうことはよく聞いてくれるし。それでいて、気軽に、動き回ってくれるんですね。党内でも、どこでも。伊藤 はあ、そうですか。力としてはどうですか。

夏目 あるんですよ。あの人は派閥に属していないのだけれども、それから大臣を五つも六つもやっていくくらいですからね。派閥なくして、あんなに大臣を次から次へとやる人というのは、やはりどこか人望があったのでしょうか。

伊藤 はあ、おもしろい人だなあ。

夏目 竹下(登)さんなんかも、「おい」「おまえ」で口をきいているし、「三原のおつちゃん、元氣か」とか、年じゅういうような間柄だしね。だから、人望はあるんですよ。その後、しばらく安全保障調査会の会長なんかを自民党でもやっておられて、防衛族の大ボスですよ。その後のことだけど、予算のときになると、私より向こうのほうが防衛庁にいる時間が長いんじゃないか。非常に熱心によくやっていただきました。

佐道 防衛政務次官以来、ずっと防衛問題に関心を持っておられたのですか。

夏目 関心はお持ちでした。

佐道 じゃあ、いろいろと。

夏目 それは理屈ではなくて、要するに好きなんだという、国防は大事だという、そういう非常に心情的なものが先に立ったような方です。理路整然とどうのこうのという坂田さんみたいな人ではなくて。だから余計に自衛官サイドからの評判もいいし。

佐道 特に何か新しいことを始めようとかというタイプではない。

夏目 それはあまりないですね。三原さんという方は、そんなに目立とうとか、いい格好をしようとか、そういうところはないですからね。

伊藤 ある意味では実務的なんですね。

夏目 そうですね。だから、部下としては仕えやすいし、遠慮なく物が言えるし、議論もできる。

伊藤 じゃあ、しばしば意見を求められるということもあつたわけですか。

夏目 あつたかもしれませんが。まあ、私は直接はないと思いますけれどもね。審議官ですからね。

伊藤 でもまあ、知り合いですから。

夏目 知り合いだけれども、そんなに年じゅう役所で、「おい、おい」というわけにはいかないからね。

伊藤 いかないですか、やつぱり。

夏目 それはいいかない。こちらもそんな態度はとらないですしね。伊藤 まあ、それはそうですけれども、アフターファイブということもありますから(笑)。

佐道 下の方とお酒を飲みに行かれたりされるのですか。

夏目 それは三原さんもやりました。坂田さんもよく飲みましたよ。坂田さんは、飲んでも理屈が多いから、くたびれちゃう。

佐道 ハハハハハ、三原さんはどうなさるのですか。

夏目 三原さんは、「うん、うん」とにこにこしながら聞いているから、どうせ飲むのならそういうほうがうまい。

伊藤 やつぱり、酒を飲むときに理屈をいうよりは、ばかをいつていたほうがおいしいですね(笑)。

夏目 多少ね。坂田さんというのはちよつと身構えていないといけないし、あんまりなれなれしくなると、すぐガツンと来るしね。三原さんになつてから、防衛庁もよかつたんじゃないでしょうか。やつぱり大綱みたいなのができたあとでしょう。だからもう、

「やれ、ひと仕事すんだ」というところから、多少落ち着いてい
るしね。やつぱり、みんながっかりしたところからいくらか息を
吹き返して、のびのびとしてきたというような、ちょうどそうい
う時期かもしれません。

伊藤 まあ、ある種の安定ですね。

夏目 そうですね。

■カーターの在韓米軍撤退政策への対応

伊藤 安定とはいえ、ちょうどその時期がまた、アメリカの大統
領選挙でカーターさんが当選と。まあ、カーターさんは前から、朝
鮮半島からの撤退とか、なんか怪しげことをいろいろいつていた。

夏目 まあ、あの人ならいいそんなことではあったわけです。こ
こ（質問項目6）に書いてある「対応策が検討され」。対応策の
検討も何もないので、アメリカが引き揚げるというのを、たしか、
一時は防衛庁にも、韓国から米軍が引き揚げたら極東アジアの安
定度が損なわれるだろうと懸念する向きがあったんです。だけど、
反対する意見があったのと同時に、そんなことをいつている場合
じゃないんじゃないか。むしろ、そんなことを反対すると、「お
まえ、自分でやれ」みたいな話になる。日本の安全保障なんてい
うのはもともとアメリカがあつてのものじゃないか。そんなこと
を言えばアメリカの世論を刺激することにもなりかねないだろ
う。それやこれやでもつて、なんかあんまり元氣のあるような発
言にはならなかったですね。たしか総理かだれか、「これはアメ
リカと韓国で決めればいいや」というようなことをいつたのかな。
そうしたら、アメリカから釘を刺されて、「これは多国間の問題
だ。日本を含めた重大な問題だ。その認識がないのか」みたいに、
ちよっとお灸をすえられた（笑）。防衛庁ではないですけどね。
だれだか忘れたけれども、そんなことがあつたような気がするね。
中島 この年の三カ月前の八月ですけれども、板門店でポプラ事

件というのが起きていますね。

夏目 ん？

中島 板門店事件といわれていますけれども、ポプラの木を。

夏目 ああ、ああ、あつたねえ。

中島 これでかなり緊迫したと思うのですが、日本ではどのよう
な反応だったのでしょうか。

夏目 まあ、その事件は知っているけれども、そんなことはない
と思うね。むしろ、韓国からの撤退というのは伏線があると思
うんです。ベトナムがおわつて、アメリカ軍はベトナム戦で疲弊し
きつているという時期なんですね。予算的にも、軍費は減少傾
向にあつて、「アメリカもあちこち手を出すのはもうやめようじ
ゃないか。できないじゃないか」という国内世論がある時期。カ
ーターというのは民主党でしょう。民主党というのはいつもそ
うなんです。ブッシュやレーガンみたいなわけにはいかないで、
非常にハト派的な発言が出ますから、ある程度予想は立てていた
けれども。ま、そんな時代背景もあつたと思いますよ。カーター
がこういうことをいつたことが、その後、防衛協力の推進とか、
思いやり予算とか、そういうところへつながつていくといえ
ば、つながつているのですよ。米軍の駐留経費を少し軽くしようと。
そういうことはあつたと思います。

伊藤 これはアメリカの予算の問題になるのですね。

夏目 だと思えますね。カーターというのは、このころはまだそ
うでもないのだけれども、やたらに今度は日本の防衛力について
注文をつけるんです。

伊藤 強化しろということですか。

夏目 うん。

佐道 防衛費を？

夏目 防衛力増強のペースを速めるとかそんな数字のことばかり
をいつてくるんです。レーガン時代になってアプローチの仕方が

変わるのですけれども、カーター政権時代はそうでした。そういうことをあわせると、韓国撤退論みたいなものが発端なのか、そういう背景にあったからそういう要望になったのか、どちらかよくわかりませんが、つじつまが合うのです。

伊藤 実際には、撤退しなかったでしょう。

佐道 できなかつたんです。

夏目 このあと、そんなことでモタモタしている間にソ連がアフガンに侵攻するでしょう。そんなもの吹き飛ばすんですよ。それで、すぐ大綱は鬼つ子になっちゃうんですよ。これはもうだめだと。出来たときから家族全員に喜ばれるような子どもではなかつたけど、生まれてまだ年端も行かないうちに訓練を受けるのですね。

伊藤 ソ連もいいことをやっている(笑)。

夏目 たしか、二、三年後にアフガン侵攻をやるのでしょうか。

佐道 七九年ですね。

夏目 (昭和) 五十四年か。

伊藤 もし本当に在韓米軍が撤退したら、日本の重要性が高まるのか、あるいは、その勢いが日本からも撤退するとなるのか。

夏目 いや、それはなかつたと思います。やはり、日本とフィリピンかどこかをつなぐ、それが最低の防衛ラインだというのは、彼らの頭の中に入っていますからね。韓国は離れても、フィリピンと日本は引き上げるなんていう話にはまったくならない。

伊藤 日本、台湾、フィリピンじゃないですか。

夏目 うん。たしかそんなようなことで線を引いた。

伊藤 だけど、へたをすると第二次朝鮮戦争の引き金になりかねないじゃないですか。

夏目 だから、民主党の安全保障政策というのは本当に自分のことしか考えない政権という感じがしますね。僕はべつにタカ派ではないし、共和党がいいと思わないけど、極端にぶれますね。よ

く、アメリカというのは民主党になっても共和党になってもあまり変わらないというけど、外交政策や国防政策ではガラッと変わりますよ。

伊藤 しかし、かわるけれども、民主党政権のときによく戦争をやるんですよ。

佐道 そういうことになるんですよ。

伊藤 まわりがそうなる。アフガンだつてそうだし。

夏目 うん、だけどアメリカがやるわけじゃないでしょう。

伊藤 いやまあ、そうですね、ベトナムのときもたしかそうですね。

夏目 だから、アメリカは政権がハト派の時にいろいろあるんですよ。ブッシュとか、レーガンとか、そういうのがいいんです。日本にはハト派の総理がいてもいいけど。

佐道 でも、同盟に軍事は入らないとかいうのでは困るんじゃないかと思うんです(笑)。

夏目 でも、ちゃんということはいから。普通の人ならいえないことをいうから。

佐道 いや、普通の人は驚くんじゃありませんか、発想が(笑)。

夏目 だって、坂田さんだとか三木さんだつたから、ああいう防衛協力がスラスラいったんですよ。

伊藤 ま、現実問題と、一般的なハト派とはちよつと違いますよね(笑)。

夏目 三木さんなんて年じゅう心配して、「これはだいじょうぶか」とかね。防衛協力の話を広げようといつても、「こんなことをやってだいじょうぶか」とか、そんなことばかり心配したのだもの。

中島 その「だいじょうぶか」というのは、国内的にだいじょうぶかということですか。

夏目 そうですよ。要するに、日米の安保条約の枠からはみ出る

んじゃないかという。彼はその中にいけばいいんです。自分がどうあるべきだという信念があるわけではない。新しいことをやったら叩かれるぞという、それだけのことでしょ。

伊藤 社会党が頭にあつたのでしょ。

夏目 まだ当時は社会党は血気盛んですからね。

伊藤 これは強調しておかないと、あとで読む人は社会党がそんな元氣だった時代を知らないから(笑)。

夏目 そうなんですよ。防衛協力の話だって、ああいう社会党のときであんなことをいっただけというのが。いま言ったら、あたりまえじゃないかということですからね。だから、いまの人が読めば、なんといいことはないんです。だけど、坂田さんも、当時としては破天荒なことをいっただけです。

伊藤 そうですよ。

佐道 ハト派の三木総理と、坂田さんのときの防衛協力が前提になつて八〇年代の防衛協力が進む。

伊藤 それは今日の有事法制までつながっていくのですから。

佐道 本当ですね。

中島 先生はおそらく本音の部分で社会党の議員の方とお話しされることであつたと思うのですが、社会党の方々は本音の部分では日米防衛協力に關してはどういうふうと考えていらしたのですか。

中島 社会党といつても、人それぞれでね。この前もちょっといっただけかもしれないけれども、社会党の先生とも何人か個人的に一緒に夜飲んだりする。そのときは、みんな話のわかる人ですよ。だけど、委員会に出たらそれは別なんです。

伊藤 本当に非武装中立なんていうのは、真つ向から信じている人なんて、あんまりいないんじゃないですか。

夏目 それは、初期はいたかもしれないですね。石橋(政嗣)、横路(節雄)、飛鳥田(一雄)とか、あのころはそんな人もいたかもしれません。だけど、われわれが物をいうころは、そんな人はい

なかつたと思う。ただ、ここで譲つたら、ズルズルどこまで行かないかかわらないという、それはあつたでしょうしね。

伊藤 それは自分の存在の証明ですから、それを譲っちゃつたら。

夏目 だから、いくら追求したつて、あるところまで行くと、パタクと撃ち方やめですよ。本来なら、もつと激しくやります。

佐道 官房審議官のころに政治家の方と接触するということはおやりになつたのですか。

夏目 審議官のときはあまりないです。ただ、分担して、「法案を通してくれ」とか、根回しに行くくらいです。そういうことはあつたかもしれないけれども、直接はないです。やっぱり、大臣とか官房長とか、そういう人の仕事ですから。審議官というのはいちばんいいですよ。何もしなくていいんだから。

佐道 でも、突然仕事が降つてきたりするわけですね。

夏目 そういふのはね、まあ、不徳の致すところ。

一同 アハハハハハツ(笑)。

夏目 そういふのがなければ、暇なんです。

佐道 国会とか政治家の方と対応するのに、官房長が玉木さんから亘理さんにかわつていたわけですから、亘理さんはそういうことは得意ですか。

夏目 非常に気を使う人でした。だけど、大蔵省ですからね。そう、亘理さんで思い出したけど、亘理さんのときになると、一人ひとりに党派を分担させたんです。おまえは民社党とか、おまえは社会党、おまえは公明党という。それで、根回しに歩けというんです。で、帰つてきて報告しろと。あれもひどいよね。私は民社党担当でした。

伊藤 よかつたですねえ(笑)。

夏目 非常に気が楽でした。永末(栄一)さんなんて、俺よりも右だから(笑)。

佐道 そうですよ、頼む前から、もうだいじょうぶだという(笑)。

夏目 ただ、民社党にも怖い人がいたんですよ。大内啓伍とか、ああいう人はちよつと。民社党のなかでも。

伊藤 対立が激しいですからね。

佐道 大内さんはちよつと難しいタイプですか。

夏目 ちよつと扱いにくい人で、このあいだも話した、国会議事録を取り替えたなんていうのはあの人の時ですよ。あの人が何かをいったときに、私が、「それは違います。私はこう思います」といったら、「おまえは間違っている」というのね。「あなたが間違っているんです」とお互いで言い合って、「俺は国会議員としてうそをいうことはない」「私も防衛局長としてうそをいませんと」と。あとで帰ってきたら、「局長、あれは間違っていました」といわれて、ガクッ（笑）。そのときは怒りましたけどね。

伊藤 それは謝りに行かなければならないじゃないですか。

夏目 謝りに行って、怒られましたよ。怒るのはあたりまえですね。三回も四回も往復で、「おまえが間違っている」とかといって、拳句の果てにこちらが間違っている。こちらは議事録に残っちゃいますからね。

伊藤 そうですよ（笑）。いやあ、そういうのはやっぱり黒丸になるのだからなあ。

夏目 なりますよ。だけど、わからないですよ。

伊藤 黒丸でも、次官にまで行ければいい（笑）。

佐道 それはそうですね（笑）。

夏目 だけど、好きな人と嫌いな人はやっぱりできますね。あの人はいい人とか。いうことを聞いてくれれば「いい人」だし、つべこべいわれたら「いやな野郎」となりますわな。それはしょうがない。

■ 在日米軍駐留費・分担金の一部負担

伊藤 それはどこでもあることですから。先ほどお話しになりました駐留経費、分担金をふやすということですね。これもさつき

のような流れだと思えますが。こういう問題は、先生などは直接。夏目 直接私は担当していません。多分、あれは施設庁と外務省がやっていると思うのですけれども。

伊藤 やはり施設庁ですか。

夏目 要するに、施設庁は在日米軍の駐留経費というのを持っていきますから、その話だと思います。七七年という昭和五十二年だから、だれがいたのですか。

佐道 これはいろいろ決まる前ですね。

夏目 多分、金丸大臣でしょう。金丸さんと、亘理施設庁長官の時でしょう。三原さんのときから話が出ていたのかもしれないけれども、それを実際にやったのは金丸さんですよ。金丸大臣と、亘理施設庁長官がいろいろと苦労して、大蔵省と折衝して、駐留軍経費の労務費の何とかか何とかはうちがもつとか、駐留軍の宿舍を改善するとか、だいぶ大げさにやって、アメリカに非常に喜ばれたんです。あんまり防衛庁の内局とか、防衛局は関係なかったな。特に私はそのころ教育参事官が何かをやっていたから、直接はタッチしませんけれどもね。金丸さんの自慢話をよく聞かされました。

伊藤 直接ですか。

夏目 うん。その後もずっと、「わしがやった」といって（笑）。確かに画期的なことをやったんですね。地位協定か何かの覚書が何かで決まっているのですな。日本が支払う金と、アメリカが支払う金。それを大きくギリギリまで膨らませて日本がもつちゃったのですからね。ちよつと、当時は円高ドル安が進んでいたのかな。そんなこともあって、アメリカは非常にしんどかった時期がありましたからね。

伊藤 アメリカの軍人さんも、給料をもらってみたら、円では使えない。基地内でドルで使わないとやっていけないという、そういう時代ですからね。

夏目 それと、アメリカのいまの駐留経費とか、国民のそういう機運とか、みんな一緒になって押し寄せたのでしようね。

伊藤 しかし、これはアメリカの軍としては非常にありがたかったですよね。

夏目 非常に多しその後事ある毎にそのことに言及していました。

■一九七七年の『防衛白書』

伊藤 さて、これは『日本の防衛』ですけれども、これが七七年の七月付けで出るのですね。これは、この前ちよつとお話しを伺いましたけれども、総論をやめるとか、いろんな。

夏目 私がいったのは、『防衛白書』というのは国民みんなに読んでもらうものでなければいけない。読むに耐えるものというか、興味をもって読めるものが必要だろうと思つたのです。それにはどうも、いままでの『防衛白書』というのは硬くて、あんまり読もうという気にならないのですね。だから、もうちよつとくだいたものにするというのがひとつ。絵なんかを入れたのはそういう理由なのだけれども。もうひとつは、大綱の解説をしなければいけないですね。出た直後の白書だから。ところが、これは解説すればするほど久保論文に近くなるんです。そうすると、さつきあなた（中島氏）がいった検証論ではないけれども、説明すればするほど、いかに脱脅威が当時として大事だったか、必要だったかということの説明せざるをえなくなつてくるのですね。要するに、制服の顔を逆撫するような形になるのです。それが非常に困つたなあという気持ちはありました。だから、制服のなかには、「大綱は許せるが、白書は許せない」という人はけっこういましたよ。

佐道 この部分は先生がお書きになつたのですか。

夏目 これは、私も手を入れたけれども、だれか担当者が。だれがやったかなあ、記憶ないなあ。もうひとつは、軍事情勢のどこ

ろに意図がある。ソ連の脅威をちよつと必要以上に煽つてゐるんですよ。

伊藤 煽つている（笑）。

夏目 煽つていることはないけれども、いかに脅威かということを書いていゝのですね。それまでの白書というのはあんまり軍事的なことについて重点をおいてなかつたけれども、『防衛白書』である以上は軍事情勢にもうちよつと力点をおいて書こうという、結果的にそうなるのですね。やはり、極東におけるソ連軍がいかに強大なものかということに触れざるをえない。だから、そういうものになつちやつた。

伊藤 そうしたら大綱論になりますね。

夏目 大綱が平和志向。だからねえ、何を考へてゐるんだと。一方の新聞記者諸君は、その脅威を見ると、「軍事ばかり白書だ」というんだよね。制服から見ると、「大綱であんなことまで説明しなくてもいいじゃないか。あれは早く忘れよう。忘れようとしてゐるのに、またあそこへ思い出させるように、これでもか、これでもかと解説を書かれたらたまらない」という気持ちと、両方からやられるんですよ。もつとひどいのは、ソ連からいわれたんです。「ソ連の脅威をいたずらに煽つてゐる。けしからん」といつてね。ミグでもやられ、これでやられて、もう一回やられるんですよ。宮永事件で。

伊藤 はあ、はあ。

中島 ソ連側もかなり白書は精読してゐるわけですね。

夏目 読んでいますよ。

中島 それを見て、メッセージを送つてゐるわけですよ。

夏目 もちろんそうです。だから、その後、ソ連の大使館のパーティーには私を呼ばないんですよ。ほかの人のところには招待状が来るけれども、私のところだけは招待状が来ないのです。ま、行きたくはないけどね。まずいボルシチを食つたつてしようがない。

伊藤 アハハハ、キャビアはどうですか(笑)。

佐道 キャビアにウォッカ(笑)。

武田 ウォッカはおいしいんじゃないですかね。

夏目 ま、行ったことがないからわからない。その種のパーティーにはもともと高級幹部は行かないんですよ、当時は。制服の人たちも、多分、幕の調査部長くらいが精一杯でしょう。こちらも、課長か何か、あるいは国際参事官が代表で行くくらいで、主な幹部はみんな行きませんでした。あんなところへ行つて、仲良くなつたりして、いつ、だれにつけられているかわからないからね。それにやはり、飲むとおしゃべりになるしね。油断も隙もないからね。

伊藤 これを見ていると、ソ連の飛行機が二千機、日本が四百七十機、在日米軍が二百機。「おおっ」と見ていたら、中国が五千機ですよ、これ。ま、古い飛行機かもしれないけど(笑)。こういう図があるから、やつぱり脅威論ですね。

夏目 それは脅威論なんです。意識的にそうしたんです。だけど、すぐ攻めてくるとは書いてないです。ただ、それが事実としてあるんだという。

伊藤 要するに、軍事力のアンバランスが生じているという。

佐道 実際に、極東ソ連軍の増強というのはかなり前から始まっています、そういう状況だったことは間違いないわけですね。

夏目 間違いないですね。ミサイルだって、どんどん新しいミサイルを配備したし、航空母艦だって、ミンスクとか、ソ連としては新しいやつ最初の航空母艦でしょう。そんなものを極東に配備したりしていますしね。極東のペトロパブロフスクとかウラジオストックとか、あのへんに攻撃型原潜が何十隻もいますからね。佐道 このソ連の脅威といったようなことを書くにあたっては、庁内での議論というのはあまりしないのですか。もう任されて、

伊藤 任されてというか、いちばんのそれぞれの権威のところのデータを使っているから、それが違うという人はいないですね。

外務省ともちろん調整はしますけれども、外務省も最初はつべこべいったけれども、まあ、多少妥協の産物。もうちよつと挑発的なことを書いてあつたと思うのですけれどもね。

中島 ソ連を若干挑発するような。

夏目 うん。

中島 それを削ってくれというのが外務省ですか。

夏目 それはまあ、当然そうされるだろうなということは予測して、ひよつとしたら見逃してくれるかと(笑)。

伊藤 ハハハハハ(笑)。やはり、どこかいわれるところをつくっておかないとまずいんじゃないですか。

夏目 いわれるところが多すぎて。

伊藤 アハハハハ(笑)。

佐道 ソ連の増強ということになると、外務省でもソ連課ということになるわけですね。

夏目 そうですね。でも、各課が順々に見ていきますからね。安全保障課から何から。

佐道 外務省だと、真つ赤にして帰ってくる。

夏目 真つ赤というか、切り刻んでね。航空自衛隊が調査したミグ25みたいになつてくる(笑)。ソ連は、「あれは飛行機ではない。鉄くずだ」と。

中島 外務省が『防衛白書』をチェックするというのは、どういう権限でチェックするのですか。

夏目 権限ではないですよ。各省間の調整というだけの話でね。閣議にかけるから。だから、外務省だって持つてきますよ。各省の関係のあるところ全部。外務省だけじゃないんですよ、みんな回します。関係ないところは回さないけど。厚生労働省とか、建設省とか、中身に関係なければ回さないけれども。

佐道 『外交青書』もチェックされたりするわけですか。

夏目 しますよ。

佐道 『外交青書』が来た場合のチェックとしては、防衛庁のなかでは。

夏目 主として調査課というのかな。いまはどうなっているのか、いまは情報本部というのかな、そういう情報関係をやっているところがあるんです。そこでチェックします。

伊藤 一応、相互主義なんでしょうね。

夏目 だけど、だいたい関係ないでしょう。アフリカのことを書いてあることや、南米のことなんかはね。アメリカとの関係とか、ソ連の関係とか、関係のあるところはそんなに量がないけれども、外務省は『防衛白書』を全面的にチェックするからね。

伊藤 この防衛白書は、第四章がミグ、第三章は当面の諸問題で、第二章が防衛計画の大綱の説明、第一章はいまお話になった国際情勢と軍事力で、これは絵入りだからね。あちこちに本当に絵がいつぱい入っていますね。すごく読みやすいです。

夏目 あとは、FXの選定でもめたから、そういうことを書いてあると思います。

伊藤 「新戦闘機について」というところで、かなり詳しく書いてあります。それから、「次期対潜機について」、これもちゃんと図入りだからね。

夏目 「あんまりわかりやすくするのはよくないんじゃないか」とかいわれたけれども、まあ、軍事機密に触れなさいいんだと。

伊藤 これは勉強するのにはいいですね。

佐道 いいですよ、本当に。やっぱり、まずそれを読む。

伊藤 ミグも、さっきのお話がこういうふうな地図に、具体的に飛んできた経路とか、レーダーサイトで、どこで一遍発見したとか。

佐道 それは私もそう思ったのですけれども、その図を見ると、日本のレーダー能力というのがだいたいどうなっているのかというののは。

夏目 わかりますよ。航空だとカバーしているように見えるけれども、低空で攻めると穴だらけだと。例えば、四国沖なんて、ブーッとまっすぐ入ってきて、だれにも見つからないで入ってこられるのです。だから、航空自衛隊は四国にもレーダーサイトを置きたいと二次防であつたんです。だけど、それは結局、経費の都合やら何やらでやめたのですけれどもね。あんな遠回りしてこることはないだろうと。だから、防衛庁って秘密主義みたいに見えるけれども、非常に軍隊としては開放的なんですよ。

伊藤 危ないじゃない(笑)。

佐道 グラスノスチが進んでいる(笑)、情報公開が。

夏目 だって、ある程度わかるようにしなきゃ、理解も得られないんですよ。正直いって。だから、一時的にはちよつと行きすぎだと思われることでも発表するほうがいいんですよ。私はそう思っています。よつぽど大事なことでなければ出せ、内緒にするなど。特にいまどきは内緒にしたらだめですよ。いずれどこからか出ちゃうからね。

伊藤 これを見ると、最初は千歳に下りようと思ったんですね。

夏目 そうかもしれない。

伊藤 雲があつて、それであら。

夏目 曇っていたからわからなかったのでしょうか。

伊藤 決行中、一部の機器のスイッチを切っていたため、日本側の警告を知らず、日本機をレーダーで見ることになったと。

夏目 レーダーを出していることもわかるからね。だけど、いつていることも本当かどうかよくわからんですけどね。

佐道 本当に聞いていなかったかどうかなんて、わからないですものね。

伊藤 これは非常に詳細な記述がありますね。

夏目 そうでしょう。私はそれで十回くらい講演料を稼いだもの。伊藤 これはやはり、みんな関心あるでしょうね。

夏目 当時はね。

伊藤 いまだってこれについて云々している人がいるんじゃないですか。

佐道 ありますよ。

伊藤 これで最初で最後だから。

佐道 ミグ25事件について書かれた本でも、そこへ出ている図を使っていたりというのも結構あります。

伊藤 ねえ、おもしろい。

夏目 その後、大韓航空が撃墜されますでしょう。これはもっとひどかったね。

伊藤 いろんな推測で本を書いている人がたくさんあるでしょう。

夏目 そうそう。

伊藤 陰謀説。

夏目 勝手に人を悪者にしたたり、いろんな人がいますよ。

中島 それは、マスコミのなかでという。

夏目 マスコミのなかだけじゃなくて、もっと偉い人でもある。

伊藤 あのとときに日本のキャッチしていた情報を出すか出さないかとか、いろんなことでまたもめたから。ま、このときは出さなくても、飛んできたわけだから。

夏目 このときだって、ベレンコなんていうのは本当に情けない男だったらしいですよ。

伊藤 よく亡命してきましたね。

夏目 ねえ。

佐道 妻子を置いてきたんですよ。

夏目 こんな飛行機を持ってきたからだいじょうぶかと思って、来たらしいけど。

伊藤 お土産だ(笑)。

佐道 亡命するにあたっては、やはり何かないと。

伊藤 ベレンコは日本でも取り調べをしたのでしょ。

夏目 調べたんです。十分調べた結果はどこか警察か何かを持っているのでしょけれどもね。

伊藤 亡命という形でアメリカに連れて行ったのですね。

中島 ソ連側は、最初は亡命だと認めなかったらしいですね。あれは訓練中に、と。

夏目 ソ連は年じゅうそんなことをいって、だれが見てもうそだとわかるうそをいうからね。

伊藤 いや、うそだといわなければいいわけだから、いくらでも言い繕いはできる。

夏目 私はいまでも、本当はソ連、ロシアへ行きたいのだけれども、行くのはいやだね。どこかでしっぺ返しされるんじゃないかと(笑)。

佐道 でも、ソ連時代とはだいぶ変わったんじゃないですか。

伊藤 でもKGBはつながっているから。

夏目 同じ組織があるんですからね。

伊藤 だって、いまのロシアの首脳部はKGB出身が(笑)。

佐道 そうですね、確かに。

■参事官に就任

伊藤 さて、昭和五十二年七月に参事官になられますね。僕はこの参事官というのがよくわからないのですけれども、どういうポストですか。

夏目 防衛庁というのは参事官制度というのを敷いていまして、防衛庁の重要事項は参事官会議で決めることになっていまして、それで、参事官というのはどういう人がなるかというところ、各局長が参事官なんです。官房長とか、防衛局長とか、みんな参事官なんです。それで、局長ではない参事官が二、三人いるんです。それは、教育と、施設と、開発担当参事官かな。あ、国際参事官

というのがいたから、四人いたのかな。

伊藤 施設は施設庁が。

夏目 いや、施設参事官というのがいたんですよ。施設参事官と、技術開発と、国際参事官と、教育参事官、この四人がいたのです。

伊藤 というところは、局がないところ。

夏目 局はないんですよ。ただ、課はあるんです。教育課というのが教育参事官の手下です。

伊藤 教育課にくつついているのですか。ということは、参事官は。

夏目 いや、建制上は人事教育局の下なのだけれども、教育参事官がもつばら教育局長の仕事の一部を分担しちやっっているのね。

佐道 人事教育局と教育担当参事官の……。

夏目 人事教育局のなかに教育課もあるのだけれども、その教育課の仕事は教育参事官がやれよと、こうなっているんです。

伊藤 そうすると、スタッフではなくて、ラインなのですか。

夏目 まあ、俺もよくわからないなあ。これは防衛庁独特の組織ですからね。要するに、参事官というのは官名なんです。課長は書記官です。事務官というのがいるけれども、係長から下のやつが事務官で、その上へ入ると部員という名前になります。課長になると書記官です。局長級は参事官なんです。

伊藤 そうですか。その参事官が参事官会議で物を決めるわけですか。

夏目 そう、要するに局長会議みたいなものですね。

佐道 人事教育局のなかの教育部門というのだけを教育担当参事官が持っているということになるわけですね。

伊藤 持っていると同時に、参事官会議で物事を決めていくわけだから、全体を見るということになりますね。

夏目 うん、そういうことになる。

伊藤 建前はそうなのでしょう。

夏目 そう、そのとおりです。

伊藤 そうですか、これはほかの省庁にはないですね。参事官というあれはあるけど。

佐道 全然違いますよ。

夏目 合議体なんですよ。私もちよつと説明のしようがないなあ。あんまり評判よくないのですけれどもね。

伊藤 これはいまでも続いている制度ですね。

夏目 続いています。例えば官房長になるとときには、「防衛庁参事官に命ず。官房長を命ず」となるんですよ。組織図でいうと、こういう形です。だいたい参事官は局長も何も一緒なんです。これは合議体で決めることになるので、その参事官がそれぞれ各局を担当して。

伊藤 ああ、そうですか。じゃあ、やはりなんとなくラインの感じですね。

夏目 ラインとスタッフと兼ねている。参事官はスタッフだけれども、局長としてはラインだし。だけど、実際にはスタッフとしての機能を發揮していませんよ。合議体といえはその通りだ、それはどこの役所だって省議とか庁議とかあるでしょう。あれと同じですからね。だけれども、実際は防衛局の事案は防衛局長が大半は決めますよね。そこで決めたものには、ほかの局は文句をいいません。

伊藤 その前にある程度の調整はしているわけでしょう。

夏目 多少の根回しはしますけれども、力関係もあって、ほかの局のときには防衛局長がガンガンいうけれども、防衛局のときはほかの局長はいわれないんです。先輩だから。

伊藤 力関係があるのか。

佐道 参事官ということになると、局長待遇ですか。

伊藤 教育担当というのは、教育全体ですか。

夏目 自衛隊の教育全体ですね。防大、研究所、陸海空の各種学校、全部含めて。

伊藤 防衛研究所は、この当時はまだ研修所か。

夏目 権限は教育課長と同じですよ。偉くなっていないんですよ。

伊藤 審議官は、これは。

夏目 審議官というのはあとから出来たのですけれども、審議官というのは中二階で、課長をおわって、まだ局長にするにはちょっと早い者をたまりみたいに。だいたい特命事項なんです。そのときに何かあればやれという。例えば、行政整備で何人首を切るとか、どうやって切ったらいいか考えろとかね。

武田 それは厳しいな。

夏目 そのときの向き向きの人を選んでやらせていたんですよ。そのうちの一人は必ず白書をやる。毎年ですからね。何人かいる審議官のうちの一人は白書を担当するということになっている。だから、白書をやらない審議官もいっぱいいたわけです。

伊藤 白書担当なら、何年かやれば、毎年白書担当ということですか。

夏目 いまは毎年出しているでしょう。

伊藤 これは季節労働ですね。

夏目 ただ、審議官は三人くらいいつもいますからね。いまは五人か。その当ても三人か四人いたんです。一人はやっているけれども、あとの人はそんな関係ないですからね。

伊藤 これは久しぶりで出した防衛白書ですから、一回出したら、今度は参事官になりましたから、もうおわり。

夏目 だいたい一年かそこらで審議官を卒業しますね。一年、二年……、二年やる人はあまりいないかな。

伊藤 じゃあ、白書一冊出せばいいということですね。

夏目 そう。だけど、審議官はこたえられないんですよ。権限もないし、金もないけれども、仕事もないから（笑）。

伊藤 アッハッハッハッハッ（笑）。でも、参事官もそんなでもないでしょう。

夏目 いや、参事官になると、やたら会議に引つ張り出されるでしょう。それと、直属の部下がいるでしょう。教育課長が。審議官って下がないんだから。下にいるのは、秘書さんが一人いるだけだから。そちらのほうが威張っているしね（笑）。

伊藤 それはどういう意味ですか（笑）。

夏目 だから、参事官なんかはあまりありがたくないですね。

伊藤 でもまあ、中二階から局長になっていくから。

夏目 そう、ステップだからしょうがない。私は不幸なんですよ。外へ出たことがないものだからね。四階から三階、三階から二階とか、そういうのは動くけど、建物の外へ出たことがないんです。伊藤 出ることがあるのですか。

夏目 だって、みんな警察の本部長になって出たり、施設庁の局長になって出たり、一回はみんな出ているんですよ。だけど、全然出る間がないもの。

伊藤 出るような場所があるのですか。

夏目 だって、施設庁の局長が幾つかあるでしょう。それから、地方へは行かなくても、防衛研究所の何かとか、技術研究本部の副本部長とか、防衛医大の副校長とか、いっぱいあるんですよ。調達実施本部とかもあるでしょう。

佐道 海原さん時代に国防会議にずっと出ておられたので、それで年季が明けているという（笑）。

夏目 それはそうかもしれない。人一倍苦労したから。

佐道 もう外でやることはないよ、と（笑）。確かにおっしゃるように本庁ですね。

夏目 だいたい課長時代に一回くらいは出るんですよ。もつと若いときに一回出て、二回出る人もいるしね。だから、そういう意味では楽しめなかったです。

佐道 結構いろいろ楽しみながら仕事しておられますよ。

伊藤 いままでお話を伺っていますとね。

夏目 地方局長というのはいいんですよ、あれ。威張っていられて。

武田 地方局。

夏目 施設局の。

佐道 でも、那覇なんて行くと大変でしょう。

夏目 ああ、あそこは食べものがまずいからね。

伊藤 それは好みの問題だなあ（笑）、おいしいという人もいるよね。

夏目 地方はよかったと思いますね。

伊藤 では、教育担当の参事官というところから、次回はお願いします。

（終了）

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第9回

開催日：2003年7月18日（金）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時00分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

岡田志津枝（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：
有限会社ペンハウス 矢沢麻里

第9回インタビュー質問項目

2003年7月18日

1

77年7月、参事官（教育担当）に就任されます。前回、教育担当参事官の職務について少しお話いただきましたが、ご就任当時の最も重要な課題はどんなことだったのでしょうか。

2

前回のお話の中で、参事官時代の重要な仕事は「有事法制」であると言われました。先生はいつごろから有事法制問題に関与されたのでしょうか。77年8月に三原長官の支持で研究を開始したのですが、その時点でしょうか。それとも栗栖発言のあと78年7月27日の国防会議議員懇談会、28日の閣議で福田総理が有事法制研究促進を命じたということですが、その時点でしょうか。

3

有事法制問題ですが、一般的には、栗栖発言のあと福田総理が研究促進を指示したことが有名ですが、前記の質問に書きましたように、研究自体は前年に三原長官が支持しています。このきっかけは何だったのでしょうか。三原長官の英断でしょうか。

4

先生が有事法制問題を担当されたとき、防衛庁内の研究は実際どの程度進んでいたのでしょうか。三矢研究以来、中断していたのでしょうか。それとも研究上はある程度の蓄積ができていたのでしょうか。

5

先生はこの問題にどういった方針で取り組むお考えだったのでしょうか。また、どういった人員、組織で担当されたのでしょうか。

6

78年9月21日、防衛庁見解「有事法制の研究について」ならびに「いわゆる奇襲対処の問題について」が出されます。これの起草にあたったのは先生でしょうか。

7

78年1月、雑誌『ウイング』で栗栖統幕議長は「専守防衛と抑止力は並存しない」と発言して問題となり、さらに6月のソ連の択捉島への行動を「ソ連陸海空統合部隊による演習」と述べて再度問題になり、7月に入って雑誌インタビューでいわゆる「超法規発言」となり結局更迭されます。一連の栗栖氏の発言について、当時どのように見ておられましたか。また、栗栖氏の人物自体についてはどのように評価しておられますか。

8

78年1月、陸上幕僚監部はそれまでの機構を改編し、一般幕僚と特別幕僚を組み合わせた米軍型の機構から、一般官庁型の部課制にしました。こういった機構改革は内局の承認がなければできないのではないかと思います。この時点でどうしてこういった改革が行われたのか、ご記憶の点をお願いします。

9

78年4月、金丸長官は防衛庁中央機構改革のため統幕機能強化に踏み切る決意を固め、7月を目標に改革案策定を進めることにしましたと伝えられています（日経、4月2日）。この基本構想は、有事の際、「統幕議長を統合幕僚長に切り替え、陸海空を統合指揮

する」ことであつたと言われていますが、この点についてご記憶の点をお願いします。

10 この時期、防衛出動や災害出動等を行った自衛隊部隊に対する防衛庁長官の中央指揮システムの改革が懸案になっていたと思えます。特にミグ事件でその不備が明らかとなったわけですが、この問題には「中央指揮所整備委員会」が設置されて検討していたと思います。先生はこの問題に関係しておられたのでしょうか。

11 78年11月、人事教育局長に就任されます。就任の経緯等お願いします。また、就任時にもっとも重要な課題となっていた問題があればお願いします。

12 先生が局長に就任されたのとはほぼ同時期、ガイドラインも制定されます。できあがったガイドラインについてどのような感想を持たれましたか。

13 ガイドライン成立後、日米の共同訓練が活発化します。実際、先生が就任された11月には航空自衛隊初の日米共同訓練が行われています。従来から共同訓練を行ってきた海上自衛隊は別として、空自や陸自、特に陸自には戸惑いもあつたのではと思えますがいかがですか。

14 日米共同訓練といえば、80年2月の海上自衛隊のリムパック参加問題があります。これは教育・訓練の問題ですので先生のご担当かと思いますが、いかがですか。海自との意見調整などされたのでしょうか。

15 リムパックの問題では、教育担当参事官であつた佐々淳行氏が国会答弁の矢面にたつたと言われていますが、実際、佐々氏がこの問題の直接の担当者ということでしょうか。佐々氏との意見調整等はなさいましたか。

16 79年12月、ソ連軍がアフガニスタンに侵攻します。これを契機に、再び米ソが厳しく対立する情勢となっていくわけですが、この事件自体について防衛庁はどのように見ていたのでしょうか。

17 80年1月、宮永元陸将補、現職自衛官2名の3名が、秘密漏洩事件を起こして保全体制の整備が問題になりました。防衛庁は「秘密保全体制検討委員会」を設置して所要の改善措置を進めることにするわけですが、先生ご自身はこの問題で委員会に参加されるなど、何か関係があつたのでしょうか。

16 80年6月、官房長に就任されます。その経緯等お願いします。

※今回は以上の点についてお願いします。

■有事法制問題

伊藤 きょうは参事官の時代のお話を伺いたいと思います。先生は教育担当の参事官だったわけですよ。参事官として、当時、教育に関して大きな問題は何かございましたか。これは一年ちょっとくらいですけれども。

夏目 大きい問題は記憶の中にはないですね。

伊藤 この前のお話で、参事官時代に有事法制云々というお話がございましたね。

夏目 ああ、それはあります。

伊藤 だけど、これは参事官としてのお仕事ですか。

夏目 参事官としてというか。もう一度参事官の説明をしますと、もともと防衛庁をつくったときには、いわゆるシビリアン・コントロールの一環として防衛庁の基本的な事項は参事官会議をもって決めると、こうなっているのです。その参事官にはどういう人をおてるかというところ、その省庁の役人で課長から審議官や局長になった者を参事官にするのではなくて、よそからいろんな有能の士を集めて参事官にあてるというのがそもそも考え方なんです。しかし、そうはいつても日本の役所組織でなかなかそんな事ができにくいので、結局は下から上がった人が局長になり、そしてそれが参事官になる。そういう形になったのですね。だから、むしろ参事官が先にあつて、その参事官のだれかを局長に指名する。こういう形だったんです。

伊藤 もともととはですね。実際にはひっくり返っていくと。

夏目 ひっくり返っちゃったような形になる。参事官というのは防衛庁の全般事項を審議する組織として、厳然として法制上はあなのです。

伊藤 それは、ときどきは生きるということですか。

夏目 防衛庁で何かを決めるときには、参事官会議と称して、局

長、局長ではない参事官も実際に集まってやるのですが、もう私が出たところは、参事官会議というのは名前ばかりで、各局長が権限を持つちゃっているから、局長たる参事官のほうが大きい顔をしている。本来はそうじゃなかった。各省の次官をおわったような人に来てもらつてとか、そういうのが発想のもつらしいですね。

伊藤 だけど、教育担当の参事官で有事法制の問題にかかわるなんというの、これは本来の趣旨にかなっていませんね。

夏目 これはもうそういうような局長の制度ができちゃったあとですから、本来、人事教育局長が持っている仕事の中から教育の仕事だけをちよこつと人事教育局長から取り上げて教育参事官のものがいたんです。その名残ですね。昔は、人事局長、教育局長というのには別にいたわけです。ただしこの教育局というのは一局一課で、課は一つしかない局長だった。それが、行政整理だとか、一局削減とか、いろんな経緯を踏みながら人事教育局になって、教育局がなくなつた。そのかわり、教育局長の仕事は参事官に残しておこうということになったわけです。だから、通称教育参事官というのは教育だけを見ている。

伊藤 教育だけを見ているということと、有事法制とは、あまり関係ないんじゃないですか。

夏目 有事法制はまったく関係ない。

伊藤 これは参事官としておやりになつたというわけではないのですか。

夏目 暇な参事官だから(笑)。教育参事官としての仕事ではないですよ。たまたま手すきだったということでしょうね。教育参事官というのはあまり忙しくなかったからということかもしれないですね。それはミグのときと同じですよ。「あ、あいつが暇そうだ。やらせよう」と、単純にいえばこういう話ですよ。

伊藤 どこから始まるのですか。

夏目 有事法制というのはそもそも、三矢研究からいろいろなことがあって、そのあとはずつとやっていったんですよ。

伊藤 できなくなっちゃったのではないのですか。

夏目 表だったことはできないから、どこが問題かという基礎的な勉強を課長レベルのところでははずつとやってきたわけです。

中島 それは主にどこの課長さんのところですか。

夏目 法制調査官室というところまでやってきた。いまの法規課ですね。そこで地道に作業していたわけです。こういうことが必要だろう、こういう点が問題だろうということは、ある程度紙にもまとめてあったんです。それを何年もやってきた。竹岡（勝美）という官房長が、当時、五十一年から五十二年まで人事局長をやつて、五十二年の夏から官房長になった。法制調査官室というのは官房なんです。竹岡さんという人は非常にまじめな人で、勉強家ですし、遊んでいるなんていうことはとても耐えられない人なんです。私とまったく正反対な人なんです。要するに、仕事をしないといけない気がすまないのでしょうか（笑）。あるときに、私の記憶がちょっとこのへんは定かではないのですが、たぶん国会での「どういふ勉強をしているか」という質問に対して、有事法制の身を二十数項目を挙げたんですよ。道路交通法がどうかとか、何だとか。そのなかに、情報管理みたいな、言論統制ではないけれども、そういうものが含まれていたことがパクツと捕まっちゃった。それがたぶん五十二年頃だと思います。私が教育参事官になってから半年くらいたってからだと思うんですよ。そこはちょっと定かではない。当時の新聞を見れば出てくるのでしょうか。それで、その竹岡発言とか国会答弁が問題になっちゃつて、ちょっと大臣も擧げした。「なんだ」と。そんなことはだれも知らないわけだから、事務的にやっていることですから。伊藤 いう必要がないということですか。

夏目 「基礎的な勉強は一所懸命やっていますが、まとめて報告す

るようなことはない」とか何かいっておけばよかったのだけれども、具体的にズラズラ、たしか二十何項目か挙げたのです。そこがあの人の真面目なところなのですけれどもね。そして、少し勇み足ではないかとちょっと問題になって、三原（朝雄）長官が何かの席で福田総理にお会いになって、有事法制の作成を指示された、あるいは了承のもとに関与しているという形を持つと、それが五十二年の七月か八月の話だと思います。

伊藤 それでは、ちょうど参事官になられたころですね。

夏目 たぶんそうなんです。いろいろやってはいたのだから、やっていることはよかつたのだけれども、言論統制のようなことが問題になってしまった。それで急遽、三原長官が福田総理からの指示があつたことにした。そして一年後の五十三年八月たしか国会議事だか何かの席で正式に福田総理から促進の指示があつたということ。その発端は竹岡発言もありますがその後の栗栖発言です。当時、竹岡発言に対しては、「なんだ、またつまらないことをいつてくれたな」という雰囲気だったことを覚えています。

伊藤 それと栗栖発言とはまた関係があるのですか。

夏目 栗栖発言は、まあ、あの人は何回かいろいろなことをいうのだけれども、いちばん大きなのは例の超法規発言。

伊藤 五十三年の七月か。

佐道 超法規発言は七月です。

夏目 同じころかなあ、竹岡さんの話がちょっと早くて、そのあと栗栖発言があつたのですね、きつと。

佐道 栗栖（弘臣）さんは五十三年の一月にも。

夏目 何かいつている？

佐道 はい。

夏目 統幕議長になると誰でも何か言いたくなるんです。栗栖さんもなんだかんだと言いながらも、そうたいしたことはなかつたのですが、最後の超法規発言は当時の金丸長官、当時はもう金丸

長官になっていきますからね。その逆鱗にふれた訳です。そのこともあって、総理が急遽、奇襲対処と有事法制との研究促進となったのです。竹岡発言はそのバックアップみたいなものでした。

伊藤 そういう発言をして、問題を提起してと、意図したわけではなくて。

夏目 そんなことはないですよ、防衛庁は。しかし栗栖さんは明らかに意図していたかも知れません。あの人は、いまの日本はなんだと国を憂いている人だから。栗栖発言のあと、当時は丸山次官だと思えますが、栗栖発言は大変だということでみんなでワツと押しかけてきて、丸山（昂）さんがそのときに何と叫びましたか。「そのときは逃げるんです」といった。これがまた別の問題で（笑）。

伊藤 アハハハハ（笑）、逃げるって、何から逃げるのですか。

武田 敵から逃げるんじゃないですか。

伊藤 敵からですか。

夏目 要するに、防衛出動も下令していないし、何もしていないのに、急に不意打ちで何かやられたらどうするんだ。栗栖さんは、「それこそ超法規でもつてやるんだ」といつているのに、「逃げるんです」というから。それはまあ、法律的には問題ないですけれども、軍隊が逃げるというのは穏やかではない発言なわけですよ。それはまた別の意味で問題になっちゃった。

伊藤 何をいつてもだめなような気もするなあ（笑）。

佐道 どうすればいいのですか（笑）。

夏目 そういうときには、「こういうときの法律がないということとは国家としていかなものか」とか、多少かつたるいけれどもそういう言い方をしてあげば無事だったのだけれども、いい格好をしようと思うと、右か左か。栗栖さんのいうのは、正論は正論なの。法律がないから、じゃあ、降参して逃げるのかといったら、だれもそんなことは思わないですよ。だから、そういうときは超法規だというのは非常によくわかるのですけれどもね。

伊藤 超法規という言葉を使ったらまずいですね。

夏目 法律を無視するのだというのと、立法府は怒りますね。

伊藤 そうですね。

夏目 だからそういうことになって、金丸（信）さんは、「もう顔も見たくない」ということで、クビになったんです。

伊藤 それとかかわりなしに先生のところの研究は進んでいたわけですね。

夏目 とにかく、そういうことでいつまでもゴタゴタしているわけにはいかない。何年も勉強してきたことですから。それから、正直いつて当時の幹部には竹岡さんに対する不信感があったんです。あいつにやらせると、また何をしゃべるかわからんと。情報管理なんて、抜け抜けといちばん正直なところを。そこで、暇なやつに急遽……。

伊藤 それは理屈としてあまりつながらないように思えますけれどもね（笑）。

夏目 そういうことなんです。私がなんでそんなことをと思ったのは、もつとも法律の苦手なやつにやらせようというのですから。

伊藤 まあ、法学部だから。

夏目 しかしまあ、自分がやるわけではないから、そういうスタッフさえ揃えればやれないことはない。しかし、ことは緊急を要するので、百点満点のものを望むのは無理。とにかく格好をつけて、外向きに体裁を整えたいやというのが私の頭にあつたのです。何年も何年も勉強して、半月や一月で十全なものができるはずがありませんからね。だから、「じゃあ、それはやりましょう」ということで、当時の法制調査官に、有事法制のほうはおまえが担当だよと。この法制調査官というのは官房の課長ですから。もう一つは、西廣（整輝）という、当時は何をやっていたのかね。防衛課長かな、審議官かな。奇襲対処は西廣君がやるということ

で、それぞれのところで勉強して、まとめたんです。しかし、庁内の問題はそんなにたいしたことはなかったのですが、こんな短い文章ではありませんけれども、法制局との調整がなかなか大変でした。それでまとめたのが、その「有事法制の研究について」と「いわゆる奇襲対処の問題について」という二つの文章。たしか福田総理の督促指示から一、二ヵ月後くらいにまとめました。

伊藤 奇襲のやつが五十三年の九月。

夏目 両方一緒ですよ。同じ日に発表したのだから。

佐道 有事法制のやつは何種類もあつて、資料の十三というのが。

伊藤 そうか、同じ日付だ。

夏目 あるでしょう、短い文章ですけど。これが、私が教育参事官のときにまとめました。

伊藤 こういう「公表」というのはだれの名前で出すのですか。

夏目 だれの名前ということはないのですけれども、防衛庁として出したんです。記者発表もし、国会でも報告をし、当時の有事法制と奇襲対処について。まあ、奇襲対処というのは栗栖さん発言に対するカパーなんですよね。急に来たらどうするんだと。その二つをつくって国会等報告し、マスコミにも発表しました。それから堂々と一所懸命勉強するという筋道もできたわけです。

伊藤 これは三矢事件で騒がれて以来、ということですね。

夏目 そういうことです。それから堂々と勉強するようになった。それから三年くらいたつて、今度はまた巡り巡って私が官房長のときに、第一分類とか第二分類とか。私は見ただけで頭が痛くなってくるけど。

伊藤 ハハハハハ、それが五十六年四月ですね。防衛庁所管の法令と、他省庁所管の法令、第一分類、第二分類。

夏目 それが官房長のときです。法制の問題というのは官房長の主管ですからね。また教育参事官というわけにはいかない。

武田 暇そうじゃなかった(笑)。

夏目 しかも、いちばん法律に弱いやつに。

伊藤 この奇襲対処の問題でいちばんのポイントは何ですか。

夏目 やはり奇襲となつたら困るのは同じなんです。栗栖さんの問題というのは依然としてあるんです。しかし、奇襲なんていう昔の桶狭間みたいなものは現実問題としてはありえないだろう。きわめて蓋然性、プロバビリティーは低いだろうという言い方で最小限に押さえ込む。そこらへんが苦労したところです。近代戦というのは必ず予兆があるんですと。急に、ある日突然、新潟県に上陸舟艇でやってくるということはないでしょう。何らかの形でもって端緒というのはわかるし、準備もできるでしょう。そうしたことにより奇襲の未然防止が重要である。また情報の手段も発達しているけれども、そういう機能を一層強化することが何よりも大事である。あまり深刻に考える必要はないんです。何とかなるものですよ、というような話なんです。だけど、将来に対してやることは残しておかなければならぬ。だから、そこらへんが苦労したところかもしれません。奇襲対処のほうはそんな程度でいいのですが、有事法制のほうは内閣法制局との調整がなかなか面倒でしたよ。白書の外務省みたいなもので、あそこは法制の番人ですからね。

伊藤 要するに、それは現行法とどういうふう折り合うかという話ですか。

夏目 中身を忘れちゃった。(しばらく目を通して)とにかくこの問題は収まったんですよ。

伊藤 これで。

夏目 国会とか何とかも。とにかく問題を先送りして、ゴタゴタした、ああいう諸々の不正規発言に対する非難は収まって、防衛庁も齊々と研究を進めるきつかけになつたんですね。

伊藤 これに対して社会党もあまり文句をいわなかったのですか。

夏目 いわなかったですね。たいして問題になつた記憶はありません。

せん。むしろ、「その後あれはどうなったか、研究の成果を」と、それはありましたけれども、とにかく五十六年までは、なかなか成果があらぬとか、鋭意検討中みたいなことで進んできました。

伊藤 社会党としては、自衛隊そのものを否認するわけですから。

夏目 社会党は、やってもやらなくても「けしからん」ですからね。私は社会党が何というかというのは気にもしませんでした。

どっちみち反対するのですから。当時はたしか福田総理とか阿部

外務大臣。阿部晋太郎、いまの官房副長官の親父さんですよ。

佐道 五十三年のときは園田（直）さんですね。

夏目 五十三年ではなくて、五十六年。

武田 そうですね。

夏目 福田さんなんて、私が国会答弁で予算委員会の発言席へ歩いていくでしょう。「いいたいことをどんどん言えよ」とか、ち

よつと優しくいうと、「そんな弱腰じゃなくて、もつと強く」と

後ろで発破かけるんですよ。相手に聞こえない程度の声で、私だ

けに聞こえる。だからこちらもその気になって、後ろが味方なら、

前にいるやつはいいやと思うんですよ。

伊藤 やはり、いちばん怖いのは後ろから鉄砲を撃たれることで

すからね。

夏目 前のやつは人事権がないけど、後ろにいる方は人事権を持

っている（笑）。

伊藤 ハハハハハ（笑）。

佐道 外務大臣が応援しているわけですよ。

夏目 応援ですよ、みんな。福田さんもみんな応援なんだけど、

応援といつても、「しつかりやれよ」とかさういいうのではなくて、

発破かけるわけです。

伊藤 これはおもしろい（笑）。

佐道 しつかりやらなかったら（笑）。

武田 減点になる（笑）。

夏目 これは愉快でしたよ。

佐道 五十三年に、最初の防衛庁での「有事法制の研究について」

というのを教育参事官のときにまとめられて九月に出されます。

五十六年四月に、官房長の時代にまた出されるわけですね。この

ときに、第一分類、第二分類、第三分類となるわけですよ。

そうすると、そこまでの間も防衛庁のなかでは、有事法制につい

て、まとまったプロジェクトチームみたいなものがつくられてい

たのですか。

夏目 いや。法制調査官——当時はもう法規課になったかどうか、

ちよつとそこは記憶がありませんでしたけれども、そこでもって

地道な勉強をしていました。

伊藤 それはそこだけですか。

夏目 多少、そこだけではなかなかできないですから、部隊の運

用とかそういうものに関連すると、各幕僚監部の担当の人たちと

打ち合わせをしながらやってきたし、ある程度各省との調整みた

いなものは事務的にはしていました。ただ、法律の前身ではない

から、こんなものがあるという程度の勉強でしたけど。

伊藤 問題点ですね。先ほど話題になりました栗栖さんですけれ

ども、先生は栗栖さんとはあまり接点はなかったのですか。

夏目 現役のところはあまりなかったのですけれども、私は防大へ

行ってから栗栖さんときどきお話しする機会があつたんです。

この方は内務官僚なんです。制服ではないんです。いわゆる職

業的な軍人ではないんですね。当時はまだ、昔の陸士・海兵を出

た人たちが歴代幕僚長になっておられたのですけれども、初期の

林敬三とかそういうのは別として、ある程度自衛隊の組織がきち

んとできてからシベリアン出身の幕僚長は初めてなんです。しか

もこの人は、丸山さんか久保（卓也）さん、どちらかと同期なん

です。

佐道 久保さんですね。

夏目 東大同期、内務省同期なんです。

佐道 久保さんは昭和十八年です。

夏目 たしかそうですね。

佐道 はい、そうですね。

夏目 非常に頭の鋭い方であると同時に、肝の据わったといえは据わった人で、こうと思ったら、だれにも気兼ねなくパツというし、やるんです。当時はまだ自衛隊に対する国民の反発というか、理解が十分ではないときに、広島市内で観閲行進をやった。そういうことも平気でやる人だったんです。あそこの師団長か何かのときに、やはり、職業軍人である幕僚長ではないから、そういう目で見られてはいかんと思うから、余計そういうことをきちんとしなければいかんという意識がどこか頭の中にあつたかもしれないね。

伊藤 内務官僚で、警察予備隊を始めるときから入ったわけですか。

夏目 そうですね。

伊藤 それで、師団長をやられたり、陸幕長になられたり。

夏目 もう、見たところなんか、へたな職業軍人より軍人らしい人です。非常に言語明晰だし、はっきりしているし、役人的翰晦言辞を弄しきりません。立派な人ですよ。いまでも静岡新聞か何かの論説委員をまだやっているんじゃないですか。

伊藤 そうだ、静岡新聞の論説委員というのはいろんな方がいるんだな。

夏目 とにかく、ときどきまだ健筆を振るったりしている。

佐道 本も出されたりしていますから。

伊藤 そうですね。

夏目 だから余計に丸山さんなんかから見て煙たかったかもしれないですね。当時の内局はこぞって、「栗栖はとんでもない発言をしてくれた」という、非難ごうごうの雰囲気でした。大臣がそうでしたからね。大臣の意に沿わないようなことをいえないかったの

かもしれないけれども。制服からは、「いいことをいってくれた」というのと同時に、内局側からは、「とんでもないことをいってくれた」と、両方ありまして、発言自体の中身よりも、そういうことの及ぼす影響が大きかったですね。

伊藤 栗栖さんが統幕議長のとときに、海幕が大賀（良平）さんだ。

夏目 大賀さんという方は温厚な方ですからね。

佐道 防大に行かれてから接触が増えたというのは、これはどういう。

夏目 講演に来てもらったり、何かあるときにお呼びして、ちょっとスピーチをしてもらったりしたんです。だから、私の心の中にはどこか共感するところがあつたのかもしれないね。

伊藤 栗栖さんがその発言をしたという雑誌の『ウイング』というのは何ですか。

夏目 航空自衛隊というよりも、航空関係全般の新聞ですね。タブロイド版の新聞があるんです。航空自衛隊だけではないのですが、民間航空のことも書いていたりしているのだけれども、主として航空自衛隊の関係の新聞ですかね。

伊藤 この超法規発言の雑誌インタビューと書いてあるけれども、これは何だったのだろう。

中島 これは週刊誌だったと思います。

佐道 ちよつと確認しなかつたな。

夏目 いちばん問題になった発言は、最後のインタビューの「超法規」なんです。あと、択捉がどうかというのはいたいしたことはない。そのときそのときに応じて、ズケズケといわれる方だという印象はありました。

佐道 しかし、それほど大きな問題とはならなかつたという択捉の演習の問題とか、それはやはり内局として注意はされるわけですか。

夏目 統幕議長というのは、それまでその種の発言をされないの

です。外部の発表というのは、統幕議長はもちろん定例記者会見が一週間に一遍くらいあるのですが、何かそういうことの政策マター、あるいは国際情勢に関するようなブリーフィングというのはだいたい次官がやったり大臣がやったりすることが多くて、制服の方々はあまりそういうことの発言はしないのが慣例だったんです。

伊藤 では、記者会見で何をやるんだらう。

夏目 統幕で今度はどういうことをやるとか、何とかの統合演習をやるとか、航空自衛隊はこういう演習をやりますとか、どこその基地でどんなことをやるとか、そんなことをやっていたんです。防衛庁というのはおもしろくて、記者クラブというのがあります。政治部というのはみんな内局にいます。各幕に行く人たちは主として社会部なんです。もちろん行っていないということはないけれども、普段の接触は。現実に、基地問題とか、陸上自衛隊の地元との問題とか、そんなのは制服のマターであって、政策マターとか政治部向けの記事というのはみんな内局でやっているから、内局にいて、あまり各幕には行かないんです。何かあれば行きますけれども。そういうなんとはなしの習慣があるんです。各幕まわりの記者は社会部の人が多い。結局、記者会見もそういうふうになっちゃいますかね。

佐道 栗栖さんのこういう発言の背景に、まあ、法的な問題もありますけれども、制服の方のOBの方が七〇年代の中盤からいろいろな発言をされることが多くなって、例えば『自衛隊戦わば(防衛出動)』という本が出たり、『防衛大綱』の批判をされたり、OBの方の言論活動がこの時期くらいから活発になってきているような感じがあるのですけれども、そういうのは。

夏目 OBといっても、本当にトップの人ではない人たちの本ではないのですか。知らないけれども。

佐道 いえ、例えば陸海空三幕の幕僚長の方とか。

夏目 やめてから？

佐道 そうです。

夏目 それはやはり栗栖発言がきっかけになっていることはありうるかもしれませんが。というのは、OBも含めて制服の人たちは、「栗栖発言は正しい。正論だ」という認識がありますし、政治的な圧力といった形で彼をクビにしたわけですから、それに対する反発みたいなものがあつたと思います。現役の人たちはなかなかいえないにしても、OBの人たちはフリーにいますから、けしからんじゃないかという気持ちはどこかであつて、そういうことをいうようになったというのはありうるかもしれません。でも、OBになつちゃうと、いくら偉そうなことをいってもだめなんです。そのへんの評論家がいつているのと同じで。私もここで何を喋っても、もうOBだから無視されちゃう。

伊藤 そのかわり、逆にいえば、何をいってもだいじょうぶということですね(笑)。

夏目 それはだいじょうぶです。

伊藤 人事権を行使する人がいない。

夏目 つい最近も、あることで私が発言したら新聞に取り上げられて、国会の質問趣意書が出た。そうしたら慌ててすっ飛んできて、「OBの発言だから、いちいち論評を加える立場にない」とか書いて、「これでいいですか」と無視されちゃつた(笑)。「はい、結構です」といって。

佐道 大変実力がおおりました海原(治)さんとかの発言もやはり。

夏目 全然無視ですね。「まだいつているよ、進歩がないな」という、それこそ論評の限りではない。

佐道 それを聞かれたら、また怒るでしょうね(笑)。

伊藤 だけど、海原さんは、職をやめたあとは本当に影響力がなくなつたと自分でいつていたから。

佐道 そうですね、「ゴマメの歯軋り」と。

夏目 やめたら絶対に影響力はない。

伊藤 それはご自分でよくわかりだったと思います。

夏目 だから、物をいうのならばやめてからではだめなんです。

現職のときにいわなきやいけないんですよね。

伊藤 それでクビになる(笑)。

夏目 クビになっても困らん位置になったら、いわなければいけないんです。まだもつと偉くなるうんていうスケベ根性のあるやつは黙っていても仕方がないけれども、少なくとも次官になった人、統幕議長になった人は、いつでもクビになる覚悟で堂々と信念を通して大臣といえども諫言する。正しいと思ったら、いわないといけませんね。それは現役でいうから意味があるので、やめてから犬の遠吠えみたいにほざくのは、私にいわせるとフェアではない。そんなものはだめだと思っただけです。

伊藤 いくら勇ましくいっても、勇ましくはならんわけですね。

佐道 栗栖さんなんていうのはかなり大きな実績を。

夏目 そういう意味では非常に珍しい人ですね。それほど激烈な発言ではないけれども、ときどきいました。でも、ちよつと注意されると、慌てて言い訳して黙っちゃったりね。このあと、竹田(五郎)なんていう統幕議長もときどき何かいっただけでも、ちよつとたしなめられて黙っちゃった。それではしようがないですね。いまはチャンスなんです。イラクに行く問題も、あれ、どうして黙っているのかなと思つて。政治家に勝手なことをいわせていて、防衛庁の人はどうしてもつと堂々といわないのかなと。責任ある人がですよ。末端の隊員の意見は新聞にもときどき出るけれども、それでは意味がないので、やはりしかるべき責任のある人がこうこうだと新聞に署名入りでも何でも堂々というくらいでね。いざとなつたらやめればいいんだから。半年早くやめるかどうかだけなんです(笑)。そう思うのですけれどもね。

佐道 ちよつとまだ(笑)。

夏目 やめた人間がそんなことをいつてもだめなんです(笑)。

■陸上自衛隊幕僚監部の機構改編

佐道 この同じ時期なのですけれども、陸幕が組織編成替えをしています。陸上自衛隊だけ、海上自衛隊とか航空自衛隊と違って、アメリカの組織そのまま、部課制をとっていなかったのですね。

夏目 ああ、一部、二部とかいうやつ。

佐道 はい、そうです。

夏目 あれはこの時期でしたか。

佐道 はい、この時期にほかに合わせて部課制にしていくのですけれども。この当時にそういうことが行なわれるというのは、何かきつかけがあつたのでしょうか。

夏目 これは私が何をやっているときなんだろう。

佐道 このときは参事官でいらつしたころだと思います。

夏目 陸上自衛隊の陸上幕僚監部の組織というのは非常にわかりにくいんですね。もうご承知だと思うのですけれども、一部、二部、三部、四部、五部まであつて、これはゼネラル・スタッフ、一般幕僚というのです。そのほかに、武器課とか、比較的技術的な専門職みたいな課があるんです。それをスペシャル・スタッフといつて、これらの間にはべつに上下はないんです。アメリカの野戦軍の編成がそうなつていっています。ウイロビー第二部長とか、マーカット民生局長とか、ああいう式のゼネラル・スタッフとスペシャル・スタッフの二重構造になつていっています。だから、幕僚長の下にはまずゼネラル・スタッフの一部から五部まであつて、それは防衛庁の陸上自衛隊の仕事のほとんど全部をカバーしている。それを別の立場から補佐するスペシャリスト、ある意味ではテクニカル・スタッフともいえるのですが、そういう人たちがいるんです。だから、何かを決めるときにはこのゼネラル・スタッフとスペシャル・スタッフとが合わないといけない。ところ

が一般的にいつて、ゼネラル・スタッフの部長は将であり、将補なんです。スペシャル・スタッフの課長のほうは概ね一佐なんです。課長はね。部長というのは将か将補。だから、どうしてもゼネラル・スタッフのほうが大きい顔をしているわけです。しかし、専門的なことになるこの人たちに聞かないとだめなんですよ。なぜそうなったかという、自衛隊というのは昔からそうなんですけれども、指揮幕僚課程という学校を出るのですね。一般幕僚としての教養を身につけて、そういう人たちがゼネラル・スタッフになるんです。師団長になる人もそういう人です。技術的なスタッフというのは専門職みたいになつてしまつて、あまり偉くならないですね。いまはそんなことはないのですけれども、特殊な技能職になつていいる人たちがいるんですよ。そういう人たちは別の組織ができちゃつていいるのですね。

伊藤 ここ（スペシャル・スタッフ）からここ（ゼネラル・スタッフ）には上がらないわけですか。

夏目 上がる人はいるのですけれども、専門家の人たちで、どうしても指揮幕僚課程みたいな人たちが威張つちゃうんですね。だんだん専門職のとれたゼネラルの人間が、マルチパーパスの人間みたいなほうが偉くなつていくというのがあつていいますよ。

伊藤 まあ、一般的にそうですね。

夏目 専門にこだわつていいる人はあまりのびないという。どこの世界でもあるのだけれども。アメリカの野戦軍がそれで、ペンタゴンはそうはなつていらないのですけれども、陸だけはアメリカ野戦軍の組織をうけついでマッカーサー司令部の組織をそのまま踏襲しているのです。それは、予備隊ができたときに向こうの陸軍がつくつたからでしょう。だけど、海空はまったく新しい組織として戦後つくつたから、そういうものではなくて、総務部の下に総務課があり、人事課があり、防衛部の下に防衛課がありというふうにできていいるんです。

伊藤 それに合わせたわけですか。

夏目 合わせた。つまりやりにくいんですよ。仕事をするにも、例えば私が教育参事官で五部長に話しをする。五部署は偉いから決めるのだけれども、技術的なことになる、そのうちの例えばそれが機甲課（戦車・装甲車など、機械力を利用した兵器を扱う課）のことだつたら、機甲課というスペシャル・スタッフの意見を聞かないとだめなんです。一般幕僚として、一天二表三敬礼という、そんなやつが偉くなつていいるんです。ちよつと言ひ方が悪いけど。

伊藤 それは何ですか。

夏目 知らない？

伊藤 はい。

夏目 一天というのは天保銭即ち陸大出身者。二は、表をつくるのがうまいやつ。三は敬礼をきちんとする。その三つがうまいやつは出世するという（笑）。そんな話はいかんのだけれども。

武田 いわれていいますか？

岡田 いえ、初めて聞きました。

夏目 え？

岡田 その話は始めてなのですが、教育でゼネラリストというお話で、たぶん陸上のCGSの話だと思うのですが。陸にはいま、CGSと横並びで技術幹部の養成課程としてTAC（技術高級課程）というのがあります。

夏目 技術課程とか別につくつていいるでしょう。どうしてそういうのをやっていいるかという、技術は技術で育てようという気持ちもあるのかもしれないけれども、かつては技術を育てようではなくて、例えば大学院に行つて技術を勉強して人たちと同じ時期にCGSが始まつちゃうんですよ。行きたくても年次制限があるでしょう。例えば、博士課程をとるためには五年か六年間大学院に行つていなければいけません。その間に一方の人間はCGS

を卒業しちゃうんです。そうすると、CGSへ行くチャンスもない。だから、そういう人たちは技術で生きてもらおうとって、そのためには、そこを出たらCGSにも匹敵するような課程にしようというところで人事は苦勞してそんなものをつくったけれども、昔から専門ではない人たちのほうが大きい顔をするんです。もつと極端にいうと、陸幕勤務だとか、こいつはいいなと思つた者はみんな、幕僚監部の幕僚か、部隊の指揮官にする教育をするんです。あんまり微に入り細をうがった専門教育をしたがらないという癖があつた。それはよくないんじゃないかと、たぶんそういうことだろうと思う。いまはそんな昔みたいなことはないと思うのですが、どうしてもそういう専門的なこと……。シビリアンだつてそうですよ。

伊藤 技官というやつ。

夏目 技官ではなくても、情報なんかをやっていると、例えば、一所懸命やっていて、その人がいないとできないような仕事をやっていても、その職にいたら専門職でもつて上へ行くポストがないんですよ。

伊藤 それはどこの社会でもみんなそうですね。

夏目 ああいう社会をとかく是正しようというところでいろいろやっているのだけれども、頭の中にどこかやはりね。会社でもそうですね。総合職みたいなのが偉くなつていくというのがあるんじゃないですか。そういうところはあるのだろうと思います。

伊藤 これは結局、一般官庁型に編成をしたということですね。

夏目 そうです。海空に合わせたということは、そんなに意味はない。非常にやりにくかつたですね。向こうもやりにくいですよ。佐道 前からそれを変えなければいけないという声があつたのですか。

夏目 ありました。なぜ変えないんだという。

佐道 なぜ変えなかつたのですか。

伊藤 やはり、一遍できたものというのはそう簡単には変えられないんじゃないの。

佐道 三十年かかつたわけですか。

夏目 これは何だろう、法律かな、政令かな。みんなガラガラつとやるには、やはり法律改正みたいなものが要るんじゃないですか。

伊藤 単に制度が変わるだけではなくて、人の配置や何かも変えなければならぬから大変なんじゃないですか。面倒くさい。

夏目 むしろ遅きに失したと思います。僕らもわからなかつたもの。なんでこんなにややこしいんだと。編成とか、防衛計画とか、そういうのは比較的三部でもつて全部やれるのですけれども、四部なんて装備になると、四部だけではだめなわけね。物別の課とか、そういうところに聞かないと仕事が行かない。だから、むしろ日本の発想で変えたほうがいいというのは前からいわれていたのだけれども、それがたまたまこのときにできたので、この時期に意味があつたという記憶はまったくありません。そんなこともないと思うのだけれども。

佐道 この時期は、陸幕だけではなくて、金丸さんが統幕を強化しようという改革案をつくれといつてみたりということがあつたということなのですけれども、そういう機運があつたということでしょうか。

夏目 年じゅうあるんです。

佐道 年じゅう(笑)。

夏目 うたかたの何とかではないけれども(笑)、浮いては沈み、浮いては沈みというか。

中島 統幕の機能を強化するという機運がいつもあつたにもかかわらず、それが実現しなかつた最大の原因というのは。

夏目 最大の原因というのは、あえていえば、内局の反対もあつたのかもしれないけれども、各幕がいやががつたんです。やはり各幕は自分のところが一番であつて、統幕に権限をとられるという

のはありがたくない。そういう気持ちがあるから、ちつとも盛り上がらないですね。別な言い方をすれば、統合マインドというものも成熟していなかったんです。今度の組織ができるのであれば、最近ようやくそれが実ることになります。どこまで行くか知りませんが、ただ、これは何も日本だけじゃないんです。本当のことをいうと、世界じゅうそうなんです。いつかあったでしょう。洋服の三つの色を合わせるとパープルになる。パープル族という。カナダなんて行ってもそうですよ。あれは統合軍なのですけれども、洋服の色も違えば、みんな違うんです。変な話になっちゃうのだけれども、カナダ軍は雨の日に傘をさしてよろしいということになった。軍服で、ですよ。旧海軍だけは反対したんです。いまは自由なはずだけど、さす人はいない。だから、ことほど左様に三幕統合は難しいんですよ。だけど、私は本当のことをいえば、三幕統合とか統合強化もいいが、まず例えば音楽とか医療とか、そういう可能なところから統合軍にしたらいと思うんです。作戦部隊はしようがないけど、音楽をどこでやっても同じなんです。医者も同じです。それより対象範囲が広がったほうが医者のためにもいいことだし。そういうきめ細かなことをやればいいのだけど、なかなかできませんね。アメリカだって最初は戦略軍というのをつくって、これは陸海空の枠の外に置こうとしたのですね。だから、何でもかんでも一緒にするとうとどこかに無理があるから、まあ、いませつかくそういうふうに話が進んでいるから水を差すわけではないけれども、できるところからやったらいいんです。統幕だけを強化しようとしても何もならないんだから。統幕会議で各自衛隊に不利な決定をしようとなると、事前にそちらに漏れちゃうんです。

武田 そうなんですか(笑)。

伊藤 それは当然そうなるでしょう。

夏目 行っている人だつて親元があるから、親元と縁を切るくら

いの改正ならいいよ。だけど、親元に本籍を置いたまま統幕に向いて仕事をしているというのは、本当の意味での統合なんてできません。

伊藤 人事権。

夏目 まあ、人事権も大きな要素でしょうね。

中島 各幕とも反対だったというお話ですが、陸海空のなかで統合に対する温度差というものがありませんか。例えば、海上自衛隊のほうが陸上自衛隊より反対が強かったとか、そういうことはございましたか。

夏目 私は、それは感じたことはありません。あつたかもしれないけれども。

伊藤 どこも同じという。

夏目 もっと簡単にいえば、中央病院つてあるでしょう。あれ、本来は統合機関ですよ。しかし、沿革的に陸上自衛隊の病院だったんです。だから、予算とか人事権は陸上幕僚監部が持つ。お医者さんは海上も航空もいるんですよ。だけど、統合といつてもやはり陸上自衛隊が隠然たる勢力を持っていますよね。

中島 病院の中で。

夏目 人事権から何から。しようがないんですね、あれ。予算を切っちゃわなきゃ、人事権も切らないと。今度、中央病院を新しくするんです。こんな話をしていいのかな。この四月に起工式があつて、何百億の金を使って新しい病院をつくるのですが、これをつくることさえまらなかつた。なぜか。金を各自衛隊で分担せよというのですが「人事権もないし、何もないところへなんで金を出すんだ。そんな金があつたら、航空機や船をつくるよ」ということになるでしょう。

佐道 「金を出すのなら、口を出させろ」ということになりますね。

夏目 そうそう、それはあたりまえなんです。細かなことをいえば、そんなことはいっぱいあるんですね。

伊藤 中央病院というのは組織的にはどこにくつついているわけですか。

夏目 防衛庁長官にぶら下がっています。

伊藤 直接。

夏目 たしかそうじゃないですか。間違っていたら……。

佐道 でも実態は。

夏目 陸上幕僚長の統制を受けるかたちになっている。だから、本当に統合は難しいですよ。まず統合幕僚監部というのは一緒にして人事権をどこか一カ所で持つということにすればできるかもしれませんけれども、それぞれの自衛隊がそれぞれの予算と人事を持っているという形では本当の統合はできませんね。私は防大に何年かいて、学生があそこではまさに統合されて、同じ飯を食って一緒にやっているのだけれども、卒業して何年かたつと、同期生でも制服の色が違う同期生と合うチャンスというのはずっと希薄になっちゃう。同じ仲間としか会わない。それが何十年もたつたら別の人種ですよ。会えば、「おう」とはいえるのだけれども、べつたり陸上自衛隊の垢が付き、海上自衛隊の垢が付き。「局あつて省なし、省あつて国なし」というのと同じで、それぞれの自衛隊の色というのはなかなか溶けにくいですね。戦争観から何から違いますでしょう。だから、ある程度しようがないのでしようけれども。

佐道 内局の方からすると、統幕の存在というのはどういうものになるのですか。

夏目 これはまた、私はあえていやなことをいうと、いまいったような統合とかそういうことができなければできないほど内局は楽をしてしまうんです。これは要するにデイバイド・アンド・コントロールという。それぞれが一致団結してしまうと非常に強力になる。それがバラバラでお互いに敵視しあっている間というのはコントロールしやすい。「三国志」の世界みたいなものですよ。

昔と同じでね。そういう意味では、統幕でがちり一枚岩になると、私はシビリアンなんていうものの存在価値はグンと低下すると思います。既に低下しかかっている。どうしてかというのと、昔と違うんです。昔は予算と人事なんです。それと国会の野党対策みたいなことをきちんとしておかなければ自衛隊はもたなかった。その時期はシビリアンの存在価値があつたけど、いまは予算とかそんなものはある程度ルーチンになつてしまつて、特別な場合以外の予算はきちんとしてつくでしょう。今何が重要かというのと、部隊の運用なんです。やれイラクへ行く、災害派遣だ、やれ不審船だ。そのときにすぐ部隊を動かす。そうすると、そういうものの専門家は制服じゃないとできないんです。そうすると内局の出番はなくなるのです。知識も経験もないから。そういう勉強をして蓄積していればいいのだけど、していないから。いままで予算の切つた張つたばかりやっているから。どうしても隔靴搔痒の対応しかできなくなっちゃう。制服でないと夜も日も明けないような仕事かふえてきた。そうでなくても内局の地盤沈下があるときに、ここでまた統幕の機能強化だとか、統合強化だとかとなると、ますますなくなると思っているのですけれども。

中島 いま先生のおっしゃつたお話と関連しますけれども、内局に運用局なり運用課がございます。統幕の強化が進んでいった場合、直接影響を受けていくことになるのでしょうか。

夏目 なるでしょう。今の運用局をつくるときに私はもうやめていましたが、防衛庁から運用局をつくるという案を持ってきてどうかというから。「運用が大事になつてきた時代、部隊運用の時代になつてきたのだから、つくるのはわかる。つくるのだつたら、いま防衛局が防衛庁のほとんど権限を握っているような、あの局の権限を剥奪してでも運用局をいけばん大事な局に育てるようなことでないのだよ。要員の教育を含め優秀なスタッフを集め、局長には、必要であれば年次も高くて実力のある人間を持つてこ

い。そういうふうなことをしなければ、運用局をつくっても、また防衛局の下風に立って、幕のいうことをハイハイとやる伝声管みたいな仕事しかできなくなってしまうのでは鼎の軽重を問われるよ。そうやるのか」といったら、「そういうふうにするつもりだ」というから、「それならいいだろう」と。つくったら、ちつともやっていない。そう私は見ているのだけれども、どうですか。

中島 ……(笑)。

伊藤 ハハハハハ、遠くに見えませんが(笑)。

夏目 私はだれにでもいっているから、それは私の持論だからべつに隠す必要はないと思うのですけれども、そう思うんです。多分いまでも防衛局長がいちばん大きな権限を持っています。で、運用局なんていうのは何をやっているのかなと思いますよ。実際は幕がみんなやっちゃっているんじゃないかな。そういう気がするのですけれどもね。これが私の杞憂ならいいのですけれども。そうなると、つい最近新聞に出ていたように、内局の局長に制服をもってこようが、そういう発想になるんですね。そのいちばん最初にもつてきそうなのは運用局かもしれない。

伊藤 下のほうに実力があれば、そこから引き上げてくるというのがいちばんスムーズに物事が進むのですからね、たしかに。

夏目 最近の動きを見ると、防衛庁はみんなそっちの方向へ行っていますよ。今の局長に制服をもってくるというのもあるし、防衛白書から内局の優位性を消すとかいって二、三日前に新聞に出ていた。防衛白書に内局の優位性なんて書いてないんです。それは新聞が書いているだけで、法律にある条文をそのまま引用しているだけなんです。シビリアン・コントロールというのは政治が行なうのだとはつきり書いてあって、内局が行なうなんてどこにも書いていない。ただ、いまの法律の条文として、各省そこのだけども、事務次官というのは省を統括するという。これもあたりまえなんだよね。そうすると、自衛隊の場合は陸上自衛隊の隊も総括するよう

になっちゃうんです。そうすると、ちよつと下風に立つみたいに読めないでもない。それがよくないのだと思うけれども、しかし、それはそういうことではなくて、それぞれの立場で大臣を補佐するということであれば、べつにどちらが優位になるとかかないとかということではないのだけれども、ことさらに今年から防衛白書からそういう文言を消すというから、何を考えているのかなと、私には最近の動きがよく理解できないですね。

■ 中央指揮システムの改革

佐道 前から、中央指揮所という、指揮システムをきちんとしなればならないと。

夏目 中央指揮所ってあったかな。これはいつできたの？

伊藤 これはまだ委員会なんだろう。整備するための。

佐道 そうです。

夏目 これはこの時期にできたの？

佐道 はい。ちよつと、「ミグの事件でもこういう指揮系統がしつかりしていなかったのではないか。だから連絡等々もうまくいかなかったのではないか」ということが議論にあげられて、こういうのが設けられたということになったのですが、ご記憶には。

夏目 あるのだけれども、ちよつと時期が。この時期だったかな。とにかく防衛庁の中央指揮所というのはなかったんですよ。統幕と各幕に各々作戦指揮所というのがあるにはありましたが。それは会議室みたいなのがあって、電話やボード等が置いてあるだけで、いつてみればゼネコンの現場の事務所みたいなものです(笑)。もちろんそれほど極端ではないけれども、たいした設備はないんです。私も何回か災害派遣のときにそういうものを実際に設けたり、そこへ行つて仕事をすることがあるけれども、なんていつたって情報はテレビなどマスコミのほうが早いですよ。それはやむをえないにしても、こんなことで戦争ができるかなと思つたこ

とがあります。あるときに、横須賀の自衛艦隊を見に行った。自衛艦隊には自衛艦隊の作戦指揮所みたいなのがあったんです。ちょうどそのころできたんです。これは、スクリーンがあつて、瞬時にパッパッパッと全国の状況を現示できるようなものが備えられて、どこそこにおいて自衛隊の船が配備されているか、待機状況はどうだと、そんなものがいつぱんにわかるようなものがある。それから、航空自衛隊のレーダーサイトにはそういうものがあるんです。それはどの飛行場にはどういう航空機が待機していて、いまソ連の飛行機がこういう方向で走ってきているとか、ほかの飛行機はどうとか、そういうのを瞬時にしている設備があるんです。だから、そういうのは陸海空の中ではあるんです。いちばん粗末なのは陸上自衛隊なんです。

伊藤 だけど、これは難しいでしょう。

夏目 うん、そう簡単にはいかないのだけど。それを、陸海空を統合して全部のやつがその場でわかるようなもの、それから中央の指揮命令がすぐ末端の部隊に届くようなものが必要だといわれているのだけれども、いよいよそれをやろうということになって、それには場所をつくらなきゃいけないんですよ。組織よりまず、むしろそういう施設が必要なわけですね。その施設をつくる委員会がこれなんです。だから、そういう組織をつくるというのではなくて、そういうハードウェアをつくるための委員会です。それで、その後何年かたってそれができたんです。六本木の防衛庁の地下四階くらいのところに。

伊藤 では、いまは向こうに移転したということですね。それは、陸海空それぞれがいまどんな状態になつているかということが一目瞭然に。

夏目 同時に、耐震、爆撃にも耐えるように地下深く潜つて、ほかのところから遮断できてある程度独立で仕事ができるような、そういうものをつくる必要があるということで大々的な作業をや

つてつくつたんです。防衛庁の本館の裏につくつた。

伊藤 これは防衛出動なんかの場合にも役に立つと。

夏目 災害派遣でも何でも役に立つと。

佐道 首相官邸にも危機管理センターみたいなものができたような。

夏目 それもちよつと後だと思えます。詳しくはちよつと記憶がないのだけれども、五十五年の十一月に国防会議が改組されて総合安全保障会議というのができるんですよ。そのときの理論として、総理官邸にそういう情報指揮システムが必要だろうと。最初は電話ですぐ連絡がとれるような程度だったのだけれども、あそこである程度指揮を取れることが必要だろうといわれて、それが総合安全保障会議に発展していくわけです。だから、たぶん同じころにそんなことがあつたかもしれないですね。ちよつと官邸のほうのやつというのは私の記憶にはないですけども。

佐道 立川にそういう管理センターか何か。

夏目 ああ、それは東京都でしょう。

伊藤 都ですか。

夏目 東京都の災害何とかセンターが都心にあつたのではないぞという時一緒にやられてしまう。立川に置いといて、あそこである程度できると東京都が構想したのは、できたかどうか知りませんが、あれども、あつたんです。あそこは自衛隊の飛行場もあるし、ヘリコプターも飛べるし、広い地積があるからということでしょう。ただ、非常に残念なことは、指揮所ができてすぐ市ヶ谷移転が決まるのです。相当金をつぎ込んでできたのが無駄になつちやつたわけです。

伊藤 そのまま移転というわけにはいかんのですか。

夏目 ああいうところが少しもつたいたないといえどもつたいたないですね。

佐道 それは大規模な災害のときにも使えるという話でしたけれど

ども、例えば阪神淡路大地震とかそういうときに。

夏目 そういうときは使っているのではないですか。私はもう知りません。やめてからは見たことがないから。六本木ときは、やめるまでに何回か入ったことはありますけれども。

伊藤 そういう防衛庁の指揮所と官邸との関係というのはどういうふうになるのですか。

夏目 官邸というのは、戦争のときもそうでしようけれども、そうでなくてむしろ災害派遣で国土庁とか海上保安庁とか建設省とかいろいろなところから情報が来るでしょう。それをまた指示しなければいかん。あそこで関係閣僚が集まって指示すればいいようにする。関係の局長が集まって、別室で待機していろいろ検討する。そういうことができないと、縦割りで、またそれぞれの役所を戻ってやるということでは間に合わないということで、官邸にそういうものを置くことになったのです。

伊藤 それと、防衛庁のそれとが直結していなかったらまずいわけですね。

夏目 もちろん。

■ 人事教育局長に就任

伊藤 わかりました。五十三年十一月に今度は人事教育局長におなりになるわけですけども、先ほどのお話ですと、人事教育局といっても、実際は人事局長ですね。教育は教育担当の参事官が、当然先生の後任がいらつしやるわけでしょうから。

夏目 うーん、重要な問題なんてあったかなあ(笑)。

伊藤 アハハハハ(笑)。人事局は何の人事をやるわけですか。

夏目 制服の人事全部。

伊藤 制服ですか。

夏目 それと、内局というかシビリアンの人事のほとんど大半。

伊藤 では、全部みたいなものですね。

夏目 まあ全部。どういう人をやらないかというのと、内局の局長とか課長とかはやらない。

伊藤 それは次官のお仕事。

夏目 いや、それは官房の仕事になっていくんです。だけど、例えば付属機関なんかに出ている事務官がいるじゃないですか。そういうのはみんな人事局長の主管です。

伊藤 防衛庁自体は、内局はあちこちと出入りがあるわけですね。そういう調整というのかなり大きな仕事になりませんか。例えば大蔵からずいぶんたくさん来ているはずですし。

夏目 課長とか局長の調整はみんな官房でやるから。

伊藤 でも、全部課長で来るのですか。

夏目 まあ、だいたい、私のころは課長以上でないといなかったんじゃないですか。課長、局長くらいしかいなかった。昔は確かにいましたよ。自衛隊創成期のころはいろんな省庁から応援に来ていましたから。半分くらいは各省からの応援でしたからね。

伊藤 人事といいますが、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊、それぞれの人事というものは、実質はどこがやるのですか。

夏目 実質は各幕の人事部がやるんです。

伊藤 それを持ってきて、「まあ、よかろう」と。

夏目 だから意味ないことをやっているんですよ。

伊藤 意味ないんですか。

夏目 まあ、私は意味ないと思っっているからね。ということとは、制服の人、陸だけで十何万で、幹部だけでも何万とします。何万といえるわけじゃないですか。私はその全部を知っているわけではない。

伊藤 対象とする人が何万もあるわけですか。

夏目 人事一課というのは幹部自衛隊をやっているんです。人事二課というのは曹士の人事をやっています。三課というのはシビリアンの人事をやっています。

伊藤 そうすると、本当の兵隊さんを除けば。

夏目 兵隊さんの場合は採用とか退職くらいしかなくて、直接は見ていないのだけれども。

伊藤 それは各幕でやるわけですね。

夏目 もちろんそうです。だけれども、募集とか採用とかは人事二課がみんなやっているんですよ。そういうことの枠組みづくりは。人事三課は文官の採用や給与までやっているんです。人事一課というのは幹部であって、幹部の、昇任とか、配置換えとか。しかし、そうはいつでも、そのほとんどは各幕に任せていました。二佐くらいから上をみたのかな。

伊藤 それでもかなりの数になるわけですね。

夏目 多いですよ。そんなの見きれないでしょう。顔も知らない人の人事なんか、私は興味ないですしね。だから、持ってくれば(判を押す)(笑)。だけど、なかにはやたら人事が好きの人がいるんですよ。「あれはどうなった?」とかね。

伊藤 あんまり個人的な趣味でやられても困るなあ(笑)。

夏目 そういう人がいるんです。人事の好きな人がね。

佐道 へたなことをして、恨まれたりしたら大変ですしね。

夏目 なかには、本当のそのへんは、二佐とか一佐くらいまではいいのですけれども、将とか幕僚長にだれをしようとすると、やはりちよつと神経を使うときがありますよね。いろんなバランスをみたり、適任かどうかというのはいろんな人の意見を聞かないといかんし、変に色で染まってる、先輩が好みでもって判断していることもあるでしょうからね。そういうことのないようにネガティブチェックはします。

伊藤 政治家が絡んでくるといことはあまりないですか。

夏目 あつても聞かない、そんなもの。それはいろいろ来ますよ。ああしろ、こうしろと。まあ、幕僚長にしろとか、そういうのはないですね。あいつを早く一佐にしろとか、そんなものですよ。

それはいくらでもあります。

伊藤 そうですか。やはり一種の陳情。

夏目 そんなものは一切無視していますけれどもね。きりがないから。

伊藤 誰かの話を聞いたら、ほかも聞かなければならなくなっちゃうから。

佐道 制服のほうは、幹部のかなり上のところまで先生のところ

夏目 まあ、私が神経を使ったのは、幕僚長にだれがなるとか、将にだれが昇任するかというくらいのものであって、それ以外は正直いつてあまり関心なかったですね。

伊藤 では、目くら判。

夏目 局長は目くら判ですね。課長はどうやっているか知らないけど。わからないもの。各幕の人事部のほうもよく知っているんだからね。組織を強くしようという気持ちはだれしもありますから、えこひいきだとか、いかがわしい人事をやるといのは、まあ、ほとんどないです。だから、そんなことまで心配で信用できないとなったら、これは組織のおわりで。

伊藤 まあ、それはそうですね。

佐道 幕僚長もそうだとすると、各幕の部長クラスとか、将あるいは将補くらいの方でしたら、そのくらいのレベルの方でしたら、それは皆さんご存じの方ですね。

夏目 将になるような人くらいは知っていますよ。どこかで話をしたとか、昔付き合ったとか、知っています。それから、写真を見たり経歴を見たりするけれども、いくら見てもいい玉か悪い玉かわからないですね。人相で判断するわけにはいけません。

佐道 人相でやられたら(笑)。

夏目 人相でやられたら、だいたいこちらがだめになっちゃう。

佐道 いやいや(笑)。

伊藤 それはどうか(笑)。

夏目 人事というのはあまり深く介入してもいかん。そうかといつて、あんまり無責任なことでもいかん。俺はちゃんと関心を持って見ているぞというジェスチャーは必要。だからといって、あれこれいうのはあんまり好ましくないと思う。だれか昔の人がいったけど、平時の人事というのは凡なるをもつてよしとするので、みんながいいと思っている人を推すのがいちばん無難なんですよね。戦争のときは別です。

中島 人事を決めるときは判断材料として、周囲にいる人たちの意見に耳を傾けられたり。

夏目 周囲にいる人といつても、内局なんか知らないからね。正直いって、私より知っているのはいないと思ってるから。私も知らないけれども、もつと知らないと思う。各省から来ている人なんて、もつとわからない。

中島 そうしますと、判断されるときは。

夏目 各幕のいうことを聞くのがいちばん。ちょっと心配だったら、一人ではなくて、別のだれかに裏をとるか、そんなくらいはすることはするけれども。だけど、人事部長を立派な人がやっていたら、そんな心配はまずないと思う。いかがわしい人事部長がいたら、それはこちらも用心するでしょうけれども。だから、人事部長がどんな人か見きわめないかね。

佐道 人事部長とは。

夏目 年じゅう会っているから。だから、そこは大事だと思うのですね。

伊藤 人事教育局長ですけれども、教育は関係ないのですね。

夏目 関係ない。教育参事官に任せてある。

伊藤 お任せ。

夏目 だから、人事局長の仕事はたいしたことないのですね。

伊藤 あんまり気持ちのいい仕事ではないですね。建設的で創意

工夫ができるというような、そういう仕事ではない。

夏目 そんなものはないです。むしろ私のときにいやだったのは、宮永事件があつたんです。やはりこういうのは人事局所管ではないとはいえない。

■宮永事件

伊藤 では、ちょっと先に宮永事件のことを。

佐道 これはかなり大きな問題だったわけですよ。八〇年、五十五年一月に。

夏目 私はたしか人事局長だよ。これは突然、全然知らなかったのです。何か匂いがあつたのかどうかは知りません。私は少なくとも寝耳に水でした。これはちょっととしたエピソードがあつて、私が総理官邸に行つて、たしか統幕議長だつたと思いますが交替人事の説明をした日でした。

佐道 宮永さんの直後ですか。

夏目 たしか統幕議長か何かが。一月に宮永事件の逮捕なんですよ。

武田 五十四年八月に竹田さんがなっています。

夏目 そのあとは。

伊藤 そのあとはしばらくかわっていません。

佐道 翌年二月に矢田(次夫)さん。

夏目 ああ、それだ、矢田さんの人事だ。要するに閣議了解の人事なんです。統幕議長の人事案件があつて、官邸に閣議の前の事前了解を求めるのです。説明をして了解を求めて、オーケーをとって帰ってきた。そうしたら、当時の巨理次官が、「ちょっと来てくれ」というんです。行ったら、「おい、ばれたよ」というんです。ばれたつて、私はびっくり矢田議長の人事が事前にもれたのかと思つたんです。話がちょっと合わなくて、「え？」とつたのが、宮永事件、スパイ事件の発端なんです。新聞記者

が来てウロウロしている。私の部屋にも来ていますよ。ドアの外にね。で、「いや、そんなじゃないんだよ。秘密漏洩だ」というのでね。そうしたら、七時のニュースか何かでパッパッパと出るんですよ。これはえらいことだなと思って。現職自衛官がスパイ容疑なんて、私の経験では初めてですよ。そのときは、矢田さんの議長がばれたなんて笑い話をしていたらとんでもないことになって、それからんやわんやの大騒ぎになったのです。これはたしかNHKがすっぱ抜いたんだよね。

伊藤 どこからすっぱ抜いたのですか。

夏目 これは警視庁ではないでしょうかね。

伊藤 警視庁は、それでやって防衛庁には全然直には連絡しなかった。

夏目 一部どこかにはしていたのかもしれませんが。それが私のところへは情報がきていなかったのです。私は寝耳に水みたいなことだったのですが、さっきの巨理さんの話ではないけれども、「ばれたよ」というのは、どこかで知っている人がいたのかもしれないですね。それはわかりません。だけど、通常は逮捕とか何とかというときには何らかの予兆があるんですよ。そういうことになってから、これは規律違反の問題だからまったく人事局長の守備範囲なので、これは大変だということ。夕方七時のニュースで知ったのははじめですから、その夜。それから大騒ぎになって、家宅捜索が入るとかいうような話になって、新聞記者はワイワイいつてくるし、収拾がつかない。状況はよくわからないですね。とにかく私がいちばん気にしたのは、防衛庁の家宅捜索がいつか。あれはテレビで絵になるでしょう。テレビ局のカメラがいつばい来ているんですよ。こんなのを絵にされて、いまは役所に検察庁がガサ入れるということはあたりまえになったけど、当時は役所の家宅捜索なんかなかったですからね。これは自衛隊員何十万の士気にもかかわるなど、こんなものは見せたくない。や

るのならば静かにやってしまいたい。ところが、もう多くの報道陣が控えているでしょう。あのときは警察だったか検察だったか覚えがないな。ともかく話をして、きょうは来ないということにした。それで、次官以下をみんなうちへ帰しちゃった。そんな時です。からみんな帰るわけには行かなかったんじゃないですか。「絶対だめだ。あんた方がいたら、新聞記者も疑っているから帰らない」と。防衛庁に在室を示すサインがあるでしょう。みんな、あれを消して帰ってもらった。飲みに行ってもいいから、とにかくどこかへ行ってくれと。そうして皆帰りましたが、私は主管局長だから残っていてもいいだろうと一人残りました。そして警視庁か検察に確認したわけです。「きょうは来ない」と。「いつ来るのか」といったら、「そんなことはわからない。まあ、きょうはやめておきましょう。そのかわり、あしたになったらいつ来るかわからない」と。暗に払暁という感じなんです。時計が十二時過ぎてからやることは間違いない」と念を押した。「それは間違いない」というから、よしわかったと。新聞記者に、「きょうはない。俺の首をかけていうから」といったら、みんなサーッと帰っていった。それから三十分もたたないうちに、裏口からやって来た。それで結局は絵にはならなかった。

伊藤 まあ、嘘をついたわけではないですね。「きょうはない」と(笑)。

夏目 嘘はいつていないんですよ。

佐道 きょうではなかったわけですよ。

夏目 しかし、そうはいつても次の日に記者会見でガンガンやられました。だまし討ちだとか。しかも、たしか休みの日だったものだから、とつくりセーターか何かを着て、その上へ背広を着て、出勤して記者会見に臨んだんです。だいたいこの重大事件にトックリセーターで記者会見をするとは不謹慎と、全国から投書が来るんですよ。

佐道 来るのがおくれたらおくれたで、また文句をいわれる(笑)。
夏目 大変でしたよ。その次は責任問題でしょう。どこまで責任を追及するかというのがあるんですね。彼は相当長い期間にわたってやっていますからね。そのときの直属上司というのは、その後幕僚長になったり、なるうとしているのがあるんですよ。これをどうしたものか、あのときは本当に苦労しましたな。たぶん一月の寒い時期ですね。私は本当は、そのとっくりセーターの日は息子が私に温泉旅行のプレゼントをくれたんですよ。いまだに、一生に一度はじめてのことですがね。

一同 アハハハハ(笑)。

佐道 息子さんの親孝行が……(笑)。

夏目 そう、無駄になっちゃった。それでとっくりセーターを着ていったといわれたのでは合わないと思うけれども、とにかくそういうことがあって。そのあと新聞記者は夜中でも何でもうちへ来ますしね。いまでも思い出すけれども、名台詞があるんですよ。風邪をひいて寝ていたら、本当に風邪かと部屋までのぞきに来た記者がいた。私の寝ている部屋に。本当に寝ているわけですよ。「病気はいかがですか」とおざなりみたいに言いやがるから、「本当の病気は俺じゃない。防衛庁だ」と(笑)。本当にひどい目にあいましたね。それで私も処分を受けたのですから。

中島 ほかに宮永事件に関係されたのは。その当時の上司の方も処分を受けたのですか。

夏目 みんな処分を受けましたよ。上司も。

伊藤 宮永さん自身を先生は。

夏目 全然知らないです。

伊藤 知らないのですか。人事局長としてはどういう責任があるのですか。

夏目 規律違反でしょう。正直いって、私は責任があるかどうかわからないんです。だけど、制服の人たちの監督責任があるでし

よう。次官もやらなきゃいかんですよ。大臣、次官というラインの責任を追っていかなければならぬ。しかし、ラインの責任をはちよつとおかしいじゃないかと。こういうのは少し派手にやって反省の意をあらわしたほうがいいと。邪道なのですけどもね。そのときも少し広げて、私もいいですよ。やりましょうといって、案外理屈ではないんですよ。とにかく内局も処分されたということ、多少制服の顔を立てるようなところがありましたね。そのくらい神経を使うんですよ。

伊藤 賞罰も人事局長なんですね。

夏目 賞罰も人事局です。

伊藤 賞もあるわけですね。

夏目 善行賞とか、功労賞とかありますよ。みんな任せていますけれどもね。

伊藤 昔みたいに金鵝勲章みたいなものはないでしょうけれども。

夏目 勲章も人事局ですよ。年をとったOBの人の勲章も。

伊藤 それの申請といえますか、あれもそうなのですか。

夏目 宮永事件というのは、突発的ではあるけれども、人事局長としてはおまけでしたね。

伊藤 昔の軍隊にあつた憲兵みたいな、そういう。

夏目 憲兵が調べてわかつていけば事前にわかつたのだと思うけれども、わからなかつたのでしょうね。憲兵というか警務隊がね。

伊藤 警務隊というのが昔の憲兵にあたるわけですか。

夏目 そう。

佐道 それは人事局についているものですか。

夏目 警務隊は人事局の専管部隊なんです。専管部隊という大変だけれども、もちろん陸上自衛隊だけれども、事柄によってはすぐ人事局に報告される。

伊藤 では、そこでは全然キャッチしていなかったということでは

すね。

夏目 そう思いますね、何も聞いていないから。うちの警務隊では無理ですよ。警察のように金を使っているわけでもないし、何も無いからね。ただそういう職種をしているだけで。だから、予算も人事も情報網も十分ないでしょう。投書でもあったり、そういうものがあつて調べるのはできるけれども、何もないところから匂いをかいで、怪しいぞなんていうところまでかぎだす能力はないですよ。ソ連の大使館の連中と飯を食っているなんていうのは、アフターファイブでやっているぶんにはなかなかつかめませんよ。だけど、警察はそれに対してソ連大使館の連中をチェックしてきますから、そいつと付き合つたやつを見ていけばすぐ追いかけるけれども、うちはそんなことをやっている暇はないですから、それは無理でしょうね。

伊藤 実際にどの程度の機密が向こうに渡つたかとか、なぜこういうことになつたかという事の経緯は。

夏目 それはずっと調べました。

伊藤 それは防衛庁としても最終的にはわかつたわけですか。

夏目 わかつたと思いますよ。私も記憶にないけれども、どんなものを持ち出したかとか、どういう接触の経緯があつたと。あのときの相手はたしかコズロフとかいう。ソ連の武官か何かでしよう。手を替え品を替え、あちこちのレストランか何かで会つていた。だから、旧ソ連時代の大使館の連中とは飯を食うのも自粛していたんですよ。そんなことをする気がなくても、そういう疑いを持たれてもいかんし、だんだんおごられたりしているうちに深みにはまる可能性があるという事で、そういうことはしないのが普通だったのだけれども、やっていたのですね。そのあと、上司の人事なんかにも多少影響したんじゃないかな。なれる人もなれなかつたようなことがあつたような気がするな。覚えはないけれども。

伊藤 それは宮永さんの上司だったということですか。

夏目 そう。ところが正直いいますと、調べているうちに、そのときはここまではわかつた。じゃあ、こちらの人はいいなと思つたら、時間がたつたら、こつちもおかしかつたというのが出てくるんですよ。全部になつちゃう。なかなか難しいですね。

伊藤 相当長期にわたつてやっていたということですか。

夏目 長期にわたるから、そのときの関係上司もふえるんですね。普通は、一年とか一年半さかのほつて、そのときに上司からチェックすればいいんだけど、その直前までいた上司は免れていたのに、後で調べたらこつちもあつたというのがありますからね。

伊藤 だけど、一遍処分を決めたら、それをさかのぼるといわけにはなかなかいかないでしょう。

夏目 いかないからね。たしか、あのときは互理次官と防衛局長の監督。機密というのは防衛局の所管ですから、防衛局長と次官と人事局。人事局は本当は関係ないのですけれども、私が処分案を決定するから、ちよつと調子悪いからひとつつけておいただけです、痛くも痒くもないしね(笑)。

伊藤 実際にこういうことで痛いというのは。

夏目 若い人は痛いでしょう。

伊藤 あとあと付いてまわるといふことですか。

夏目 賞罰というのがつくからね。

佐道 訓戒というの。

夏目 訓戒はつかないですよ。たしか戒告からつくんですね。ポナナスにも影響するんです。特別昇給なんか一回ぐらになくなるのかな。だけど、指定職になつていようような次官とか局長なんて、そんなのは痛くも痒くもないわけですよ。どうせすぐやめるんだから。

伊藤 アハハハハ(笑)。いやあ、退職金に影響でしょう。

佐道 内局の次官とかそういう方もやはり一応責任をとるといふ

形にしないと、いろいろ。

夏目 自衛隊の組織というのは、本当のことをいうとそんなのは関係ないんですよ。だけど、バランスということもあるし、処分案をつくるのはこちらでしょう。制服だけを処分して、文官は関係ないよというのは、法理論上は通るかもしれないけれども、人情的に通らないですね。それと、記者会見なんかをしても発表するのは私ですからね。「なんだ、片手落ちじゃないか」なんて、やりにくいじゃない。そのときに、「私もやられた」というと、相手も気の毒がつてね。本当は気の毒でもなんでもないんだけど、「私もやられました」というと、あんまり深く追求しないですよ。

佐道 この事件のあと秘密保全体制検討委員会というのが設置されて。

夏目 それが宮永事件の対策の話ね。何をやったか記憶がない。それは主として防衛局が担当する委員会でしょうからね。

佐道 全般的に機密保全についてはかなり厳しくなったと。

夏目 なったと思いますよ。いまは、コピーをとつてもすぐ資料ナンバーのどれからとつたかわかるように。普通はわからないのですけれども、だれに配布したものからとつたかわかるようなコピーとかね。それと、秘密文書が何万件とあるから、たいしたことないのは秘密解除にしまえと。いたずらに罪人をつくるようなことはやめようじゃないかと。

佐道 そうですよ、どんどん秘密解除してほしいですけどもね(笑)。

伊藤 あれは、解除するのに手続きが面倒だと、解除しないで置いておくのですね。

夏目 防衛庁は何でも秘密にしたがるんですよ。愚にもつかないものを。

伊藤 防衛庁だけではなくて、それは外務省でも何でもみんなそうだな。

夏目 外務省も防衛庁と同じところがあるね。そういうことをやったり、同じ職に何年もつけないとか、マニュアルじゃないけれども、秘密保全の心得とかを決めたようだけれども、私には直接関係ない。あたりまえのことですからね。普通の人はやらないことなんですよね。やはり金をもらうとだめなんです。最初は一杯飲んだりして、ご馳走したり、秘密ではない一般的な資料を持つていつて喜ばれて、五万円とか十万円もらって、「こんながあるといいな」とお金をもらうと、もう逃げられなくなっちゃうんです。途中でやめると、「ばらすぞ」というような。当時のソ連は何をやったかわからないですからね。

伊藤 いろんな事件がもつとたくさんあつていい。

夏目 盗聴装置をしかけたり、本当に危ないです。

伊藤 それにしてはさういふん事件の数としては少ないと思いますけれどもね。

佐道 秘密保護法もないこの国で、そのわりには少ないですよ。伊藤 だから、結局はわからないでそのままになっているというのがいっぱいあるということではないですか。

夏目 あるでしょう。潜在的なものもつとたくさんあると思いますよ。というのは、海原さんなんかは、あれは秘密保護法違反になるかも。

伊藤 そうですか？

夏目 秘密文書をいっぱい個人的に持っているんだもの。それで政策研究大学院でしゃべっているんだから。

武田 冷戦のあととわかれわれですね(笑)。

佐道 そうか、スパイ活動だ(笑)。全然意識していなかったなあ。

伊藤 われわれは有罪だな(笑)。

佐道 スパイ防止法はありませんから。

夏目 スパイじゃないからね。秘密保全はもらしたやつが悪いのだから。

伊藤 だいたい愚にもつかないことがみんな機密になつてゐるからな。

夏目 私はこんなおしゃべりするけれども、本当に秘のことはしゃべらないようにしてゐるんですよ。そこはぼかしてしゃべつてゐるのですけれどもね。

伊藤 そうですか。

夏目 うん。ただ、人情的に秘密にしたくないと思うことはみんなしゃべつてゐる(笑)。法律違反はしてゐない。

武田 人情的な秘密ですか。

伊藤 もう少し深く読まなければいけないな。

夏目 だけど、文書を持ち帰つたりするのがいちばん危ないですね。なくしたりするし、とられたりするし。だから、役所の秘密文書をうちへもつて帰つて勉強しようなんつていうのはだめだ。それほどもでしてしなきゃならない仕事なんかはそんなにないだろう。能力のなさを表明してゐるようなものだと。

伊藤 うちへ帰つたら酒を飲んでいろと。

夏目 そう、共産党と……共産党はいいことをいう。

佐道 アハハハハ(笑)、いいことですか。

夏目 いいことだと思ひます。自衛隊は、何か事件があつたり、事故があつたり、規律違反みたいな問題があると、すぐ規律厳正にとつて風紀を取り締まるんですよ。そして、基地の中では自粛して酒を飲ませないんです。

伊藤 中でも飲ませないのですか。

夏目 うん。要するに、こんな重大な時期に酒なんか飲んでゐるのはおかしいという雰囲気をつくつちゃうんです。ばかな司令官はそういうことを通達するんです。そうすると皆飲めなくなるんですよ。じゃあ、人間どうするか。飲まないかといつたら、外で飲むんですよ。外で飲むと、酔つ払つてべらべらかなことをしゃべつたりね。だから、私はそれはおかしいといつたの。そうい

うときこそ中で飲ませろと。外では真面目な顔をしておれと。ばい菌みたいなものを外へ撒き散らすなどいうのだけど、いまの自衛隊は逆なんです。「共産党を見習え、うちで酒を飲め」というんだ(笑)。

佐道 やはり共産党の組織原理なんですね(笑)。

武田 見習わないといけません。

伊藤 だけど、あれは取り消したじゃない。

夏目 取り消したからだめなんだよ。

佐道 革命の先導者も民主主義には勝てなかつた。

伊藤 いやあ、酒に負けた、なんて(笑)。

夏目 だけど、本当にそういう飲み屋もあつたんです。六本木だつたら概ね高い飲み屋しかありませんよ。そういうところで大衆飲み屋みたいなのがあつて、そこへ行つて口角泡を飛ばして、上司の悪口から、いまやつてきた仕事がばかばかしいとか、そんなものをみんなこうやつて(聞き耳を立てて)聞かれてゐる。用心しろと。じゃあ、みんな行かないかという、安いから行きますね。だけど、そんなものあんまり大つぱらにいえませんしね。営業妨害になつてしまふ。

伊藤 機密保持はなかなか難しいですね。人の口に戸は立てられないという。

夏目 本当に機密というのは不愉快ですしね。一人の不心得なやつがいると、みんな疑われちゃうからね。大なり小なり、これと似たようなことはありましたよ。あんまり大つぱらにはならないけどね。

中島 先生の防衛庁時代のご経歴のなかで、機密か機密ではないかを区分するラインというのはどういう基準で決められていたのですか。

夏目 まったく決める人間の恣意専断だと思われぬ。一応ありますよ。国家の何とかに重大な影響を及ぼすなんていう。自

衛隊は、いまでもどうでもいい書類を後生大事に金庫の中に入れて機密で持っている。幕僚長の後ろの金庫に入っている。こんなことをいってはいかんけど、こんなことはいっぱいあるんですよ。だから、機密が多すぎるんです。管理をきちっとすればいいのにしないから、それは罪人をつくるようなものなんです。その後、機密文庫の保管室というのを二重ドアか何かにして、いまは知りませんけれども、必ず二人で行って開けて、持つてくるんですよ。そんなことまでしたから、能率の悪いことね。

佐道 そうですよ。それは全庁の機密文書をそこに保管したのですか。

夏目 いやいや、それぞれのところで。海上自衛隊は海上自衛隊、陸上自衛隊は陸上自衛隊だと思うのですが、それが幾つあるのかわかりませんけれども、そういうふうにした。そんなこんなで秘密保全委員会というのはやったけれども、こんなものは要は心がけの問題ですからね。

■ソ連軍のアフガニスタン侵攻

伊藤 さて、どうしましょう。ガイドラインの問題までやりますか。

佐道 大きな問題ではあるのですが。

夏目 まだいっぱいあるのか。

伊藤 いや、いっぱいではありませんけれども、このなかで何かありますか。

佐道 アフガンの話というのは何か。これは七九年十二月、宮永さんの事件の直前ですけれども。

夏目 これは、防衛庁も正直いってこの問題について過小評価していましたね。

伊藤 どういうふうにも過小評価していましたか。

夏目 この何年か前にソ連がアンゴラに侵攻したことがあるんで

す。アンゴラというのはソ連から遠隔地にあつて、ソ連と地理的な関係があるわけでも何でもないとこへソ連がそういうことをしたという驚きみたいなものがあつただけでも。アフガンというのはたしかに隣には違いないけれども、まったくよその独立国に対してあれだけ大量の正規軍を投入して席巻を図ろうとしたというのは、冷戦時代としては由々しき問題だと。少なくとも自由主義陣営から見た場合、これは非常に危険な兆候であつたわけです。にもかかわらず、日本はあんまりそういうものを重大視するような傾向がなかつた。というのは、日本はまだグローバルに世界の情勢なり問題をとらえるところまで成熟していなかったということがいえるのだと思います。私なんかは、これは大変なことではないかという気がしたけれども、それ以上、何かが必要だとか、どうこうすべきだということまでは。まあ、それは無理もないでしょうね。日本の立場としてできることはないわけですから。だけど、アメリカの反応は非常に厳しかったですね。何か月か後からアメリカの反応を聞いて、やっぱりなという印象を受けたのは記憶にあります。それにしても、日本は反応が鈍いななど。伊藤 軍事情勢としてどうなるだろうという見通しはどうだったのでしょうか。

夏目 僕はそういう意味よりも、一口にいってしまえば、ソ連という国は必要となつたときにはどこへでも軍事力を出して自分の勢力拡張に努める国なんだということを如実に示す一つの象徴的なあらわれだつたと思うのですね。それは、国内においていろいろなことをやつたと思うけれども、国境を越えて外へ出て行ったというのは、これだけ大掛かりで行ったというのは初めてなんです。アメリカは、ある意味ではこのときに初めて目を覚ますんですよ。そして、防衛費、軍事費の削減に歯止めがかかるんです。それから日本なんかに対する防衛力増強の要請が強くなるんです。だけど、そのときはまだそんな予感はない。

アメリカ自体がちょうどそのときはどん底の時代だったんですね。いつもいうようにベトナム戦の後で、世界のことはどうでもいいや。各国にお任せした。俺たちは旧モンロー主義ではないけれどもともという、そういう雰囲気若干あった時期に、これではないかんというのがアメリカの国内で澎湃として起こるんですね。そういう意味では、アメリカという国はいいかげんなどころはあるけれども、復元力とかバイタリティーのある国だということには認めざるをえないなという感じはします。だから、アフガンというのは、さつきもいつたけれども、日本の防衛政策にとつても一つの大きな転換点だというのが私の考えなんです。

伊藤 それはつまり、もつと広く。

夏目 アメリカの戦略が変わったことと、それが日本に大きな影響を及ぼしてくるということだね。

中島 よく、アフガン侵攻によってデタントが崩壊したと、これがデタントを崩壊させた決定的な出来事だったという位置づけがされています。そこから新冷戦が始まっていくと教科書的にはいわれるのですが、そういうふうには理解してよろしいのでしょうか。

夏目 そういうことでしょうか。

伊藤 それがすぐにはわからなかったということですか。

夏目 アメリカはすぐ反応したのでしょうけれども、われわれ日本人が肌で感ずるのはアメリカのリアクションを見てわかったもので、日本がアフガン侵攻を聞いて反応したわけではないということなんです。

佐道 坂田さんのときに出された、先生のお書きになった『防衛白書』の七十六年、七十七年、七十八年の記述を読んでいますと、「ソ連が極東方面でかなり軍事力増強をやっている。これはかなり脅威である」という記述はあるのですけれども、それであつてもアフガンの問題というのは若干遠いところという。

夏目 そうでしょうねえ、遠いからでしょうね。だけど、世界戦

略というのをもつと高い時点で見たら、日本から遠いことかもしれないけれども、エポックメイキングなことだというのがわかってしかるべきなのではないでしょうか。日本というのはまだそこまで成熟していきなかつたのでしょう。

伊藤 いまだって、イラクは遠いんですよ。

夏目 それはどうしたつてありますよ。地球の裏側みたいなところであつたことというのは、どうしてもそうなっちゃうんですね。でも、間接的に、日本だけだつたらいいのだけれども、アメリカがかかわるようなことだと、アメリカと日本は切つても切れないという三段論法ではないけれども、やはり影響が来るんですね。

伊藤 それはそうですね。かなり多くの人たちがそのことを理解するようになったんじゃないですか。たぶん、このアフガニスタンの侵攻問題のときと……。

夏目 だけど、それはアメリカが大騒ぎするからなんです。そして日本に対してもどうのこうのということになってから大騒ぎするので、アメリカが自分のところで皆きちつとやってしまつて相談しなければ、やはり地球の向こうの山火事くらいに思つていた人も多かつたと思うんですね。

伊藤 北朝鮮問題がなかつたら、イラク問題もだいぶ違つた受け取り方になると思うんですね。

夏目 そうでしょうね。石油なんて本当はバイタルな問題なのだけれども、だれもそんなことを真剣に考えている人はいないもの。佐道 なくなつてみないとわからないという。

中島 アフガン侵攻のときはカーター政権だつたわけなのですが、それからレーガンさんに移つて。

夏目 カーターのときからそういうことが出てくるのですよ。だけど、真剣に具体的に手を打つたのはレーガンになってからです。ビジュアルな形で予算ものびましたしね。

中島 それは、日本の対応も本格化したのがレーガン時代になつ

てからということですか。

夏目 カーターのときは、何をいうかと。主に防衛予算の数字のことであるいろいろな言ってききましたが、何しろ朝鮮半島から引っこ抜く話をしているのだから。

伊藤 では、そのアフガン問題できょうはおわりということにしましょう。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第10回

開催日：2003年8月19日（火）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時00分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

岡田志津枝（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：
有限会社ペンハウス 片岡裕子

第10回インタビュー質問項目

2003年8月19日

1

1980年6月、官房長に就任されます。その経緯等をお願いします。

2

官房長は、防衛庁という組織の運営および国会対策が主要な役割となつていると思いますが、官房長就任時に特に問題となつていった事項はございますか。

3

官房長という立場ですと、大臣等との関係が重要になると思えます。80年7月、鈴木内閣成立に伴い、大村謙治氏が防衛庁長官に、山崎拓氏が政務次官に就任します。大村氏はお父上の清一氏も長官を務められ、防衛問題に熱心に取り組まれたといわれていますが、いかがでしょうか。また、山崎氏もその後熱心な防衛族の一人となりますが、ご印象などはいかがでしょうか。

4

7月27日、政府は81年度防衛予算概算要求枠を前年度比9・7%増と決定します。12月に来日したブラウン国防長官はその実現を迫るものの、結局12月29日の閣議では7・61%増に決定し、米国は不満をもったといわれていますが(12月30日米國務省「失望と言わざるを得ない」と声明)、米国から具体的数字をもって増額を請求された81年度予算問題についてご記憶の点をお願いします。

5

同年7月27日、外務省は80年代の安全保障政策についての報告書を提出します。その中に、国連の平和維持活動への自衛隊派遣、中期業務見積もりの繰上げ達成が提案されていました。防衛庁にも関係の大きな問題ですが、外務省の報告書についての防衛庁側の受け止め方等はいかがだったのでしょうか。

6

80年7月2日、大平内閣時代に設置された「総合安全后保障研究会」の報告書が提出されました。これまでの安全后保障の考え方を直そうというのですが、この報告書についてのご印象などをお願いします。また、これを受けて鈴木内閣では12月に「総合安全后保障閣僚会議」を設置しました。これが設置されたことの意味、役割などについてをお願いします。

7

80年11月、米大統領にレーガン氏が当選します。ソ連を「悪の帝国」批判して軍備増強を主張していたレーガン政権の登場について、どのような感想をもたれましたか。

8

81年2月1日、竹田五郎統合幕僚会議議長が雑誌『宝石』3月号で、徴兵制違憲の政府統一見解に異議を唱え、防衛費上限1%を批判したことが明らかになりました。野党は当然、竹田議長罷免を求める騒ぎになりましたが、この事件についてお願いします。

9

同年2月、堀田ハガネの韓国向け武器輸出問題が紛糾します。野党は武器輸出三原則の法制化を要求し、3月20日の衆議院本会議で三原則の再確認を決議することになりますが、この問題について

てご記憶のことをお願いします。

10

3月21日、訪米した伊東外務大臣に、ワインバーガー国防長官はグアム以西・フィリピン以北の海上防衛分担要求を行います。レーガン政権の対日要求が明らかになってきた際、防衛庁としてはアメリカの要求に対してどのように応えるべきだと考えていたのでしょうか。

11

5月、鈴木首相、伊東外相が訪米し、日米首脳会談が行われます。その後の記者会見で鈴木首相が同盟の軍事的役割を否定するなど、日米間の考え方の行き違いが明らかになり、混乱の責任をとって伊東外相が辞任する騒ぎとなります。シーレーン防衛をめぐる約束があったのかどうかなど、さまざまな問題を生じ、米国に日本不信を生んだと言われるこの事件について、どのように見ておられましたか。

12

上の質問とほぼ同時期、在日米軍と海上自衛隊の共同訓練で、米海軍の艦船が秋田県沖で漁船のはえなわを切断するという事件を起こし問題になりました。共同訓練中ということで、防衛庁にも問題は波及したと思われませんが、いかがだったのでしょうか。

13

6月にハワイで日米安保事務レベル協議があり、米側の要求は日本側が考えていたよりもかなり大きいものであることがわかったわけですが、防衛庁としてどう対応すべきだとお考えだったのでしょうか。

14

12月の日米装備技術定期協議で、米側は武器輸出三原則の撤廃を

求めたのははじめ、このころになるとNATO並みの協力を武器の共同開発でも求めてきたといわれています。これはやがてFSXの問題にも関係していきませんが、武器開発・技術協力をめぐる米国の姿勢などについてご記憶の点をお願いします。

15

11月に内閣改造があり、伊藤宗一郎氏が長官に就任しました。伊藤氏は「男子の本懐」と述べて話題になりましたが、伊藤氏の印象をお願いします。

※今回は以上の点についてお願いします。次回は防衛局長に就任されたころのお話からお願いします。

■ 官房長の仕事

伊藤 八〇年に官房長に就任されますけれども、だいたい普通のコースなんですか。

夏目 まあ、普通ですね。かつては防衛庁というのは、大官房長制とか小官房長制とかいう話がありましたけれども。昔は、防衛局長を終わって最後の上がりが官房長だったんですよ。ところが、いつの頃からかそれがゴチャゴチャになって、どっちでもいいやという感じになってきて、私の頃はもう、官房長が先で防衛局長がその後という形が多かったですね。

伊藤 実際、そうなるんですね。なんとなく我々の感じだと、防衛局長が先で官房長はその後という感じがしますけどね。

夏目 昔は、防衛局長が先だったんですよ。島田（豊）さんとか海原（治）さんとか、みんな防衛局長を終わってから官房長になられたんですけどね。

伊藤 役人のランクとしては、どうなんですか。

夏目 変な話ですけど、どうでもいいような話なんですけれども、防衛庁の局長さんというのは、指定職の何号って決まってるじゃないですか。官房長と防衛局長だけ、他の局長より一号上なんです。だから、その二つは同じだから、どっちが先でもどうってことはないわけですね。

伊藤 並びなんですか。

夏目 ただ仕事は、官房長というのは俗っぽい仕事ですね。

伊藤 だから、話の聞きがいがあるという（笑）。

夏目 秘書官みたいなものですか。秘書官というのは若いですからね。課長になる前みたいな人でしょうから、何となく外へ連れて行って何かする時には、大臣によってはちょっと不便を感じる人もいますよ。そういう時には、官房長を秘書官みたいに入れて歩くことで、紛らわすような人もいなかった。

佐道 紛らわすということもないでしょうけど（笑）。

夏目 大村襄治さんなんていう人は、そういう人だった。

伊藤 やっぱりそうなんですか。

夏目 だから、あまりこつちも、のんびり出来なかったけどね。

伊藤 大村さんて、どういう感じでしたか。

夏目 非常に真面目な、真面目を絵に描いたような人ですよ。それで、仕事は熱心だし。真面目で熱心というのは、必ずしも私はいいことばかりではない気がするけど（笑）。やっぱり、役人なんです。この方も確かお父さんと同じで、内務省というか、自治省のお役人で政治家になっただけです。とにかく真面目で、この人は国会答弁なんかをする時は、誰が何と冷やかそうと、からかおうと、役人の書いたものをそのままきちんと読むんです。だから、出来た答弁資料というか、国会議事録は、見本みたいに立派なものだから、いつも参考例にされるんです。「かつて大村襄治はこう答えた」って。彼が答えたわけじゃない、読んでるんだけど（笑）。でも、ぶれないから。しかも論旨は、文書を読むんですから一貫してますわね。話言葉でパッパッ言うんじゃないから、論理趣旨が一貫しているから、文章としては非常にいいですね。

そういう意味では、大平さんと似ているんですよ。大平総理も、あの方は本当に訥弁で下手なだけども、「あ〜」「う〜」というだけで何を言ってるかわからないんだけど、後でその「あ〜」「う〜」を取ると、きちんと文章が出来るんですね。それと似たようなことで。

伊藤 大平さんは、読んだわけじゃないんですよ。

夏目 大平さんは読んだわけではありませんが、大村さんはきちんと正確を期して、しかも意図的に読まれている。「国会答弁」というのは、そんなにいい恰好をしたり、大向うを狙うものじゃないんだ。やっぱりきちんと言うべきことは言って、間違っ

けない」という信念でやられるんだから、これはもうどうしようもないですね。だから、勉強も大変でしたよ。聞き放しじゃなく、赤いペンできちんと自分でメモを取ったりして。それが大村さんの特徴でしたかね。

伊藤 そういう国会答弁などを書くのは、官房長の仕事なんですか。

夏目 いや、それは各局が書くんです。

伊藤 でも、最終的に……？

夏目 それは官房長が見て、変なのがあったら直させますけどね。しかし、局長が見てきますから、だいたいそんなに変なものはないんですが。たまにはありますね（笑）。こっちは防衛庁に長くいるから、どうしても古いことを知ってる。それで「これはおかしいじゃないか」みたいなことを言うから、嫌われますよね（笑）。

それから大村さんでは、あの方は非常に真面目だったということが背景にあるんでしょうけれども、いろんな各界の歴史をお訪ねになつて、防衛問題について御意見をきくことが多かったですよ。大した話はしていないんだけど、要するにそういう方々と雑談してしゃべることの中から、「これは」と思うことを汲み取ろうとされるんでしょうね。だから、そういう時にはいつも官房長を同席させるわけです。これは叶わないんですよ。行儀よくしてなきゃいかんし、ホテルか何かでこんなになつて（かしこまつて）座つて、しかも酒でも飲んでやるならいいけど、お茶か何かでね（笑）。瀬島龍三とか、経団連の歴史々という方に会つて、防衛についてどう考えているかということをお聞きになるわけですね。

伊藤 すごく面白いじゃないですか。

夏目 まあ、ある意味ではいいんですけどね。けども、少々くたびれますよ。「おまえ、聞いとれ」といつてね。「そんなもの秘書官がやればいいのに、俺はなんでこんなところについてこなき

やいかんだ」つて。

伊藤 それは大官房長じゃなくて、大秘書官なんだな（笑）。

夏目 そうね、小官房長第一秘書係。そういう方でしたね。

伊藤 でも、仕事は熱心なんですね。

夏目 熱心ですよ。熱心だけれども、そういうことがあるから、官房長はあまり楽じゃなかったですね。それから、この方は田中派なんですよ。それで、これは内緒話だけれども、当時、党内からかどこからかわかりませんが、「防衛大学の校長を替える」という声が出てきてね。「制服のOBを持つてくるべきだ」と。で、大村さんがそれに賛成したのでしようか、「なんとかせえ」つて言うんですね。それで、原（徹）次官と私と一所懸命にそれを制止したんです。防大校長は就任後、まだ二、三年ぐらいじゃなかったのかな。

「そんな政治家の片言隻句でもつて、防大校長を替えるのはとんでもない」ということでもつて抵抗して、とにかく何とか収めなければ、非常にご機嫌が悪かったですね。党の周辺から言われたんでしょうね。制服のOBをあてるという声が、何となくいつもありましたから、そういうことに応えようとされたんじゃないでしょうか。「同じ大学を出た人が出身校の校長にならないのは、防大と刑務所ぐらいだ」ということを言うやつがいてね。「いつまでも余所者がなるんだ」つてね。

伊藤 そうですか。

夏目 諸外国の軍学校の校長——士官学校とか、みんな制服なんですよ。だから、そういうものを見てみると、防大だつて旧陸海軍の立派な人もいるし、防大出身の一期生あたりもそろそろ偉くなつてゐるし。あの頃は防大生じゃなくて、旧軍の人ですね。しかも、固有名詞もあがつていたんですよ。それで「なんとかしら」といつて、「絶対、それはだめです」と。別に、制服がだめという意味ではなくて、安易に防大校長を政治家の恣意で替えること

はよくないということに抵抗して、なんとか収まったんです。そういう意味では、苦勞した大臣の一人ですね。苦勞というか、大した苦勞じゃないけど、官房長としては「ちよつと、弱ったな」というような。

伊藤 官房長は、秘書官みたいな役割もさせられるんでしょうけれども、国会対策がかなり中心の仕事になるわけでしょう。

夏目 そうですね。

伊藤 国会対策というのはつまり、どういうことなんですか。要するに、与党の国対なんかと連絡をとりながらやるということですか。

夏目 だいたい、防衛庁というのは因果なところで、自衛官を一人でも二人でも増やそうとすると、自衛隊法の改正になるんですね。そんな馬鹿げた法律はないんだけど、とにかくそういうことになってるから、毎年法案を出すことになります。ところが、毎年そういう法案を出して、しかも人を増やそうというやつが主でしょ。だから、国会でも非常に評判が悪いですね。中を見ても、「何百人増やす」とか、各省はみんな人員削減をやってる時に自衛隊だけ増やすという、浮世離れたような印象にとられる上に、こまごました増員になるわけです。しかも、与野党の意見が真っ二つに割れるような自衛隊法の改正ですから、政府も日本はもとより自民党も嫌がるんですね。それをしかし、やらざるを得ないので毎年やるわけだから、そういう意味では国会対策というのは非常に大変なわけです。

伊藤 じゃあ、与党も大変なんですね。

夏目 与党もちろんですが、まず野党にも手心を加えてもらうような。何となく、「今年は三年目だから、通してやろうか」みたいな雰囲気を起こさせるようなことを、考えないといけないんですね。だから、社会党や共産党はもう、そんなことをやってもだめですが、公明党や民社党の先生方に何とかお願いをしなければ

ばなりませんから。

伊藤 そのへんが同調してくれば、なんとかなるわけですか。

夏目 酒の席では非常にわかりがいいですよ(笑)。民社党なんというのには、自民党よりもむしろ右寄りなところもあつたぐらいの空気がありましたから。「いまの自民党は何してるんだ」っていうぐらいのあれがありましたから。ただ、力が、数がないですから。当時は、春日一幸さんとか永末(英一)さんとか、いっぱいそういう人がいましたね。それから公明党も、確か竹入(義勝)委員長、矢野(絢也)書記長、市川雄一さんとか、いたですね。市川さんなどは非常に理論的で物分かりがよくて、その後もずっとお付き合いしてますけどね。そういう席では非常に理解があるんですよ。だけど、委員会とかに出ると、やっぱりきちんと言わなきゃいけないと言いますけどね。でも、そういうふうな人間関係が出来ていると、とことんまではやらない。その方がいいか悪いかは別として、そういうことはありましたね。政治って、そんなものなんですな。

伊藤 しかし、この時期は自民党が過半数ですから、やろうと思えば出来るんですよ。

夏目 それは過半数だけど、過半数でも一党だけでもってものを決めるということに対しては、マスコミが全然そういうものに追随しませんでしょう。だからやっぱり、小さなところでもいいから他の党も仲間に入れないと、一党独裁みたいなことになってしまってますね。それに他の案件との取引の具にされることもありましたしね。

伊藤 そうするとやっぱり、民社、公明というところが大事だということですね。

夏目 そうですね。

佐道 政治家との接触というのは、総務課長をされていた時代の人脈とか。

夏目 そういう蓄積というのは大事なんです。急に会いに行ってもなかなか、また見え透いたお世辞を言ったってだめですから(笑)。
佐道 「急にきて、なに言ってるんだ」みたいな。

夏目 年じゅう行って顔なじみになっていくことが、何か頼む時には効く。同じ人間ですからね。私も政治家は嫌いだけれども、そんなことを言っていられない。彼らも何万人という選挙民の投票を得てくるわけだから、どこか我々と違う、それぞれ取りえ、見どころというか、そういうものを持っていますね。

伊藤 それはそうですね、何万人に自分の名前を書かせなきゃならない。

夏目 金を出さないで。まあ、出してるのもいるかもしれないけど(笑)。何万人に自分の名前を書かせるんですから、それはやっぱりそれだけの人柄というものがないと、そういうものは出来ませんね。だから、そういう意味で見習うというか、この人はこういういいところがあるなというのは、感じましたね。

佐道 共産党はともかく、前に海原さんのお話をうかがった時に、海原さんはご自身で社会党とかともうまくやっていると、ずいぶんおっしゃったんですけれども。

夏目 海原さんは社会党が好きなんです。社会党が好きというよりも、横路(孝弘)さんとか石橋(政嗣)さんとか、そういう何人かの人と非常に親しいんですね。どういう関係でそうなったのかは知りませんが、だから、そういう人たちとは非常にツーカーでしたね。ツーカーだけれども、それはそれだけの話でしてね。じゃあ、社会党の体制が自衛隊に理解があるかとか、法案でも何でも、賛成するとか理解を示すかといったら、全然そんなことはないですからね。

伊藤 防衛関係の法案で、社会党が賛成したなんていうことはないですね。

夏目 絶対ないですよ。予算でも何でも、みんな反対ですから。

やること成すこと全部反対ですからね。だから、野党第一党の社会党が反対しているものを、自民党だけで通すというのはよくないから、やっぱり公明党や民社党の理解を得るといのは、非常に大きい。数だけではなくて、他の党派の、複数の党派の賛同を得るという意味では、大変なことだったですね。

伊藤 しかし、自民党自体はどうですか。

夏目 自民党も、その時の内閣の姿勢によりぶれますね。例えば、鈴木内閣とか変な内閣が出来るでしょう(笑)。変なというたあれだけれども、それはやっぱり中曽根さんみたいな人と鈴木善幸さんなんかとは、全然違いますよね。大平さんだって、どちらかといえば非常にリベラル……リベラルという言葉がいいのかどうか、自民党のなかでは、あまり防衛に対して理解のあるタイプではないですよ。もともと、宏池会というのはそうですね。だから、福田内閣とか中曽根内閣と、鈴木、大平、宮沢等の内閣とは、ちょっと違ったタイプですよ。

伊藤 やっぱり、内閣によってかなり違うものですか。

夏目 それは、全然違いますよ。我々からも違うと思うし、アメリカがちゃんと見えますね。今度だって、菅(直人)さんがアメリカへ行くのを、みんな断られたっていうでしょ。あれだって、見ているんですよ。僕らより詳しくその人の政治姿勢などを、「この人の言動はどうか」というのはチェックしますからね。

■山崎拓政務次官

伊藤 今頃、問題になっっているんですが、山崎さんが政務次官ですね。政務次官は、官房長はどういう……?

夏目 山崎拓さんというのは政務次官で、政務次官当時、よく私も一緒になったりしたことがあるけれども、役所のなかで政務次官なんていうのは本当にヘソみたいなもので、重要事項もほとんどあがらないですね。次官から大臣に直接いっちゃうわけです。

政務次官は、特別何かがあれば参画しますけれども、まあほとんど関係ないですよ。だから、後年の山崎さんのようになるとは、あまりこの時には思わなかったですよ。非常に物分かりのいい人でしたけど、ただ、そんな大物になるとは思わないうし、防衛のいちばんの理解者になるなんていうことは、当時はあまり予想もしていなかったですね。

伊藤 やっぱこの時の経験が、あの人のその後の。

夏目 だと思えますね。たしかに、山崎さんという方は、制服なんかの人たちとも非常に親しく接していましたよ。

伊藤 政務次官というのは、勉強の期間なんですね。

夏目 勉強ですね。いろんな人と付き合ったり、それから政務次官によつては役所に来ないで、もっぱら自分の派閥だとか、党内のなんやかんやで動きまわってる人で、防衛庁の仕事をするというような人は、政務次官ではあまりいなかったですね。

伊藤 山崎さんなんかは、来ていたほうですか。

夏目 山崎さんは、役所にはよく来ていましたよ。全然来ない人もいますからね。

伊藤 政務次官室というのはあるわけですね。

夏目 あります。立派な部屋があるんですよ。

伊藤 来たら、多少はお相手もしなきゃならないんですよ。

夏目 いや、したことはなかった。呼ばれない限りは、こつちからは行かないですね。

佐道 政務次官のために、専属の秘書とかいうのは？

夏目 三人ぐらい、いますよ。いまは、制服の副官までついでしょ。僕らの当時はいなかったけどね。僕らの当時は、事務官と女性の秘書と、それでも三人ぐらいいたかな。

佐道 役所として、政務次官に振り分けるような特別な仕事というの？

夏目 多少あったのは、各基地を廻ってもらって、仕事がないか

ら、隊員を「やあやあ」といって激励してもらおうとかね。それから、基地問題で地元とちよつといざこざがあつた時に、政務次官の顔でもつてね。大臣は、半分は国会で東京へ捕まっていますから、あまり動かせませんからね。そういう意味で、大臣が行くまでもないという時には、政務次官が行くということになります。あるいはもつと極端になると、船の竣工式だとかね。そういうセレモニーで大臣が行けないようなのは、政務次官に行ってもらおうと。そういうのはありましたけど、あまり仕事の面でどうのこうのということは、なかったですね。また、ご本人のほうもそういうことをちゃんと承知しておられて、あまり深入りはしないようにしていましたね。ごく一部の例外はありますよ。何でも口を出して煩く言う人もいましたけれども、だいたいそうでした。

加藤陽三さんなんて、事務次官を終わって、代議士になって政務次官で来られたんだけど、ちよつど私がその時に総務課長でしたけれども、ここ（防衛弘済会）の会長なんですよ。それで、公務員になつてしましますから、政務次官と兼務できないものだから、この会長を辞めさせるといふのでね。そうしたら、「他は辞めてもいいけど、ここだけは辞めたくない」といって駄々をこねたりしてね（笑）。そういうところもあつたけれども、人事なんかの説明に行くと、「それは私は聞かなくていい。政務次官にそういうことをするような先例をつくつてはいかんから、私は聞きません」と言つて。私は、そういうのは知っていたけれども、前の事務次官でもあるし、防衛庁のことをよく知つておられる方だから、別に決裁をもらうなんていう意味ではなくて、説明だけしようと思つて、むしろ親切心で言つただけでも、きちんと断られた。そういう点では、立派といえは立派ですね。この会長を辞めるのは嫌だと言つた時は、駄々っ子みたいだったけど（笑）。

武田 居心地がいいんでしょうかね。

夏目 いや、ここは自分でつくったところですから。

佐道 そういう思い入れがあったわけですね。

夏目 思い入れがあるんです。それだけのことなんです。居心地がいいはずないじゃないですか、私がいるんだから（笑）。現役の時からそういうことを考えておられて、ここをつくった時に会長になつたんですね。だから、非常に思い入れが深いんでしょうね。

佐道 加藤さんなんていう人は、政治家になられて四回ぐらいい当選されたと。

夏目 落ちたりなんかしてね。

佐道 防衛庁として、何か頼んでやってもらうというような感じにはならなかつたんですか。

夏目 いや、あの方もまた、聖人君子みたいに真面目な方ですからね。だから、そういうことをやるような人じゃなかつたですね。修身の教科書みたいな人だったです。昔の役人というのには偉かつたね、大村襄治さんにしても加藤さんにしてもね。みんな内務省だけどね。

佐道 大村さんは、同じ田中派とはいえ、金丸（信）さんなんかとはかなり違いますよね。党内の実力とかも。

夏目 それは全然タイプが違いますね。そういう派閥のボスになるとかいう人じゃなくて、コツコツと自分の勉強をされる方ですよ。だから、あまり子分というのはいないんですよ。政治家として、派閥のなかで発言力があるかという、あまりないと思いますね。

■カーター政権の対日防衛力増強要求

佐道 ちょうどアメリカのほうでも、カーター政権の最後のところになるんですけども、カーター政権も最後になると日本に防衛力増強と。とくに、かなり具体的な数字を出してきて、「何%をやれ」というような形で言ってくるわけですね。ちょうどこの

八一年の予算は、最初は九・七%増と決定するんですけども、結局は最終的には七・六一%ということになって、アメリカは大きく不満を言うということがあったと思うんですけども、かなり予算折衝とかの面でも、ご苦労されたんじゃないかと思うんですけども。

夏目 予算折衝の苦労というのは、それは防衛局長であり経理局長の仕事ですから、私は直接はあれだけでも、本当にこの頃のアメリカというのは、しつこいほど防衛力増強ということをよく言ってきましたね。しかも、数字を具体的にあげて言うんですけども、確かこの時も、背景はまた別の時に言うかもしれないけれども、要するにアメリカはいつもお話ししているように、かつてアングラ政権の内戦でソ連が介入したというのを見て、ちよつと驚いたんですね。そして、それまで下降傾向していた軍事の減少に歯止めをかけた。それから横ばいで進む。それから四、五年たつて、いわゆるアフガンの侵攻があつて、アメリカはまさに文字通り愕然として、ソ連の軍事介入というのは、ソ連圏だけではなくてその周辺諸国にも軍事的な行使を及ぼす国だという、危険さを目覚めたんですね。

それで急遽、防衛力の増強、軍事力の増強というのに努めたわけですけども、時すでに遅くというか、アメリカはもう財政的にも対外貿易上の収支でも、すべて双子の赤字とか三つ子の赤字とか言われている時期だし、世界の警察官としての權威は地に落ちていたわけですよ。だから、アメリカができることは自分で行うけれども、グローバルにアメリカが目を配って、何か影響力を与えるという力はもうなくなっていた。だから、それぞれの国々が周辺の問題については自分で始末してくれよという雰囲気、ちょうどアメリカに台頭していたことが、そのカーターの対日防衛力増強の声になつたんだと思うんですね。

ただ、カーター政権というのは、確かこの時の長官はブラウン

ですかね。芸がないんですよ。予算要求をすると、「それは我々としてはまだ不満だけれども、まあこれが認められればけっこうだ」とかね。削られると、「本当は二桁が望ましい」とかね。中期業務見積というのを、「繰り上げて達成してほしい」とか、そんなことばかり言ってくるんですよ。非常に短兵急というか、何もない、ただヒステリックに防衛力の増強を、数字をあげて入れ替わり立ち替わり言うんですよ。あの頃の外務大臣とか……大来さんでしたかね。

佐道 最初、大平さんですね。この時は鈴木さん。

伊藤 もう鈴木さんになってるでしょ。

夏目 大来さんが外務大臣で訪米した時に、まず言われたんだな。ステディ・アンド・シグニフィカントというか、「着実にして顕著な防衛力増強が望ましい」とかいうようなことを言った。それから大平総理が渡米した際も、「中業の早期達成」とか、「防衛努力のペースアップ」みたいなことも言った。それはもう、絶えず言っていたんですね。だから、それはそういう背景があったからなんだと思いますよね。

ただし、カーターは確か民主党でしょ。民主党というのは、安全保障とか軍事に対しては、共和党ほど熱心でないんですよ。だから、自分でやる能力というのはなかなかないものだから、諸外国に半分押しつけようという気持ちもあったんだと思うんですよ。ちよとそういう時期だったですかね。大来外務大臣か。

伊藤 じゃあ、必ずしもアフガンがあつてという以前から、もうそういう状態なわけですね。

夏目 いや、やっぱりアフガンになって急に強くなったですね。というのは、それまでは多少、世界を甘く見ていたところがあるんですよ。ソ連は何をするかわからない国だというふうに思わせたのは、やっぱりアフガンなんですね。

佐道 しかし、アメリカの要求というのはかなり高いところにあ

るわけですけども、防衛庁サイドとしては、これはどういうふうにしようという。

夏目 だから、そんなものはとても聞ける話ではないし、とにかく言うことがあまり品がよくなかったですね。中期業務見積つてあつたでしょ、53中業というのが。それは政府の計画ではないんですよ。それまでの政府計画をやめて、防衛庁のなかの見積りにしようということでも出来たものを、日米の首脳が具体的にそれを取り上げて、「早くやれ」とか、「こういう点が足りない」ということを言うんですよ。その結果、結局日本では、「防衛庁の内部資料みたいなものが国際的に取り上げられて、アメリカ政府からガヤガヤ言われるのはおかしいじゃないか。むしろ、そういうものこそ政府がきちんとしたものをつくるべきだ」という、また前の議論に戻ってくる。切っ掛けになっちゃったんですけどね。

だから、どういうふうにも動くかわからないけれども、とにかくそういうことを取り上げてまで一所懸命に言ったですね。抽象的に言うだけではなくて、具体的に中期業務見積というものの中を取り上げながら、指摘してきたですからね。ちよと我々も、びつくりしたという感じでしたかね。

伊藤 そういうアメリカ側の人たちと直接に先生が会うということとは、あまりないわけですね。

夏目 官房長の時はまだ会っていないですね。

佐道 アメリカ側と会ったりというのは、やはり防衛局長になられて？

夏目 そうですね。もちろん、会議などで来た時に、会議をやる時は会いますけどね。個別の折衝とか、直接向こうへ行つて話をするというのは、防衛局長になってからですね。

伊藤 その場合は、一対一みたいな場合もあり得るわけですね。

夏目 一対一ではなくて、複数ですけどね。しかし、自分がシャッポになりますから、一対一みたいなものですかね。

伊藤 そこはもう、ネゴシエーションみたいな感じになるわけですか。

夏目 それはそうですね。彼らも、なかなかきついことを言いますよ。公式記録には残らないが。こつちも言いたいことを言いますけどね。

伊藤 それは記録に残らなきゃ、何を言ったって大丈夫ですよ。

夏目 大臣同士の話とか共同コミュニケーションとか、そういうものはありませんからね、事務的なレベルの話ですから。実際には記録はありませんけれども、外へは出ないですよ。

佐道 必ずノートはとっているわけですね。

夏目 もちろん、とりますよ。

伊藤 それはやっぱり、後で言った・言わないの問題になるでしょうからね。

夏目 ハワイ協議——日米防衛実務者レベルの協議というの、なぜ出来たかという、大臣同士の安保協議委員会とかいうのは仰々しくて形式的すぎるから、実務的な話を自由にしようということが出来たのが、事務レベル協議なんですね。だから、何を言ったっていいですよ。

伊藤 フリートーカーキングなんですね。

夏目 フリートーカーキングです。だけど、そのフリートーカーキングの場を利用して、アメリカが「あれもやってくれ」「これもやってくれ」と言ってくるから、こつちも言わざるを得ない。そうするとやっぱり、言った・言わないの話になつてきちゃうんですね。

伊藤 「あの時、『うん』と言ったじゃないか」という話ですね。そういう時のノートテイカーは、誰がやるんですね。

夏目 外務省と防衛庁と両方でやっています。で、突き合わせるんですよ。突き合わせた上で私が見て、間違いないと思ったら東京へ電報を打つんです。そうすると、外務省と防衛庁と両方へ電報が入るんです。「とんでもない」といつて怒られる時も、ない

わけじゃないですけどね。だいたい大丈夫ですけどね。

■外務省の安全保障政策についての報告書

佐道 さっきの中業ですけども、先生がおっしゃったように、一応あれは防衛庁内の達成計画ということで、当初は政府決定ではないわけですよ。ただ、その後、たとえばこの八〇年に外務省がつくった安全保障政策の報告書のなかでも、中業の繰上達成と同時に、これを政府計画にしようじゃないかという話が、政府のなかでも出てくる。

夏目 それは、外務省から出たんではないと思います。ここの五番に書いてある、「外務省の報告書」というのは、私は実際、記憶にないんですよ。この報告書そのものは、私は記憶にないけれども、中期業務の見積の繰上達成というのは、アメリカが言ってきたことははっきり記憶があります。外務省がこんな報告書を出したというのは、ちょっと私は記憶がないんですね。「外務省の報告書についての防衛庁側の受けとめ方はいかがだったでしょうか」と書いてあるけれども、私はこの外務省の報告書なんて知らないけど、アメリカから言われていることは嫌というほど感じましたけどね。これ、何の報告書だろう。

佐道 当時の新聞等々によりますと、外務省なんかも「中業を政府計画にしたらどうだ」ということを主張しているということが出ているんですけども。

夏目 これはむしろ私の記憶では、外務省がとやかくじゃなくて、いま言ったように日米間で防衛庁内部の資料が取り上げられたことに対して、国会のなかで「シビリアンコントロール上、いかがなものか」という議論が出てきたんです。それで、「やっぱりそれは政府決定にすべきではないか」という意見が強くなって、「アメリカにとやかく言われている議論の中身の是非はともかく、防衛庁限りで決めたものが何で両国間で議論になるんだ。閣議でも決めてない

のにおかしいじゃないか」と、こういう話なんです。だから、外務省がとやかくという話は、全然記憶にないけどね。

佐道 そういう国会等々での議論を踏まえて、「じゃあ、やっぱり中業を政府計画にしよう」というような声には、防衛庁の中ではならなかったんですか。結局、後ではなりませんけれども。

夏目 なったけどね。要するに、そもそも政府計画にしたことの、反省の上でこれをやめたわけですから、「また昔に戻るのかい」という気持ちはありましたけれども。しかし、防衛庁の内部資料にしたことに対しては、やっぱり意見があつたんです。「ちよつとこれじゃあ、あまり軽すぎるんじゃないか。どういう形の計画をつくるかは別として、政府が決めたものをきちんと持つべきではないか。五年後、十年後の防衛力というものを、防衛庁だけで決めて事務的な参考資料にするのは、いかがなものか」という空気があつたから、具体化の方向に進んだんでしようね。この次の56中業あたりから、政府決定になるのかな。

佐道 そうですね。

伊藤 報告書に盛られているという、国連の平和維持活動への自衛隊派遣なんていうことは？

夏目 こんな全然、記憶にないですよ。このころ、国連の平和維持活動の自衛隊派遣というのは、何を根拠でこんなことを……。まだイラン・イラク戦争が始まってないのに、なんで唐突に出てくるのかなと思って。むしろこれは、大平さんの総合安全保障とかいうものと、ゴチャゴチャになつていないんじゃないのかなと思いますけどね。

佐道 外務省自体では、七〇年代の半ばぐらいからもう、こういうことを国連局あたりで考えていたそうですけども。

夏目 僕は全然、この文書も記憶ないし、まだこのころ、国連の平和維持活動に自衛隊を派遣というのは、具体的なものとして意識しなかったですね。ただ、国連の何とかというものは、久保さん

の論文とか、この後に出てくる総合安全保障研究会などの報告書のなかで、そういうことが言われているんですね。だから、それは知っているけれども、外務省の報告でそういうのがあつたかと言われると、全然記憶がありませんね。

■総合安全保障

伊藤 そうですか。それじゃあ、大平内閣の総合安全保障研究会の。夏目 きつと、それをつくる時の叩き台みたいなものを外務省でつくつたのが、どこかへ出たんじゃないのかな。と思いますけどね。私は記憶がない。いくら思い出ししても思い出さない。書いてあることの中身は、中業というのはみんなアメリカが言つてるところだからよく知つています。

大変だと思つたのは、アメリカの要求はそう簡単にはいかない話ばかりですからね。これがひとつの、総合安全保障というものの切つ掛けになつたといえばなつたのかもしれないですね。要するに、焦点を軍勢力、防衛力から逸らそうというね。問題を拡散しようというのがあつたんじゃありませんか。

伊藤 やっぱり、総合安全保障というものの言い方というのは、要するに拡げて考えて総合的ということ、軍勢力そのものの増強をカバーしよう。

夏目 そういう一面があつたんです。もちろんそれだけではないんですけどね。確かにあの頃は、石油危機みたいなのがあつたんです。それと関連して、食糧の自給は出来るかとか。これは久保さんなども言つていたことですけども、安全保障というのは、災害派遣とか公害とかいうものを全体として考えるべきではないかと。そういう非常に前向きに考える面と、なるべく防衛力の色を薄くしよう、薄くしようというネガティブな面とが、両方とも利害が一致して、そして総合安全保障というものが生まれただけですね。

だから、出来た時からそういう毀誉褒貶が非常にはつきり分

れていましたね。「総合安全保障は当たり前やないか」という意見と同時に、「なんだ、あれは一種のごまかしで、防衛力増強に歯止めをかける口実じゃないか」という意見と、二つありました。

私なんかははつきり、後者だったんです。それはなぜかということ、いまのアメリカのそういう要求をなるべく断るわけにいかないから、それを何か一種のカモフラージュというか、ごまかしてしまふという感じのあれが非常に強かったですからね。というのは、当時の大平政権でも、次の鈴木政権でもそうですが、非常に防衛力に対しては関心の薄い、むしろそれを抑えよう、抑えようという視点があつた内閣ですからね。

佐道 この総合安全保障研究会自体は、七九年にもう設置されて、研究活動を続けていくわけですけども。で、実際の報告書が出るのは八〇年になってからということですが。

夏目 確かこれ、猪木（正道）さんとか高坂（正堯）さんがやつたやつでしょ。

佐道 防衛庁からも、佐々（淳行）さんとかが一応メンバーとして出ているところがあるんですけども。ということとは、ここでどういう議論をされているかというのは、いろいろ耳にも入ってくる。

夏目 入ってくるんですけども、この前も話したように、私は高坂さんという方は坂田（道太）さんの時からのあれで、よくお話しをする機会があつたんですよ。だから、実際にはもう高坂さんがまったく独りでお書きになった。議論らしい議論はしていませんですよ。猪木先生も、高坂さんにお任せしたような感じでしたね。

佐道 報告書を見ますと、麗々しく名前がたくさんあがっているんですけども。

夏目 あがつているけれども、あれはほとんど高坂さんが自分で

お書きになつてゐるんです。と、言つてましたよ。

佐道 高坂さんがですか。

夏目 ええ。

伊藤 さつき、大村さんが防衛庁長官になつて非常にご熱心だったということですが、鈴木内閣自体は抑えていくという方向なわけですか。

夏目 まあ、要するに理解がないというかね。本質的に、お嫌いなんじゃないですか。

佐道 軍事とか防衛とか。

夏目 やっぱり、大平派とか宏池会というのは、池田勇人以来、経済優先の感じなんです。だから、「安全保障とか防衛というのは、福田派みたいな勇ましいやつに任せておけばええ。我々はもつとりベラルにいこうよ」という、そういう感じの派閥でしたからね。総理がそうだと、官邸なんかもみんなそういうので固めるでしょ。だから、どうしてもそうなりますよ。

佐道 じゃあ、大村さんが一所懸命おやりになつても、少し空回りというか。

夏目 防衛庁の長官として、そんなことを言つたつて出来るものじゃないだろうということ、任せておいたんでしょね。暴走するはずもないしね。中曽根さんみたいなものを持つてくれば別でしょうけども。まあ、そんなことよりも、いまでもそうですけれども、派閥均衡ですからね。別に個々の大臣が誰になつても、総理大臣がこうだと思えば、あまりそれとはぶれないですよ。いままいたいなことはないから。

佐道 鈴木さんの内閣になつて大村さんになるわけですけども、その前には、金丸さん、山下（元利）さんですね。で、久保田（円次）さんが一時期入つて、いろいろ失敗してすぐお辞めになつたりするんですけども。同じ大平さんの内閣ですけども、山下さんなんかもけっこう熱心におやりになつたということだつ

たんですが、山下さんにはあまり印象は？

夏目 山下さんの時は、たぶん教育局長かなんかで、大臣との折衝もなかったし、あまりこれといった記憶はないですね。非常に豪快な方で、明るい、飲めば『青春時代』かなんかを歌ってね（笑）。そういう記憶があるぐらいで。

佐道 大村さんも、歌を歌われるとかいう。

夏目 ええ？

佐道 ワインバーガーの回想録のなかに書いてあったんですけど。全然、ご記憶にないですか。

夏目 大村さんとワインバーガーは会ってますか。

佐道 はい。

夏目 会ってるんだらうな、きつと。もうワインバーガーになったのかな。

佐道 そうです、八一年六月に。

夏目 大村さんの歌は、聞いたことないな（笑）。あの人の前で歌など歌ったら、怒られそうな感じがして。

佐道 俳句がすごくお好きな方で。

夏目 本場に、旧内務省の役人の、古色蒼然とした教養を十分に身につけてる方でしたね。

佐道 古色蒼然ですか（笑）。

夏目 多少、漢詩を嗜んだりね。そういう意味での教養をお持ちの方でしたよ。だけど、昔の役人というのはそういう人が多いですよ。字なんかもきちんと書かれるしね。お上手でしたよ。だから、優等生みたいな。大臣になっても官僚の優等生みたいなところがあつたから、さつき言ったような国会答弁にしても、それからいろんな方に会って日本の防衛に対する所見を聞いたりするのも、そういうことなんでしようね。自分の考えだけでこうだといって進めるのではなくて、そういう人の意見を聞きながら、間違いない、あまり外れると軌道修正するぐらいのお気持ちでお

られたんじゃないでしょうかね。

佐道 さつきの総合安全保障研究会ですけれども、報告書を出すわけですね。高坂さんが独りでお書きになったというお話ですけど、お書きになったのは高坂さんにしても、お読みになつてどう思われたのかということと、それからその後、総合安全保障閣僚会議というのが出来ますが、これはどういふふうには？

夏目 何もしてないでしょ。

伊藤 これは、事務局はどこになるんですか。

夏目 ないです。

伊藤 ないんですか。

夏目 大臣が集まつて、時々相談しようやということを決めただけですね。そういうのはすぐ決めるんですよ。決めるけど、こういうのは長続きしないんです。

伊藤 事務局がなかったら続くわけがないじゃないですか。

夏目 続かないでしょう。だから、本気でやる気がないんですよ。そういう名前を付けただけでしょ。

佐道 出来た時からそういうふうにご覧になっていましたか。

夏目 まあ、正直いって。さつき言ったでしょ、私は総合安全保障というのは眉唾だと思つてる。本場にやる気があつたら、こんなことやらないと（笑）。やる気がないやつが看板だけ掲げて、「俺はこうやってるぞ」という、政治家のお好きな手ですよ。と思つてたですけどね。

伊藤 よくわかるような気がしますけれども（笑）。

夏目 だから、総合安全保障会議を見たかというのと、私はさつき言ったように、これは一種のまやかしたなと思つてるから、あまりそれ以上は熱心に読まなかつたと思ひますね。

佐道 一刀両断という感じで（笑）。

武田 高坂さん自身はどうだったんですかね。わりと総合安全保障というのを真剣に考えて。

夏目 高坂さんというのは非常に頭のいい方であり、また融通無碍ですからね。この人がこういうものを望んでるなと思つたら、そういうのに沿つたものにきちんとつくることは、本当に天才的な学者ですね。悪くいえば、曲学阿世(笑)。まあ、それは冗談だけれども、非常にそういう意味で器用な方ですね。だから、どこへ出してもとにかく、どんな議論でも出来る。ああいう学者とというのは得難いですけどね。

猪木先生も、多少そういうところはあつたですけどね。猪木先生なんかも、そういう話は何回かあつたですね。「日本の防衛技術について総理に進言するんだけど、誰かいい人を紹介してくれ」というので或る人を紹介してあげたら、「その人が非常にいい話をしたので、その通りに総理に言つておきました」と。総合安全保障も、猪木さんのことだからたぶん、「それは結構なことだ。それはぜひ必要だ」というようなことを言つたんだと思うんですよ。でも、そういう学者が育つてきたというのは、いつか言つた、坂田さんなんかがそういう人を育ててきたということの、ひとつの結実なんだろうと思うんですね。それまでは、そんなのはなかつたですからね。非常に偏つた人の意見を聞いていたでしょ。

伊藤 旧軍人たちのグループとかですね。

夏目 それから学者でも、見るからに色のついた。そういう意味では、非常に客観的に世間の評価も高くて、安全保障の問題を正面からとりあげて真つ当な議論の出来る学者が、その頃から生まれてきたんではないでしょうか。もう頭から否定するということではなくてね。いい悪いは別として、とにかくいまの世界情勢から見てこうなんだよということを、諄々と説くような学者が増えてきたと。

佐道 学者への感想ということで、高坂さんの名前も登場しているんですけど、よく高坂さんと並んで、永井陽之助さんという名前が出てくるんですが、永井さんについては何か。

夏目 全く知りません。本を読んだだけです。あの人は、最初に本を読んだ時にいちばん感激した本なんだけれども、その後、全然出てこないし。どこへも出てこなかったですね。

佐道 政府関係のそういうのとか。

夏目 出てこないですね。学者にも何かあるんですかね。知りませんけどね。高坂さんはその後弟子というか、佐藤誠三郎にしても、渡邊(昭夫)、公文俊平とか、みんな仲間なんだけれども、やっぱりそういう人たちを育てて、そういう人たちがみんな政府のそれぞれのところへうまく食い入つたというか、嵌まつたというか。そういう非常に幅広い人脈もあり、しかも融通の利いた学者をお育てになつたということは、一種の功績じゃないですかね。

佐道 この総合安保の座長になられた猪木先生は、平和安保研の理事長になられて、高坂さんもその理事になられて、その時の平和安保研の専務理事に久保さんがなつておられたんですが、久保さんは八〇年に亡くなられますが、久保さんとは先生は接触は？

夏目 それはだつて、いつか話したように、久保さんは私は教育課長からずつとだからね。平和安保研も、私なんかがつくつたんですよ。それをどうしてつくつたかという、最初から久保さんをおそこへ嵌めようと思つていたんです。久保さんというのは、役人を辞めても公社、公団へ行く人でもないし、防衛産業かなんかへ行つて顧問をやる人でもないし、やっぱり学者だから、何かそういうのが必要なのではないかと。どこか大学でも採つてくれればいいけどね。当時はまだ、防衛庁の役人を辞めて大学で先生になろうなんていう道はないですからね。それでつくつたんですけど、久保さんは若くして死んじゃつたからね。久保さんと猪木さんなんかは、わりと考え方も近いです。非常に親しいはずですよ。高坂正堯の防衛に対しての考え方というのは、久保論文と非常に酷似してる。どちらが先か知りませんが、

■レーガン政権

伊藤 八〇年十一月にアメリカの大統領にレーガンが登場してきますね。これはソ連の恐慌論を振りかざして出てくるわけですけども、レーガンが当選したということは、先生にとってはかなりインプレッシブなことだと思いますか。

夏目 民主党大統領のカーターさんは、韓国から撤兵しようとかいろいろ話が出てくることからわかるように、保守的な共和党に比べ、民主党というのはアメリカのなかでもリベラルというか、軍事に対してちよつと拒絶反応を持ったところもあるんですよ。

伊藤 でも、元来は民主党のほうが国際的にやって、共和党のほうがむしろ国内に閉じこもるといふ伝統が、昔はあつたんですよ。

夏目 それは昔の話でしょ。

伊藤 それがいっ逆になつたのか、よくわかりませんが。

夏目 とにかく、レーガンになつた時のスタッフは、ペンタゴンにしても国務省にしても、いわゆる知日派の人達でしめられたんです。非常に日本を重視したということがひとつと、それからやつぱり政党の常としていままでの民主党政権と逆のことをやるんですね。対日アプローチなんか、まったく対照的でしたね。それは具体的にいうと、さつき言つたようにカーター政権というのは、数字をただ弄んだだけで何だか言つたけど、レーガンになつてからは、「そういうことはやめようじゃないか。そういうことを言うのはお互いの国益にとつてプラスにならない。やはり日本と緊密に相談をして、それでやるべきことはやつてもらおう」と。

いわゆる、役割分担ということ、日本を西側の一員に取り込んで、そしてアメリカにとつて日本に何をしたいのか、日本が何をすべきかということ、はつきり任務分担を決めて議論をしてきた。そういう意味では、アプローチの仕方を変えてきたんですね。そうは言つても、私に言わせればアメリカというのは、手

を替え品を替えている注文してくるから、「なんだ」という気持ちがありますけどね（笑）。ただ、我々にとつてはそのほうが仕事しやすいですね。

というのは、間違っているかもしれませんが、私自身は日本の防衛力については、日本単独で完結した防衛力をつくるのは、あまり意味がないんじゃないかという気持ちがあつたんです。やつぱりアメリカがあつて、アメリカの足らざるを補完して、そしてお互いにカバーしあつていくのが日本の、あるいは極東の安全に資するにいちばん手つとり早いんじゃないかと。ちよつと極端なんですけれども、わかりやすく言つちゃえばそういう気持ちだつたんです。だから、そういう意味では、アメリカが言つてくること、がはつきりわかることはいいことだなと。ただ「予算を二桁のばせ」とか、無茶なことを言うよりは、日本の向くべき方向についてアメリカとすり合わせが出来るなという感じはしましたね。

伊藤 しかし、日本は自力でどうこうというのはですね。

夏目 陸海空の三自衛隊を完結した形で、それぞれの言い分に基づいて完璧なものをつくつたとしても、単独で日本を守るというのは困難なことです。仮に日本の周辺において何か事があつて、日本の防衛力が働かなければならない時はどういう時か、そしてその時はアメリカが何をするか。そしてアメリカはどういう力を持つていて、何が足りないかということになると、アメリカが日本に期待するのはそれはシーレーン防衛だとか防空能力になつてくるわけです。そうしたことを考えずに、ただ日本への直接侵攻対処として陸上兵力だけを強化しようというのはいかがなものか、という考えが出てくるわけです。具体的に言つちゃえばそういうことですね。

伊藤 やつぱり自力で何かやろうと思つたら、核を持たなきゃだめでしょう。

夏目 だから、自力のみで何かをしようということは考えなくて

いいんではないか、アメリカと共同対処をするんだから。アメリカが「ここが足りない。ここが俺たちは弱いんだ」というところをやつてやろうじゃないかと。そうすればアメリカも日本を多とするし、日米安保もきちんとした確固たるものになるだろうと。それは、日本がアメリカにとつて絶対に必要不可欠なものだという認識を彼らに与えることになるし、日本もそうべら棒な財政負担をせずに、日本の安全というものを確保する、賢い道ではないのかなと思つたんですけどね。

佐道 そうしますと、七六年にいきますと防衛大綱の、久保さんが一所懸命お考えになつた一般的防衛力構想ですね。「限定局地戦」というのを想定して、本土防衛中心に、いざとなれば核使用できるような陸上自衛隊中心のバランスのとれた防衛力を整備する」というのは、あまりじつはよくないと。

伊藤 ちょっと違いますよ。

夏目 違うことは違ふんですよ。ただ、基盤的防衛力だつて、よく見れば海軍重視なんですよ。

佐道 そうですか。

夏目 ある意味では、陸はもうほとんど出来上がつているんだから。言い方が違うだけだね。私が思ったのは、陸は規格的には十分であり、増強にあまり金をかけなくてもいいと。海上だつて、そんな余計なものはいらないんですよ。対潜能力だけ持つていればいいと。要するに、アメリカが欲しがつていたのは——当時ですよ、いまじゃないですよ——対潜能力なんです。アメリカは、航空母艦を主体とする機動力は圧倒的な強さで、戦争したつてどこにも負けない。だけれども、第七艦隊といえども、潜水艦に対する能力は低いんです。ソ連は何百隻という潜水艦を持つていたんです。それを何とかしたいというのが、アメリカのいちばんの狙いだったんです。

伊藤 このころは確か、もうそろそろ原潜になつてないですか。

夏目 もちろん原潜ですよ。原潜どころか、ミサイルを積んだ、SLBMを積んだ潜水艦もあれば、攻撃型の対水上艦艇のミサイルを積んだ原潜、みんな持つています。

伊藤 それの対潜能力と云つたら、日本も原子力潜水艦を持たないで、追いかけれない。

夏目 だから、いちばんいいのは何かと云つたら、潜水艦というのは出たら見つけるのは大変だから、港に閉じ込めておくのがいいんです。出てくるところをやつつけるのがいちばんいいんです。それが出来なければ……それはウラジオにしてもペトロにしても、敵の領海に入らないと出来ませんからね。その次に何がいかと言つたら、三海峡を封鎖しちゃつて、日本海から外へ出さないと云うこと。そうしたら、アメリカは安心して太平洋を遊弋できるんです。

伊藤 しかし、三海峡の外側にソ連の潜水艦基地が。

夏目 カムチャッカにね。だから、ああいうところは港で出来るわけでしょ。カムチャッカも、潜水艦というのは、あんなところは千島の何か所かしか出口がないんですよ。だから、三海峡でチェックしてしまえばいちばんいいんです。それが、アメリカとしてはいちばん望ましいことだったんです。それがシーレーン防衛という形になつて、後ほどまた出てくるでしょうけれども、要請になるんですよ。アメリカはだつて、極東にはP-3Cもなければ、対潜用の機能も第七艦隊は弱いですからね。それを海上自衛隊に期待する。

伊藤 三海峡封鎖というのは、非常に現実的なものなんですか。

夏目 当時は現実的でしたよ。いちばん手つとり早いですよ。だから中曽根さんが三海峡を封鎖するというのも、日本列島を浮沈空母というのも、そういう意味なんですよ。封鎖するというのは、簡単ではないですよ。だけれども、狭いところだつたらチェックは出来る。現にいま、チェックしてるんですよ。みんな通るのはわかっ

ているんです。いま、あまり必要なくなっちゃったけどね(笑)。

それはアメリカが、日本にいちばん期待していたことなんです。まず攻撃型潜水艦を持つ、それから対潜哨戒機を持つ、それからソナーシステムみたいなものを海に沈めて通ればわかるようにする、いろんなシステムがあるんですけども、そういうものを総合的に使って出てくるやつをチェックする。チェックするというのは、平時はチェックする。いざとなったらそこで沈めちゃう。

伊藤 太平洋に出られてしまったら、とてもだめですね。

夏目 それは手に負えない。いまの原潜なんていうのは、半年ぐらいは外へ出てへっちゃらでいられますから、それがいちばん怖かったんですね。それともうひとつは、バックファイアーというソ連の新しい戦闘爆撃機が出来て、それが日本を飛び越えて太平洋まで出てきて、艦船の攻撃をする。それが怖い。だから、日本列島浮沈空母というのは、そこでもってバックファイアーに対する壁をつくって止めてしまおうと。

だから、レーガンになってから、そういう具体的な要望に徐々に切り替わってくるんですね。しかし、その要望もとても大きいものですから、「ああ、そうですか」というわけにはいかないよ。うな話なんだけれども、そういう話になっていくという意味では、私の考えからすれば当然そうなるんだらうな。また、そちらのほうで日本にとっては、仕事がしやすいなという感じはしていますね。

伊藤 じゃあ、レーガン政権の登場はウエルカムであると。

夏目 ウエルカムですね。この直後に中曽根内閣になるんですよ。そして、蜜月時代と言われたぐらい、日米関係がよくなったんですね。

伊藤 まあ、数カ月たった後ですけどね。

佐道 いや、まだ一年ちよつと鈴木さんで、八一年に例の同盟事件が。

夏目 まだ鈴木さんのあれがあるんだ、シーレーンだとか、軍事同盟がどうのとか。

伊藤 問題があるけれども、その後ですぐじゃなかったでしたっけ。

佐道 中曽根さんは八二年の後半ですから。

夏目 じゃあ、二年近くあるんですね。いずれにしても、中曽根さんになってから非常によくなくなったんです。レーガンは、非常にそういう意味では、スタッフに知日派を置いたんですね。アーミテージなんていうのもそうだし、ジェームズ・アワーなんていうのもそうだし。それから、昔、日本で公使をやった……名前を忘れちゃったな。某とかいうのが、国務省に入っていたしね。

伊藤 何をやっていた人ですか。

夏目 日本の公使をやった人じゃないですかね。その後、シンガポールなんかで大使をやっていましたけどね。ちよつと、名前が出てこないけど。ボケの四段階の、もう第三期ぐらいに入っているから(笑)。

伊藤 いままでスラスラ出てきてるんですから、ひとつぐらい引っ掛かったからといって(笑)。

夏目 もう一人は思い出した、ガストン・シゲールだ。公使の方は、クラークっていったかな。シゲールなんて凄い人でしたよ。日本語ペラペラだしね。岡山の池田藩の何とかを研究してるって、私は全然わからない(笑)。私が夏目といたら、彼は「草枕」はいいですね」とかね。本当に何でも知ってるんだね。カラオケっていったら、「エンブテイ・ボウル」なんて洒落ていましたね(笑)。「なんじゃ、これ」と思ったけど。

武田 笑いのツボも抑えてるんじゃないですか(笑)。

夏目 「エンブテイ・ボウル」って言われた時はもう本当に、もともと英語はだめだけど、何かと思ったら「カラオケ」とかいつて。伊藤 なかなかうまいなあ(笑)。

夏目 アメリカへ行っているもそう思うんだけど、アメリカの役人にしても軍人にしても、いつかも言ったかもしれないけれども、教養がありますね。そんなことが教養かどうかは知らないけれども。専門の知識以外にそういう幅広い、とくに歴史認識とかどうかそういうものに対する造詣とか、勉強をしますね。

伊藤 逆にいえば、日本だとそういう勉強をした人は、別な仕事に就くというチャンスがないんですね。

夏目 いや、彼らはちゃんとなつてから、修士課程とかをやるんですね。そういう点では偉いなと思いますね。

伊藤 大学の役割が、ちよつと違うんですね。

夏目 軍人なんかでも、みんな哲学修士とかを持っていてね。ジエネラルであると同時に、マスターを持っている。そういう意味では、日本の軍人にしても役人にしても、ちよつとね。自分のことを棚に上げて言えば、そういうことです。

佐道 防衛大学校も、人文とか社会科学とか、だいぶ幅広く。

夏目 いまの大学なんて、学力の程度からいったら昔の高校ぐらいでしょ。大学院に行つて初めて、昔の大学ぐらいになるんじゃないですかね。土曜日は休みだし、レジャーはふえても勉強する暇はないしね。そんなこと言つてたつてしょうがないけど。

■竹田統幕議長への防衛費上限一パーセント批判

伊藤 八一年二月の竹田（五郎）統幕議長の、触りというか。

夏目 栗栖（弘臣）さんの小型版だね。竹田という人は、私もよく知つている人ですけども、ちよつと背伸びしてるんですね。非常に勉強するんですけども、こういうことに走り過ぎてしまつてね。空幕の防衛部長ぐらいの時からそうなんです。日本の防衛はいかにあるべきかという、非常に勉強して、ものを書いては当時の防衛局に持つて来るんですよ。持つて来るんだけど、それよりは目先の仕事も一所懸命やつてくれ、みたいな話になつ

てね。だから辞めてからも、評論とかあちこちの雑誌でものを書いたり、いろいろ勇ましいことを言つておられますよね。だから、筆は立つ人なんでしょうね。

佐道 防衛部長時代に、意見書みたいなものを持つて来られたんですね。

夏目 まあ、意見書というか、自分の所見ですね。久保さんとわりと話が合うんですよ。考え方は一緒ではないんだけど、とにかくそういう実務からはなれた安全保障論のような話が出る。防衛局長と防衛部長という立場でね。

佐道 アカデミックなんですか。

夏目 アカデミックというか、要するにそういうルーチンの仕事以外にも口を出してしまふ背景はあるんですね。たぶん、この一年ぐらい前かな、国会議員から政府に質問書が出るんですよ。すると政府答弁というのをつくるんですけども、有事の際も徴兵制は憲法違反だからやらないというのが、政府の決定として閣議決定しているわけです。たぶん、この発言の直前、いつかは記憶がないんですけども、そういうことが背景にあつて、それに対して「おかしいじゃないか」ということを言われたんだと思うんですね。唐突にこんなことを言うはずはないから、たぶんそういう背景があつて言われたんだと思うんですけどね。

政府がわざわざ、「有事の際といえども徴兵制はとらない。憲法違反だ」ということを閣議決定したことを踏まえて「何ごとか」ということを言われたんだと思うんですね。それから防衛費のGNP一％上限を批判したなんていうのは、みんな言つていたことです。これは別に大騒ぎする問題じゃないんです。

伊藤 こういう問題が起つた時は、官房長としては係わりは？

夏目 官房長として、だから問題になつたですよ。「以後、発言を慎め」と。

伊藤 竹田さんに注意をするという役割ですか。

夏目 そうそう。だって、国会が採めちゃうもの。言わなくてもいい……まあ、言ったっていいけれども（笑）。それでもって徴

兵制が合憲になるとか、認めるとかかってなるならいいけど、犬の遠吠えみたいに騒いだってね。やっぱ、ものというのは背景があつて、その時期が来ないと実現しないんじゃないかと思ひます。

ただ、是々非々だけでもって政治が動くわけではないんでね。そういうことを考えて言わないから。「俺の持論だ」といつて言うなら、それは子どもだって言うんでね。実現性があつて、そういう必然性があつて言うならいいけど、ただ自説を主張するなんて

いうのは、世間を騒がすだけじゃないかということがあつたですけどね。栗栖さんの時のような大問題にはならなかつたですね。

伊藤 そう大きな問題にはならなかつたわけですか。

夏目 というのは、栗栖さんはもう本当に確信犯でしたけど、竹田さんというのは、「それは俺の本心じゃない」みたいなことで、下がるからね。まあそれは、現職でもあつたかもしれないけど、

佐道 口が滑つたと。

夏目 そういうことでもって謝つてしまうから、これはこれで済んだんだと思ひましたね。

佐道 厳しい処分をしろという意見は、内部にはなかつたですか。

夏目 内部には……あつたかもしれませんが、そんなに出なかつたですね。

伊藤 一応、そういうことを申し渡すのは、官房長の役割なんですか。

夏目 いや、必ずしもそうじゃなくて、大臣が言う時もありますし、次官から言う時もあります。

佐道 この時は、先生がおつしやつた。

夏目 たぶん、私も言つたと思ひますよ。

伊藤 「以後、言動を慎むように」と。

夏目 そんな失礼なことは言わないですけどね。「ひとつ、発言

は気をつけるようお願いします」と（笑）。

佐道 職制上からいいますと、統幕議長は制服のトップで、防衛庁長官の……。

夏目 だから、大臣から言うのが筋ですよ。だけど、そんなことを言つたら、別に権限で言うわけではなくて、「大臣が心配されていいます」と言え方がいいことですから、別に権限を逸脱して統幕議長の上に立つて言つてるわけでもないんでね。だからいま言つたように、「ひとつ、お願いします」ということで（笑）。

佐道 大村さんははつきりと、これをどうしろということをおつしやつていたんですか。

夏目 顔を擧げていたんじゃないですかね。あの人は、きつと渋い顔をして、「困つたな」とつていう顔をしてたんじゃないですか（笑）。

伊藤 しかし、社会党あたりがそれほど大騒ぎにしなかつたというの。

夏目 いや、けっこう騒いだんじゃないですか。でも、こんなことで首にしたら、キリがないですからね。

伊藤 まあ、そうでしょうね。

夏目 僕は、本当のことを言えばいいと思つてるんですよ。幕僚長や議長でなければ言えないことつてあるんですよ。制服の立場で、堂々と言うべきことは言わなきゃいかんですよ。それは、

部長やなんかの下の人が言つたら、その人の将来に係わることになりまして、幕僚長になつたり議長になつたら、後は辞めるだけじゃないですか。だから、正論だと思つたらドンと言つたらいいんですよ。で、後で謝らないことですよ。「あれは俺の持論だ。間違つてゐるなら指摘しろ。辞めさせるなら辞めさせてくれ」と

言えば、私は立派だと思ふけど、「申し訳なかつた。ちよつと口が滑つた」とか「筆が滑つた」とか、言うからいけないんですよ（笑）。だつたら、最初から言わなきゃいいんですよ。

ただ、制服の立場でものを言える人は、現職の議長か幕僚長

ぐらいしかいないんですよ。辞めたらだめなんです。辞めてから言うのは犬の遠吠えで、誰も歯牙にもかけませんからね。やっぱり、現職の人が言うことに重みがあるので。言ったらそれは、「間違いじゃない。それは俺が言ったんだ。どこが悪い。違ってるなら、首にでも何でもしろ」と、開き直るんだたら私は立派だと思っけど、そんな人はいないね。だって、統幕議長つてもう上がりでしょ。

伊藤 それ以上はないわけですからね。

夏目 だから、私はいまでも次官などに言ってるんですけど、「次官になったら、政治家でも遠慮なく堂々と見え。おかしいと思ったら首になればいいじゃないか。半年早いか遅いかだけの差だよ」と。そうは言うけど、実際その立場になると（笑）。

佐道 なってすぐというのは、なかなか言いつらいでしょうし。

夏目 私の時もそんなことがありますよ、私が次官になった時の統幕議長が大臣の前で言いたいことを言ったら、大臣に叱られた。「それはおかしいじゃないか」と言われたら、謝っちゃったんですけど。謝らなきゃいいと思ったんだ。「私のどこか間違っていますか」といつて開き直ったらいと思っただけだね。「そんな不穏当なことを言うのはけしからん」と言われたら、黙っちゃったからね。

■堀田ハガネの韓国向け武器輸出問題

伊藤 次の、堀田ハガネの韓国向け武器輸出問題で、野党が武器輸出三原則を法制化しろという要求をしたと。結局、衆議院で、この三原則の再確認を決議することになったという事件がありますが、何かご記憶はありますか。

夏目 僕は、武器輸出三原則そのものにはあまり関心も興味もなかったんですが、その後アメリカから、「アメリカだけは別扱いにしてくれ」というようなことを言ってくるんですよ。そういう意味で私もちよつと調べたというか、記憶があるんですけどね。

たぶん武器輸出三原則というのは、佐藤内閣の時に出来たんですよ。その時は、共産圏だとか紛争当事国だとか何とかかかんとか、そういうのはいけないよと。それ以外は何も言っていないですね。それを、その後何年かたって、昭和何年くらいだったかな……。

伊藤 全ての国にいかんということになったんですね。

夏目 そうそう。あれは、三木内閣だ。あれは何年になるんですかね。

佐道 七五年ですから、昭和五十年。

夏目 昭和五十年頃ですか。あらゆる国に対して武器輸出はいけないことになったはずなんだよね。それを破って、これが出てきたと。じゃあ、それまで五年くらいかかっているのかな。三木内閣って五十年ですか。

佐道 一九七四年から七六年ですから、五十年か五十一年か、そのくらいですか。

夏目 たぶん、この時の背景があつて、アメリカがそろそろ日本の武器技術というか、「アメリカが日本に対していろんな援助をしてきたのに、日本からの見返りがないじゃないか。日本の武器技術をアメリカにオープンにしてもいいじゃないか」というのを、この一年後くらいから正式に言いだすんですが、たぶんその下地が、この頃から非公式に言ってきたんですけど、たぶんその下地ですよ。そういう時にこの堀田ハガネの事件が起きて、そしてそれは、いまのアメリカの言い分と絡めて考えて、とんでもないと。法制化しようじゃないかということになって、結局は再確認の決議だけでもね。

佐道 法制化はなんとか避けるということになって。

夏目 たぶん、そうだと思うんですけども。だから、そのものにはないけれども、たぶんアメリカのそういうもののひとつの言い分が切っ掛けになって、こういう三原則の話が出たんだなということはありましたね。堀田ハガネのこと自体は、あまり私は記

憶がないけどね。前にも、確か九州かなんかの業者が鉄砲だかを輸出したことがあったんだね。中国かな。だから、昭和五十八年（一九八三年）にアメリカは、武器輸出の例外だと決めるんですよ。だから、その下地がたぶんこの頃からあったということですね。

伊藤 それで、野党が非常に気にしたということですか。

夏目 そうだと思っんです。それ以上、記憶がないもの。

伊藤 これが揉めたら、当然のことですが官房長としては……？

夏目 だから、このこと自体には関心がなかったですね。堀田ハガネって、全然記憶にないです。たぶん、唐突に武器輸出の三原則のことを言ってきたのは、そういうことがあったからよけい、煩かったんじゃないかと思うんです。堀田ハガネを契機にしてね。むしろ、堀田ハガネをあれにして、アメリカへ出すのも控えろと。慎重にしろということを書いたかったんじゃないのかなという感じがしますけどね。その後、問題になりますからね。

伊藤 輸出の問題でいえば、CHINCOMとかCOCOMとか、それで共産圏への輸出は規制していますよね。

夏目そこははっきりしていたんです。

伊藤 しかし、同盟国に……。

夏目 だけど同盟国も、三木内閣の時にだめにしたんですよ。

伊藤 あれもすごい話ですね。

夏目 だめというか、絶対にだめではないんですね。「慎重にしろ」とか「慎め」とか、そんなような言い方だったと思うんですけどね。

佐道 防衛庁として、「武器の海外輸出ということについてもう少し積極的にやったらどうだ。そうすれば、日本でつくってる武器ももう少し安くなるし」とか、そういう意見は？

夏目 私はそう思っていましたけれども、防衛庁の意見としてそんなことになったことはないですね。まともに議論もされなかったし、個人的に言うのはあったけれども、防衛庁としてそういう

方向で行こうなんていうことには、絶対にならなかったですね。

伊藤 それはタブーでしょう、やっぱり。

夏目 タブーですよ。本当はいちばんいいことなんです。安くもなるし、極東の平和と安全に資することも大きいと思うんだけれどもね。

伊藤 北朝鮮へ輸出したら問題ですけどね（笑）。

夏目 それは、出す先は選ばなければいけませんけれども、タイとかインドネシアとかへ出したって、どうっていうことはないと思うんですけどね。どうせソ連とか、いろいろなところからいっばい行っているんだからね。逆に、そっちとの結びつきが強くなっちゃうてるでしょ。だから、日本で出したら国内価格も安くするし、いいことだと思うんですけどね。景気もよくなるし。

佐道 武器を使えば、メンテナンスのあれですつとつながりが出来すし。

夏目 絶対、そうですよ。

伊藤 武器技術ということになってくると、汎用技術とあまり区別がつかなくなってきましたね。

夏目 だから確か、汎用技術もいけないと言われたんじゃないですか。三木内閣の時の決定は確か、紛争当事国とか共産圏でなくともいかんし、そういうものに応用されるようなものも慎むと。確か、範囲がそういうふうに広がったはずですよ。

■ ワインバーガー米國務長官の海上防衛力分担要求

佐道 それで、伊東外務大臣が三月に行かれて、もうレーガン政権になっていきますからワインバーガーさんに会って、先ほど先生もおっしゃった役割分担ですけども、グアム以西、フィリピン以北の海上防衛分担をやってくれないかということが出てきたんですが、カーター政権とはちよつと違うなところもあるわ

けですが、防衛庁としては、それはどうすべきだと？

夏目 なんだって？

伊藤 伊東外務大臣の訪米ですよ。これ、鈴木さんがその後に行く前の、三月の話です。

夏目 レーガン政権になってからですね。

伊藤 レーガン政権になったので、伊東外務大臣が訪米したという事です。

夏目 一九八一年（昭和五十六年）の三月ですね。この時に、ワインバーガー長官がこう言ってるんですね。「日米間で、防衛費の伸び率といった数字を巡っての不毛の論議は言うべきでない。日本には、自国内および周辺水域の防衛について一層の努力を望む」。要するに、シーレーン防衛について初めて言及したというのが、この時だったんです。これと同じ頃、ウエストという国防次官補がいたんですよ。それが、こういうことを言っているんですよ。「レーガン政権は、同盟国に対し公然と批判するようなことはしない。防衛努力については、対GNP比や対前年度伸び率のような数字よりも、使命、役割について議論する方針をとっていく」と。ワインバーガー長官がこの頃、上院の公聴会でもって、「日米欧の合理的な分業こそ、アメリカ政府の防衛政策の基盤である」と。要するにレーガン政権になってから、日本の防衛力については、NATOなどと同じように役割分担を期待しているんだ、ということを出してきたということなんですね。それをはっきりと打ち出したのが、鈴木・レーガンの共同声明という形になるわけです。

伊藤 鈴木さんが行く前に、伊東外務大臣が行ってそういうことを言われて、だから伊東さんのほうが鈴木さんよりは事情をもっと詳しく、肌で感じていたということでしょうかね。後でもう一度、今度は鈴木さんと一緒に行くわけですね。

■鈴木首相が日米同盟の軍事的役割否定

夏目 伊東さんはもう充分に承知して、アメリカの言い分も弁えて、そして全部飲み込んだ上で鈴木さんと一緒に行く。で、そういう振り付けをしたはずですよ。ところが鈴木さんは、その通りしゃべったけれども、帰って来てから……。

伊藤 帰ってくる途中ですよ。

佐道 記者会見の時ですね。

夏目 その時に騒がれて、「軍事同盟なんていうのはないよ」とか言って、それで伊東さんが辞めるんですよ。だから、そこもどいういう経緯でそうなっちゃったのかは、わからないね。

伊藤 伊東・ワインバーガーの会談とか、そういうことについての情報は、防衛庁にはきちんと詳しく入ってくるものですか。

夏目 入ってきますよ。

伊藤 外務省を経由してですか。

夏目 もちろん外務省を経由して。この時は誰も防衛庁は行ってないはずですからね。ただ、鈴木さんが記者会見か何かで、「日米同盟のなかに軍事的なものが入っていない」みたいなことを言った背景はわからない。外務省も言ってくれないからね。たぶん自分たちのところで、どこかミスったんでしょ。

伊藤 そうでしょうね。

夏目 大臣が悪かったのか、事務方が悪かったのか、それもわからないですけどね。だけど、常識的にあり得ないことを言ってるのは、鈴木さんもおかしいんですよ。

伊藤 やっぱ鈴木さんという人は、それまで外交的なことをね。

夏目 全然わかってないですよ。

伊藤 外交も軍事も全然わからないでしょ。船といえば漁船ですからね。

夏目 農林族ですからね。

佐道 総理、外務大臣が行かれて、日米関係全般だけではなく、とくに外交、防衛の問題も議論になるといふことになる、ワシントンなどには防衛庁からも？

夏目 誰が行ったという記憶はない。

佐道 防衛庁は、どういう役割を果たされるんでしょう。

夏目 この頃のことには記憶がないんだけど、あまり目立った形で働いていないんじゃないかと思うんですね。むしろ大使館ですら、あまり聞かれていないんじゃないか。東京の外務省が全部、振り付けしたんじゃないですかね。

佐道 そもそも、伊東外務大臣が行って三月にこういう話が出ているわけですから、こういった実際の軍事的な話もある可能性がかなり高いわけですよ。そうすると、こういう議論が出そうだというところで、外務省から防衛庁のほうに事前に何か言ってくるということはあるのでしょうか。

夏目 言って来たんだと思いますが、具体的に外務省から防衛庁にどういふふうに通ってきたかというのは、官房長たる私はあまり記憶がないですね。知らないです。あるいは、聞かされていなかったのかもしれないです。

佐道 この時は、防衛局。

夏目 防衛局だと思えますね。

伊藤 首相が訪米する場合などは、首相、外相で行って、随員のなかに防衛庁からは行かないものですか。

夏目 たぶん、この時か違う時か覚えていないけれども、「どうして連れて行かないんだ」ということを散々言い合った記憶はありますよ。だけど、外務省ってそういう役所ですよ。

伊藤 「安保問題は俺の専門だ」と（笑）。

夏目 だから半分、「それ見ろ」という感じもないわけではない。

伊藤 何に対してですか。

夏目 「総理と外務大臣がゴチャゴチャして、みっともない。わかっているんじゃないか。それは外務省のやつが悪いんだろう」と。たぶん、外務省が悪いんじゃないかと、総理が悪かったんだと思いますけどね。

佐道 この日米首脳会談の後にゴタゴタするわけですが、その後の六月ぐらいに今度は、大村長官がアメリカに行かれますね。

夏目 そうでしたかね。

佐道 そうすると、この首脳会談でかなりゴタゴタした分、大村さんが行かれるのは緊張されるというか、重要になってくるんじゃないかと思うんですけれども。

伊藤 あなたが言ってるのは、事務レベル協議の話？

佐道 いやいや、別に行かれてはいるんです。

夏目 それは全然、記憶にないですね。行ったのは思い出したけれども、大事な話をしたというようなあれはないですね。むしろこの後、事務レベル協議に舞台を移された。首脳会議でも、日米事務レベル協議が議題になってしまった。本来非公式な、フリートーキングな場だったものが、そこで大いに議論してもらいたとって両方の首脳が相談したということになって、そのほうが大きな意味を持ってきたけれども、その間に入った大臣の会談というのは、失礼だけでも全然……（笑）。

伊藤 儀礼かもしれない。

夏目 記憶からすっかり落ちこちてるけどね。

伊藤 大事でないことは、記憶がなくなってもいいんです。

夏目 だって、いま私が書いたのを読んでいるのは、もう十年以上前に書いたものだから、いまより記憶が鮮明な時だけど、そのことについて触れてないものね（笑）。

伊藤 そういうメモをつくったんですか。

夏目 あちこちで講演した時の、あるいはさっきの高坂グループの先生方に、七〇年代の日米軍事関係についてどういう経緯があ

ったか、ということをしやべらされたんですね。その時の原稿を、いま見ながらしゃべっているんです。いまよりこっちのほうが記憶が鮮明だからね。

だから、ここにも書いてあるけど、大村長官の話は出てこないんだよ。向こうの国防次官補とか参謀総長の発言なんかはいっぱい出てくるんだけど、大臣の話は出てこない。失礼だね（笑）。

佐道 それは、事務レベル協議の段階でのお話ですか。

夏目 そうです。その時はまだ、私は行っていませんよ。もちろん、この時の宿題が次の年に回ってくるんです。でも、この年は行ってない。

伊藤 次のところに書いてあります、米軍と自衛隊の共同訓練で小さい事故が起こったという、このことはそれには全然書いてないでしょ。

夏目 書いてない。

伊藤 記憶はありますか。

夏目 これはたぶん、例のガイドラインが決まって、それから非常に日米の関係で目ざましく変わったのは、共同訓練なんです。まず空が、防空訓練というか、航空自衛隊の共同訓練が初めて行われるんですね。海上自衛隊はその前から、規模の小さい共同訓練はいつでもしていたんですが、だけでも航空自衛隊とか陸上自衛隊はしたことがなかったんですが、このガイドラインを受けてすぐ始まったのが、航空自衛隊の共同訓練。それからRIMPAC Cという、環太平洋の海軍が集まってやる大規模の演習というか、訓練。これにも出てる。

伊藤 正式に。

夏目 正式にね。そうした動きのなかで、米海軍と海上自衛隊の共同訓練が行われたんですがね。確か、日本防衛のための訓練なんだな。日本海に第七艦隊が大挙して入ってきたということは、非常に画期的な演習だったんですね。それまでは太平洋が主で、

日本海にはあまり入ってこなかったんですね。それが、秋田沖でもって延縄を切って、たぶん共同訓練を途中でやめちゃったんですね。出端を挫かれたみたいな事故でしてね。ちよつと対応が悪かった点も……悪いというか、初めてだし、米軍が入っているものだから、ややこしいんですよ。それでちよつとゴタゴタして、演習は取りやめになっちゃったんですよ。

伊藤 日本海に第七艦隊が入ったということは、つまりソ連に対するデモンストレーションでもあるわけですね。

夏目 もちろんそうです。それがいちばんの狙いですよね。

佐道 当然、地元からは「補償しろ」とか。

夏目 もちろん、補償という問題が出てきましたね。私は直接、担当ではないけれども、報道関係のところでもゴタゴタやった記憶がありますね。

伊藤 実際は、補償するというのは大したことではないわけですね。

夏目 演習をやったらあり得ることですよ。だけど、初っ端でしたからね。米軍ズレのしていない、共同訓練なんか初めて見るというところですからね。日本海の秋田県なんて平和そのものところだから（笑）、漁民もショックだったでしょうね。

佐道 事前に訓練海域とかは？

夏目 知ってるんですよ。

佐道 それにも係わらず、延縄とかをやっていたわけですか。

夏目 延縄って、さうとう遠くまでやるんじゃないですか。だから、わからないですよ。たぶんあの時も、切つてすぐではなくて、しばらくわからなかったんじゃないですかね。

佐道 当時の新聞によりますと、「切つたにも係わらず、米軍が何もしないでじつと見ていた」とか。

夏目 見てたとか、逃げたとか、そのまま行っちゃったとかいうんですよ。

伊藤 気づいてないのかもしれない（笑）。

夏目 アメリカは当たり前なんですよ(笑)。

伊藤 切断するという事件が起こったら、それは後で補償すればいいだけの話で。

夏目 それだけのことというか、事故は事故ですけど、人が死んだとか何とかではなくて、金で済む話ですからね。ただ、最初の演習というか、日本海で大規模な演習をやったのは初めてだから、ちよつと影響が大きかったんでしょうけど。出端を挫かれたという感じではあつたんじゃないですかね。

伊藤 新聞が、大いにやっただけですね。

夏目 そうそう、それだけの話。しかも私は覚えているのは、その関連の記者会見したら、「酒を飲んでたじゃないか」という話になってね。

伊藤 誰がですか。

佐道 先生がですか。

夏目 いや、私だけじゃないんだけど。夜中でしょ。それで、対策も終わって、ビールでも飲んで解散になったんだけど、それがよくなかったらしい(笑)。まあそれは、その時の記者会見で突っ込まれただけで済んだんですけどね。

伊藤 新聞記者のほうは飲んでなかったのかなあ(笑)。

夏目 そういう、ちよつとした心の緩みというのはあるんですけど(笑)。会議の時は飲んでないんですけど、終わって、新聞記者の会見もちゃんと出ていって、後に残った数人でちよつと飲んだら、それがよくないんですね。

■ ライシャワー元大使の核搭載艦寄港発言

佐道 でも、そのぐらいはだけど。

ちよつと同じ時期ですけども、質問項目には書いていなかったんですが、アメリカでライシャワー元大使が、「日本に寄港する米艦船には核兵器を搭載している」というのがあつたんですが、

これは先生のほうで何か。

夏目 当たり前前だと思つて。アメリカにも、そんなことを言う人がいっぱいいたでしょ。ライシャワーさんが初めてじゃないでしょ。何人か、みんな辞めてから言うんですよ。それはもう、みんな頭の中では常識だと思つていらっしゃるんですよ。ただ、政府が頑迷に否定するから、建前論で行くからそういつてるだけであつて、心から積んでないと思つている人は一人もいないと思つてですね。

伊藤 「積んでないと思つております」というふうに、真面目な顔をして言わなきゃならない(笑)。

夏目 ああいうインチキなことはやめたほうがいいんですよ、本当にね。

佐道 「事前協議がないから、ないことになっております」ということですよ。こういう発言があつて、新聞とかがワツと騒いだ時に、防衛庁としてはどういう対処をしようとか、決まつてるんですか。

夏目 防衛庁はあまり関係ないですね。

佐道 これは外務省ですか。

夏目 外務省ですね。聞かれたら、外務省は同じことを言つたでしょうね。「事前協議です。ありません。だからないでしょう」と。

佐道 じゃあ、また出たかというような。

夏目 その程度ですね。ただ、アメリカというのはどうしてそういうことを言うのか、何かシグナルを送ろうとしているんだと思つてですね。「日本の言い分はごまかしだということ、そろそろ言つたらどうなの」と、言つてるんじゃないかと思つてですね。

伊藤 まあ、核についての三原則が、もともとそんな意味とは違ひますからね。

夏目 最初につくつた時は、「持ち込み」は入っていないんですけどですよ。

伊藤 いや、持ち込みというのは要するに、中に持つてきてそこ

に据えつけることでしょ。

夏目 だから、船に積んでくるのなんかは入っていないなかったんですよ。

伊藤 原子力潜水艦の寄港も、問題にしますしね。

夏目 航空母艦だつて、みんなそうでしょ。

佐道 原子力といえばみんなだめという。

夏目 そんな、降ろして来るはずがないんだから(笑)。いつも言ってるんだけど、「飲み屋に酒を持ち込んで飲んで飲みかんけど、鞆の中へ入れてそのまま家に持って帰るのは持ち込みじゃねえ」って。養老の滝で自分の持つて来た酒を開けたら、それは持ち込み(笑)。

佐道 そういう答弁が出来たら気持ちいいでしょうね(笑)。

夏目 「しろ、しろ」って言うんだけど、誰もしない。

佐道 外務省はしないでしょうね。

夏目 本当にわかりにくい答弁が多いですよ。僕が防衛局長になつてから、「アメリカと日本は共同作戦をとる限り、何とかかんとかは一緒に行動している限り、そういうことはありません」と。なんだろう、その「限り」というのは。どういうんだかわからないですね。それを意識すると、勇み足になっちゃう。だけどもある日、目を瞑つて勇み足をやったら、やっぱり叱られるもんね。「大村さんみたいに、ちゃんと読め」と。だけど、自分で納得できないものを読めませんよ。

伊藤 さつきお話にありました、ハワイの日米安保事務レベル協議は、翌年には今度は自分が?

夏目 ちょっと触りだけ言うと、この時にいろんなことを言つて

くるんですけども、具体的には護衛艦を何隻、P-3Cを何機という、日本の防衛力について膨大な量の要求をしているんですよ。それで、答えられないから、それを持つて帰るんです。持つて帰るのはいいんだけど、持つて帰つたきり一年間、放つておいたんだね。防衛庁もいい加減なんだね。で、私が行く半月ぐらい前になつて「こうなんだ。これ、宿題だ」と(笑)。私は防衛局長になつたばかりでしょ。「エッ」といって、聞いてびっくり仰天してね。

それで、どうしたものかと。一年間放つておいて、答えないわけにいかないし、何かまともな答えをしなきゃいけない。そうかといつて、出来るとは言えない。それで共同研究にしたいんです。ガイドラインで共同研究ということになっているから、シーレーンも共同研究の対象にしようよと。アメリカも勉強したろうけれども、俺たちも勉強すると。それで、シーレーンの共同研究というのが始まるんです。それは、行く前にちゃんと総理の了解もとつて、そういうことにしたわけです。

だけど、それよりも腹が立ったのは、私が防衛局長になつたのに、そういうことを前もつて報告をする人間がいなかった。だから、防衛庁もいい加減だね。外務省のことを悪口いつてられないんだよ(笑)。連続性がないんだ。

佐道 では、次回はここからまた改めて。

伊藤 防衛局長になつたところの話を、ちょっと伺わないとまずいですね。

佐道 どうもありがとうございます。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第11回

開催日：2003年9月22日（月）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時15分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

岡田志津枝（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：
有限会社ペンハウス 矢沢麻里

第11回インタビュー質問項目

2003年9月22日

1

官房長時代の続きからお願います。前回もお話がありました81年6月のハワイにおける日米安保事務レベル協議で、米側の要求は日本側が考えていたよりもかなり大きいものでした。その後防衛庁内でもこれに対応しないまま、翌年防衛局長に就任された先生に引き継がれたというお話でしたが、そもそも事前の外務省との打ち合わせを含めて、鈴木首相の訪米以来悪化していた日米関係について防衛庁サイドはどのような姿勢で臨む方針だったのでしょうか。

2

上の質問とも関連しますが、米側の要求は「防衛計画の大綱」の水準を越えるものでした。大村長官も園田外相、宮沢官房長官も米国の要求は過大であるとして否定的な意見を述べていますが、これは防衛庁としてもやむをえないという意見だったのでしょうか。

3

米国は日本に対して防衛力整備要求を行うと同時に、在日米軍経費負担（思いやり予算）の増額も求めていました。防衛庁筋の話として日本側分担を拡大する意向（日経、6月24日）と伝えられています。これは防衛力増大要求に伝えられないことの「代償」的な施策ということでしょうか。

4

6月に行われた大村長官・ワインバーガー国防長官の会談（前回ご記憶がないということでしたが）でも、ガイドラインに関連して「極東有事」に関する研究を進めることが合意されています。これはどの程度進んだのでしょうか。また、具体的な有事研究ですと、やはり制服組が中心になってくると思いますが、この場合の制服組と内局との連絡・調整はどのようになっていたのでしょうか。

5

8月、大村長官は国防会議議員懇談会で、現行自衛隊法の政令整備を優先し、有事立法作業は当面見送る方針を表明しました（朝日、8月14日夕）。先生も有事立法の問題にはかなり関与されていたわけですが、有事立法作業の見送りは防衛庁としてやむをえないという判断だったのでしょうか。それとも内閣としての判断ということでしょうか。

6

81年12月の日米装備技術定期協議で、米側は武器輸出三原則の撤廃を求めたのははじめ、このころになるとNATO並みの協力を武器の共同開発でも求めてきたといわれています。これはやがてFSXの問題にも関係していきますが、武器開発・技術協力をめぐる米国の姿勢などについてご記憶の点をお願いします。

7

11月に内閣改造があり、伊藤宗一郎氏が長官に就任しました。伊藤氏は「男子の本懐」と述べて話題になりましたが、伊藤氏の印象をお願いします。

8

82年3月、日米防衛首脳定期協議でワインバーガー国防長官は、

日本のシーレーン防衛の具体化および防衛費毎年12%増の必要性を指摘したと伝えられています。米国の防衛力増強要請は一段と厳しくなっている観がありますが、米国の要請に対して防衛庁はどのように考えていたのでしょうか。なかなか具体的な対応策は浮かばなかったということでしょうか。

9

4月、英国とアルゼンチンの間でフォークランド紛争が勃発します。英国の軍艦が撃沈されたり、近代兵器を使った海上戦闘も行われ、軍事関係者の関心は高かったと思います。先生はどのようにご覧になっておられましたか。また、防衛庁・自衛隊としても戦訓を得るよう検討されたと思いますがいかがでしょうか。

10

7月、防衛局長に就任されます。就任の経緯等お聞かせ下さい。就任にあたって、先生が最重要課題と考えておられたことはどのような問題でしょうか。あるいは早急な対応が必要な問題としてはどのようなことを考えておられましたか。

11

先生と同時に事務次官には大蔵省出身の吉野實氏が就任されました。これで三代続いて大蔵省出身の次官となったわけですが、吉野氏自身は経理局長を約一年務められただけで（その後、防衛施設庁長官）、官房長も防衛局長も務めておられませんでした。一方で官房長、防衛局長を務められた塩田章氏は施設庁長官に転出されています。防衛問題の比重が重くなっている時期ということをお考えと、少し人事に違和感も持つのですが、いかがでしょうか。

12

8月、ハワイで日米安保事務レベル協議が開催されます。先生は防衛局長としてこの会議に臨まれたわけですが、前回のお話です

と、米側要求に対して日本はきちんとした対応をせずに先送りしていたことになりました。この会議に臨まれた先生の考え方などについてお願いします。

13

事務レベル協議を踏まえて、日本国内の調整が必要になると思います。特に外務省とは詳細な連絡も必要かと思いますが、この点についてはどのように取り組まれたのでしょうか。

14

82年11月、中曽根内閣が誕生します。かつて防衛庁長官も務められた中曽根氏の首相就任について、先生はどのような印象をもたれましたか。

※今回は以上の点についてお願いします。次回は防衛局長時代の続きからお願いします。

■ 官房長時代

伊藤 先生はこの前だいぶ先へ進まれたような感じで。

夏目 ちょっと戻るんだよね。

伊藤 そうなんです。ちょっと細かいことになりましたが、この質問表で、これは答えて意味があるかなというのでお話しくださっても構いません。この前のお話では、日米安保事務レベル協議で日本側が全然対応しないという間に、という話がございましたよね。

夏目 ちょっと戻らんとね。その前に、たいしたことではないのだけれども、官房長時代の記憶にあることで変わったことだけをちょっと。あんまり本件と関係ないかもしれないけれども。

幾つかあるのですけれども、一つは、私の官房長時代というのは国会の審議ストップがやたら多かつたんですよ。いま思い出しても何が問題だったのか記憶が定かではないのだけれども、当時の新聞を読むと、ファントムか何かの追加生産の爆撃装置をはずさないで予算要求したのかな。そんなことがあって国会でだいぶ問題になって、何回か答弁が詰まっちゃって審議ストップになって、「あの政府委員から答えさせるな」ということがやたらにありました。私は官房長で正面ではないものだから外野みたいなどころから見ていたのですけれども、そういうことがありました。その時、一時、防衛局長が病気でダウンしちゃって、数ヶ月かな、一ヶ月か二ヶ月か覚えがないけれども、急遽、防衛局長の代わりに国会答弁させられた記憶があるんです。

伊藤 官房長がですか。

夏目 ある日突然ですけれどもね。

伊藤 次期防衛局長という(笑)。

夏目 いや、そんなのではなくて、病気ですからね。急に入院か何かしちゃったのかな。それでひどい目にあつたことがある。

伊藤 そうですか。それは議事録を見ればわかりますね。

夏目 そんなのはいいのですけれどもね。

伊藤 それは何の委員会ですか。

夏目 何の委員って、当時、予算委員会か何かをやつたのでしょうか。

伊藤 予算委員会の話ですか。じゃあ、それは大変だ。

夏目 いちばん忙しい時期でした。右も左もわからない、いままでは人の仕事だと思つていたのに(笑)。それから、伊藤(宗一郎)長官。……まだ伊藤長官になつていないかな。官房長るときに伊藤長官もいましたね。

佐道 はい、最後の時期に。

夏目 伊藤大臣の「ゆすり・たかり発言事件」というのがあって、大臣をクビにしろという声が与野党から澎湃と上がつて、次官と官房長と、あつちこつちへ行つて頭を下げ続け、なんとかクビだけは逃れた経験があるのをい思い出しました。仕事とは関係ないけれどもね。

伊藤 やはり仕事ではないのですか。

夏目 まあ、仕事といえば仕事だけど、あまりおたくと関係のある仕事ではない。ゆすり・たかりといったのは、国民も政治家もみんなそうだと。確かにいわれてみればそれとおりなのですけれども。

伊藤 それは何の話ですか。

夏目 要するに、国民は政治家にゆすり・たかりをやるし、政治家はまたいろいろなところへゆすり・たかりみたいなことをやって、それが政治家の力だとか何だとか誤解している。国民もそういうものに甘んじて、政治家に、「あれを頼む。これを頼む」ということをやっている。そんな日本ではだめだ。

伊藤 どこかの講演か何かでそれをいつたわけですか。

夏目 何でいつたのか記憶にないですね。「お願いします」ということで、当時の自民党の政調会長の田中六助さんやら、何人かの先生のところへ行つて。春日一幸先生なんかは、寢床にいたま

ま、「クビだ、あれは」とかいつて（笑）。「あれをクビにしたって防衛庁がつぶれるわけじゃねえだろう」とかいわれた。そんなことを思い出しました。

伊藤 謝るのは上手ですか。

夏目 私はそういうことで仲良くなるんですよ。私は謝るときに非常に誠実味あふれています（笑）。

伊藤 なんとなくわかるような気がします（笑）。

夏目 気が小さくて、本当におどおどしてね（笑）。なんとか助かって、そういう思い出をちよつとイメージ出してね。

伊藤 では、伊藤さんは先生を多としたのですか。

夏目 もともと気の合う感じの人でしたけれどもね。彼は大学の先輩ですし、お酒は好きだし。お酒も、彼は日本酒一本なんです。宮城の米どころですから、洋食がだめで、米の飯を食わないと機嫌が悪い。ちよつと助兵衛でしたけれどもね。議長になってからおとなしくなった（笑）。

伊藤 それは年のせいじゃないですか。

夏目 本当になかなか愉快な、ざつくばらんな。ただ、ざつくばらんだからああいう発言をしたのでしょね。「男子の本懐」あたりまではよかつたけれども。

伊藤 ああ、そうですね。そうだ、あの人は「男子の本懐」をいったんだ（笑）。

佐道 そうですね、久しぶりに聞く台詞で。

夏目 あれから何か本が出たよね。別の人のことだけど、城山三郎か何か「男子の本懐」という。

伊藤 まあ、あれはちよつと違いますけれどもね（笑）。

■日米安保事務レベル協議

夏目 それで、この一番からでいいのですか。一番で繰り返し申しあげたほうがいいと思うのは、八一年のときに向こうがいった

ことをもう少しお話ししたほうがいいのではないですか。

佐道 はい。

夏目 この八一年の日米安保事務レベル協議というのは、それまでは単なる事務次官をキャップにしてやるフリートリーキングで、言いたいことを言うんじゃないかと、非常に気楽な会議だったのです。ところが、その前にレーガンと鈴木（善幸）の間において例のいろいろな話が出たときに、具体的なことについては日米安保事務レベル協議で具体的に相談しようじゃないかと。それまでのそういうフリートリーキングの場がなんとなく日米両首脳の間で話題になっちゃった。したがってその会議の占める意味というのがちよつと変わっちゃったのです。それまではあんまり取り上げられなかったのですけれども、マスコミも非常に注目し始めちゃつてね。そういう偶然も重なっちゃつて、そういう下地の上で五十六年の安保事務レベル協議というのは始まったわけです。そこでまたアメリカが非常に思い切つたことをいったものだから、ワットと騒ぎ立てられて。

そのときにアメリカがいったのはこういうことなんです。まず、向こうの代表というのはウエストという国防次官補がいるのですが、国防次官補が代表というのはちよつとあれなのですけれども。この会議に出席するメンバーはどういう人かという、アメリカ側は、国防次官補以下、国防省、国務省の面々なんです。そのほかに在日米大使がいる、太平洋軍司令官、在日米軍司令官が入ったりする。しかし、会議の建前は国防省の次官補か次官が代表なんです。こちら側は、駐米大使がいるんです。それから、外務省はアメリカ局長、こちらは防衛局長以下がいて、防衛次官がキャップです。それが事務レベル協議なんです。だから、多少格下の人間が代表をやつていて、もつと偉い人がそばにいるわけです。

私の時なんかは、大河原駐米大使がいましたし、向こうはマンズフィールド大使がいましたし、そういうちよつと異例な会議なん

です。

そこで米側代表がいったことは、「今回の協議というのは、先般の成功裏におわった鈴木—レーガン首脳会談の上に築かれるものである。そういう意味で特別な重要な意味を持つ」ということを強調して、その上でいろいろなことをいうわけです。いった自身はこうです。「北大西洋では、米国は核の傘と投入兵力を提供する。日本はその領土を守る効果的かつ継続的な通常戦力と、日本周辺海空域と千海里のシーレーンを効果的に防衛するための十分な海空防衛力を持つこと。韓国についての日本の役割は、韓国防衛に従事する米軍のための援助・支援。南アジアについては、米国のインド洋における巨大な出費を伴う努力を考慮し、在日米軍に対する経済援助、駐留費の負担増と、南アジアに対するODAの増額を行なう」と、非常に防衛問題からはみ出たことを言い出したのです。それでちよつとびつくりはしたんです。

それを敷衍する意味で、ゴーマンという向こうの参謀本部の中將がいますが、彼がこういっているのです。「日本の防衛力については、まず即効性を向上させることだ。それは、人員装備の充足、錬度、二番目にはC₃I（シー・キューブド・アイ、指揮統制通信情報）、三番目には継戦能力」と、弾薬の備蓄を何十日くらい持たなくてはいけないというようなことを具体的に。それから装備の近代化として、この前もちよつとといったかもしれないけれども、船の数を、護衛艦何十隻とか、潜水艦が何十隻とかという大綱水準と非常に大きな差がある数字を並べて、それを要求してきたということ。日米のなかで共通の認識になったのは、シーレーン防衛能力。これは洋上防衛とか対潜能力とか両方なのですが、そういうものがいちは日本にとって重要だということ。そこで重ねて敷衍しているのです。そこは次の年に引きずるのですが、そういう要求を彼らはしてきた。

「大綱は時代おくれである。いまある五六中業が達成してもな

お不十分である」ということをいった上でいまいったみたいなおとをいうわけですから、日本側としては非常にびつくりして、どうしていいかわからなかったというのが実情だと思ふのです。これが結局、その後日本の国内において大綱の見直しという声に変わっていくのですけれども。

中島 そうしますと、当時はまだ日本側では大綱の見直しという声はそれほど大きいものではなかったのでしょうか。

夏目 まだつくってからそんなに時間がたっていないからね。五六中業というものをつくったばかりだし。だからそんなに。ただ、いつかも話したように、大綱というのはできたときから鬼つ子だったでしょう。そういう意味ではそういう声が全然ないわけではなかったんです。しかし、防衛庁としては大綱を非常に便利に使ったのです。確かに大綱というのは批判もあつたけれども、一つは政治的に非常に効果があつたということ。それ以後、国会内の防衛議論というのはあんまりギスギスした議論にならなかったんです。なぜかという、みんな大綱の枠内だということ逃げられた。防衛庁もちよつと卑怯なところがあつたんです。これは大綱の範囲内です」ということで、みんな逃げを打った。そうすると、そこから先は野党も追及しにくくて、できなかった。それを裏返しに言えば、大綱をつくったことで防衛関係者の思考はそのまま停止したというきらいもあるのですけれども、非常に大綱の政治的効果というのは大きかったと思うのです。与野党の防衛問題に対する先鋭な対立が比較的緩和されてきた。同じ土俵で議論しようというような雰囲気が出たということはいえるのではないのでしょうか。そういう政治的な意味での大綱の効果というのは大きかったと私は思うんです。

大綱というのは、アメリカ側からいろいろなことをいってきたということが一つあるし、世の中も変わってきたのです。アメリカは非常に経済的にも財政的にもインバランスの問題だと

が起きてきた。ソ連の軍事力というのは、多分あのころからバツクファイアが極東配備したとか、ミンスクという空母も極東に。いちばん新しいものを極東に持つてくるという時代が続きましたから、世界情勢も変わつてきたということ。アメリカから見れば、大綱は時代おくれだということをおいてくるのも無理からぬ時代だと思ふのです。

もう一つ背景にあつたのは、ガイドラインに対する不満ですね。共同研究というか。何をやっていたかといつたら、あとでまた出てくると思うのだけれども、あれは日本有事と極東有事と分けてある。アメリカがいちばん求めていたのは極東有事のほうだったのです。日本有事なんていうことは蓋然性としてはほとんどないんじゃないか。だからそちらからやろうじゃないかと。言い換えれば、朝鮮半島で何かあつたときに日本はどういう支援ができるのか、そういうことをはっきりしようじゃないかというのがある。それがいちばん望んだガイドラインへの期待だったのです。それがちよつとずれちゃつたということが背景にあつて、そういうのが日本に対するいろいろな要求になつてきたことから大綱見直しみたいな議論が出てきたということはいえると思ひます。

大綱見直しは、これとは別にちよつとおもしろいことがあります。私が官房長るときで、自民党内でもやはりそういう意見が出てきたのです。自民党の右寄りの人というのはみんな大綱反対でしたから、「あんなの直せよ」ということをいう。しかし、あまり大つびらな形としてははいえないのです。そこで、自民党の中にたしか防衛力整備小委員会というのができたのです。自民党というのは政調会の下にいろいろ調査会がありますね。部会もあるし。その安全保障政策調査会の下に防衛力整備小委員会というものをつくつたのです。このキャップに座つたのは藤尾正行さんといつて、ご存じでしょう、非常に勇ましい、見てくれは古武士然としたうるさい人ですよ。この人が小委員長になつて大綱の見

直しの議論を国会の中で始めた。しかし議員さんのことですから、勉強はしますが最終的な作文は、結局役人のところへくるのです。それで私は頼まれてつくつた記憶がある。

伊藤 何をつくるのですか。

■「大綱見直し」意見書

夏目 「大綱見直し」というのを。

伊藤 意見書みたいなものですか。

夏目 そうです。それでその「見直しを」といつたら、「これでもいい」というので、安保調査会へかけたのです。安保調査会というのは三原（朝雄）さんが会長なんです。あの方は非常に温厚な方ですから、下から上がつてきたものは、「よからう」というようなもので、安保調査会もそのまま通つちやつた。そこまではよかつたんです。わたしは黒子ですから、私の名前は全然出ない、党の中の議論として安保調査会で議論して、今度は政調会にかかると。それが、当時の宮沢（喜一）官房長官の耳に入つたんです。それで、それは大変だと。いま大綱の見直しなんかを議論したら、国内もまた話しがややこしくなるからなんとかおさえない。たしか鈴木内閣ですからね。宮沢さんに呼ばれて、「あれはどういうところから出たんだ」というわけですよ（笑）。

佐道 書いた本人に（笑）。

伊藤 ハハハハ（笑）、それはわかつていて聞いているのではないですか。

夏目 かもしれせん。当時も、「あれはあんたのところを糸をひいているんだらう」とかいつて国会議員にいわれたからね。「知りませんよ」といつたけど。まあ、どこかでは出なかつた。で、「あれをなんとかつぶしてくれ」というわけですよ。つぶしてくれといつたつて、困つたなあと思つてね。しかしまあ、私も政府の一員だ

から(笑)。三原さんのところへ頼みに行ったり、いろいろなところへ頼みに行っただけで、安保調査会で決めちゃっているからなかなか下ろすわけにいかないわけ。そのときの政調会長が田中六助さんですよ。だから、伊藤長官のクビのときからのつながりもあつたのかな。「政調会で決定して党議決定になっちゃうということでも内閣も心配しているようだからなんとかしてくれ」といったら、「うーん、困ったなあ」とかいつて、結局は、「じゃあ、俺が預かりにすればいいんだな。議題として出したものは会長預かりだと、それでいいんだな」というから、「それで結構でございます」と、政調会長預かりでそれが消えちゃったんです。

伊藤 「預かり」というのは本当に消えちゃうことなのですか。

夏目 自民党のやることですから何だかわからないですよ(笑)。そういうことがあつて、だから大綱の見直しというのは確かにそのころから出てきた。それは、いまいったような背景があつたらだと思つてすけれども。

中島 そのときに先生が実際に書かれた見直し論というのは、具体的に大綱のどのあたりをどういうふうに直すべきだという。

夏目 もう覚ええないね。

伊藤 それをとっていませんか。

夏目 そんなもの、私が書いたのは内緒ですから。どこか、自民党あたりへ行けばあるかもしれない。

伊藤 あるかもしれないね。じゃあ、捜しだそう。

佐道 自民党の政調会は一度やらないとだめですね。

伊藤 そうですね。

夏目 小委員会というのをつくった藤尾先生というのは非常に強硬な右寄りでしたから、中でもつてごりごり押して安保調査会まで通しちゃつたのですけれども、当時は安保調査会のなかにもいろいろな人がいたから、全員賛成ではなかつたかもしれないですね。ましてや政調会になると、田中六助さんなんていうのは鈴木

善幸の派閥ですしね。

佐道 小委員会の長が藤尾さんとして、ほかのメンバーで覚えておられる方はいらつしやいますか。

夏目 堀江正夫とかね。堀江さんにも、「あれはあんただろう」といわれました。「知りませんよ」とかいつてね。

武田 藤尾さんから直接頼まれたのですか。

夏目 頼まれた。

伊藤 議論の筋合いは先生がお考えになつたのですか、それとも。

夏目 いろいろ党の会議に呼ばれるでしょう。大綱見直しがどうだこうだ、防衛庁の意見はどうだとかといわれるでしょう。そのときに意見をいいますね。あんまりとんでもないことはいえないけれども、多少その場の空気に合わせてものをいいます。結局は、議論はしても、作文能力というのには議員さんは不得手ですよ。秘書にやらせればいはいけれども、秘書にはそんな人はいないとなると、結局、役所に来るのですよね。

伊藤 そういう仕事というのは役所で堂々とできないのですか。

夏目 しませんね。だって、防衛局にいったら怒られちゃう(笑)。

佐道 そうでしょうねえ、防衛局でいろいろやつているのを官房

長が(笑)。

夏目 同じ身内のやつが批判していたら怒られちゃうからね。

伊藤 ではやはり、在宅でやるわけですか。

夏目 いや、何をやってるかわからないから役所でやりますけれども、あんまり上司に報告した記憶はありませんな。

伊藤 報告はしないでしょね、いくらなんでも。

佐道 藤尾さんは防衛庁長官とかのご経歴はないと思うのですけれども、国防族として前から。

夏目 うん、前から。しかも、非常に押し強い方ですから、あの人がバツというと、なかなか反対しにくい雰囲気がある人でした。なかなかごつい人ですからね。

伊藤 藤尾さんのところになんかあるかもね。

佐道 そうですね。

夏目 もうみんな死んじゃったんです。田中六助さんも死んじゃったし。

伊藤 そのほうがいいんですよ。

夏目 三原さんも死んじゃったし、藤尾さんも死んじゃったしね。

伊藤 遺族のところにはアプローチするのがいちばん楽です。

夏目 あの人はずちへ何かを持っていく人ではないと思う。

伊藤 そうですかね。

■日本有事・極東有事

中島 大綱見直し論なのですが、見直しのポイントは、基盤的防衛力構想とアイデアのほうに向けられていたのか、それとも別表、そういう量的なところに向けられていたのか、いずれだったのでしょうか。

夏目 量なんかわからないから、問題はアイデアですよ。脅威対象ではないといいながら、ソ連の軍事力が極東にずっと向けられてきたら、やはりそういうものも考えざるを得ないじゃないかという。まあ、あたりまえと云ったらあたりまえですよ。自分たちだけで、「ソ連は日本に攻めてくる可能性はない」なんていつたって、アメリカがあるという相当圧力になりますからね。アメリカは大綱は時代おくれだとかと批判はするけれども、「こうしろ、ああしろ」とかまでは内政干渉になるからなかなかいいわ。だからアメリカ側は量でいくんですよ。量というか、防衛力の内容で来るわけですよ。

伊藤 やはりこのときの極東有事の最大のあれは朝鮮半島ですか。

夏目 朝鮮半島でしょうね。

伊藤 さて、米側の要請を受けてから先生が引き継がれるまでのあいだ、防衛庁は本当に何もやらなかったのですか。

夏目 防衛庁としてはどうしようもないですよ。大綱とそんなに違っているものを、財政的にもとにかくそんなにとれないし、まして内閣の方針をこちらのほうに向けるといえることは不可能ですからね。ようやく与野党の間の議論がかみ合ってきたという段階で、これでまたガラッと変えて、また脅威対象論でとつもなく大きな量の防衛力を考えるなんていうことはなかなかいいですからね。だからやはりそういう議論にはなりにくかったし、防衛庁もちよつと手に余ったということが実情ではないかと思うのです。私は当時防衛庁のなかでどういうふうな苦労をしたかというのには正直いってあまり知らないのですけれども。

伊藤 防衛庁はそうかもしれませんが、外務省なんかはどうだったのでしょうかね。日米関係が具合悪くなったら本当に困るわけですよ。

夏目 外務省だって、とてもそんなアメリカのいうとおりのものでできるとは思っていないから、「弱ったな」という程度じゃないですか。

伊藤 やはり、「弱ったな」という程度ですか。

夏目 正直いって、そのへんで具体的な形としてどういうことをしたかということは、私はあまりタッチしていません。ないのではないかと思えます。頭を痛めていただけじゃないのかな。

伊藤 しかし、アメリカ側がそれだけある意味では理路整然と。

夏目 理路整然というか、アメリカのいつているのは要するに、自分たちに何かあったときに自分たちのウィークポイントはどこにあるかということを考えて、「自分たちの足らざるものをおまえやれ」ということの一語に尽きるんです。役割分担なんですよ。いまいったようにシーレーンだとか洋上防空だとか、みんな第七艦隊のためだと思えば話が非常にはつきりわかるのですよ。

伊藤 だけど、それを日本も分担しないわけにはいかんのですよ。実際問題は。

夏目 その結果、そういう方向に向けた整備になるのですよね。その後の傾向を見ると、やはり日本もシーレーン防衛能力というものに優先順位を持ってきています。だから、方向としては少しずつこちらへ持ってきている。ただ、量的なものは別ですけども。アメリカだって内心は、いったことを全部やってくれるとは思っていないのだと思います。弾だって、何十日分、例えば三ヵ月分とかという膨大な弾薬庫が必要なんです。こんなものが簡単にできるはずがないのです。

伊藤 弾薬だって、置いておけば劣化するわけでしょう。

夏目 もちろんしますよ、ものよってね。彼らの考えは、そういうものがあればいちいち向こうから持つてこなくても日本で積み込みできる。要するにインターオペラビリティの世界ですからね。共通ですから、鉄砲の弾にしたって何にしたって、NATO弾という規格統一されたものを使えばいいわけですから、そういう意味ではアメリカにとつては非常に有意義なのでしょう。

伊藤 日本がそれに対して何も反応しなかったら、アメリカだって相当苛立つことになるわけですね。

夏目 だからガイドラインも、「日本有事なんていうのは後回しでいいから、そちらを先にやろう」ということを採算にわたっていつていました。だけど日本としては、日本の自衛隊がかむ以上、日本有事を差し置いて極東有事が大事だとやるわけにはいかないですね。

伊藤 日本有事というのは具体的にどのような例があるのですか。

夏目 日本に直接侵攻があったと。

伊藤 どこから来るのですか。

夏目 それはソ連です。

伊藤 ソ連からですか。

夏目 要するに、対日侵攻能力があるのはソ連しかないのですから。それは全然ないといったら、日本の自衛隊の存立基盤が(笑)。

朝鮮にしたって、中国にしたって、当時は侵攻能力はないですから、ソ連だけで。しかし、ソ連だって海を越えて侵攻するというのは相当な能力が必要なので、空母を持つてきたからいい、爆撃機を配置したからいいというものではないのですけれども。しかし、ソ連しか考えられない。だからアメリカが、「確率の高いところからやるべきではないじゃないか」というのは、理屈としてはわかります。そういうギャップはありました。

伊藤 有事立法もそれと絡んでくるわけですね。

夏目 うーん、まあ、有事立法というか、絡んできますよね。伊藤 実際に日本有事でも極東有事でもとにかくあれば、動けないじゃないですか。

夏目 だから、この大村(襄治)さんのどこかに書いてあるのというのは、ちょっと前後しちゃうのだけれども、大村さんがこういうことをいったという記憶は私は正直いつてないのですけれども、いまいったように、有事立法というのは日本の国内法でどうのこうのと、直接侵略をやったときに陣地ができないとかいっばいありますね。そういうものではなくて、朝鮮で何かあったときにアメリカに対していろいろな支援をする必要があるだろう。そういうことの法令整備のほうが先じゃないか。要するに、対米協力のための法令整備が必要じゃないかというような意味で、例えば弾薬の補給だとか何だとか、そういうことをいわれたのではないかなと推測がされる。当時の雰囲気から見ればそれはあると思うんですよ。だけど、そんなことをいった……。新聞に出ているのだからいつているのかもしれないけれども、少なくともあんまり私の記憶にはない。だから、見送りではなくて、こちらが優先だと、アメリカの要望を聞きながら何かそういう雰囲気のことを言われたのではないかと思います。

伊藤 その前の段階の大村―ワインバーガー会談のこれは。

夏目 多分、そういうところの続きではないかと思えます。極東

有事の連携を進めるといふ。

伊藤 実際に進めたのですか。

夏目 極東有事のことは主として外務省がやることになったんですよ。だって、内容は外務省所管の分が多いのですものね。事前協議だとか何だとかそういう問題が絡んでくるし。だから、主としてそれは外務省と。第五条関係は防衛庁がやる。そちらのほうは多少進んだけれども、第六条関係、こちらはほとんど進まなかったのです。こうやって項目で分けられると仕分けしてしゃべらなきゃいかんけれども、これはみんな関連しているのですよ。

二番に「大村長官も、園田（直）外相も、宮沢官房長官も、米軍の要求は過大として否定的な意見を述べていますが」と書いてあるけれども、否定的な意見を述べるだけで、べつにそれでどうこうするというのはなかったのでしょうか。だからアメリカが出てきたというのとはわかるのではないですか。結局そういうことが三番のような問題に変わってくるのではないのでしょうか。

伊藤 これは実現していくわけですよ。

夏目 実現していくんです。ハワイ協議も、「日本側のホストネーションとしての役割に感謝する」ということはいつの会でもいっていますからね。

伊藤 できることがそれくらいのことだということでしょうか。

夏目 そうだったのでしょうかね、結局は。だから、その後、いわゆる思いやりの中身が膨れてくるのです。アメリカも日本の国内事情というのを十分わかっていますから、いったことを全部やるなんて思っていないでしょうけれども、ただ、日本は外圧に弱い国だということは知っているから、いうだけいわんといかんと。それと、もう一つ大きなこととか忘れてはいけないのは、当時はアメリカも、財政も厳しい、失業率は二桁になったとか、インバランスがあったとか、非常に苦しい時期なんです。そういうときに日本に対する防衛要求といふのはなかなか通らないけれ

どもやたらいつてくるといふのは、国防省としてはそういうほかのいろいろな問題と防衛問題とリンクさせないといふ意味では好意的な考えが背景にあるんです。そういうことで議会その他に対して説得しているのです。ところが、そのためには日本に對していふことはいつておかないと彼らとしてもやはりエクスキューズにならないから、いつてくるという側面もあった。当時のアメリカと国防省といふのは、防衛だけに限ると非常に理解がある。あるけれども、「そういう苦衷も察してくれよ」ということを言外に匂わせていました。

伊藤 アメリカと日本の関係で、防衛関係者とか外交領袖とかといふことのほかに、政治家のやりとりといふのもあったのではないかといふ気がしますが、どうなのでしょう。

夏目 それは防衛問題ではあまりないと思います。ただ、ほかの問題ではいろいろあったと思います。ちょうど昔、「糸と縄（沖繩）の取引」のような、それに似た問題といふのはいつもあるのですよ。多分、このときも貿易のアンバランスか何かの問題になった時期でしょう。だから、そういうことはせめて防衛でいふことを考える人もいただろうし。

伊藤 要するに武器を買えと。

夏目 まだ武器といふことではないのだけれども、要するに全般的な貿易ですよ。

伊藤 まあ、そうですね。だけど、武器って大きいじゃないですか。

夏目 そういう背景はあったかもしれませんが、いま船に乗っているミサイルは何だつけ？ すぐに忘れちゃう。

佐道 イージス艦の。

夏目 ああいうものを買えとか、OTH（超水平線レーダー）が必要だとか、何だとかかんだとかいつてきたのは、それは国内防衛産業への配慮もあるかもしれませんが。

佐道 カーター政権からレーガン政権にかわって、国防省の人事

もずいぶん大幅に入れ替わっているわけですから、防衛庁と国防省との間の連絡というのはこの時期かなり密ですか。

夏目 そう思いますよ。レーガンになってからはね。

伊藤 その前とやはり変わったということですか。

夏目 変わりましたし、要するに人間関係が違ってしまいました。非常に日本に対する理解のある人、あるいは日本に対して多少面識というのかな。

伊藤 人脈もあると。

夏目 理解のある人が来たということが大きいと思います。

伊藤 国防省にですか。

夏目 うん。

佐道 国内のほうはどのようなでしょう。先ほど、極東有事の研究については外務省のほうの主として進めるといってお話だったのですけれども、日本として出るときには、先ほどの日米安保事務レベル協議でも外務省と防衛庁と出るわけですね。国内のほうは防衛庁がやって、極東有事のほうは外務省とはいえ、かなりいろいろ重なる問題も出て記載することもあると思うのですけれども、外務省と防衛庁の連絡というのは当時どうだったのでしょうか。

夏目 そういう有事法制みたいなもの？

佐道 ええ。

夏目 有事法制については、まず第一にガイドラインの問題については、ガイドラインの六条自体は外務省が考えるということ、そこから進展はあまりなかったと思います。防衛庁とすり合わせをするようなところまでの進展はなかったと思います。有事法制については、防衛庁は各省と調整を始めていました。けれども、各省はまだそんなことを本気で考えるような下地は当時なかったですから、問題といわれればそうだけど、それは緊急の問題として取り上げるようなところへいっていかない。ようやく最近ではないじゃないですか。小泉内閣になってからでしょう。だから、

忙しいときに真剣に話をするような雰囲気ではなかったですね。

伊藤 やはりあれはテポドン一発のおかけですよ。

夏目 そういうことがないとだめなのかな。

伊藤 おかげさまで、あれが。

佐道 内閣全体の雰囲気もやはりそういう。

夏目 そうだと思います。まだ中曽根内閣になる前ですね。中曽根さんになったからって、有事法制がうんと進むわけではないですね。中曽根内閣というのはポーンと打ち上げるのがすきですから、地味に有事法制なんてやるのはあんまり興味ではないのではないですか。

伊藤 これは地味ですか。

夏目 少なくとも即効性はないでしょうね。やはり、アメリカへ行つてどうのこうのぶち上げるにはちよつと地味でしょうね。

■ 武器輸出三原則

伊藤 だいたいそういうお話で先へ進んでいただいているのが。武器輸出三原則の撤廃の問題ですけれども、これは八一年の話か。日米装備技術提携協議と、これまたちよつといままで出てきていない話だろうな。

夏目 技術提携というのは、これもハワイ協議でそういう話が出たのですけれども、アメリカは日本にどんな武器を供与しているし、武器技術も開放している。日本は、武器輸出三原則の関係で、何もギブするものはない。しかし、物は三原則にひつかかるかもしれないけれども、技術はいいのではないかと。特に汎用技術なんかの問題はもうちよつとオープンにしてもいいのではないか。ほかの国に対してはともかく、アメリカに対してはもつと特別待遇をしてしかるべきではないか。そうではないと……というのも、これも向こうの国内産業の要請が背景にあったからなのですけれども、そういうことを非常に急に言い出しました。武器技

術の供与ということが大きなテーマになってくるのです。そこで、この装備何とか協議というのがこのあと毎年開かれる。東京とワシントンで交互に開かれて。

伊藤 どういう人たちが出るのですか。

夏目 これはうちの装備局長と、国防省は装備担当か調達担当みたいな副長官だか次官だかが出るんです。だけど、国会はまったく興味も知識もないから全然知らないですね。知らないというか、結果は聞くけれども、「まあ、適当にやっておけ」ということで、あまり関心はなかった。

伊藤 本心に技術者が出るわけですか。そうでもないのですか。

夏目 主として技術者、装備局とか、技術研究本部とか、通産省の人も多分、航空機武器課というのかな、あのへんの人が行っていたのではないかと思います。

伊藤 ある程度汎用技術になってくると、通産もかかわってくるようになりますよね。

佐道 装備局の通産の。

夏目 装備局長は通産省の人ですから、その人がシャッポでした。

佐道 そうすると、できるだけガードしておきたいという形になるわけでしょうか。

夏目 うーん、俺はあんまり知らないなあ。

伊藤 ここにも「FSXの問題ともかかわる」と書いてあります。これは確かにそうですね。

夏目 それはまだ先の話でしょう。

伊藤 先の話になりますけれども、技術が向こうからこちらに流れる、あるいはこちらから向こうに流れる、双方に。

夏目 そのようにしたはずですよ。

佐道 中曽根内閣ですね。

夏目 中曽根さんになって、国会でも再三議論して、技術を提供することになったはずですよ。日米同盟関係でやらないのはおかし

いじゃないかという議論になって、多分、やったと思います。向こうが申し出た技術をこちらが出してもいいという技術をすり合わせなんかしていたから、そういうことはあったのだろうと思えますけれども、私は聞いてもわからないから。こんなもの、法学士や経済学士は何をいつているのかわからないですからね。

伊藤 全然用語がわからなかったりして（笑）。

佐道 あとのFSXのような非常に大きな問題になれば。

夏目 それは問題になってくるのですよ。だけれども、正直いってそのころはリーダーの何とか能力とかわからないようなことをいつても、人間というのは理解できないと……。

中島 大村長官の回顧録を読みましたら、アメリカはステインガーですとかセラミックコーティングに関する日本側の技術に関心を示したと、そんなことをおっしゃっているのですけれども。

夏目 そうかもしれないね。

伊藤 じゃあやはり、この段階になると日本側が提供するような技術もあつたということですね。

夏目 確かにそれはあつたんです。リーダー技術とか、一部日本のきわめてすぐれた技術があつたと思います。そういうものを出してくれと。それも本当に必要なだけよく考えれば、一種の象徴として、日米関係というのは片務ではない。双務的な両面通行なんだということをアメリカの国民に対するPR手段としても意味があつたのかもしれないし、どの程度の真剣な要望だったのかというのには私も知りませんが、とにかく一つずつずつつぶしてかかって、外堀を埋めるように、手を変え、品を変えてねちねちとくる感じですよ。

佐道 非常に戦略的にいろいろと。

夏目 そう思います。やはりアメリカというのはそこらへんはね。日本はそういう外交というのはへたですね。長期的に見た総合戦略を敷くというのにはどうも不得手な感じがします。敵のほうか

一枚上かなという感じがする 때가多かったから。

伊藤 それはアメリカだけではないと思いますよね。日本がへたなのですね。

夏目 そうかもしれませんね。

伊藤 国家戦略といつても、国家目標がはっきりしないと戦略もくそもあつたものでは。

夏目 日本が弱いのは、防衛というのは外交の分野にまで範囲を広げることができないし、装備とか武器関係のほうへも余り手を出せない。がんじがらめで交渉しますでしょう。だから非常に切歯扼腕するような気持ちというのは絶えずあるのですね。不自由な感じがする。一步踏み出すと、「防衛は出すぎた」とか叱られるような雰囲気があるし、それでまた、防衛が出過ぎるとマスコミのいい餌になるからね。そういう感じは絶えずしていました。アメリカなんていうのは本当に、国防省なんていうのはほかの省庁に関係なく、いたいことをいうでしょう。ああいう立場だと非常に楽しいだろうと思うのですね。

佐道 国防長官のステータスはすごく高いですからね。

夏目 高いです。

佐道 日本の防衛庁長官の比ではない。

夏目 全然違いますね。

伊藤 やはり、「国務」「国防」というのですからね。

夏目 あれは軍国主義ですよ。

伊藤 いや、軍国主義ではない国家なんてないですよ（笑）。

夏目 アメリカというのはデモクラシーの国みたいだけれどもね。軍国主義ではないのは日本だけです。

■ 伊藤防衛庁長官

伊藤 さつき伊藤さんの話が出まして、これは八一年十一月に内閣改造で防衛庁長官になられますね。そのときに、さつきお話が

出ましたように、「男子の本懐だ」といって話題になりましたけれども、伊藤さんは何が「男子の本懐」だったのでしょうか。

夏目 いや、防衛庁長官。

伊藤 ほかの長官ではなくて防衛庁長官だからだったのでしょか。

夏目 それはわからないけれどもね。まあしかし、ほかの大臣だったら「男子の本懐」というのはびんと来ない感じがするけれども、彼は、陸海軍の大將になったから「男子の本懐」だと思つたのでしょうか。

伊藤 やはりなりたかつたのかな。

佐道 初めての国務長官。

伊藤 どちらをいつているのか、よくわからないんだよ。

夏目 防衛庁長官というのは、なるまではいやだという人がずいぶんいるんですよ。「たまらないな。足かせや苦勞ばかりが多い割には選挙の票にはならないし」と思うのだけれども、就任されて、あの広場で栄誉礼をやられると、精神も高揚しちゃつて。

佐道 アハハハハ、いっぺんでファンになる（笑）。

夏目 それで「男子の本懐」になっちゃう（笑）。それはみんなそうですよ。そういう冷やかしは別にしても、来ると本当にいい思いをして去られます。自衛隊に対していい理解者になる人が多いです。

佐道 伊藤さん自身を前からご存じですか。

夏目 いや、知りません。

伊藤 この人は何なんだ。

夏目 新聞記者です。読売新聞。

武田 これは河野一郎の秘書ですよ。

伊藤 だけど、何が専門なのだろうな。

佐道 「東北のケネディ」とかいわれましたけど、何が……。

夏目 それは自分でもいうから。人のことを、「夏目さん、夏目

さん」というんだよね。「夏目さん、俺ね、東北のケネディといわれてるんだよ」と。

佐道 何がケネディなのかよくわからないのですけれども(笑)。

夏目 大臣として、あのくらい気安く話しかできて、冗談がいえて、一緒に酒を飲んでいて楽しい大臣はほかにいなかった。大村さんと大違いだから。

佐道 固い大村さんと。

夏目 大村さんは修身の教科書を読みながら酒を飲んでいるみたいでうまくもなんともないけど、伊藤さんと飲むと、女性がいれば肩へ手をかけるしね、本当に楽しい人ですよ。そんなことを書いていちゃいかんよ(笑)。

佐道 長官としてはどうですか。ものわかりがよろしい？ ちよつとご苦労されたこともありますけれども。

夏目 確かに脇が甘いところはあるんですよ。だけど、非常にいうことを聞いてくれるし、素直ですからね。自分でもって、「あだ、こうだ」といわないから、部下が懐くのですね。仕えやすいといえば仕えやすい。親近感を感じさせるしね。唯一怒った記憶があるのは、私がお供をして東北・北海道へ出張したときに、某駐屯地で大臣の歓迎会をやるときにホテルでフランス料理をやったの。そのときは怒ったね。

佐道 米がないと(笑)。

夏目 ワインか何かで、米がなくて。俺も困ったけどね。だから、「あんたがた、事前調査が悪いよ」なんていって。

佐道 自衛隊ともあるうものが情報不足(笑)。

夏目 大臣は何が嫌いかくらい調べておけよといつて。「俺は帰るぞ」というようなことを言い出しましてね。

佐道 それもまた徹底していますね。

夏目 それはまあ、怒ったというか、本当に腹が立ったのでしょう(笑)。あんまりうまいものがないと。

佐道 それも食べればおいしかったのかもしれないですけどもね(笑)。

夏目 そのくらいで、本当にいい人でしたよ。人柄はいいし。

伊藤 しかし、この人も衆議院議長まで行って、特にこの人が何をやったかという点、あまり記憶に残らないですね。党内で勢力があったとも思えないし。

夏目 私は防衛局長になったところにこの人とアメリカも一緒に行ったしね。非常に楽しい人でした。

佐道 防衛庁長官時代の記憶を本にされたりしてましたけれども、一所懸命やったという。

夏目 ある意味では国会でいちばんしんどい時期でしたから、それは一所懸命やったでしょうね。伊藤さんという方はそういう人だから、野党からいうといじめやすいタイプなんです。あんまり細かいことを勉強する人でもないしね。だけれども、我々から見ると非常に親近感を持てる大臣でした。

伊藤 でも、そうやって隙があればハラハラさせられるという部分もあるでしょう。

夏目 ハラハラはしますよ、年じゅう(笑)。

伊藤 年じゅう(笑)。

佐道 国会が始まってからは大変だったのですね。

夏目 そういうときは、「ここまで答えたら、あとはもう政府委員に振ってくれ」といって、政府委員に答えさせるように。大臣によっては、役所もそういう振り付けをしますよね。ただ、相手はなるべく大臣に答えさせようとはしますから、政府委員が立つていくと、「おまえに聞いていない」とか、「大臣答えろ」とかいうけれども、そんなこといわれても、手を挙げれば委員長が指名しますから、指名されたら堂々と答えていけばいいんですよ。それで通るのでですけども、気が小さい政府委員だと、「おまえは引つ込め」なんていわれると出にくくなっちゃうんですね。そうす

ると大臣が困るんです。だから国会というのは、そういうときは無理しても出て行かなくてはいけない。

伊藤 伊藤さんは、答弁なんかは上手だったのですか。

夏目 答弁？ どうつてことないですけども、あんまり後々まで尾を引くようなことはなかったんじゃないでしょうか。官房長のときにストップしたのは伊藤さんのときかな、どちらか覚えがないけれども。

佐道 基本的に役所の方が書かれたものを読まれるような。

伊藤 予想しない質問だったのでしよう。

夏目 そういうものは政府委員がじょうずに引き取らないといけないのですね。

佐道 先生の現役時代ではないですけども、いまは政府委員制が廃止になったわけですが、ああいうのというのは相当防衛庁なんかに影響を。

夏目 いいことじゃないですか、政治家が勉強して。ただし、局長以下に緊張感がなくなってきましたね。国会へ出てもしやべる場がないでしょう。呼ばれないこともあるしね。原則大臣ですからね。だから大臣はちよつとしんどいかもしらんけれども。

伊藤 準備をさせるのが大変ですよ。

夏目 前の日に質問が入ると、とにかくその質問に対してそれぞれの部局で答弁を書いて、それを、物によっては外務省、大蔵省、法制局とすり合わせするんです。それが出来上がると、早くても夜十時とか、おそれれば明け方になる。朝、ようやく陽が上がるようになるころに答弁資料のこんな(厚い)のが出来上がるのです。それを大臣や局長のところへ届けるのです。うちなんかも、朝五時か六時ごろ、牛乳配達と同じような時間にポソツと郵便受けの音がするんです。防衛庁の部員が持ってきて、入れていくんです。それが毎日ですよ。だから、役人は気楽だというけれども、ポストによっては毎日徹夜みたいなもの。

伊藤 官房長はどうなのですか。

夏目 官房長はあんまり答弁の場がないからね。あるけれども、ほんのわずかでしよう。

伊藤 答弁材料をつくったりなんかのときは付き合わないのですか。

夏目 ある程度付き合うけれども、そんな朝まで付き合っていないしね。質問はもつと早く入るんです。夜の七時とか、おそくても八時くらいには入るかな。局長も、質問が入ったらそれを見て、「あ、これはこんなものだな」とわかれば、自分で心の準備ができますから帰ってしまいます。あとは大臣ですよ。物を見るまでは(笑)。ほかの局長はそれぞれ主管の専門の部局でやっているから、質問を見れば、そんなずつとはいらないですよ。ときどきそんな人もいたけれども。

伊藤 あと、それを文章化して何部かつくるのは部員がやるのですか。

夏目 部員がやります。課長くらいまではある程度おそくまで残って見ているでしょうね。私の記憶では部員でした。私のときは島田さんという局長がいて、できるまで帰らないだよ。ところが、できたって各省調整なんかがあるから、こちらも時間が空きますから酒を飲んだりしますでしょう。そうすると、「酒を飲んでいないで、早く書いてくれよ」とかいつて何回かいわれたこともあったけど、まあ、だいたい帰っちゃいます。多分、朝、自宅で食事をしながらパツと見るのでしよう。委員会が十時だとすると、八時とか九時から勉強会というか答弁打合せ。

伊藤 勉強会をやるのですか。

夏目 大臣の前でね。ややこしいのがあると、「大臣はここまでにしてください。あとは我々が引き受けます」とか、「ここは大事を質問ですから大臣が答えてください」とか、そういうこともやるのです。

伊藤 あるバカな大臣が、「これは重要な問題ですから政府委員に答弁させます」と。

夏目 ああ、それは久保田円次さん。

佐道 そういう振り付けがきちんと理解できる人じゃないと困りますね。

夏目 そう。そういう人も何人かいましたけれどもね。最近はそのような人はいないと思えますが。

伊藤 基本的にはだれが振り付けるのですか。

夏目 その場でもって、官房長なり、局長なり、「この先は私が引き受けます」と。ここは変えたほうがいいとか、もちろん手直しもあります。部員が書いているから、全部そのままというわけにはいかないから、「こここのところは言わないでおこう」とか、「ここはもうちょっと詳しく言ったほうがいいのではないか」とか、そういうのは多少あります。まあ、要は大臣の勉強会で、ほかの人は今さら勉強なんか。僕らなんかは、みんな破つてくずかごに捨てた。あんなの重くてしょうがないからね。こんなに（たくさん）あると、どの質問がどこにあるかわからない。

伊藤 大臣はそういうのはどうするのですか。

夏目 大臣の答えるようなやつだけをピックアップして、なるべく量を少なくして。それから、秘書官に気の利いたやつがいれば、これが来たらパッと大臣に手渡す。それができないような秘書官は、「おまえはだめだ」という感じ。しんどいですよ。大臣は決して自分の責任にしないからね。チョンボすれば、「おまえらが悪い」とかなるからね。

伊藤 伊藤さんは威張らないとおっしゃいましたけれども、やはり政治家というのは威張る人のほうが圧倒的に多いわけですか。

夏目 圧倒的でもないけれども、やはり威張る人もいますね。

伊藤（威張る人）もいる、くらいですか。

夏目 どうかな、割合まで計算したことはないけど。まあ、私

なんか官房長、局長になって仕えた大臣にはそういう人はあまりいませんでした。多分、中曽根さんとか、山中貞則とか、そのころは威張っていたと思いますよ。威張るといふより、怒るんですよ。

伊藤 威張るといふのは、実力がないのに格好をつけるから。

夏目 それはそういう人もいますよ。なめられてはいけないと思つて、やたら居丈高になる人もいますし、チクチク細かいことばかりいう人もいますし、人さまざまですよね。だから、役人にとつては大臣がだれになるかというのは非常に神経を使います。

佐道 最近、小泉内閣になってからは違いますか、防衛庁はとにかく長官がコロコロかわりますよね。

夏目 よくかわりました。

佐道 平均して七ヵ月か八ヵ月という。

夏目 いまは知りませんが、私のところで十ヵ月というのが平均でした。伊藤さんなんていうのもアメリカへ行つて国防長官と話しているときに、いろいろな話をしてのだけれどもその中で、「とにかく防衛庁長官というのは十ヵ月ごとにかわりますから」といったから、私はすぐ通訳に、「いまの通訳やめ」といつて（笑）。びつくりしちゃうから。まあ、知ってはいるでしょうけれども、面と向かつていわれるとエツと思うような。向こうにすれば考えられないですからね。

伊藤 今度の小泉内閣は継続性があつていいですね。

夏目 おもしろくないね。

伊藤 おもしろくない？

夏目 新味がないじゃない。新しい人がどんどん出て、聞いたことがないなというのがいっぱいいて、ああ、こちらが古くなったんだなと思うと同時に或る種の期待感もあつて。

■日米防衛首脳定期協議、フォーランド紛争

伊藤 日米防衛首脳定期協議の話をしてください。

佐道 八二年の三月ですね。これはまだ先生が防衛局長になられる前ではありますが、ワインバーガーさんがいらっしやって定期首脳会議を行なつて、シーレーン防衛をもっと具体化。ずっと去年からの話の引き続きということですね。

夏目 そうでしようね。この「一二%増の必要性」というのは知らないけれども。そんなのがあったのかな。

佐道 では、この時期で特段ということではなくて。

夏目 もう年じゅういわれていることでしたから。多分、「その前の年に言ったような、ああいうことをやってくれるんだろうな」という式の念押しみたいなことは年じゅういつていたと思います。新聞も正確とは限らないからね。

佐道 そうですね。

夏目 一二%なんていうのはあまり記憶にないね。

伊藤 まあ、「一二%」といわれたら記憶があるでしょうからね。

夏目 あの時期に一二%なんて考えられない。

伊藤 もう先へ行きましょう。フォークランド紛争の話、これはどういうふうに見ておられたのかな。イギリスの軍艦がバーンと撃沈されたりして、海戦というのは久しぶりに。

夏目 イギリスの船というのは、私もあまり詳しい記憶もないけれども、多分、船自体はしっかりできていますけれども、内装が燃えやすいですね。内装というだけだと、壁とか、什器とか、それがイギリスの軍艦の被害を大きくした原因だったというのには記憶にあります。それから中も不燃性の物にするというような動きがあったという記憶があります。胴ガラは丈夫なんですけど、中に入った火に対して非常に弱いという。あと、自民党の部会でフォークランドの教訓みたいなことを何回か聞いていた記憶があるのだけれども。

伊藤 「聞いていた」というのは、だれかがしゃべったわけですか。夏目 いや、国会議員が防衛庁に対して質問したのは記憶にある

のだけれども、どんな議論をしていたか、どんな話をしていたかというのはいま。

伊藤 それはだれが答弁することになるのですか。

夏目 それも覚えがないね。多分、防衛局長だったんじゃないかな。

佐道 イギリスにも防衛駐在官が出ていますよ。

夏目 いますよ。

佐道 その人から。

夏目 多分そういう情報は入っていたと思います。

伊藤 やはり、これははるかかなたの話であつて、日本の有事とあまり関連性がないですからね。

夏目 緊迫感みたいなものを持って聞いたという記憶はまったくないです。

伊藤 はるかかなたの絵空事みたいな感じで。

夏目 ただ、いまの船とかの中身についてだけは記憶がある程度で、ほかはないですね。

佐道 海上自衛隊とかそういうのが関心を持つとか。

夏目 あつたかもしれないですね。あたりまえのことだったのかもしれない。当時は日本の船もそうだったのかもしれないし、あるいはイギリスの船はおくれていたのかもしれないし、ちよつとよくわかりませんが、いま日本の自衛艦に乗ったら、燃えるものなんかほとんどないものね。

伊藤 こういふときには観戦武官を出すのですか。

夏目 いや、出ていません。イギリスにいる武官は海上自衛官だから、多分そういうところから情報が出ていたくらいじゃないですか。

伊藤 昔だったら、戦争があれば観戦武官が行きますね。

夏目 こういふときこそ行つていけばいいんだよね。前にも中東戦争のときにも、イスラエルのミサイル艇で船が沈められたことがあつたね。あれが原因になつて、中曽根さんは、「ミサイル艇

をつくれ」みたいな話になって出てくるのですけれども。

■防衛局長に就任

伊藤 さて、いよいよ今度は大事な防衛局長の就任というところに入ってきますが。官房長から防衛局長へというのは一つのコースではあるんですね。前もあつたわけですし。

夏目 うん、まあ、そうですね。

伊藤 そうなるんじゃないかとは思っておられたわけですか。

夏目 いや、そんなこと思っていないですよ。だれかわからないですからね、人事なんていうのは。

伊藤 官房長くらいでもわからないですか。近辺でいろいろやっているわけでしょう。

夏目 ちょうどいなかつたのでしよう。まあ確かに、私はほかの局長をみんなやっちゃったからね。残っているポストがなかったから、防衛局長にということじゃないですか。

佐道 そんなもんじゃないんじゃないですか(笑)。

伊藤 いまのはうまい説明ですね(笑)。

夏目 教育参事官で教育局長でしよう。で、人事局長、官房長でしよう。だからもう、やるところがないだろうと。

伊藤 やれるところは次官と……。

佐道 あと局長は、防衛局長と次官(笑)。

夏目 就任にあたってというのには、このときは五六中業ができる直前なんです。あと数ヶ月でできるという時期じゃないのかな。五六中業はいつになっていますか。

岡田 七月二十三日に国防会議で。

夏目 じゃあ、約一月後だな。

伊藤 防衛局長の就任は七月一日ですか。

夏目 その前でしょう。

岡田 九日に。

夏目 一月かな。まあ、とにかく出来る直前に防衛局長になったと思うんです。

佐道 五六中業の中見自体は、これはずっとお聞きになっていたわけですか。

夏目 いや、あんまり聞いていないんですよ。私は主管外の仕事に対して興味ないものだから。もう面倒くさいと思っているから。まさかそんな急には思わないから、あんまり聞いてなかったと思うのだけれども、いちばん最初にやったのは五六中業を国防会議、閣議に諮ること。要するに、五三中業というのは防衛庁限りの計画だったのを、鈴木レーガンで話題に取り上げられて政府決定にしようということになって、これが政府決定の最初になる。だから、国防会議に説明をし、幹事会でも説明して、それからあと国会です。人のつくったものだから、全然愛情がないんですよ。

伊藤 愛情ですか(笑)。

夏目 つくるときに参画していると、もうちょっと一所懸命、必死になってこれをよいものとして説明するのだけれども、どうもなんかねえ。という記憶があるんです。まあ、もちろん悪口はいませんよ。

伊藤 でも、あたかも自分がつくったかのように説明しなきゃならんわけでしょう。

夏目 そうしなきゃいけないですから外ではそうしますけれども、内心は、「なんでこんなことを俺がしなきゃいけないんだ」と。

佐道 人のつくったものをつぶしちゃったという人もいらつしやいましたから(笑)。

夏目 私はそんな度胸ない。

一同 アハハハハ(笑)。

夏目 とにかく大変でしたね。中身をまず自分が勉強しなきゃいかん。もう一つここで問題だったのは、五六中業で初めて防衛費が五六中業の最終時期に1%を超える計算になっているんですよ、

たしか。これが国会でつかまりました。「五六中業は、こんなのは単なる一応の目処を計算しただけの参考資料で、なにも1%を超すことを確約しているわけではない。計算するとそうなります。しかし、1%堅持というのはいまの閣議決定であるのだから、その範囲内で努力はするけれども……」とっておいて、一方ではちゃんと超すように数字をつくつてある。これもしんどいよね。

伊藤 しかし、1%というのはそのときのGNPによるわけですから。

夏目 だけど、それにしてもね。GNPももちろん予測ですよ。防衛費も予測だけでも、それを堂々と1%を超すような計画にしておくことが官僚の計画としてあるまじきものであるといわれるのですね。でもまあ、そんな議論をしているうちに五六中業の説明も他愛もなくなつたんです。

伊藤 その1%を超す計画で、全然問題はなかつたのですか。

夏目 「べつに1%を超すとはつきりしているわけではない、一応の計算をするとそうなりますけれども、我々は努力してその枠内でおさめるようにする」みたいなことをいったのではないかと思ふのですけれども。

伊藤 ああ、言い方がじょうずだつたんだらうな、多分。

佐道 それで、実際に超すときに問題に。

夏目 それはまた。

伊藤 それはそのとき、という話だからね。

夏目 そのときはもう中曽根さんになつてゐるのかな。

伊藤 いや、まだですよ。

佐道 まだです。

夏目 まだですか。

佐道 はい。先生が防衛局長になられた年の末に中曽根さんですから。

夏目 まだ半年くらいあつたわけですか。ああ、そうだ、宮沢さ

んが国防会議にいたなあ。「戦車と装甲車と、どう違うんだ」とか聞かれてね。知っていますか。

佐道 戦車と装甲車はずいぶん違う。

伊藤 しかし、どういうふうに説明するの。

夏目 「どう違うか」といわれると、答えにくいよ(笑)。

中島 ええ、そうですね(笑)。

夏目 藪から棒に政治家というのはそういう質問をポンとするから、そういうときにモタモタすると、「なんだコイツ、わかつてねえな」と思われちゃうから、必ずちゃんと答えないかん。

伊藤 それはうまく説明できるのですか。

夏目 だんだん差異が小さくなつて重なつてきますから説明は難しいのですけれども、装甲車というのはもともと輸送車です。トラックに毛が生えて装甲していつて、そこへ武器を積んだというのから発達している。戦車というのはもともと打撃兵器として大砲を備えているわけです。だから、「同じといえば同じですけれども、沿革的に違うので、いまはほとんど似たものに近くなつていなければならない、目的が違うのです」みたいなことをいったんだと思ひます。

伊藤 そういわれれば納得しますよ。

夏目 政治家の質問も突飛ではあるけれども、答えも簡単で、それ以上追求しないからね。そういう意味では、「ちよつといまの説明はおかしいんじゃないか」なんていわれると(笑)。

伊藤 要するに説明すればいいわけですね。

夏目 そうです。

佐道 五六中業を決めるときの国防会議というのは一回ですんだのですか。

夏目 多分、国防会議は一回ですんできていると思ひます。ただ、幹事会とか参事官会議というのは何回かやっていると思ふのですけれども、私が行つたときにはほとんどそういうのはおわつて、幹

事会と国防会議くらいしか残っていないなかったんじゃないかと思
います。

佐道 前の二次防とか三次防とかのときの閣僚懇談会という形で。

夏目 これはなかったような気がする。僕は一回しか説明した記
憶がないから。

伊藤 もうその段階ではだいたい根回しはすべておわっているわ
けですか。

夏目 国会とかそちらの根回しは全然していませんでした。事
務的にはしてあった。大蔵省とかそういうところはすんでいたと
思います。ただ、大臣とか国防会議のメンバーに対する説明とい
うのはしていなかったと思うのですよ。

伊藤 そういふのは事前にある程度説明しているのではないです
か。

夏目 下から上がつていけばあれだけど、しかし、下から上がつ
ていたって……。大蔵省やなんかは下から上がっているのを聞いて
はいるかもしれないけれども、官房長官とか総理なんていうのは
ほかから上がりようがないからね。

佐道 このときは、統幕議長はオブザーバーとかで出られたので
すか。

夏目 統幕議長は会議には出ます。多分そのころからか、その直
前からか、統幕議長が常時陪席するようになったのではないでし
ょうか。

伊藤 先生が防衛局長になってから五六中業で何か問題があった
とか、もめたということはないのですか。

夏目 あんまり相談を受けた記憶がないですよ。だから、人
のつくったものであんまり愛情がわかないというのはそういうこ
とで。しかし、つくったらつくったで、とにかく走らにゃいかん
などというくらいの気持ちだったと思います。

佐道 精一杯ディフェンドしなきゃいけないとか、そういうこと

はなかった。

夏目 うーん、ないですね。

伊藤 じゃあまあ、根回しがやはり進んでいたから。

佐道 このときは、国防会議の事務局長は伊藤圭一さんだったと
思いますけれども。

夏目 かもしれませんね。伊藤さんかなあ。

佐道 じゃあ、国防会議とは比較的円滑に。

夏目 国防会議はそんなに問題なかったと思いますよ。まあ、伊
藤さんだからね。伊藤さんと私はあんまり喧嘩する間柄でもない
し、あの人は私がいうとニコニコして聞いてくれるから、そんな
にもめた記憶もないです。多分、当時の局長が伊藤さんでしょう。

佐道 はい、事務局長が伊藤圭一さんです。

■吉野事務次官

伊藤 じゃあ、防衛局長になられたときに事務次官が同時にかわ
り、大蔵省の吉野（實）さんになると。

夏目 あれは何からなつたの？ 施設庁長官から来たのかな。

佐道 施設庁長官ですね。

夏目 吉野さんという人は若いときに防衛庁の会計課長をやった
りしたことがあるんですよ。それで一旦大蔵省へ戻っておられて、
何年かたつて経理局長で見た。それで施設庁長官になって、次
官になつた。

伊藤 え、そうですか。

佐道 そうです。

伊藤 じゃあ、前から面識はあるのですか。

夏目 この人が会計課長のときに、私は多分教育課長か何かだつ
た。それで、非常によくしてくれました。教育課長というのは、
昔から教育なんていうのはやはり目立つポストでもないし。金回

りも悪いしね。この吉野さんが器用に教育課に予算をつけてくれたりして、一所懸命やってくれたんです。仲がいいんですよ、いまだに。

佐道 あ、そうですか。

伊藤 じゃあ、上がそういうことであれば非常にやりやすかったということもあるんですね。

夏目 やりやすかったです。この方は大蔵省の人のなかでも、大蔵省でどういう評価か知りませんが、風貌からいってちょっと役人離れしていますし、大物ですよ。「些事構うべからず」みたいなところがあつてね。

佐道 経理局長で戻ってこられたときに、将来の次官候補含みだな、みたいな感じでいらつしやつたのでしょうか。

夏目 いや、必ずしもそう見てはいなかった人かと思うんです。というのは、この人は大蔵省のときは造幣局長か何かだった。

伊藤 造幣？

夏目 うん、大阪のお金をつくっているところ。造幣局長というのは、普通は上がりなんです。

伊藤 そうですね、行きどまりのほうですよ。

夏目 そういう人が突然来たものだからね。その前の原(徹)にしても、亘理(彰)にしても、いままでの方はみんな主計局次長とか何かをやっているバリバリの人が来ていたのだけど、ちょっとそういう意味では毛色の変った人だから、必ずしもそういうあれではなかった。ただ、非常に大物だし、政治的な人ですよ。

佐道 政治的な？

夏目 国会の折衝とか、そういうのは好きな人です。

伊藤 好きというか、じょうずであるのですか。

夏目 ま、じょうずでもあつたかもしれないですね。施設庁でもだいたいやってきた方だから。それから、大蔵省のときの人脈があつて、渡辺美智雄とかそういう人たちとも仲がいいから、渡辺美智

雄がその後大蔵大臣になったりするでしょう。そういうときもちょこっと頼みに行ったり、そういうことはなかなかこまめにやってくれた。僕らにないようなそういう素質を持った人でした。細かいことはあんまりタッチしたがらない人でした。俺が毎日国会でいじめられて帰ってくると、碁をやっているんだもの。「人が苦労して帰ってきたのに、なんだ」と文句をいったけど、「どうだった、無事かよ」とかいつて(笑)。一言でいえば大物ですな。僕は、大蔵省のOBを何人か知っていて、そういう人の集まりへ行つたときに、「今度の吉野次官はどうだい」と聞かれたから、「ああ、あのカントリー・ジェントルマンですか」といつたら、大蔵省の人はみんな喜んだねえ。言い得て妙だといつて。要するに大蔵離れしているんですよ。田舎の県会議長にでもしてもいいような。

佐道 そういうタイプですか。ただ、現象的に見ると、大蔵省の次官が三代続いて、しかも、官房長も防衛局長もなさっていない、一年間くらい経理局長をやつて、そのあと施設庁に出られて次官というのは、これだけ防衛問題が重要になっているときにどうも違和感が拭えないのではないかなと。

夏目 まあ、役人の世界ですから、いろいろな意見があつたかもしれないけれども、年次的なものが一つありますね。そう年じゅう年次を飛び越すというのも難しいでしょう。その人によほどバッドマークがつくようなミスでもあつたら別だけど、そういうものも特別ななくて、施設庁長官もちゃんとやつておられて。それから、昔はだいたい次官になるのは防衛局長の経験者というのが通例だったけど、少し前から、「防衛局長か施設庁長官のどちらかをやつていれば」という雰囲気があるとなくてきてきたのですね。だから、亘理さんという二代前の次官も、多分、経理局長と施設庁長官でしょう。官房長はちょっとやつたか。

佐道 官房長はやられました。

夏目 だから、施設庁長官をやっていたらという気持ちがあったと思います。

伊藤 いろいろなタイプの人がいるのでしようけれども、やはり大蔵というのはそういう人材は豊富なのですね。

夏目 人材は豊富です。もちろん個人的に好き嫌いとか、癖とか、そんなのはありますけれども、確かにみんなやっぱり能力的には平均的に高いです。僕が知っている人は本当にみんな優秀でした。この人はそういう秀才タイプとはちょっと違う人なんです。けれどもやはり、なかなかそれなりの人物ですね。

伊藤 先生の前任者は。

夏目 あ、塩田（章）さん。この人は施設庁長官になったかな、違うかな。

伊藤 施設庁長官になったのですけれども、この方はどういうご経歴の。

夏目 これは自治省の人で、これも自治省で優秀な人だったんですよ。最初は審議官か何かで来たのかな。それで官房長になって、防衛局長になって、施設庁長官になられた。年は彼のほうが一つ上かな。彼は陸軍幼年学校、士官学校ですね。陸士の五十九期か。だから、もともと自衛隊向きなんですよ。

佐道 コースから行くと、次官になられてもおかしくない方だったのかなと。

夏目 ただちよつと年次が。原さんという前の人と、原さんが二十三年くらいの人で、塩田さんが二十六年くらいかな。三年か四年か、ちよつと間があったのかな。それできつと吉野さんが間へ入っちゃったのでしよう。

伊藤 やはり年次ということは大変なのですか。

夏目 まあ、大事というか、大事ではないといえど大事ではないのだけれども、ちよつとそれを無視しにくいところがあるのでしようね。

伊藤 それをいわれると、ちよつとどうにもならないという。

夏目 大蔵省と話して、これはなんとなく暗黙裏に、というような話みたいなのが、もちろん正式な話ではないにしても、なんとなくあったのかもしれないし、それはわかりません。

伊藤 そういうのですか。

夏目 あんまり防衛の仕事にそう詳しいというわけではなかったから、そういう意味では非常に僕らも仕事はしやすい感じではありましたが。だって、うるさいことをいわれたらかなわんじやないですか。

伊藤 まあ、それはそうですけれども。

夏目 大臣がうるさくて、次官がうるさいなんていったら、やる気ないものね（笑）。

佐道 ハハハハハ、自由にさせてもらえるほうがいいという。

伊藤 うーん、物は考ええ方だなあ（笑）。いや、僕はまったく逆のことを考えていました。

夏目 それは人によりけりでしょうけれども、あんまりうるさいと鬱陶しいですよ。

佐道 次官ですと、国会とかはあんまり出られない。

夏目 国会へは全然行く必要はない。

伊藤 必要はないのですか。

夏目 これは昔からの不文律なんですな。

伊藤 要するに、どこまでいっても留守部隊なのでね。

夏目 大臣の代わりに留守を預かるということなのでしようね。

佐道 国会はもっぱら防衛局長である先生が行かれると。

伊藤 いちばん答弁の数が多いのは、やはり防衛局長になるわけですね。

夏目 防衛庁の答弁の八割、九割は防衛局長ではないですか。各省の政府委員、全政府委員からいっても半分以上あるんです。当時は、ですよ。あとは外務省の北米局長です。いちばんいいのは

大蔵省の主計局長ですよ。予算委員会なんて、ほとんど立たなくてすむんだから。政府委員としてはいちばんいい席に座っているんですよ。だけど、半年に一遍くらい立つか立たないかだね。

伊藤 「予算委員会」という名前にしては変ですね。

夏目 予算審議だから大蔵省が主役、だからいちばんいい席にいるんですよ。だけど、主計局長の答弁なんて、本当にめったにないですよ。大臣はもちろん答えますけれども。予算委員会という名前がおかしいんですよ。

伊藤 総括委員会みたいな感じですからね。

夏目 時代によっては外交・防衛がほとんどでしょう。ほかの問題はみんなそれぞれの委員会へ行っちゃうけど、外交・防衛というのは派手だから、みんな予算委員会でやりたがるんです。新聞にも出るし、張り切つてねえ。テレビのライトなんかつくともう、余計に張り切っちゃつてね。俺もいま着ているけど、派手な編（模様のスーツ）のやくざみたいな格好をして、テレビ映りを狙うんですよ。

佐道 紙を振りかざしながら（笑）。

夏目 政府委員なんていうのは、あんなテレビを見ていたら女房は涙を流す。「なんて情けない」と。

伊藤 「もう少しいいってやりなさい」とか（笑）。

夏目 本当にそういう感じがすると思う。あるいはもう、「見損なつた」なんて（笑）。

佐道 家族に見せられない（笑）。

伊藤 でも、そういう格好をしていなかったら、議員のほうはねえ。

夏目 それはやはり立てないかね。ばかにしてはいかんですからね。中見はばかにしてもいいから、態度はせめて慇懃無礼で。

武田 難しいですね（笑）。

伊藤 やれるから（笑）。長年訓練しないと無理ですね。

夏目 確かにこういう経験してみると、防衛局長、施設庁長官

って大変ですね。まあ、いつでもかわるときはそういう問題が起きますけれどもね。

伊藤 だいたい自治省と大蔵省が多いですね。

夏目 多いですね、最近特に。

伊藤 だけど、防衛庁自体で最初から採って、上に上がってくるという役人はまだいないのですか。

佐道 先生が最初ですよ。まあ、施設庁ということもありますけれども。

伊藤 まあ、それはそうですね。

夏目 当時はまだいなかったんですね。

伊藤 そもそも防衛庁で採用するという。

夏目 防衛庁採用というのは三十年からなんです。まだこのころは局長になるにはちょっと早いくらい。そろそろ参事官くらいになりかけたのかな。

伊藤 そういう人たちはほかの省庁との交流は。

夏目 していますよ。

伊藤 やはりしているのですか。

夏目 警察とか、大蔵省とか、通産省とか、外務省とか、いまは特に多いですよ。

伊藤 それをやらないと、幹部になったときに困りますよね。

夏目 人脈が広がりますね。

伊藤 他省庁との関係がなかったら。

夏目 なるべくこういうふうにして人脈を広げておいたほうが仕事はしやすいですね。私なんかは全然人脈がないのだから。外へ出たことがない。

伊藤 でも、いろいろな形で交流があるのでしょうか。

夏目 ないですね。出向ってないもの。

武田 先ほど、大蔵省の会に呼ばれたとか。

夏目 いや、それはOBの私的な酒を飲むときの席で。「カント

リー・ジェントルマン」でしよう？ それはべつに向こうへ行っているときではなくて、防衛庁にいて。

佐道 でも、国防会議に長いことおられましたね。

夏目 あれはだつて海原の子分みたいなものですから、全然。

佐道 あそこはいろいろな省庁もいらつしやるじゃないですか。

夏目 いろんな省庁といたつて、大蔵省は年じゅう来ていたけど、外務省と通産省とどちらかが来ていただけでしょう。吉野さんの前の原さんなんか、大蔵省の主計官で国防会議の参事官だから知っているのですよね。吉野さんも若いときに国防会議に勤務したことがあるんです。

伊藤 防衛局長になると、ほかの省庁の役人との関係をつくれるということはあまりないですか。

夏目 どういう意味で、ですか。

伊藤 いろいろな形で交流があるというのは。

夏目 交流つて、要するに酒を飲んだりするチャンスはありますよ。いろんな意味ではね。だけどそれだけのことで、二時間も勝手なことをいって別れちゃうだけだから、そこへ出向して勤務したのとは違いますからね。

佐道 日米安保事務レベル協議などで外務省と一緒になることというのは多くなるわけですよ。

夏目 多いですね。

佐道 他省庁ということでしょう、必然的に外務省との関係が。

夏目 外務省と大蔵省がいちばん多くなりますね。ほかの省はほとんど関係ないです。ここで一ついっておきたいのは、皆さんはどういう学校を出ているのか知らんけれども、役所というのは本当に、いまでもそうだと思うけれども、東大でないんだめだということ。だめというのは、能力的にだめという意味ではないんですよ。人脈というのはやはり、東大の先輩・後輩・同級生というのがあるのですね。それはほかの大学だとそんなにないんです。

まして私大なんかを出て幹部になつても一人も知っているのがない。私大なんかそういう仲間がいないんです。

伊藤 東大だつてそんなに……。

夏目 私なんて「やあ」「やあ」というような、学生時代に顔を見たとか、同じクラブにいたとか、そんな人はいないもの。ところが、東大出身者はそういうのがいっぱいいるから、「おい、おまえ」で話ができる。そういう雰囲気があるから、それだけでも非常に仕事しやすいんです。まして大蔵省なんていうのは、「ナンバースクールでない」と人の子ではない「みたいな」。「俺が一高のとき」とか、「三高のとき」とか。松本なんて、「どこにあるの、それ」なんて。

伊藤 まさかねえ(笑)。

夏目 ああいう東大偏重の体制を続けている間はだめだと思つたら、案の定、最近おかしくなつてきたね。もう一つは、旧内務省系の集まりというのがいまだにあるんですよ。

伊藤 大震会というのがそうですか。

夏目 名前は忘れちゃったけど、自治省とか、労働省、厚生省、警察、そんなものかな。

伊藤 建設省。

夏目 ああ、建設省もそうだな。通産、大蔵とは別で、ちゃんと旧内務省系の名簿をつくつて、何年採用とかいつてね。そういうグループもあるんですよ。

伊藤 人事の場合にはそれをめくつたりするんだろうな。

夏目 いいけどね、そんなものが何の役に立つんだと。そこから外れた俺なんか見たら、不愉快きわまりない。

伊藤 アハハハハハッ。

武田 東北大学はいらつしやらなかつたのですか。

夏目 いないよ、そんなもの。田舎の都落ちした劣等生はいないんです。本当、すごいよ。そういう感じがしますね。だから、各

省の集まりだとか、次官の飲む会だとかと時にあるのだけれども、一人も仲間がいないものね。私が次官であった間に一人だけ出てきたのが通産省、名前は忘れたけれども、田中角栄の秘書官をやった人が岡山大学。

佐道 はい、そうですね。

夏目 何といったかな、いたでしょう？ 優秀な人で、アラビア石油の社長か何かになってね。彼が出てきたときには、俺はホッとしたもの。

佐道 小長（啓一）さん。

伊藤 ということは、それ以外は全部東大ということですか。

夏目 そうです。すさまじいものですよ。あんな世界は早く壊さないと日本はよくならない。本当にそう思う。まあ、笑い話だけど、そういうことも。吉野さんだって、これは一高―東大ですからね。

伊藤 じゃあ、典型みたいなものだ。

佐道 いくら県会議長に見えても（笑）。

夏目 巨理さんも一高―東大だったし。原さんは浦和かな。ま、そんなもんです。みんなそうですよ。

伊藤 みんなそれにプライドを持っているのでしょうか。

夏目 屁の役にも立たないアホもいっぱいいるけどね。

伊藤 結局、みんなで助け合うのでしょうか。

夏目 それが要するに派閥なり人脈というものになったのですね。ま、しようがないでしょうけれどもね。

伊藤 なかなか簡単には壊れないかもしれませんね。

夏目 最近ほとんど壊れているんじゃない？

■日米安保事務レベル協議に出席

伊藤 少しずつ壊れているんじゃないですか。さて、それでこの前の話の続きがここに出てくるわけですからね、ハワイでの日

米安保事務レベル協議ということで、先生は初めて防衛局長というところでこれに出席されるわけですから、これは大変だったというのがこの前のお話ですね。

夏目 大変というか、そういう宿題があつて。それが言いつ放しではなくて宿題になっているとは思わないものだから、行く直前にアメリカに対する回答をどうするのかというのが問題になってきたんです。私にすれば、「回答って、いまからするのかい？」というようなものなんですよ。

伊藤 それは防衛局の中では何もやっていなかったわけですか。

夏目 言われっ放しでおわったのではないですか。私もそこは人様のところだからわからないけれども、少なくとも私が防衛局長に就任してから一カ月くらいは、五六中業を国会へとか、予算委員会だとかに捕まっているから暇がなかった、チャンスがなかったといえればそれまでなんですけれども。たしか、これは夏でしょう。

伊藤 八月ですから、もうすぐあとですよ。

夏目 すぐでしょう。それからそういう話を聞いたときには、「アレ？」と思いましたがね。

伊藤 「だいたいこういうふうになっています」というあれがないわけですか。

夏目 ないんだね。このときにはたしか課長もかわっているんです。防衛課長もたしか局長と同じ日付でかわっている。だから余計にいけなかったのでしょうか。防衛庁の悪いところは、部員制度というのがあるんです。部員制度というのは、課があつて、係があつて、係員がいてというのではないんです。課長がいて、下に部員がそれぞれ独立して個人で仕事を担当しているんです。そいつが抜けちゃうと、その仕事は隣のやつはわからない。ま、課長は多少上下の関係でわかるけれども。仕事の連続性という意味では非常に問題があるのですね。部員がかわると……。

伊藤 引き継ぐじゃないですか。

夏目 引継ぎなんていうのはろくすっぽししないんですよ。個人ベ
ースの仕事が多いんですね。内局の仕事の弱いところはそういう
ところなんです。個人の見識で仕事をするとところが多いんですよ。
伊藤 ふうん、おもしろいと思ったらおもしろいのでしょうか。う
どもね。

夏目 だから、人がかわつちゃうとガラツと変わつてもおかしく
ないし、「そんな話は聞いていない」といわれると、それまで。
やはりちよつと変ですけれども、当時はそういう雰囲気の場合だ
つたから、多少やむをえないのかなと思うのだけれども、いずれに
してもアメリカへ行く直前になつてそういう問題を聞かされて、
「さあ、それに対する日本側の対応はどうするんだ」ということ
になりました。

伊藤 これは一年前の話ですからね。

夏目 一年前。それで慌てましたよ。しかし時間もないので、
「わかった。そんなものいちいちチェックしている暇がないんだ
から、たまたまガイドラインでいるんな作戦計画のすり合わせを
やることになつていないか。シーレーン防衛というものにつ
いて研究をするということにしよう」と。しかし、そういうこ
とをやるについては官邸その他の了解も得なければいけませんか
ら、鈴木総理の了解をとつて、「こういうことで行きますよ」と
いったら、「よろしい」と。そういうことなものでから、ひと安
心して出かけた。

確かに秘密保全というのも大事だったのでしよう。先ほど私は
向こうの言い分をしゃべつたでしょう。あれも当時は秘扱いなの
ですね。多分、中でもオープンになつていなかった。だから私な
んかは知らなかつたんです。もちろん、アメリカの過大な要求が
あつたとか、シーレーン防衛について非常に関心が強かつたとか、
抽象的な話は聞いていましたけれども、護衛艦何隻とか何とかと
いう具体的な話なんていうものは聞いていない。多分それは秘密

保全に引つかかつて、防衛庁内部でもごく限られた、次官と防衛
局長とかそんな人しか知らなかつたんじゃないかと思うんです
ね。秘密というのは持つているやつだけが妙な優越感を持つちゃ
つて、人にしゃべらなないとそれがどうという影響をうけるか
なんて考えるほどの利口な人ならいいのだけれども、バカはみんなこうや
つて(抱え込んで)いるだけだからね。死ぬまで墓場へ持つてい
くでしょう。困つちゃうのですね。

伊藤 あとを受けた人間は大変ですね。

夏目 だからもう烈火のごとく怒つて、怒鳴りつけたんですよ。
「そのころの担当者はみんなクビだッ、飛ばしちやえ！」とかい
つて、私もわめきましたよ。

伊藤 この温厚な(笑)。

一同 アハハハハ(笑)。

夏目 組織の軽重を問われちゃうものね。防衛庁は何をしている
んだと、アメリカからはそう思われる。「秘密保全にも程がある」
と、前の防衛局長に食つてかかつたんです。知らなきゃ、そのま
ま行つちゃうんだね。まして次官も知らないのですから。

伊藤 かわつたばかりだから。

佐道 次官も施設庁長官から次官になつて来たわけですから、み
んな知らないわけですね。

伊藤 向こうは顔ぶれがそんなに変わつていないわけでしょう。

夏目 ほとんど変わつていないものね。まあ、ウエストというの
は私のときには都合で一日だけで帰りましたけど、あとはゴーマ
ンなんていう参謀本部の中将も同じだし、同じですね。

伊藤 今度はハワイなのですけれども、具体的にどういう会議だ
つたのですか。やはり向こう側が。

夏目 まずキャップ同士が両方で説明するんですよ。最初にいう
のは、最近、国際情勢が厳しくなつたとか、ソ連の軍事力がのび
てきたとか。私が行つたときにはアメリカも非常に気を使つてく

れて、向こうの極秘の写真を見せて、「これだけソ連は増強しているぞ」みたいなデモンストレーションをするわけです。ざっくりばらんにいえばそういう話。参謀本部のほうからは具体的な防衛力の中身の話。日本側からは、日本の国内情勢だとか、防衛力整備の現状だとか、今年予算要求はこうだとか、そんな話をして、そこから自由討論になるわけです。その席でさっきのような話が出た。私が行ったときの話だけでも、その去年の話を持ち出して、彼らはこういったんです。

伊藤 だいたい同じなんですか。

夏目 同じなわけですけれども、「シーレーンの防衛」というのは、島国日本にとって、国際市場へのアクセスの確保、ひいては国民生存のために必要不可欠だ。日米が協力してシーレーン防衛にあたる必要があるが、日本は千海里以内、米国は攻勢的な作戦と千海里以遠の防衛にあたる。そのための自衛隊の現有能力はきわめて不十分であり、五六中業が達成されてもお弱点を有する。今後さらに対潜能力・洋上防空能力を増す必要がある」ということをいって、また去年の話を繰り返したんです。そのときに私のほうからいったのは、「よくわかる。わかるけれども、あんたらは五六中業を達成してもまだ十分ではないというけれども、どういう研究をしたのだ。精緻なORか何かの勉強をしているのなら、それを見せてくれ。そうでなければ、俺のほうでもう一度それを勉強してみる。あなた方のいうのが正しければ、そのために努力もするし。とにかく勉強したい。お互いに材料、情報を持ち寄って勉強会を開こうじゃないか」ということにして、アメリカも、「それは結構なことだ」ということになったわけです。その研究が具体的に始まることになり、ガイドラインに基づく研究として具体的な日程に入れるのです。いままででは着上陸侵攻とかそんなのが主だったのだけでも、それと同時に並行的にシーレーン防衛も研究テーマにして始まった。

伊藤 これはどのレベルでやるのですか。

夏目 それは、統合幕僚会議と海上自衛隊が主として、在日米軍、太平洋軍、そういう連中とやるわけです。ほかの作戦計画と同じです。ただ、陸が主になるか、海が主になるかの違いはあるけれども、少なくともそういう研究が始まるきっかけにしたわけです。中島 その場合に向こうがいつてきたシーレーンというのは、面の概念でいつているのか、それとも線の概念でいつているのか。

夏目 それは防衛局長になる前の官房長のときの国会でもさんざん議論になって、国会でしばしばもめたのです。非常に誤解されるのは、昔、海上自衛隊が地図を広げて、日本から北米航路、グアム、アムのほうへ行く南東航路、それからフィリピンのほうへ行く南西航路、三つの航路帯を示して、「これがいちばん資源の輸送とかそういうものに対して大事な航路である。これを守るんだ」みたいなことをいつた経緯がある。そのためには護衛艦何隻で何護衛隊必要だという計算をしたことがあるものだから、シーレーン防衛というのをそれを守るみたいになんとかなく日本では思い込んでいた。アメリカは最初からそんなことは考えていないんです。それで国会でも「シーレーン」というのは線か面か」なんてバカな議論をしたのだけれども。私が防衛局長になってから、「シーレーン」というものは、何もボーリング場みたいなレーンがあるわけではないんだ。要するに海上輸送を確保することを包括的にシーレーン防衛というんです」といって、その議論はもうおしまいになった。

伊藤 オーケーだったのですか。

夏目 はい。そうじゃないと、どうしてそこだけ守るのかと、妙な話があるのですね。それは海上自衛隊も誤解してそういうふうな思い込んでいる節もあったし。一般の人はみんな、「シーレーン」というとなんとなく。

伊藤 「レーン」はねえ。

夏目 そう思っちゃうでしょう。だけど、そうではないんだとい

うことにしちゃったんです。そうでないと説明しにくいから。どうしてかという、海上自衛隊は八八艦隊とかそういうものを積算するときにそういうことを前提にしないと計算ができないのね。太平洋全般みたいなことにしたのでは兵力の積算ができないことが一つ。もう一つは、潜水艦がもつとも跳梁跋扈しやすいのは、あの島伝いのところ、それからマリアナ海峡のあたり。要するに、敵の潜水艦がいそう、こちらがやっつけるのに便利なところを選ぶんです。だからそういう三つがでちゃったのね。シーレーン防衛というのはそうじゃないんだということ、その後、防衛局長になって国会答弁をして明確になった。だから、面か線かという議論は確かにあった。その話をするときにも私はわからなくて、線というのはおかしいなど、海上自衛隊と二日ばかり議論をした。海上自衛隊もいろいろなことをいう人がいたけど、そのあと幕僚長になる長田（博）というのが防衛部長だったかな。最後にこの人が、「そんな議論をしていると通りが悪いよ」というようなことをいって了解したので、「じゃあ、海上自衛隊も以後はそれで異論がない。」ということ。だから、なかなか難しいんです。アメリカはシーレーンなんてあまりいわなかった。SLOCと書いていたね。しかし、それも線なんだね。シーライオン・オブ・コミュニケーション。

伊藤 ラインが無数にあれば面になる。

夏目 南東航路とか、南西航路とか、昔の話が。だけど、シーレーン防衛ということをやるといっても、要は何が必要かといったら、相手は潜水艦ですからね。それと洋上防空のバックファイアなので、あんまり陸上自衛隊が出てくる場面はないですね。

伊藤 そのシーレーンの研究会はかなりの頻度で開かれていたのですか。

夏目 そのあとわりと進んだのではないですか。

伊藤 そうするのは防衛局長に次々と報告があるわけでしょう。

夏目 だけど、私がいるところは進むというほど進まないでしょう。だって、そのあとすぐに私はクビになっちゃうからね。防衛局長は一年しかやっていないから。

佐道 クビじゃない、次官になるんです（笑）。

伊藤 アハハハハ、なんかいまの話聞いてると（笑）。普通は一年ということはないのですか。

夏目 「こいつはやばい」と思われて。

武田 それで次官にはならないんじゃないでしょうか（笑）。

夏目 シーレーンも変なことになっちゃうといつて、かえたんじやないでしょうか。

佐道 吉野さんが一年しかやらなくて、そのあと二年以上次官をやられるのですから、だいたいが（笑）。

夏目 次官のほうが無害なんです。国会答弁はないし。

伊藤 楽ですか。

夏目 それは楽ですよ。なんていったって、国会に行かなくていいというのは精神衛生にいいですよ。国会というのは本当に、人間バカになるんですよ。人間というのは物事を受身でばかり考えると頭がおかしくなつてきます。

伊藤 ま、それはそうですね。

夏目 「こう来たらどうしよう」とか、「ああいったらどうしよう」とか、そんなことばかり考えていたら、いい知恵は出ないですよ。

伊藤 「こうしてはいけない」とかね。

夏目 それが取れると本当にのびのびするしね。だって、国会の予算委員会が始まるころはまだ冬ですよ。国会の窓から見ると、窓の外の本に雪が積もつていたりする。それが融けて、若葉が出てきて、それが青葉になるまで続くんですよ。半年は続いちゃうんです。そのあと秋になったから国会がないかといつて臨時国会とか特別国会とかあつたりして、とにかく予算が通る五月か六月まではそうでした。国会が通つたあとの法案まで含めるとね。

本当、こんなに非人間的な生活があるのだろうかと思う。

伊藤 それが一年ですんでよかったですというふうなものでか。

夏目 それは本当に楽しいですよ。「しかりやってこいよ」なんていってあげばいいのだから。

伊藤 アハハハハ、碁でも打ってあげばいい(笑)。

佐道 戻ってきたら、「どうだった？」と(笑)。

夏目 「ご苦労さん」ってね。

伊藤 外務省と防衛庁との連絡の窓口というのはそれぞれになるのですか。

夏目 主として防衛局と、外務省から参事官が来ていますね。昔は渉外参事官といってセレモニーとか儀典要員みたいなものだったのだけれども、私のころからは国際情勢はその参事官にやらせるということになったのです。外務省から来ている参事官の国際情勢についての分担がふえた。だから、その人と外務省は年じゅうやっているし、防衛局は防衛局でやっているしね。

伊藤 局長だと、向こうと連絡するのはだれになるのですか。

夏目 問題によりけりですね。部員同士も向こうの課員とやっているし、課長は課長同士でやっていますからね。それは事柄によります。

伊藤 基本的には対になるところはどこなのですか。

夏目 それは、防衛局長と北米局長ですね。

伊藤 北米局長ですか。

夏目 それから、防衛課長と安保課長があるし。安保課長がいちばん関係が深いかな。

伊藤 普通、課長と局長で話すということはあまりないわけですか。それもあるのですか。

夏目 あるでしょうけれども、まあ、ないですね。役人の仁義というの、だいたいそういうことというのはわりとうるさいからね。ちよつとちがつているのは大蔵省くらいだね。大蔵省という

のはやはりちよつと気位が高くて、主計官のところへ行くのは、部長とかあるいは局長が行くときもあるし、主計局次長には次官が行くとか。主計局長なんて会わないんだから。大臣折衝のときにそばに座っているだけ。

佐道 偉いもんだなあ。

夏目 主計局次長が各省の次官に最終的な事務的な査定なんかをするんです。偉いですよ、あれ。

伊藤 これが大学にいとわからないんだよな(笑)。

夏目 役人にもわからないの。なんでこいつらだけ、と。だけど金を持っているからね(笑)。

佐道 金を持っているのはどこでも偉いですからね。

武田 大蔵省のそういうやり方というのは昔からそうなのでしようか。

夏目 だけど、主計局次長がおわつてから防衛庁に局長になって来るのだから、おわつたらもうただの人なんです。いる間は。べつにそれは偉いというわけではないのだけれども、なんかそういう。まあ、一人ひとりみんなやったら主計局長はたまらないから、主計局次長に、「おまえはこの省とどこの省」と各省を分担させている。それで、主計局長はどこかへ遊びに行ったりしているのでしよう。あるいは、自民党の政調会や何かと適当にやっているのでもしよ。

武田 多分そうでしょうね(笑)。

夏目 偉いんですよ、主計局長なんていうのは。

伊藤 はあーん、そうか。

夏目 僕は鳩山(威一郎)、相沢(英之)なんていう主計局長、次長のときに付き合っただけ、料理屋へ行っても、俺なんかが顔を見たことがないような芸者なんか、「やあ、〇〇ちゃん」なんていって、本当に年じゅうあんなところで飲んでるんだよ。いまのも速記不要で(笑)。

伊藤 鳩山さんもそれで糖尿病になったんじゃないの(笑)。

夏目 ベつに料理屋へ行つたから偉いんじゃないけれども、周囲がそういうふうなことをさせていたんですね。政治家もまた主計局へ行くでしょう。年じゅう挨拶まわりに行っているから、だんだん付け上がるんです。ああいうことがなくなつただけでも最近は大変な事じゃないですか。いいことですよ。

伊藤 しかし、大蔵官僚が元氣なくなると困りますからね。

夏目 ただ頭がいいからね。だからみんな変なところで引っかかっちゃつたんですよ。その後、スキヤンダルで。

伊藤 いろいろありましたからね。では、今度は中曽根内閣になつたところですよ。

夏目 中曽根内閣なんて関係ないよ、私は。

伊藤 いやいや、だってこの前からの話では、中曽根内閣ができたら少し模様が替わつたような話だつたじゃないですか。

夏目 替わつたけれども、替わつてすぐなんかわからないもの。

伊藤 いいですよ、防衛局長から次官の時代の話ですから。いよいよこれがハイライトで。

夏目 じゃあ、最後はこの次からにしよう。中曽根内閣の誕生のときから。

伊藤 やはり事後的な説明ではなくて、中曽根さんが総理になつたときにどう思つていたかという。次をお願いします。(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第12回

開催日：2003年10月24日（金）

開催時刻：15時05分

終了時刻：17時05分

開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

岡田志津枝（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：

有限会社ペンハウス 矢沢麻里

第12回インタビュー質問項目

2003年10月24日

1

今回は防衛局長時代の続きからお願いします。82年11月、中曽根内閣が誕生します。かつて防衛庁長官も務められた中曽根氏の首相就任について、先生はどのような印象をもたれましたか。また、防衛庁内の反応はいかがだったでしょうか。

2

中曽根内閣成立とともに防衛庁長官には谷川和穂氏が就任しました。谷川長官については何か印象に残っておられる点などございますか。

3

83年1月、中曽根首相訪米直前、政府は対米武器輸出供与を決定しました。この問題は装備局が中心かもしれませんが、後のFSX問題では対米交渉で防衛局も重要な役割を果たすことになりました。そもそも83年1月に対米武器輸出供与が決定された時点で、防衛局としてはどのような考え方をしておられたのでしょうか。

4

中曽根首相が訪米し、レーガン大統領と会見して共同声明を発表、日米同盟を確認しました。この訪米には同行されたのでしょうか。また、このときの訪米ではワシントン・ポストが、中曽根首相が日本を不沈空母にすると発言したと報道して、日本国内では物議

をかもしました。中曽根首相のこのときの訪米、および中曽根発言についてどのように評価しておられますか。

5

中曽根首相訪米後、シーレーン防衛が問題になりました。特に次の二点が問題になっており先生も国会で答弁されています。それぞれについて当時の議論の状況や内容などお聞かせ下さい。

①有事の際に公海上の米艦を自衛隊が護衛することも個別的自衛権の範囲内であるという問題。

6

②日本が攻撃を受けていない場合での米軍による三海峡封鎖を容認することもありうる、という政府統一見解の発表（3月7日）

83年3月、シーレーン防衛に関する日米共同研究がスタートします。日米防衛協力小委員会で、研究の基本的枠組みについて合意されたという報道がありますが、具体的にはどのようなことでしょうか。

7

同じく3月、レーガン大統領は、宇宙兵器を含む防衛システムの研究開発、いわゆるSDI構想について発表します。やがて日本もこれに参加するかどうかをめぐって議論になるわけですが、この構想をお聞きになったときはどのようにお考えになりましたか。

8

6月、防衛事務次官に就任されます。就任の経緯等お願いします。また、次官就任に当たって、もつとも重要な課題と考えておられたことはどのような問題でしょうか。

9

先生の次官在任時代は、防衛庁長官は最初が谷川氏、ついで栗原

10 祐幸氏（83年12月27日～84年11月）、そのあと加藤紘一氏（84年11月～）でした。政務次官は林大幹氏から中村喜四郎氏（83年12月28日～84年11月）、ついで村上正邦氏（84年11月～）となります。それぞれの方々にについてのご印象などお聞かせ下さい。

夏目次官のもとで庁内のとりまとめにあたる官房長には、前半は佐々淳行氏、84年7月からは西廣整輝氏が就任します。官房長人事は防衛局長とならんでかなり重要な問題と思いますが、佐々氏、西廣氏を起用されたのはどういった点を重視されたのでしょうか。

11 83年8月、高坂正堯氏を座長に「平和問題研究会」が発足します。防衛費GNP1%問題を見据えての発足ということだと思えますが、防衛庁自体はこの研究会についてどのようなスタンスだったのでしょうか。

※今回は以上の点についてお願いします。

■ 中曽根内閣誕生

伊藤 きょうは、この前の防衛局長の時代の続きで、次官のところまで入れれば、というところでございます。この前、八二年十一月に中曽根内閣が誕生して、夏目先生は、「中曽根内閣になったからってどうということはない」というお話でしたけれども。しかし一応、中曽根さんは前に防衛庁の長官もやって、中曽根さんが総理になったということで、その当時どんな感じだったのか。夏目 なったばかりのファースト・インプレッションみたいなものでしょう。それはやはり、あの人の総理になったのはなんといっても鈴木内閣のあとですからね。鈴木内閣というのは、防衛政策、安全保障政策というのはまるつきりないというべきか、混乱しているというべきか。例のシーレン発言でもおわかりのとおり、全然理解のない方でしたから、そういう方のあとに來られた総理でしょう。しかも、かつて防衛庁長官をやっている。あの方は、いうことは非常にはきはきといわれるわけです。まあ、好き嫌いとか、いい悪いは別として、とにかく非常に声高に安全保障政策についてぶち上げる人ですから、言葉だけを聞いていると非常に明快ですよ。言行不一致かどうか……という。ただ、風見鶏なんていううわさもあるくらいでしたから、さあ、どこまでやれるかなというのはあつたけれども、とにかく鈴木さんよりはすつと仕事しやすいかなと思いました。そういう意味では、どちらかといつたら期待が七分くらいあつたのではないのでしょうか。

伊藤 やはりみんなそうですかね。

夏目 多分、防衛庁はそうだと思います。それは、鈴木総理とか三木総理とかは全然だめでしょう。ただ、私はいつかも申しあげたように、タカ派ではない鈴木さんとか三木さんのほうが結果的に後々残る仕事をされているんです。こう言挙げする人はいかがかなという気持ちはありました。

伊藤 一抹の不安ですか。一抹どころではないか。

夏目 それは防衛庁長官のときもありましたからね。いろいろなことをぶち上げては、ぼしゃつたりして。海原さんとの葛藤もあつたけれども。だけど今度は防衛庁長官ではなくて、一国の総理ですからね。それはある程度期待したことは事実です。

伊藤 その中曽根内閣で谷川（和穂）さんが防衛庁長官になられますけれども、この谷川さんについては。

夏目 この方は、私は全然それまで予備知識はありません。ただ、この方は非常に趣味人として、たしか慶応大学出身で、スマートな、英語もある程度しゃべるし、ピアノは弾くし、ちよつと格好いいですよ。若いしね。今度は谷川さんもやめるでしょう。中曽根さんがやめるかどうか知らんけど。

伊藤 いや、中曽根さんはやめない（笑）。

夏目 谷川さんは、そういう人だという印象を持っただけです。ただ、出身が河本派ですから、そんなに防衛問題について造詣が深いということは期待していなかった。

伊藤 でも、一般的にいつて、そういうことを必ずしも防衛庁長官に期待しているわけではないでしょう。

夏目 まあ、総理が総理ですから、多分総理主導型のそういうことになるのだろうとは思いましたけれども、結果的にもすべてそういう方向で進んでいました。

伊藤 谷川さんとしては、中曽根さんのいうとおりということでございますか。

夏目 そうでしょうね。だから、そんなに官邸とゴタゴタするということは一切なくて。

佐道 中曽根さんが総理になったときに、例えば防衛局長として直接官邸にご説明に上がるとかいうことは。

夏目 どの時点で最初に行ったかという記憶はちよつとないですけども、私は中曽根さんのところへは何遍も行きました。それ

までの鈴木総理の時には本当に数えるほどしか行っていないですけど、中曽根さんのときには何回かお邪魔して。しかも、正面から行くと目立つから、裏口というか、通用門から公邸のほうへ行くこともありました。住まいのほうへ行ってお話しをしたり。もちろん官邸にも行きましたけれども、官邸に行くと、新聞記者が張つていて、「何しに来た、何しに来た」ということになりましてから、密かに通用門から公邸のほうへ行っていました。

佐道 私邸のほうにも呼ばれるとか。

夏目 私邸は行ったことがないです。官邸の横にあるでしょう。いまは知りませんが。どの時点か、よく呼ばれましたよ。どうしてそういうことをしたかというのには、そういうことをお膳立てする人がいましたね。それは村上正邦さん、この方は堀の中へ落つこちやった(笑)。この方は防衛政務次官をやっておられて、この人と私はわりと気が合ったんです。それで、中曽根さんとの間を取り持つというのですかね。「行って、いいたいことをいってこい」とかといつて、ご本人がいるときもあるし、いないときもあるし。

伊藤 それは向こうから呼ばれるのですか。それとも、こちらから行くのですか。

夏目 「向こうがいついつがいい」と、間へ入った人がいつてくれるから。

伊藤 直で呼ばれることはないのですか。

夏目 直に呼ばれることはありませんよ。それは官邸のほうへ。それはその後何回もありました。

伊藤 外務事務次官とかそういうのは定期的にブリーフィングをやりませうけれども、そういうふうな感じではないのですか。

夏目 定期的というのは必ずしもなかったのですけれども、何かことがあると呼ばれました。

伊藤 ことあるたびにですね。

佐道 それは、新聞の「首相動静」の欄に。

夏目 出ますよね。官邸へ行けば出ます。

佐道 いまおっしゃっていた裏口は載らないほうですね。

夏目 それは出ません。

伊藤 そうか、あれだけを信用していたら大変だ。

夏目 私もそれまではそんなことは知らなかったけれども、そういう手があるのだなど。セーターか何かを着て、リラックスして、きわめてアットホームな感じで話しができます。官邸でこんなになつて(かしこまって)いるよりは、なんとなく雰囲気があるから、こちらでもいいことをいいますし。

佐道 しかし、それは新聞記者とかにわからないものなのですか。

夏目 いや、どうですかねえ。まあ、とにかく彼らに会うことはありません。

佐道 次官になられてもやはり。

夏目 何回か行きました。選挙の話をしたり、「金丸(信)さんが戦車をやめるといつたけど、どうしたらいいだろう」とかね。

佐道 突然、また金丸さんが出てきて(笑)。

夏目 いや、そういうことで、あんまり役所で呼べないようなときはそういうときに話しをするのですけれども、それは実際に金丸さんがそういう話をするのかはわからない。あの人も陸上自衛隊はあまり好きじゃなかった。海空重視の方ですからそこらへんは定かではないけれども、そういう話で行ったことがあるし、選挙というのには、私が選挙に出るとかいううわさが出て地元でちょっと騒いだときがあったから、「出るのか」とか、そんな話をしたり。伊藤 防衛局長と大臣とはどういうふうなあれになるわけですか。

夏目 防衛局長も役人ですから、なるべく次官には一緒にいてもらうようにしてもらいます。何か話しているときには、でないで、「いった」「いわない」というような話になつてもいけませんしね。

ただ大臣は、両方二人呼べということがないときはあります。

伊藤 「防衛局長を呼べ」と。

夏目 そうなると秘書が呼びに来るだけです。だけれどもいざいざときは何遍でもあります。だけど、そういうときはあとから事後報告で、「いまこういう話をされました」とか、「こういう指示をされました」とか、「こういう話をしてきました」ということは次官には報告します。これは役人の常識ですけれども。

伊藤 要するに、すべての情報は次官のところへということですか。

夏目 まあ、普通の神経だったらそうします。「この野郎、気に入らないから上げんでおこう」なんて思えば別ですけども、そうでなければ上がります。

伊藤 谷川さんという方は、そういう意味では使いやすい大臣でしたか。

夏目 威張りもしないし、素直で、我々の顔も立てるし。話が前後になるかもしれませんが、谷川さんが改造で来たのは夏です。いつですかね。

佐道 年末に。

夏目 あ、年末でしたか。予算の内示前ですよ。やはり予算の伸びというのは非常に大事なものですから、我々が事務折衝をやつて、順々に上へ上げていくわけですね。谷川さんに大臣折衝で行つてもらつたところ、谷川先生がほぼどのところでお帰りて帰つてこられたんです。すぐ庁議メンバーとか何人か集まって、「どうだろう」「だめです。もう一回行つてください」と。そういうあつかましいことをいえたのも、やはり谷川さんの人徳なんですよ。怖い大臣にはいえません（笑）。そうしたら、素直にまた行つていただいたのですけれども。

伊藤 そういうのはやはり効果があるものですか。

夏目 それはありますよ。たいした効果があるかどうかは別とし

て、行けば行つただけ。もちろん、それはただ行くだけではありませんからね。その間にまたやりますから。「多少色を付ける」とかね。

伊藤 大臣が行くのだからと。

夏目 「あんまりじゃないか」とかいつてね。そんな話をあとでして、「こんな話は人様にいえないよな」とかいいながら。よく役人をやめてからいろいろなことを本に書いたり、しゃべる人がいるのだけれども、当時は宍倉（宗夫）という経理局長でしたかね。だから、もう一度行つて来いといったのは次官のときだな。宍倉局長が「こんなことは墓場まで持つて行きます」とかいつていましたよ。予算になると、中曽根さんは非常に理解ある方でしたけれども、それだけでは不安なものですから、当時はいろいろな手を使いましたよね。瀬島龍三さんをお願いして、側面から援護射撃を頼んだり、高坂正堯にしゃべらせたり。

伊藤 瀬島さんはどういうところに強いわけですか。

夏目 あれは中曽根さんなんか、とにかくだれでも政治家に強いですな。なんで強いのかよくわかりませんが。

佐道 瀬島さんへの連絡役はいらつしやつたのですか。先生がやつておられましたか。

夏目 いや、宍倉経理局長がやつていた。私も大村さんのときなんかに会つて、知つてはいますけれども。

中島 防衛庁と瀬島さんとのつながりというのは。

夏目 ない、何もなし。ただ、あの方も国士だから——と思つて、多少あの人がつぶやけば、少しは影響できるかな。まだ生きてるから困るけどね。そんなことがありました。

伊藤 まあ、ある程度影響力があつたということは皆さんおっしゃっていますよね。なんであつたのかよくわからないですけども。

佐道 防衛庁としては、使える手段は。

夏目 それはいろいろ使いました。山崎拓さんを使って、当時の大蔵大臣は渡辺美智雄か。あれは同じ派閥ですから、そちらのほうから攻撃したり。はつきりいつてみれば、これは戦争ですから、使えるものは何でも使えと。その結果、それぞれどういう効果があったかはわからないですけども、やることはやったなど。

伊藤 そういう戦略は次官を中心にしてやるわけですか。

夏目 ま、そういうのはいちいち大臣にいうわけにはいきまじせんからね。

伊藤 大臣には上に乗ってもらおうと。

夏目 そうです。迷惑をかける話でもないしね。とにかく次官が何かになったら、悪いことはいかんけれども、その程度のことをして叱られて、「けしからん」というのだったら、やめればいいやと思つていますから。べつに自分の私腹を肥やすためにやっているわけでも何でもないし、そう悪いことをしている意識もないし。

伊藤 まあ、そういえばそうですね。

■ 対米武器輸出供与・防衛力増強

佐道 中曽根さんが就任してすぐなのですけれども、一月に訪米されるのですが、その訪米の直前に武器輸出の供与ということをして、いろいろ懸案になっていたわけですけども、それを決定される。これは、この前もお話がありましたけれども、武器とか技術の問題は基本的に装備局が中心になると思いますが、防衛局としてもやはり無関心ではなかつたと思うのですが。

夏目 まず第一に申しあげるのは、武器輸出三原則の関係というのは、装備局も正直いつてあんまり関係ないですよ。まったく政治マターというか政策の問題であつて、通産大臣とかそういう人は関係あるかもしれないけれども、一局長が、まして防衛局の局長がどうのこうのという幕ではないんです。技術供与とか具体的な話になつてくれれば別ですけども、最初の中曽根さんが発言し

たときのあれから見ても、装備局とか防衛局は関係ないんです。まったく政治判断なんです。というのは、アメリカは前々からそういうことについての要望はあつたわけですよ。一方的な通行は少し不公平ではないかと。日本にも我々が欲しい技術があるということとを前々からいつていたんです。その一つのあらわれとしては、五十七年の日米事務レベル協議のときにも彼らはそういうことに対して言及しているんです。どういふことと言及しているかといううと、インターオペラビリティという言葉でいつているんです。装備の共用化とかそういうことを考えたら同盟関係がより円滑にいくだろうということもいつているわけです。C Iとか、O T Hなんかもあつた、イージスなんかもある。そういうことをいつてくる裏には、そういう装備の共用化みたいな気持ちがあるから、日本の技術も欲しいと思つている。現に、彼らはめばしい技術を身体的に考へていたようですよ。日本のレーザー技術とか、戦闘機のFCSのある種の技術とかね。私は難しくてよくわからないけれども。それがどんどん、逐次リリースされて向こうへ行くわけです。だから、これは装備局とか何とかではなくて、アメリカの要求がそこはかなとなくその前からあつて、中曽根さんの一つの信念として、総理のときに彼は何を考へたか。防衛問題ではまず防衛力を増強することにある。そのためには1%の枠を突破することが一つだと。二番目は対米武器技術の供与。この二つが中曽根さんの最初からの腹の中なんです。

伊藤 その腹の中をつくつたのは防衛庁とは関係ないのですか。

夏目 それはアメリカから何かサインがあつたのではないでしようか。そう思ひます。防衛庁は積極的に武器技術を出せなんていうことはいつてなかつたと思うんです。多分、アメリカとの間のパイプでそういうことを聞いていたのだと思ひます。当時、国防省と国務省にそんなことを前からいつているのがいましたから。

伊藤 中曽根さんのそういう意味での防衛問題についてのプレー

ンみたいなのはいたのですか。

夏目 いたでしょうね。

伊藤 平和研ですか。

夏目 防衛研究所に若泉某とかつて、中曽根さんが便利に使っている人がいたよね。

伊藤 防衛研究所ですか。

中島 桃井(眞)さんとか。

夏目 桃井さんもそうかもしれないけれども、桃井さんよりもうちよつと……。若泉敬かな。

中島 佐藤内閣のときに。

夏目 あれは佐藤内閣か、ごっちゃになっているな。そういう人がいたような。

伊藤 それは直接、防衛庁の防衛局長とか次官とかとは関係なしに。

夏目 なしに。まったく、政治家になると何を使っているかわからないですよ。こちらがさつき予算でいろいろなことをやったけど、あちらのほうもつとずつと上手ですからね。

伊藤 そうですか、こちらの手の内が見えていたりして。

夏目 あちらはどういう手を使っているかわからない。例えば椎名さんなんているでしょう。あの人なんかは非常にアメリカの国防省や国務省に顔が広いんです。

伊藤 椎名素夫さんね。

夏目 あの人なんかは便利に使っていたんじゃないですか。

伊藤 それはわかりますね。

夏目 それやこれや、いろいろなパイプを持っていたと思います。だから、総理になると情報がいっぱいあるところから来ますから、我々の知らないような情報を持っておられたと思います。

伊藤 夏目先生は椎名さんなんかとは接点がなかったのですか。

夏目 当時はよく、彼も防衛庁シンパでしたから、何回も飲んだ

りしたし。

伊藤 あの方はいろいろアイデアもあるし、情報もあるという方ではないですか。

夏目 非常に静かな、ちよつと学者タイプだけれども、いろいろな人を知っています。ああしたほうがいい、こうしたほうがいいということはいろいろ教えてくれました。

伊藤 それは、アメリカ側にも知人がいるだろうし、日本の中にもということですか。

夏目 うん。ただ、日本ではちよつとね。あの政治家の世界ではあの人はあんまり目の見えないですね。

伊藤 そうですね、多少裏方的な存在ですよ。知る人は知っているけれども、という。

佐道 強引にやるとか、国対政治の人ではないですからね。

夏目 ちよつと大学教授みたいな、ほそぼそしゃべっているのも、ちよつと何をいつているのかよくわからない。

伊藤 そうですよ、僕もちよつとお話を伺いましたけれども。

夏目 声も低いし、さっぱりよくわからない。でも、非常に理解ある人でした。その後、あんまり政治家の中では伸びなくて、いまは無所属か何かで。

伊藤 そうです、無所属の会とかいうやつでしょう。

佐道 中曽根さんの腹は1%突破と対米技術供与の二つでという、それは比較的早く先生なんかはおわかりになっていたということですか。

夏目 それはわかっていました。要するに、中曽根さんというのは、「西側の一員だ」とか、「アメリカに協力するんだ」ということはいっていたから。これまたおかしいけれどもね。防衛庁長官のときには「自主防衛」なんていつていたのだから。

中島 そうですね。

夏目 さっきいったように、多少ぶれるんです。ぶれるけれども、

総理になってからはあまりぶれなくて、一貫して、「対米協力」
「西側の一員」という姿勢は揺るぎませんでしたね。

岡田 なられてすぐの十二月に、たしか大蔵原案にいきなり六・
五%増を中曽根さんが出されましたが。

夏目 それが1%の伏線なんです。

岡田 そのときに何かそういうふうな感想をお持ちになりました
でしょうか。

夏目 それは、中曽根さんだからやってくれるなという。しかし
実現はできなかった。多少上乘せになったくらいだったのかな。

伊藤 結果は。

夏目 多分そうだと思うのですけれども。あれは、六・五%は行
かなかつたんじゃないかな。行ったのかな。

中島 どうでしょうか。

夏目 たしか、各省、ODAと防衛費以外は減らすというときに、
「とにかく六・五%ふやせ」というのですから、相当なものです。

それは、アメリカ側がいろいろなことをいつてきた、シーレーン
防衛能力として防空能力と対潜能力が低いとか、C-1も必要だと
か、イージスも必要だとか、何とかいつていたでしょう。そのと
きに彼らがいっただのは、いまあるできたばかりの五六中業が達成
されても、なおかつ不十分なんだと。だからもつと防衛力増強の
テンポを速めてくれということをいつていたのです。そういうこ
とが中曽根さんの情報として入ってくるために。大蔵省もだいたい
あのときには慌てていたけれどもね。どのくらいになったかは記
憶がちよつとないけれども、それは数字を見ればあとですぐわか
るのですが。たしかにそれはおっしゃるとおり、なつてすぐ。し
かし、信念だったのか、総理になつてからそう思つたのかはわか
らない。

伊藤 とにかく、そういうことを背景にして訪米されるわけです
ね。

夏目 たしか一月くらいに行くのです。あのころは、みんな総理
になると二、三ヶ月以内にアメリカ詣でに行くのが習慣でしたか
らね。

伊藤 さっきのお話しの技術供与の問題と、防衛力の増強とい
うことを背景にしてアメリカに行かれて。

■不沈空母・三海峡封鎖発言

夏目 技術協力だつて鈴木内閣では全然だめだったですからね。
アメリカへ行く前に慌ててオーケーみたいな話にしましょう。
アメリカ側のニーズというものをちゃんとキャッチして、そ
ういふものを知つた上でアメリカへ行つていられるのですね。それだけ
すまないで、不沈空母だとかつて。

伊藤 あの不沈空母発言でだいたいブーワーとなるわけですが
も、あれなんかは夏目先生の立場から見ると、どういうふうにお感
じでしたか。

夏目 若干唐突ですよ。いや、いつていことはべつに驚くこと
ではないのだけれども、あの人は鈴木さんと違つて言葉が非常に
華やかでしょう。旧制高校の教養の悪いところをそのまま(笑)。
ああいうキャッチフレーズみたいなのがうまいですね。

伊藤 浮沈空母とはいわなかったとかいう説もありますけれども
ね。

中島 事前に周囲の方と諮るといふより、中曽根さんご自身がボ
ンと。

夏目 多少は諮っているかもしれない。諮つても、きっと当時の
外務省なんかは、「そこまでいわなくても」みたいなことをいつ
ていたのだと思います。私は知りませんが。だけど、あの
人は思い込んだら一所懸命自分の言葉でしゃべっちゃうからね。

伊藤 中曽根さんが訪米するなんていうときは、防衛庁からはだ
れかついていくのですか。

夏目 ついていかなかったでしょう。

伊藤 ついていかなかったのですか。

夏目 そんな具体的な話になるはずがないからね。だから、だれもついていかないと思います。

佐道 どういう話をしたとか、そういうのは防衛庁のほうにも。

夏目 それはみんな来ます。

伊藤 それは外務省から来るわけですか。

夏目 外務省から来ます。

伊藤 外務省から来るというのは、どういうふうなルートで来るのですか。

夏目 現地から公電が入るんです。その公電がそのまま来ます。

「秘密」とか何とかがって。

伊藤 「極秘」といつて。

夏目 もちろんこちらにも、そういう書類ですから、だれとだれに回すということは決めていますけれども。せいぜい四、五人か。

伊藤 防衛局長とか、次官とかがサインをして。

夏目 うん。赤い箱を持って、部長が廊下を。

伊藤 そういうものですか、あれは。その場で読んで。

夏目 必ずしもそういうことはないですけれども、秘書なんかに渡して、またコピーでもとられてはいけませんから、返すときにはちゃんと担当者が来て持っていくとか。

佐道 返すのですか。

夏目 だって、主管課が保管しますから、次官のところでもしたり、防衛局長がポケットへ入れるわけにはいかない。

中島 やはり会談の議事録要旨のようなものも含まれているわけですね。

夏目 もちろん。対外説明要旨なんているものがくつついて、人にしゃべるにはこれがいいとか、こちらはどこかへおさめておけと。

佐道 不沈空母だの何だのという中曽根さんの発言のあと、防衛庁としてコメントを求められるということ。

夏目 それは、まとめるといえることはないけれども、やはり大変ですよ。「不沈空母って、何を考えているんだ、どうしようというのだ」とか、「三海峡封鎖って、どこの三海峡を指しているんだ」とか。一時、四海峡という声もあつたんですよ。

伊藤 四海峡ですか。

夏目 三海峡というときと、四海峡というときとあつてね。多分、対馬海峡だろう、津軽海峡だろう、宗谷海峡だろう。

伊藤 ほかにありますか。

夏目 いや、どこだろうというのがわからない。「間宮海峡だろう」とかね。

伊藤 ええ？

夏目 私は、そんなことをいうのだったら、それは違う。アリュウシヤンの千島列島のどこかに潜水艦が出られる口ってそんなにないんです。対馬海峡も西側はだめなんです。東側しか通れない。

ということは、ある程度隠密裏に通るにはね。だから、「いや、津島の西東を指すんじゃないか」とか。

武田 この年表にも「四海峡」と書いてあります。

夏目 あるでしょう。一時期、四海峡といわれた時期がたしかあつたはずですよ。それで、四海峡の四つ目はどこだろうと。

中島 中曽根さんの発言が、三、四とぶれてしまつてということですか。

夏目 ちょっとわからない。どう書いてある？

武田 「四海峡封鎖発言」としか書いてないのですけれども。

夏目 たしか、最初は四海峡といったと思うよ。それが、修正していまや三海峡になつちやつているのは、本人も反省したんですよ（笑）。

武田 一つ多かつた（笑）。

夏目 でも、防衛庁は、四海峡というのはちよつと無理だろうと。

問宮海峡というのは氷の海ですから、意味ないのですね。

伊藤 あそこは日本が封鎖できるところではないでしょう。

夏目 ないし。それから、こちらは意味があるんですよ。カムチヤツカのやつをオホーツク海に閉じ込めるには、どこかをやはりふさがないと。こちらばかりふさいでもだめなんです。どこかへ出てくるのですから。そこをふさぐことが必要だというのはあつた。そういう話を官邸なんかとやったことはあるんです。その結果、三海峡に収斂したんじゃないかなと思うのだけれども、ちよつと私は記憶があまりないね。

中島 アメリカに行かれて、三海峡封鎖発言をする間では、そういうお話を先生方とは。

夏目 いや、したことがない。

中島 そうですか。では本当に、唐突にアメリカでポンと。

夏目 あの人の信念なんでしょう。

伊藤 でも、三海峡封鎖の問題というのは前からあるのですしょう。

夏目 あるけれども、そんなものを突然持ち出す雰囲気はなかったし、予想もしていないという意味で申しあげたので、三海峡封鎖はもちろん自衛隊としては考えていましたよ。ただ、海峡封鎖というのはなかなか難しいですからね。

伊藤 まあ、いうは易いでしょうけれども。そういう発言があつて国内でいろいろ議論が出来ますけれども、そうすると防衛庁長官だとか何かに記者会見ということは出てこないのですか。

夏目 何回も出てきましたよ。だから、そういう意味でいまいつたような混乱もあるし、国会答弁になるとこちらもお手伝いさせられますからね。私なんか、四海峡の水深、幅員、そういうことをみんな調べて国会に臨んでいましたよ。

伊藤 質問はございましたか。

夏目 ありました。

■シーレーン防衛問題

佐道 まさにそのシーレーンの問題で、中曽根さんが帰ってこられたあと、いろいろ国会で議論になりました。政府の統一解釈が出されるという問題が出てくるのですけれども。

夏目 何の？

佐道 だいたいこの二つが特に議論になっていっていますけれども、有事の際にアメリカの船を自衛隊が護衛することが個別的自衛権の範囲内であるかどうかと。

夏目 それはべつに統一見解とか何とかではなくて、国会の質疑見解を示せということになってまとめた文書はあります。だけど、中曽根さんがどうのこうのということではないんです。国会議論の中から、そういうものをまとめる必要があるだろうと。で、外務省や法制局と相談をしながら、こうだよということをつたわけてです。

佐道 従来よりもシーレーン防衛の具体的中身がいろいろ問題になったというところはあるわけですね。シーレーン防衛をやるんだと。その場合に具体的な、いまの場合でしたら、日本の領土内のアメリカの船を守るということは従来からなのですけれども。

夏目 それは違う。違うというか、シーレーンというのはもともと千海里と鈴木総理がいつているように、千海里なんて領海でも何でもありませんね。公海上に及んでいんです。それは、アメリカがそういうものをやるのだったたらこういう装備が必要だよと、この前申しあげたように相当大量の防衛力を提示してきた。だけど、そんなものは大綱の水準をはるかに超えるようなことで、日本の実情からして、とても実現不可能である。ということ、五十七年夏の事務レベル協議で、「シーレーン」の問題が大事なことはよくわかる。アメリカがこういうことをいつてきているけれ

ども、我々はまだ納得できていないから、両方で研究しようじゃないか。たまたまガイドラインに基づく研究というのがあるから、その一環としてシーレーン防衛というのを特別取り上げて研究したらいかかか」といったら、「結構じゃないか」と。そういうことになって、その翌年の防衛協力小委員会か何かで正式に発足するわけです。だから、中身はまだそのときはわかっていないわけです。ただ、どの程度のものが必要かということをはじくための勉強はしたけれども、それは臨機応変で、どういう場合なんて考えられない。千差万別ですからね。敵の出方もわからないし。

佐道 例えば、三月七日に政府統一見解というのが発表されているのですけれども。

夏目 それはもう、予算委員会でだいぶおしまいの方に来てからでしょう。

佐道 はい。日本が攻撃されていない場合でも、三海峡封鎖をアメリカがやるということについても容認する可能性があるというようなことを。これは、もともと中曽根さんがいろいろおっしゃって。

夏目 そういったから、そういうことにせざるをえなくなったのでしょね。そこまで踏み込んだことをいおうと。まあ、踏み込んでいられるかどうかは別として、いままではそんなことを考えてもいない。アメリカがやるなんていうことは。だけど、日本は防衛出動が下令されていないときにそういうことはできないということとはいえる。それは非常に外交問題にも影響を及ぼす問題だし、日本が攻撃を受けていないのに三海峡を封鎖するなんていうことはできません。できることは、監視だとかそういうことはできるけれども、封鎖して通さないなんていうことはできない。そうすると結局、極東有事みたいなことになるかとアメリカがやる。それはしようがないだろうということなんです。

伊藤 容認するも何も、拒否することもできない。

夏目 まあ、拒否できないことはないですよ。

伊藤 そうですか。

夏目 領海内だったらね。津軽海峡なんていうのは領海みたいなものですから、けしからんといえればそれまでなんですけど、そういうことは、西側の一員としてはいいわなという。だけど、アメリカはそんなものは自分でやるとは思っていないんです。ところが、やはり話の筋として、そういうことはいわなければ格好悪いから統一見解でまとめただけの話で、アメリカは日本に期待しているんです。その後の動きを見てもそうなんです。日本は対潜能力を強化しようとしたら、もっとも効果的なのは港を出るときに捕まえるのがいちばんいいんです。やつつけるのは。その次は、海峡の出口の細いところで捕まえるのがいちばんいい。太平洋に出ましたら、もうだめなんです。それは大事なことはわかったし、いざとなったらやることもわかったけれども、そういう法理論で来ると、いつからやるんだとかやらないんだという話になると、よくいまでもいわれる神学論争みたいなことになるわけです。まだ当時は社会党が強い時期ですからね。

中島 野党からは、「いつからやるんだ」というような質問が。

夏目 それは年じゅう来ます。それでチョンボするのを待っているんだから。

佐道 中曽根さんは、従来の発言よりは半歩ずつ踏み込んで。

夏目 まあ、半歩ずつ。本人も承知して出ているんですよ。一%だつてそうです。「君らは星を離れるな」と私らにいうのだから。「おまえたちがいうとだめになるから、俺がいう。君たちは沈黙を守れ」というんですよ。「星を離れるな」と、そういう言葉でいつていましたけれども。

伊藤 それはおもしろいですね。

夏目 自分是一所懸命あちこちでしゃべったりするんです。役人がいうと物議を醸すけれども、やはり総理がある程度計算尽くでやったら何とかなると思っていたのでしょね。そういう意味で

は、あの人はやはり政治家です。

伊藤 「俺が責任を持ってやる」というのですね。

夏目 そういう気持ちがありありでした。だからアメリカの中曽根さんに対する信頼というのは非常に強かったですね。いまの小泉さんもそうでしょうけれども、とにかく当時はロン・ヤスの関係というのには、それまでには考えられないような親密な関係でした。

中島 歴代総理とそれほど違っていましたか。

夏目 全然違いますよ。もちろん向こうも大統領が民主党から共和党に代わったこともあるでしょうけれども、レーガンになったということもよかったのかもしれないけれども、ちょうど波長が合った。

伊藤 トップが代われれば、下も向こうは極端に代わりますね。こちら態度が変わると。

夏目 こちらは同じだけれども、官邸が代われればね。

伊藤 こちらは態度が変わるわけでしょう、人は代わらないけれども。

夏目 シャベリ方の視点がちよつと。

佐道 やはり国防省とか大使館の関係の人とか、反応がずいぶん変わってきましたか。

夏目 違いますね。だから、ことあるたびに持ち上げる発言が多かったですよ。蜜月時代で、日本とアメリカは切っても切れないようなことをあらゆる場でいいます。また、向こうもよく来るしね。これまでは大臣同士が行ったり来たりすることはあったけれども、事務レベルのアーミテージなんか、私がいるときでも何回来たかわからないしね。

伊藤 人間関係が非常に密になってくるわけですね。

夏目 どうしてもそうなります。

伊藤 やはりいちばんはアーミテージですか。

夏目 うん、当時はそうでした。あと、技術とか何とか調達の関

係は別の人ですけれども、安全保障政策に関してはアーミテージがいちばんのシャッポみたいな顔をしていつも来ました。その下に何とかという人がいたじゃないですか、『よみがえる日本海軍』とかって。

佐道 アワーですか。

夏目 彼なんかもアーミテージの下にいたけど。

佐道 日本国内の外務省との関係なんていうのはどうなるのでしょうか。日米関係が防衛庁を中心に国防省と議論とか関係が深まると、そもそも日米安保は自分の専管事項だというような。

夏目 それはありますね。だから、内心はアーミテージが来るなんてことはおもしろくないと思っていたかもしれないですね。彼は国防省だから、どうしてもこちらが正面になりますよ。もちろん外務省をのけるにはしませんが。しないけれども、これもいつか申しあげたかもしれないけれども、事務レベル協議なんかでいろいろなことをやっても、やはり向こうの国防総省も国務省がちよつと鬱陶しいんです。こちら外務省が鬱陶しいんです。同時に、向こうの制服はシビリアンも鬱陶しいんです。二重、三重にこうなっているから、どこまでが本音かよくわからないのだけれども、アーミテージなんかは我々と同じ立場の人間ですから、国防省でシビリアンですからそういうことはないのですけれども。だから、防衛研究なんか遅々として進まなかったのも、制服だけの世界で何かやろうとしていたからなかなか進まないのですね。

佐道 防衛局としても、アメリカ関係でいえば、外務省北米局なんかと連絡をとられることが多くなつたのですか。

夏目 多くなりますね。大使なんかの姿勢もうんと違います。

佐道 在日。

夏目 いや、アメリカにいる大使が。ということは、これもこの前申しあげたように、例えばハワイ協議なんて、あくまでも事務的なものでそれまでだれも注目しなかったのだけれども、双方の

首脳同士が、「ハワイ協議の場で議論しよう」ということをいっちゃったから、事務レベル協議そのものがなんとなくクローズアップされる。そうすると外務省も、それまでは陰の会議だからと思っただけでも、今度はそうはいかなくなってくる。外向きにいかなければいけないことになって、やはり関心を持たざるをえないです。だから、ハワイ協議なんていうと、防衛庁よりもむしろ外務省のほうが大勢行くくらいになっちゃった。大使もワシントンから来るしね。

佐道 わざわざ。

伊藤 松永（信雄）さんか。

佐道 いや、大河原（良雄）さん。

夏目 大河原さんも来ました。

佐道 ワシントンに自衛隊から行っているアタッシュの方がいらっしやいますよね。

夏目 彼らは来なかった……、いや、来たかなあ。いや、来ていなかった。

佐道 そういうことの比重というのやはり重要性をましてきたということになりますか。

夏目 ましてきていたでしょうね。そう思います、私は知りませんけれども。

伊藤 また国会に戻るのですけれども、国会が開かれている間じゅうは、防衛局長は張り付きですか。

夏目 半年間は張り付きです。予算委員会がおわると、いまは知りませんが、当時は予算委員会が三月の末というけれども四月までずれ込んでおわるでしょう。防衛庁というのは毎年法律を出しているわけでしょう。だから今度は法案の審議があります。その間に、やれ外務委員会だとか、やれ何だとかという、よその委員会に呼ばれます。内閣委員会と予算委員会のほかに。だから鬱陶しいですよ。

伊藤 防衛局長が答弁する場面というのは非常に多いわけですね。

夏目 多いですね。

伊藤 防衛庁関係ではいちばん。

夏目 もちろんいちばん多いです。ひどいときは、答えて自分の席に戻らないうちに次の質問が来ていますから、また途中で引き返さなきゃいけない。人間というのはやはり、歩いているときに、「こうやってやろう」と瞬間的にいろいろなことを考えるのですけれども、その余裕がない。委員長が「おまえ、そこへ座っていろ」というんですよ。答弁席のすぐ横にね。そうするとだめです。歩きながら、「どういつてごまかそうか」ということが出来なくなるからね。

伊藤 その当時、防衛局長をいじめた社会党の議員で印象的な人というのはだれですか。

夏目 やはり大出（俊）さんとか、土井たか子さんとか。土井たか子なんか、キャンキャンほえるし、大出さんも理詰めでうるさかったですよ。

伊藤 細かい質問もするのですか。

夏目 しますよ、けっこう。当時はね。

伊藤 いや、土井さん。

夏目 まだ委員長でもなかったから。

中島 内容的には、これは答えるのが難しいなという質問で何か印象に残っていることはございますか。

夏目 そんなに別に……、みんないやですよ。あんな雰囲気悪いところはないもの。精神衛生によくないしね。国会で答弁していると、人間あほになりますよ。専守防衛でしょう。

佐道 やれないことをやれといわれているみたいで（笑）。しかし、事前に質問取りとかを一応やるわけですよ。やはり社会党は事前のあれと違うことを出してくる。

夏目 ひととおりはいつてきますけれども、それはやはりそのと

きの成り行きとか、それから、彼らも本当に時限爆弾式にやるべきは教えないですよ。どうでもいいことは予告してくるけれども、ここで審議をとめてやろうというときは教えない。前にいくら頼んでも教えない。

伊藤 夏目先生の答弁でとまったことはありますか。

夏目 あるでしょうな。一回や二回はとまったことがあるんじゃないですか。そう長時間ではないけれども、あると思いますよ。何日もとまったことはないですね。だから、あんまり防衛庁に迷惑をかけるようなとまり方はしなかったと思います。

佐道 とめてやろうと思つて構えているときというのはわかるものですか。

夏目 わかりますよ。それは名うての人がいるからね。榎崎（弥之助）さんとか、大出さんとか。いちばんうるさかったのはそのくらいかな。あとだれがいたかな。

佐道 横路（節雄）さんなんていうのはどうですか。

夏目 もういないから。ああ、子ども（横路孝弘）はいたけれども、全然。

佐道 印象ないですか。

夏目 ないですね。質問にも立っていないなかったんじゃないかな。一時代前のときだと、横路とか、石橋（政嗣）とか、飛鳥田（一雄）、ああいう人がいたのでしょうけれども。

佐道 もう石橋さんはあんまり質問をしないで。

夏目 しなかったです。あのときはもう委員長になっていたんじゃないかな。

佐道 中曽根さんが総理になって、石橋委員長と対決をする。

夏目 それはやっていました。だけど、それはもう大所高所だったから、委員長と総理ですからね。だから、そんな予算委員会です細々した役人いじめみたいなことはなかったです。

伊藤 なんとかしているいろいろな言質を取ったり、足を払ったりとい

うような、結局それなのでしょ。

夏目 大出さんなんていうのは、そういう爆弾質問をして防衛庁が答弁に窮すると、「こんなことで審議が続けられるか」と座っちゃうんです。座られるとどうしようもないでしょう。そのまま空転でしょう。明らかにそれが狙いですから、いかんともしようがないですね。そういうことが彼らの狙いだから、答弁がまずかったとか、よかつたとかということとは関係ないですね。

伊藤 関係ないわけですね。

夏目 最初からそのつもりでいるんですよ。ただ、同じ問題でも答え方でとまらないように答える技術は多少ありますね。

伊藤 ご自分で考えて、夏目先生はけっこう答弁が上手だったじゃないですか。

夏目 いや、上手じゃないけど、私は誠心誠意答えているんですよ。

佐道 久々に出ましたね、「誠心誠意」(笑)。

伊藤 こういう答弁が名答弁ですよ(笑)。

佐道 誠心誠意お答えしても、やはりわかつてもらえない。

伊藤 まあ、そういうこともありますね。向こうは誠心誠意じゃないのなもの(笑)。

夏目 あんまりやると、「おまえ、答えるな」というんですね。「おまえには聞いてない、立つな。大臣に聞いとる。だめ」とかいつてね。

伊藤 でも、委員長が指名すればいいわけでしょう。

夏目 委員長がいつてくれればいいのですけれども、だいたい与党の委員長だからそこはもう承知していますから、すぐパツと政府委員を指名します。「政府委員」「委員長の指名でございませので」と断りを述べて、大臣みたいなことをいうわけですよ。

伊藤 しぶしぶといっているような。

佐道 谷川さんはどうでしたか。

夏目 わりと素直でしたからね。ああいう方でしたから、そんな

にややこしいことはお答えにならないで、統一見解みたいなことは多分谷川さんにやってもらったと思います。あれは読めばいいのですから。しかも、歴史に残るんです。

佐道 ああ、そうですね。

夏目 私なんか答えるのは支離滅裂で、あとで見ると、何をいつているのかわからない。

伊藤 そんなことはないと思いますが。

佐道 資料集、『防衛ハンドブック』とかいうのは、谷川長官が答えていると。

夏目 多いでしょう。それは、そういうふうになっちゃうんですよ。もめたやつは、まとめて統一見解みたいなものをつくって答弁する。それは大臣がちゃんと音吐朗朗読むから、首尾一貫した模範答弁になるんです。役人なんていうのはみじめなものですよ。政治家になりたいと思う役人がふえる。

伊藤 役人が政治家になって、大臣になるまでのほうが大変ですよ。

夏目 それはそうですね。

■政治家という選択肢

佐道 実際、先生は政治家にというあれが立ったわけですよ。

夏目 ちょっとだけどね。私は本気で考えたことはないですよ、そんなもの。そんな話をしてもいいの？

佐道 もちろん。

夏目 話ついでだからちょっとしますと、これは次官になってからですけれども、次官になってまだ二年目に入る前かな、金丸（信）さんと呼ばれたんです。「来年夏、選挙に出ないか」、「とんでもない。私はそういう能力もないし、第一金がない。役人の給料でやって、せいぜい使っても退職金を全額あてたつてたいしたことない」といったら、「君、金なんて自分がつくるものじゃないよ」と。それから、「いまからやっても、選挙なんて大変です」

といったら、「まだ日が高いから慌てることはないけどな」とか（笑）。どうもほわっとした話で、つかみどころがないんです。どこまで本気かと思つて聞いているでしょう。しばらくたつたら、ほかからまた来たんです。そういう話が出てくるからやらないかと。たまたまうちのおじが参議院議員でいたのですが、やめると言い出していたんです。ちょうどいい、そこへ後釜になればいいと。そういうことになって、一時は、私は長野なのですが、地元（長野）の新聞とか、その他いろいろ情報が流れ出たんです。うちの兄貴も、「そんなにいわれるのならしようがないじゃないか。金は何とか工面するよ」といつてくれたんだけど、その後兄貴が病気になるつたの。それで、「おい、勘弁してくれ。俺はもうだめだ」というんですね。ちょうどそれと歩調を合わすように、ほかの候補者が竹下（登）さんにアプローチして、なんとかかなりそうなんです。その人は土建屋さんなんです。その人は金をいっぱい持っている。そういうこともわかったので、金丸さんと竹下さんと両方で喧嘩したら、竹下さんが勝つて決まっているから（笑）。

伊藤 そうですか、あれは仲間だと思つていたけど（笑）。

夏目 仲間ですよ。仲間だけど、そういうところで実力を発揮するのは、金丸さんのようにアバウトな人より、竹下さんのように綿密な選挙の神様みたいな人ですからね。抜かりはないでしょうから。というのは当時からいわれていることですから、そんなことまでして、なりたいたいわけでもないのに、やめたといつてやめたんです。

伊藤 受けたわけではないですから、べつにだれに断りをする必要もないでしょう。

夏目 受けたわけでもありませんから、全然。当時、栗原（祐幸）さんという長官がいて、彼は間違えて全国比例区だと思つたのね。「あんなもの、やるもんじゃないよ」という。「いや、地方区だ」といったら、「あ、地方区ならいいよ」といった。

伊藤 「いいよ」と(笑)。

夏目 だけど、なんとしてもなれということではない。加藤紘一さんがそのうちに大臣になって来たんです。加藤紘一さんにもいつておかないとね。まだその話が生きているうちですから、どこかほかから聞いて、「俺は知らない」なんてへそを曲げられても困るから、「こういう話がありますが、私は気がないけれども、またどこかで耳に入るかもしれません」と。そうしたら、「エッ」とかいつてね。これがまた早いんだな。山崎拓さんとか、ああいうのと仲がいいでしょう。それから羽田(孜)さん、長野県に羽田総理が。その人と情報をとつたら、竹下の話がわかったんです。それで、「やめた」といつて。

伊藤 そうですか。では、追い込まれたら、そういうことになつたかもしれないですね。

夏目 いやいや、ならないですよ。うちの女房に冗談めかしていつたら、「とんでもない! 離婚してくれ」といつたの。「それはありがたい話だ」つて。

佐道 どこまで本当かわからないですね(笑)。

夏目 本当です。

伊藤 目くらましだ(笑)。

佐道 これは記録に残してもいいのですか。後世に残る記録(笑)。

夏目 そんな話は一時期の笑い話でね。でも、当時長野県警から防衛庁の教育局長に来た人がいるんですよ。名前は何といつたかな。

佐道 大高(時男)さんですか。

夏目 大高さん。彼が、「夏目さん、地元ではうわさなんだけど、本当に出るんですか」なんていつてきて、地元ではそうなつちやつているのね。結局その選挙のときには、私が出ないというので、何期か前に一度参議院をやつて、一期くらいでやめた向山さんという年寄りがいるんです。その人を後任にするというので、その人が出たんです。そうしたら当選しちゃつた。竹下さんが推した

人は落つこちた。

伊藤 抜かりがあつたんじゃありませんか。

夏目 ところが、その次のときからはその人が。いまは民主党か何かにいるんじゃないかな。羽田さんにくつついてはいるからね。

伊藤 羽田さんについていけばそうだな。

夏目 だから、向山さんのような年寄りが参議院議員になつて、あの人が通るのだから、ひよつとしたら通つたんじゃなにかといふ話もあつたけど、まあ、ばかばかしい。

伊藤 しかしまあ、次官くらいからスタートして議員になつたら、大臣になるまでに。

夏目 いや、あほくさくてやつていられないですよ。

伊藤 ちよつと無理でしょう。

佐道 加藤陽三さんがそうでしたね。

夏目 やつぱりあそこも年功序列の世界ですからね。何回か当選しないと使い走り、人数揃えの、「どこそこの委員会は人が足りないから、おまえが行つて席をふさげ」とかそんなことばかりやつて、そんな国会議員なんかやつていられるかと思ひましたね。まだ防衛事務次官のほうがりやりたいことをやれるじゃないですか。おわつちやだめだけどね。そういうことで、政治家になりた

いと想つたこともないし。

■シーレーン防衛研究の基本的枠組みに合意

伊藤 では元に戻して、先ほどお話しになりましたシーレーン防衛に関する日米共同研究というのがスタートして、研究の基本的枠組みについて合意されたというような、これは新聞報道ですか。

佐道 そうです。

伊藤 というのがありました。

夏目 これは防衛協力小委員会でしょう。だから、これは翌年の

三月、前の年に共同研究をしないかということに納得してもらって、そして舞台を移したわけですね。これはガイドラインの機関ですから。

伊藤 だいたいこんな方向で研究していこうという枠組みなのですね。何かご記憶のあることはございますか。

夏目 極めて常識的なことですよ。まず、極東におけるソ連軍の潜水艦がどうか、戦闘機がどうか、アメリカの極東における軍隊がどうか、そういうことをしてやるかどうか、そういうことを想定しながら、そのためにはどの程度の兵力が。もちろん実際の防衛作戦研究ではないんですよ。出だしが出だしですから、防衛力整備のための前提になる研究ですから、ちよつとほかのやつは性格が違つかもしれない。純粋な作戦計画の研究ではないのです。しかし、作戦に関しての研究もしなければ規模も出てきませんから、そういう意味ではそう乖離したものではない。

伊藤 何か想定しなければ計算できないですね。

夏目 そう。ところが、なかなかアメリカと日本の前提条件が合わないものですかね。

伊藤 前提条件が違うというのは何ですか。

夏目 アメリカというのは、いちばん怖いのは艦隊防空と対潜なんです。日本は、アメリカの船を守るためにシーレーン防衛をやるわけではないでしょう。自分たちの海上交通を確保して、日本が存立していくために必要な船団を守らなきゃいけません。輸入してくる物資を守らなきゃいけません。アメリカが持っているのは、「俺たちの船はだいじょうぶか」とか、ほとんどそういうところから出発しているのですから。アメリカが日本のシーレーン防衛能力が不足している、不足しているというのは、「日本のためにも必要だろうけれども」といいながら、実はそういうことなんです。だから中曾根さんが、「不沈空母にする」とか、「三海峡ふさぐ」ということが彼らにとっては多とすること

であって、日本側が、「我が国へ入ってくる食料や石油を守るんだ」なんていうことだけをいったのでは、ちよつとすれ違ひみたいなことはあるんです。

中島 アメリカとすると、直接的には第七艦隊を守ってほしいということなんです。

夏目 まあ、それが大きいでしょう。ただ、そういうことだけではもちろん日本もうんといえないけど、それが腹の中に見え見えであるわけです。そのために五十七年八月だかの事務レベル協議では、インターオペラビリティのほかに、シーレーン防衛能力、イージス艦とか、FSXを早くつくれとか、OTHまで言ってきた。ま、いまは消えましたけれども。ということは、OTHなんて、日本は要らないですよ。海の遠くにいるから必要なんですね。そういうことまでいつてきているのだから、アメリカとこの小委員会には非常に単細胞ですね。

中島 基本的なことと恐縮なんですけれども、この小委員会には海上自衛隊からも参加しているわけですね。

夏目 もちろん入っています。海上自衛隊が主力だと思います。もちろん統幕主宰でやっていると思いますが、海上自衛隊が主として。航空自衛隊も参加していると思うけれども。

中島 先ほどの先生のお話ですけれども、アメリカ側と日本側と基本的な前提で異なっていると。海上自衛隊のスタンスとしてはどういふスタンスだったのでしょうか。

夏目 海上自衛隊は出発は船団護衛なんだから。

中島 それは日本のためということですね。

夏目 もちろん。

伊藤 日本は石油の道を絶たれたら存立しえない。

夏目 それは日本にとって由々しき問題だと、そこまでは正しいんですよ。

伊藤 それはアメリカも認めるわけでしょう。

夏目 認めています。「そのためにもあなた方も必要でしょう。それにはこんなものでは足りないよ」という。だけど、その背景にはそういうこともあるから、一般的ではなくて、個々の要求として、「こういうものが足りないじゃないか」といつてくるのが見え見えだということなんです。

伊藤 そこから腹の底が見えているということですね。

佐道 海上自衛隊の考え方としては、大前提として船団護衛があるとしても、そのあとの海上自衛隊関係のお買い物リストからすると、P3Cを百機体制とか。

夏目 それからずつと。もちろんP3Cも、ちよつとこれはまたややこしいのだけど、船団護衛というのは海上自衛隊としては牢乎として長年抱いていたことなんです。しかし、船団護衛なんてもう古いぞと。そんなことはできやしないんだ。むしろ自由航行にして、その周辺の安全を確保しておくことによって、船は自由に航行してもらうんだ。そんな何十隻の船団を組んで行くなんていう時代じゃないぞとということでは途中で目覚めたんです。だから、そこからは船団護衛はないのだけれども、しかし、それは相当な兵力が要るんですね。船にしたって、P3Cにしたって、何直交代でどうのこうのとやると。だからそういう意味でも足りないよと。確かに足りないでしょうね。千海里をやるには相当。

伊藤 それはそうでしょう、とんでもなく広い。

夏目 アメリカのいうのも無碍に否定はできないんです。鈴木総理がいつちやつたから。

中島 ああ、それが大きかった。

夏目 それは大きいですね。

中島 海上自衛隊がその船団護衛を転換というふうになったのはいつぐらいからなのでしょう。

夏目 それは私が防衛局長くらゐのときじゃないかと思うんです。というのは、海上自衛隊はそれまでどうしても船団護衛とい

う考えを持っていました。航路帯を三つつくつてどうのこうのとか、フィリピンとか、台湾とか、北米航路、そういうことをいつていましたからね。極端なやつは航路帯の幅まで計算してました。航路帯の幅をどうしたかという、潜水艦の魚雷攻撃をこの外で食い止めれば中を通っている船には被害が及ばないと、ややこしい計算をしてそういうことをいつていましたから。そこで国会で、「シーレーン、シーレーンって、海の上に何か線があるのか」とか、そういう議論があつてややこしくてしようがない。それで私は、「船団護衛みたいなことをいうのはおかしいんじゃないか。もう鈴木総理がこういつちやつたのだから、とにかく周辺海域の安全確保で、どこにかいわなくていいのではないか。シーレーンというのはこういうものだというふうには定義づけよう。海上交通の安全を確保することなんだ」といつて、以後、それでもうその議論はストップしたんです。それまでは航路帯の議論で四苦八苦しているんだよ。

伊藤 これはやはり第二次世界大戦の教訓なんですね。

夏目 そうなんです。それから、私が官房長るときにはまだそれだったから、「あれはおかしいぞ。俺もとてもあんな答弁に耐えられない。もたないから、もうやめてくれ」と長田(博)という幕僚長にいつたら、「あなたの考えで結構です」という話で、いまはもうそういうことはなくなつたんです。最初はこうやつて線を引いて、『防衛白書』にも線を引いたのがあるんじゃないかな。

中島 あるかもしれないですね。

夏目 ただし、その三航路というのは多少の意味があるんですよ。なぜかという、潜水艦から船を守るのにちばん適しているという意味で意味があるんです。一つは島伝いなんです。こちらはマリアナ海溝の何かで、やはり潜水艦を防ぐにはいちばん適地なんです。ここはちよつと別ですけれども。そういうことも背景にあったのかもしれないけれども、それ以後、あんまりいわなく

なりました。

中島 先ほどのお話に戻るのですけれども、日本側とすれば、日本のための海上交通の保護というのが一義的な目的で、アメリカのほうではできれば第七艦隊を守ってほしいと。よく日本の海上自衛隊とアメリカ海軍のつながりが非常に緊密であるというようなことをいろいろ聞きます。はたして海上自衛隊の方々はどういうアメリカからの無言のプレッシャーに対してどういうふうにご考えておられたのかなと。

夏目 海上自衛隊はアメリカのいうとおりだよ、常に。

中島 つまり、悪くいう方は、「海上自衛隊は日本よりアメリカのほうを向いている」という方も。

夏目 だからそういう意味で申しあげただけど（笑）。

中島 そうですか。

夏目 それはしようがないですよ。これまた多少歴史的な話で、日本陸軍というのは終戦で壊滅的打撃を受けて、とことん解体させられちゃった。ところが、日本の海軍もやつつけられたのだけど、アメリカ海軍は日本海軍に対する尊敬の念というのを戦時中からずっと持っていた。おわってからもまだそういうことをいっ人がいたものだから、海上自衛隊はこうなった（天狗になった）のね。「負けたのは陸軍で、俺たちではない」みたいな。そこまていわないにしても、うぬぼれは消えなかったんです。だから、戦後もずっと海軍と海上自衛隊のつながりというのは連続と続いていますね。陸上自衛隊は、「旧陸軍は俺たちとは違う人種だ」くらいに思っているんですよ。航空自衛隊は全然新しく生まれたものだからいいのですけれども。阿川尚之とか、あの人達なんかも海軍への郷愁のようなものが強いでしょう。海上自衛隊というのは、そういう意味では日本海軍のいいところ、悪いところ、いまでもその遺産を背負ってきている。だからかえってだめなところがあるんですよ。獅子文六にいわせると「海軍軍人には文化の

匂いがある」なんていつてましたけど、どうでしょうか。

伊藤 海上自衛隊の人が聞いたたら、驚くだろうなあ（笑）。

夏目 ほんと、叱られます。

伊藤 いやあ、少しは脅かしたつていいんです。

夏目 でも、そういうふうになんかやたら海上自衛隊を誉める人もいるんですよ。

伊藤 ファンが多いんですよね。

夏目 ファンが多いんです。中曽根さんもそうです。

伊藤 あの人は海軍短現だからな。

夏目 海軍というのはやはり人の使い方が上手だったんですな。予備学生で来たやつをみんな士官扱いにしたんです。陸は兵隊から順に上げたのですね。

佐道 海原さんだ。

夏目 まあ、陸は数も多いからでしょうけれども。海上自衛隊がある種鼻持ちならないところはそういうところにあるんですよ。

中島 シーレーン防衛の日米の研究に関して、海上自衛隊のアメリカに対しての姿勢が反映された具体的な例というか、つまりアメリカ向きの姿勢をとっていたというのは何か覚えていらつしやいますか。

夏目 すべてそうじゃないですか。P3Cの増産もそうだし、イージス艦に異常な熱意を燃やして。あの当時、イージス艦というのをつくるような客観的雰囲気はなかったんです。まあ、いまになればつくっておいてよかったなと思うのですけれども、とにかく異常な熱意でした。アメリカの要請があったから。

伊藤 しかし、アメリカの要請があつて、それが通れば自分たちのプラスになるということですね。

夏目 それはそうだけど、それは裏返しにすると、陸上自衛隊が辛い目にあうんですよ。パイの大きさは決まっていますからね。だから陸上自衛隊は年じゅうひがんでいましたよ。何でも海軍で

なきやだめだといって。陸軍はつながりがないから。

佐道 日米防衛協力で海上自衛隊と米海軍がバツと出て行くわけですからね。第七艦隊所属海上自衛隊という(笑)。

夏目 ただ、七艦隊は対潜能力と対空能力は弱いんです。要するに第七艦隊というのは空母を主体とした機動打撃力なんです。とにかく航空母艦で敵をやっつけて、基地をやっつけて、そこへ海兵隊を乗っけていってワツとやる、そういうのが主たる任務であって、来る飛行機をやっつけるとか、潜水艦をやっつけるといのは二の次、三の次なんです。七艦隊の機能から見ても、目的から見ても。だから、千海里の範囲内がいいからそういうことは日本がやってくれたら、彼らにとってはこんなありがたい話はないわけです。

伊藤 やっつける相手は同じだから。

夏目 それは結構な話なんです。いまはもう国際分業の時代なので、何もかも西側の一員としてアメリカと一緒にやるのだったら、そういう役割分担をやるのは結構な話だし、それは賛成なんですけど、あんまりそういうものを外へ出すと、ほかの自衛隊だっていますしね。上手にやらないと。

■レーガン大統領のSDI構想

伊藤 よくわかりますけれども。次にSDIの構想ですけれども、レーガンが発表して。

夏目 これが先ほどバックファイアとかミンスクとかソ連の極東における軍事力増強のことを申し上げましたが、この話の出所の第一はSS20なんです。SS20をソ連が配備して、これはヨーロッパでも大騒ぎになったのです。たしかヨーロッパでアメリカがパーシングを持っていくといったら反対運動が起きたでしょう。そんなこんながあつて、なかなか西側防衛のためにはほかに知恵もないということもあつて、やはりSDIしかないだろ

うということになったものと思います。だいたい夢に近いみたいな話でした。

伊藤 これから研究しようということですからね。

夏目 だから、要するに私がいいたいことは、アメリカというのは、これがだめなら次はこれ、これがだめならこれと、手を変え品を変えていろいろなことをいつてくるのです。これだつて、金を出して一緒に研究しようという話ですよ。だけど、どこまでできるのかわからない。いまはこれとは形を変えたものですが多少進んできていますけれども、当時は本当に夢みたいな話でした。結局はこれも中曽根さんが協力するみたいなことをいわれて、共同研究という話になる。だから、アメリカにとつて中曽根さんというのは本当にいいときに経理をやっていたということだと思います。

伊藤 中曽根さんもいまや、「早くやめてくれ」といわれて、抵抗していますね。防衛局長は短いのです。

夏目 一年なんです。

■事務次官時代の長官、政務次官

伊藤 それで事務次官になるわけですが、次官の人事というのはだれが。

夏目 これは大臣が決めるんです。

伊藤 大臣が決めるといつたつて、それは形式の問題でしょう。

夏目 それは前の次官。

伊藤 前の次官ですか。

夏目 次官と大臣が相談して決めるんです。ただ最近、そのころからもうそうですけれども、官邸の了解を得ます。正式な了解ではないけれども、話して、「うん、特段異存ないな」と。「それは困る」というのはめつたにないだろうけれども、そういうことをいわれないように、事前にこうだということは話しているようです。

昔は知りませんが、もう私のころはそういうのがあったのではないですか。

伊藤 官邸がいやだという可能性があるから慎重にやるということでしょうか。

夏目 それもありますし、官邸というのは情報が山ほど来ているんですよ。スキヤングルの種とか。いまはもつとひどいんじゃないの。インターネットか何かで。

中島 そうかもしれないですね。

伊藤 そういふのはやはり警察ですか。

夏目 いやいや、投書から、新聞社から、何から、あらゆるうわさ。よく知っていますよ。

佐道 怪文書みたいな類だつて。

夏目 怪文書の類ももちろん含めてですけど、とにかくいろんな。もちろん秘書官が破って捨てているものもあるだろうけれども、これかと思うものは上げていっているのでしょうか、きつと。

伊藤 そういう情報管理をしている部署があるのでしょうかね。

夏目 秘書官がやっているのでしょうか。全部上げたらきりがなしね。だけど、総理もよく知っていますよ。私が行ったときも、「誰さんはいじょうぶですか」とかというくらいだからね。

伊藤 夏目さんが事務次官をおやめになるときもやはり同じようなことをやったわけですか。

夏目 そう思います。……ああ、私が？

伊藤 ええ。

夏目 もちろん総理のところへ直接は行きませんが、官房長官のところへは行きます。

伊藤 それで打診するということですか。

夏目 はい。

佐道 先生がおなりになるときは、前任の吉野（實）さんと谷川さんが相談をするわけですか。

夏目 そういう人事の話は弱いなあ、知らないもの。

伊藤 まあ、ご自分の人事は知らないでしようけれども。

先生の次官時代の防衛庁長官が、谷川さんで、栗原さんで、そのあと加藤紘一さんと。政務次官が林大幹さんから中村喜四郎さん、ついで村上正邦さんと、この顔ぶれを見たら、向こう側は落っこちた人もいるし、落ち損ねた人もいるし（笑）。

夏目 一人落ちたね。

伊藤 あれ、中村喜四郎さんも落ちましたからね。あの人は落ちたのではないですか。

佐道 捕まりましたよ。

夏目 あ、捕まったんだつて。じゃあ二人だ。

佐道 一応、裁判で争っていますけれども。

伊藤 今度は、加藤紘一さんは週刊誌によると今度の選挙で二重丸がついているから復活してくるのかもしれないけれども。さつき人事の話はいやだとおっしゃったので、こちらから攻めますが。

夏目 まあ、次官が多分大臣と相談して決めると思うんです。で、官邸に行つて、あらかじめそれとなしの話をして、こういうことで考えていますと総理の耳に入つて、異存がないようでしたら、そのままいくのでしょうかね。ただ、やはり政治家というのはいろいろなことをいう人もいますよ。表立ってはいわなければ、あまたこうだと雑音を入れる人がいますからね。大臣にも

官邸にも。だから、それは私にはわからない。噂話として聞きませうけれども。「おまえさん、もつと運動したほうがいいんじゃないか」とかね。「運動して何だよ」というと、「だまっていますとだんだん変なふうになるぞ」とか、そういう人もいますよ。どこまで本當かわからないですけども。このときも、本當は私より適任者がいたんです。塩田（章）さんという人で、これは陸士五十九期かな。私の防衛局長の前任者で、そちらのほうが年もいいしよかつたのかもしれない。私みたいにやくざではなく、陸士の

出身で軍人らしいしね。だけどまあ、なっちゃったものはしょうがないですか。

佐道 でも、先生の経歴を拜見すると、まったく問題ないというか。当然のごとく。

夏目 まあ、酒癖もいいし、女癖もいいですから、非難されるべきうわさがないから。

伊藤 うわさがない（笑）。ということは、いまおっしゃったもう一人の方はうわさがあったと。

夏目 いや、そうじゃないけれども。私より真面目だし、能力もあつたでしょうがね。次官と大臣がそういう中で決めたのでしよう。

伊藤 ではまあ、そちらは飛ばして、いまの大臣、政務次官、この中で。

夏目 林大幹という方は、安岡正篤のお弟子さんなんです。立派な聖人君子みたいな人、はじめですね。だいたい安岡正篤の本を私にごそっとくれて、「勉強してください」なんていって。そんなもの読む気がしない、あんな難しいもの。そういう方でした。これは千葉でしよう。茨城か。

伊藤 どこだったかなあ。

夏目 千葉だか茨城の人で、真面目なおとなしい方なんだけれども、そういう人格者でした。だけど、防衛庁でそんな目立つこともなさらないし、全然そういう意味ではもつとも理想的な政務次官。

伊藤 余計なことをしないと。

夏目 中村喜四郎さんというのは、まだ若いうちでしよう。

中島 三十くらいですかね。

佐道 この当時は。

夏目 この人は金丸さんのいちばん弟子みたいな。この人もまだ当時は若かったから謙虚そのものでしたしね。

伊藤 まだ初々しいわけですね。

夏目 この人で一つ印象にあるのは、後日の話だけど、栗原さん

と一緒にやめられるのですよね。大臣がやめて、一緒に政務次官をやめる。このときに私が大臣の送別の辞を全職員の前でやった。原稿なしなんです。で、途中で感極まって、演技力があるんですねえ、涙を流さんばかりにしゃべった。中村喜四郎さんのときには、紙に書いたやつをびらびらと読んでおしまいだった。中村政務次官に「それはちょっとひどいんじゃないですか」と文句をいわれたことがある（笑）。「そういわれればそうだが、うかつだったな」と反省はしたのだけれども。

佐道 先生が涙を流さんばかりにやられたわけですか。

夏目 いや、涙を流さんばかりって、ちょっと胸が詰まっただけでしたけれどもね。

伊藤 それだけ栗原さんという人はあれだったのですか。

夏目 ちょっと付き合っても深かったしね。

伊藤 いくら何でも演技だけでそれはできないですね。

夏目 まあ多少、気持ちがある程度動いたのでしょうね。いい大臣だったから。

伊藤 どういう意味ですか。

夏目 栗原さんという人は南原繁の弟子なんです。農協へ入って、そして県会議員か何かをやって国会議員になったのかな。出は大平宏池会なんです。宏池会だけれども、鈴木善幸さんとか、加藤紘一さんとか、宮沢喜一さんは大嫌いなんです。大平さんとか、伊東正義さんとか、そういう方に私淑しておられた。

伊藤 ああ、こっちの派だ。

夏目 ま、うるさいんですよ。来て二、三日目に、出勤するやいなや私は呼ばれて、「防衛庁の始業時間は何時だ」というんです。たしか八時半だったかな。「八時半です」といったら、「いま何時だ」と。もう九時過ぎていますわな。だれも来てないというんだね。来ているのは、幕僚長か何かが一、三人来ているのかな。「なんだ、これは」というんです。

うか金丸さんなんかは小遣をくれたようですよ。私は金丸さんのときは海外へ行ったことがないですけど、そういうことがあったらしくて。私は呼ばれて、「防衛庁はそういう習慣があるのか」といんです。私は知らないから、「そんな習慣はないと思いません」といったら、「いや、秘書官にそういうことが必要じゃないかといわれたけど、もしそんなことが習慣になっていたらおかしい」とかいつてね。「ああ、そうか」と思ったのだけれども、ちゃんと公費で行くのだから十分でしょうということなんです。それで結局、そういうことになっちゃったんだね（笑）。いや、それはだれでもそんなことをするわけではないのでしようけれども、そういう人もいたのでしよう。私はもらったことがないんです。あんまり出張に行つたことがないからね。谷川さんのときにハワイに行くときにくれなかつたし、伊藤さんは一緒に行つたけどくれないしね。でも、どこの役所でも。

伊藤 それはあるみたいな話を聞きますけれども。

夏目 大臣が持つている金、自分のポケットマネーでくれるんですよ。だから、どうつていうことではないのでしようけれども。加藤絃一さんが、私はやめる直前に中国に行つたのですけれども、そのときによこそうとした。私は栗原さんの話があつたのでノーサンキューと断つたら、不興げな顔をして、またしまつたけど。佐道 いつの間にか派に抱えられたかもしれないですね。

伊藤 「これはやつぱり栗原派だからなあ」と。

夏目 そう思われたかもしれないですね。その後、加藤さんがやめて党へ残つて何かをやつているときに、私が防大へ行くことになつてあいさつに行つたら、「また栗原さんに口説かれたのでしよう」なんていつて同情していました。

伊藤 同情ですか。

夏目 彼は同情みたいな顔をしていただけね。まあ、同情でしょう。栗原さんというのはアメリカに行つてもいいことをいい

ますし、総理とかにもいうし、いうべきことをきちつといつてくれる。絶対に折れないですからね。筋を通す人です。ま、ちよつとうるさいけど。

伊藤 でも、次官なんかがゆつくり話しをすれば通るわけですね。夏目 私の目の前で統幕議長なんかを怒鳴り散らしてましたからね。ちよつと不適切なことをいうと、「君の言い方は無礼だ」と怒るんですよ。私は一回もないんです。

伊藤 ないんですか。

夏目 一度も怒られない。

伊藤 しかし、夏目先生は人に怒られたことがないですね。

夏目 要領がいいんです。

伊藤 要領がいいのですか。誠心誠意だから。

夏目 この人はどういふことが嫌いか好きかとわかるんです。

伊藤 そうですか（笑）、それをぜひ教えていただきたい。

夏目 私が栗原さんと馬が合つていたというのは防衛庁の中で有名なですよ。大臣をやめてから後も静岡へ何遍でも飲みに行つているんです。御招きをうけて。行くと、奥さんと二人で車を運転して伊豆半島を案内してくれるんです。非常に親切ですよ。

佐道 引退されたいまもお元気ですか。

夏目 やつぱり年ですからね。会うたびに年を取つたなと思うけれども、元気は元気ですよ。

伊藤 栗原さんなんてインタビュしたいところだなあ。

夏目 そういふいきさつがあるのですが、それをみんな本にしちゃつた。私の人事のことから何からみんなまとめて本にして、あちこちへ配つていります。だから周知の事実なんです。

中島 それは回想録か何か。

夏目 回想録。

伊藤 一般の本屋から出したのですか。

夏目 いやあ、あの種の本は売れるものではないでしょう。自費

出版でしょう。

伊藤 それを見せてくださいよ。

夏目 この次に持つてきます。ちよつとね、あんまり恥をさらすと困るんだけど、まあ、よく書いてくれたんでしょね。そのかわり、その後勲章をもらわれた時は、「おまえ、一筆書け」と持つてくるんですよ。それで私は苦心して想い出話などを書くんですよ。

伊藤 今までの話を伺っていれば(笑)。しかしおもしろいものですね、人間の付き合いというのは。

夏目 次官をやめてから、私は再就職を拒否していたんです。うちでゴロゴロしていたんですよ。そうしたら呼び出されて、「いつまでゴロゴロしているんだ。何か希望はあるか」というから、「ない」と。これで金をもらえるのなら文句はないのだけど、ゴロゴロしていたら金もくるところがないですからね。「役人がいいのか、民間がいいのか」といろいろ聞かれたんです。「なるべく暇があつて、実入りのいいところがいいですね」なんていったら、「ふざけんじゃねえ」と。結局、防大へ行くことになったのも、あの人が総理や何やらを口説いてしたんですよ。私はいやだったんですがね。「とにかく暇がない。一晩考えて返事をしろ。ただし、ノーはだめだぞ」と。

伊藤 そういう言い方があるんだ(笑)。

武田 それはおもしろい言い方ですね。

夏目 政治家だから、やっぱり殿様みたいところがあるんですよ。後輩やら、いろいろな防大の関係者にもちよつと相談したんだけど、「そういわれるのならばいいんじゃないですか」といわれたから、「じゃあ、まあ、いいか。ただし、俺は先生の経験はないよ。人格者でもないよ。それでよければ」といったのですよね。そうしたらやっぱり新聞で書かれました。夏目バーなんかを開いているやつがいいのかとか。好きな歌はリリー・マリレーン

だそうだが、反戦歌を歌うのは防大校長としてふさわしくないと。伊藤 やはり加藤さんがそういうふうに行ったのは本当なんですよ。ね。

夏目 だからみんなよく知っているんですよ。

伊藤 村上さんはさつきも名前が出ましたよね。

夏目 そういうことは熱心だし、面倒見のいい人でしたよ。よくごちそうしてくれるような人がいい人なら、あんないい人はいない。伊藤 そうですか、ご馳走が好きなんですか。

夏目 親分肌なんじゃないでしょうか。やっぱり大勢集めてシヤツポになつて飲むのが好きですからね。結構あの人も顔が広い人でしたから。統幕議長なんかも中曽根さんの研究所の囑託で入れたりして面倒見のいい人でした。それから、あの人はアメフトが好きで、私が防大へ行ってから、アメフトの学生を何十人も呼んで、イタリアンレストランを借り切つて、一晩、飲めや歌えやで。そういうことを平気でやつてくれた人でした。

伊藤 じゃあ、そういうお金がどこから出たかが問題になったんだな(笑)。

夏目 いまになると、怪しいんじゃないかと。

佐道 まあ、お金にはそう書いていませんからね。

伊藤 政務次官としてはどうだったのですか。

夏目 仕事はそんなにしないですよ。

伊藤 もちろん。

夏目 政務次官は邪魔をしないのがいちばんいい。静かにしてくれているのが、あんまり口出しをするのはうるさいのですね。口出しをすると、ろくでもないことしかいわないですからね。そうするとやはり、政務次官というのは部隊を回つて歩く。で、隊員を激励して歩いているのがいいですね。

伊藤 やはりちゃんと勉強してもらわなきゃ困るのではないですか。ヘタな勉強はやめたほうがいいのですか。

夏目 勉強……、私が見たのは、一応レクチャーはするんですよ。だけど、そんなのはあまり。私は、政務次官というのは、勉強とか仕事ではそういう記憶に残るような人はあんまりいないですね。

佐道 政務次官をきっかけにして、例えば山崎拓さんのように防衛族になるとか。

夏目 村上さんもその一人です。

佐道 中村さんはそうでもなかったですね。

伊藤 だってあれは建設族でしょう。

佐道 建設族ですね。

夏目 たしか中村さんの政務次官という期間は短かったしね。

佐道 防衛庁長官としての加藤紘一さんというのはどうだったのですか。

夏目 うーん、ここが問題だよ。まあ、あとで速記録をまた。

伊藤 消してもいいですよ。

夏目 消してもいいということにしてね。私はあの人のことではない。ちばん納得できなかったのは、防衛長官としてふさわしくないかと思っただけ、あの人は防衛庁・自衛隊が嫌いなんです。なつたことを後悔しているくらいなんです。ただ、将来の総理として、防衛庁長官でも何でも大臣のポストを幾つかやらないといかんというので我慢してなつているという、そういう感じなんです。だから防衛庁長官として目立つことは何もしないんです。どういふことかという、例えば部隊へ行ったりすると、よく戦闘機のコックピットへ座ったり、戦車の上に乗って喜ぶ人がいるでしょう。そういうのも一切いやなんです。そんな写真が新聞に出たら、イメージ上マイナスになると。あの人はリベラルな人ですから、そういう自衛隊に染まったような姿は世間に知らせたくないという気持ちがあった。だから愛情が伝わってこないですね。非常にドライな冷たさを感じるんです。まあ、そういう人なのかなと思っただけ。

伊藤 どちらかという、リベラルというよりも反米。

夏目 うーん、反米ではないけれども、あんまり自衛隊とかそういうものは。宏池会の特色をそのまま持った、鈴木善幸さんとかそういう人と同じですね。

伊藤 だけど、宏池会の人でも宮沢さんみたいに、防衛問題にそれほど熱心ではないかもしれないけれども、中国とかソ連とかと。

夏目 加藤さんはまあ。

伊藤 そっちに近いでしょう。

夏目 そうかもしれないね。

伊藤 ちよつと危ない人という感じを僕らは。

夏目 自衛隊のときはあんまり。隊員もみんなそういうのを肌で感じますから、多分私と同じ気持ちを持った人が多いと思うんです。特別な人以外は。それから、私はやめてしばらく防衛庁顧問をやったんです。そのときもときどき呼ばれて、「いまの政府の国会の答弁資料で、私がこう思う」と、直つちやうですよ」というんですよ。

伊藤 え？

夏目 例えば、ある問題について答弁資料が作られたとする。それに対して、大臣が「これはおかしいな」というようなことをちよつとつぶやくと、書き直してきちゃう。こんな安直なことでないじょうぶなんです」と。よく見ると、要するに大臣のいった趣旨にあわせてちよつと手直ししてある。それも情けないのだけれども、とんでもなく右のものを左のものにするほどのものではないんです。言葉の綾みたいなのところがあるからどうでもいいじゃないかと思うのだけれども、そういうことをOBの俺にいわなくてもいいじゃないかと。それから、次の次官をだれにするという相談があつて、私がそれは本来あなたが判断すべきだが、私の意見は言われればこうこうだといったの。私がやめてからですよ。そうしたら、「あの人がこうこういった」と新聞記者にしゃべるんだね。

伊藤 それは物騒だ。

夏目 だから、外れたやつが俺のことを恨むわけ。

佐道 それはそうですね。

夏目 新聞記者なんて、好意的なものもいれば、批判的なものもいるんだよね。ことほどさように、やっていることが全然なっておらん。だから、これはだめだと思った。この人は信用できないなと思つたら、案の定、何とか反乱事件を起こすじゃないですか。

伊藤 加藤の乱ですね。

夏目 だから、あれはやはり総理なんかになれるかなと。

佐道 防衛庁長官になられた当時も、いわゆる宏池会の将来のプ

リンスといえますか、有望な政治家だという評判。

夏目 そういう顔をしているからだめなんです。自衛隊にちょっとでも理解を示すような顔をすることが将来の自分のイメージにマイナスになると思つたんじゃないですか。

伊藤 まあ、わからないことはないですけどもね。この人のあの経歴を見ても。さて、どうしましょうか。五時ちょうどになりましたけれども、またこの次の項目もお聞きしたいことがいっぱいありますけれども、また人の話になるから消されるといけませんけれども、十五番からこの次にしましょう。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第13回

開催日：2003年11月21日（金）

開催時刻：13時55分

終了時刻：16時05分

開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

岡田志津枝（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：

有限会社ペンハウス 矢沢麻里

第13回インタビュー質問項目

2003年11月21日

今回は防衛事務次官時代の続きからお願いします。

1

83年6月、防衛事務次官に就任されます。夏目次官のもとで庁内のとりまとめにあたる官房長には、前半は佐々淳行氏、84年7月からは西廣整輝氏が就任します。官房長人事は防衛局長とならんばかり重要な問題と思いますが、佐々氏、西廣氏を起用されたのはどういった点を重視されたのでしょうか。

2

83年8月、高坂正堯氏を座長に「平和問題研究会」が発足します。防衛費GNP1%問題を見据えての発足ということだと思いますが、防衛庁自体はこの研究会についてのどのようなスタンスだったのでしょうか。

3

同年9月1日、ソ連空軍機が大韓航空機を撃墜するという事件が起きました。この事件では、自衛隊が傍受した通信情報がその後の展開で大きな役割を果たしたわけですが、自衛隊の情報がすぐに米軍に伝わっていること、日本内部での情報伝達のあり方などいろいろな議論も呼びました。この事件で先生はどのように対応されたのでしょうか。

4

84年4月、米国の核戦略専門家、ウィリアム・アーキン氏が、三

沢基地に有事に核を搬入するための貯蔵庫が存在すると公表し、防衛庁はそれを否定するということがありました。この問題については何かご記憶のことはございますか。

5

84年7月、中国の張愛萍国防相が来日し、栗原防衛庁長官と会談しました。日本の防衛力増強に賛意を表明したということですが、張国防相来日の目的や日中会談の成果などについてお願いします。

6

同じく7月、防衛庁内局の機構改革がありました。人事教育局と衛生局を廃止して、教育訓練局と人事局が設置されました。この機構改革の目的などについてお聞かせください。

7

9月24日、ワシントンで日米防衛首脳定期協議が開催されました。栗原長官とワインバーガー長官の会談で、栗原長官は防衛費7%増額を約束、米国防長官は日米兵器の共通化、共同訓練の強化などを強調したとのことですが、この会談に臨む防衛庁側の基本方針や会談の成果などについてお願いします。

8

85年1月、中曽根首相は訪米し、レーガン大統領との会談でSDIへの理解を表明しました。SDIにどの程度関与するのかといった問題は防衛庁内で検討されていたのでしょうか。

9

同年1月31日、中曽根首相は衆院予算委員会で防衛費1%以内を守る可能性が薄れたと答弁し、紛糾します。2月14日に複数年度の防衛計画費総額を明示することで新しい歯止めとする方式を検討中と答弁しますが、1%問題を巡って防衛庁内ではどのような

な議論が行われていたのでしょうか。

10

同年6月、経理局長に池田久克氏が就任します。池田氏は防衛庁出身者ですが、経理局長は78年に自治庁出身の渡辺伊助氏が例外的に就任しているのを除いて、これまで大蔵省からきた人の「指定席」のポストでした。池田氏就任の経緯などについてお願います。また、こういった場合、大蔵省からのクレームなどはないのでしょうか。

11

同じく6月、先生は防衛事務次官をお辞めになり、防衛庁を退職されます。後任次官（矢崎新二氏）の選定などにはご意見を言われたのではないかと思います。後任についてはどのような基準でお考えになっておられましたか。また、引き継いでもらいたい課題などについてはどういった問題をお考えでしたか。

12

退職にあたって、これまでの防衛官僚としての生活についてどのようなことをお考えになりましたか。また、前回のオーラルで退職後は何もしたくなかったというお話でしたが、退職後の生活についてはどのようなことを計画しておられたのでしょうか。

※今回は以上の点についてお願いします。

■ 事務次官時代の官房長

伊藤 前は防衛事務次官のお話を伺ったのですが、この前はちよつと上のほうの方をいろいろお話しいただいて、最後に、「ここの話」を」という加藤紘一氏のお話がありました。今度はちよつと下のほうですが、官房長に、前半は佐々(淳行)さんで、後半は西廣(整輝)さんなのですけれども、官房長の人事というのはやはり事務次官のお仕事。

夏目 そうなのですけれども、もちろん相談はありました。ありましたけれども、次官人事も含めて、前の次官と大臣が相談して決めることですね。

伊藤 もう決めてくるのですか。

夏目 もちろん相談もあります。「後任者にこうしたいのだけれども、どうだろうか」という相談はありますが、形の上ではやはり前の次官と大臣がお決めになることです。次の次官は、まだ辞令をもらっていないのだから、あんまり偉そうなことはいえない。そういう意味では、大臣と前次官がお決めになったといっているのでしょうか。もちろん、いまいったように相談はありましたけれども。べつにどうってことない、順当なあれだと思っております。佐々淳行君がなったのも、年次的に。私はもともと人事なんていうものは二つ考えがあるので、よっぽど馬鹿か天才でないかぎりはいたい似たり寄ったりだと。本当にだめなやつは組織のために排除しなきゃならんというのがありますけれども、そうでないと、ちよつと頭がいいとか、切れるとか、実際に仕事をしていてそんなに差はないです。むしろそれよりも調整能力とか、企画力とか、管理能力とか、そういうことのほうが問題であって、能力と同時に人柄に帰するところが大きいにあるわけですよ。

伊藤 それも能力のうちなんじゃないですか。

夏目 それはもちろん大きな意味で能力かもしれません。そういう

意味で見ると、だれが頭脳明晰かどうかなんていう点では必ずしも見ていないということがひとつです。もうひとつは、「平時の人事は凡なるをもつてよしとする」という言葉があります。そう唐突な年次をひっくり返すようなことをすると、やはり庁内に不安が起りますし、なるべく、そういうことをしないで済むなら、いまいったような前提でできるのなら、それがいちばんいいのではないかなという考えを常々持っているものから、そういう意味ではこの人事も順当だったと思います。佐々君がなったのも年次的に当然なるべくしてなったのだし、そのあと西廣君が就任したのも当然の人事ですよ。年次的に見ても、能力からいってべつにおかしな点もないし。ただ、人柄として好きとか嫌いとか、どんなやつかといわれれば、それはいろいろありますよ。

伊藤 また、ここは消してもいいですから(笑)。

夏目 それはあるけれども、それは二の次、三の次ですからね。

伊藤 まあ、佐々さんはいまでもいろいろ活躍ですよ。

夏目 うん。佐々君という人は、私にいわせると、非常に能力のある人ですよ。いってみれば異能の士ということかもしれない。ただ、好漢惜しむらくは、既成の組織の中で馴染んで仕事をするとタイプではなかったのかもしれない。どこかはみ出すところがあつたんですかね。

伊藤 そうするとまあ、ある人々からはちよつと嫌がられるところがあるわけですね。

夏目 そうですねえ、一言でいうと、高邁なる理論家、迂遠なる実家というのか。要するに、口と実行と必ずしも一致しない。言うことは非常に立派ですし、いいのだけれども、じゃあ、自分がどうかというと、危機管理論の神様みたいだけど、そこはどうかかわらないですね。あんまりそういうことは言いたくないけど(笑)。が、しかし、非常に能力が高いし、頭の回転もいいし弁

立つしね。それから、記憶力が抜群。記憶力がいいとともに、例えば庁議なんかに出て、逐一克明にメモをとる。だからそういう意味では、彼の前でうかつなことをいえない(笑)。それはすごいですよ。私なんかはぼけーっと聞いているけれども、あの人はそういうものをきちんと記憶にとどめているんですね。

伊藤 「あのときにこういつただろう」ということになるわけですね。

夏目 そういうふうには。だから、この人事はべつにそう特別みんなからエツと思われるような人事ではなかったと思います。西廣君だつて「ミスター防衛庁」といわれているくらい能力の高い人でしたからね。

伊藤 西廣さんは生え抜きでしたっけ。

夏目 ええ、二回生というのかな。ただ、ちよつと年を取っていましたけれどもね。佐々君が二十九年かな、西廣君が三十一年。だけど、西廣君のほうがたしか年は上じやないかな。西廣君は若いときから防衛庁の主みたいな顔をしている男で、お父さんも内務省の役人なんですよね。それで防衛庁へ来て。自衛隊は最初内務官僚が、内務官僚というか戦後は警察官僚になったのだけれども、そういう人たちが主要なポストを占めていますから、その人たちはみんな西廣君の親父さんを知っているんですね。だからでかい顔をしていましたよ、見習いするときから。「あの局長はアホだ」とか、「あんなのはどうつてことない」とか、「俺が話してくる」とか、チンピラ部員のくせにそういうことを平気でいっていた。

伊藤 夏目先生との関係はどうですか。

夏目 西廣君は、私が防衛庁へ行つたときにはもうそういう意味で主みたいな男でしたが、非常に面倒見がよくて、私と気が合つたんです。非常に親切でした。だから私が防衛局へ移つたりしたのも、西廣君がどこかで糸を引いた可能性もないわけではない。ただ、そんな実力があつたかどうかは別として、一所懸命宣伝をしていたんですね。彼は本当にそういう意味では、入つたときか

ら大物の顔をしていました。よく麻雀をやつたり酒を飲んだりした仲間です。ちよつと自慢話みたいになるけれども、当時はまだ防衛庁の内局というのはいろいろな役所からの寄せ集めだったものですから、本当に防衛庁で仕事をしようという意欲と情熱のある人というのは必ずしもそう多くはなかった。一年か二年いて、いずれ帰つちゃう。そういう中で、一生とにかく骨を埋めようという気持ちで彼も入っていますから、そういう意味では非常に親近感を持って、いわば同憂の士でしたから、「馬鹿を相手にしていると防衛庁はどこへ行くかわからないぞ」という危惧を持って仕事をしていたことは間違いない。そういう意味で気が合つたのかもしれない。

伊藤 佐々さんなんかは去つていくわけでしょう。

夏目 佐々君はこの後、私が二年目の次官を迎えるときに施設庁へ行く。

伊藤 そうですよ。

夏目 それは、この前ちよつと話したように、栗原長官の。正直いうと、私は一年でやめるつもりだったんですよ。普通、次官というの是一年か二年か、まあ、どちらでもいいのだけれども、いろいろ問題があると多少くたびれますよね。もう、いやになるときがあるんですよ。早くのんびりしたいなという気持ちになるときがあるし。それから、私のときにはたまたま塩田(章)さんという、ちよつと同期というのかな、彼のほうが年は上なのですけれども、自治省の二十六年、幼年学校、士官学校という人がいたんですよ。この人が審議官で来て、私の前の官房長をやり、私の前の防衛局長です。私が次官になつたときはこの人が施設庁に行つたんですけれども、次官になつてもおかしくない人だったんです。私よりよっぽど軍人らしかつたし、やくざと本物の違いくらいあるんですよ。それで、彼に譲ろうという気持ちも多少あつたんです。自治省とか、当時の先輩の意見も聞いたんです。「それ

はきみ自身が判断して決めればいいことだけだ」というし、自治省も、「まあ、そうしていただければいいのならば別に文句のいいようがない、ありがたいことだ」というような話はあったんですけども、大臣がうんといわないんです。当時の栗原長官がどうしてだめだといっているので、結局は塩田さんがやめることになり、佐々君を後任に持つていった。だから私はそのまま居残りちゃったんです。多少居心地の悪い気持ちもなかったんですけど、大臣がいうのではないですよ。どうせ大臣は官邸とツウツウで話してやっていますから。そのあと、その辺の経緯を栗原長官が本にしているんですが、いつか持つてきますから。

伊藤 そのうちお願いします。

夏目 きょうはそこまで行かなくていいんだな。

伊藤 いえ、先まで行ってもいいです。

夏目 栗原さんは、そのときの抱えている仕事などを考えた上で、もう一年間私と付き合って、残れと。そういうことで残ったのですけれども、ちょっとギクシャクしましたよ。一年ずつやれば、うまく両方とも花を持たせていけたのですけれどもね。彼はちょっと心外な顔をして施設庁長官をやめて、国防会議へ行くことになりました。もちろん国防会議というポストも大事なのですけれども、なんとなくそういう雰囲気があつて。一方、佐々君も「なんでいまさら俺が施設庁へ行かなきゃいかなのだ」という気持ちもあつてね。

伊藤 施設庁の長官になるということはどういう。

夏目 栄転ですよ、もちろん。

伊藤 ですけど、そこから次官へという人もいますよね。

夏目 そういう人もいましたからね。私の前の吉野(實)という次官は施設庁から次官に戻ってきています。

伊藤 まあ、先行きがべつだんそこで途絶えたわけではない。

夏目 途絶えたわけではないのだけれども、なんかやっぱ人間

というのはそれぞれ、欲とはいわんまでも、あるひとつの「俺はこの道を歩くんのだ」というのがあってしょうな。「官房長がおわつたら防衛局長になったほうが俺には向いている」というのがあるんじゃないですかね。施設庁長官というのはちよつとしんどい仕事ですよ。政策マターの仕事ではなくて、地元とのゴタゴタしたことを片付けなきゃいかん。そういう意味では非常に地道な仕事なものですから、そういう気持ちがあつて、ちよつと気分が悪かつたかもしれません。

■ 平和問題研究会

伊藤 先へ行きます。昭和五十八年八月に高坂(正堯)さんを座長にして平和問題研究会が発足するわけですね。これは例のGNP一%枠突破の問題と絡んでいると思いますが、この高坂さんの平和問題研究会というのは防衛庁との関係はまったくない。

夏目 直接はありません。ありませんけれども、高坂さんとはいちよつと連絡はとっていました。高坂さんも何かという防衛庁へ来られたし、ときにはホテルでお会いしたりして、いろいろと意見交換とか情報の交換とかいうことはしていました。

伊藤 この研究会自体は、内容的にはよくご存じだったわけですが、いかがですか。

夏目 もちろんです。これは中曾根さんがアメリカへ行つて勇ましい発言をしたあとか、発言する前かな、とにかくああいう気持ちは持つていた。それから防衛費を増額することと、対米武器技術供与と、この二つが彼の中心課題だったわけですよ。だから、そういうものをなんとか表舞台へ出そうという配慮があつてこういうものをつくられたのではないかと思うのです。西側の一員としての立場をより鮮明にしよう。それには高坂さんがいちばんよからうということで、多分こういう会をつくつたんだと思うんです。高坂正堯さんとこちらは、一%問題も打ち合わせをし、策を

弄したりもしたわけです。

伊藤 策を弄するのですか(笑)。

夏目 「防衛庁は墨を離れるな」といわれているから、こちらは表立つことはあんまりできないんです。総理が自らやることをじつと見ているより仕方がない。そういう意味ではありがたいのですけれどもね。

伊藤 まあ、そうですね。それはやはり、役所のほうが出たら叩かれるわけですね。

夏目 中曽根さんですら、なかなかできなかったのですから。六十何年までできなかったのですから、それは防衛庁がガタガタいってもそんな簡単にできることではなかったけれども、そういう下地をつくろうというお気持ちを中曽根総理は持っておられたのでしょうかね。

伊藤 これなんかも下地の一つですね。

夏目 そうだと思えます。それをつくる前に中曽根さんがいろんなアメリカの要人なんかと話して、そういうことが耳の中に入っていて、それでそういうものをつくろうと決心されたのだと思うんです。そのときに活躍したのが、椎名(素夫)さんとか多分ガストン・シグルルなどだと思う。

中島 高坂先生といえますと思ひ出されますのが、旧防衛計画の大綱をつくるときの理論的な支援といえますか、防衛を考える会でご活躍されていたわけなのですけれども。そのときの大綱の概念と、この中曽根内閣になってからの対米協力、西側の一員でという、なんかちよつと時代が変わって、あるいは方向性も変わっているような気がするのですけれども。

夏目 変わっていますけれども、学者だからねえ。

伊藤 ほら、またそういう、こちらを指差すことはないでしょう(笑)。

夏目 ただ、高坂さんというのは別に変節したとかではなくて、

そのときそのときの国際情勢というものを冷静に見ておられたのだと思います。このころはやはり冷戦状態というのが一段と激しくなってきましたね。バックファイアやSS20の極東配備とかということがあって、そういうことを敏感に見抜かれたことがひとつあったのでしょうか。と同時に、大綱もそうなのだけれども、対米協力、西側の一員という線では変ったということではないんです。久保さんの論文に多少近いようなものがあつたけど、当時の政治情勢の中でそういうことがいちばん適切ではないかというのでいわれていたのであって、世の中がぐつと変わってくれば、高坂さんも少し主張が変わってきてもそう不思議ではない。僕らが横から見えていたって、高坂さんというのはやはり、あのころの安全保障学会、まあ、そういう学会があるのかどうかそのころはあれだけれども、とにかく防衛問題・安全保障の問題については権威を持って語れる人というのは高坂さんしかいないんです。その後はいっぱいいろいろな優秀な学者が出てきたけど、高坂さんの功績はそういう人たちを目の目を見るところへ引つ張り出したという意味で大きいと思うんです。やはり学会の一つのボス的な存在であつたのではないかなと思います。まだそのころは、いまの渡辺昭夫さんとか、佐藤誠三郎とかそんなにまだ大きな声ではないし、まして、いまの五百旗頭(真)さんとか、田中(明彦)さんとか村田(晃嗣)さんとか、……あなたもこのあいだ立派な本を書いたでしょう。

佐道 突然に(笑)、いや、お恥ずかしい。

夏目 まだそういうところが育つていなかったからね。だから高坂さんというのは、そういう意味では政治家にとつても非常に、言葉は悪いけれども利用価値というか、耳を貸すに足る学者であつたということなのではないですか。

伊藤 世の中に対しても、「高坂さんだ」ということで通用するわけですね。

夏目 そう。国粹主義にかたまつたような、右寄りの特殊な学者はいましたけれども、そんなものではだめだからね。ある程度リベラルというか、中立的な立場に立つて客観的に物を見ておられる先生が安全保障問題に理解を示したということは大きいです。政治家というのはそういう意味では学者を活用するなど非常に先を見る目というのは皆さんあつた。大平（正芳）さんにしてよね。

伊藤 センスがあるということですか。

夏目 役人はなかなかそこまで思い及ばないですよ。

伊藤 まあ、動ける範囲がそんなに広いわけではありませんからね。政治家みたいに勝手気ままに。

夏目 そのときのマスコミの追求を逃れるための姑息な手段を考へることはやるけれども、百年とはいわないけれども、十年先を見て何かを考へるといふのはやはりステーツマンらしいなと思ふ。まあ、みんなステーツマンとは思わないけどね。ステーツマンらしい政治家がいたということでしょう。大平さんだつてそういうところはあつたと思ふ。

佐道 大平さんとか中曽根さんとかの政治家とはちよつと違う。

夏目 違いますね。でも考へ方が右か左かは別として、絶えず国家というものを真つ直ぐ見つめて議論する人でしたから。あとは、党内であるいは、社会党にどう思われるかとか、そんな政局がらみのことばかり考へている人が多くてね。

伊藤 その社会党はついになくなりそうですね。

夏目 「政治屋は次の選挙を考へる。政治家は次の時代を考へる」という言葉があるじゃないですか。多少そういうところはあつたんだと思ふ。いまはどうも政治屋しかないないね。

■ 大韓航空機撃墜事件

伊藤 夏目先生の事務次官の時代のいちばん大きな出来事の一つが、この大韓航空機の問題なんですね。これが昭和五十八年九月

一日に起こるのですけれども、これは結構ゴタゴタしますよね。

夏目 しましたねえ。しましたというのではないのだけれども、したといえはしたのですけれども。正直いいますと、私の記憶も……このときはメモをとっていっぱい持っていたのだけど、うちでいくら探してもないんだ。きつと捨てちゃつたのでしよう。思い出すのは、この日、九月一日というのは防災記念日なんです。朝から訓練の地震予報とかがあつて、いろいろ行事があるじゃないですか。

伊藤 はい、模擬訓練みたいな。

夏目 で、防災対策本部が設置されたとかいう演習をやるんですね。

伊藤 いまもやつているんじゃないですか。

夏目 日本政府全体でやるんです。官邸から各省からそういうことをやつて、朝早くから役所へ出なきやいかなと思つているときに自宅へ電話がかかつてきたんです。そのときに、大韓航空機が墜落したと。場所はたしか根室か釧路だつたと思います。最初はそういう情報だつたかな。なんかあの辺で墜落したらしい。すぐに救難体制を敷かなければいかんのでというので、すぐそういうことを頼んで、同時に役所へ出たんです。役所へ出るとすぐ防災会議という、大臣もみんな防災服みたいなを着て、作業帽か何かを脇へ置いて、ばかみたいなことをやつているんです。それが続くんですよ。何時何分震災予知情報発令とかが入つたとか。それをやつているときに、赤い箱の中へ入つた秘密文書が回つてくるんです。見たら、大韓航空機がソ連機によつて撃墜されたらしいと書いてある。

伊藤 どこからですか。

夏目 それはうちの情報機関から。

伊藤 ああ、そうですね。

夏目 それで、これは大変だと思つた。大変だと思つたけれども、仕方がない。まあ、防衛局長が見て、私が見て、大臣にすぐ見せ

て、「この会議を早くおえましよう」と。ところが、ほかの連中は知らないものだから、長々とくだらないことをやっているわけです。来てもない地震のことをね。でもまあ、比較的早くやめてもらって、官邸に駆け込んだんです。官邸は、今度は何をやっていたと思いますか。防災の功労者の表彰式です。それに今度はうちの大臣も出るんですね。自衛隊のどこかの航空救難隊か何かへも感謝状があるので。それがまた、三、四十分官邸の中の会議室で続くんですよ。これはだんだんおそくなるなと思ったけれども、仕方がないので。それで大臣と手分けして、「大臣は総理にいつてください。私は官房長官にいます」と二手に分かれて、防災感謝状贈呈式をおえてから私が官房長官のところへ入ったら、官房長官の耳には情報が少し早く入っていたんです。まあ、入ったけど、それはしようがない。うちから行った情報ではなく、内閣調査室を通してね。まあ、おそいという文句もいわなかったのだけど、あとで本を見ると、「おそい」と叱ったことになっている。そのときは何もいわなかったですけども、「聞いた」という。「まだ確たることはいえないけれども、どうも確実らしい」というと、「どうもそうらしいな」という話から、すぐ外務省に、「これこれ、こういう措置をとりなさい。国際問題になるぞ」と指示されているいろいろ動き出すんです。私は多分、官房長官の説明のあと、すぐに外務省へ行ったんです。それで外務省にもそういう話をして、すぐ対応措置を考えてくれということ、たしかアメリカ局長だったと思いますね。

伊藤 それは撃墜されたということですか。

夏目 ええ、撃墜されたということ。後藤田（正晴）さんの口ぶりといえば、これは大変な国際問題になるだろうと。ま、それは後藤田さんではなくたってそう思ったでしょうけれども、そういうことだったんです。ところがまずかったのは、あとで後藤田さんが文句をいったのは、おそいということよりも、その情報がア

メリカへ同時に行っちゃった。それは私も知らないんですよ。知らないけれども、とにかく行っちゃったんですね。

伊藤 それは行くようなシステムになっているのですか。

夏目 システムがそうなっているのはいいのだけれども、それはどういう情報かというところ、それはいわゆる陸幕二部別室、調査部別室というところがあって、稚内とか国内のあちこちにウサギの耳をピンと立てて、敵の情報をリーダー情報から通信情報みんなつかんでいるわけです。中国から、北朝鮮から、ソ連から。そこから入った情報なんです。そこでたまたまソ連語のわかるやつがレシーバーを聞いていた。それでわかつたんですよ。だから非常に早くにわかつた。

伊藤 これは暗号ではなくて。

夏目 ソ連のパイロットの通信は平文なんです。司令部か何かと。「敵のやつが入ってくるぞ」とか、「尾灯部が赤く輝いている」とか、「ロックオン、準備完了」とか、「やってもいいか、撃つぞ」といって撃つんですよ。それで、「撃墜した、パンザイ」みたいなことをいってペラペラしゃべっているやつがみんな入っている。そういう細かいところまで最初から行ったわけではないのだけれども。それをアメリカから、あれを公表するぞということを国務長官のシユルツが言い出して、それでアメリカへ行ったことが一般にわかっちゃったんです。しかも、わかっちゃったと同時に、知らない人は、「なんだ、これをアメリカへ知らせたのは防衛庁だろう」という話になってお叱りを受けた。だけど、それはしようがないんです。あの施設をつくったときはアメリカの施設をそのまま引継ぎ、その後も機械その他についてはアメリカの金をもらい、アメリカの技術スタッフがそこへ常駐しているんです。だから、いいも悪いもないんです。そういう約束でああいう施設を日本側が運営しているわけですからね。それにその室長というのは警察から来ているんです。二部調査別室長というのは自衛

官ではないんですよ。陸幕の調査部二部、昔は二部といって、いまは調査部というけど、その別室ということになっているのだけれども、陸幕の権限が及びにくいんです。

伊藤 それは警察の系統なんですか。

夏目 要するに内調というのかな。トップがそうだから。それはもう長年のそういう……、後藤田さんがいるときにそう決めたのですから。

佐道 それで怒っているのですかね（笑）。

夏目 だから私は後藤田さんに、「それはあなたがそういうふうにしたんじゃないか」と。あの人は警察予備隊の調査課長でしたからね。そんなもの、怒るのがおかしいと。何十年もやってきたやつを、今さらのように、「勝手に情報を流した防衛庁はけしからん。どういう管理体制だ」と。確かにそういうわれればそのとおりです。「防衛庁の組織でありながら、防衛庁の中での了解も得ないで情報が向こうへ行っちゃっている。それはおかしい」といわれれば、そのとおりですよ。

伊藤 でも、ある程度は自動的にそういうふうな仕掛けになっているのでしょうか。

夏目 そういうふうになっているのは百も承知で叱られるわけですよ。そういう意味でちょっと心外だと思った。

中島 警察予備隊時代にそういうネットワークができて、それがずっと残っていったということなんですね。

夏目 そう。航空自衛隊のレーダーサイトだってそうですよ。あれだって米軍がみんな山の上とか岬とか島とかに膨大な金を使っただけでつくった。自衛隊がつくるといったって、できやしないですものね。そういうものをつくって、日本が独立するときその施設をそっくり航空自衛隊に移譲した。そちらのほうは、一、二年は技術指導と称していたけれども、航空自衛隊が全面的に引き受けることになってみんな引き上げたのだけれども、こちらのほうは

アメリカもそれだけの利用価値があると、完全な引継ぎになっていないんです。そこへ警察から来ている別室長がいて、警察から来ている別室長はすぐ内調に上げるわけです。こちらの二部別室の事務方は防衛庁へ来るのだけれども、同時に向こうへ行くわけですよ。内調から官房長官のほうへ行く。その情報はまたアメリカのほうへストレートに行っちゃう。確かに不合理な組織ではあったんです。

伊藤 実際に歴史的な根拠はあるのですね。

夏目 あるというか、まあ、仕方ないということなんですね。

佐道 経緯からすると、やむをえないところもありますね。

伊藤 しかし、そうなる理由がないですね。

夏目 だから怒られるのは心外なんだけど、しかし考えてみれば、そういう組織を何十年もほうっておいた責任の一端はこちらもないわけではないですね。

佐道 警察から室長が行ったりするというのは、後藤田さん、自分の子分じゃないですかね。

夏目 そうですよ。あれも本当におかしいんですよ。その後もずっとそういう時代が続きましたけれどもね。それがまったく秘密主義でして、どういう運営をされているのか陸幕の人も知らなければ、内局なんかほとんどだれも知らなかったんですよ。私が防衛課長のときに怒ったことがあるんです。予算だけは一人前に要求してくる。だけど中身は教えない。そんなことで予算要求できるかと。そういっただけで、多少のことは我々にしゃべるようになってたけれども、とにかくアンタツチャブルな世界なんです。そのことがあってから、やはり情報の管理体制をきちんとしようということになって、多少、アメリカへ行くものほどどこかでセレクトして出すというふうにはしたんです。この大韓航空のあと。

伊藤 さっきの箱に入ってきたというのは、どこからどういう経路で来るのですか。

夏目 調査別室という、いまの別室から防衛局長のところへストリートに来るんです。

伊藤 電報ですか。

夏目 いや、電報というか、情報を聞いて、こうこうだということを書いてあるわけです。あとテープは録ってあるけど、それはまだ間に合わないからね。「撃墜された大韓航空機はソ連のミグ25(だったか)に撃墜された模様。それは日本の領海の可能性あり」みたいなことが書いてあったような気がする。

伊藤 でも、実際はそうではなかったんでしょう。

夏目 領海ではないけれども、あれはサハリンの沖かな。だけど、稚内から数十キロのところですよ。きわめて近いところで落ちたんです。

伊藤 たしか浮遊物が流れたんですね。

夏目 それは非常にショックなことでした。それで今度は、ソ連が認めないんですよ。領空侵犯したとか、何とやらという極東軍総司令官とか何とか元帥が訳のわからないことをいうものだから、アメリカと日本で同時に発表したんです。これはこういう交信記録だと。ところが、同時に発表するはずなのに、シユルツがまた約束を破って、少し早くやった。

伊藤 やられちゃった(笑)。

夏目 まあ、べつにどうってことないんですけどね。「日本側からの情報によれば」ということをいうから、こちらの記者会見の時間が少し間合いがあったものだから、当時の防衛局長の部屋の前は新聞記者が、ガンガン、ガンガンやっていましたよ。まあ、とにかく最終的にはソ連も認めたんですけどね。

伊藤 べつに認めたからといって、どうこうしたわけではないですね。

夏目 それから情報管理体制ということで、国会議が安全保障調査室になる一つのきっかけにもなるんです。

伊藤 キャッチしたのは平文でしようけれども、日本がそういう電子情報をとっているなど。

夏目 この件でいちばん問題だったのは、そういうことが公表されること、日本の手の内がみんなわかっちゃう。それから、もちろん平文なんだけど、正直いいますと、打ってくる中身によって機種までわかるんですよ。それは向こうとの交信の記号がありますからね。何機種からどこその基地へ、どこその基地から何号機へという、そういうのはべつに文章じゃなくてもあるわけです。そうすると、それは敵の機種まで特定できちゃうんです。どこの基地と連絡しているか。そうすると、日本がなんでそんなことをやっているか、どこまでやっているかという手の内がみんな見られちゃうわけです。そうすると、そういうところの諸元を変えられちゃう。変えられちゃうと、またそれを確認するまでに何年もかかるんです。そういうことの波及効果とか影響も大きい。平文だからそのもの自体はどうってことないんですけども。そういう意味で、公表することについては多少防衛庁の中にも抵抗するむきがありました。だけど、抵抗している向きと、行っちゃっているのが相前後しているものだから、ややこしいですよ。だから、後藤田さんに叱られても……。弁解できる場所がないんですよ。そういう仕組みでしたから。もちろん一部反対している人達もいるからね。政治家の中にもいました。「なんでそんなものを出すんだ」と。

伊藤 「機密じゃないか」と。

夏目 そういう意味で政治的にもゴタゴタしたし。だけど、結果的にやむをえないんだと思うのですけれども。

伊藤 この問題について、いまでもいろんなことをいう人がまだいるのでしょうか。

夏目 いや、もういないと思いますよ。もう出るものは出ちゃったものね。

伊藤 逆に、大韓航空機はなんであんなところへ行っただんたいうね。

夏目 だけど、多少外れてはいるのだけれども、そんなにおかしくもないんですけどね。それよりも何よりも、自分の領空に入ってきたやつは無条件で落とすというソ連のあり方のほうがやはり問題で、そういう国だということを一様に認識させたという意味ではある意味ではよかった。ちよつと冷戦の東西との対立が激しい時期に、またちよつと輪をかけたような感じでした。だから、総理のああいの一連の不沈空母だとかというの、だんだん説得力が出てきたんじゃないかな。

■ 情報管理の問題

佐道 構造の話もちよつとありましたけれども、防衛庁からも官邸に情報を上げる。内調からも行ったりするわけですよ。また、外務省なら外務省からもいろいろなものが行ったりすると思うのですけれども、そういう上への情報の上げ方というのは全体的な見直しが行なわれたのですか。

夏目 それぞれの機関が情報をあげること自体はいいんです。内調もいろいろな情報を持っていますから。うちのほうから行った情報もみんな内調でまとめて上げることになります。いまでもそういうのですが、官邸に行く回数というのは圧倒的に向こうが多いんです。

伊藤 向こうというのは。

夏目 内調。

伊藤 いや、中にあるから、それはそうですね。

夏目 もし総理に会わなくても、官房長官には年じゅう会えるし、官房長官は総理に年じゅう会う。うちは大臣が総理官邸へ行っただけで新聞記事になって、「何をしゃべった」とか聞かれるし、まして私なんかが行ったら、ワーツと来ますよ。昔の官邸の階段

のところなんか、十人からついてきて、「きょうの話は何だ」と。だから、フィクションの話をこしらえておかないと、大事な話は行けないんです。それはいくらフィクションをつくっても、顔を見ればすぐわかりますわな。

伊藤 根が人間正直にできているから。

夏目 情報の管理の仕方、上げ方についてもそのときにきちんと見直しをして、こういう情報はこちらから上げる。こちらからこういうふうにして上げるというふうにはきちんと決めました。だけれど、それはなるべくして実際にはそんなうまくいきません。いまでも警察庁長官が、「内調のやつが官邸にいった」とか、「公安調査庁がいった」とか、「外務省がいった」とか、年じゅう他省庁の動きにピリピリしているんです。ついこのあいだもそんなことが新聞に出ていたね。だから、どこでいつ何をやっているかわからないんですよ。

伊藤 まあ、情報管理というのはいちはばん難しい問題ですからね。

夏目 中曽根さんのときには、随時私が行って、防衛庁の非常に機微にわたる情報もきちんと上げることにはなりました。「きみ、これはだれとだれにしゃべるんだ」というから、「あなただけです」と。「それでよろしい」という中曽根さんのお墨付きはもらったんです。

伊藤 官邸ですか。

夏目 官邸です。総理の公邸へ行っているいろいろお話しをしたこともあります。

伊藤 定期的に行かれると、また新聞記者に。

夏目 うん、いわれますよ。だからフィクションをつくったり、いろいろなことを考えて行きます。定期的といったって、毎月とか毎週行くわけではないですからね。本当に情報というのは難しいですね。

中島 防衛庁の中にもいろいろ情報部門がごさいますね。

夏目 防衛庁では、内局あり、陸海空あり、統幕ありでしょう。それぞれ独自にやっているんですよ。極端なことをいえば、同じ資料から同じデータをつくって、別の本に印刷して配っている。いや、いまは知りませんよ、当時は。調査月報とか、情報資料とかね、各幕ごとにいろんなのが来るでしょう。一つにすればいいのには、と思うもの。

佐道 それをまとめるところはないのですか。

夏目 情報って、まとめるのは難しいんですね。まとめても、結局また自分のところは自分のところで。いま情報本部ができてまとまっているんです。まとまっていれば、じゃあ、各幕は情報本部でやって自分たちの情報はやらないかといったら、絶対にそんなことはない。政府の情報局みたいなのをつくって一本化してといっても、これも難しい問題です。理屈はそうでも、なかなか人間というのは理屈どおりに動かないですね。まあ、いま防衛庁の中は情報本部というものができて、月に一遍くらいずつ防衛局長と情報本部長が総理のところへ行ってご進講している。情報本部長というのは、制服の陸将が何かかなる。

佐道 それまではそういう。

夏目 ルーチンとしてのあれはなかったんです。臨機応変に、「これは」と思うときには飛び込みで行くということですよ。

佐道 夏目先生が中曽根さんにおやりにやったのは、これは独自にということか。

夏目 独自にです。このときはまだ。

伊藤 システムとしてはなくて。

夏目 まだできていなかったですね。いまはできていると思えますけれども。そのひとつが情報本部長と防衛局長が二人で行くということだと思えるのですけれども。

佐道 夏目先生のお一人で行かれていたのですか。

夏目 一人ですね。中曽根さんにもいったけど、うちの大臣も知

りませんといったようなことをしゃべるのだから。

伊藤 ええーッ。

夏目 というのは、本当に機微にわたる情報というのは、防衛庁の中でもほかの局長は全然知らないんですよ。年じゅう代わるでしょう。ばい菌をみんな撒き散らすようなもので。大臣だつて一年かなんかでポコポコ代わつて、そんな人にやめたからつて無責任にしゃべられたら困るでしょう。だから最小限のことしかいわない。それはやはり、ある程度やむをえないことだと思います。

伊藤 情報の共有ということが最近いわれますけれども、非常に難しい問題でして、どうしても機微なことというのはあるでしょう。

夏目 それで、握っているやつだけは勝手に、それを俺だけが知っているって振り回すやつがいたりね。

佐道 加工してみたりとか。

夏目 だから戦前から情報系統の将校は嫌われたんですよ。

伊藤 本物ではないと。

夏目 それはやはり難しいですよ。例えば、今回のような情報をとっている人のようなソ連の言葉のわかる人を宮々として養わなきゃいかんでしょう。平でしゃべっているとはいえ、ガーガー雑音の混じつたところから聞き分けるわけですから、相当の熟練を要するのです。そういう人たちの処遇というのも考えてやらないと、一生そんなことをやっておわるのですよ。べつに日の目を見るわけではないし、偉くなるわけでもない。だからそういう不満のはけ口からポロツと出ることもあるしね。ソ連の武官と酒を飲んで、百万円握らされて、次第に深みにはまっちゃつたなんていうこともありうるわけですよ。だから、情報の管理、情報担当者教育、処遇というのは非常に大事な問題ですね。

伊藤 養成も大変ですよ。

夏目 もちろんそうです。

伊藤 これは長時間かかりますから。

佐道 防衛庁でも、本当に機微な情報というのは防衛局長と次官くらいということですか。

夏目 そうですね。多分そういうことが多いと思います。変な話だけど、ひよっとしたら、例の大韓航空機に関する情報も本当は私のところへは来なかつたかも知れない。ちょうどその時、矢崎防衛局長は目の前に私が座っているから、「大変だ」といつてまわしてよこしたのでしょうか。いや、わかりませんよ、そこまで。だけど、そういうことってありうるわけです。どこかでそうやって切れちゃうと大変なんです。防衛庁内部だけでそんなことを収めちゃったら、そのあともっと大変になっていたんです。とにかくおくれればせながら官邸に駆け込んだから、まあ、なんとかなね。「こんな情報をすぐ出せない」なんて大事に温めていたりしたら、もっと大変なことになった。ただ、いまいったような事柄があつて結果的にちょっと内調よりおくれたことは、べつに温めるつもりではなくて。しようがないですなあ、大臣以下会議をやつていだし、向こうへ行つたら、総理以下表彰式をやつて、大変だといつてそれをやめるわけにはいかないしね。三十分か一時間の問題だから。

伊藤 出所は同じなのにね。

夏目 でも、そういつていわれたことはいわれたんです。「聞いた」とかいつて。

伊藤 いやですね、そういうの。

佐道 後藤田さんの、あの渋い顔で。

伊藤 顔が浮かんでくるよ(笑)。

夏目 本当にあの人は渋い顔をするんです。べつに私のことを直接怒鳴ったりはしませんでしたけれども、ただ物の本によれば、「怒鳴つてやった」とか、「叱りおいた」とか。

伊藤 後藤田さんは目が怖いからな。

中島 そうしますと、防衛庁内でいちばん情報を知つていらつし

やる方というのは次官というふうにご考えて。

夏目 次官と防衛局長でしようね。ただし、情報によつてですよ。例えば、陸海空のほうが握つていて内局に知らせないという情報もある。情報の中身によつて複雑に、一般論として情報はすべてこうだというふうには断じ切れないですね。

伊藤 情報の量と種類というのはべらぼうにたくさんあるわけですから、それが全部上がつてきたらたまったものではない。

夏目 さらに制服には制服でシビリアン不信みたいなものがどこかにある。あそこへ行つてしゃべると、みんなペラペラ外へ出ちゃうのではないか、そういう、なんとなしに不信感がありますから、教えないこともありますよ。

佐道 海上自衛隊と米海軍なんて。

夏目 それはそつちのほうがよくばど密接です。前に話したように、米軍と自衛隊の制服との間の防衛計画とか対処計画を研究しているなんていうのを内局は一時知らなかつたんだからね。そういうことというのはどんな世の中でもあるんですよ。あると思わないといけないですね。

伊藤 大韓航空機問題で、社会党なんかは何か攻撃の材料にしましたか。

夏目 そんなに大きな攻撃の材料はなかつたんです。「アメリカへすぐ情報が行つたのはけしからん」というのは政府部内と与党であつて、野党はむしろ、「そんなことよりも自衛隊の情報能力というのはすごいな。もっと何かやっているんじゃないか」と過大評価するんですよ。

佐道 さらに裏を探るといふ。

夏目 それは確かに、そういわれて、うむと思う部分はあるんです。あるけれども、まあ、そんなことはいえないけれどもね。

岡田 先ほどのアメリカと同時発表というお話のときに、どこまで、いつというようなタイミングを決めるのとか、そういうのは

実際には。

夏目 やっているんですよ。

岡田 窓口はどちらですか。

夏目 もうその時点では外務省になっていると思います。ところが、外務省は自分が当事者ではないものだから、なかなかいいと決めにくいんですね。正直いいますと、防衛庁はおそいほうがいいです。というの、パイロットとの交信記録を文書にして日本語にしないといかんのです。ところがそれが簡単にできないんですよ。聞きにくいところをちゃんと何回も聞いて、雑音を消して、しかもそれを日本語に翻訳する。立派な文章になったイブセンやらチューホフを読むようなわけにはいかないからね（笑）。そういう意味では発表するにしてもおそいほうがいいのだけれども、アメリカはそういうところは早いですね。能力的に早いです。

伊藤 それはそうですね、ロシア系の人にはたくさんいるわけだから。

夏目 ちょっとそういう意味では、調整はしたのだけれども、こちらのほうがなんとなく手間取ったという印象をいまでも持っています。とにかく記者会見のざりざりまでバタバタしていましたから。だけど、一方のシュルツはやっているから、あんまりおそくもいかないのですよね。もちろんあちらは全部ではないけれども、こちらはその分もつと詳しくいわないといけないし。

伊藤 詳しくいえばいほど、いろいろなことがわかつちやうのですね。

夏目 あれは外務省もちょっと困ったと思うんですよ。実際に現物を持って作業しているのが自分のところならいえるのだけれども、防衛庁で。「早く、早く」ということはできてね。アメリカというのは早いですね。このあいだのミグのときもそうだったけど、そういう能力は本場にすぎない。

伊藤 あつという間に組織して。

夏目 しかも、それを対外的にどう使うかという、世界戦略というか、そういうことも考えて手を打っていますね。そういう意味では日本はまだまだ後進国だなという感じはしました。

伊藤 そのお話は非常によくわかるなあ。ありとあらゆることにいまそうですね。

佐道 この場合は、防衛庁と外務省はかなり頻繁に連絡をとって。

夏目 とったのですけれどもね。とったというか、一方的に我がほうでわかつたことをお知らせするだけですからね。外務省はアメリカからもやんやと情報が行ったり来たりしていますから、多分、相当気をもんでおられたと思うんです。後藤田さんではないけれども、これはタイムングを失すると大きな国際問題になりかねないなんていうから、外務省は相当ピリピリしていたと思いますよ。

伊藤 外務省も自衛隊の情報収集能力に対して深い敬意を表したのではないですか。

夏目 と思います。

佐道 官邸のあとに外務省に行かれたという。

夏目 そうです。もう外務省の玄関に新聞記者が二、三人いました。「やはり来たな」というような顔をして。本当にあの連中は早いですよ。

それでこのときに、ここでまた佐々君の話になりますが、佐々君はこのときに官房長なんですね。矢崎（新二）という防衛局長なんです。これも週刊誌に当時なつたのですけれども、もちろん防衛局の守備範囲の話ですから、矢崎のところでは始末しろということにして、以後、実際に記者との応接も含めすべて矢崎君にやらせようということになった。まあ、私もときどき引つ張り出されましたけれども。佐々君が、「八月に夏休みをとらないから夏休みをとらせてくれ」といつてきたんです。「いいだろう」と一遍いったんです。その留守中にこの事件が起きた。彼から、

「どうしますか、帰りますか」と電話が来たんですよ。私は、「帰らなくてもだいじょうぶだよ」といったんです。「防衛局長の矢崎君がきちんとやっているから、多少後藤田さんは怒ったけど、そんなことはたいした問題ではないので、まあ、せつかく休みなんだから、ゆつくりしたら」という話をしたのだけれども、そうしたら彼は、二、三日帰ってこなかったんですよ。二、三日か、三、四日か。それがあとで新聞記者から、週刊誌かな、「なぜあなたはいいんだ。夏休みをとって、いないのはけしからんじゃないか」といわれた。それで彼は、「いや、俺は堂々と休みをくれといった。そうしたら、『結構だ、休んでください』といわれて、『帰ってこなくてもいいよ』ともいわれたから帰ってこなかったんだ。悪いのは次官だ」と（笑）。佐々君が新聞記者にいわれたものだから、私に振っちゃったわけです。新聞記者が今度は私のところへ来て、「おかしいじゃないか。防衛庁の重要人物がこんな大事なときに休暇をとって、認めるのはなんだ」と。「それはそれぞれの局長が自分で判断して、大変だと思えば帰ってくればいいんだ。俺に許可なんか求めなくて自分で判断できるだろう。子どもじゃないんだから」といって突き放したら、俺がそういったというのでまた新聞記者が（笑）。佐々君は、「こういっておきながら、俺の判断が悪いみたいじゃないか」と怒るしね。そんなのどうでもいいじゃないかと思うんだけど、佐々君に恨まれちゃった。そういうことがあったんです。

伊藤 新聞記者も言いつけて歩くなあ。

夏目 危機管理の名人なんだから、そういうときは帰ってこなければと思ったら帰ってくればいい。

佐道 危機管理はどうしていたんですかね（笑）。

夏目 だから、高邁なる理論家だつて。それは笑い話なんだけど、そういうこともあってね。この矢崎という人は佐々君と大違いの人なんですよ。ニックネームが「プリパン」というんだよ。わか

りますか？

伊藤 わからないです。

夏目 プリキのパンツという。カチンコチンで固いんですよ。融通が利かない、固いのなんのつて。もう一つのあだ名は「コマネチ」という。なんでコマネチかという、細かいことをネチネチと。

伊藤 参ったなあ、全然想像しなかった（笑）。

夏目 だから会計検査院長になったんですよ。

中島（笑）、なるほど。

夏目 まったく慎重なんですよ。見切り発車とか、そんなアバウトなところでは絶対じゃないんです。「これはもうちょっときちんとしてから」なんていうから、だんだん時間が……、俺もイライラする。佐々君だと、サッササッサと行って、何だつて走ってから考えるんですね。だからもう、その両方でくたびれちゃう。

中島 対極的なお二人だったんですね。

佐道 中間というのはなかなかないものですね（笑）。

夏目 いまだから笑い話だけど、本当にねえ、コマネチとプリパンでしょう。そんなことをいいたら、この間勲章をもらったばかりだからね。偉いんですよ、検査院長だからね。私は適任だと思つたね（笑）。だって、彼が私があとの防衛局長になつたわけですが、もう辞令が出る前から、私が国会で呼ばれるでしょう、そうすると隣の席で同じ質問をこうやって見ているんですよ。もう見習いをやっているんだよ。辞令が出る前から、こっちは気分が悪いでしょう。「おまえはまだじゃねえか、俺だ」というのね。向こうは答えることなく、座っているんだけど、次にどう答えたらいいか、前任者はどうアホなことを答えるのかなと勉強している。あれはちよつと気分悪いですね。同じところへ座って、同じ物を見て、「ウン、ウン」と。テストされているみたいですね。

佐道 ちゃんと答弁しているかどうかチェックされているみたいですね（笑）。

夏目 そのくらい慎重な人です。固いんです。まあ、プリパンドから固いんです。ステディーというかね。そういう人だから、いまの大韓航空撃墜のときも当事者で指名したんです。だから、佐々君から見るとイライラするんじゃないかな。「あれはしたか、これはしたか」みたいなね。

佐道 でも、本人がいなきやどうしようもないですよ。

夏目 それはいなきやどうしようもないんだけど、帰ってきてからもまだ多少尾を引いていて。「だから最初から俺にやらせておけばよかった」という思いがあったのかもしれないね。

伊藤 まあ、そうですね。

夏目 だけど、どちらがよかったといってもわからないね。

伊藤 次の問題に進んでもいいですか。次の問題は、アメリカのアーキン氏が、「三沢基地にいざ」ときの核の貯蔵庫がある」といったんですね。

夏目 覚えのないな、俺。アーキンというのは民間の専門家ですよ。ね。

伊藤 うん、そうですね。

夏目 こんなのは年じゅういろんなやつがいろんなことをいっているじゃないですか。

伊藤 あ、そうですね。

夏目 三沢基地ということはないけど、沖縄であれ、どこであれ。だから、「またか」というようなものでしょう。全然記憶にないね、こんなの。アメリカは核の持込については事前協議、事前協議がない以上は来てないと。「そんな話は聞いていません」というだけのことで、それでおわっていると思います。あとでガタガタしたことは一度もないですね。だれがいわゆる、ライシヤワーがいったって、アメリカのだれがいったって全然代わり映えしないのだから、この辺は外務省も頑固ですね。

伊藤 まあ、同じことを繰り返し、繰り返し、答弁するわけです

ね。

夏目 もうああいうことはやめたほうがいいですね。でも、これは記憶にないです。多分、民間の人がいったから余計何も感じないのではないですか。共産党や公明党が現地で、格納庫や倉庫の写真を撮ったり、ウランのマークが入った印を撮ったりして、「これがそうじゃないか」とか、電話番号を調べて、「これは核がある証拠じゃないか」とか、年じゅうありましたからね。こんなこととでいちいちゴタゴタしたことはとてもありえないし、記憶もないです。

■中国国防相と栗原長官の会談

伊藤 そういふものですか。その次はどうですか。中国の国防相がやってきて栗原長官と会談を。

夏目 八四年というと、ちょうど昭和五十九年で。

伊藤 ご記憶は？

夏目 いや、ありますよ。この張愛萍というのは私もよく知っているから。中国はこのころ「四つの近代化」という政策を進めていたんですね。軍の近代化と、何とかの……。覚えてないなあ。何かを見ればわかるでしょう。

伊藤 四つとあったことだけは覚えていますが、僕もそんなに覚えていないです。

夏目 一所懸命進めている最中で、軍については、百万減らすとか、階級制度を設けるとか、いろんなことを考えていた。もちろん装備の近代化も含めてそういうことを考えていたのですが、一方、当時の中国というのはソ連と、いつごろからだろう、もうとにかくこのころソ連はみんな中国から手を引いちゃって、いちばん仲が悪い時期だったんですね。

伊藤 敵対的なんですね。

夏目 それまでいろいろ支援してきていたような技術者なんかも

みんな引き揚げたりして、本当にソ連を天敵のように思っているときだった。そういう時代背景の中で、軍の近代化をするには西側と多少距離を縮めなければいけないという考え方が当時の中国政府と党の方針だったんです。その一つのあらわれで日本へ来たんです。中国と急にいろんな技術的なことの交流というわけにはいかないから、まず人事の交流とか、あるいは、練習艦隊の寄港とか、そういうところから始めようやという話に来たのはこの人が初めてなんです。

伊藤 その前は下のレベルでいろいろやりとりがあったわけですか。

夏目 いや、ほとんどないですよ。教育畑の人が、各幕の課長さんとか部長さんくらいが行ったことがあるのかな。実質的な交流というのはほとんどなかったんです。

伊藤 さつき先生はこの張さんという国防相はよくご存じだという話を。

夏目 ご存じだというのは、このときはまだよく知っているわけではなくて、その翌年に私は中国へ行くんです。

伊藤 それはまだ次官のときですか。

夏目 次官のときに。それが防衛関係での本格的な日中交流最初のステップになった。

伊藤 交流の。

夏目 いわゆる次官レベルの交流になるんです。しかし、そのためにはこのあと十ヶ月くらいかかるのですけれども。

伊藤 その間にいろいろなやりとりがあるわけですか。

夏目 あるのですが、要するに、日本の防衛力についてそれまではキャンキャン反対といていたのが、このころから理解を示し始めるのです。それはやはり、日本をはじめ西側との親交を深めようという意図なんですね。アメリカとも同じような交渉をこの時期に進めているはずですよ。

伊藤 要するに対ソということですね。

夏目 まったく対ソです。だから当てにならないのね。それが何年かたつとまたね。

伊藤 「日本軍国主義復活」になりますからね。最近またちょっと。

夏目 アメリカよりソ連のほうが近いような感じになるしね。これは多分、日中防衛関係の相互交流の発端になる。

伊藤 これはいまでもずっと続いているわけですか。

夏目 続いていますよ。ただ、中国側というのはまったくわがままな国ですから、ちよつと状況が悪い、総理が靖国神社へ行ったとかいう話があったときには、またこつやる（シャットアウトする）んです。だから、あんまり当てにはならない。本当にそのときそのときによつてコロツと変わりますから。

佐道 こういう問題も窓口は防衛局になるわけですか。

夏目 防衛局ですね。もちろん防衛局一人でやっているのではなくて、外務省が間に入つてきますけれども、防衛局です。

佐道 外務省から来ている国際参事官も関与するのですか。

夏目 もちろん関与します。多分もうこのころは、外務省から来ている参事官は涉外参事官ではなくて、国際参事官という名のもとにいわゆる海外情報の担当参事官になったはずですよ。岡崎（久彦）さんと、そのあとの何といったかな。ソ連通の……、名前を忘れちゃうんだよなあ。

佐道 関さんですか。

夏目 関さんじゃなくて。どこかの大学、杏林大学の先生になつて行ったけど。ソ連通の人がいるんですよ。

佐道 新井（弘一）さんですか。

夏目 そう新井君だ。岡崎、新井というお二人はなかなかしたたかな人ですよ。岡崎さんというのは非常に論理的な理詰めの人で、防衛計画大綱にも痛烈な批判を持っている人。彼は実務にタッチしていないから、吠えるだけでしたけど、確かにいうことは

真つ当なことをいつていました。新井という人はまた、それに輪をかけてソ連大つ嫌いな人。非常にソ連のことには詳しいのだけれども、アメリカへ行つても、ソ連のことをアメリカよりよく知っているみたいにしゃべるといふこともあつて。そういう人がいたから、こういうことについても積極的にアドバイスしましたね。

佐道 外務省のソ連課長をやつた人ですね。

夏目 そう、ソ連課長。そのころの外務省は皆さん優秀な人が来りました。

佐道 そのころから。

夏目 そのころからですね、国際参事官に名前を変えてからです。その前は儀典要員みたいなことばかりだつたけど。

伊藤 この張さんという人とはその翌年にまたお付き合いがあるわけですね。

夏目 張さんという人は、温和な物静かな感じの人でしたが党の中ではあんまり実力がないうでした。国防大臣ではあるのだけれども、党の席次はそんなに高くないで、もう相当のご高齢で、いまの私くらい頼りなげでした。だからあんまり発言力もないし、人の好い農家のおじいさんという感じの人でした。この人が後日私に刀をくれたんですよ。これがまた引っかけかちやつてね。刀なんか持つてくるから、荷物検査でね(笑)。

伊藤 青龍刀ではないんでしょう。

夏目 青龍刀ではないけど、このくらい(七、八十センチくらい)の刀。

伊藤 直刀ですか。

夏目 少し反りがあつたかな。ま、ほとんど直刀に近いですね。なんか飾りのいっぱい付いたのね。えらい物を頂いたなと思つたけど、いまでもうちにあります。

佐道 持つて帰られるときに何か。

夏目 すぐ、「これはこうこうだ。向こうの誰それがくれた」と

いったからオーケーになつたけど、俺は、「いや、これは成田へ着いてから大変だな」と思つた(笑)。

伊藤 銃刀法違反ですね(笑)。

佐道 防衛次官が銃刀法違反で(笑)。

夏目 まあ、それは中国へ行つたときの話かもしれないけれども。

伊藤 また後で伺います。

夏目 張愛萍というのは非常に人柄の温厚な、温かい人柄を感じさせるおじいさんという感じの人でした。それは何をしに来たかといつたら、日本の防衛力に理解を示したというのだけど、要するに日中間の防衛交流を深めていこうという対ソ連対策でしょうね。

伊藤 実際に向こうに行かれたときは、向こうの次官クラスの人と。

夏目 次官クラスではなくて、国防大臣の張愛萍とか、参謀総長とか、そういう人と会つた。私が行つたときは初めてだから国賓待遇なんです。特別機なんです。みんな。飛行機で西安とか北京とかへ行くんです。向こうの人も、七、八人一緒に乗り込んでくるんです。もちろん、特別機といつたつてまったく、日本では何だろう、C46みたいな旧式の飛行機ですけども、特別機なんです。だからすごいですよ。

伊藤 向こうの軍隊を見て歩いて、いかがでございましたか。

夏目 張愛萍の来日の一年後に中国へ行つたのですが、それは栗原長官と張愛萍の延長上にあるんです。もう一つ、これはまったく関係ないと思うのですが、もう栗原さんがやめて、大臣が加藤紘一さんのときに私が行つたんです。加藤長官が、「夏目さん、中国に行つてきたらどうですか」ということをいつたんです。それはどうしてかという話があつた。この前ちよつとお話しように私が選挙に出るといふ話があつた。だから、加藤さんにしては精一杯の私に対する好意だつたんですね。

伊藤 それは好意なんですか。

夏目 新聞に載ることを予想し、それが選挙のPRになると思つて。
伊藤 ああ、そうですね。

夏目 私は中国へ行くよりヨーロッパへでも行ったほうがいいですよ。だけどまあ、もうやめる二、三ヵ月前ですかね。七月にやめたのだから、五月か四月かそのころ。加藤さんがそういうことを考へて、「行かれたらどうですか」といつて、そういう意味では加藤さんというのはなかなか親切な人だなと、その時思つたんです(笑)。そのほかは別ですけどね。行つたら、本当に国賓待遇です。初めてだからね。釣魚台というのかな。あれは何ていうのだろう、貴賓館みたいな迎賓館みたいなもの。

伊藤 ええ、あります。あれは迎賓館です。

夏目 あそこへ泊まつて、あそこで総参謀長とか張愛萍とかみんな来るし、あの広場の前のでかい建物は何というの？

佐道 天安門広場。

夏目 天安門広場のところにある、あれは何という。

伊藤 毛沢東記念館ではなくて。

夏目 よく外国の要人が来ると写真を撮っているのがあるじゃない。あの部屋はただだっ広いだけで何の趣もない部屋だけだね。講堂みたいな部屋の隅っこにちゃんと座つて話をするのだけけど、そういうところ写真を撮らせたり、本当にサービスがよかつたですね。部隊に行くと、部隊はちゃんと予定された行事をきちんと組むし、なかなか気分がいい旅行ではあつたですね。

伊藤 一応、中国の精鋭を見せたわけですか。

夏目 そこしか見せないですよ。陸軍なんかへ行つても、まず武器庫を訪問したのですけど、武器庫にあつた鉄砲というのは日本の38式小銃なんです。油をつけてピカピカに磨いたのがずっと並ぶんです。こんなものを使っているのかなと思つたけどね。それで、今度は展示演習をやるんです。それは見事です。射撃にしても、格闘術にしても、超一流のやつを集めて見せるのだから。

木登りなんか、サルみたいなもので、シユシユシユと登つちゃうんですよ。それで人のうちの窓から入るとか、そういうのを見せるわけです。ところが見てみると、人民軍の服装をしているのだけど、靴下の色が黄色のをはいているやつとか、白いのをはいているの、黒いのをはいているのと、まあ、軍隊であんなのは珍しいですね。それで、靴も軍人の履くような靴ではなくて、こんなになつた(湾曲した)中国靴みたいな変なのを履いている者もいるしね。あそこまで注意が及ばなかつたのかねえ。そういうところはまだ貧しい国だなという感じはしましたけれども、とにかく見せるものは一流でした。船だつて、東海艦隊といつて、上海に船があつた。あのころ、たいした船はないんですよ。いっぱいいい船、ソ連時代の名残のミサイルを積んだような船を見せるのですが、ペンキ塗らたて。本当にペンキの匂いがくさいんですよ。二、三、私が乗っている船と近所にある船は塗つてあるのだけれども、遠くにある船は塗つてないんですよ。

佐道 塗れないから遠くにやつちやつたんですかね(笑)。

夏目 それで、その船ではないんだけど、遠くの船——遠くといつても目で見える範囲——は、上で七輪か何かで料理をしているんです。昔と同じなんです。針金で何か干してあつたり。だから、見せるところを精一杯きれいにしているんです。横断帳幕に、「熱烈歓迎」と書いてかけたり、儀仗隊を並べたりすごいんですよ。子どもみたいな顔をした水兵がね。あそこの海軍というのはオーション・ネービーではないんですよ。おもしろいんですよ。船の上、甲板は茶色なんです。というのは、揚子江とか黄河を砂が流れてくると、海まで茶色なんです。海は決して青くないんですよ。海上自衛隊の船は上も下も横もみんな同じ色でしょう。あれは、横つ腹はさすがにペンキを塗つたけど、上は茶色なんです。保護色にしているんだね、きつと。あるいはペンキがなかつたからかな、わからないのですけれども。もちろん船といつたつてせいぜい小型の

駆逐艦程度の船しかなかったですけれども、まあ、とにかく精一杯の歓迎をして見せてくれました。だけど、端的にいうと二十年から三十年おくられているという感じがしました。

佐道 三十年ですか。

伊藤 でも、いまは外洋なんかも持っているのかしら。

夏目 それまでだって潜水艦なんかがあったのですけれども、普通の訓練用の。ソ連の力でジェット機なんかもあったんですよ。だけど、ジェット機は行ったときに天気が悪くて飛べなくて。

伊藤 天気が悪いと飛べないのですか。

夏目 飛行場といえどもペンペン草の生えたような飛行場で、航空自衛隊の飛行場なんていうのは近代装備のあれみたりなところなのに、そんな感じが全然ない。倒れそうな小屋があったりして、だいじょうぶかよというような。そこまで手がまわらなかったのでしょうか。

佐道 まあ、土地もいっぱいあるのでしょうか（笑）。何日間くらい行つてらっしゃったのですか。

夏目 一週間くらいです。

伊藤 向こうと協議して何か決めたことがあるのですか。

夏目 いや、特別に何かを決めたということはないです。日本の防衛力の説明だとか、これから仲良くしようとか、それから、たしか練習艦隊の相互訪問をやったほうがいいんじゃないかみたいな話をしたかもしれませんね。向こうは向こうで軍の近代化の話をして、こういう点について西側の協力を得たいみたいな話をしていました。

伊藤 そういふのはやはり、帰ってきて報告書をつくるのですか。

夏目 報告はしています。外務省も一緒に来ていますからね。たしかあのときは中江要介、あの人も天安門で会見するときには隣に座っていました。

伊藤 すぐ外務省に報告ですね。

夏目 ただし、その釣魚台での会見のときなんていうのは、外務省の人もいたけど、大使はいませんでしたね。たしか大使館の人はだれかいたと思いますから、同じように送っていると思います。

伊藤 まったく外務省の人がいないということはないのでしょうか。

夏目 酒を飲むときくらいですかね。そういえば彼らは酒を飲んでも……。マオタイ酒というのがあるでしょう。「乾杯（カンペイ）」といって底を見せるのね。そのたびに一杯飲むですよ。「日本と中国の有効のために」とか、「〇〇先生の健康を祝して」とかね。そのたびに飲み干していると酔っ払っちゃうのですけれども、彼らはどうも水を飲んでいらっしゃるんだね。マオタイ酒というのは貴重品なんです、当時。毛沢東か何かが好きだったとかいいます。それで、台の上に並んでいるのだけど、我々に注ぐのはこちらの瓶で、彼らに注ぐのは違う瓶を注いでいる。あれは水だと思ってしまう。酔わないように。まあ、とにかく非常なサービースでした。

伊藤 酔わされましたか。

夏目 いやあ、そんな酔って醜態を見せるようなことはなかったですけどね。

伊藤 でも、マオタイは強いですからね。

夏目 腰が抜けちゃう。四、五日前に来た人は、それでホテルに帰ってから風呂で死んだってっていました。防衛庁の人ではないけれども。

伊藤 危ないなあ。

佐道 防衛庁の人はどなたか同行されたのですか。

伊藤 防衛庁からは統幕の何とか室長という人と、調査二課長と行って外務省から来ている課長、あとは通訳要員と、五、六人いたかな。向こうでは防衛駐在官がべつたり付いていましたしね。

佐道 そうですね。国交正常化からかなり早い段階で防衛駐在官が。

夏目 行ってしまったからね。日本の防衛駐在官はなかなか皆さん評判よかったですよ。

佐道 先生が中国に行かれて、中国からまた日本に。

夏目 たしか来たと思うのですけれども。そのときの総参謀長というのは楊得志という人でしたけれど、この人なんかはよく手紙をくれたり、誰某の就職を頼むという依頼を受けたりしたくらいですよ。姪とかと称する若い娘が防衛庁へ訪ねてきてね。中国というのはやたら、そうなると思うとすぐそういう個人関係になっちゃうんですね。徐信なんていうそのときの副参謀長もその後日本に来ています。そのときは、私は奈良から大阪から案内して歩いた。もう私はやめていましたけどね。

伊藤 やめてからですか。

夏目 やめてから。顔見知りの人がいたほうがいいだろうと、防衛庁に頼まれて奈良県の農家を。農家を見たいというのでね。それから、松下電器の大阪の工場へ行ったり、案内したことがあります。当時の中国は日中友好に熱心でした。ちょうどたまたま時代がそういう時代だったのでしょね。

伊藤 まあ、これから時間がたつと、まただいぶ違ってくると思いますけれどもね。

夏目 だから国際関係というのはわからないですね。日本だけですよね、あまり変わりばえないのは。

■教育訓練局と人事局の設置

伊藤 話は先に進みますが、防衛庁の内局の機構改革で、人事教育局と衛生局を廃止して、教育訓練局と人事局が設置される。これはどういう変更なんですか。

夏目 その変更はいつ頃か私もちょっと覚えがないけど、多分、人事局と教育局が統合して、人事教育局になったり、またもとに戻ったりして年じゅう整理の槍玉に上がるのは人事教育局と衛生局なんですよ。弱いところなんです。

伊藤 これによると、衛生局がなくなっている。

夏目 衛生局も弱いんです。厚生省から来ているんですからね。防衛庁でいえば、防衛局とか官房とかそういうところというのは

それなりに自らの仕事を持つているが、人事教育局の仕事はほとんど各幕がやるでしょう。衛生局だって各幕に各々衛生部長というのがいて。医者の仕事なんて、そう忙しいわけじゃないから、弱いところが年じゅういじられちゃう。私は間違いだと思うんですね。本当は、こういう行政整理のときにはいちばん強いところをつぶせばいい。昔、僕らが若いころは、どこの省かな、会計課と人事課をつぶしたんです。それで会計管理官とか人事管理官とかに名前を変えたんです。二、三年で復活しちゃうんです。防衛庁みたいに、まじめに弱いところをつぶすから、なかなか復活できない。やつぱり防衛局をつぶせばいいですよ。

伊藤 衛生局なんていうのは要らないものですか。

夏目 いまはないけれども。要らないということはないですよ、やつぱり……。

伊藤 なければないで済むということですか。

夏目 済むというか、各幕がある程度やっているし、局がなくなっても衛生参事官というのがその仕事をすれば済むんです。

伊藤 ああ、そうですね。参事官がいるわけですね。

夏目 このときは、むしろ狙いは教育訓練局なんです。要するに訓練を重視した。リムパック以後、ガイドラインができてから日米共同訓練というのが非常に頻繁に行なわれるようになって、海上自衛隊の訓練なんかに至っては年に十何回も行うんです。航空自衛隊も年に二回大きな演習をやるようになって。そういうことになる、いままでの教育局の中の片手間でやっていたような仕事ではなくて、日米共同訓練みたいなものを専門に扱う部局が必要になってきたというので教育訓練局にしたんです。人事教育局というのは人事局と教育局と一緒ですからね。それだけのことですよ。もう年じゅうこのへんは浮いたり沈んだりしている、うた

かたのごときなんです。

佐道 こういう機構改革を推進するのはどこになるわけですか。

夏目 これは官房だと思えます。もちろん官房だけでは決められなくて、庁議とかそういうのにかけるんですよ。かけるのだけれども、根っこには大蔵省なり行政管理庁から、一局削減とか、定員の割削減という大命題がまず予算と同時に出るんですね。すると、どこかをいじらないわけにはいかないんですよ。そういうときに、これもインチキキなんだよね。局をなくして仕事がなくなるのならわかるけど、仕事はあるから、結局、局長が衛生参事官とか教育参事官になるだけの話であって、仕事が変わるわけではないから人数も減らないで、定員的にはどこが減るかといったら、守衛さんが減ったり、ドライバーが減ったり、ポイラーマンが減ったりして辻褃を合わせちゃう。まったく役人というのは始末が悪いですね。だから、いまだんだんそういう点が手薄になっちゃうんです。研究所もそうでしょう。

中島 寂しいですね、研究所。

夏目 研究員とか所員は減らさないで、だれが減るかといったら、守衛さんとかそういうところへシワ寄せされる。

伊藤 大学なんかは本当に典型的で、守衛さんが昔はたくさんいたのに、どんどん、どんどん。

夏目 先生は減らさないですよ。

伊藤 先生は減らさないです。先生はふやしているのですから。助手を減らして、先生をふやすとかね。

夏目 部員や事務官の分を一人減らすのができなければ、こちらは三人減らせとかといわれるようになってまたしんどいのですけれども、だんだんそういう弱いところ弱いところへ穴が開いてきますね。このときの機構改革も多分そういう背景があったのと、それにいまの訓練重視ということがあって、教育訓練局にしたのだと思います。

佐道 衛生局というのは、いまのお話にもありましたけれども、厚生省からの指定席ですね。

夏目 そうです、いまでもそうです。

佐道 それが減ると、厚生省から。

夏目 衛生参事官があるから、実質は変わらないんです。ただ、参事官と局長というのは給料が違いますね。だから、来る人がちよつと若い人、一年か二年若い人が来るということになるのですかね。僕のとときの記憶では、局長さんというのは指定職の七号俸なんです。ま、七号といたってわからないけどね。上から数えて、十一号が次官で、七号俸が局長さんなんです。参事官というのは四号俸くらいなんです。ある程度若返るような人をよこすと、そういうことになるのですね。そうだといえ、厚生省も、「仕方がありませんね」ということです。

佐道 消えてなくなるわけではないから。

夏目 「おまえのところは要らないよ」というと、ちよつとゴタゴタしますけどね。

■日米防衛首脳定期協議

伊藤 では先へ行きまして、九月にワシントンで日米防衛首脳定期協議が行なわれるわけですが、これは次官は留守番でしょう。

夏目 留守番です。

中島 五月に逆にワインバーガー国防長官が来日していますね。

夏目 ああ、ワインバーガーは年じゅう来ていましたよ。

中島 はい、非常に頻繁に行ったり来たりして。

伊藤 このワインバーガー長官との会談で防衛費の増額を約束するとか何とかかんとかここにちよつと書いてありますが、日米兵器の共通化とか、共同訓練、これは前からいっていることですね。

夏目 これは中曽根さんが総理になったときからのあれで、中曾

根さんが自分で発明したのではなくて、アメリカ側の内々を含めた要求というものをよく承知しておられたことですから、それが今度はこの首脳定期協議で話を持ち出したのかということと、これは公式発言になりますから、こういう場で確認したのでしような。中曽根さんにいろんなルートで情報がきている、シグールの情報なんていうのも例の椎名(素夫)さんを通して入っていたかも知れません。

伊藤 ああ、椎名さんね。

夏目 栗原さんが、こういうことを約束したと書いてあるのだけれども、もうこの七割というのはほとんど可能性のあることをいっているの、びっくりするような話ではない。わりかた栗原さんというのはいいたいことをいう人なんです。決して向こうのいいなりに黙って聞くほうではなくて、自分たちに出来ないことは、「出来ない」ときちんというんです。だから、ワインバーガーと栗原長官というのは個人的にも非常に親しくもなっていたし、信頼関係もありました。ちょうど中曽根さんがレーガンと仲良くなつたように。ある意味でこの時期というのは、日米間の防衛関係についてはとにかく非常にいい、蜜月関係だったということはいえるのではないかと思います。それはどうしてかという、日米関係のなかでほかのことが悪かったからなんです。経済や貿易などいろいろと悪いのでそれを防衛にリンクさせまいというのが多少アメリカにもあつたんですね。だから、いろんなことはいって来たけれども、非常にうまくいっていたんです。それで中曽根さんがああいう人ですから。日米兵器の共通化というのは、インターオペラビリティの問題として事務レベル協議でも話が出たこととで、そう目新しいことではないんです。共同訓練だつてそうでしょう、リムパック以来。

中島 六月に第十五回の事務レベル協議が行われていますけれど

も、これは先生はご出席されていらつしやいますか。

夏目 はい、していますよ。私は二度行つたわけです。そのときにはインターオペラビリティとかSDIみたいな件がちよこつと出た。

伊藤 もうそのときに出たわけですね。

夏目 SDIという名前だったかどうかは別として、ミサイル迎撃体制みたいなものね。

中島 この八四年という年を年表で拾っていても、五月にワインバーガーが来て、六月に事務レベル協議があつて、七月にはアメリカ国防総省の対日武器関連技術調査団というのが初めて来日したり、九月はワシントンで首脳定期協議があつたり、非常に頻りに。

夏目 非常に濃密な時代。

中島 そうですね。

夏目 いちばん大きなのは、中曽根さんとレーガンとの個人的信頼関係じゃないですか。アメリカとしては、SS20とかバックファイアとかいうのがあつて、ヨーロッパでたしか、SS20とか何とかでパーシングとか何かをヨーロッパに配備するとかしないとか、配備には反対だとか、SS20はアジアへ持つていけとか。中曽根さんはそれもあまり反対しなかった。ヨーロッパにあるのをこちらへ持つてくるなんて、普通なら反対しますよ。

伊藤 あれは結局、反対したんじゃないですか。

夏目 いや、その後反対したかもしれない、結局はそういうことにならないのだけれども、NATOの一員ではないけれども、理解を示しているということ。たしかね。

伊藤 それは向こうから撤去することですね。だけど、それをアジアへ持つてこられては大変だと。

夏目 大変だけれども、「大変だ」とはいつていないんです。向こうから撤去するなら撤去しろというだけで。しかも、日本はNA

TOの要員ではないけれども、NATOの立場はよくわかるみたいなことをたしかおっしゃったような気がするんです。中曽根さんというのは、いまやグローバルな視野に立って政治を見ている（笑）。伊藤 グローバルといたって、向こうにあるやつがこっちへ来るって（笑）。

夏目 だけど、結局来ないんですよ。ゼロ何とかいうのね、あれ。

中島 ゼロオプシオンですかね。いま先生のお話にありましたけれども、ヨーロッパも、「アメリカの核戦略に巻き込まれる」という意見と、「いや、見捨てられるんじゃないか」という意見と両方あったようですけども。

夏目 どこが？

中島 ヨーロッパです。ミサイルの配備云々ということを巡って。

夏目 だってヨーロッパは、民衆は大反対したんだからね。ミサイルの配備も反対だ、パーシングも反対だといってね。

中島 彼らは、SDIの話では、アメリカ本土はそれで守れるとじゃあ、ヨーロッパはどうなるんだという話もあつたみたいなのですが。SDIの質問はこの後また出てまいりますけれども。

伊藤 いや、続けてやっていいですよ。

■SDI

中島 日本では、このSDIに対してどういう見方を。まず概念というか、それをどういうふうにごらんになっていらっしゃるんですか。

夏目 SDIには理解を表明しているんですよ。まず中曽根さんが非常に理解があつたということ。もちろんその前から、SDIという言葉であつたかどうかは別ですけども、ミサイル迎撃体制についてどうのこうのという話があつて、それは日本としても、大いに関心があるし、重要なことだといって、賛成といつても、

日本がやるわけではないけれども、アメリカの立場をよく理解するようなことはいつている。

伊藤 でも、それは日本にも網がかかつていなきやしようがないわけでしょう。

夏目 網をかけるんです、もちろん。アメリカの言い分はね。日本で本土だけではなくて、たしか船の上とか島に何か所持てるのかな。アラスカと、忘れたけれども、なんかそういうものでやるという。しかしそもそも、正直いって日本にソ連のミサイルが来るなんていうことを考えていないんですよ。いま北鮮がやつたから考えているけれども、当時はソ連が日本に核ミサイルなんかをぶち込むなんて本気で考えていなかったのですね。

伊藤 それは日本が考えていなかったということ。

夏目 考えていない、アメリカも考えてないです。アメリカは、向こうが撃つてきたらまず、SDIもさることながら、報復能力でもってソ連を叩くといういわゆる抑止戦略をとっており、ソ連もそのことはよく知っているから、そんなことはないというのが前提であつた。だけどやはり、だんだんソ連の戦域ミサイルとか何とかという小さなミサイルが出てきて、小さいといつても太平洋なんかに届きますけれども、そういうものが出てきたり、あるいは艦艇に対しても脅威になるといふのでSDIみたいな構想が出てくるのです。くりかえしますが、もともとアメリカもソ連が日本にミサイルを撃ち込むなんていうことは本気で考えていなかった。アメリカとソ連が戦うということは、勢い世界規模になるといふ認識ですからね。あんまり日本の立場なんていうのは、大きな声でいえるような状況ではないのです。日本の防衛力についていろいろいつてるうちはいいいけれども、アメリカがやるうとしてしていることに対してどうのこうのといえる立場でもないんです。だから、賛意を表するといふか、理解を示すということになっちゃう。

伊藤 それは夏目先生も理解を示したのですか。

夏目 多分そうだと思います。私もあんまりはつきり覚えていませんけれどもね。要するに当時のアメリカのいうことは一つひとつもつともだと思つた。むしろ日本側からいつてそうすべきだということもいつぱいありました。私はいつもいつていようように、日本とアメリカというのはそれぞれが勝手に防衛力を整備するのではなくて、役割分担に基づいて西側の一員としてお互いに補充し合つていくのがいちばん合理的ではないのかという気持ちがあつたんです。日本独自で何かしようなんてことを考えるべきではないと。アメリカもそのほうが利口じゃないか。こちらがそういうえばアメリカも乗ってくるだろうと思つたことをいつてきただけの話であつてね。ただ、いまになるとちよつと違つてきましたけれども、その頃はそういう方向で動いているんです。

中島 八四年、あるいは次の年ぐらゐも、アメリカ側の日本に対する期待というのは、インターオペラビリティを向上してほしいとか、あとは周辺海域防衛みたいなことになるのでしょうか。

夏目 シーレーンの話はね。

伊藤 だいたい同じ話ですよ。

夏目 それが濃密に行なわれたということでしょうね。中曽根さんもそういうのを非常にアピールするから。それまではそういうものを腫れ物にさわるみたいに、たいしたことはないみたいにあえて過小に見ていたのだけれども、中曽根さんはそれを積極的に打ち上げる人でしたから。だから国会では大変でした。

伊藤 しかし、国会でやられつぱなしということはないでしょう。

夏目 やられつぱなしではなくて、むしろいい議論ができたという事です。逃げ腰ではなくできたから。中曽根さんというのはある意味で歴代総理の中でも国家戦略を持っていた立派な総理だと思ひます。今回もうちよつと引き際が立派だと、もつとよかつたのにな。

中島 防衛庁長官時代と首相になつたときと、例えばアメリカに

対する考え方が変わったというのはもちろんでしょうけれども、政策を実行していくときのやり方というのでしょうか、そういうことも変わつていつたということなのでしょう。

夏目 まあ、変わったでしょうね。防衛庁長官で何か一つのことをやり逃げようとしても、なかなか簡単にできません。中曽根防衛庁長官のころの政治情勢というのは、まだそこまで熟していなかったし、中曽根さんに批判的な者も多かつたからそれは無理なので、むしろ総理になつて水を得た魚のごとくなつてきた。多少そのへんの乖離がないとはいえないけれども、それはあの人の持ち味だから。「風見鶏」といわれるくらいだからね。世の中も変わつてきているし、べつに非難することではない。

伊藤 まあ、風見鶏というのは政治家にとつて必須の条件でしょうからね。

夏目 世の中の情勢をパツと見極める能力と思ひばいいのですから。それは、自主防衛なんてこのころになつていつたら、きつと馬鹿だと思われるね。これはしまつた、えらいことになつたと。

伊藤 いまでも自主防衛をいう人がいますからね(笑)。

夏目 中曽根さんはアメリカとも緊密な連携を持つ一方、日本国内に対しては学者連中を使つて国内世論というものを少しづつ変える、そういう努力をきちんとしたのは、あの人の腹の中には、日本を真つ当な独立国として憲法の改正も視野に入れた世界の中の日本としての戦略を持ったのでしょうか。それはそれで立派だと思ひます。その後また、しばらくだめな総理が続くけど。

伊藤 このときに敷かれた路線は一応継承されるわけですよ。

夏目 そうですね。その後は、あんまり物議を醸さないで当時の路線を走つていられるようになったからね。中曽根さんが上手なのは、後藤田という、全然自分と人生観、世界観の違う人を官房長官に据えて、政界とか役人とかはそういうので押さえて、自分は高邁な理論を吠えていられる。そこらへんは非常にうまくやら

れましたね。

伊藤 ではまあ、叱られたかもしれませんが、後藤田さんというのはいやかなり大きな存在なのです。

夏目 それは大きいですよ。その後、今度はイランの湾岸戦争のときにまた後藤田さんが存在感を表してくるのです。そのころは比較的、この程度までということに我慢しておられましたね。

伊藤 やはり、だいたい考え方は違いますね。

夏目 違いますよ。だから僕らはよく後藤田さんからは睨まれましたね、正直いって。中曽根さんは防衛庁大好きな人ですから。その後私が防衛庁関係者の選挙応援をやっている時もそうなんです。『自衛隊の力はすばらしい』とかいって。それほどすばらしくないんだけどね、そう思い込んでいますよ。やっぱり国士ですよ。

■防衛費1%問題

伊藤 翌年六十年の衆議院のいちばん問題は防衛費1%問題なのですけれども、これは中曽根さんが、『複数年度の防衛計画費総額を明示することで新しい歯止めをつくる』ということ。

夏目 これは、『複数年度』というからややこしいのですけれども、前にお話ししたけれども、五六中業というのは政府部内の計画というか、防衛庁限りでの計画だということにして格落ちしたんです。そのときでも五年後の防衛費というのは1%を超えたんです。GNPの推計ではね。だけど、そのときには一種の試算だからということであまり大きな議論には、多少はなつたけど、そんなにたいしたことはなくてなんとか乗り切ったのだけど、中曽根さんが来て、1%突破というのは対米武器技術輸出と同じようなレベルにおいて何とかしていかなくちゃいかんと思ひ込んでいます。ところが、絶対当時の政界は中曽根さんに非常に冷たい。

伊藤 政界というのは、自民党の中で。

夏目 自民党の中も、それから野党ももちろん、歴代総理なんかも全部反対だったということを知ることがあります。それで中曽根さんもちよつと窮地に立つて、これは難しいなということをしてたしか認識されたのだと思う。そこがあの人の頭のいいところで、五九中業の格上げ持つて行くのです。そして、五年計画の中で1%を突破する。これなら相手が文句をいっても多少しのげるのではないかとこのことを考えたんです。そのとおりになるんですよ。五九中業は国防会議決定になるんです。なるのだけれども、1%問題はそのまま置いていかれちゃうわけです。あと数年かかる。だから中曽根さんは、なんとか自分のいるうちにこれにけりを付けたかったんでしようね。

伊藤 でも実際、1%を超さなかった。

夏目 超さなかったはずですよ。たしか六十二年、超すのはそのころでしょう。そのころまでちよつと議論があつて、もう私はやめていましたけれども、結局このときもだめなんです。

伊藤 1%なんていう問題は。

夏目 防衛庁はあたりまえだと思つていますからね。ただし、『おまえたちは墨を離れるな』といわれているからきちつと守っているの、自分からはいわないけれども、総理の出方をじつと待つ。一つ動いて、これもまた内緒話だけど、このころたしか西独か何かのだれか死んだんです。アデナウワーかな。ちよつと記憶がないのですけれども、だれかが死んで、各国の首脳が集まるんです。そのころ中曽根さんが1%にふらつと弱気になっていた気配があるんです。ちよつと正確な時系列の記憶は……。そこで、私もワルなので、アメリカのアーミテージに電話したんです。自宅から朝早く、六時か七時くらいかな、向こうは何時になるのかな、とにかく電話したんです。「中曽根さんがちよつとふらついているぞ」と。そういう話をしたらアーミテージが、「すぐ大統領に伝える。多分、ボンで何らかのアクションがあるだろう」と。

いくら首脳同士が会うといっても、葬式の席でそんなテーマを出すのはいかなかと思つた。実際いつたかどうかは知りません。アーミテージというのはそういう人なんですよ。

伊藤 いや、夏目さんというのはそういう男だと(笑)。まあ、ホットラインみたいな話ですね。

岡田 いま、五九中業の格上げということで、後の中期防衛力整備計画だと思つたのですけれども、この前夏目先生は、五六中業のときは最終段階で防衛局長になられて。

夏目 最初の段階ね。

岡田 自分の子どもではないので、ちょっとかわいくなかつたというお話だったのですけれども。今回は逆に、実際に発表されるのはおやめになった直後なので、策定の間はずっとタッチされていたわけですね。

夏目 次官としてタッチしました。だから僕は、正直いうと、五六中業よりもむしろ五九中業のほうが自分も苦労したなという意識はあります。ただ、出上がつたときは確かにいなかったと思うのですけれども。それから、政府レベルにするのも私は賛成なんです。ただ防衛庁内限りというのは、クソの役にも立たないんです。整備計画にしても、大蔵省はいろいろいつてきますからね。それを防衛庁限りの計画なんていったら、大蔵省は何とも思わないんです。だからそれは政府計画にしなければいけないし、ある程度防衛計画というのは、きちつと中期的にみて順序よく進めていくためには、またそういうものを政府、与党内で認識してもらおうという意味でも政府計画にすることが大事だと思つていられるわけです。中身も多少タッチしてました。一つの例をいうと、イージス艦というのがあつた。あのイージス艦というのは、いまはあたりまえになつちやつたのだけど、当時、防衛局と海上幕僚監部で議論していたが決着がつかないんです。土壇場まで。

伊藤 どういうふうに決まらないのですか。

夏目 片方は反対なんです、防衛局は。

中島 防衛局は反対。

夏目 矢崎プリパンと、防衛課長の藤井という、この二人は絶対に反対なんです。

中島 それはどういう理由から反対されていたのですか。

夏目 ひとつはまず金の面、もう一つはまだちょっと早いんじゃないかということです。べつにイージスそのものがどうのこうのとけちを付けることではない。何でも欲しいものをやるといのはけしからんというのが背景だつたと思います。ところが海上自衛隊はそれが命なんです、当時の。だから、幕僚長やら防衛部長やらが私のところへ来て、「これだけはなんとか日の目を見せてくれ」といつて。ところが、私も防衛局長という自分の直属の部下が反対しているものを、やるともいえないよね。さりとて海上幕僚監部の気持ちもよくわかる。そこで結局のところ五九中業の中に経費を積めと、イージスに必要な経費は海上自衛隊の予算の中にぶち込んだのです。「ただし、中身については今後引き続き検討の上、必要などときには整備に踏み切る」みたいな一文を入れた。両方とも半分不満で、半分ホツとした。だけど、すぐそれは海上幕僚監部のほうの勢いが強くなつて日の目を見ちゃうんだけどね。そういう意味では五九中業には多少思い入れはあるんですね。

伊藤 イージス艦はそうやつてできたんだ。

夏目 本当、すごいんですよ。「絶対に反対してください」というんです。俺の部屋へ別々に来てね。「ある程度調整して来い」というののだけ。

伊藤 ここで切りましょう。

夏目 もうおわかりかな。

伊藤 いえいえ、そんな簡単にはおわかりませんよ。

(終了)

夏目晴雄 オーラルヒストリー

第14回

開催日：2004年1月3日（火）
開催時刻：14時00分
終了時刻：16時10分
開催場所：財団法人 防衛弘済会

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学元助教授）

中島信吾（防衛庁防衛研究所戦史部教官）

岡田志津枝（防衛庁防衛研究所戦史部所員）

記録者：
有限会社ペンハウス 矢沢麻里

第14回 インタビュー 質問項目

2004年1月13日

今回も防衛事務次官時代の続きからお願いいたします。

1 84年11月、逗子市市長選挙で、米軍住宅建設に反対する富野暉一郎氏が当選しました。これは施設庁の関係になると思います。次官として先生はこの問題についてどのようにお考えでしたか。

2 前回、中国を訪問されたときのお話をうかがいましたが、85年4月に、胡耀邦共産党総書記が人民解放軍100万人削減の計画を発表しました。日中の防衛交流が議論される中、中国軍備削減の話はどのように見ておられたのでしょうか。

3 85年6月、経理局長に池田久克氏が就任します。池田氏は防衛庁出身者ですが、経理局長は78年に自治庁出身の渡辺伊助氏が例外的に就任しているのを除いて、これまで大蔵省からきた人の「指定席」のポストでした。池田氏就任の経緯などについてお願いします。また、こういった場合、大蔵省からのクレームなどはないのでしょうか。

4 同じく6月、先生は防衛事務次官をお辞めになり、防衛庁を退職されます。後任次官（矢崎新二氏）の選定などにはご意見を言わ

れたのではないかと思います。後任についてはどのような基準でお考えになっておられましたか。また、引き継いでもらいたい課題などについてはどういった問題をお考えでしたか。

5 以前のオーラルで退職後は何もしたくなかったというお話でしたが、退職後の生活についてはどのようなことを計画しておられたのでしょうか。また、約半年の間を経て12月に防衛庁顧問に就任されています。顧問としての役割や就任の経緯などお願いします。

6 6月25日、衆議院で国家秘密法案が異例の記名投票で継続審議になるなど、この時期に国家秘密法を制定しようという機運がありました。この問題には防衛庁も無関心ではないと思いますが、宮永陸将補の事件などを経て、防衛庁内で機密保護問題に関して当時どのように議論されていたのでしょうか。

7 8月12日、羽田発大阪行き日本航空機が墜落し、520人が死亡するという大惨事がありました。このとき、墜落現場が群馬県御巢鷹山という不便なところだったため、救助活動にあたった自衛隊も大変な苦労があったといわれています。退官後のことではありませんが、自衛隊が関係した救助活動史上でも重要な事件としたいと思いますので、この事件でご存知の点がありましたらお願いします。

8 9月18日、新防衛計画（中期防衛力整備計画）が閣議決定されました。総額1兆4千億円で、平均GNPが1・038%になると予定されていたわけですが、これの実現についてはどのように見ておられましたか。

9

11月19日、6年半ぶりに米ソ首脳会談があり、戦略核兵器の50%削減などの共同声明が出されました。ソ連はゴルバチョフの登場以来、ペレストロイカ路線を進み、これまでと随分変わってきたという印象を内外に与えていたわけですが、当時のソ連の変化について先生として防衛庁はどのように見ておられたのでしょうか。

10

12月28日、第二次中曽根第二回改造内閣が成立し、防衛庁長官には加藤紘一氏が留任されました。加藤長官には先生はかなり批判的だと思いますが、加藤長官留任となったことについてはどのようにお考えになりましたか。

※今回は以上の点についてお願いします。

■ 逗子市長選挙

伊藤 きょうは、また事務次官時代の続きなのですが、いちばん最初は逗子市長選挙の問題です。米軍の住宅建設反対という富野（暉一郎）さんが当選した。これは施設庁関連の仕事でしょう。

夏目 ほとんど施設庁でやりました。

伊藤 でもまあ、次官としても全然知らん顔ではないのでしょうか。

夏目 知らん顔ではないけれども、実務はほとんど施設庁長官が仕切っていました。昔はどうだったかわかりませんが、私のころはもう、施設庁長官はみんなそれぞれ立派な人がいたから、そういう人がやっていました。ただ、この逗子市長だけは思い出があるのは、これはもちろん基地反対で当選してしまっただけで困ったなと思ったのですが、まったく防衛庁、施設庁との間のパイプが切れちゃったのですよね。「聞く耳持たない」みたいに、両方ともそういうところがありました。富野氏を相手とせず、向こうも、「施設庁とか防衛庁は我々とは立場が違うんだ」と。そういう感じがあつて、両者の関係というのは意思の疎通がまったくなくなっている時期があつたのです。私は、「それではいかんだろう。逗子市だって、やりようによつては考え方を变えるかもしれない」と思つて、だれの紹介だったのか、自分の意思だったのか、ちよつとそこは記憶がないんですが、逗子市長に直接電話して、「時どき会おうじゃないか」と言つて。こんなことはだれにも内緒なんです。

伊藤 施設庁長官にもですか。

夏目 もちろん。都内……。

伊藤 某所？

夏目 某所で（笑）。ホテルで二回か三回会いましたかね。もちろん、そんなことですぐ彼らが考え方を变えるわけではないけれども、多少毒にもならない情報交換をしながら、とにかくパイプ

だけは切らんでおこうやと。立場が違うからだけで、べつに敵同士ではないのだからということで、話し合いの場はつなげたんです。それで、二人きりで会つていた。

伊藤 向こうもだれも連れてこないのですか。

夏目 連れてきていたけれども、外へ待たせているから、部屋にはいませんでした。たまには一杯飲みながらというのもあつたけど。こういうことはどうせわかりますからね。

伊藤 わかるのですか。

夏目 どこかで情報が漏れますから。「あいつは変なことをやっているんじゃないか」と、そういうことではいかんと思つたから、当時の大臣にはたしか事前に了解をとつていたと思うんです。「知らんことにしててくださいいよ。私が勝手にやるのだから」といつて。しかし、だからといつて、それで情勢が変わつたわけでもないし、何もないのだけれども、とにかく非常に仲良く話げできました。だから、個人的には富野という人もなかなかのものだと思つていました。やっぱり若い女性にもてるだけのことはあるなど。あれはご婦人の票でもつたのですからね。

伊藤 だけど、向こうは条件闘争には絶対にしない。

夏目 そういうところまでは近寄ることはできませんでした。やはり立場がありますから。ただ、「こういう状況ですからね」という、向こうの内部の状況をある程度教えてくれました。けれども、富野氏だつていつまでもやつているわけではないから、それならこちらはどういう行き方をすれば攻められるかとか、人が代わつたらこういうふうになるとかいう計算はできますから、まったく無駄ではなかつたと思うのです。

伊藤 それ自体が何かを生むということとはなかつたということですか。

夏目 そう。べつにそれでどうつてことはないし、逗子市の姿勢が変わつたわけではないのですが、表向きはパイプが切れている

ようだけど、実際はそういう水面下のつながりは持っていた。これは施設庁長官も知らない。いまでも知らないでしょう。

佐道 先生はお一人で出かけておられたのですか。

夏目 一人で出かけていました。

伊藤 そういうときにだれかを連れて行くためですよ。

夏目 そうするとまた漏れますしね。ただ、秘書はホテルの別の部屋で待っていたかもしれません。その程度です。

伊藤 「何か変なことをやっているよ」というふうには。

夏目 やっていないのに、やっていると思われてもいかんし、「また何か変な約束でもしているんじゃないか」とかいうことになつてもいけないから。また、そんな気もなかつたんです。ただ情報交換みたいなつもりだけだったのですが。そういう思い出がある程度で、困つたなどとは思いませんでしたけれども、まあ、しようがないなど。だけど、市長がどうあれ、ある程度防衛庁の権限でできることはありますから、それはそれで淡々と進める。そういうことで、あんまり困つたという記憶はないです。

伊藤 防衛庁の権限でできるというのはどういうことですか。

夏目 住宅建設にしても米軍基地の中でやるのだから、原則的に文句はないわけです。米軍の施設の中で住宅を建てるわけですから、反対はしても、強行突破なんかをするということはないけれども、とにかくなるべく目立たないように徐々に既成事実をつくっていくということができます。

伊藤 実際の建築をしてしまふ。

夏目 もうしていたのではないですかね。し始めたと思います。ちよつと私も……。

伊藤 資材や何かを運び込めば、すぐわかるでしょう。

夏目 それはなんぼでもできますね。道路を閉鎖するわけにはいかないから、門の前で屯しているくらいのことですからね。もう一つ、たしかあのときに三宅島の村長選があつて、やはり負けた

んです。これも反対派が勝つちやつた。

またこれでもう一つ内緒の話をすると、佐々（淳行）長官がいたのはどちらかな、逗子市の市長選かな。佐々施設庁長官で、私が次官のときで、加藤紘一さんが大臣のときです。どちらなんだろうな、記憶がないのですが、選挙の直前に彼が外遊しちやつたんです。

伊藤 佐々さんが。

夏目 うん。「絶対に勝ちます。ご心配なく」といって。

伊藤 大韓航空機の時もそうでしょう（笑）。

夏目 うん、大韓航空機。いなくなつちやつたら、その間に負けちやつたんです。加藤紘一氏がまったく不興げというか、機嫌が悪くなつちやつて、「なんだ、あんなに立派に大言壮語したのに負けたじゃないか」といって、もともと仲が悪い人ではあるけれども、全然調子が悪くてね。そういうエピソードがありました。

佐道 ここでも危機管理に失敗していますね（笑）。

夏目 だからいつているでしょう。高邁な理論家ではあつたが、

実際やっていることはね。

伊藤 いやあ、なかなか人間、両立は難しいということ（笑）。

佐道 「情報、情報」とおっしゃっているんですけれどもねえ、なかなか。

夏目 まあ、選挙は水ものだから当てにならないといえればそれまでだけど、でも、ちよつとでもそういう可能性があつたら彼は行くべきではなかつたのでしょうかね。そういう懸念を大臣が示されたのに、「だいじょうぶです」といって出かけちやつたんですね。まあ、べつに彼がいたら選挙に勝つわけでもなんでもないし、いなくなつてどうってことはないんですよ。だから、黙って行けばいいんです。「選挙がありますけれども、後はよろしくお願ひいたします。どちらにひっくり返つても大勢に影響はないから」と。佐道 やはり大勢には影響ないのですか。

夏目 まあ、選挙の結果によっては影響あるけれども、彼がいるかいないかは関係ないでしょう。大臣もいるのだし、そのころは官邸も三宅島のことについては全部承知して動いていますからね。

伊藤 反自衛隊というようなことで選挙をやるといのは、ある時期にうんと流行りましたよね。

夏目 流行ったんですね。それで、だいたい反対するほうが勝ちますよね。

伊藤 だけど、それじゃあ、いつまでもそれが続くかということ、そんなことはないですね。

夏目 そのことで自衛隊の政策がどうのこうのということでもない。まあ、多少スピードが落ちたり回り道はするけれども、既成事実はだんだんできてくるのですよね。

■人民解放軍の百万人削減計画について

伊藤 そうですよ。話が変わりますが、この前、中国を訪問されたときの話がありました。ちょうど八十五年、胡耀邦が「人民解放軍百万人削減」という大きなニュースを出しましたね。

夏目 ちょうど私が行く直前くらいですか。

伊藤 この削減の話というのはどんなふうを受けとめられましたか。

夏目 どういうふうにか、当時の状況をいま思い出してみると、やはり中国はソ連とある意味で非常に仲たがいの状況になって、例えば、具体的には中ソ条約延長を拒否したとかそんなようなことがあって、ソ連と中国の間というのは非常に疎遠になってきた。それまでは中国はすべての問題について、特に軍事力についてはソ連の支援のもとに発展してきたわけですから、それが期待できなくなったというのが大きな背景としてあったと思うのです。そういうときに中国が何を考えるかということ、やはり経済は相当苦しい状況である。どうしたらいいかということで、あの

ころはたしか四つの近代化といって、農業と、工業と、科学技術でしたかな、国防と科学技術かな、四つの近代化というのを進める。その中の一つが軍の近代化なんです。

それはどういう背景かということ、いま言ったようにソ連の間がちよつと疎遠になってきたということ、世界情勢は冷戦がまだ続いていたけれども、世界大戦というのは抑止されるだろうというのが周知の情勢だったんです。あと残されているのは局地戦。中ソ国境とか、中越国境でどうか、中印国境がどうか、そういうことというのは大いにありえたり、また彼らも予想されることだったのです。そうなるにまづ、局地戦に切り替えなきゃいけない。それから、軍隊はたしか四百万、それを百万削つてとにかく身軽になりたい。しかし、そのためにはやはり軍のハイテク化というか、近代化というのは必要であろう。それから、その数年前にいろいろなことがあったときの反省として、補給支援というか、後方支援というか、ロジスティック能力、そういうものが中国としては深刻なんだ。そういうものが百万人の削減というふうにつながったのだと思います。そのことを私が行ったときに縷々説明してました。その走りがこの胡耀邦の話だろうと思うのですけれども、背景は同じだと思います。

伊藤 百万人を削減するということは、百万人の失業者が生まれるということですよ。

夏目 それをほかの経済とか農業とかに振り分けるといふ。近代化策には、そういうハイテク化みたいなことだけではなくて、階級制度の復活とか、そういう中身もあるんです。私が行ったときには全部階級なしですからね。赤い階級章が一種類付いているだけなんです。将軍から一平卒に至るまで、みんな無印なんです。どういうふうに見分けるかというと、生地で見分けるんですよ。

伊藤 ああ、洋服の。

夏目 これはやはり、将軍、提督はいい生地を使っています。

佐道 でも、ちょっと離れるとわからない(笑)。

夏目 わからない。側で見ればわかるよね。「ペラペラのやつを着ているな。これは兵隊だな」とか、「ウールを着ているのは、これは高級官僚だ」とか。立派というか、まあ、日本ではどうってことないけれども、彼らの中では高級な服装なんです。だけど、兵隊が着ているのは昔あった人絹みたいなね。あれを変えるだけでも大変でしょう。とにかく一人一着としても四百万着要るのですから。

伊藤 でも、減らすときに「百万人減らす」というのは。

夏目 でも、彼らにすれば、どこを減らしたかわからないんですよ。

伊藤 だけど、国境線が非常に長いでしょう。中印国境にしたってそうだし、中ソ国境にしたってそうですが。だからやはり、相当人員をはり付けておかないといけないよ。

夏目 そういう愚を避けようということがあったんでしょ。国境線に兵隊を並べるといふのは愚だど。とにかく全面攻撃なんかはないんだ。ノモンハンであるとか、張鼓峰であるとか、そういうところで局地にぶつかるとはあるだろう。そういうことはあるかもしれないから、そういうときにすぐ即応できるような体制を持つていないといかん。だけど、国境全部なんていうのはあまり考えていない。

伊藤 やはり、一種の戦略の変更ということですね。

夏目 戦略の変更はあったと思います。

伊藤 しかし、百万人というのはかいよねえ。

夏目 日本から見ると、想像できないですね。

伊藤 総人口が違うからしょうがないんだけど。

夏目 とにかく、彼らは軍隊といつても軍隊といえないんですよ。正直いうと、私が行った軍隊なんていうのは、鳥小屋あり、豚小屋あり、畑はつくっているのは、葉はつくっているのは、ちょっと

した生産工場、あるいは農場。

伊藤 屯田兵みたいなものですね。

夏目 屯田兵みたいなものですね、本当に。兵舎はありますけれども、その周辺はそういうものでできて、漢方薬までつくっているんですよ。だから、こんなのは兵隊に数えるほうがおかしいと思うね。

佐道 国営企業の一つみたいな感じですね。

夏目 まあ、そういうことですね。いまは知りませんよ。私が行ったころはそうでした。

伊藤 しかし、いまだって軍営工場はたくさんあるでしょう。

夏目 あるかもしれませんがね。

伊藤 巨大な産業になっている。

夏目 いちばんいうことを聞いて、働かせるには便利だからでしょうね。だから、中国四百万の軍隊というけれども、実質的な軍隊としての実力はそんなにたいしたことはなかったのですね。

伊藤 陸軍はそうかもしれないけれども、空軍とか。

夏目 海軍も空軍も、当時はまだお粗末でしたよ。海軍は沿海海軍で、沿海海軍というよりもむしろ江上艦隊とでもいうのか、川ですよね。沿岸から本当に何キロくらいしか出ない。この前もお話したように、船の色が違うんです。甲板の色が黄工色なんですよね。海の色にしちゃうと目立つから、泥の色にしてある。空軍だって、私が行ったときには一機も飛ばなかったんですよ。雑草は生え放題の飛行場で、ソ連からもらった、自衛隊でいえば二十年もたったような戦闘機。もちろん一部は見世物用の立派なものがあるんですよ。だけど、それは全軍にはとても及んでいない。中国というのはとにかく我々の尺度では測り得ない国ですね。バラックみたいな、それこそ屯田兵の物置小屋みたいな格納庫が飛行場に点々と建っていて、近代的な空軍の基地とはとても思えないようなものでした。

伊藤 いまは人工衛星を飛ばしているんですよ。

夏目 そういのは一部なのでしょうね。

佐道 突出した部分と、大部分の。

夏目 国民所得だって、平均所得は上海と貴州では二十倍くらい違うでしょう。日本だったらクーデターが起きますね。

佐道 最近でこそ、中国の海軍が東南アジアのほうに進出しているとか、軍備の拡張とかいう話が出ていますけれども、軍事的な脅威としての中国というのは先生のころはまだ全然。

夏目 要するに、日本として、中国が仮想敵国というか、日本へ侵略してくるかもしれないという脅威としては全然考えていなかった。そんな能力はないから。そのかわり、攻めて行ったら泥沼にはまるなという。

佐道 それはそうですね（笑）。

夏目 当然そんな能力はないから、ソ連だけが唯一の対日侵攻能力を持っている国だという認識でした。中国はソ連と疎遠になっているときにいまみたいなことをやろうとしたものだから、アメリカとか日本に対しては仲良くして、軍事技術ももらい、資金援助もとり、そういうことをして自分たちの発展をはかろうとした、ちやうどそういう時期だったのです。ある意味でいちばん日中間のいい時期に私は呼ばれたということかもしれませんね。

中島 当時は中国も、「日米安保を理解する」というようなことを。

夏目 そういう時期になったのですよね。

伊藤 「軍備拡張を容認する」というようなことをいったのでしよう。

中島 そうですね、日本の防衛力整備について一定の理解を示したということだと思います。

夏目 一時は、日本の練習艦隊の話も、中国もこちらへ来る、こちらも向こうへ行くということまで持ち出したけれども、そこま

で私は自分の権限では決められないので、別途検討ということにしたのですけれども、とにかく段階的に軍事交流を深めていこうじゃないかという話はして、そこからだんだん大臣クラスが行ったり来たりするようになったのです。

中島 当時は新冷戦といわれた時代で、中国とソ連の局地的な紛争の可能性も検討されていたとお話に出ましたけれども、ソ連が日本に対して限定的な武力侵攻をするんじゃないかということを検討したり、米ソ間で限定的ながらも武力衝突が起きるのではないかと聞いた可能性を検討されたことはありましたか。

夏目 それは中国とは関係なく？

中島 ええ、中国とは関係なくです。

夏目 それはもう、当然検討していました。日本のウォープランというか、戦争計画というか、有事対処の計画というのはソ連しか頭がないのです。それをもう何十年も勉強しているのだから。

伊藤 でも、これは日ソだけの問題ではなくなるわけですね。

夏目 もちろん日ソだけの問題ではないから、そういう可能性が低くなったり、高くなったりすることはあっても、とにかく国際情勢というのはいつ変わるかわからない。政策者の意図というのも変わるかもしれない。そうなれば来るかもしれない。そういう中で不変なものは何かといったら能力。侵略能力というのは変わりようがない。そういう能力を持っている国はソ連だけだということ。認識を我々は持ったから、「ほかのところは、意図があるかどうかあると、たいしたことないよ。来る力はないよ」ということです。例えば、中国の四百万なんかいったら大変だけれども、それを持つてくるのに日本海を歩いてくるわけにはいかないのだから、海上輸送力というか渡洋能力というかそういうものがなければ来るはずがない。航空攻撃だって、そんなものは日本の本土を爆撃するような能力はない。せいぜい北九州とかその辺にちよるちよる来るくらいのことでおわるだろう。そこへいくとソ連は何

でもできる。

伊藤 何でもできるかわりに、それをやったら最後、世界大戦だ
と。

夏目 だからアメリカとしつかり手を握っていくし、アメリカも
そういう事態を抑止するために、既成事実をつくらせないために
は、そういう体制をちゃんとする必要があると考えていた。それ
が日本の唯一の救いだったのでね。

■八〇年代の国際関係認識

中島 例えば、七〇年代のデタントといわれた時代と比べて、こ
の時代のほうが緊張の度合いというのは高まっていたのでしょ
うか。

夏目 まだこれは冷戦状態でしょう。だから高まってはいいない、
むしろ低くなってきたでしょうね。例えばSTARTIとかS
ALTとかいろいろなものもが次々に協議されてきてきているから。
その四、五年後にはゴルバチョフが出てきて、とにかくデタントと
いうか、そういう方向に向いていたことは大きな変化ですね。

中島 先生がこれまで防衛庁にいらっしやった時代の中で、いち
ばん緊張が高まっていたなというふうにご記憶に残っている時代
はありますか。

夏目 私のおきにはなかったですね。やはり、いちばんあったの
はフルシチョフくらいまでじゃないですか。

中島 一九五〇年代から六〇年代ですか。

夏目 例えばキューバの問題とか、ああいうことがあった時期が
いちばん高いのではないかと思います。それからソ連のアフガン
侵攻ですね。

伊藤 それは日ソ間の関係ではないですよ。

夏目 もちろん、だけど、ソ連が何かやるときには米ソ間に何ら
かの隙間がある時であって、米ソがうまくいってればそんなこ

とはありえないわけですからね。あるいは、日本とアメリカの間
が円満にいつている間は問題はないわけです。だから、いちばん
緊張したのはやはりあのころではないかと思うのです。というの
は、それからもうソ連は下り坂ですから。

佐道 軍事的な脅威としてのソ連という問題のほかに、朝鮮半島
の情勢については、八〇年の先生が次官のときはどういう位置づ
けですか。

夏目 それはまた別なんです。それは世界大戦とかいうような話
に発展するのではなくて、北朝鮮が暴発して韓国に入ってくる
というようなことはあり得るかもしれない。あるいは、ほかの形で
そういういざこざを起こす可能性はある。そのためには、米軍は
即応して韓国へ支援に出て行く。そのときに日本が何をしてくれ
るかというのが例のガイドラインとかそういう話になっているわ
けで、日本が直接北朝鮮に対してどうのこうのということは考え
たことはない。

伊藤 あとは台湾ですね。

夏目 台湾も、正直いって、これも中国との間に金門・馬祖か何
かのことでゴタゴタしたりすることはあるかもしれないけれど
も、それは日本よりもむしろアメリカが即応するだろうという認
識でした。

伊藤 そうですね。日本は対応できないわけですからね。

夏目 できませんねえ。だけど、北朝鮮も、中国も日本への直接
的な脅威としてはあまり考えていない。ただ、ソ連を脅威とする
ときに、中国も、北朝鮮も相手方に立つ国であるという立場には
置いてある。韓国と台湾はこちら側につくだろうという前提は絶
えず頭の中に入れて、計画をつくっていました。

佐道 例えば朝鮮半島で何かあったときに米軍が対処すると。日
本はそれに対して何ができるかということですね。前も出
てきましたけれども、ガイドラインは結局、日本に対する攻撃の

事態でできたのですね。

夏目 二つあるんですね、両方あったんです。なんだかもう忘れただけど、四条事態とか、六条事態とかといって、その四条事態が日本に対する攻撃になっている。日本がアメリカと協同作戦計画をつくる以上、日本に対してどこからか攻撃があったことを前提としない計画をつくるというのは、当時の状況としておかしいじゃないかと。自衛隊というのは日本の国の独立と安全を守るのが目的であって、朝鮮でゴタゴタしてアメリカが対応したときに何をやるかが第一義的にあるというやり方はちよつとおかしいだろうというので四条事態を第一義としたけれども、実際のプロパビリティーから見ればそんなものはありえないから、アメリカは、「それはそれとして、六条事態すなわち朝鮮半島有事のほうを一所懸命やってくれ」と。彼らのほうが現実的なんです。日本は建前で議論したから、ちよつとそこは食い違った。

■ 防衛庁出身の経理局長

伊藤 そこでちよつと話を交えますが、昭和六十年に経理局長に池田（久克）さんがなるといことがございましたね。

夏目 もう私がやめるときだな。

伊藤 そうですね。防衛庁の出身ですよ。この前のお話からすると、一時期、渡辺（伊助）さんなんかが就任していることがありますけれども、だいたい大蔵省の指定席じゃないですか。

夏目 ま、指定席というか……、そうですね。そういうケースが多かった。

伊藤 ほとんどそうといっているのではないですか。

夏目 渡辺伊助以外はいないかね。いないかもしれないな。

伊藤 そこで池田さんがなったというのは、これはやはり何かあったのですか。

夏目 いや、それはないと思います。ちよつと話が少し前に戻る

と、渡辺さんが経理局長になって、そのときにだれが来たかというのには私もあんまり枢機に参画していないからよくわからないが、渡辺を代えて、その次に矢崎（新一）君かな。そのときにまた佐々君の話になる。私が人事局長か官房長か忘れたけれども、原（徹）という人が次官のときだから、まあ、どちらかですね。佐々君が入院したんですね。入院しているときに人事の話が出て、私と原さんと病院に佐々君を見舞いに行つたんです。そのときに原さんが、「悪いけど、おまえ、経理局長になつてくれないか」という話が出たんです。

伊藤 だれにですか。

夏目 佐々君に。そうしたら、「いやだ」というわけ。まあ、それは病氣の見舞いの時の話ですからね。正式の話ではない雑談的な話ではあつたんですが。「いやあ、勘弁してくれ」と、「いやだ」というよりも、「勘弁してくれ」みたいな話であつて、「そんなことをいうと、また大蔵省から人を呼ばなきゃならんようになるから」という話をして。だけどまあ、彼はいやだと。どうしてかというところ、後でわかつたのだけれども、やはり彼も防衛庁に骨を埋めるつもりでいたし、どちらかといつたら、予算とかそういう数字よりも高邁な哲学のほうがいいから、「俺は防衛局長になりたい」という気持ちがあつたんでしようか。原さんもああいう温厚な人だから、「弱つたな」といつて帰つてきて、しばらくして矢崎君を発令したんです。矢崎という人が大蔵省から来て。

伊藤 こういうときは大蔵省にこちらから頼むわけですね。

夏目 もちろん頼むわけです。そうすると、大蔵省が二人になつちやつたんです。まだ原さんがいたんですね。二人も来て幹部——次官とか局長——を占められると、それはちよつと困るといのはなんとなくあつた。一人はしようがない、それは経理局長と。そういう意味では経理局長が大蔵省にいちばん向いているといつて経理局長になつたのですが、二人になつちやつた。今度は矢崎

が上へ上がって、宍倉（宗夫）が来たのですね。矢崎が上へ上がって、宍倉が官房長になって、それで池田を経理局長にするのでしよう、たしか。

佐道 宍倉さんが、経理局長から西廣（整輝）さんの後の官房長ですね。

夏目 そうでしょう。もう二人いるわけです。また経理局長に大蔵省といたら、三人になっちゃうわけです。いくらなんでも三人ねえ。次官、防衛局長、経理局長が大蔵省だったら、防衛庁が大蔵省の出先だ。それはちよつといかん。うちにも能力があるのがあるじゃないかというので、池田にしたと思います。同時に、池田君というのは中曾根さんの秘書官をやっています、非常に優秀な、ちよつと癖はあるのだけれども、能力の高い、できる人なんです。まあ、ちよつと癖があつて、威張つたり、発言がちよつとエキセントリックなところはあるのだけれども、とにかく仕事はよくできる人です。当時、たしか仙台の防衛施設局長か何かだったかな。中曾根さんの秘書をやつて、仙台へ行くときに中曾根さんにいわれたことがあるんです。「池田君というのは能力があるのに、なんで仙台なんかに出すんだ」と。「いや、それは一時修行してみんな地方へ出るんですよ」と、自分が出ないでそういうことをいって（笑）。「必ずまた帰つてきて、復活の機会がありますから」といったら、「そうか」と、そんなやりとりがあつたのですけれども。まあ、たまたまみんなの見る目がそういうことで、背景に、大蔵省が三人になるといふこと、池田というのはそういうこともできる男だと池田を経理局長にしたので、別に他意はないのです。

伊藤 こういうときは、大蔵省からは何もいってこないのですか。

夏目 いってくるはずがないです。絶対いわないですね。もちろん、事前にこうするよということはいますけれども、それ以上、「またとれ」なんていってたら横暴ですから、それはいいません。

だいたい課長に一人、局長クラスで一人というのがそれまでの慣例でしたから。

伊藤 そうすると、大蔵省が人事をやる場合には、だいたいそういうことでやっているわけですね。

夏目 大蔵省の人事をやるときには、防衛庁の会計課長に出すのはこれ、返ってくるやつはここへはめる。経理局長で出すのはだと、そういうことをちゃんと計算して。課長クラスと局長クラスと一人ずつはいつもいました。だから、特別とんでもないことではなかつたと思いますよ。

伊藤 そうですか、よくわかりました。いや、「なんで？」と思つたのですが、いまのお話でよくわかりました。ちよつと経理局長の問題があつたときに先生が事務次官をおやめになる。事務次官をおやめになるということは、つまり、もう役人生活はおわりということになるわけですね。

夏目 ええ。

■事務次官後任の選定

伊藤 後任は、前にもお話がありましたように、やはりご自身のご意見がかなりあるわけでしょう。

夏目 まあ、後任人事は前の次官の意見を聞いてというのが常識ですからそういうことはあつたでしょうね。このときの後任でそれが候補かといつたら、矢崎君と佐々君でした。たしか矢崎君のほうが年次的に一年上で、佐々君のほうが一年下だと思つてですね。年次的に見て、矢崎君というのが順当で。佐々君にすれば、矢崎君はやめなきゃいけませんから。ま、それがひとつ背景にあつたのでしようし、もう一つは、矢崎君というのは非常にステディーな人で、この前もお話したでしょう、プリパンとかコマネチとか（笑）。佐々君のほうが颯爽として、いうことは華やかであれだけ、地道なのは矢崎のほうでしょうね。どちらを選ぶか

というのはその人の好みでしようけれど。

伊藤 対照的なのですね。

夏目 対照的でした。能力的には両者とも立派な能力のある人ですけれども。多少、そういうことをいったと思います。どちらがいいとはいわないにしても、「こういう人ですよ」ということはいったかもしれない。それを加藤紘一大臣が判断したのでしよう。加藤大臣は、そういえばどちらを選ぶかということは大体わかっていますかね。

伊藤 そういわなくても(笑)。

夏目 そう思いますね。もともと、加藤大臣はどうも佐々君とはソリが合わなかったんでしようね。二人が香港在勤当時に何かゴタゴタあったらしいんです。加藤大臣が香港の佐々君の部下か何かだったんだね。

佐道 あ、そうですか、へえー。

夏目 佐々が総領事か領事か。

佐道 領事で行っておられましたね。

夏目 上司で、加藤大臣、直接か間接かは知らないが部下だったらしい。

伊藤 それはいやな関係だろうなあ(笑)。

夏目 そのときにあんまりよくなかったのでしょうかね。そこまでは知りませんが。

伊藤 まあ、考え方からしても、タカ派とハト派だからな。

夏目 それと、さつきみたいな経緯があったし。佐々君はそういうところをもうちょっと上手にやればよかったのだけれども、本当にあれは動きが派手だからね。施設庁長官のときに、官邸に電話をするんです。「いまから総理に会いたい」といって。総理の秘書官の警察の後輩がいるでしょう。依田(智治)という、あとで次官になるんですが。この人は私もよく知ってる人でしたが、「佐々君がこういつてきたけれども、どうする?」といって、依

田君から私に電話がくるんです(笑)。「いちいち総理のところには直接来られても困るんだけどねえ」、「それは申し訳ない。いや、俺も気をつけるけれども、黙ってそちらに電話するのまでは俺はわからないから」、「何か体よく断るから、うまくしておいてくださいよ」なんていうような電話が来るんですよ。そんなことをするでしょう。そんなのは私だったらそれで黙っているのだけれども、大臣のところへも来ていると思うんです。加藤大臣も、「面白くない」という気持ちになったのかもしれないね。それはわかりませんが。佐々君は異能の士なのだけれども、組織の中ではちょっとやることなすことがはみ出るから、そういう体制派の人から見ると鬱鬱を買ったりしたのでしようね。現在の彼のほうがずっと生き生きしているでしょう。

佐道 そうですね、おやめになって。

伊藤 いまは売れっ子だものね。

佐道 言いたい放題いえるし、書けるし。

夏目 喧嘩は上手だしね。議論して、相手と喧嘩するのがうまいんですよ。怒らせて、いいたいことを……。だいたい怒ると興奮していなくなるじゃないですか。あの人はそれが得意だからね。とにかくそういう能力はあると思う。当時からそういうところはありました。

伊藤 次官から、新しい次官への引継ぎはやるわけでしょう。

夏目 もちろんやりますよ。

伊藤 先生の場合は非常に重要な引継ぎ事項というか、これだけはやってくれというようなことはありましたか。

夏目 中期計画というのは途中で、あと一、二ヵ月でできるといいう。防衛庁の人事もおかしなときにやるんだね。五六中業のときには、もう一月か二月でできるといいうときにポーンと人を代えて、私が引き継ぐ。今度は政府の中期計画になったのですが、そのときはまた、たしかこれも一月か二月後にできるわけです。だから、

それはやってくれよと。それから、中曽根流の1%突破のひとつのきっかけにもなりかねない計画だから、それを。だいたい出来る上がついていきましたから問題は無いのですけれども。

伊藤 問題があるときに引継ぎだったら、これは大変ですよ。

夏目 まあ、そういうことも考えた上での判断でしょう。だいたい骨格ができて、もういいやというので代えたのでしょね。私のときもそうだったし、その次もそう。

伊藤 でも、代わるということとはちよつと戸惑いますよ。

佐道 次の次官の人事についても何らかのコメントを出されるということですが、先生がおやめになるときに防衛局長が西廣（整輝）さんに代わっていますけれども、防衛局長などについてはやはりご意見をいわれたりするのですか。

夏目 私はそういうことについての記憶はありません。しかし、西廣は私よりも防衛庁の中のことをよく知っているから当然じゃないかな。

伊藤 人事自体はやはり関与するのですか。

夏目 局長の人事は相談はします。次官同士で話し合いをする。それから、大臣に意見を聞かれたときにはい。それはしますけれどもね。

伊藤 次官同士でやるのですか。

夏目 もちろん。だって、私はもうやめるからどうでもいいのだけれども、次の次官は自分のスタッフですから、「それは困る」というの中にはあるでしょうから、「こうしたほうがいいと思うよ」ということはいいです。まあでも、だいたい自分のことで頭がいっぱいになっているから、あんまり文句はいわないですよ。

■防衛庁顧問に就任

伊藤 前にお話を伺ったときに、退職後は何もしたくないというようなことをおっしゃいましたよね。

夏目 したくなかったですね。

伊藤 だけど、したくないといつても、退職なさったあとはいつたいどうなさるおつもりだったのですか。

夏目 何も考えていなかったですね。とにかくやめるのがうれしくて。

伊藤 そんなことつてあるんですか。

夏目 違いますかねえ。私はそれはあたりまえだと思った。あんなところで三十何年も苦勞を続けたら、早くやめたいと思うんじゃないですか。

伊藤 いや、やめたら何かをやるうという、そういうあれはないのですか。

夏目 それはねえ、生まれつき怠け者だからなんです。防衛問題で一大論文を書くうとか、そういう殊勝な気持ちになったこともない。

伊藤 いやいや、遊ぼうとか。

夏目 遊ぼうというのはあった。だから遊びたい一心で何もしたくなかった。昼間からどこへでも、映画も行けるぞと。やめてすぐに行つたのはランポールの映画ですよ。

中島 シルベスタ・スタローンの。

武田 『ランボー2』ですかね。

夏目 乱暴ものが軍隊を敵に回して、一人で暴れまくる。

伊藤 映画は前から好きですか。

夏目 映画は好きだし、遊ぶのはみんな好きなんです。寄席へも行けるしね。いつかもしつたかもしれないけれども、朝十時ごろに床屋へ行き、朝日がさしている中で頭を刈っていると気持ちいいんですよ。「みんな、仕事をしているんだらうな」と思いながら。

佐道 奥様とちよつと遠いところへ。

夏目 そういうことは考えました。「これからは行きたいところ

へ行けるぞ」とかね。それも一年半くらいまででした。やめてから一年半くらいたつたら、「一生このままおわっちゃうのか」という気が沸々と（笑）。

伊藤 だけど、そうやって毎日うちにいたら、まあ、出かけて歩いているのでしようけれども、奥さんとしては鬱陶しくなるんじゃないかなと。

夏目 うん、鬱陶しい。だから、それもこのままではいかがかと思つた理由の一つですね。「この男、いつまでうちにいるんだろ。これであと二十年も生きられたらたまらない」という気持ちに向こうにもあるのではようね。自分ひとりだと昼飯なんかはどこかで食べてもいいし、自分の好きなものを適当にやっついていけばいいけれども、変なやつが家にいると一応格好つけて食事の支度はしなきゃいかんし、大変だと、そういうふうに使つたのでしようね。やはり家庭が多少ギスギスしてきて（笑）、夫婦仲が不和になるんですよ。

伊藤 アハハハ（笑）。これで、先生は防衛庁の顧問になると。

夏目 それは、どこへも行かないものだから。そんなことをしているうちに私も、一生これで……、一生って、寿命が長くなつたのに（笑）。金がないですもの。退職金で土地とうちを買つたでしょう。そうしたら、もうないですよ。多少はあるから一年や二年食いつなぐことはできても、これを二十年もやられたらと、家内が思ったかも知れませんが。そんなことがあつて、「ちよつとこれはいかんかな、こんなことをしてはいられないかな」という気持ちにはなつた。どうしてそんなことをしたかというところ、実はやめてからの仕事についていろいろ調べてくれた人がいたんですよ。多少そういうことが頭の中にあつたもんだから、あんまり変なところへ勤めて後々の勤務の邪魔になつてはいけなかなという気持ちがあつたけれども、しかし、そんなことは人にはいえませんね。「笑はこんな話があるので、ちよつと様子を見てい

るんだ」ともね。だけど、そんな話は冷静に考えればそう簡単にいく話ではないんですよ。栗原（祐幸）という大臣も、「君いつまで遊んでいるつもりだ。そろそろ考えなければいけないと思うが、やはり役人みたいなほうがいいのか、民間企業へ行ったほうがいいのか、どうなんだ」と。「それは民間へ行ってのんびりできるのがいい」とかいって（笑）。事実、そういう話も一、二あつたんですよ。

伊藤 防衛庁顧問というのはただ肩書きなのですか。

夏目 そんなことをいつているうちに、なかなかどこへも勤めようとしなれないものだから、防衛庁が気にしたのでしようね。「防衛庁顧問になつていただけませんか」と。その顧問というのは何かというと、それは私がつくつたんですよ。私がつくつたという言い方はあれだけでも、私が総務課長のときにそういう制度を決めたんですよ。それは歴史は古いのですが、中曽根さんが長官のときか山中長官かちよつと忘れましたけれども、それは制服を対象とした考えだつたのですけれども、「幕僚長なんかをやつてやめた人が防衛産業の顧問なんかに行くのはいかげななものか。昔は軍事参議官という制度があつたじゃないか。ああいう制度みたいにしちんと制度化をして、変なところへ勤めなくても生活の道は立つようにして、いろいろご意見を聞くような、そういう制度がでないだらうか」ということをいつて勉強したのだけれども、なかなかそんなものが簡単にできるわけがない。しようがなくお茶を濁したのが、防衛庁の訓令の中で防衛庁顧問をつくつた。だから法令に基づく顧問ではないのです。たしか外務省かどこかの顧問は法律か政令に書いてあるのですね。

伊藤 そうか。

夏目 外務省なんかはそうだと思う。二、三、そういう役所があるはずですよ。そうした法律政令による顧問もなかなかできないんですよ。しようがないから、防衛庁限りの訓令でもって顧問制度

をつくった。それはどうしてかという、例えば、久保さんという人とか、防衛産業に馴染まない人も中にはいるでしょう。そういう人たちは顧問か何かにして意見を聞くようなことができればいいなというので安直につくったのが顧問なんです。だから、財政的な裏づけも何もないんです。予算もないんです。給与ももちろんないんです。名称だけなんです。

伊藤 手当てもない。

夏目 ただ、呼ばれていくと、日当・交通費くらいはくれるんです。だけど、そんなもの面倒くさくて行かない。日当といつてもたいしたことないしね。私は、一、二回行ったかな。でも、部屋をつくってくれてね。

佐道 顧問室というような。

夏目 どこかと兼務だけれども秘書さんもちろんといて、行くとすぐに部屋で人と会ったりするのはできるし、お茶も飲めるし。そういう部屋もできた。

伊藤 ほかに顧問がいたのですか。

夏目 いや、私が初めてで、一人だけでした。私がやめてからもずっとしばらく空白が続いたんですよ。防大に行くまでだから、半年くらいいたのですかね。

伊藤 それ以前に顧問というのは、制度をつくったけれども、いなかった。

夏目 いなかった。いなくて、私がやめてからもいなくて、西廣という次官がやめたときに顧問になった。いまは五人くらいいる。いまは、統幕議長をやった人とか次官をやった人が二代くらい続いているから、五人くらいいるんじゃないですか。

佐道 顧問になる要件みたいなものは。

夏目 ない。「なつてくれ」といえばいい。ただ、役人になっちゃうとだめですよ。どこかの会社の顧問なんかをやっている人はいいけれども、例えば、内閣官房副長官になったような人がいる

でしょう。あるいは私が防衛大学校へ行くように、そうなるやめなければならぬ。

伊藤 楽になったというお話ですが、僕が思うには、やめるでしょう、そうすると名刺に肩書きがなくなりますね。

夏目 うん、なくなる。

伊藤 これはちよつと。

夏目 不便だと思えば不便だけれども、私はだれか人に会おうとは思わないから。いつかも話したかもしれないけれども、3Kがなくなるって、こんなに気楽なことはないんですよ。「汚い・臭い・きつい」じゃなくて、官邸と、記者クラブと、もう一つは何だったかな。国会か？

武田 国会（笑）。

夏目 何か忘れたけれども、とにかく大臣に呼ばれることもないでしょう。記者クラブも、やめたときに「昔の話を聞かせろ」というので来るけれども、まあ、気は楽ですよ。言いたいことはいえるし。そりゃあ、こんないいことはない。名刺をつくるなんていう気にはさらさらならなかったですね。でも、防衛庁顧問になったら、防衛庁は勝手に「防衛庁顧問」という名刺を作ってくれました。使わないよね、恥ずかしくて。だから、顧問というのはそんなことで、べつに他意はなかったんですよ。学識、経験なことかというのではない。

伊藤 やはり日本の社会は肩書き社会ですからね。世の中に何か仕事を持っていたら、肩書きがないと具合が悪いわけですね。

夏目 仕事をする以上はね。だけど、仕事をする気がないから。

伊藤 でもまあ、それも一年しばらくたつと。

■防衛大学校校長に就任

夏目 そうしたら防衛大学校の口が……、口が来たという言い方は失礼だけれども、来たんですよ。まさに青天の霹靂です。

伊藤 こういうのは千天の慈雨というのではないのですか。

夏目 それは、ほかのことならいいですよ。先生になろうとは思わなかったですなあ。

伊藤 校長はべつに先生ではないでしょう。

夏目 学者でもないのと思いました。

伊藤 校長はべつに学者じゃなくたっていいじゃないですか。

夏目 防大の校長もちろんですが、大学の学長は三つの側面を持つていると思うんです。一つは管理者としての側面、学者であること、それから教育者だということ。べつに三つを持っていきやいけないということはないけれども、そのどれかを備えていることが大事ですね。

伊藤 そうだと思えますね。

夏目 学者にも当てはまりませんし。教育者でもない……。学校の先生の経験があるとかそういう人はいいと思うのだけれども、私は全部が当てはまらないんです。

伊藤 それはないでしょう。管理者として、まず第一に。

夏目 あそこは大変なところだったんですよ。とにかく自衛官がいるでしょう、教官がいるでしょう。事務官というの、とにかく職員が千人ですよ。

伊藤 そんなにいますか。

夏目 学生が二千人、トータル三千人でしょう。それで、職員が千人というのは、いまは違いますが、当時は五族協和といわれた（笑）。

中島 防衛研究所もそうですよ、建前は五族協和です。

夏目 いまもそういうのがあるの？

中島 いまでもそうですよ（笑）。

武田 どういう五族なのでしょか（笑）。

夏目 研究所は知らないけれども、陸海空の自衛官がいるんですよ。事務官がいるのですね。それから教官です。

佐道 それで五族ですか。

夏目 そういう言葉が昔はあったんです。いまはないと思いますけれども、私が行く直前くらいまであったんじゃないかな。その連中をまとめるというのは大変ですよ。学生はいいですよ。

伊藤 学生はほとんど流れていくものですか。

夏目 先生というのは、先生を前にしていいにくいけど、……頭痛いわ。

佐道 アハハハ（笑）、いたいようにいってください。

伊藤 それは、管理している立場になったら頭痛いですね。

夏目 教官というのはみんな一匹狼でしょう。役所にいたときには、「こうやれ」といえば、いやでも、「はい」といっていうことを聞きます。あそこは全然そんなじゃないからね。みんな私もいうようなものだから、大変でしたよ。「まず試してやれ」とかいつてね。その前にまず、新聞に「時の人」とか何とかいつて出るじゃないですか。新聞記者も勝手なことを書くね。俺は経験がないから、「俺は遊び人だ」とか、「やくざで酒を飲むしか能がない」とかいうと、そのまんま新聞に出ている。

武田 アハハハハ（笑）。

夏目 それは確かにしゃべった本人も悪いけど、もうちょっとモデファイして書いてくれればいいのに、なんかそれが俺の全人格みたいに、「夏目バーを経営した」とか、「愛唱歌は、カラオケへ行ってもリリーマルレーンしか歌わない」とか、「もつと酔っ払うと『巨人の星』しか歌わない」とか、そういうことをいうんですよ。

佐道 アッハッハッ、まるで見てきたように（笑）。

夏目 そういうのが毎日。あのころは、防大校長は時の人なんです。地方紙まで、出るんです。五、六分話ただけでもってパトツと書くでしょう。だから、卒業生の一部にこれはと思った人間がいたでしょう。防大卒業生は団結が固いんですが、特に一

期生というのは団結が固いんですよ。そのうちのいまでも名うての五人くらいが私のうちに来たんです。「いかなる経綸をもって防大を対処しようとするのか承りたい」と。酒を飲んでしゃべっているうちに、「わかりました」とかいって帰っちゃった。まあ、それはちよろいんですけど（笑）。学校へ赴任したわけです。そうしたら今度は、おたくもそうかもしれないけれども、教授をトップにして何とか教室というのがあるんです。「今度来たやつは役人で、どうせ教育のことなんかは素人で、わけのわからんことうるさいことをいうのだろう。人物評価をしてやろう」といって、教室へ呼んでくれるんですよ。呼んで、まるで干からびたような寿司を食いながら、いろいろ質問をしたいと。要するに人物評価ですよ。大変だなと思った。まあ、半年かそこらでなんとかなるものですけれどもね。やはり、彼らは彼らとして、自分たちのような立場の人が来るなら仕方がないという気持ちがあるのでしょうね。学者の人が来るとか、教育の経験者が来るとか。だけど、「役人がなんで来るんだ」という気持ちがあつたのだと思います。まあ、それはいまいったように半年かそこらで修復しました。こちらも多少脅かすからね。教授会なんか、最初はすこかったですよ。「校長の所見を承りたい」なんていってね、いじめですよ。それで、嫌みなことをいうやつが何人かいるんです。「あなた方としゃべっていると、俺は昔の国会を思い出す。しかし、国会議員のほうがよく思想的にしっかりしたバックボーンをもつて質問した。いまの先生方のを聞いてみると、嫌みだけじゃないか。いじめでしかないじゃないか」と嫌みをいってやったら、「こんなやつがいるのかい」というような顔をして、それからだんだんおとなしくなつたんです。

伊藤 じゃあ前の経験は無駄ではなかった（笑）。

夏目 でも、気分は悪いですね。それから、先生同士が結構仲が悪い。教室同士とかね。

伊藤 ああ、そうですね。まあ、どこでも多かれ少なかれそれはありますね。

夏目 一人のいうことを聞いて、どうだ、こうだとは絶対にいわないことにした。「あ、そう」といって聞いているだけに。最初は学生もそういう目で見ますよ。名高い財界の権威が来ればある程度仕方がないと思うでしょうけれども、「ああ、なんだ、評判の悪い防衛庁の内局のトップか」という目で見るとは嫌いですか。そういう意味ではちょっと居心地が悪かったです。

伊藤 校長をサポートするのはだれなんですか。

夏目 副校長という教授の最前任の人がいるんですよ。それから、制服の副校長にあたる人は幹事という。これは陸将の師団長をおわつたような人がいる。それから総務部長というのがいて、これは事務屋のトップ。でも総務部長といっても、教官や制服のほうは単なる事務屋だという目で見るとは嫌いです。だから、なかなか力を発揮するのが難しいですね。総務部長というのはどういふ人になるのかというと、言い方は悪いけれども、以前はあんまり防衛庁でも出来のいい事務官が来ていなかったようですよ。だから、「いいのをよこさないでだめだ」といってね。だつて事務屋のトップなんです。私がいちいちやることはできませんから、結局は予算だとか何だとかはみんなその総務部長がやるでしょう。だから、いい人をよこしてくれなさいだめだよ。栗原さんという人はそういうところもちゃんと考えて人を配置してくれました。制服も、それまでは防大で送別会をやつて退官していく人が何人かいたんです。私が行つたときにまず最初に呼んだのは、志摩篤という一期生の中でもトップの幕僚長になるかという人を「それがいい」といって来てもらいました。彼は「なんで俺が防大へ行くんだ」といいながら、厭々来ました。たしか青森かどこかの師団長をおわつて、「まあ、しょうがない。発令だから」といって来たんです。まず自分の部屋（幹事室）へ入ろうとすると、

敷居のところとまったきりショックで入れないんです。控え室だと思つたら、「これがあなたの部屋です」といわれた。あまりに貧弱でね。それは、地方の師団長の部屋というのはすごく立派なものですから。でも、一所懸命やつてくれましたよ。それはやはり自分の母校だから。でも、そういういい人が来てくれると、やはり学生にいい影響を与えるじゃないですか。営門でさようならして退官していくような人よりは、まだこれから出世する、幕僚長にもなるといふ人が来てくれれば、学生にもいろいろな意味でいい影響を与えると思つたから。以後、トップクラスが絶えず来ています。いまだに続いていますね。

伊藤 そこが終点ではないという意味ですか。

夏目 うん、終点ではない。人間というのは終点になるとだめですよ。私の次官の最後みたいなもので、「早くやめたい」とか、「やめて、早く盆栽をいじりたい」とか、そういうことを考えるようになったらだめなんです。学生というのは敏感だから、そういうのはピンピン響きますでしょう。訓練部長だってそうなんです。もうそこでやめるような人ではない、そこからまた自衛艦隊司令官になるような人を連れてくるとか、総監になる人を連れてくるとか、非常によくなりました。教官のほうはなかなかそうはいかない。もうずっといるからね。

伊藤 まあ、そうですね。ほかに移るといふ可能性もないわけですし。

夏目 防大の場合は一般大学との交流というのはいまありません。防大の場合には一般大学との交流というのはいまありません。多少はあるのだけれども。当時、先生のうちの半分とはいいないまでも、三分の一くらいかな。三分の一と半分の間くらい、防大出身の先生が多かったですよ。途中でやめて、一般の大学院へ行ったりして学者になって帰ってきたのだけれども、防大にいたというふうな。自衛官を半年やったとか、防大卒業と同時に学者の道へ行っちゃったとか、そういう人が多かったです。

そういう先生と一般の大学を出てきた先生との軋轢もあるし、なかなか厄介でした。いまはもう、防大出身の先生というのはグーンと減ってきていますけれども。

伊藤 当時は、一般の大学を出て防大に行くというと、もうそこから出られないと。だから、あんまり防大に行きたくないという。

夏目 そうでしょうね。選択の幅をそれだけ狭くするから。

伊藤 能力のある人を探るのがなかなか難しいんじゃないかなと。

夏目 それと、やはりまだ反自衛隊の空気が強いですからね、特に学会は。物理学会なんか、最後まで学会に加入を認めなかつたんです。いまはもうすっかり解消したでしょうけど。今昔の感に堪えないですね。あちこちに安全保障の講座ができたり。

伊藤 理科系というのは意外とそうなんです。

夏目 いまでもまだ東大には行けないと思うんですよ。防大を出ているいろいろな大学院へ行っているのがいるのですけれども、東大の大学院へ行くのはいない。京都とか、大阪とか、名古屋とか、東北、北海道、ほかはみんないるんだけどね。

伊藤 筑波もいるのでは。

夏目 筑波もいっぱいいますよ。

伊藤 東大はいないかな。

夏目 いや、ここ二、三年は知りませんよ。やはり固いですね。

岡田 先生が校長をされて数年あとになりますよ、防大で学位の授与が受けられるようになったり、その翌年には女子学生の受け入れが始まります。ちょうど先生は計画段階におられたのですか。

夏目 いや、両方とも私がいるときにできた。

岡田 もう実際には決まっていたわけですか。

夏目 学位も女子学生も両方実現しました。

伊藤 それは前からの課題なのですか。

夏目 学位は相当前からの課題でした。女子学生は数年間のあれ

でしたけれども。

伊藤 学位の問題は文部省との関係。

夏目 そうですね、文部省。それで、「防衛学士とか、勝手にやったらいいじゃないか」という意見もあったりして、それで手を打とうなんていう時期もあったんです。「そんなものはだめだ。やはり持つ以上は世間と同じものでなければ意味がない。防衛庁だけで出す学士なんていうのは、絶対だめだ」と。ちょうどあのころから、文部省ではなくて、学士号……。

伊藤 学位授与機構。

夏目 ああいうのが出来たんです。たしかあそこへ木田……。

伊藤 木田宏さん？

夏目 そういう多少理解がある人が行くようになって、いまがチャンスだと思っただけです。だけど、うるさかったですよ。防大の先生を評価するんです。「この先生はだめ」とか、「論文が少ない」とか、やはり古臭いことをいつていた。

佐道 昔に入られた方とかは問題になる方もいらっしやるのでしようね。

夏目 私が思うに、それこそクランク博士じゃないけれども、クランク博士なんて学者としては二流、三流なんですよ。だけど、教育者としては一流だと思っただけです。そういう人のほうが、「そのほうが」とはいわないけれども、特に防衛大学校なんていうところの先生にはそういう人の方がいい分野がいっぱいあるはずなんです。それを論文の数でやられるとね。で、そういう人ほど学生に評判がいいのね。もちろん例外はあるけれども。どうも文部省というのは論文でもって人を判断しているんじゃないのかな。いまでもそういうところがあるんじゃないですか。

伊藤 それは基本的にそうですね。

夏目 民間の人でいい人がいて、大学へ連れて行って先生にしようとして、私も二、三人招いたんです。そうすると、「論文は何

があるか」と。論文なんて、普通の社会にいたら書かないですよ。ね。「それがいいなら教授はだめだから、助手からやってみよう」とか、「講師からやってみよう」とか、世間でもちゃんと名の通った人でもそんなんです。うるさいところだなと思ったね。

伊藤 いまはちよつと違うかもしれないけれども、大学院を設置するとかいうときには必ずそれですよ。

夏目 そうでしょうね。大学を設置するときとか、学位を授与してもいいかという判断をする、そういうときにはそういうのがものを言うんだよね。

伊藤 防大の大学院をつくったわけですか。

夏目 大学院というかそれに当る研究科というのは前からありました。

伊藤 まずそれがないと学位をやれないですよものね。

夏目 まあ、話が変わるほうへ行っちゃったけれども、本当に大学というところは古めかしいところがある。まあ、防大なんていうのは比較的、ほかの大学から見ても、自由闊達でいいんじゃないですかね。

伊藤 どうですかねえ、僕は逆に思っていますけれども。

夏目 学生には厳しいけど、先生はわりと気楽なものだと思っますよ。あそこであきらめちゃえば。

佐道 あきらめちゃう(笑)。

伊藤 あきらめられては困るのですけれどもね。やはり普通の大学との間で先生の交流ができるということにね。

夏目 いや、できることはできるんですよ、やってはいるんです。ただ、非常に少ないですね。

伊藤 そうですね。

夏目 でもいまは、わりといい、立派な先生が来るようになったんです。昔は、助手なんていつても来ないから、そういう学生上りの研究室で便利に使っているようなやつを採用するとか。そ

うというのがだんだん上がってくると、どうしようもない先生がい
ました。

伊藤 まだ、大学院をつくって本当にほかの大学と同じような形
態にすると。

夏目 いまは理工系も人社系も両方でできました。

伊藤 先生が校長のときにはその途上なわけですか。

夏目 人社系の大学院はまだ私のときにはできていませんでし
た。そのあとにできた。

伊藤 国際関係とか。

夏目 そういもの大学院もいまはできた。たしか理工系は博
士課程もできたんじゃないか。できたでしょう。

岡田 できました。三年ほど前です。

伊藤 そうすると、それまでは博士号をとろうと思つたら、ほか
の大学に移らなきゃならない。

夏目 そうですよ。いまでもいっぱいほかの大学へ行っています
けど。防大だけではとてもそこまでの人材の養成ができないか
ら、ほかの大学へ出して勉強させています。筑波なんていっぱい
行っていますよ。東京工大とかも結構何人も行っています。

伊藤 受け入れるところがあればいいんですよね。

夏目 いまはもう、ほとんど入れてくれる。二回目に幹事で来た
志方（俊之）さんなんかは、今やたらテレビに出るけれども彼は
志摩さんの次に来たんです。彼は京都かなんかで博士を。

■ 次官退任後

伊藤 少し先へ行く前に、おやめになつて遊んでいるという建前
になっているところなのですけれども、例えば（質問の）六番目
の国家機密法案の話とか、こういうものはまるつきり頭からなく
なっちゃったのかなと。

夏目 国家機密法というのはあんまり記憶にないな、本当に。

伊藤 そうですね。なければ、ないということでもいいのですけれ
ども。

夏目 このときに決まったわけではないでしょう。

伊藤 これはためです、違います。

夏目 宮永事件のあと、そういうものがなければいかんじやない
かという声は絶えずありました。まず第一の問題は機密文書をつく
りすぎるところにあります。機密文書がやたらに多いということは
罪人をつくることになるので、やめろということ。その次は管理体
制をきちんとすることですが、そんなことをやるよりは、なるべく
オープンにしたほうがいいと思つた。自衛隊というのはどうでもい
いことをみんな秘密にするんですよ。アメリカのほうがよっぽどオ
ープンですね。アメリカなんかのイージス艦でも、潜水艦なんかで
もみんな見せてくれるものね。日本は全然見せない。そのわりに間
が抜けているんですよ。潜水艦をつくっている工場で天井を開けて
作業をする。衛星から見ると、だいたい船殻から何から、みんな分
析できるのね。船体の厚さとか、何メートルまで浸水できるとか。
下から見えなくなつて、上から見ている（笑）。

佐道 それはたしかに（笑）。

夏目 自分たちの知恵で及ぶ範囲は一所懸命やるのだけれども、
そこから外へ出るところは無能なんです。だから、そういうのは
やはり想像力豊かな人間を何人か配置しておかないとね。あんまり
国家機密法案の記憶はないですね。

伊藤 そうですね。では、その次の御巢鷹山はいかがですか。

夏目 ああ、これもやめてからでしょう。

伊藤 そうですね、いまはやめてからの遊んでいる最中の話を伺つ
ています。

夏目 これも記憶が定かではないけれども、二つ問題点があった
ような記憶がありますね。一つは偵察能力。あれはたしか自衛隊
機か何かで探して、火が上がっているというので、駆けつけたら、

違うところへ行っちゃった。たしかそんなことがあったような気がするんです。私もちよつと細かいことは記憶がはっきりしないけれども。

もう一つは、特にこのときは陸と空だね。陸上の搜索隊が出るんですよ。航空自衛隊の偵察の結果、どこそこに落ちたと。いちばん近いのが群馬県陸上自衛隊と埼玉県の熊谷に在る航空自衛隊なんです。そしてその双方から搜索隊が出る。ところが、航空自衛隊というのは陸上装備は貧弱ですからね。コンバットシューズみたいな陸自と同じような編上靴を履いているんですよ。あれは、見たところは同じだけれども、陸上自衛隊が履いているのは全然違うのね。ぬかるみなんかへ入るとグシャグシャになって。そういうふうなことで陸上自衛隊に支援を頼むと、陸上自衛隊はなかなか応じてくれない。それから、夜を徹しての搜索になるから、陸上自衛隊は炊飯器材を持って行って温かい飯を食っているのだけれども、航空自衛隊は缶詰の冷たい携行食を食べているとか、そういうことまで新聞記事になったりして。いまは、災害派遣命令が出て、陸海空の統合とかいうことがだいぶさちんとやれるのだろうと思いますが、当時はそれぞれ勝手にやっているから、出た先の部隊同士が連携して支援しあうという体制もないですね。私があそこ新聞を読みながら、あるいはテレビを見ながら、たしかそういうことを感じたなとかすかな記憶がある。

伊藤 前にお話になりました、もう少しで決定されるという中期防衛整備計画が九月十八日に閣議決定になります、これは、「あ、できたかな」という感じでございますか。

夏目 そうですね。それはだいたい中身はわかっていますから、私が心配していたことが入っているかどうかというのをチェックするくらいです。例のイーゼスが入っているかとかね。

伊藤 「入っていた、入っていた」というようなものですね。しばらくあとに今度は米ソ首脳会談があつて、戦略核の五〇%削減と

いう共同声明が出るということで、これはかなり大きく変わってきたなあ。

夏目 これは一九八五年だな。まあ、だいたいそういう方向には行つていたのですよね。先ほども申しあげたとおり、アメリカとソ連との交渉の中で、ソ連としてはなかなかアメリカにはついていけないという気持ちが強かつたと思います。

伊藤 かなり強かつたのですか。

夏目 これからあと、ゴルバチョフになってソ連が崩壊するので、あれはいつでしたかな。この五、六年後かな。

佐道 そうですね、九一年だと思えます。

夏目 そういう兆しというのはこのころから出ていたと思えます。アメリカと喧嘩はできない、競争もできないという意識があつたと思えます。

伊藤 それは何で感じていたのですか。

夏目 やはり経済力ですね。ソ連の長年の農作物の不振とか、石油の何ととか、そういうところがみんな影響したと思います。ソ連の崩壊とか何とかといういろいろ言われましたがこれは結局アメリカの戦略的な勝利だといったほうが早いのではないかと思えます。自壊したのではなくて、アメリカとの競争に敗れた結果がああいうことになつたのだという感じがします。

伊藤 それは防衛次官の時代から。

夏目 この直接の背景は、レーガンがSDIの発表だとか、そういうことで押せ押せムードでした。そういうものにはやはり太刀打ちできないというのがソ連の見方だつたと思うのですけれども。まあ、ゴルバチョフという人はもともとそういう信念の人だつたのでしょうけれどもね。

伊藤 「そういう」というのはどういうのですか。

夏目 とてもアメリカとやってもという、いまのような冷戦体制というのは早く解消しなければいけないという気持ちはあつたと

思います。だから、「あつ」という気持ちはしなくてもないけれども、やはりあのころからそういう伏線だったのかなという風に思います。

伊藤 防衛庁ではソ連情報なんかかなり詳細なことがわかると。

夏目 ある程度わかっていました。ソ連という国の疲弊の状態というか、主として経済でしょうけれども。

伊藤 でも、正面で見ている、例えばウラジオストックなり、ペトロトクか、ああいうところでのソ連の艦隊の動きなんかを見ていると、逆に非常に活発じゃないですか。

夏目 活発だというのは、一つにはソ連の単なるデモンストレーションだと思えます。それはどうしてかというところ、ヨーロッパに置くところがなくなってきたんですよね。ソ連の艦隊にしても何にしても、活動の分野がなくなってきたんです。だから極東へ向けてくる。そこがそもそもヨーロッパにおいてソ連の後退の一つの証拠じゃないのかというのがある種の見方です。こちらだけを見ているとなんか増強されたようだけど、グローバルに見た場合には、ソ連というのは相当戦略的に範囲を狭めてきて、いまは東北アジアにだけソ連のプレゼンスの存在意義があるような、わずかに残されている地域になってきたということがいえるのではないかなと思う。

伊藤 あれなんかを見ていて、「それはますます……」と。

夏目 うん、そう思っていました。それを口実にまたいろいろとあったことがあるんです。いまあったのは後からの後知恵であって、そのときは正直いってそんなことは思いませんでした。

伊藤 全然思わなかったわけではないでしょう。

夏目 ただまあ、アメリカのいろいろなレーガンの攻勢とかそういうのを見ると、ソ連は応接に暇がないということとはなんとなくわかりました。

伊藤 ソ連での穀物生産量とか、さまざまな生産量とか、そういうものはある程度キャッチできるわけですね。

夏目 それはキャッチできている。

伊藤 これはアメリカからも情報を提供されるでしょうし。

夏目 ソ連の軍の士気の沈滞というのですか、部隊の士気だけではなくて、給与とかそういうものの悪さとか、装備の整備の不良さとか、そういうものもわかっていましたからね。

伊藤 そういうのがわかるのですか。

夏目 わかります。

伊藤 なんてそういうことがわかるのですか。

夏目 なんてというところも知らんけれども、アメリカというのは何でも知っていると思わなきゃいけませんね。アメリカの諜報能力というのは、いまは知りませんが、多極化になってからはわからないけれども、冷戦時代のアメリカの情報能力というのはすごいと思います。いまは分散したからなのですかね。最近のCIAなんて全然無能だと思われ、やるのがめちゃくちゃだと思われけれども。だけど、アメリカというのは日本から見たらとてもない力を持った国だという印象があります。

伊藤 日本は、情報機関の問題というのは先生が防衛庁の幹部だった時代にはそれほど深刻な時代にはなっていないかったですか。アメリカ依存でやると。

夏目 とても真似できないと思いますよ。衛星の能力にしたって、アメリカの分析能力というのは我々の想像を絶したのですから。三十センチ四方のものが見えるのだから。見えるというか、分析すれば何だかわかっちゃうという。そうすると、ソ連の潜水艦の基地なんかを上から見ていると、連続的に見ているとすぐわかるのです。戦車でも、ここにいた部隊がこう動いていって、ここへ行ったというのは、ずっと軌跡がでちゃいます。その軌跡がわかるんです。ここにあったものがなくなっただけで

きたのではなくて、こういうふうに移ったというのがわかる。そんなのはとても敵わないです。

伊藤 それで北朝鮮はみんな地下にしたんだ。

夏目 地下にしたって、入り口はあるわけだから。

伊藤 そうか、入り口がある。

夏目 地下につくつたら、泥を運び出すだけでもわかっちゃうのですからね。

伊藤 それじゃあどうしようもないな。

佐道 顧問になられてほとんど防衛庁に行かなくなったということですから、特に大臣から来てくれとか、ちよつと相談したいとか、意見を聞きたいとかというようなことは。

夏目 一、二回はありました。

佐道 それはどういふ。

夏目 あとはたいしたことがないと思うのだけれども、一度は、次官をだれにしようかということ。

佐道 矢崎さんの次の。

夏目 矢崎さんの次だな。

佐道 栗原大臣ですよ。

夏目 いや、加藤さん。栗原さんのときには顧問室に行かなくても年じゅう会っていたから。たしか加藤さん。うん、そうですね。矢崎を一年でやめさせてくれか、次官にすべきか、続投にするかということの相談だと思いました。

伊藤 それは加藤さんですか。

夏目 私は加藤さんの記憶があるけれども、違うかな。

伊藤 加藤さんは夏目先生とはあんまり相性がよくない。

夏目 相性はよくないにしても、私はゴマすりやうまいから、適当に合わせたんですよ。内心は別としてね。べつに佐々君みたいに相手を怒らせるようなことはしない。私は、何かやるたびに大臣に、「これは頭に入れておいてください。責任はとらなくても

いいから、知っているだけ知っていてくれ」という言い方をしますから、怒られる理由もないしね。違うかなあ、たしか加藤さんのときに呼ばれてね。いや、それは俺がやめるときかな。たしか矢崎が一年でいうときだったと思います。

佐道 防衛庁からは顧問に対していろいろブリーフィングとか、定期的に決まったことはあるのですか。

夏目 ほとんどないですよ。ときどき大事なことがあると資料を送ってきたりする程度で、後輩は絶対に先輩なんかのいうことを聞きたがらないんですよ。こちらもそんなことをいっても嫌われるからいわない。聞かれればいだけれども、矢崎君なんて特にいってこないから。彼も誇り高き男だからね。私も先輩に相談したことなんてないもの。

佐道 まあ、先輩にうるさい方がずいぶんいらつしやいますからね(笑)。

夏目 先輩に聞くのはどうか知らないけれども、先輩がいつてくるのは鬱陶しいだけです。

伊藤 まあ、そういうことなのでしょうね。

夏目 あんまり口を出してはいけません。私はやめたところへは顔を出さないことにした。

佐道 講演を頼まれるとか、そういうことは。

夏目 講演は何回か行きました。このときとばかり、防衛庁の悪口をいつてね。

伊藤 それは防衛庁から頼まれているのではないでしょう。

夏目 頼まれたって、頼むのは防衛庁でもいいんですよ。違うところへ行くのですからね。「いまの防衛庁は何とかかんとか」といえばいいのですから、それはいいことをいえますし、多少話をオーバーにしてもおもしろく。そうでなければ一時間半もたない。

伊藤 (笑)、そうですね。

夏目 ずっとここ（オーラル）でしゃべって来たようなことを、いつのときの話をしてくれとか、講演はあちこちに行きました。防衛庁だけじゃないですよ。内外情勢調査会とか何とかいろいろあるでしょう。それから、役所関係では人事院の研修だとか、松下政経塾なんかも行っただけ。話ができるようなテーマなら行くという事です。それもやめてから、防大へ行ってからはあんまり二、三回やったかな。だんだん減ってくるし、こちらもまた現役になっちゃうから、防大へ行ってからはそういうことはあんまりないです。例の高坂正堯さんのグループの、学者の先生が勉強会をやるなんていうのは行っただけでも。

■防衛大学校長時代

佐道 防大にいらつしやると、時間的にもかなりそういうのは難しかったのですか。

夏目 たつぷりあるんです（笑）。「午前中の行事は取りやめ」とかね。だって、私が十時にうちを出て行くと、着くのはお昼ですもの。十時からなんていわれたら、朝早く起きなきゃいけないでしょう。だから午前中はやめ。もちろん対外的な行事はやりましょ。卒業式も午後からとか、そんな無茶なことはいけません（笑）。学内の会議だとか、打ち合わせだとか、そういうのはみんな午後にしよと。土曜日は休み、とかね。大臣もいないし、上司がいないのですからね。さっきの3K―記者クラブとか―もそのころはないし、大事にしてくれるしね。

佐道 防衛大学校長というのはそれほど権限はあるという。

夏目 権限はないんですよ。権限はないけど、防大の中では多少力があるでしょう。最初はいじめられたけど。それと、防衛庁へいっても、予算でも、人事でも、当時は何だかんだといえればある程度いうことを聞いてくれましたよ。多少、「うるさいな」と思っても、「まあ、前次官だからしょうがないか」ということでね。

そういうところは便利でした。

伊藤 防大としても得しましたね。

夏目 得したと思いますよ。予算もぐんとふえましたからね。

佐道 防衛庁からいらつしやった校長は初めてですか。

夏目 いや、昔、陸幕長もいたんですよ。大森（寛）という、内務官僚で、戦後自衛隊に来て、昔は県知事か何かをやったような人なのだけれども、それが陸幕長になって。その人は二年くらいかな。

伊藤 防大の校長として落ち着けば、そこがひとつのお城ですから、上からいろいろ命令されることもないし。

夏目 そうですよ。そういうところはアカデミック・フリーダムを主張する（笑）。

伊藤 便利のいい言葉ですねえ（笑）。

夏目 ところが私は現役のときに、教育課長とかで仕事の関係ができるとき以外は、防大なんかあまり念頭になかったですね。次官のときも、防衛局長のときも、官房長のときもありませんものね。それは、教育課長や教育参事官は仕事だからあれだけれども。だから、本当に俺は防大に冷たかったかなという反省が。

伊藤 ハッハッハッ、遅いですよね。でも、そのぶんだけ尽くされたのだと思いますけれども。先ほどの女子学生を入れるというのは、どういう発想ですか。

夏目 だってこれはもう、男女平等というのは天下の趨勢というか、四、五年前からそういう動きがあったじゃないですか。防衛庁も上級職で女性を採用するようになって。それで、「いま女性をとっていないのは〇〇と防大だけだ」とか、さんざんいわれたんですよ。当時の総理府にも婦人少年〇〇室ってあるでしょう。いまはないかな。

伊藤 いや、あるでしょう。

夏目 呼ばれて、「何とかしてくれ」と。私は女性を採用するのは天

下の趨勢だと思っていましたけれども、内部に反対が多かったんです。やはり自衛隊というのは闘う集団ですからね。それはまあ、アマゾネス軍団というのでもないわけではないけれども、やはり女性を戦闘に参加させるというのはちよつとあれだし、どういうやり方がいいのかと。結局は、後方支援に女性をといて環境もだんだん出してきた。ところが、防大出というのは常識では戦闘職種の指揮官養成が主任務ですよ。だから、そこらへんはちよつと抵抗があつて、なかなかまとまりませんでした。特に海上自衛隊は船に乗せるでしょう。船に乗せるときに女性に乗ってくるのはいかがかというのがあるから、最後まで強硬に反対した。当時の自衛艦隊司令官などが私の部屋まで来て、反対陳述してましたからね。

伊藤 女子学生を採つて、それは指揮官としての教育をしていくわけですか。

夏目 もちろんそうですね。

岡田 もう既に部外から採つた女性自衛官というのはかなり前からいましたけれども、その時点で反対というのは、やはり防大のOBの方が多かったということですか。

夏目 もちろん防大のOBですよ。幹部の大半が防大でしょう。そういう反対は全部ではなくて、ごく一部ですけれどもね。特に海上自衛隊は反対する人が多かったです。主要幹部まで反対していたからね。あとは多少、「こんな世の中が変わる時代だからしようがない」というあきらめムードでした。あとで防大の三十五周年記念に行つたら、何人かの先輩に、「この人が女子学生を入れて防大を墮落させた張本人だ」といわれましたよ。いまだにそう思っている者がいるのでしょうか。

伊藤 実際に海上自衛官は婦人自衛官も船に乗るわけでしょう。

夏目 乗っていますよ。

伊藤 トイレの問題もあるのですよね。女子学生を採るといって、東大なんかでもそうでしたけれども、トイレの改造とか、これが

ものすごく厄介。

夏目 だから、やるについては各国に学生課の課長とか女性の幹部等を派遣して、実情をつぶさに調査した。私自身もあちこちをまわつて、女子学生を採るについてはどう思うかという意見を聞いたんです。アメリカなんかは聞くところ、「おまえのところはどうするんだ」というから、「いま検討中だ」というと、「永遠に検討したらいいよ」とか（笑）。まあ、冗談だけど、そんなことをいったり、本当の気持ちというのは、「うーん、どうかな」というような気持ちを受けましたけれども。しかし、「いまはそんなことをいつている時代じゃないぞ」ということもまたいつていました。風紀の問題とかいろいろあるじゃないですか、そういうことも聞いたんです。アナポリスとか、ウエストポイントとかに聞くと、「世の中であることはみんなあると思わなきゃいけない。そのくらいの覚悟を決めないとだめだよ」ということはいわれました。これは大変だなと思いましたが、結局は抗すべきもありませんしね。私自身はそんなに反対でもないし、いままら反対なんてできる世の中ではないんじゃないかと。私も相撲協会なら反対するけれども（笑）。あ、そうだ、「相撲協会と防大だけ」といつたのかな。それで、「準備期間をおいてくれ。防大としてもいろいろなることを調べるから」と、広範囲に検討しました。たしか婦人自衛官に二、三人学生課へ来てもらつて、現場でいろいろな問題を詰めてもらった。この人たちがまたよく勉強してくれて、いろいろな問題点を洗い出してくれたんです。トイレをこうしろとか、隊舎の配置はこういうものでないといかんとか。本当に細かなことをいえば、制服から、靴から、男だつたら、「靴に足を合わせろ」とかいえるんですけど。

伊藤 ハツハツハツハツ、まさかねえ（笑）。

夏目 スカートの短い長いのと、大変ですよ。洋服だつて、ちゃんとプロに頼んでデザインしてもらつたんです。当時、婦人自

衛官の一般の人たちの意見を聞いて、どれがいいかと。

伊藤 それで評判がよかったわけですか。

夏目 まあ、皆さんの評判のいいのを。採れば採ったで、反対する人はいますよ。だけど、私は決める能力がないしね。「これがいい」なんていうと、「古くさい」なんていわれるに決まっているから。いや、準備が大変でした。入っちゃえば入ったで、それはいろいろな問題は起きるけれども、おおむね皆さん優秀でした。いまどき、この何年間もそうだけど、どこの大学も卒業生の総代は女子学生だつてね。

伊藤 まあ、そうですね。東大だつてほとんどそうですよ。

佐道 レベルを上げようと思つたら、女子大生をいかに獲得するかですから。

夏目 勉強はするし、真面目だし、訓練なんかでも、女子学生にハンディをつけようとする、「要らない」というからね。富士の演習場なんかへ行つても、移動簡易トイレってあるじゃないですか。ああいうのをいっばい用意して持つていくと、結構平気でそのへんの林の陰へ行つてやつてくるんですよ。だから、よくしたものですよ。防大の女子学生というのはみんな立派です。

伊藤 それでやはり世の中で起こることはだいたい起こりましたか。

夏目 いやまあ……、ああいうのは密かに行なわれるから。

伊藤 しかし、密かに起こつてもらわないと困りますよね（笑）。

夏目 あつても、私にはわからない（笑）。

伊藤 それはわからないのが結構な話です。

夏目 すぐ結婚したやつがいましたね。私がやめる年に一年生に女子学生が入ったんです。その年の四年生がつかまえて、卒業早々結婚して、「これ、一期生です。自衛官をやめさせました」とかいつているんですよ。「おまえは……」と（笑）。だから、うまくいつているんじゃないですか。去年あたりは学生長も女子だったという

からね。学生長というのは学年総代みたいなものです。今度だつて、産経の論文賞をとつた。ODA廃止か何かの論文で、防大の四年生の女子学生です。なかなかみんな優秀ですよ。酒は飲むしね。

中島 学校長時代、学生と酒を飲んだり、食事をしたりという機会もありましたか。

夏目 まあ、一年生に入つたばかりだから、女子学生はそうたびたびはないんです。一、二回はやはりありますかね。ただ、一年生だとまだ未成年ですから。

中島 そうですね。

伊藤 酒は飲めないか。

夏目 （小声で）大つぴらに飲んだとはいえないけれども、でも、未成年だから飲んではいけないなんていつたつて、飲むに決まっているんだから。富士へ行つたときも、一年生の演習に行くとき、最後の晩に夜宴といつてジングスカンで飲むんですよ。一年生だから未成年がいっばいいるでしょう。それに飲んではいけないといつて、職員だけ飲むわけにもいかないしね。上級生もいるのですけれども、上級生だけ飲んで、一年生は飲むなどとはいえないから、演説して、「だんだん日が暮れて迎りが暗くなつてくると、ビールかジュースか見分けがつかなくなるから気をつけて飲め」とか（笑）。一人一人何を飲んでるか「そこまではチェックできないから、各自用心して飲め」といつたら、みんな喜んで、ガブガブ、ガブガブ。大学へ入つたら、酒は飲みますわね。

伊藤 最後に残つた問題は任官拒否の問題なのですかけれども。

夏目 任官拒否というのは最近はこちらと減つたようですが、私のころは多かつたですね。これはいろいろな理由・背景があると思つてすけれども、まず一つには、世の中の景気が好いとき、要するに買い手市場ではなくて売り手市場のときには任官拒否が多いですね。会社が一本釣りみたいに引き抜きに来るしね。

中島 会社が引き抜きに来るのですか。

夏目 それは堂々と会社でやるのもあるし、断ると個別に口コミで学生を引き抜くでしょ。

伊藤 いろいろな縁故でアクセスしてくるわけですよ。

夏目 そう。あのころは景気がいいから、初任給も民間なんかはいいでしょう。自衛隊はあまりパツとしない時期だから、どうしてもそういうのが出てきますね。それはそれでしようがないのでしようし、当時の政治の姿勢とか、防衛庁、安全保障に対する意識みたいなものも微妙に影響しますし、そういう要素があつてふえたり減ったりします。いまは、ある意味ではいい時期ですよ。恵まれた時期です。いまは入ってくる学生の質もいいし、やめるのも少ないし。それは一般隊員でも同じことがいえるんです。だけど、逆に今度は出口が困るんです。やめても就職できないから。両方いいということはめつたにないですね。どちらかがいいと、どちらかが悪いです。防大の場合は出口はもう決まっているのだから、入り口が恵まれるといい学生が入ってくるし、やめないし、そういう意味では非常にいまは恵まれているのではないですか。

伊藤 学生の質が景気の動向によつてずいぶん変わるといふことですね。

夏目 多少は。素質そのものはそんなに変わらないにしても、やめていく者が多いか少ないかというのは直に響きます。私は思うのだけれども、学生の素質というのは、いい年も悪い年もトップクラスはそんなに変わらないんです。その段列が長くなるか、長くないかですね。悪い年は尻尾が長いんです。

伊藤 それは全体にかなり影響しますね。

夏目 うん、影響はするんです。だけど、やめていくのもそちらのほうが（尻尾のほう）がだいたい多いですね。当時はね。だからあんまり心配もなかったのですけれども。私はむしろ逆のことをいって、「自衛隊がエリート集団になつて国民から乖離するようでは困る。国民の一断面が自衛隊だと思わなきゃいかん」と。

多少はオーバーな言い方だけれども、そんなに優等生ばかりが集まつていたら妙な自衛隊ができるから、いろいろな人間がいていいのだと思います。

伊藤 それは非常にごもつともな意見ですけれども、教師の立場からいうと、これはなかなか大変なんですよ（笑）。

夏目 それは大変らしいです。でも、自衛隊へ入つてから、防大時代の成績が必ずしも良くなかつた者はだめかというのと、必ずしもだめではないんです。変なやつが伸びるんですよ。私は、人生にはある時期逆転の時期というのがあると思うんです。管理職、役人とか会社でいえば課長になる時期とか、自衛官でいえば二佐か一佐か。個人の能力よりも調整能力というか、管理能力というか、そういうものがものを言う時期にきたら、ガラツといままでの評価が変わつちゃうような人というのが非常に多いですね。若いときに、「だめだ、だめだ」といつても、案外そういうのが大器かもしれませんな。

伊藤 学校秀才だけがいわけではありませんからね。

夏目 「利口で怠惰なやつがいちばんいい」というモンゴメリというフランスの將軍の言葉を知っていますか。

一同 いや、それは。

夏目 人間というのは、馬鹿か利口か、怠け者か勤勉かに分かれる。馬鹿で怠け者は兵隊に使える。利口で勤勉な者は幕僚に適している。利口で怠け者なのは指揮官としていい。そして馬鹿で勤勉な者は排除すべきだということなんです。

伊藤 夏目さん、自分のことをいっているじゃないですか（笑）。いやあ、そんなところでおわりにしますか。

佐道 なんかオチがついちゃつて（笑）。

夏目 （自分を指して）馬鹿で怠け者。

伊藤 利口で怠け者に違いないと確信しましたので、これでおわりと（笑）。

（終了）

平成十四年六月十四日の伊藤圭一氏の最終回のオーラルヒストリーの際に、防衛関係でお聞きすべき人のご推薦をお願いしたところ、夏目氏の名を挙げられ、私からも話しておくといわれた。夏目氏に連絡を取ったところ、伊藤氏からの連絡もあり、早速にご快諾を得ることが出来、九月二十日に第一回を行うことが出来た。インタビュアーは当初、佐道明広氏（毎回質問項目を作成してくれた）、武田知己氏、と私、場所は氏が会長をされている、防衛弘済会の会長室、録音及び速記起しはペンハウスの矢沢麻里さん（途中片岡裕子さんが一回だけ担当）にお願いした。

第一回は、昭和二年の長野市の商家（一族で多少地方政治への関わりである方も居られた）でのお生まれから、小学校、中学校を経て松本高校の一年で終戦を迎え、やや文学青年的な高校生活を終えて、東北大学法文学部に進み、本人の言葉では「付け焼き刃で勉強して卒業」し、就職はおじの紹介で特別調達庁に入れて官僚として仕事を始められた最初の頃までのお話を伺った（卒業後上級公務員試験に合格）。まず調査課に配属されて、調達庁の歴史編纂や『調査月報』の編集などに従事、その後不動産管理課に移り、占領終結後の駐留軍に提供する土地の管理に関する仕事に従事され、やがて防衛庁の外局になった調達庁から防衛庁本体に昭和三十五年に向向し、そして正式に防衛庁の職員になられている。防衛庁では教育局教育課に配属され、そこで課長としての久保卓也氏に出会い、本気に防衛問題に取り組もうという気持ちになられたこと、航空自衛隊担当として働かれたこと、そして後々まで上司として仕えた久保氏の人柄についてお話し下さった。

十月二十五日の第二回（この回から防衛研究所の中島信吾氏が聞き手に加わった）では、教育課時代の追加、海原治氏を中心とした

人物月旦、教育局から昭和三十八年に移った防衛局第一課員としての五年間の二次防の実施、三次防の計画などのお仕事、三矢事件のことなどを伺った。

十二月六日の第三回では、三次防案がすっぱ抜かれた事件、三次防の過程での久保理論（後に基盤的防衛力といわれた）のこと、そして昭和四十三年に海原事務局長の下での国防会議事務局参事官に異動され（このころまでは海原氏の信任があつたとのこと）、そこで四次防の審議、国産化問題、七十年安保問題、米軍基地返還問題などを伺った。翌年に入って一月十四日の第四回（この回から防衛研究所の石田京吾氏が聞き手に加わった）では、昭和四十五年中曾根氏が防衛庁長官になられた頃からの中曾根・海原関係に始まり（中曾根氏の国防の基本方針改定意見に海原氏が反発して潰した）、治安出動の勉強会のお話、四次防の制定を巡る防衛庁と国防会議事務局の軋轢、四次防の先取り問題、非核三原則問題についてお話し下さった。

二月十八日の第五回では、昭和四十七年防衛庁人事教育局教育課長として防衛庁に戻られたが、そのお仕事の内容、防衛大学校に人文社会系設置問題、田中内閣になつてからの自衛隊員の海外留学増員と公資格付与問題、「平和時の防衛力」議論、四十八年からの防衛課長時代の久保局長の「基盤的防衛力構想」について、山中貞則長官と彼による四次防修正問題、四次防の後の中期業務見積りについて伺った。四月四日の第六回では、三木内閣になつて坂田道太長官の「防衛を考える会」、『防衛白書』の継続刊行、衆議院に「安全保障特別委員会」を設置することの主張を推進する仕事、坂田氏による日米防衛協力、その後の三木・フォード会談による日米防衛協力小委員会の設置、そして昭和五十年の官房総務課長の就任までをお

話し下さった。

五月九日の第七回では、総務課長時代の上司のお話から始めて、総務課長としての国会との関係、ロッキード事件での捜査協力、それに関連する久保発言問題、坂田長官との関係、防衛費一%問題、核武装問題、昭和五十一年からの官房防衛審議官としての防衛白書作成のお仕事についてお話し下さった。六月十三日の第八回では（この回から石田氏に代わって岡田志津枝さんが参加された）、ミグ25事件への対応の話から始まり、坂田大臣と学者の会、「防衛大綱」の決定、三原大臣について、カーター政権の東アジア政策、再度白書について、そして昭和五十二年教育担当の参事官に任じられるところまでのお話を伺った。

七月十八日の第九回では、参事官時代に有事法制研究を纏めたこと、栗栖統幕議長と問題発言のこと、陸幕の組織編成替え、統幕のこと、昭和五十三年からの人事教育局長としてのお仕事、五十五年の宮永事件のこと、ソ連のアフガニスタン侵攻とアメリカのリアクションについての感想などをお話し下さった。八月十九日の第十回では、昭和十五年からの官房長時代の大村謙治防衛庁長官のこと、国会対策のこと、アメリカからの防衛力増強の要求、総合安全保障という考え、レーガン政権の登場と日本重視、竹田統幕議長の意見が問題化したこと、武器輸出三原則の再確認問題、鈴木・レーガン会談とその後のこと、日米の共同訓練などについてお話を伺った。

九月二十二日の第十一回では、官房長時代の国会の状況、伊藤宗一郎長官のこと、昭和五十六年の日米安保実務者協議のこと、「大綱」の見直し問題、対米技術供与問題、昭和五十七年の日米防衛首脳定期協議のこと、フォークランド紛争のこと、同年の防衛局長就任と五六中業のこと、ハワイでの日米安保事務レベル協議のこと等を伺った。十月二十四日の第十二回では、昭和五十七年中曾根内閣のもとでの防衛局長として、中曾根総理、谷川長官のお話、対米武器技術供与問題、一%突破問題、シーレーン防衛に関する日米協議、

栗原長官・加藤紘一長官のこと、昭和五十八年の事務次官就任の話をして下さった。

十一月二十一日の第十三回では、事務次官時代の下僚の方々のこと、高坂氏を座長とする平和問題研究会のこと、大韓航空機撃墜問題、それと関連して情報管理のこと、昭和五十九年の張中国国防相の来日（翌年の訪中の話も）、ワインバーガー国防長官の来日、SDI構想について、五九中業の策定についてお話を伺った。最終第十四回は翌平成十六年の一月十三日に行われた。逗子市長選挙で米軍住宅建設反対派が当選した問題に始まり、昭和六十年の人民解放軍の大幅削減問題をめぐっての国際状況の変化、庁内人事のこと、同年の次官辞職のこと、防衛庁顧問のこと、防衛大学校長就任のこと、学位授与と女子学生の採用と大学院の設置、御巢鷹山事件のこと等をお話し頂いた。

氏の語り口はユーモアに富み、一同爆笑という場面が少なくなかった。巧みな語り口について引き込まれて、聞き惚れることも少なくなかった。質問に対して、時としてやや斜に構える様な形で、しかし真摯にお答え下さった。思いがけないお話もあり、海原治・伊藤圭一両氏のお話と重なり合いながら、戦後防衛政策についてやや異なった視点からのお話もあり、我々としては、多くの方々から伺うことに重要性を感じたのである。

最後になるが、貴重なお話を下さった夏目晴雄氏、一緒にインタビューアールとして加わって下さった佐道明広、武田知己、途中から参加して下さった防衛研究所の中島信吾、石田京吾、岡田志津枝の諸氏、速記をして下さったペンハウスの矢沢さんをはじめとする方々、毎回応対して下さった防衛共済会の皆さん、編集作業を担当された小柴研一氏（慶應義塾大学大学院）および冊子にするに当たって庶務や実務を担当して下さった方々に厚くお礼を申し上げます。

政策研究大学院大学教授 伊藤 隆

平成16年度 文部科学省科学研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕
発行：2004年10月25日《無断転載禁》

政策研究大学院大学(政策研究院)
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2
Tel : 03 (3341) 0458 Fax : 03 (3341) 0446